

コンスコンだけど二周目はなんとかしたい

おゆ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺の名はコンスコン！ ドズル中将麾下の機動部隊司令官！ だけど連邦の化け物MSの前に全滅、したはずだ。しかし気が付くと目の前のスクリーンにはドズル中将…… まさか、出撃前夜に戻っているのか…… ならばやることは一つ！ と言いたいけど実際どうしよう？

目次

第一章 ジオンの苦闘

第一話	わけがわからない	1
第二話	こっそり潜伏	7
第三話	急襲！ ソーラ・システム	12
第四話	ミツシヨンクリア	18
第五話	やりたくないけど突撃	24
第六話	もう一人の化け物	31
第七話	その名はアナベル・ガトー	39
第八話	シヤアとの対話	46
第九話	ギャン	53
第十話	逆になった	60
第十一話	呑めない用件	66
第十二話	間違い	73
第十三話	苦戦	79
第十四話	ララア・スン	86
第十五話	到着、ア・バオア・クー	93
第十六話	ザビ家の話し合い	100
第十七話	グレートデギン	107
第十八話	MS戦へ	116
第十九話	戦い方の問題	123
第二十話	ガンダム再び	129
第二十一話	NフィールドとSフィールド	136
第二十二話	フルアーマーの恐怖	142
第二十三話	神の化身 v s 地獄の使者	148

第二十四話 漢の生き様

第二十五話 物量作戦

第二十六話 頑固者

第二十七話 撤退戦

第二十八話 ヒヨツ子

第二章 宇宙戦略

第二十九話 第一秘書

第三十話 もう一つの戦い

第三十一話 将官会議

第三十二話 政治のキシリア

第三十三話 ジオンの反転攻勢

第三十四話 マハル・コロニー

第三十五話 落とし前

第三十六話 心で見るもの

第三十七話 そうい話?

第三十八話 連邦の進化

第三十九話 奮闘のマ・クベ

第四十話 デラーズ、始動

第四十一話 勇将健在

第四十二話 ダリルとカーラ

第四十三話 連邦の将

第四十四話 会戦前夜

第四十五話 本国会戦

第四十六話 狙う先

第四十七話 ソーラ・レイ

155

164

170

176

183

190

199

206

213

220

227

234

240

247

254

261

267

274

281

287

292

297

304

310

第四十八話 エルメスの力 | 316

第四十九話 隊長機 | 323

第五十話 追撃戦へ | 330

第五十一話 グラナダ攻略 | 339

第三章 未来への道標

第五十二話 フォン・ブラウンの学徒兵 | 345

第五十三話 弱さと強さと迷いと | 352

第五十四話 見捨てられた者 | 360

第五十五話 その陰には | 367

第五十六話 月下の死闘 〳連邦の魔術師〳 | 373

第五十七話 月下の死闘 〳名将の条件〳 | 382

第五十八話 収容所の確執 | 389

第五十九話 差別主義 | 395

第六十話 脱走 | 401

第六十一話 妙手 | 407

第六十二話 ふさわしい罰 | 414

第六十三話 私は帰ってきた | 421

第六十四話 パイロット | 427

第六十五話 知らぬが仏 | 433

第六十六話 セレモニー | 438

第六十七話 仕掛けられた罠 | 445

第六十八話 宇宙はカレイドスコープ | 452

第六十九話 道先 | 460

第七十話 俺のキャプテン | 466

第七十一話 お目付け役 | 474

第七十二話	戦場のカオス	481
第七十三話	新たなる作戦	487
第七十四話	サイド6の戦闘	493
第七十五話	マ・クベの思い付き	499
第七十六話	侵攻前夜	505
第四章	永遠のコンスコン	
第七十七話	ララアの黒い計算	510
第七十八話	ジャブローの無理解	516
第七十九話	ゲリラ戦	522
第八十話	嘘の話	528
第八十一話	未来は二人で	534
第八十二話	オーガスタ、急襲！	541
第八十三話	好敵手	547
第八十四話	二者択一	553
第八十五話	思わぬ拾い物	559
第八十六話	数字の女	565
第八十七話	追跡者	572
第八十八話	宿敵！ ダリルvsイオ	578
第八十九話	三人の活躍	585
第九十話	正々堂々	592
第九十一話	一目で	599
第九十二話	作戦終了	605
第九十三話	投げナイフ	613
第九十四話	困りごと	620
第九十五話	ジオンの結束	626

第九十六話 キシリアの二つの顔

第九十七話 アクシズからの客

第九十八話 開発の妙

第九十九話 意外な火種

第一百話 悲運のメロデー

第一百一話 虚空のキシリア

第一百二話 野心の方向

第一百三話 希望と絶望と

第五章 暁の新世界

第一百四話 発動

第一百五話 失脚

第一百六話 ルウムの罠

第一百七話 必殺

第一百八話 後始末

第一百九話 散るべき時に

第一百十話 第三の思惑

第一百十一話 封じられた野心

第一百十二話 風雲

第一百十三話 ワイアット、出撃！

第一百十四話 連邦の総力

第一百十五話 全てを背負う者

第一百十六話 鋼鉄の淑女

第一百十七話 驚くべき戦術

第一百十八話 逆襲

第一百十九話 ホワイトベース

第百二十話	3人組プラス1	798
第百二十一話	ワイアットの狙い	805
第百二十二話	デラーズフリート	811
第百二十三話	ライラとバニング 前	818
第百二十四話	ライラとバニング 後	824
第百二十五話	残光	830
第百二十六話	白い悪魔	837
第百二十七話	鳥籠	844
第百二十八話	見えない刃	851
第百二十九話	本隊の攻防	857
第百三十話	轟沈	864
第百三十一話	終結	870
最終章 旅立ち		
第百三十二話	これからの道	879
第百三十三話	デイサイド	887
第百三十四話	共闘	896
第百三十五話	連邦艦の中で	903
第百三十六話	徒花	910
第百三十七話	驚くべき提案	916
第百三十八話	俺の行き先	924
第百三十九話	隠された脅威	931
第百四十話	開拓団	938
最終前話	彼方へ	944
最終話	夜会	951
余話 7年後	く そして少年は少女の手をとる く	958

余話	余話	余話	1004	余話	余話	余話	余話	余話	余話
50年後	50年後	50年後		50年後	50年後	50年後	50年後	50年後	50年後
ゝ	ゝ	ゝ		ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ
大いなる夢を持とう	掌中	戦う意志		激突！コンスコンvs木星帝国	恐るべき戦力	戦いの予兆	別離	巻き起こる戦禍	開拓の発展
ゝ	ゝ	ゝ		ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ
1025	1019	1012		995	987	979	973	966	

第一章 ジオンの苦闘

第一話 わけがわからない

「白い方が勝つわ」

少女がドヤ顔してる。

思いつきりドヤ顔してる。

何度も言うがドヤ顔してる。

横に座ってる男にええカッコしいなんだろう。

でも人の生き死にまでネタに使わないで欲しい。

俺はその十秒後に死んだじゃないか。

「ぜ、全滅ウ!? 十二機のリック・ドムが全滅ウウーウー!!」

俺の自慢のドム隊が次から次へと爆発雲を残して消える。

それが俺の最後の言葉になった。おまけに指揮シートからずり落ちた。

超情けない。

この戦闘、全宇宙にテレビ放映されてるんだよ。

何億人もの人が見てるんだよ!

正に公開処刑。

俺はマヌケでアホな指揮官として末代まで語られる。

この戦争で一番恥ずかしい雑魚として。

さっきのドヤ顔少女なんてまだマシな方なんだ。テレビ画面指さしてゲラゲラ笑ってる奴までいやがるだろう。

作戦自体は間違ってる!

木馬の進路をきっちり推定し見事当て、損傷の修理を妨害してのけた。おまけに木馬がサイド6を出て来る時間まで正確に情報収集したんだ。

こちらの戦力も充分過ぎるほど用意していた。ジオンの新鋭MS、リック・ドムが十二機なんて凄いだろ。本当なら一中隊くらい相手にできるほどの戦力なんだ。

その上できっちり待ち伏せした。サイド6の戦闘不許可宙域ギリギリのところだ。

これ以上俺に何ができたというんだ？

もつと理想的な戦術があるなら言ってほしい。

こんな結果になってしまった理由はただ一つ、相手が悪かったってだけの話だろ。規格外の化け物を相手にしてしまっただけである。そいつは別に俺の責任じゃない。

だがまあ戦いに負けたことは負けたんだ。俺もジオンの指揮官、結果は受け入れよう。

それで俺は死んだはずなんだが。

間違いなく重巡チベの下からガンダムのビームサーベルで貫かれ、艦橋もろとも四散したはずだ。

だけど

意識がある。

なんだかふわふわしている。そして何だこりやと思う間もなく視界が開けた。そして一気に何かを見せられていった。

目まぐるしい。

ただしその光景は気が狂うほど早くはない。俺の脳に合わせてるのかと思うくらいに。

見えている映像は時系列がバラバラだ。過去も未来も、場所もバラバラだ。

さっきのドヤ顔も見えたものの一つだ。俺が死ぬ直前、俺が知るはずのない場所の映像だ。

ただし自分の妄想の産物だとは思えない。なぜか奇妙に理屈が合ってるストーリーでもある。原因と結果の辻褄が合っていて矛盾がない。

だがそのストーリーが不愉快なものであることは確かだ。

宇宙の戦争を高速度で見せられた。

ジオンの防衛ラインが連邦の艦隊に突破されていく。

難攻不落のソロモン要塞が焼かれていく。あっさりと上司のドズル中将が戦死する。

絶対要塞、ア・バオア・クーさえ陥とされる。

ジオンの士気は低くなく、皆は必死で戦う。MSの性能だって遜色ない。だが、数の暴力は全てを押し流す。ジオン兵たちの奮戦も虚しく、押しまくられてばかりだ。

連邦の物量作戦はそれほど凄い。

ジオンはお終いだ。

俺は少しばかり泣いた。

肉体があるのか無いのかも分からないが、少なくとも心で泣いた。正直に言えば今のジオンの政治体制に対してそれほど忠誠心はない。ジオン公国たって、他のスペースコロニーからしたら迷惑そのものだ。危ねえ奴が本当に危ねえことをやらかした。そんなもんだろう。それくらい俺にも分かる。

ついでにコロニー墜としなんてどんだけやり過ぎるんだ。めっちゃくちゃじゃないか。

だが、そんな俺でも少しばかりは愛国心があるんだ。

スペースノイドはやっぱスペースノイドが治めるべきなのだ。ジオンの政治を全てを取り仕切っているギレンなんか大嫌いだけれど、独立は正しいことだと思う。その理念だけは共鳴できる。

そう思うからこそ、俺はこの戦争に参加し、今の今まで戦ってきた。多少己惚れかもしれないが、俺には少しくらいは才能があつたはずだ。戦術を工夫し、連戦して実績を上げていった結果、ドズル中将から一つの機動艦隊を任されるほどになったのだから。恥ずかしながらコンスコン機動艦隊と呼ばれている。ついでに階級は立派な将官級である准将だ。

頑張ったんだ。

しかし結局俺は死に、ジオンの独立も果たされない。

最後、奇妙な見たこともないモビルスーツが宇宙を凄い速度で飛び

回り、ついでに小惑星方向から何かがやって来るところまで見えた。もうやめてくれ。それ以上何も見たくない。

なんで、歴史はそうなるんだ。
そこまでだった。

「コンスコン、どうした。聞いてるのか」

「……」

「どうした。作戦に不服か」

あれ、何だろう。目の前にスクリーンがあり、そこにはただでさえ大きいドズル中將が大写しになっているのが見える。

「だが絶対に成功させろ、コンスコン。キシリアの奴め、シヤアばかり可愛がりおって。それだけならまだしも未だにガルマの仇を討てんとは一体何をしている。だが今、あの木馬が宇宙に上がって来た。地球上なら何もできんが、ここがチャンスだ。木馬を撃破し、可愛い弟ガルマの仇を討ってやる。俺はソロモンを動けんが、コンスコン、貴様に頼んだ」

「……」

「…… 何だコンスコン、なぜ黙っている。そうか、戦力のことか。M Sのことなら貴重なリック・ドムをこれだけ回してやったんだぞ。おかげで今のソロモンはザクばかりだ。この数のドム、貴様の作戦能力と合わせれば充分だろう。やってくれると信じている」

同じセリフ、聞いたことがある。

今回の作戦に出撃する前だ。ほとんど同じことを聞いた。

俺はスクリーンの前に立っている。体は、ちゃんとしている！

やっと言葉を返した。

「ドズル閣下、生きて、らっしやるっ！」

スクリーンに映るドズル中將が思いつきり変顔をした。

「ぶあっはっはっはー！ コンスコン、お前がそんなに面白い奴だとは知らなかったぞ。そりゃ死ぬ前までは誰でも生きています。俺もまだ死んだ覚えはない。ジオンが勝利するまで死ぬものか。いや、ミネバの行く末を見届けるまで死にたくない。そんなことより明朝出撃

だ。行ってこい、コンスコン！」

それでスクリーンが切れた。

周りを少し見渡したが、見慣れた景色だ。チベの通信室だ。

明らかに生きている感触、そして先ほどのドズル中將の言葉……

戻っている？

戻っている！

時間が、木馬撃破の作戦前に。

どうしてなんて考えたって分かるわけがない。しかしそうなっちゃってるとしか言いようがない。

慌ててチベの艦橋へ走る。急ぎ過ぎて息切れがするのも生きてる証し、しかし俺も少しばかり太り過ぎだな。

艦橋に駆け込むと、副司令やオペレーター達がげんな顔を返してきた。

「コンスコン司令？ 進捗状況は先ほど報告したばかりですが。リック・ドムは積み込み完了、チェックも終わってます。明朝には予定通り出られますよ。まだ何か？」

同じ時、ドズル中將は居室兼指令所のスクリーンから目を離し、ソファーにどっかりと腰掛ける。

（何か、きつきのコンスコンは変だな。いつもは何でも積極的なあいつが、全然勇ましくなかったぞ。何か気になることでもあるのか）

腹心であるコンスコンの不審な様子に気になった。

コンスコンは作戦能力が飛び抜けて高い。まるで敵の作戦が読めるかのようだ。パイロット適正はまるで無かったが、指揮官としては優秀だ。それでいながら全く臆病ではなく、参謀よりも艦隊指揮に向いている。実際、これまで何度もドズルの期待に応えてきた。とんとん拍子に出世をしたのもそのせいだ。

ザビ家でもないのに准将というのはそもそも破格の地位である。

そんなコンスコンにあれだけのリック・ドムを与えた。ガルマの仇討ちは必ず成功するはずだ。

(だいたいにして、この作戦に志願してきたのはあいつの方だろうが。キシリアのところのシヤアになぜか張り合っていたからな)

しかしドズルの考えはそこまでだ。

「おおっと、いけない。そろそろミネバの風呂の時間だ。遅れるとまたゼナに怒られる」

第二話 ころそり潜伏

「コンスコン司令、打ち合わせなら出撃後でもできますが…… 今やれば出撃に間に合わなくなるかもしれないよ？」

チベの艦橋に入った俺は、何か言う前に副官からそう言ってよこされた。

この副官は事務的だ。

いや、はつきり言つて内心では俺を嫌っているんだろうな。俺のせいで休暇も棚上げされての出撃になったからだ。これまでもそういうことは多かつた。この艦隊は明らかに他の艦隊より出撃回数が多く、まあその分戦果も挙げているわけだが。

しかしたぶん、それだけじゃない。

俺の見た目が悪いせいだ。

顔は威厳があると言えばそうだが、かなり悪顔でもある。それは俺の責任じゃない。だが体に締まりがないのは事実で、そこには責任があるかもしれない。でも誰でも体質っていうものがあるだろう！

戦いで連勝している割には見かけでカリスマ性がない。ちよつと悲しいぞ。

だが俺は副官からこんな塩対応を受けても普段とは違って怒る気にはなれなかつた。

このまま出撃すれば、みんな木馬と戦つて戦死だ。故郷には還れない。

俺と同じようにアホの見本のようになって犬死にだ。

MSに乗つて戦つて死ぬならまだしも、この艦に乗つてるだけであつさり死ぬことになるんだ。俺にはもう親はいないが、この艦にいる兵士には親もいるはず、もう二度と会えなくなる。恋人だっているかも知れない。あ、俺には妻も恋人もいないけど。そこは凹む。

とにかくこのままじゃいけない。出撃を回避しなくては。

急に腹が痛くなつたことにすれば。子供の仮病かよ！

…… 結局何も思い浮かばないまま出撃する羽目になった。
どうにもできないものはどうにもできない。

ドズル中将がしつかり敬礼してくるもんだから、もちろん俺も敬礼を返しつつ出撃していった。

任された艦隊は重巡チベ一隻、軽巡ムサイ二隻の計三隻だけだ。いつもの艦隊編成なら六隻、少なくとも四隻編成になるのだが、隠密性が要求されることもあってやや小ぶりの編成だ。それに小ぶりな方が補給も楽になる。連邦もジオンも補給ポイントを設定しているが、もちろんジオンの方がその数は少ない。

さて目的地のサイド6だが、そこまでは結構な距離がある。ここソロモンがあるのはサイド1付近、そこから見ればほとんど一番遠いコロニーになるのだ。サイド7やルナツーの次に遠いだろう。

巡航中は神経を使う索敵が続く。
それと模擬戦闘訓練が欠かせない。俺はそれをいつもより厳しいくらいに課した。それでまた俺の評判が落ちても気にしない。なぜなら、これまでで一番激しい戦いに赴くのだから。

「右舷前方に敵艦発見！ 光学認識はまだはつきりしませんが、大きさをからみてサラミス級二隻！」

いきなりきた！

オペレーターが敵の発見を声高く告げてきた。遭遇から自動的に戦闘準備に入る。誰もが緊張の表情に切り替わる。今は訓練ではないのだ。

「コンスコン司令、どうなさいますか？ ご決断を」

三秒後、副官が不思議そうな顔をしてそんなことを言ってきた。

いつもの俺なら聞かれるまでもなく最大戦速で会敵を命じただろうから、おかしいと思ったのだろう。見敵必殺、それがコンスコン機動艦隊のやり方だ。

しかし、俺は閃いた。これをラッキーとして使えないだろうか。

「よく先手を取って見つけてくれた。ありがたい。敵の方はこちらに

気付いたか」

「い、いえ、進路、速度共に変わりありません。おそらくまだ察知していないものかと」

「よし、ならばこちらはすぐにエンジンの出力を落とせ。熱源探知に引っ掛からないギリギリまでな。その上で進路はゆつくりと左へ変更しろ。慌てず、敵との距離を広げていくんだ」

「え？ 司令、戦闘はせず、まさか逃げると仰るのですか？」

「そうだ。あれはおそらく敵の索敵行動に違いない。ここで我らの艦隊を知られるわけにはいかん。退避を優先する」

「し、しかし、索敵行動ならばそれこそ向こうが先に気付くでしょう。こんなに油断しているものでしょうか。小官には単なる移動に思われます」

「いや、あれは索敵だ！ 絶対に索敵だ！」

「それに索敵としても、相手はサラミス二隻、一気に叩けばあつという間に排除できるのでは？」

「近くに敵の本隊がいる可能性が大きい。その方が危険だ。やり過ぎるのならその方がいい」

俺の言葉が思いもかけないものだったのだろう。副官はそれ以上何も言わなくなった。そこで俺は言葉を畳みかけ、納得させていく。

「敵との距離が取れたら、ソロモンに通信を送れ。敵に大きな動きがある。コンスコン機動部隊は木馬追撃の作戦を中止、サイド6には向かわない。以後隠密行動に入り、最善を尽くす。定時連絡もしばらくは無しだと」

俺は木馬を追わず、連邦の化け物MSと戦わない方便を見つけた。

強引な論理で済まん。サラミスよありがとう。

「小さな戦果などどうでもいいんだ。近々大会戦があると見た。その方がよっぽど大事なんだ。木馬が囷かもしれないとは思っていた。ザビ家の末弟を斃した木馬、それこそジオンから目の敵にされるに決まってる。連邦としては囷として使うのにこれ以上のものはないだろう。そう思わんか」

話の風呂敷はデカイ方がいい。

その方がいくら強引でも説得力がある。

案の定、副官も艦橋の皆も、呆然とした顔から生気が戻る。話に納得してくれた。

「コンスコン司令、さすがです！ サラミスの動きだけで敵の目論見を読んだんですね。木馬が囷、確かにそういう理由があれば分かった気がします。自分もガルマ閣下のことは残念ですが、だからといって木馬ばかり追うのはどうかと思っていました。キシリア閣下の艦隊もそのために結構な損害が積み重なっているとか」

あれ、目をキラキラさせて賛同してくれるのはいいけど、ちよつと上層部批判に近いよね。

なんとなーくだけど俺も分かってきた。俺は今までドズル中將の腹心だったから、周りからは俺がザビ家に媚びを売って異例ともいえる出世をしてきたように思われていたのかもしれない。それが息苦しさと俺への反感につながっていたとしたら笑えない。

「分かってくれたか、そういうことだ。この機動部隊は本当にジオンのため、動く。差し当たり大きく外側を迂回しながらソロモンに戻るぞ」

俺は木馬とは絶対会いたくない。

だけどジオンのために戦いをしないのではなく、犬死にが嫌なだけだ。戦うべき時には思いつきり戦う気だ。

そして俺は知っていることがある。

近々始まるソロモン攻防戦においてジオンの敗因はいくつもある。ギレン総帥からの増援がビグザムだけというふざけたことが一番大きい敗因だ。ましてキシリア少將の援軍などただの一隻も間に合わなかった。皆が皆自分の派閥ばかりを考え、人の良いドズル中將がババを引かされた格好だ。連邦との戦力差があるのに見殺しにされた。戦力の少ないジオンがそんな体たらくだったのだ。

もちろん俺はそれに対し何もできやしない。

しかし直接的にソロモンが陥とされたのは連邦の新兵器を使った戦術のためだ。

鏡を思いつきり多数用意し、太陽光を反射させ、それを集めて敵を焼く。なんと単純な兵器だろう。

ただしかし、単純ゆえに運用はかえって難しいはずだ。適切な距離にあれだけの大きさのもの運んで、精密に並べなくてはならない。そこが付け目になるだろう。

俺はあの連邦の新兵器を潰す、そこに目標を定めた。

第三話 急襲！ ソーラ・システム

俺はちよつとばかり焦っている。

いや、かなり焦っている。

余裕で間に合うはずだった。

木馬追撃を途中で止めて引き返したのだから、本当はソロモン攻防戦の前に充分戻ってこれるはずだったんだ。それが連邦の哨戒網が予想外に厳しくて、月軌道の外側大回りするコースを取らざるを得なくなった。

俺が作戦中断の理由にこじつけた哨戒ではなく、連邦軍の本気の哨戒網だ。

嫌なことに航路が長くなればなるほど、エンジンの出力を最適な効率のままにしておかなくてはならない。ジオンの補給ポイントが付近にない以上、反応剤も推進剤も節約して使うのだ。少し遅めの経済的巡航速度を守り続けないと途中で尽きてしまい、よほどの事態でもなければ戦闘速度などもってのほかである。それで進行が余計遅くなるのは仕方がない。

今さら気付いたが、連邦にとつちやソロモン攻防戦なんてオマケみたいなもんなんだろう。そりゃあソロモンを放置すれば連邦にとつても補給路が脅かされ、常に輸送艦に護衛が必要になる。是が非でも陥とさなくちやいけない拠点なのは確かだ。

だが、連邦はもう既にその先のア・バオア・クーを見据えた行動に出ている。連邦の物量はそこまで壮大なんだ。

もちろんア・バオア・クーを抜かれたら、ジオンにとっては防衛もクソもないのだ。

丸裸のコロニーを守る術はない。詰みだ。

もしかしてだが、連邦の上層部は既に戦後のことも見越して計画を立てているのかもしれない。スペースノイドを従順に、効率よく統治するような。

局地戦に一喜一憂しているジオンとは全く次元が違う。

そう考えたら、哨戒網がソロモン近辺だけではなく広い範囲に及んでいるのも分かる。

そしてもう一つ、ソロモンが少数の奇襲を受けなかったことも理解できる。実際の所、連邦の艦隊が現れてからソロモンが攻撃を受けるまで間があった。それでギレン総帥やキシリア少将が援軍の話をする時間があったんだ。

つまり、連邦は、リスクのある奇襲をする必要がない。

もう攻略は既定路線、多少ハプニングがあったとしても物量で踏みつぶすだけのつもりである。人員も生産力もケタ外れの連邦はそれでいいんだろう。

ソロモンの運命は決まっているんだ。

ちよつと落ち込むどころじゃない。気が滅入ってしまった。

それでも俺の行動に意味があると信じたい。

当面はソロモン攻防戦に間に合うことを祈りつつ、着実に進むしかない。

だがここで、運命の女神が少しばかり悪戯をしたようだ。

「前方に艦隊発見！ 友軍です！ ザンジバル級一隻、チベ級四隻、ムサイ級八隻、計十三隻！」

「何だど？ 詳細判別できるか？」

「ええと、識別コード判明、旗艦マダガスカル。マクベ大佐の乗艦と思われます！」

おおおつ これはラツキーなのか？

この艦隊はおそらくグラナダから送られてきた形ばかりの応援艦隊だ。キシリア少将の意を酌んでわざとのっそり進み、間に合わないようにするつもりだ。

ここで俺は閃いた。

我ながら人の悪い作戦だ。おそらく今の人相は余計悪くなっているに違いない。副官に見られないうちに表情を直しておこう。

「通信回線開け。通常回線でいい。しかも、最大出力で頼む」

「えええっ！ それでは連邦に筒抜けではありませんか。しかも、こ

の位置が知られてしまいました！」

「構わん。早くつなげ」

ハテナマークの副官を押し切り、通信をつなげさせた。

「あー、あー、聞こえますかー、こちらはコンスコン機動部隊。そちらはマ・クベ大佐の艦隊とお見受けするが間違いないかな？」

「え？ あ？ ばばば、馬鹿な!! コンスコン准将、早く通信を切ってくれ! いや、切って下さい。お願いします! 連邦に傍受されるッ」

この事態でも敬語を使ってきたとは褒めてやろう。

俺の方が階級上だから当然だけどな!

そこ大事。

軍が軍である限り、派閥が違っても階級は守らなくちゃな!

「それで、マ・クベ大佐は偵察勤務かな、ご苦労さん。オデツサで核ミサイルをぶっ放したマ・クベ大佐、いやあ勤務が次から次へと大変だ。それで、ここからグラナダへ戻るコースを行くのかねえ。たぶん」

「!、それは……」

「慌てると壺を落としちゃうよ。それじゃ、マ・クベ君」

通信をそれで終える。おそらく向こうの艦橋ではマ・クベが土色の顔を青くしているに違いない。混ぜると何色になるんだ？

やはり、というか必然的に次の展開がやってくる。

「後背より連邦艦!! サラミス級四隻、急速接近!」

「よしよし、通信に釣られたな。これは沈めるぞ! 艦首回頭、エンジン出力100%! 第一級戦闘態勢!」

俺の声を聞き、横にいた副官が嬉しそうな顔をした。

これまで逃げてばかりでフラストレーションが溜まっていたのだろう。

俺もそのまま指揮を続ける。

「総員に告げる! リック・ドム全機発進! 出し惜しみなどするなよ。直掩に2機だけ残し、左右に5機ずつ展開!」

「サラミス、推定コース計算完了! 誤差確率5%!」

「よし、正確に間合いを測れ。レッドゾーンに入ったと同時にメガ粒子砲斉射だ。だが、それで斃すんじゃない。わざと向こうに応射させるんだ。向こうが撃ってきた直後が、艦のエネルギーを使い切って防空が一番薄くなる。そのタイミングをよく見とけよ。そこでドムは横から急襲、一気に叩き潰せ！」

「イエローゾーン突破しつつあり、レッドゾーンまであと3、2、1、射程です！」

「主砲斉射、撃てー！ー！」

「至近弾になりました！ サラミス、撃ち返してきます！」

「引っ掛かったな。当艦隊はそのまま散開、サラミスの砲撃など当てさせるな！」

我ながら流れるような動きで先制攻撃を仕掛ける。

横にいる副官も高揚している。「やっぱコンスコン機動部隊はこうでなくっちゃ」とでも言いたげだ。

十分後、その副官が報告してくる。

「コンスコン司令、お見事な指揮です」

おいおい、俺はそういう褒め言葉に弱いんだよ。チョロインだ。

まあ、戦術指揮ならそうそう負けたりしないけどな！ 相手が四隻でもな！

「敵サラミス、全隻撃沈。こちらの損害はリック・ドム三機が小破のみ。それも艦内で修理可能です」

「ドムは対空砲火にやられたのか。それともMSか？」

「MSです。しかし、向こうは後手に回った様で、MSを半分も出せないうちに撃沈されたのでしょう。MS戦は終始数的優位を保ち、圧倒できました」

しかしこれは予定調和だ。

俺は直ちにサイド1方向へ向かう。連邦の鏡の兵器が準備を始めているはずだ。

そして何よりも、この戦いはサラミスを沈めることが目的じゃない

い。

遠くで茫然自失していたようなマ・クベの救援艦隊は、迷った挙句ソロモンへのコースを辿るようだ。してやったりである。

向こうの艦橋での会話が聞こえるようだ。

「マ・クベ大佐、当艦隊はこれからいたい……」

「うぬぬ、ウラガン！ 貴様も聞いていたろうがッ コンスコンに嵌められたのだッ グラナダへ戻れるわけがない。さっきの派手な戦闘も察知されているし、当然通信も聞いているだろう。そのコースで連邦は待ち構えるに違いない！ ノコノコとグラナダへ戻ろうとしたら袋叩きだ！」

「で、ではどこへ」

「くそッ、戻れない以上、先へ行くしかないだろう!!」

マ・クベは思わず手に力を入れてしまった。ハンカチを介して持っていた白磁の壺がツルリと滑って飛んでいく。無重力の艦内、そのまま壺は横へ水平移動する。

あわや壁にぶつかる寸前、ウラガンがはっしと飛びつき、すんでのところで守った。

マ・クベは大きく息を吐き出す。

「……ソロモンへ行くぞ。当然、応援じゃなくて火の粉を払うだけだが、仕方がない」

最後まで見届けることもなく、俺は考える。

マ・クベはソロモンへ行くしかないだろうなあ。しかも連邦にとって、核を使おうとしたマ・クベは忌むべき相手、どうしても叩きたいに違いない。

ちようどガルマを斃した木馬がジオンに狙われるのと同じことだ。マ・クベの艦隊の戦力は決して小さいものじゃないが、孤立すればお終いなことは誰でも分かる。そしてソロモンへ行けば嫌でも協力して戦わなければ生き残れない。

ただし俺としてもマ・クベを嵌めた以上、考えるべき責任がある。最低でもゼナ様とミネバ様は守らねばならない。それが最低限やる

べきことだ。もちろんドズル中将も他の将兵も助きたい。

俺の方はやつとそれらしい宙域に到達した。あの鏡どもは太陽の光を反射する以上、ソロモンから見れば太陽と逆方向に並べられるはずだ。

第四話 ミツシヨンクリア

連邦の新兵器を探し回ったのは少しの時間だ。暗礁宙域にもかかわらず案外早く見つかった。

しかし、見つけられたということは……

もう隠す必要がないということでもある。

もう鏡の展開が始まっているじゃないか！

半分近くは展開されてしまつてる。

こうしている間にも次々と決められた位置に鏡が並べられていく。そして最初の折りたたまれていた形から一気に開かれて平板になる。単純かつ凶暴な鏡の集団だ。戦いは数だよと言いたげな連邦のむちやくちやな物量兵器である。

そして、これは相手の戦意を刈り取る派手な兵器でもある。ここぞという場面で使うような代物だ。つまり、既にソロモンの戦いが進んでいることを意味している。

焦る。

早く接近したいが、今の艦隊位置はラツキーともアンラツキーとも言えない微妙なところだ。

鏡の真正面ではないが、少なくとも横や後ろではなく正面に近い。もつとソロモンから離れた場所から探し始めれば良かったようなものだが、それでは暗礁が邪魔になる。結果論だ。

いくら急ぐとはいえ、このまま突撃するのは愚策だ。この新兵器の指揮官としても、なぜ俺の艦隊がこんな戦場から離れた暗礁宙域に出て来たのかと驚くだろうが、やることは決まっている。指揮官がよほどの馬鹿でない限り、鏡の角度を調整してこっちの艦隊に照射しようとするはずだ。

そうなつては遅い。あくまで鏡に対して回り込み、横方向から仕掛けなければ一方的にやられる。

そう思つて見ていると鏡が少し動き始めたのがわかつた。

やはりこの艦隊を潰す気だ。

「全艦隊散開！ あの鏡の射線から急速離脱だ！」

慌てて副官も他のムサイの艦長たちも反応する。説明されるまでもなく鏡といえば光の反射、あの鏡の大群が狂暴な兵器であることが理解できる。

ただし俺の次の言葉には副官も思いつ切り渋い顔をした。

「リック・ドムは全機緊急発進！ 直掩などいらん。全機、一秒でも早く鏡の横に行け！」

「えっ！ そんな、コンスコン司令、まさか！」

副官が戸惑う理由は明白だ。俺の言うことが非常識過ぎる。

艦が急速旋回中にはMSは発進させないものだ。

当たり前のことだが、強い遠心力が働いている状態では艦内の物はみんな固定しておく。そうでなければ危なくて仕方がない。重たいMSの移動なんか論外、途中で転がったら冗談にもならない大惨事だ。たぶんカタパルトに乗せるだけで困難を極めるだろう。

MSの発進は艦があくまで直線運動をして、充分に安定した状態で行うのが常道である。

「どうした、マニュアル通りじゃ面白くないだろ。アドリブも練習しとけ。いや、練習したらアドリブじゃないな」

「コンスコン司令……」

「やってやろうじゃないか。我がコンスコン機動部隊は、いちはやく全戦力を叩き付け、主導権を奪って相手にそれを渡さない戦いをしてきた。そうだろうか？ 今は悠長なことをしている場合ではない」

実はそんなやり方をしたから白い化け物MSに逃げる間もなく全滅させられたんだけどな！ なんてことは言わない。

副官はなぜか目をキラキラさせて納得したようだ。俺の糞理論にチョロ過ぎる。

散開とMS発進を同時に成し遂げた。うちの兵士たちは優秀だな！

そして連邦の指揮官は散開した艦隊のどこへ照準を合わせるべきか、少し迷ったらしい。その一瞬が付け目だ。ドムをその分先へ進められる。

照射を受けないよう、充分に角度を付けた方角からドムが鏡に迫る。

早速バズーカで破壊に取り掛かった。

しかし鏡の数は多い。

簡単には破壊できない。

そして嫌なことに連邦の指揮官は予想より賢い奴だった。

素早く頭を切り替え、こつちを無視してソロモンに射線を合わせようとしていやがる。多少威力が落ちても充分、鏡が破壊される前に使えるだけ使おうというのだろう。ソロモンのゲートやそこにいる多数のザクだけでも薙ぎ払う気だ。

このままでは多少なりとも損害が出る。

俺は思わず叫んだ！

「ドム全機に通達！ 鏡を壊さなくていい！ 何をしている、足を使え足を！！」

詳しいことを言わなくても、俺の思い付きをドムは分かってくれたようだ。

鏡の横をドムの足で蹴り飛ばした。

元々地上戦用に作られたMSが宇宙に持ってこられたという、変態的経歴を持つドムだ。重力を支える設計のため、見かけ通り無駄に足は重量級である。

女の子に「足がドムみたい」などといえれば決闘を申し込んだと同義になる。

しかしそいつが今は役に立つ。

もちろん鏡はデカく、それなりに重い。だがゆっくりでも横方向に動きを加えられた。そして思った通り、次々と別の鏡にぶつかっていく。つまりドミノ倒し、あるいはビリヤードの要領だ。

鏡を破壊する必要なんてなかったんだ。

無重力の空間、ちよつとの力を加えるだけで物は動く。そして超精密に角度を調整してこそ意味のある鏡の兵器だ。軽くコツンと当たるだけで全く意味のない物体になり果てる。

ドム十二機の蹴りで連邦の新兵器は無力化された。鏡には調整用

のバーニヤがついているが、それはたぶん初期位置設定用のものだ。こうやって三次元的にバラバラな動きを始めた以上、オペレーターが頑張っても再度並べ直されるまではかなりの時間が必要だろう。

ソロモンの一部が輝いている。それでも少しくらいは照射されているんだろうな。だが少しであれば実害は出ないはずだ。ようやく狙ったミツシヨンは成功させられた。

「ソロモンが常夏の国になりそうだ」

「司令、日焼け止めクリームが売れるでしょうな」

お、つまらん俺のジョークに副官が返してくれるようになったじゃないか。

さて、軽口を叩けるのもそこまでだ。

当然のごとお次は怒りの連邦護衛部隊の報復がやってくる。

これはまともに相手はできない。今見えているだけでもこっちの数倍以上はいるからだ。

ただしこちらにも応援が来ようとしている。

ドズル中將はソロモンが照射された時点でこの新兵器の恐ろしさを即座に理解する。そして貴重なグワジンの部隊まで緊急発進させている。それらが到着するまで持ちこたえればいい。

「目一杯弾幕を張れ！ ドムは後退しつつ相手の攪乱に徹しろ！」

もちろん相手を乱したら逆撃を加えることも忘れない。

「十字砲火を設定する。三隻のムサイとデータリンク、最適位置とタイミングの計算を始めろ！」

「計算出ました！ 砲撃予定位置設定！」

「よし、全艦その位置に急行した後、静止。エネルギーはメガ粒子砲充填に切り換えだ」

俺は連邦の艦で適当な獲物を探す。一隻のマゼラン級戦艦が目に入った。あれはムサイやチベにとっては難敵だ。ここで片付けておきたい。

「ドムは撤収、早すぎても遅すぎてもダメだ。あいつを引っ張ってこい」

うまいこと相手は乗せられる。

よしよし、設定したポイントまでやって来い。こつちを甘く見たツケを払ってもらおう。

「敵マゼラン、ポイント到着！」

「今だ、全艦クロスファイヤ、撃てーっ！」

しっかり狙点は定まっている。

獲物であるマゼランはいくつもの方向から粒子砲に貫かれる羽目になる。

だが、それでも爆散しない！ さすがに強固なものだ。エンジンブロックの防壁が良いのだろうな。軽巡ムサイの砲ではそこまで貫通できないらしい。連邦は工業生産力に余裕がある分、使える部材も、その材質もいいのだろう。人員の多い連邦の方が人員を守るなんて、ちよつと矛盾だろうか！

ただしそのマゼランは大破している。エネルギー伝達が切れたらしく、砲も撃てない。もう慌てる必要はなく、止めを刺すのはやがてやって来るグワジンに任せよう。俺の方は細かい敵を打ち払いつつ、ソロモンの方へ後退していく。主戦場はやはりソロモン周辺だからだ。

そこでなんとか奮戦し、ジオンのソロモン駐留軍が最小損失で脱出できるよう時間を稼ぎたい。

何度も言うようだがジオンがソロモンをずっと保持することはできない。どんなに頑張ろうが、ア・バオア・クーの攻略を目指す連邦の大軍がちよこつとここへ応援を出す気になればお終いだ。

さて、もう一隻いたマゼランに牽制の砲撃を仕掛け、サラミスを二隻ほど斃し、やっとソロモンの近くまで来れた。

この辺りで激戦が展開されているのがよく分かる。

宇宙はひっきりなしに飛び交う光条で溢れている。オレンジや青色、狂暴だが見た目には綺麗な線だ。時折輝く球体はもちろん艦かMSの最期の華だ。

おお、マ・クベ君も働いているじゃないか！ 見るとさすがに合理

的な戦闘行動をしているようで、立派に役に立っている。決して指揮官として無能ではない。ここへ無理やり追いやった甲斐があったというものだ。

しかし高機動を要求される激戦だ。おそらく旗艦マダガスカルの司令官室では振動で壊れる壺も出てくるだろうな。たぶんマ・クベ君は後で泣くだろう。それを思うと笑える。

そんな下らんことを思っていたのは一瞬だけだ。

次に見えたもので俺は青ざめることになる。

第五話 やりたくないけど突撃

俺は見るはずのないものを見ている！

「あれは、まさか、ビグザム!? 何で、出て来るのー!!」

ソロモンのゲートから、大型のモビルアーマーが出てこようとしている。MS用ではなく艦用のゲートを使っているのだが、それでも小さくは見えないほどのものだ。

なぜ、ここでビグザムが？

俺が連邦の新兵器を潰した。戦局は絶望から遠いところにあるはずだ。

もう無理に出て来る必要はない。

しかし結果的に俺はドズル閣下の戦闘本能を見誤っていたようだ。ソロモンの司令官室で指示を出すだけで収まらなくなったのだろう。陣頭に立とうとしておられる。

ドズル閣下の精神は立派だ。

俺は本当に尊敬できる上司を持つたことを誇りにさえ思う。

しかし、これは非常にまずい。

ビグザムは護衛を多数従えて突入攻撃で使うような兵器だ。

確かにビグザムは強いだろう。特にビーム拡散防御は物凄い技術であり粒子砲による攻撃力も半端なく、しかも多数を同時に砲撃できるなんて凄いとしか言いようがない。

ただししかし、悲しいことにモビルアーマーの弱点はそのままなんだ。

MSのような関節というものを生かした即時対応はできない。姿勢制御も遅い。攻撃方向に制限があるのも弱点だ。MSのような柔軟な動き、特にねじる動きができないからだ。

つまり接近戦に持ち込まれたらMSには勝てない。そのためこんな乱戦でビグザムが出るのは危険過ぎる。

驚きからまだ回復もしていないうちに、視界の片隅へ恐怖の象徴が

入ってきた。

う、あ、あれは!!

白い双胴型の強襲揚陸艦、木馬じゃないか！ 奴がいる！
全ての元凶だ。

もしも、もしもあれから出てくる白いモビルスーツがドズル閣下の
ビッグザムに目を付けたら……

ドムを出して護衛に付けても、全く無駄だ。

確実に仕留められる。

俺は愕然としてしまった。

急ぎビッグザムの近くに行く。戦場は通信妨害が激しく、遠くからで
は届かない。

もどかしく画面を見つめる。やはり半分以上かすれて見えないが、
音声なら通じるようだ。

「ド、ドズル閣下、ビッグザム単機は危険過ぎます！ ソロモンへ急ぎお
戻りを！」

「おお、コンスコンか！ 貴様、大した奴だ。見ていたぞ。連邦の新兵
器を潰してくれたとはな！ また勲章が欲しいのか」

「あ、その話はまた後でお願いします。今はとにかくソロモンにお戻
り下さい」

「いや、俺も少しは暴れたくてな。兄者が送ってくれたビッグザムのテ
ストも兼ねてだ。それにな、ゼナも見ている。あいつも今はドレスを
着ているが元は兵士だ。戦いの陣頭に立つという意味を分かってく
れる、凄く貴重な妻なんだ。きっと俺の雄姿に惚れ直してくれるに違
いないぞ！」

何ですと！ 家族の絆的な動機!?

そこはまるっと無視しよう。

ドズル閣下は我ら兵士の士気向上のために陣頭へ出て下さったん
だ。

うん、そうだ。そうに違いない。今の話は冗談であり、俺をリラッ
クスさせるためわざと無理におちやらけているだけなんだ。

「まあ、ゼナは俺に銃を突き付けて迫ってきたほどだからな。昔はす

いぶん積極的だった」

もう充分ですつてば！ その話題から離れましょうよ！

とうか迫ってきたという意味が違うでしょう。それは閣下が士官学校の校長だった時にゼナ様の捕虜になった話で、美談に変換しないで頂きたい。

まあとにかく、ドズル閣下を絶対に守らなくてはならない。いろんな欠点はあれど俺にとっては敬愛する上司なんだ。

しかし俺の思惑をよそにビッグザムは近くの連邦艦に砲撃を始めた。一発でサラミスが轟沈する。凄い威力だ。

あれ、違う。マゼランだった。

俺が罠に嵌めてようやく損傷させたような、あの戦艦マゼランをたつた一撃で屠ってしまえるとは。

ただし、状況としてはかなりまずい。

ビッグザムがただ浮いているだけならまだしも強敵と認識されればアイツがやってくる。

遅かった！

モビルアーマー一機と、白い化け物MSがビッグザムを認識した。明らかに注視している。

「閣下！ ここには木馬がいるんです！ あれに目を付けられたら厄介です」

「コンスコン？ 当たり前だろうが。ここに木馬がいるのは。貴様は木馬を追って戻ってきたのではないか」

「え？ あ、それは……」

もう一つドズル閣下は誤解しているようだ。

俺は木馬を追っているんじゃないやなくてむしろ逃げているだけである。向こうが勝手にソロモン攻防戦に参加しているんだ。

それでも閣下が木馬のことを過少評価していることは事実である。これは今説明しても無理だ。だいたいにして俺自身もかつてそうだったんだから、分かってもらえないだろう。

仕方がない。

説得は諦め、この場だけでも何とかしよう。

逆に考えるんだ。最悪じゃない。閣下が木馬へ立ち向かおうとま
でしないだけで良しとしよう。もしそうになったら目も当てられない。

俺はドズル中将との通信の後、急ぎ副官に命じる。

「総員退艦だ！ 急いでチベから離れろ！ このチベはドズル閣下の
ため、特攻を仕掛ける」

「え！ コンスコン司令、特攻っていったい？ 相手は、というかどう
して砲撃やMSじゃなくて……」

「砲撃はダメなんだ。当てられるくらいなら最初から苦労するものか
！ MSも論外だ。かなうわけがない。チベをぶつけるしかないん
だ」

いや、本当はそれでもダメなんだけどな！ しかし足止めにはなる
だろう。

「グズグズしてる暇はない。直ちに総員脱出シャトルに移れ。ドムも
発進、その護衛につかせる。シャトルに間に合いそうもない奴はノー
マルスーツを着てドムに曳航してもらえ」

「し、司令はどうなされるのです！」

「どうしたその顔は。ん？ まさか副官、俺が死に行くとも思っ
たのか？」

そんなわけないだろ！ しかもそうする必要はまるでない。

コースが分かっているからだ。

白い化け物MSはビッグザムを目指して真つすぐやってくる。その
途中に置けばいいだけの話だ。最後の最後までチベを操艦し続ける
ことはなく、直前で脱出すればいい。

俺も急いで、なんとか窮屈なノーマルスーツを着る。辺りを見渡す
と話のどこに感動したのか、副官の他にも艦橋要員が退避せずに残っ
ているではないか。よくわからんが偉いな。

自分で総員退艦と言っというてなんだが、やっぱり残ってくれると心
強い。実のところ死ぬ気はなくともちよっと縮み上がるところは

あつたんだ。一人は心細い。

ノーマルスーツは彩度の低い薄緑色だ。どうしてこんなダサイ色なんだろう。草原で戦うわけでもあるまいに。

なんてどうでもいいことを考えながら着終わると、次に艦橋から宇宙に直接出られる特殊避難用ハッチをゆっくりと開けさせる。脱出に備えて最初から艦橋の空気を抜いておく。

真空に変わったことでノーマルスーツはわずか膨らみ、それでかえって体が楽になる感じがする。特に腹回りが。やっぱり痩せよう、と心に思う。

同時にやはり肌寒さも感じる。

久しぶりに宇宙と直接接している実感がしてきた。

スペースノイドを自称しているとはいえ少し緊張するな。

そうこうしている内、ついにあの化け物MSがビッグザムを狙い定めようだ。

明らかにビッグザムを目指し加速をかけている。

あいつを止める！

「エンジン出力全開！ 限界出力だ！ 焼き切れても構わん、ただし十秒だけだ」

計算済みの言葉を言う。

そしてきっかり十秒後、今度は脱出にかかる。

艦橋要員と副官はバーニヤを使ってハッチから外に飛び出す。俺はというと副官に手を持たれて飛んでいる。少々情けないが、俺はバーニヤの扱いがそれほど上手くない。

宇宙空間で一機のドムを待機させていた。ドム隊の隊長機だ。そのザイルにつかまり、離脱する。ソロモンへ入るのだ。

そして薄紅色の慣れ親しんだチベを見送る。

チベよさようなら。

お前は本当にいい艦だったよ。

家であり友でもあった。俺でも感傷的にならざるを得ない。

後は俺にできることは何もない。

白いMSより先に連邦のモビルアーマーがビッグザムに到達しようとしている。

だが、ビッグザムの硬い装甲にバルカン砲など通じやしない。すると何とモビルアーマーなのに接近戦を仕掛けた挙句、特攻のようには散っていったじゃないか。敵ながら称賛に値する奴だ。ただし、それでもビッグザムは爆散どころかせいぜい中破程度の損傷に過ぎない。

だがちよつと無理をし過ぎたと思ったのだろうか、ドズル閣下もソロモンへ後退を始めた。

そこを逃すまいと白いMSが更に速度をアップした。さすがに速い。あつという間にビッグザムとの距離を詰めてきた。

しかし、そのタイミングでチベが割って入ったのだ。惜しくも白いMSにチベが当たることはない。ぶつけることはできなかつた。

しかし次に俺の思った通りの展開になる。

白いMSはチベを無視することはなく、ビームサーベルを振りかざして攻撃してきたのだ。

若いな、と思う。

そういうところを見るとあのMSのパイロットは若いのだろう。チベなど無視してもよかつたらうに。

白いMSは流れるような動作でビームサーベルを引き抜く。艦の主要部を見極め、それを突き通した。普通なら必殺の攻撃だ。

だが、何も起きない。

すぐに爆散すると思っていたのだろう。確かにいつもはそうだったから。

戸惑いながらも、白いMSはまたビームサーベルを使い憎たらしいほどの確にエンジン部を貫く。

それでも何も起きない。

それもそのはずだ。

俺はチベのエンジンを目一杯使った後、逆に思いつきり臨界点以下

に火を落としたのだ。再起動を考えないくらいに。

その状態でいくらダメージを食らっても、少なくともエンジンは爆発しない。チベの艦体に穴が開くだけだ。

俺は白いMSを引っ掛けた。

はっはっはー！

中年の悪知恵をなめるなよ！

この時間稼ぎは成功した。

白いMSがチベを無視すると決めるまでのわずかな間、ドズル閣下とビグザムはソロモンへ向かっている。

ソロモン近辺にはまだまだジオンの分厚い艦列が見える以上、白いMSも断念せざるを得ない。

ようやくチベの内部が発火し、メガ粒子砲のエネルギー残滓でも解放されたのだろう。チベは中央から割け、そして小さく爆散した。

それを最後に白いMSも帰投していったのだ。

第六話 もう一人の化け物

俺はソロモンに入ると直ぐにドズル中将に面会した。

多少気が重い。

いや、めちやくちや重い。

これから俺の苦手な説得という奴をしなくちやいけないからだ。

おそらく単純な戦闘よりも難しいことになる。

「ドズル閣下、これまででの経過説明は後回しに致します。早くソロモン撤退の算段を。戦線が膠着状態に陥っている今なら、損失を出すことなく遂行できます！」

俺の言葉は、分を超えた意見具申だ。

本当なら一艦隊司令が言えるようなことではなく、重大な戦略判断のことである。

それを承知で言ったのは気が焦っていたからだ。

俺は連邦が強大なことを骨身に染みて分かっている。何しろ一回死んだくらいだ。

連邦はソロモンもア・バオア・クーもあつさり踏みつぶせる数を持つている。しかもその差は時間が経つほどに広がっていく。

しかし、その理解はジオンに薄い。

上の者は末端の悲惨さを見ないし、末端の者は勢いばかりのスローガン信じ、中間のものは――現実逃避をする。

ギレン総帥もキシリア少将も本当には分かちやいない。だから終戦間際でも、本国やグラナダに残した戦力で何とかなるだろうなんて、楽観的過ぎることを考えたりもする。

ジオンは緒戦で勝ち過ぎた。

だから誰も彼も国力差についての認識が甘いんだ。

とりあえずこのソロモン攻防戦、ドズル閣下を何としても説得し、このタイミングで撤退させなくてはいけない。今なら少しの損害で撤退もできるだろう。

逆にこのまま継戦していったら、どんどん不利になり損害が増すば

かりの悲惨なことになる。

どんなに善戦に見えたところで連邦の数は多く、いずれは飲み込まれる。

しかし下手に今の戦況が良ければ、それこそソロモンを捨てて退く判断はしないだろう。猛将であるドズル閣下ならばなおさらだ。

ここは直球で訴えるしかない。

「閣下、重ねて申し上げます。戻る途中で出会った連邦の異常なほど濃い哨戒網といい、部隊移動といい、連邦が既にア・バオア・クーを狙って態勢を整えつつあるものと思われます。ソロモンにこだわるべきではありません」

「分かっている。撤退の方策を練っているところだ」

「ソロモンを死守するのはかえって戦力の分散で…… え？ ええー…… ツ?? ドズル閣下、今何と？ 撤退って本当？ 聞き違い？」

「何を驚いているコンスコン」

「い、いえ、少しばかり意外でしたので」

驚いた。だがこれは嬉しい驚きだ。

ドズル中将は全体像を見て判断している。

「連邦は少しばかり混乱しておる。撤退なら今だろうな。統率の取れない相手というのは打ち払うのはたやすいが、逆に未練がましくいつまでも取りすがってくるものだ。切りがない」

「た、確かに」

「まあ向こうは新兵器を潰され、ティアンムも斃されたからな。混乱するのも当然だろうが」

「鏡は潰しましたが、向こうのティアンムが？」

「ここでドズル閣下が不思議そうな顔をした。不思議なのはこつちだ。」

「何を言っているコンスコン。ティアンムは貴様が斃したんだろうが。まったく、この戦いは貴様の一人舞台だ。ビッグザムすら引き立て役か」

ええー…… ツ!!

狙ってないですが？ まさかの偶然!?

コンスコン機動部隊が唯一大破させたあのマゼランにティアンムが乗ってたの？

というよりティアンム、前に出過ぎだろ！ ドズル閣下のことは言えない。ティアンムも猛将過ぎる。

もちろん連邦の将を斃せたのは大戦果だ。ただし痛し痒しという面がある。戦いというものは単純ではない。

これで連邦の動きが混乱し、だからだと継戦を続けていくかもしれない。

指揮官が軍をまとめてこそ攻めることもすっぱり退くこともできる。

その緩急がなくなった相手だと却ってやりづらい面がある。乱戦が続けば大軍に付き合つて消耗し、いつのまにかのつぴきならないまで負けているといった事態にもなりかねない。

ドズル中將はそのことを言っているのだ。

さすがに俺の尊敬する上官である。

「ただし撤退といつてもな。下手に追撃されては厄介だ」

「それならドズル閣下、方策もあるでしょう」

その二時間後、俺は懽然とした顔で艦橋に立つことになる。

艦は、またチベだった。

本当ならグワジン級戦艦に乗ってみたかったなーっと思うものの、仕方ない。

「貴様にグワジン級を充ててやりたいところだが、ソロモンにはグワラン一隻しか残ってなくてな。濟まんが当面はチベを旗艦に使ってくれ。貴様の旗艦は沈んだが、チベの人員はそのままなんだろう。人員が足りなくて残っているチベが一隻あるから丁度いい」

「は、はあ、ありがたく拝領いたします」

「そしてできれば十二隻の中隊にしてやりたかったが、これもまだ無理だ。だがムサイを二隻追加してやる。哨戒中隊のものでな、いや哨戒とはいってもかなりの戦果のある奴だぞ」

グワジン級はただ大きい戦艦ではない。ザビ家の者が座乗することを考え、いろいろ豪華に作られている。無駄に階段を付けて赤いじゆうたんを敷いた広間とか。まるで移動する屋敷のようだ。たぶんスタビライザーも高級で、乗り心地もいいんだろう。それはやはりミネバ様やゼナ様が乗るのにふさわしい。それにビグザムみたいなデカイものを搭載するのはグワジンしかできない。

ともあれ俺が乗るのはまたチベになった。グワジンより快速なので、先手を取って戦う俺には向いているのかもしれない。決して、悔しいわけではないぞ。

しかし俺が今渋い顔をしているのは艦のせいじゃない。
与えられたクソ任務のためである。

今回の撤退に当たって俺は提案した。

「攪乱は必要です。 囷を使って目を逸らすのが最も有効でしょう。」
「そうだな。 しかし、 具体的には」

「閣下、それにはマ・クベ大佐の隊がいろんな意味で適任かと。 連邦はきつとマ・クベ大佐なら釣られて行きます」

「キシリアのところのマ・クベか？ だがなコンスコン、キシリアの手前もある。 わざわざグラナダから応援に来てくれた部隊を犠牲にはできん」

俺の提案は難色を示された。 さすがにドズル閣下は人が好い。 自分を見捨てるどころだったキシリア少将に義理立てするくらいに。

だが囷としてマ・クベほど適任な者はいない。 ここぞとばかりに力説する。

悪かったなマ・クベ君。 今度会ったら壺を褒めてやるよ。 ハンカチで拭いてやってもいい。 たぶん壊すけどな！

「大丈夫でしょう。 マ・クベ大佐は小官の見るどころ、指揮能力は低くありません。 負荷が過大でなければ逃げ切るくらいは可能かと」

そしてソロモンからマ・クベを送り出した。 悪辣だがマ・クベであることを連邦にこっそり流す。 すると思った通り、食いついた連邦の部隊がある。

ただ、それが余りにも予想外だった。

木馬だったのだ！

「なんてこった、連邦の囹である木馬がジオンの囹であるマ・クベを追うとは！」

そしてそれが俺に関わってくるとは。なんでそうなるんだ。

「コンスコン、もう一度木馬を追え」

「は？ ドブル閣下、今何と？ 木馬はこの際無視しても良いのでは」「木馬を追うのは先の任務の内だ。それに、もしマ・クベが危なくなったら助けろ」

こうして俺はチベ一隻ムサイ五隻の計六隻で木馬を追う羽目になった。

もちろん木馬と本気で交戦するつもりなんてあるわけではない。

何度も言うが、それは無理なんだ。

そしてこの六隻の艦隊を連邦が見逃してくれるはずはなかった。

ソロモンを出てわずか四時間後のことだ。

航行中、後方へ一定時間ごとに落としておいた自動索敵ブイから信号が届く。何かが接近中であることを探知した。

それを基に俺は全天索敵から後方へ重点索敵に切り換えさせた。

オペレーターの数には有限で、全天索敵ではどうしても粗い。範囲を絞ればより細かく、遠くまで見ることができる。

こういった戦いでは、追われる方は後背を取られるが探知という面では先手を取れる。

そして見つけ出す。

「後方より急速接近中の艦隊があります！ 詳細判明、マゼラン一隻、サラミス四隻の五隻！」

「第一級戦闘態勢！ 各艦、通信再チューニング後、ミノフスキー粒子散布！」

なるほど、連邦の追撃め、全体戦力ではこちらをかなり上回るか。サラミスはムサイより確実に一段強く、マゼランはチベより数段強い。

ただし相手が俺だったことを不運に思え。

俺は女の子に告る以外では負けないぜ！ いや告ったことないから不戦敗だけどな！

「後方のムサイから順次MSを発進していけ！ それが終わった艦から反転しつつ散開だ！ 方向は任意で構わん。そして反転後は敵艦隊と等距離を保て。凹形陣を形成し、それを決して崩すな」

頭の中で直ちに艦隊戦の全体像を思い描き、実行に移す。先ずは前方にしか撃てないムサイを考慮するのが優先だ。反転して陣形を作る。

マゼランを仕留められるかが今回の死命を決する。

俺のチベも反転を始めるが、開始時には振動が盛大に発生する。

艦体に曲がる力がかかるからだ。艦内フライホイールがスタビライジングを始め、細かい振動は打ち消されていく。ただし、次にかかる強い横Gは打ち消されない。

反転が終わると、俺は傾いた体をやつと起こしながら、次の指示を伝える。

「各艦、メガ粒子砲斉射準備！ 最初の火力がものを言うぞ。それとMSはどこまで行けた？ 敵MSの排除を徹底しろ。こっちに寄せ付けるな。それがうまくいったら敵艦隊の攪乱にかかれ」

だがしかし、戦いは俺の予想のはるか斜め上を行かれた。

「え？ 副官、俺は目が悪くなったか？」

「いえ、たぶん、そんなことはないと思います」

「いやでも……」

俺も驚いているが、副官も口を開けて驚いている。だから見間違いないじゃないんだ。きつと。

こっちのドムの中の一機が、一発撃つごとに連邦のジムを確実に墜としていく。

外れ弾が無い。

全く一つも無い。

当然、時間と共に向こうのジムは数を減らすばかりだ。みるみる

こつちが優勢になる。

ありえん。こんな戦闘スコアは異常だ。

ただ連邦MSも馬鹿ではないのだろう。戦術を組み替えている。

その凄腕を囲んで袋叩きにする気だ。上下左右から迫り、同時に仕掛ける。

俺は危ない、と思った。当然だ。

しかし、ドムは残弾のないバズーカを捨て、武装を近接戦用のヒートサーベルに持ち替え、その全てを叩き斬っていく。

1つ、2つ、3つ、…… 撃墜数が加速しただけだった。

なんだあれは！

化け物か！

味方でよかった、と思いつつも震えが走る。

しかしそれは序の口だったんだ。

そのドムは僚機から残弾のあるバズーカを受け取ると、敵艦隊へすっ飛ばす。しかも、重戦艦マゼランの方へ向かってだ。

俺は他の戦況も忘れて、そっちへ目が釘付けになる。

「拡大観測！ マゼランと、あのリック・ドムはどうなった？」

「小爆発あり！ マゼラン、機関停止の様様！」

「三分待ち、リック・ドムが残弾を使い切って帰投するのを確認、その後メガ粒子砲を叩きつける！」

三分間の内に、サラミス一隻の爆沈までおまけについた。

その後の戦闘は一方的だ。MSを喪い慌てる敵の艦隊をメガ粒子砲で片付けていく。敵の追撃部隊は全滅だ。

この戦闘の主役は悲しいことに指揮官の俺なんかじゃない。俺の作戦、艦隊行動などオマケだ。

主役は凄腕のMS乗りだ。

何なんだ、こいつは。

それは、後に「コンスコン三人衆」と呼ばれることになる。シャリア・ブル、クスコ・アルと並び称されるエースだ。

名を、アナベル・ガトーという。

第七話 その名はアナベル・ガトー

俺は戦闘終了後、直ぐに副官の報告を聞く。

「連邦のマゼラン一隻及びサラミス四隻撃沈、そして発進してきた敵MS約二十機を全機撃墜。こちらの損害は艦には皆無、そしてリックドム大破三機、小破五機です」

「完勝だな」

「ええ、コンスコン司令。死者なし、軽傷だけです。ここまでの勝利はめったにありません」

それもこれもめちやくちや強いMSがこちらにいたせいだ。

ほぼMS戦で方がついたようなものだ。俺の作戦要らなくね？

凹む。

「連邦の脱出艇は追うな。救助活動も邪魔するなよ」

「は、去るに任せます、司令」

「そして向こうが去ったら、一応こつちからもドムを出して残骸を調査しろ。もしノーマルスーツからの救難信号があれば、取り残しを救助してやれ。向こうも慌てていれば取り残しも出てくるだろう」

「移動手段もなく、残骸にいるのは悲惨ですね」

「そういうことだ。敵でも同情するさ。ここまで生き残った者は、最後まで生き残る権利がある」

そして全てが終わってから、俺は艦ごとにMS乗りと会うことにする。

「何考えてんの司令官!! 馬鹿なの? 死ぬの?」

やっぱり罵倒からか。

こいつはツエーン。まだ二十二歳の女だ。チベ搭載の十二機のリックドム、その隊長機に乗っている。

クリーム色の短髪、見かけも良く、兵たちから人気も高い。コンスコン機動部隊の士気向上に一役買っている。

性格は…… まあ言葉通り、乱雑な奴だ。今も正面から罵倒してき

やがる。

ただし俺がこいつを隊長機にしているのは純粋に能力を買ったことだ。

俺は自分ではパイロットに成れないのだが、パイロットを選ぶことには昔から自信がある。特にどこを見ているということもなく、直感で選んで、なぜか不思議なことに外れた試しがない。

皆、水準をはるかに超えたパイロットになる。俺がこれまで戦果を挙げて出世してきたのはその勘のおかげかもしれない。

ドム隊のほとんどは男だが、こいつを含めて女も数人だけいる。ツエーンの横で心配そうに見ている副隊長カヤハワなどもその一人だ。

普通にはMSのパイロットに女は居ない。

部隊全体というなら、女性兵は珍しいことはなくそこその割合を占める。連邦は女性の参画権とかいうややこしい理由で、ジオンは人員不足という実際の過ぎる理由のせいだ。しかし女性兵は整備や糧食が主な仕事で、パイロットには普通ならない。

だがツエーンは俺が最初にパイロット適性を見出し、ここまで育てて来た。

そんな昔からの腐れ縁のためか、なぜか俺に暴言を吐いてそれが平気になっている。

それでいいの？ 俺は仮にも准将だよ？ 軍では凄く偉いんだよ？

「あ、まあ、悪かった。済まん」

ヘタレだ！ 俺はスーパーヘタレだ！

相手に強く出られると反射的に退いてしまうんだ。理由が分からなくてもだ。これはもう一生治らない癖である。

ただこの場合、よくよく話を聞いてみると、確かに向こうが怒る原因があった。

ソロモンで俺がチベを乗り捨てた時、司令官なのにノーマルスーツで宇宙に出た。その無謀さを怒っているんだ。確かに流れ弾一発でも来ていたら即、死んでいる。つまり、こいつなりに俺のことを心配

して言ってくれているんだ。

「今度やったらただじゃおかないんだからね。どんくさいくせに」

「いやもうその辺で……」

ツエーンの捨て台詞を、カヤハワが抑えている。黒髪身長低く、性格穏健のカヤハワだが、ちよつと声が小さいぞ。

「ふん、蹴りを入れて負傷させればいいんだ。そうすりゃあ陣頭にも出てこないだろうさ」

別の誰かの小声が聞こえた。確認の必要は無い。パイロットの中にフィーナというツエーン以上の過激派がいるんだ。俺はとりあえず無視してその場を後にした。とりあえずっていうのは、まあそういう意味だからな！

次は、念願の凄腕パイロットに会う。

最初からこれが目的だ。

あの活躍を見せたパイロット、どんな奴か興味がある。

ざつと調べたところ、今回合流してきた哨戒のムサイはこれまでMSを四十九機撃墜という記録を持っている。え、哨戒勤務に所属してたんじゃなかったの？ 哨戒でその撃墜数って、どうやったらそんな数まで積み上がるんだよ！

しかも驚いたことにムサイが搭載していたMSは三機だけだ。

つまり一人のエースがむちゃくちゃ稼ぎ出してるスコアじゃないか。

そいつはノーマルスーツを着て、ヘルメット部分を外し、きれいな敬礼で出迎えてくれた。身長はやや高い。

そして驚いた。きれいなのは敬礼の型だけじゃない。

イ、イケメンじゃないか！

シルバーグレイの髪を垂らし、整った顔立ちだ。目元が特に涼やかだ。

見かけだけでなく、たぶん性格もいい。言葉を交わす前から分かる。爽やかな雰囲気で辺りを照らしているんだ。

ま、負けだ俺の。

俺はイケメンを見ると張り合おうという気持ちがない。そんな闘争心すらない。かといつて屈辱とも違う。ほー、そういう世界の人なんだーっていう別物を見る感覚である。もう俺の人生は負け犬過ぎたんだろうか。

そのクツソイケメンのため一瞬の間が空いてしまったが、俺は言葉を紡ぎ出す。

「アナベル・ガトー大尉だね。この戦闘で君に助けられた。見ていたが本当に凄かったな」

「ガトー大尉であります！ 司令官のフォローのおかげでうまく戦えただけであります」

「いやいや、君の活躍は本当に素晴らしい。もう負ける気がしなかったよ。アナベル・ガトー君」

「ガトーであります。過分なお言葉、感謝いたします」

? なんかおかしいな。いちいちガトーと返してくるなんて。

俺は閃いた！

おそらくだが、このアナベル・ガトーという男は、アナベルという名を気に入っていないんだ。明らかに女っぽい名前だからだろう。アナとかベルよりはマシだと思うんだが。

ついでに言えばガトーというのも甘そうだけどな。

しかし、名前を気にするというのはよくある話だ。

他人からすればあまり大したことではなくとも、本人にはまた違うんだろう。

俺はこの男に親近感を持った。

俺は多少コンプレックスのある奴が好きなんだ。何もコンプレックスのない奴は、得てして共感性が低い。深く分かり合えない気がする。

「コンスコン閣下の下で働けます事、光栄に思っております。ええ、本当に！」

「へ? あ、ああ、そう言ってもらえるのは嬉しいが……」

反対に向こうは俺のことをどう思っているか。

間もなく分かった。非常に驚いたことに、向こうは何だか俺に好感

を持つているんだ。憧れというか、好意的オーラを感じる。

懐かれるのは嬉しいけど、とつても嬉しいけど、な、なぜだ……

「先の戦いでますますそう思いました！ コンスコン閣下はやはり素晴らしい方です！」

「んー、と、よく分からないが。さっきの戦いなら君が活躍していただ
けで、俺は何もしていないようなものだぞ」

「いいえ、閣下のようなことは、なかなかできることではないと思っ
てお
ります。戦いが終わって、連邦の兵まで救助するとは！ 戦っていな
ければ敵も一人の人間であり、そこに手を差し伸べて当然、閣下はそ
ういうお考えなのですね！」

あ、そこに感動していたんだ。

こいつは、漢だ。

純粋な感性を持っている。一本気なんだな。

将来、悪い誰かに騙されるなよ！ ガトー君。

そういった収穫を得てから俺はチベの艦橋に戻る。

そろそろコンスコン機動部隊の航路予定を出さねばならない。

追う側は、対象をもちろん見ながら追うわけではない。

そんなことをすれば逆撃を食らう確率が高くなるだけであり、姿を
現すのは仕掛けると決めた最終局面だ。

ではどうするか。この宇宙には敵味方、ブイやビーコンが無数に浮
いている。その情報をかき集め、探知された敵影の情報を精査し、欺
瞞を排除して追っていくのだ。

もちろん相手の進路の予想が不可欠だ。宇宙ではむやみやたらと
進路変更はしない。そんなことをすればエネルギーが尽きてしまう。
だから読みが利く。

精密な観測、的確な読み、そして最後は勘を使って相手の位置を突
き止めていくのだ。

随時入ってくる情報を総合的に分析し、俺は結論を出した。

「木馬は、サイド5へ向かっているな」

「コンスコン司令、確かにそのように感じます。しかし、そこに何があ

るんでしよう」

「分からん。しかも木馬がサイド5を目指しているのか、先行したマ・クベを追っているだけなのかも不明だ」

「しかしサイド5とはラッキーですね」

「そうだな。幸いなことに、サイド5は岩礁地帯か、コロニーといえれば唯一残っているテキサス・コロニーしかない。絞り込みはたやすい」
そして俺は岩礁地帯から先に航行していく。

慎重の上にも慎重にだ。

いきなり連邦の白いMSが不意打ちを食らわせてきたら、と思うと正直生きた心地がしない。

その心配はなかった。

あつさりこちらの方が先に探知した。

向こうが戦闘に入っていたためだ。

相手はもちろん俺の艦隊ではない誰かだ。暗い岩礁地帯の中、時折岩が強烈な光に照らされる。明らかに何かと何か戦い、光を発している。

木馬と戦っているなら当然ジオン軍である。こんな場所で遭遇戦か？ 運悪く木馬に出会ってしまったのか？

俺は関わり合いたくないが、ここで友軍を見捨てることはできない。

どんな事態なのかと思って詳しく探ると、ジオンの艦はそこにいなかった。見たこともない物体が戦っていたのだ。

形態は、分類すればモビルアーマーである。ウニのようなずんぐりとした形だ。その本体から何本か竿のようなものが伸びている。理解不能な形だ。

「何だあれは！ 最大解像度で出してくれ！」

驚いたことにそのモビルアーマーから撃っているんじゃない。

連邦の白いMSをめちやくちや連続射撃で攻撃しているんだが、本体が主役じゃない。紐付きの、リモコン小型砲台を駆使して撃っている。一体の生物のようだ。

しかしそれもまた奇妙な話だ。リモコンを多数同時に使っているんだぞ。まるでリモコンに目があり、あらゆる方向から全てを同時に見ているのでない限りそんな真似はできない。

恐ろしい戦いをしている。

だが、だがしかし戦いを受けている相手もまた化け物なんだ！

いろんな角度から来る攻撃を全部躲している。これもまた信じられない。全方位が見えているのか。そして撃たれてからも避けられるようなのは気のせいか。

そして白いMSはリモコン砲台を叩き落としていくじゃないか。戦況としては刻々とリモコン側の数が減り、モビルアーマーの不利に傾きつつある。

「あのモビルアーマーを見殺しにもできん。全艦、メガ粒子砲用意！
射程外で構わん。牽制だ」

その間に最後のリモコン砲台が墜とされる。モビルアーマーにもう攻撃手段はなく、絶対絶命のピンチである。

「一斉砲撃だ。その後、ゆっくり後退しながら木馬との距離を開ける。MSは出さん。どうせあの白いのには敵わん。そして下手に出せば、収容の機会を失って逃げられなくなる」

「同期設定、チャージ完了！」

「撃てー！ー！！」

一瞬遅かったのかもしれない。

こっちが牽制の砲撃をするのと、白いMSがモビルアーマーを撃つたのは同時だった。

第八話 シャアとの対話

木馬も白いMSもこちらの存在に気付いた。もうやることは決まっている。ひたすら距離をおいて逃げるだけだ。

これまでの様子から木馬が非常に好戦的なことは分かっている。本当に危ない連中なんだ！ 能力も凄いが、姿勢が既に狂っているようで、接触するジオン軍に必ず食いついて離れない。どんだけ被害妄想なんだか常識では考えられん。

おそらく、この六隻編成の艦隊が相手でも決して退かず、こっちの方が全力で逃げなければ絶対に戦ってくる。そこだけは確信している。

例のモビルアーマーはわずか射線が逸れたのか爆散は逃れたようだ。だが大破してパイロットは死んでいるように思われた。

せつかく牽制をかけたのに無駄だったのか。こうなったら後は取りあえず逃げの一手である。

いくらあの有名な木馬であっても、たかが一隻の強襲揚陸艦相手に艦隊が後退していくことに副官は不思議そうな顔をしたが、説明なんてどうやったらいいか分からない。あの化け物MSのことを知っているのはここで俺しかいないんだ。まあ、副官は俺が木馬をわざと泳がせる、というふうに解釈してくれるだろう。

岩礁地帯という利も生かし、複雑な進路で木馬を捲くことに成功した。艦までが化け物ということではなく木馬が普通の強襲揚陸艦の速度であることが幸いした。巡航速度なら俺のチベの方が上だ。

ついでに、俺は逃げる前に探索ブイをバラまいている。

そういうところが自分でも抜け目ない。そのブイの情報から、辺りに木馬がいなくなったと推測し、さっきの戦場に戻った。木馬はテキサス・コロニーへでも行ったのだろうか。

「ドム隊を出し、あのモビルアーマーを調べろ」

一応、爆散ではない以上、生存者がいる可能性がある。

そしてそれは正しかった。

「こちらドム隊副隊長カヤハワ、モビルアーマー内部に生存者確認！

しかしひどい重傷です！ 意識不明の模様！」

「そうか！ そのパイロットの保護を優先、できるだけ早く連れ帰れ。モビルアーマーはどうでもいい」

そしてチベの集中治療室に急ぎパイロットを運び込ませたのだが、やはり意識はないらしい。

「報告。医療班が不思議なことを言っています。間違いなくジオン兵なのですが、兵士識別コードに所属・階級の表示なし、名前すら分からないようです」

「どういうことだ、副官。それでは、幽霊みたいな兵士ではないか」

「よほどの秘密任務か、潜入調査かもしれませんね」

「それにしてもモビルアーマーで木馬と戦闘とは、意味が分からんが……」

俺は副官を伴って、面会に行った。といっても向こうに意識はない。

見ると少壮で、引き締まった体のいかにも優良な兵士だ。

そして偶然にも、名前だけは直ぐに判明した！

副官が即座に叫び声を上げたのだ。

「あ！ このクソ兄貴！」

「ええっ！ 兄貴って？ お前の？」

「司令、こいつはシャリア・ブル、木星船団に混ざって、家族をさんざん心配させた奴です。階級は大尉、しかしいつ戻ってきたかも、どうしてこんなサイド5にいるのかも分かりません」

「そーいやこの副官の名はレジナルド・ブルといったな。この負傷兵はその兄、シャリア・ブルという名前なのか。こんなところで兄弟の面会をしたとは。」

しかしそれ以上の情報は得られず、意識が戻るのを待つ他ない。

テキサス・コロニーには行かずに停泊していたら、全く思いもよらないことが待ち受けていた。

そんなものを待つていたんじゃない！

完全に予想外だよ！

奇妙な連絡が入ったんだ。

「通信オペレーターから報告します！ 友軍ザンジバルから入電！

所属確認、キシリア少将配下突撃艦隊所属、シャア・アズナブル大佐

です！」

な、なに、気が付かなかった。

いつのまに近くへザンジバルが来ていたのか。

艦橋に緊張が走る。

単に友軍から入電したという意味以上のものがある。善かれ悪しかれ、シャアの名はジオン軍にとって特別なのだ！ 圧倒的な戦果、謎めいた出自、常に人目を引いてきた。

おまけに周りからは俺がシャア嫌いということに通っている。なぜかそういうことになっていた。

実はそうじゃないんだよ！

本当に周りの人間が勝手に言っていることだ。

そりゃあ、俺はドズル閣下の腹心、シャアはキシリア少将に属している。つまり派閥が違う。反目していると思われても仕方ない。

しかし実際、俺自身としてはシャアが嫌いっていうわけじゃない。派閥が違うから嫌いというほど俺だつて狭量ではない。

同じジオン軍としてシャアの実績は素直に凄いと思う。特に俺とは違い、パイロットとして戦場を駆け、敵を撃滅するのは尊敬する。真似なんかできるはずもない。

ただし、一つ問題がある。

シャアは頭痛の種なんだ。

比喩表現じゃない。

本当に頭痛の種なんだ。シャアの近くにいると、俺はなんだかめま

いと頭痛がする。

最初は俺ももう年で持病でもあるのかと思った。しかし、不思議とシヤアの近くにいた時だけだ。

原因が分からない。いったいなぜだろう。

そして人間、頭痛がすると顔の表情もこわばってしまうもんだ。仕方ない。だから俺がシヤア嫌いだと誤解されてしまうんだ。

確かに、俺はシヤアに向かって、マスクを取れと言ったことはある。礼儀的に、人と話す時くらい仮面を取ってもいいだろ？ 単純にそれだけのことだ。

そうしたら奴は怒るといよりは、なぜか酷く狼狽していた。

ちよつと俺が悪かったと思った。

奴なりのなんか理由があつたのかもしれない。マスクを取っちゃいけないというような。

皆の期待に反してイケメンじゃない、とかさ。

戦果が凄いと人は勝手にカッコいいと想像しがちだからな。そうじゃなければ無駄にがっかりさせてしまう。それは嫌だろうな。うん、その可能性は高い。ふひひ。

とにかくそれ以降、俺はシヤアに避けられている感じがしている。

俺は嫌われることに対して気が小さいんだ。凹む。

ともあれ何事かと艦橋は騒然となっている。

「画面も出るのか？ 構わん、俺が出る」

内心、実は結構俺も緊張している。こんなに突然、俺にいったい何の用事があるのだろうか。薄々、救助したシヤリア・ブル大尉のことなんだろうと思いつながら画面に出る。

「シヤア・アズナブル大佐です。突然の連絡でお騒がせして申し訳ない」

言葉はもちろん上官に対する丁寧なものだ。当たり前だけどな！

しかし、軽く敬礼に上げた右手がキザたらしい。なんつーか指の角度がいちいちオサレなんだよ！

「コンスコン機動部隊、コンスコンだ。いったい何用かな？」

「一つのお願いです。そちらで救助したモビルアーマー乗員をこちらに移乗させて頂きたい」

「ん？ 別にそれに反対するわけではないが、こちらで收容した以上、負傷兵の移動は緊急処置後という原則を適用させてもらいたいが」

「ちよつとした事情のため、今回はその原則を曲げてはもらえませんか」

「……分かった。まあ要請は受けよう」

「やっぱヘタレだな、俺は！」

「突っぱねることはできない。」

「シヤアの言い方が強いんだ。反対できないような。俺のヘタレ度だけの問題じゃないぞ！」

「容態が安定したら直ぐに移乗させよう。しかし一つ聞きたいのだが、どうしてあのパイロットの救助を知っていたんだ」

「こちららも救助を考えていましたから。コンスコン准将の方が早かったです」

「え？ では、モビルアーマーが戦っているのを、最初から知っていたのか！」

「モビルアーマーのデータ収集が任務でしたから。戦いはもちろん見えています」

「な、なに？」

「向こうもモビルアーマーの戦いを見ていた？」

「そしてモビルアーマーが単機で苦戦していたのを援護もせず、見殺し同然に放置していたのか！」

「救助が遅かったのも、データ収集優先のためか！」

「もちろんシヤア大佐は命令通りのことを行っただけなのだろう。しかし、それはないんじゃないか！」

「シヤア・アズナブル大佐、こちらはドズル中将麾下の部隊であり、こちらはキシリア少将配下のはず。その横やりは本当なら上層部の話し合いになるところだぞ」

「俺は思わずシヤアに嫌味を言ってしまった。当然だろう。」

「コンスコン准将、お気持ちは充分理解できます。ただこれも任務の」

内なのです。私がそれほど冷酷な人間だと思わないで頂きたい。これは通常の作戦ではなく、データ優先はフラナガン機関の絶対事項なのです」

「フラナガン機関！ ああ、人体実験機関か！」

俺もそんな怪しい機関の噂は聞いている。なんでも、ちよつとばかり戦果の多い兵士を引つ張っていつては、何だか怪しい実験をする。そして戻ってこれる兵もいれば、戻ってこれない者もいるらしく、その場合なぜか軍籍まで抹消されて最初から存在しない人間扱いだそうだ。

噂は独り歩きして、サイボーグだとか、獣人だとか、脳だけ人間に変えられるとかとんでないことを言われている。

兵士の間では、戦場よりも嫌な妖怪屋敷だ。

戦争というのはもちろん人が殺し合うものだが、俺が思うに人間自体を変えてしまうのは別次元の残酷さだろう。そこまで行くと普通の戦争が可愛く思えてしまう。

俺は、戦いは「正しい戦い」でやるべきだと思っているのだ。

それが偽善と言われようとも。

そんなフラナガン機関にあのモビルアーマーが材料にされていたとは。シャリア・ブルという男はただの実験動物扱いか。

「集中治療室から艦内インターホン入ってます！」

「ん？ つなげ！」

オペレーターの声に我に返った。

それをさっそく流させる。

「集中治療室です。負傷兵、意識を回復しました！ 状況を問われるまま説明すると、司令官への伝言を頼まれました。自分は近くにいます。はずの所属艦に移乗したい、これはギレン閣下とキシリア閣下のためだ、とのことですよ」

何だって！

あのシャリア・ブルという男は自分がモルモット扱いされているのを知っているながら、それでも戻ろうとしているのか。死にかけてもな

お尽くそうとしているのか。

単なる従順でも自己犠牲でもない。

魂が高潔な男だ。

「コンスコン准将、そういうことです。本人の言う通り、移乗を願います」

「シャア・アズナブル大佐、これは貴官への貸しでいいのかな」

「そう受け取ってもらっても結構です」

男は医療用担架ごとカプセルに入れられ、艦を移される。

俺が見ていると、向こうは担架に横になっただけでそのまま敬礼をしてよこした。カプセル越しのため声は届かない。だが分かる。救助してくれた俺への感謝を述べているんだ。

そして男は、俺の横にいた副官を見て驚いた顔をした。表情が緩んで何かを言っている。

何だ、お前も一人前にやってるじゃないか、そんなことを言ったよ
うな気がした。

「……クソ立派過ぎんだよ。兄貴は昔から要領が悪いんだ。だから、こんな羽目になるんだ……」

そんなことを言う副官の顔を敢えて見ない。

俺はそのフラナガン機関とやらに明確な反感を持った。

そしてシャリア・ブルという男を取り戻したいと、そう思った。

第九話 ギャン

よほどシヤリア・ブルを強奪してやろうかと思った。

どうせ間もなくア・バオア・クーの戦いが始まることを知っている。その後、戦争はジオンの負けに終わり、指揮系統もクソもなくなる。軍としての体裁がなくなってしまう。ジオン軍は降伏するもの、行くあてのないもの、それでも連邦に抵抗するために潜伏するもの、バラバラだ。

今ここで俺がフラナガン機関と一悶着起こしても構わないのではないか。罰則食らう前にア・バオア・クーだ。

しかし、俺がそんなことをすればしめしがつかないのも事実だ。それにドズル中將にも迷惑がかかる。そのため自重した。

俺は多少むしゃくしゃしていたんだろう。

そのわずか三十分後に遭遇した艦隊戦をまるでうさ晴らしのように行った。

「テキサス・コロニーのベイ付近で、艦隊戦観測！」

「何？ 詳細精査、そしてモニターに強拡大！」

艦橋にオペレーターの声が響く。

テキサス・コロニーへ近づくと、明滅する光が見えてきた。これは艦同士の砲戦だ。

一方はジオン、チベ一隻とムサイ一隻だった。

そして相手はもちろん連邦だ。一隻だけだったが、何とマゼラン級戦艦じゃないか！

これはかなり無理な戦いだ。火力でも防御力でも敵う相手じゃない。

実際、チベもムサイも直撃をいくつも食らっていた。エネルギー伝達系統がやられたのか、撃てる砲も見るところ半分以下、足も止まっている。このままではあとわずかで爆散の運命だろう。

俺は直ちに戦いに加わる。

「連邦のマゼランめ、コンスコン機動部隊の戦いをじっくり味わうんだな！」

牽制をかけてジオン艦を逃がすだけにとどめる気は無かった。気が高ぶっていたせいか、マゼランを墜とすつもりだ。

もう作戦の骨子は決めている。

「今回は、MSに頼り過ぎず行くぞ。砲戦で決めてやる。フラナガン機関などという邪道ではない戦いを見せてやる」

「ええ、そうです司令！　そして作戦は？」

俺と同様、ノリノリの副官へ作戦を伝える。おいおい、副官というのは司令官が沈んでいれば励まし、浮かれていれば諫めるのが仕事なんだけど！

「あのマゼランの前方へ急行しろ。その後チベと、ムサイ五隻は左右に分離だ」

その通り、ムサイ五隻は固まり、チベと距離を置く。

「よし、ここからだ。全艦、マゼランとの距離を詰める！　MSも発進！」

「間もなくレッドゾーン、射程内です！」

「MSはマゼランに接近し過ぎなくていい。対空砲火に当たらないよう注意しろ。ただし間断なく撃ちかけ、主砲の管制を邪魔するんだ。それだけは頼む」

マゼランはこちらのドム隊をうっとおしく思いながらも砲撃戦に入ろうとした。対空砲火に注力せず、主砲を優先して使う気になった。確かに母艦を潰されればMSは無力化される。その判断自体は正しい。

同時に俺の方も動く。

「メガ粒子砲、発射！」

「コンスコン司令、まだレッドゾーン前ですが？」

「構わん、撃て。チャージが終わり次第もう一度撃て。派手にやれよ」

チベの砲撃はマゼランに当たらない。それは計算の内だ。

そしてマゼランはこのチベを最優先で片づけるべきと思ったのだろう、こつちに向けて主砲を撃ってきた。

チベの横を至近弾が通過する。

さすがに威力の高い戦艦の砲撃だ。

光の筋がチベを明るく照らし出す。艦橋の中まで光が差し込み、いつときオレンジに染め上げていく。窓枠の影が黒くくつきり描かれる。

一瞬後、シャツという音が聞こえる。さすがに戦艦のメガ粒子砲は強く、当たらなくとも撒き散らされる粒子がある。そのこぼれ粒子がチベの外壁を叩いた音だ。

「間合いがまだ遠いんだ。こつちが射程外で撃ったから向こうも焦ったんだろう。そして、やはり引つかかったな」

チベとムサイがいたら、誰でもチベが主役でムサイが陽動だと思うだろう。

火力でも防御力の点でも。普通はそうだ。

だがしかし、マゼランはこの場合考えるべきだった。ムサイ五隻が全く撃っていないことを。

「予定通りだ。ムサイは完全静止。スタビライジングかけろ。目標ピンポイント」

砲撃は艦が安定していればいるほど、精度が高くなる。

俺は今回の主役をムサイに決め、静止の命令を出している。その結果、砲撃予定精度が上がっていく。

その上で狙いはマゼラン機関部だ。ただ艦に当てるだけじゃない。場所まで絞り込む。

マゼランが陽動のチベの方を向いたおかげで、ムサイたちからすればマゼランは斜め横方向になるのだ。そのためにチベとムサイの距離を置いたのだから。

それはすなわち、艦後方の機関部まで見えてきて、そこをムサイが砲撃で狙えることを意味する。

「計算完了したか！」

「ムサイ全艦計算完了、誤差確率10%以下！」

「よし、ムサイ主砲、一斉砲撃三連、撃てー！ー！！」

ムサイ五隻の主砲が全てマゼラン後方の機関部に吸い込まれる。

よく揃った同時着弾だ。

普通にはマゼラン相手に大してダメージにならない軽巡ムサイの砲撃でも、多数が同じ個所に当たれば違う。そしてこれは重なっている。

一撃目でマゼラン機関部の外壁が吹っ飛ぶ。

二撃目でエンジン防護壁に穴が開く。

三撃目でエンジン直撃だ。

狙った通り、マゼランはエンジン誘爆で轟沈した。ただの残骸へと変わり果てる。

コンスコン機動部隊をなめるなよ！

そして俺の艦隊が救ったジオン艦から通信が来た。

「危ないところ応援、感謝します！　しかしお見事です。マゼランを討ち果たすとは」

「それはともかく、貴官らはなぜ逃走が遅れたのだ？」

「申し遅れました。我らはマ・クベ大佐麾下バロム分隊。テキサス・コロニー内に突入したマ・クベ大佐を待っていたところですよ」

「何？　マ・クベ大佐の？　大佐はどうしてテキサス・コロニー内へ突入を？　ここは連邦の木馬も近くにいるはずだ。危険だぞ」

「大佐はその木馬を討つため出撃したのです。ギャンに搭乗しコロニー内でまだ戦っておられます」

「え？　ええーっ！　マ・クベ大佐がMSで！！　ウソでしょ！」

ホントかよ!?

ギャンはただのMSだよ？

艦隊指揮官がMSに乗るっておかしいだろ！　しかもマ・クベ大佐は明らかにデスクワーク組だろうが！　横にいつもいる副官の方がまだマシだ。

壺より重い物持ったことあるのか？

いや、家に巨大な壺があるのかも知れないけどさ。考えたくないな！

無茶苦茶だよ！　そうは思ったが、マ・クベ大佐の意図もまた理解

した。

確かに指揮官がMSで戦うとなれば、兵士たちからの人気も支持も天井知らずに上がるだろう。ちょうどシャアのカリスマのように。

もちろん上官からの見る目も変わってくるに違いない。ああ、そうか、そのためか。上官といえはキシリア少将だから。マ・クベの無謀さに眉をひそめるかもしれないが、しかし、勇敢さだけは認めざるを得ない。マ・クベを男として評価するだろう。

「……仕方ない。マ・クベ大佐を救出に向かう。大佐はジオンにとつて有能な人間であることも確か、おまけにドズル中将の命もある。見殺しにもできん」

俺はMSの半数とムサイを割いて当座のバロム分隊の援護に就かせ、自分はチベでテキサス・コロニーのベイに入る。直ちに残りのMS隊を発進させ、コロニー内を探らせた。

「いいか、敵MSを発見しても絶対に交戦するな。絶対だぞ！」

俺は隊のMSを一人たりとも失いたくないんだ。そこだけは厳命した。

そして間もなくマ・クベ大佐と敵の白いMSを同時に発見することになる。

「こちらドム隊ツエーン、マ・クベ大佐のものと思われるギャンと連邦のMS発見しました。激しく交戦中！」

「映像送れ！ ツエーン、その場を動かすなよ！ 見つけれないように伏せておけ」

ツエーンのドムから送られてくる映像は多少乱れていたが、状況は分かった。

砂地の上で二機のMSが戦っている。

一方は例の白い化け物MSだが、もう一方はギャンだ。もちろんギャンの姿はジオンの新着データ上で知っていただけで、実機を見るのは初めてだ。ギャンは細身でスピード重視の機体に見えた。これにマ・クベ大佐が乗っているのか。

少し観察しただけだが、俺は驚くことになる。

マ・クベ大佐のギャンがそれなりに戦いになっているとは！ 白いMSと斬り合いになっている。凄いやないか大佐。不思議だ。

だが白いMSと対等という意味ではなく、一撃でやられないというだけだ。ギャンの盾も切り裂かれているようだ。このままでは撃破される。

「ガトー大尉は側にいるか！ 接近し、連邦の白いMSを抑えろ。マ・クベ大佐のギャンが撤退する契機を作れ。ただし、白いMSを牽制するだけで、仕留めようとは思わないよ。タイミングを見て逃げるんだ」俺はこつちのドムの中で、ずば抜けて技量の高いアナベル・ガトーを指名し、向かわせた。ギャンを助けるだけならできると期待してだ。

ギャンと白いMSの交戦にガトーが割って入る。

誤射の可能性のあるバズーカは使えず、ヒートサーベルを使う。白いMSは思わぬ敵に驚いたようだが、それでも向かってくる。常に全力、どんだけやる気なんだよ！

ガトーがなんとかいなししている間、辛うじてギャンが離脱することができた。思ったよりギャンのダメージは大きいようだ。ほうほうの体である。だが決してカツコ悪いとは思わないぞ、マ・クベ君。自分でMSに乗るなんてやるじゃないか。

後は頃合いを見てガトーが逃げるだけだ。さすがにアナベル・ガトー、善戦している。ただし勝てるわけではない。

ガトーもこの白いMSが尋常な相手でないことを短時間で理解した。反応速度が明らかに自分を上回っていることを知る。そういう技量の判断ができるところも実力の内、ガトーも並のパイロットとは別モノだ。

ただし、そこで思わぬハプニングが起こってしまった！

ツエーンが飛び出している。今なら、白いMSを倒せると踏んだのだろう。普通ならそう考えてもおかしくはない。相手が化け物でなければそれもいいだろう。

だが、この場合はダメなんだ!!

「ツエーン、戻れ！ 馬鹿、やめるんだ、ツエーン!!」
俺の声も空しく、そこで映像は終わった。
ツエーンのドムのメインカメラが破壊されたのだ。

第十話 逆になった

長過ぎると思われる時間の後、俺は報告を聞く。

「ガトー大尉、報告します。当機は左腕を落とされる中破、ツエーン隊長のドムはエンジン部破損を含む大破です。ツエーン隊長は負傷しましたが、しかし命に別条はありません」

良かった。本当に。ツエーンが助かれれば何でもいい。

「ドム隊は全機帰投せよ。収容が終わり次第、テキサス・コロニーを離脱する」

コロニーを出る直前、マ・クベ大佐から連絡を受ける。

「今回は世話になった。いや、なりました。コンスコン准将」

「マ・クベ大佐がMSに乗るとはびっくりした。少々見直したよ。しかもあの白いMSと戦うとは、凄いね」

「乗れたのは、ギャンのチューニングが合っていたのでしよう。元々操縦系の支援が充実しているのもギャンの良いところです。それはそうと、准将がバロム分隊を連邦のマゼランから救ってくれたのもありがたい。その後デラミン艦隊と合流し、木馬から逃げ切ることができました」

「そうか、それは良かった」

「デラミン艦隊がやられたら大ごとでした。あれには白磁の壺を置いてあったんです。宋時代の逸品ですよ」

え？ 何？ そこですかー!!

ま、まあ個人の趣味は仕方がない。けど何でいちいち戦場まで壺持って来てんの？

日に一度眺めていないと精神的にダメだとか？ どうせ実用に使わない壺なら置いてくればいいのに。

それともソースでも入れて使っているのか？

いやそこは絶対聞いちゃいけないんだろうな。

そういうマニアってどこがスイッチか分からないから。地雷を踏まないよう、気をつけて会話しないとんでもないことになるんだよ

な！

マ・クベの艦隊を見送ると、俺は次に負傷したツエーンの見舞いに行こうとする。

この時、俺はツエーンが軽傷とも重傷ともつかない状況なのは聞いていた。

廊下を歩き、処置室にあと一步で入るところで、ツエーンのでかい声を聞いた。

「そりゃあんたに感謝しているわ！ 助けてくれたんだもの。お礼は言わなくちゃね。だけど、良かったなんて軽々しく言われたくない！」

な、何？ 何が起こってる？

あ、俺がツエーンに良かったという前にこれ聞いてて助かった。しかし話の相手は誰だ？

「……命があつたのは、良かったことじゃないか。違うか。死んでいればここで声を出すこともできない」

「だけど、だけど私は指を二本喪ってしまった。私が馬鹿だった。身の程もわきまえず突出したなんて」

「戦場では指でも手でも足でも喪うものはいくらでもいる。いや、誰でも何かしらは喪う、それが戦場だ。負傷は恥ずかしいことではなく、残った体を褒めてやれ。それまで時間がかかるなら、気持ちが収まるまで俺に叫ぶのはいい。だが、自分には向けるな」

「利いた風なことを！」

「それと酷なようだが、隊のみんなには笑ってやれ。お前のことを心から心配しているんだ。それが、部隊長の取るべき態度だ」

「……分かってる」

「だけどね、指を喪ったことは変わらないのよ！ それはもうどうにもならないこと。騒いでも、騒がなくなるとも一緒。私は隊長としても、女としても半端モノになったんだわ！」

「だったら騒ぐな。責任なら、俺が取ってやる」

ちよ、ちよつと待ってよ、ガトーさん!!

それ絶対誤解する言い方だから！

第三者の俺が聞く分には、ドム隊の挙げるべき戦果をツエーンの方まで挙げてやる、そういう意味なんだろう。でもツエーンの受け取り方は違うと思うぞ。絶対バツクに花が咲いているシーンだから。

俺が言っても、悲しいことに誤解なんかされないだろう。しかし、ガトーさんはクツソイケメンなんだよ。だから言い方にも気をつけるべきだ。

案の定、ツエーンは黙ってしまったじゃないか。

俺は処置室には入らず、艦橋に戻った。なんか寂しいな。俺が部外者みたいだよ！

「コンスコン司令、発進準備整いました。今後の進路は？」

そう副官が聞いてきた。

気持ちを切り替えないといけないな。

実のところ、俺は進路を決めかねていたんだ。早めにア・バオア・クーに向かい、ドズル中将に合流を果たすか。

それともサイド6に存在する怪しい組織、フラナガン機関に向かうか。

俺は戦争の大まかな流れは知っている。ただし、正確な日付は知らない。ア・バオア・クーの戦いの日付が分からない。ついでに言えば個々人の動きも分からない。俺が見たものは、リアルな情景というよりは人の意志の流れ、その集合体というものが主だったんだ。

一つ言えることは、木馬のことはもうどうでもいい。

マ・クベも助かったし、それで充分じゃないか。

ただここで、俺は知らなかったんだ。

俺の方ではよくても、木馬の方ではそうでなかったのだ。

木馬の方が連邦司令部から命令を受けていた。

しばらく前から連邦はコンスコン機動部隊のことを話題にしていた。

異常な戦果を挙げていれば嫌でも目に付く。

戦えば必ず勝つ、常勝不敗の艦隊として。

この部隊を探り、可能なら早期撃滅すること、これが木馬が受けた新たな任務だった。

しかもやる気になる因縁がある。

コンスコン機動部隊がテキサス・コロニー入港前に撃破したマゼラン、そこに木馬ゆかりの人物、ワツケイン司令とやらが乗っていた。そんなの知らないよ。

結果的に、木馬が逆に俺の艦隊を追ってくるなんて！

想像もしていなかった。

ただし俺の方を追尾していたとしても、俺の方が先に木馬を発見してしまった。

この場所はサイド2付近のコレヒドール岩礁地帯という。

進路を決めかねていた俺がこんなところにいるのは理由がある。

来たるア・バオア・クーでの戦いに向け、ジオンのはぐれ艦を一隻でも多く収拾しようと思いついたからだ。

戦争も末期、混乱はジオン全軍に及んでいる。

地球上のジャブローやオデッサが主戦場だったのに、ジオンはあつという間に反攻を受け、宇宙で激しく戦うことになってしまった。ルナツーに潜んでいたティアンム將軍、ジャブローから上がってきたレビル將軍が一気に仕掛けてきたからだ。

結果、あちこちで戦線が錯綜した。突如の艦隊戦で指揮官が先にやられ、逃げ出すのが精いっぱいの小艦隊が多い。宇宙は広く、逃げおせて気付いたら指揮系統から外れている、そんな場合だ。

そういう艦は、確実にジオンの拠点があるグラナダなどを目指すべきだが、途中に危険も大きい。補給を求めてさまよう、又は安全のため取りあえず連邦から隠れる、を選ぶこともある。

そして宇宙にとりどころ設置されている岩礁地帯は隠れるのに適している。

先のサイド5での岩礁でも、探索した結果、俺ははぐれ艦のムサイを二隻見つけて加えているのだ。

だからそんなことを思いついた。

小惑星ペズンにも近いコレヒドール岩礁は最大の岩礁地帯、はぐれ艦がいる可能性は大いにある。

そして、はぐれ艦を接收する根拠を俺は持っている。

ソロモンを出航する際、ドズル中将から二つの訓示を受けていたんだ。

「コンスコン、今回の貴様の武勲で少将へ昇進の内示を出したぞ。俺の権限でな。正式には本国に帰って兄者から叙任されることになるだろう。それともう一つ、直ぐに貴様のために大部隊を用意してやれないのを俺も残念に思っている。そこでだ、明確な指揮下や作戦行動中不在艦、つまりはぐれ艦を接收する許可証も出そう。ジオンの戦線が乱れている今、そういう艦は多い」

昇進については素直に嬉しい。

だがこれで最後なんだろうな、と思う。少将といえば、キシリア閣下と同じだ。階級の上では。

もちろんザビ家のキシリア閣下と俺では価値が千倍も違うと自他に思うだろう。けれど軍の階級で同じというのも凄い。ただしこの先、俺がそれを抜いて中将昇進はありえない。

話は戻るが、はぐれ艦の接收について、俺はこうしてドズル中将からお墨付きをもらっているんだ。

ともあれコレヒドール岩礁地帯に俺はやってきた。そこで先に木馬を発見できたのは、またしても木馬の方が交戦していたからだ。

もう木馬、戦ってばっかりだな！

今度も妙なことがある。

木馬の相手は、見たこともないモビルアーマーだったんだ。

俺が言うのもなんだがジオンも変なものばかり作りすぎる。今度のはとんがり帽子の形をしているじゃないか。どういう合理性でそんな形になっているのか、意味が分からない。体当たりするわけでもないだろうに突っついていても仕方ない。どんどんジオンのデザイン力

は悪化しているのではないか？

「何だあれは。シャリア・ブル大尉の乗っていたものとも違うな。武装はまた砲台を操っているのか……」

当然のごとく木馬から白いMSが発進して応戦している。

奴ばっかり皆勤賞だな！

いくつもの細かい砲台が動き回り、その白いMSを狙ってビームを放っている。

観察し、気付いた。

「おい、よく見ると砲台はリモコンですらないぞ。線がない！ どうやって動かしてるんだ！」

「そ、そうです。こんなミノフスキー粒子の濃い中、電波が通るはずは……」

現実、目まぐるしく砲台は動いている。

ビームで黄色の線が宇宙に描かれる。白いMSがビームを躲していくことには驚きもしない。化け物は化け物だ。

第十一話 呑めない用件

戦いの様子を伺う。木馬と白いMSへ闇雲に挑めるもんじやない。しかし、ほうつておいたら撃破されるジオンのモビルアーマーを助きたい。

「今回はモビルアーマー単機の出撃じゃないようだ。ドムも何機かついているな。しかし、何の足しにもならんだろう。間違いないかあのモビルアーマーはフラナガン機関のものだろうが、パイロットを何だと思ってるんだ。人形か実験動物か。どうしてあの白いMSに当てようとはかりするんだ！」

「コンスコン司令、では、とにかくモビルアーマーを援護ですね。また牽制の砲撃をかけますか？」

「それもいいが、今回はMSを出す。とはいっても決して戦うためじゃない。木馬へ慎重に近づき、エンジン部へバズーカを撃たせる。徹底した陽動だ」

俺も少しは学習したんだ。

あの白いMSは帰属意識が異常に強い。

戦いを見れば分かるが、白いMSは木馬からあまり遠くに離れることがない。普通、MSは母艦以外の味方艦にたどり着く可能性も考慮に入れ、行動距離をとるものだ。しかしあの白いMSは必ず木馬を守る位置にしかない。

つまり、不思議なことにあのMSは木馬以外の艦に拾われることは全く考えてもいないんだ。

俺は岩礁を利用してこっそりドム隊を行かせ、木馬を攻撃させた。するとやはり白いMSは攻撃目標を変えて、こっちのドム隊に向かってくる。後は全力で後退させるだけだ。きちんと見切つて計算していたつもりでも冷や汗をかくことになってしまった。あの白いMS、また一段と速度が上がってないか？

もう既視感のある二度目のパターンだが、俺はモビルアーマーを救うことになった。護衛のドムは哀れにも全機撃破されたようだが、モ

ビルアーマーはまだ無事だった。補助ノズルしか使えない状況ではあったが、爆散はしていない。

白いMSは手の付けられない化け物だが、たった一機しかいないわけで、同時に二ヶ所にいることはできない。そこが付け目、釣りだせばこっちの救出は可能になる。

モビルアーマーをチベに收容し、俺も格納庫までそれを見に行く。いったいどんなパイロットだ？

ハッチを開けて元氣よく出てきたのは、大柄な女だった。

二十代も後半だろうか。

伸ばしたくせつ毛を撥ねながら、ノーマルスーツのヘルメットを外す。

床に飛び降りてきた。

体の軸はぶれず、ふわりと着地した。宇宙での動きが身についていると思わせる。

「私はクスコ・アル。收容を感謝する。ところでガンダムはどうなった？ アムロは？」

俺は戸惑うことばかりだ。モビルアーマーのパイロットが意外な美女だったこともそうだ。てつきりシャリア・ブルのような渋い中年男だとばかり思っていた。

そして聞き慣れない単語がある。

「私がこの艦隊の司令官、コンスコンだ。君はフラナガン機関所属のパイロットだな。こちらが聞きたいが、ガンダムとはあの白いMSのことか？ そしてアムロとは？」

「あ、司令官！ フラナガン機関の特務に就いていますクスコ・アルです。そう、ガンダムがあのだ。連邦MS試作機の名前、そしてパイロットはアムロ・レイ。精神感應ではつきりそう感じました」

「そのMSならこちらの陽動に乗った後、もう母艦の木馬に戻っている。しかし、何だと！ 精神感應？ まさか、フラナガン機関の妄想が本当だったということか……」

これもまた予想外である。

フラナガン機関の与太話も少しは根拠があつたということだろうか。

ならば、このクスコ・アルの処遇を含めてもう一度検討しなくてはならないだろう。

「君を収容した以上、フラナガン機関からすぐにも何か言ってくるだろう。充分な護衛もつけず戦わせ、実験動物扱いにしているフラナガン機関に対してこちらも良い感情を持っていないが、もちろん君が戻るのが筋であるからには希望はかなえる。そのために意見を聞いておきたい」

「できるなら、戻りたくありません！ あそこは人の革新を兵器に使うとする悪魔の巣です。兵器になるために人は変わるんじゃないやありません」

「ん？ 君の言うのはひよつとして、人の革新、かのジオン・ズム・ダイクンが語っていたことか。ともあれ君の意志は聞いた。このコンスコン機動部隊が君を守ろう」

「え、この艦隊が……」

クスコ・アルは思いがけない言葉に驚いたようだが、表情を緩ませながら敬礼してきた。

とつさに感謝を述べたり、しなだれたりはできないのだろう。

不器用な女だ。ちよつと可愛いぞ。

しかし俺もちよつとカッコつけ過ぎて安請け合いしちゃったか？

そういうとこ要領が悪いというか後先考えてない。

ああ、心臓に悪い。

フラナガン機関とどう交渉したらいいんだよ。

思ったより時間が経ってからフラナガン機関が接触してきた。

チベに乗ってやってきたのは、何と機関のトップ、フラナガン・ロム、その人だった。俺のチベの近くに停泊し、連絡をつけてきた。

俺は、この会談がクスコ・アルのことも含め今後の艦隊の行動に影響があるものと判断した。

そのため、艦橋のみならず、MS格納庫や乗員待機室まで会談が聞こえるように手配した。その後の説明の手間を省き、誤解を生まない

ためだ。

「キシリア少将所属特務機関を統括しておりますフラナガン・ロムです。軍の階級ではなくドクターとお呼び下さい」

最初は向こうの挨拶で始まったが、いきなり驚かされた。何だって機関の長がここに出てきているんだ？

「この艦隊を率いているコンスコンだ。ではフラナガン博士、とお呼びする」

「驚かれるのも無理はないですな。私だつて軍艦に乗るのは久しぶりなのです。フラナガン機関はサイド6にあったわけですが、サイド6の中立化に伴って居づらくなってしまいました。少し前にペズンに移転したので、ここからさほど遠くありません」

「……それはともかく、用件は承知しているつもりだ。こちらに収容したモビルアーマーのパイロットについてだろう」

ここからが正念場だ。考えろ、俺。

「おお、コンスコン准将、話が早い。一つ目の用件は正にそうです。こちらにいるクスコ・アルを引き取りたい。その者はニュータイプの可能性がある有力な被検体でしてな。こちらで管理しておるのです」

「被検体？　あまり気持ちのいい言葉ではないな。しかしそんな大事な者をよく危険な戦闘に駆り出すものだ」

「ようやく素質が明らかになったからこそ使ってみなくては。おそろく連邦のMSパイロットもニュータイプ、それと感応してより一段高いステージに行ったことでしょう。連れ帰って計測するのが待ちきれないほど楽しみです」

俺はこの学者を誤解していた。

最初は真っ白の白衣と柔らかい微笑みから、まっとうな研究者かと思っていた。しかしそれは違う。自分の知的欲求が全てに優先して、それが当たり前だと信じているクソだ。

「フラナガン博士、単刀直入に言おう。その希望には沿えない。非常に残念だが彼女はこちらで保護したい。軍命令上、多少逸脱しているのは承知している。だがしかし、そちらがキシリア少将所属とは言っ

ても、実のところ私も少将の内示を頂いている身だ。簡単にうなずかなくてもいい地位に立っていると思うが」

自分でも権限をひけらかしてしまった。偉そうだ。艦内に会話を流しているのを少し後悔する。ちよつと恥ずかしいが、この場合仕方ないんだよ！

「そうですか。逆にこちらにはキシリア閣下の直接命令による権限があるのですが。しかし、それでは仕方ないですな。では取引というわけではありませんが、他の用件と交換ならよろしいでしょう」

「ん？ 他の用件？ それはいつたい何だろう。思い至らないが」

「それはコンスコン司令、あなたご自身です。色々な点から検討した結果、あなたにもニュータイプの素質がある可能性が高い」

「えー！ ツーッ!! そんな、馬鹿な！」

「どうかフラナガン機関にて精密な調査と検証を」

「ちよつと待て！」

待て待て待て待て、んなことあるか！ 俺は普通人だってばよ！

混乱するにも程がある。何にも変な能力ないよ！ あればもつと苦労してないって。

「そして最後、三つ目の用件もどうかお聞き入れ下さればと」

「なに、まだ何かあるのか！」

「そちらの艦隊の持つドム隊に、ツエーンという者がおりますな。彼女にもニュータイプの素質があるようでして。こちらで引き取りたい」

「な、なに、ツエーンを？ しかし、どうしてそんな」

「テキサス・コロニーでの戦いの詳細を見ると、確かに素質を感じます」

意外なことばかり怒涛のごとく続き、俺はめちやくちや混乱してきた。

何だって？

フラナガン博士は何と言った？

今、テキサス・コロニーの戦いと言ったのか、それを見たとき撮影していた者がいるのか。

シヤアか！

そうか、あいつがいたのかもしれない。

「しかし、ツエーンは有能なパイロットだが、その戦いではなすすべもなく連邦のMSに敗れている。ガトーに守られてようやく帰還できたくらいだ。それでも素質を認めたといいのはおかしいだろう」

「いいえ、自信を持って言いますが、こちらの解析では素質が出ています。実際の戦闘で力を発揮できないのは、おそらく肉体的な限界のためでしょう。MSの操縦に手いっぱい、そんな過負荷のためにせっかくの能力が隠されてしまうのです。しかし、モビルアーマーのパイロットにすれば能力が活かされる可能性が高い」

それだけなら、なるほど、と思ったかもしれない。

しかし次の会話で俺は思いつきりブチ切れることになる。

「……残念なことをお伝えする。実はツエーンはその戦いで負傷してしまった。指を二本喪っている。本人も精神的に打撃が大きい。少しばかりパイロットは先送りだ」

「指をなくした！ 指をなくしたと！ おお、それは嬉しい！ それこそ好都合!!」

「な、何を言っているんだ貴様！ ツエーンの負傷で何を喜ぶ！」

「実はフラナガン機関では機械との神経接続も試しておりましてな。それはもう凄い成果！ 先日もダリル・ローレンツなる者の手足を切り落として接続したら、予測の通り！ お見せしたかったですな。戦闘力が軽く160%もアップしたとは。コンスコン司令も興味があるのでは？ 一般の兵でも手足を落とせばエース級のパイロット、実に効率的に能力を上げられる方法ですぞ」

俺は言葉を失った。

人間を何だと思っている。

「失った指の神経を使つての接続、ニュータイプの素質と機械支援の足し算、いや掛け算。これは凄い！ どのくらい戦闘値が上がる？

ふはははは、これは面白い！ 実に興味がある」

「黙れッ！ 貴様ー！！ ツエーンの薬指はな、結婚指輪をつける指なんだッ！ 機械なんかにつないで戦闘に使うもんじやないんだ

！」

ツエーンを渡す？

そんなこと断固許してなるものか。

ツエーンは俺に対してむちゃくちゃ口が悪いが、純な女なんだ。

真つすぐに育ってきた。

こんな奴のモルモットにしていいような人間じゃない。

「ツエーンは、花嫁になって、その指に指輪を通してもらうはずだったんだぞ!!」

俺は通信を切らせた。これ以上冷静に話せる自信がないからだ。

向こうは向こうで話が通じる相手じゃないと分かっただろう。

一息つくどと気付いた。

艦橋に人が多い。

あれ、特にMSのパイロットがここにいるような気が……

第十二話 間違い

皆は、何も言わずに俺を見ている。

どう表現したらいい空気なんだろう。

「お、みんないたのか。はは、ごきげんよう」

よくわからない挨拶をしてみた。

咄嗟に言葉を出せたのは年の功とやらだが、本当は何を言ったらいいかわからない。

フラナガン機関の要請は全て拒否し、話し合いは決裂した。俺は軍の指揮系統上、微妙な立場になってしまいうのは避けられない。しかし、俺がフラナガン機関で検査を受けることはともかく、クスコ・アルやツエーンを渡すことはできないのだ！

「しかし、なぜ艦橋に上がってきた？ 許可はしていないはずだが」

「聞いていました！ 司令、どうして、そこまで！」

「ん？ ツエーン、何か不思議か？」

「フラナガン機関へ私が行かなかったら、立場が…… どうせいくらでも替えの利くパイロット一人なんかのために」

「替えが利く？ 冗談でもそんなことは言うな。お前はこのコンスコン機動部隊のパイロットだ。これまでもそうだったし、これからもずっとだ。違うか」

「…… でも、私は、みんなに迷惑ばかりで……」

ツエーンは俯いて小さくなっている。らしくない姿だ。自分がいなければいいと思っているのか。

そこへ声を出してきた者がいる。

「か、感動しました!! 司令官！ これほどMSパイロットを大事にしておられるとは。やはりコンスコン司令は尊敬すべき方です！」

目をキラキラさせてるよガトー君。

チヨロイン粹だけど感動してくれたのは嬉しい。

そして空気が掴めてないとこがまた素晴らしいよ。

「司令官と艦隊のため、このガトー、粉骨砕身、働く所存であります！」

あれ、それはいいけどガトー君はどうしてここに？ 君の所属はチベリヤなくムサイのドムだったはずだが。

まあ、チベリヤは横幅が広く、スリムな連邦のサラミスなどよりは収容能力が高い。そのためジオンは、連邦の木馬のような強襲揚陸艦を別に設定していることがないくらいだ。確かチベリヤは最大十八機収容できる。ガトー君もこちらに来ていたか？

「ドム隊副隊長カヤハワ、以下十名。ツエーン隊長とこれからも隊を構成いたしたく思っております！」

お、カヤハワも声が大きいぞ。いつもそれくらいの大声が出せればいいな。

だが、それでもツエーンは俯いている。

目には涙があるのだろう。

そのまま見ているは可哀想だ。

ここは俺が、湿っぽい雰囲気は何とかしてやらなくてはな！

「せっかくの隊長をフラナガン機関などへはやらない。ただそれだけの話だ。指を少し失くし、胸は全部失くしたようだが、うちの隊長はツエーンだ」

ツエーンは最上級の美人であり、髪も声もいい。手足もスラリと伸びている。

だがしかし！ 目立つことがある。いや、目立たないことと言った方がいいか。

胸が絶望的なまでに無い！

それなりのポリウムを保持しているカヤハワの隣にいると男みたいだ。むろん、本人もずっと気にしているに決まっている。

そこを言えば、反応があるはずだ。

顔をばつと上げてきた。

「…… やっぱ殺すわ」

怖えよ！ 反応し過ぎだよ。

「みんな、また一緒にやるわ。今度出撃したらジャイアント・バズが手違いでチベリヤの艦橋に直撃したりするかもだけど、頑張るわよ！」

お願いします。その説明臭い具体案やめて下さい。

てかどういいう手違いだよ！

俺はツエーンを怒らせてびびっていたが、実はそれは違っていたんだ。

俺は気付かなかったが、ツエーンも皆も俺の気持ちを分らないはずはなかった。だからこそ、そんな下らない景気づけに乗せられたフリをした。俺には明るい顔を見せるために。

「こっつて、なんか、凄いのね」

目を丸くしてクスコ・アルが言う。

彼女なりに感じるものがあるのだろう。

ただし問題は直近にある。フラナガン機関との悶着をどうするか。

俺は本当に正直に言う。

「俺の考えを言う。これからフラナガン機関を急襲する。非人道的な機関をこのままにしてはおけない。将来明らかになった時、必ずジオンの汚点になるはずだ」

俺だけにとどまる問題ではないため、話しておく必要がある。

「むろん、体裁としてはこうだ。ちよつとした通信機の故障と観測機の不具合が偶然にも重なってしまう。小惑星ペズンにおいて、この艦隊は連邦と味方を誤認してしまった、という実に痛ましい事件を引き起こす。結果的に、とある施設が半壊し、中にいた人間が自由意思を行使できるようになったというとても不幸な事故になる」

誰かがうぶぶ、あはは、という声を出す。

「だが、そんな事故は軍の規約上、あつてはならない。そこで皆に言うておきたい。当座、勤務したくない者はしなくていい。自室待機していい。何もしてない、何も知らないで構わない」

これに対し、誰も彼もが聞いちゃいない。

目を輝かせ、闘志に溢れている。

「全艦発進用意！ 第一級戦闘配備！」

ん？ 俺じゃないぞ。

副官がそう告げている。

熱い、熱いぜ副官。わかってるな！
皆が持ち場に駆けていく。

結果だけ言うと、作戦は成功した。しかしなかなか難しかった。
ただ攻撃すればいいのではなくて、救出だからだ。

しかもこちらに犠牲を出さず、おまけにフラナガン機関の方にも死者を出すことはしたくない。

勤めている科学者どもは常軌を逸しているとはいえ、純粹で、有能な連中なんだ。方向さえ誤らなければ皆を幸福にする研究だってできる。ついでに言えば現時点で犯罪者ではない。

かなり無理のある作戦だが、一つ助かったことがある。最も問題である、救出したい人間の居場所が分かったことだ。普通は逃げられない深部に隠されているものだが。

それにはこの人物が大いに役立った。

「クスコ・アル！ 施設のどこに閉じ込められた人間がいるか分かるか！」

「ええと、接近すれば、感応力のある人間の集団なら分かります！」

「よし、それをできる限り細かく指示するんだ」

何とか解放に成功した。

念願のシヤリア・ブルもこちらに取り戻した。

本人は、最初やはりフラナガン機関で、そのまま殉ずる思いでいたようだ。しかし、無駄死にするのでなく、ドズル閣下の元へ参加して戦い続けることこそ、ジオンのためになると話すと分かってくれた。

俺も別に方便で言うのではない。それこそがスペースノイドのためだと本当に信じているからだ。ドズル中将こそ信頼するに足りる上司であり、その下で戦うべきだ。連邦に負ければスペースノイドが暗黒の時代に入ってしまう。

シヤリア・ブルは最後しつかりした瞳を俺に向けてくれた。これもやはり漢だ。

それ以外にも、こちらの艦隊に勤務したい兵士は歓迎した。すると大部分はこの艦隊に残ってくれた。非常にありがたい。もう慢性的

に人が足りないんだ。

フラナガン博士の言っていたダリル・ローレンツも収容している。ついでにお付きの女性医師まで一緒だ。フラナガン博士に隠してこっそり保存してあった腕をつなげられる可能性がある、という話だった。そうでなくても神経接続技術を良い方向に使い、将来は動かせる義手義足を作ってあげられるらしい。

俺もダリル・ローレンツをちらつと見たが、とても優しい男だった。是非ともそうしてあげてほしい。

しかし、当然ながら元の所属に帰りたい者もいる。俺はムサイを一隻与え、解放と引き換えに、やはり施設に閉じ込められていた年端もいかない少年少女たちをズム・シテイに送り届ける役を与えた。

俺はそういった可哀想な子供たちを見ようかと思った。

しかし、途中でやめている。なぜか強烈に頭痛がしてきたせいだ。遠目に、珍しいピンクの髪の子などを見るだけに留める。

最後にフラナガン機関施設のライフラインまで壊れていないことを確認し、脱出用のムサイも残した。それはフラナガン博士を含む科学者たちや衛兵のためを考えてのことだ。

それ以外はもらっちゃったけどな！

さて、またしてもはぐれ艦を接收しやすいコースを考えながらも、基本はもう帰路についている。ア・バオア・クーに向かっていく。ただし一つの事件が起きた。

やはり俺はキシリア閣下の機嫌を損ねてしまったようだ。

「前方より艦隊接近！ 友軍です。艦数、約十隻。詳細確認……え？で、できません！ 通信拒否されました」

「どういうことだ！ ジオンなのに、なぜ所属すら確認できない」

「コード開示も拒否！ ただし艦型照合は出ました！ 旗艦ザンジバル級キマイラ、あれはキシリア少将麾下選抜攻撃隊、通称キマイラ！」
「そのキマイラ隊がここに…… いったい何の用事だ」

「キマイラ、尚も向かってきます！ あ、MS発進開始しました！ 数、三十から三十五機。当艦隊に展開！」

「MSまで？ な、なぜそんな。まさか、この艦隊に敵対行動をとる気か！」

いつもは先手を取って主導権を握る俺が対応を誤った。まさか、艦隊を使ってまで意趣返しをされるとは思ってもみなかったのだ。ソロモンを失って危急存亡のジオンなのに、そんな余裕があるものか。いや、そういう時だから狂気も発生するのもかもしれない。

戦いは数、そういう正論を言うドズル中将对して、キシリア少将は少数精鋭主義をとるところがある。シャアを寵愛したり、ニュータイプに望みをかけたりする。そして艦隊でも精鋭艦隊をいくつか作って手足のように動かすのを好む。

今、このキマイラ艦隊を使って俺を叩きに来たのか。

しかも、クソツタレなことに俺の艦隊が砲撃戦が得意なことを学習しているらしい。砲戦の間合いを取ることもなく、最初からMSで仕掛けてくるとは！

しかも散兵陣だ。

こちらのMSの数が少ないことを見越して広く展開している。距離を取ったMSを個々に相手取るしか方法がなくなる。つまりこちらのMSの技量が高くとも、防ぎきることはできない。艦の対空砲火の網をどこかは破られて接近される方が先だ。

相手の指揮官は忌々しいほど有能な奴だった。

畳みかけるように嫌な情報が入ってきた。向こうのMSの大半はドムではなく、数段性能の高いゲルググが配備されている！

ジオンの工場は本国と月面に集中しているのだが、グラナダのキシリア少将は、やっぱり良い機体を自分のところに囲い込み、ドズル中将には言い訳しながら型遅れしか回してなかったんだ。

俺は痛恨の遅れをとってしまった。

第十三話 苦戦

戦いは苦しくなる予感がする。

不利な条件が重なり過ぎた。

俺の艦隊ははぐれ艦を接収し続け、主にムサイを増やしている。フナガン機関からチベを奪えたのも幸運だ。

全体陣容はチベ二隻、ムサイ九隻、ガガウル五隻になっている。もう大隊とっていい規模だ。

それに対して向こうのキマイラ隊は旗艦ザンジバル一隻、チベ二隻、ムサイ六隻からなる。砲撃戦能力なら大差はない。小型の駆逐艦ガガウルは置いておくとしても、ムサイの数でも上だ。俺の得意な砲撃戦なら勝てる。

ところが今回は砲撃戦にはならない。

最初から敵だと認識していればなんとかしたろうに。

この艦隊にとって最も悪い形。アウトレンジからのMS戦になってしまった。

そして今のところ俺の艦隊はMS戦に弱点を抱えている。

数が少ない。

追加できたはぐれ艦は敗戦を逃げのびた艦であり、既にMSを失っている場合がほとんどだからだ。

こちらのMS戦力はドムばかり十九機しかない。木馬追撃のために、ドズル閣下からザクをドムに変えてもらってはいるが、数としてはそんなものだ。

そして最新鋭機のゲルググなど持っていない。

ゲルググはデータベース上のスペックしか知らないが、ドムよりよほど洗練されたMSだ。武装もバラエティに富み、最大速度も速い。そして何より素早い動きができる。遠距離射撃も格闘戦も万能だ。

連邦からスカート付きと揶揄された大気圏用MSのドムを宇宙に上げたのと違い、ゲルググは最初の設計から宇宙戦用、モノが違うのだ。

そんなゲルググを向こうは見えているだけで三十機も展開しているんだ。

こちらの期待する追加戦力であるシャリア・ブルもまたブラウ・ブルというモビルアーマーが無い以上、ドムで出るしかなくなっている。しかもシャリア・ブルは宇宙に長くいたとはいえ元々MS乗りではなく、艦艇乗員だったのだ。MSパイロットとしては初心者にも毛が生えた程度である。とうてい本来の能力は出せず、戦闘ではせいぜい並よりマシのドムにしかない。それでも凄いのだが。

クスコ・アルに至っては乗れるものすらない。

自分のエルメスはガンダムと戦い大破している。そしてフラナガン機関からせつかく押収してきたエルメスは使えないと判明した。

それはパイロットの生体的特徴へ非常に精密にチューニングしないとどうにも稼働できないからだ。無理をすればパイロットが耐えられない。そしてビットと呼ばれる移動砲台を操れなければ、エルメスはただの乗り物だ。何もできない。

簡単に考え過ぎていた。

やはりフラナガン機関の科学者たちは性格がおかしくても能力においては非凡だったのだ。

「やむを得ん。艦隊は密集隊形をとれ！ 対空砲火を多重に重ねることとで防御を強化、なんとか支えるしかない。MSも直ちに全機発進！ そのうち半数は紡錘陣を取り、真つすぐ向こうの艦隊へ向かえ。そして早いところ一隻でも二隻でも損害を与えてくれ。向こうに同士討ちの愚を悟らせるんだ。それで話し合いに持ち込みたい」

俺は考えられる最適解を命じる。

ただし、おそらく読まれているな、と感じながら。

向こうはMSの動きを一瞥するだけでも相当の手練れだ。戦い慣れている。作戦能力も高いレベルにある。

「半数はごっつちの艦隊の直掩に回す。敵は数も多く、それにゲルググだ。細かい牽制を仕掛け、不用意に近づいたりするんじゃない。決し

て格闘戦はするな。そうなれば終わりだ。悔しいが、間合いに入ればドムで勝てるような相手じゃない」

敵？ 思わず俺は敵と言ってしまったか。いいや敵ではない。ゲルググも同じジオン軍だ。

敵は連邦だ。

ここで内輪揉めなんかしてる場合じゃない。だがしかし、これは戦いだ。

俺もみんなも、こんなところで消滅するわけにはいかないんだよ！

「とてもMSの全部を相手取るのは無理だ。唯一取れる戦術としては、向こうの隊長機を見つけ出し、それを排除することで艦隊に近寄らせるな！ この艦隊の運命はそれで決まる」

ここで俺は切れる札を切るしかない！

「その役目はガトーに任せるッ！ 頼む、お前にしかできないッ!!」

そして、尋常でない勢いでガトーが発進していく。

向こうの隊長機を見つけること自体は造作もないことだ。

ゲルググの一機だけが赤くカラーリングされ、しかも先頭に立っていたのだ。

そこへ美しい曲線を描いてガトーが迫る。

ノズルから光の粒子を散らし、鮮やかな軌跡を見せている。

「む、ドムの単機で何ができる。しかもこの俺に向かって来るとは、馬鹿めが。そんなに早く死にたいかッ」

「それは貴様だ！ コンスコン閣下の艦隊に手を出した罪、どこまでも悔いて散れ！」

「……なるほど、ジオン機同士だ。通信ができるのか。おそらくお前は隊長機を潰せばなんとかなるとでも思ったのだろう。浅はかな考えだ。俺を相手にするより、俺以外の全部を相手にした方がまだマシだと知れッ！」

「たいがいの奴は死ぬ前に大きな口を叩くものだ。貴様もそうだな」
「何ッ！ その言葉そっくり返してやる！ 冥土の土産に知ってお

け。地獄で自慢話ができる。この俺こそが真紅の稲妻だッ」

「無駄口だ。こちらは名乗らん。どうせ死ぬ奴に覚えてもらって意味があるものか！」

「戯れ言を!! 俺と戦っていいのはシヤアかシン・マツナガだけだッ」
ガトーはゲルググのビーム・ライフルを躲し、死角に入ろうとする。そして横合いから格闘戦の間合いに入った。避け続けるならともかく、斃すならそうするしかない。

相手のゲルググは自信があるのか、本当なら持っているはずのシールドを装備していない。ビームライフルも捨て、代わりに両腕型のビームソードを振るう。格闘戦で必殺の攻撃だ。強い!

ガトーのドムもヒートサーベルを使うが、向こうのビームソードをそれで受けることはできない。武器の質の差が響く。

「失せろ! 名も無いドムのくせに! 俺こそシヤア以上、ジオンで一番のパイロットだ!」

「そっちがゲルググなのは俺からのちよつとしたハンデと思え! 直ぐにもつとハンデが欲しくなる。恥ずかしくなどないぞ。その時は遠慮なく言うがいい!」

斬り合いでは不利だ。

するとガトーはソードを相手に受けさせると同時にショルダーを当てにかかると。しかしこれはフェイクだ。

それをいなしたゲルググに足を当て、突き飛ばす。

上手い!

ドムが唯一ゲルググに優るといえば、その重量だ。ドムの方がはるかに重く、それを航続距離の短い大エンジンで無理に動かしているスタイルだからだ。

こうして接触した状態で力を入れれば、当然軽いゲルググの方が飛ばされてしまい、体勢を崩してしまう。

そこを素早く再接近し狙いにかかる。

さすがだアナベル・ガトー!!

ゲルググ相手に一歩も引かない。

いや、有利に進めているくらいだ。

艦隊に近付いてきたゲルググ達も驚いているのだ。思った通り、隊長機はあの中では特別技量が高く、それを抑えられたら戸惑ってしまう。それを気にしながら対空砲火を避けるのは骨だ。

結果的に艦隊に近寄せない。

ついでに言えばあの隊長機は誇り高いのか馬鹿なのか、僚機にガトーを囲ませて袋叩きにすることは考えていない。

そこも付け目だが、ただしガトーも最後の一步決め手がない。

あのゲルググも姿勢を直すのが素早い。やはり空間能力に長けていて、並の技量ではない。エースだけのことはある。

そして各部のパーツの動きならやはりゲルググは性能が高い。ガトーが斬り込む前に動ける。ガトーの動きに対処できるため、外装に傷は付けられるが、それを断ち切らせることはない。

戦いはすぐに決着がつかない。

一方、キマイラ艦隊に向かったツエーンらのドム隊九機は難航していた。

やはり読まれている。

向こうは遠距離から主砲を使ってきた。予想したコースを狙い撃ち、十分な牽制としている。

ドム隊はジグザグを繰り返して躲すのに精いっぱい、思ったように前進ができないでいた。ただし直撃を受けたドムは無い。

よく見るとただ躲しているのではない。

シャリア・ブルのMSが先導して射線から外れる方向を教えているのだ。それに従って動き続ければ当てられることはない。そういうところで只者ではない片鱗がある。

しかし、なんとか先に進めたとしても、俺が向こうの指揮官なら必ずこうするという作戦が待っているだろう。

やはり無茶だったか。

損害を受ける前に引き返し、艦隊ごと困難な撤退戦を演じるか。だがそれには無理なことがある。

MSは振りきれても砲撃戦に移行し、チベはともかくムサイなどはいい標的ではない。ムサイは後ろに撃てない。一方的な戦いになり、艦隊の大部分は生き残れなくなる。それでも全滅よりはマシなのか……俺は指揮官としての判断が試される。

考えているうちにムサイの何隻かがチベの前方に出る動きをしている。

「そんな命令をした覚えはない。」

だが、これはメツセージだ。旗艦チベを守る。そしてチベには、俺には生き延びてほしいと言っているのだ。

俺は言葉を無くす。

そんな漢たちの断固たる意志を、自己犠牲の精神を、無駄にしてはいけない。だがしかし俺はそれでも思う。

そういう漢たちだからこそ、失うことはできないのだと！

その時、このチベのオペレーターが叫んだ!!

「あ、右舷後方に探知！ 何かが急速接近中！ 大型ミサイル、い、いえ違います！ モビルアーマーです！ モビルアーマー一機とMS一機。しかし、これは、物凄い速度です!!」

「何だと！ 今度はいったい何だというんだ！」

戦場を切り裂き、二つの彗星が飛び込んできた。

その時、チベの艦橋に上がってきて叫んだ者がいる。

クスコ・アルだ。

後ろから走ってきて、まだ拡大投影をしなければ何も見えない宙へ向かい、真つすぐに指さした。

「あれは、ララア！ ララア・スン！ ここに来たなんて!!」

「ララア？ 誰だそれは」

「フラナガン機関での、私の妹分。可愛い子。そして、彼女こそ本物の中の本物、異次元のニュータイプ」

「凄いのか、そいつは！」

「そう。誰も敵わないくらい。もう一つ言えば、ララアはシャアの恋人」

「な、何!？」

話は二日前に遡る。

サイド2に近いジオン軍基地で、キザな男がキザな言い方で少女に話す。

「ララア、次の出撃予定が大幅に変更になった。フラナガン機関がコンスコンという男に潰されたらしい。それだけなら別にどうでもいいようなものだが、エルメスのビットの補給が当面受けられない。こいつは困ったな」

「大佐のお役に立てなくなるのは嫌だわ」

「まあ予備を使わず、現有のビットをやり繰りする分には構わない。無駄なテストはしないというだけだ」

「でも何だか大佐、困ったと言いながらうれしそうに見えるのは気のせい?」

「ララアは賢いな。そう、実は嬉しいと思っている。いつかフラナガン機関は自分で叩き潰してやろうと思っていたからだ。ララアと会わせてくれたことには感謝するが、あれは人の革新には毒になる組織だ。今回のことは慶事と言える」

「それだけ?」

「いや、もう一つある。あのコンスコンは、面白い。本当に面白い男だ。会えば臆病なのに、やることは大胆に過ぎる。しかも才能はある」

「ふふ、私が嫉妬してもいいくらい?」

「そうじゃない。しかし死なすのは惜しい。今、馬鹿なことにキシリア閣下のキマイラ隊が報復に動こうとしている。もしそれが本当なら、ララア、出撃が近くなる。これは転機になるな。だがコンスコンを味方にできれば、お釣りがくるというものだ」

第十四話 ララア・スン

戦場のど真ん中へ飛び込んできた彗星、充分に加速したモビルアーマーとMSだ。

後方から来たのに、もうツエーンたちのドム隊を追い越さんばかりの勢いだ。

そこへキマイラの艦砲の列が襲い掛かる。

むろんそれも艦砲の射程外であり、当たる可能性は少ない。しかし止まっていればそれでも、動いていれば別だ。自分から当たりに行ってしまうかもしれない。気付いた時に避けようと思っても、その時にはどうにもできない。

砲火の中をくぐるというのはそれほど危険なことなのだ。

ところが、このモビルアーマーとMSは艦砲をもものともせずに進む。数回、偶発的に艦砲が命中コースに来てしまったことがあった。しかし、それが分かっていたかのように躲したじゃないか！

キマイラ艦隊の旗艦ザンジバル級に近付いた。

その時のことだ。

艦の陰に隠れていたゲルググが五機、横から襲いかかってきた。

それは俺も考えていた作戦だった。俺がキマイラの側だったなら、絶対に同じ罠を仕掛けたらうな。

敢えて伏しておき、艦攻撃の態勢に入った瞬間を狙い、突如として横撃をかけるのだ。最も有効に戦力も心もへし折れる。

だが、そこからがまた驚きだった。

最大解像度にしたスクリーンで見ると、モビルアーマーが小さな砲台、ビットを幾つも出しているのが分かる。

それらが一閃した瞬間、三機のゲルググが四散した！

全く時間差が無い。

三機が同時に撃破されているのだ。

「ぎ、さすがだわ、ララア・スン。完璧にビットを使いこなしているなんて」

実は俺はフラナガン機関のモビルアーマーが活躍しているのを初めて見たんだ。

こいつは凄い！

今までは連邦の白い化け物MSを敵にして戦っているところしか見たことがなく、しかも負けているところばかりだ、そのため実力がいまいち分からなかった。

今の相手は、本当は一騎当千のパイロットなんだろう。しかも最新鋭のゲルググだ。

それが紙を破るようにはかなく消えてしまったなんて。

ただしそんな風にクスコ・アルが驚いているところから察すると、やはりララアという者のモビルアーマーが特別なのかもしれない。

そこからモビルアーマーは、なぜか残りのゲルググを無視している。

俺は知らないが当事者は会話をしていた。

「ララア、やり過ぎはよくないな。ここのゲルググたちは敵ではないのだから」

「お言葉ですが、それは納得できません。大佐に害があれば、敵と言っても構わないのでなくて。連邦だから？ ジオンだから？ いいえ、

そんなの関係なく、大佐の敵が私の敵」

ゲルググの一機が驚きから覚めて、腕を上げようとした。たぶんビーム・ライフルを持ち上げようとしたのだろうか。

しかし、その動作は最初だけで、永遠に遂げられることはなかった。直ぐに爆散することになったからだ。腕を上げる時間すら与えられずビットの攻撃を食らった。

ゲルググは全く何もさせてもらえないうちに消えていく。

最後の一機はもう固まって何もできない。おそらく小便を漏らししているに違いない。

「……ララア、そこまで言われると怖いな。私ならそう心配してくれなくても、あんなゲルググにやられることはないよ。それよりラ

ラア、もう一仕事だ。あのザンジバル級を止めてくれ」

そしてモビルアーマーはキマイラ隊の対空砲火に向かっていくが、濃密な弾幕をまるで最初から無いものであるかのようにすり抜ける。そして旗艦に攻撃を仕掛けた。

モビルアーマーの出す細かい砲台はおそらく対MS用の兵器だ。細いビームは敵MSを貫くには充分でも、分厚い艦壁、ムサイならともかくザンジバル級の艦壁には通じないと思われた。

しかし、エンジン冷却部の防護の薄い部分を驚くべきピンポイントで貫く。

それを三度も食らえば、たまらずエンジンが暴発する。ザンジバルの片舷メインエンジンは吹っ飛び、大破してしまった。

先のゲルググ撃破といい、あまりに鮮烈なシヨウである。

その時、ジオンの一般回線を通じて流れてきた言葉がある。

「双方そこまで！」

それは飛び込んできたMSからのものだ。全方位に聞こえている。

「私はシャア・アズナブル大佐。この事故に偶然居合わせた。なぜか誤認してジオン軍同士が戦っているとは、悲しい事故もあったものだ。先ずは双方退いてはくれないか。事故と分かった以上、拡大することはない。この遺恨は私がひとまず預かろう」

その声を聞き、俺はシャアの意図がよく分かった。この戦闘を止めさせる、つまりはつきりと劣勢だった俺を助けるつもりなのか。

正直、助かった。危ないところだった。

しかし、シャアが敢えてそうする理由が分からない。

キマイラ隊の任務を妨害すればシャアの方こそ上司のキシリア閣下に不興を買うだろうに。どういう風の吹き回しなのか。

当たり前だが、俺には良かったことでもキマイラ隊にすればとんだ邪魔だ。

「シャア、どういふつもりだ！ キマイラ隊はキシリア閣下の御意志

で動くもの、それを邪魔立てするとは、貴様、閣下に反逆するつもりか！」

「一つ忠告しておくが言葉に気をつけた方がいい。この同士討ちの忌むべき事故、それがキシリア閣下の意志で始まったと、そうはつきり証言したいのかな」

「何を！ くツ、憶えている。すぐに報告してやるぞ！」

そんなシヤアとキマイラ隊の会話を聞くと、シヤアも決してキシリア閣下の取り巻きではないらしい。

「それとシヤア！ どちらが赤いエースMSなのか、いずれ勝負だ！」
「……それは御免こうむる。私はちっとも困らないから勝手に赤く塗ったらよろしかろう。目立ちたければもっと鮮やかにすればいい。いちごMSと呼ばれて珍しいものになる。それも目立っていいだろうな」

「い、いちごMS!? 貴様——ツ、真紅の稲妻を愚弄するかツ！」

俺は思った。シヤアは悪気がなくとも、相手を怒らせることがある。ナチュラルにそういう性格なのだろう。損なのか得なのか分からないが。

相手も結局本名を言うことすら忘れている。

しかしそれでキマイラ隊は退いた。

思ったのだが、向こうもおそらく同士討ちはしたくなかったのに違いない。何かのきっかけがあれば止めたいのではないか。そんな良心があったと信じたい。

俺の方はシヤアに一応礼を言う。

「シヤア大佐、テキサス・コロニーのことは少し文句も言いたいが、この戦いの仲裁に入ってくれたことには素直に礼を言う。結構な借りを作ってしまったな。しかし、こちらが心配することではないかもしれないが、この後キシリア閣下にどうい言う言い逃れをするのだろうか」
「ふふ、貸しはそのうち返してもらいます。しかし、言い逃れとは何のことでしょうか？ これは不思議だ。コンスコン司令、私は同士討ちの事故を止めさせただけのことですが」

「今さら綺麗事を聞きたくはないが……」

「私は、ただスペースノイドのために戦っているだけです。ザビ家の私兵になったつもりはない。いえ、それは忘れて下さい。それよりもコンスコン司令、あなたと一緒に戦いたいものです。その日は意外に早いかもしれない」

「それは、ジオンではもちろん同僚だ。力を合わせるのは当然だ。互いに頑張ろう」

「…… そうですね。では連邦との決戦場であるア・バオア・クーでまたお会いしましょう。私としてはその後も長く、共に戦うのを楽しみにしていますよ。スペースノイドのために」

その同時刻、グラナダでマ・クベ大佐は壺を拭いていた。

「ウラガン、拭き終わった壺からきっちり並べとけ」

そう言いながら、何と手が滑って壺を落としてしまう。そこを、副官ウラガンがはっしと受け止める。さすがマ・クベの副官、凄いレシーブ力である。その能力で選ばれたのだろうか。そしてグラナダのある月の重力は1/6Gという低いものであることも幸いした。

しかしウラガンは驚く。珍しくマ・クベ大佐が上の空で大事な壺を拭いているなんて。

その通り、マ・クベはついさっきのキシリア少将との会話ばかり考えていたのだ。

「マ・クベ。私は三日後、ア・バオア・クーへ出発する。お前もデラミン艦隊などと共に、ついてくることになる。キマイラ隊やサイクロプス隊も一緒だ。ただし他はグラナダに残す」

「承知いたしました、キシリア閣下。ただし、こんな時にキマイラ隊は秘密任務とやらで出払っているようですが」

「間もなく戻ってくるだろう。キマイラ隊はコンスコンを討伐にやらせた」

「な、何ですと！ コンスコンの艦隊を討伐！ それは真で！ キシリア閣下、私は反対でございます。コンスコンはフラナガン機関を確かに襲ったと聞いてはいますが、最初からあんな機関、頼るべきでは

ありませんでした」

「珍しいな、マ・クベ。私に真つ向から反対するとは。いつものお前ならそんなことは言わないはずだが。フラナガン機関をそんなふうに表示するとは、お前も正統派の軍人の一員だったということか」

「いえ、その機関のことで報復するべきではないと申し上げたく。それに私は断固として申し上げます！ コンスコンについて、ジオンに必要な人間だと判断しているのです。それをわざわざ消し去ることはありませんまい」

「そんなにコンスコンに命を救われたことを恩に感じているのか。たかがドズルのところの一部隊だろうに」

「……ふ、マ・クベ、そんなに難しい顔をするな。実際は討伐がうまくいくことはない。シャアに情報を流した。するとやはり出て行ったようだ。おそらくキマイラ隊を妨害するためだろう。シャアにしては軽率だな。私に読まれるとは、お前と一緒にあのコンスコンという男に目を向け過ぎたのだろうか」

「え、キ、キシリア閣下、それが分かっているなぞ！」

「シャアは猫を被っていたが、そろそろ野心を現わしてもおかしくない頃なのでな。一つ試してみただけだ」

「……」

「抑えつけることは必要ない。力のある駒は腐らせるより使いこなすべきだ。シャアはおそらくギレン総帥を狙う。ふふ、私は兄殺しになりたくない。少なくとも、直接には」

「……私の忠誠心はキシリア閣下にのみあります。ただし、ジオンが負ければ全ては無に帰すかと」

「無論だ。これからもマ・クベ、変わらぬ忠義を尽くせ」

「いったい、キシリア閣下はどこへ向かおうとしているのか。」

「宇宙は全くもって単純ではない。」

「不吉な予感がする。」

「キシリア閣下は戦争をしているのではなく、人をもてあそんでい

る。

しかし最後まで御しきれぬものだろうか。気が付いた時には、逆に自滅に追い込まれたりしないだろうか。

そして直近の問題は、今の話だとア・バオア・クーへ精鋭を連れて行くとはいえグラナダの機動戦力の半分しか動員しないことになる。決戦があるのに、それでいいのだろうか？ 自分でも言ったが、連邦に負ければ話にならない。

コンスコンのようにただ戦えばいい立場が逆にうらやましい。

とりあえずは壺を拭いて心を落ち着かせよう。

いつもより手に力が入ってしまう。

「あっ！・またッ　しまッ」

「あっ!!」

第十五話 到着、ア・バオア・クー

俺の艦隊はようやくア・バオア・クーに到着した。はぐれ艦を探すため迂回路を辿ったが、なんとか間に合った。まだ決戦は行われていない。

懸念した木馬には遭わずに済んでいる。実のところ幸運だったのだ。あわや出遭うというところで、木馬は連邦本隊に戻されている。連邦軍独立第十三部隊の木馬は囹の役割を完全に終えて、ア・バオア・クー攻略戦に加えられている。

俺はア・バオア・クーに近付くと驚いてしまった。

ジオンの誇る超大型空母ドロス級三隻を筆頭に、グワジン級、ザンジバル級が多数見えている。チベ級も山ほどいる。ムサイに至っては数えきれないほどだ。

宙域には艦艇がひしめいている。当然、ア・バオア・クーに収容できず、雲のように取り巻いて停泊している。

俺の艦隊なんか1割どころか1%以下ではないか。

ソロモン攻防戦も多数の艦艇が参加したが、その比ではない。

ジオンにとり一大決戦を迎えている。

ただし俺が知っているのは、連邦はこれの数倍いるのだ。全てを押し流す暴力的な数が。

「おおコンスコン、ようやく帰って来たか！ はっは、お前がいるのは心強い」

「ドズル閣下、遅くなりましたが、ようやく帰投しました。それでその、最初にお伝えしたいことが」

「何だ？ まさかと思うが貴様、キシリアとのことを気にしているのか？」

「お聞きでしょうか、ドズル閣下」

「ああ、キシリアが珍しくマスクを取ってまで文句を言ってきたぞ。

機関を一つ潰され、そして配下の部隊といざごぎを起こされて迷惑したと。だがそれだけのことだ。俺が、つまらんことは決戦後にしろと言ったら収まった」

「ありがとうございます。ドズル閣下」

「別に俺は正論を言ったまでだ。当たり前だろう」

ドズル中將はあつさりしたものだ。

武人というものはやはりこうでないといけない。

度量の広さといい、さすがに俺の尊敬する上司だ。

「あの、ドズル閣下、恐縮なのですが、おまけにちよつとしたお願いがあります」

「それは何だ？ ゼナの写真集なら在庫はないぞ」

んなこと言うかよ！

「特に水着のはないからな。あつてもやらん」

それこそ決戦後にしてほしい話題だわ！

前言は半分だけ撤回する。

それに写真集といつても……

ゼナ様はドズル中將の奥方とはどうてい考えられないハイレベルのお方だが、ツェーンやクスコ・アルに比べては…… それにゼナ様はドズル中將の隣にいるからこそ美貌が三倍アップに見えるのだ。

いやそれは不敬だな。ドズル閣下がご満悦ならそれでいいではないか！

ま、ついではあるが本当に良かったことに、ミネバ様はゼナ様の方に似ておられるようだ。

「い、いえ閣下、そういうことはありません」

「本当にそうだな」

「…… 艦隊の戦力増強の話です」

「うーん、それなら、今どこの部隊でも戦力の要求ばかりだからな。コンスコン、できるだけ聞いてはやるが、あまり期待はするなよ」

「別に全部ゲルググにしろとかいう話ではありません。今、使われていないMSを回してほしいという事です」

「何のことだ？」

「ギャンというMSをご存知でしょうか」

「ギャン？ あのコンペで敗れたツイマツドのMSのことか。模擬戦では途中棄権だったな。たしか駆動系に新しい技術を詰め込んだために耐久性が足らないと聞いたことがある。ツイマツドはもう諦めてドムの改良に走っているのだろうか」

「そうではありませんが、ギャンには大きな利点があります。非力ではあっても軽く、機動性に優れ、なにより操縦がしやすい。このギャンを当艦隊に回して頂ければ」

「？ コンスコン、忘れてないか。ギャンは量産などしていません」
「実際にマ・クベ大佐が運用しているのを見ています。ですからツイマツドは最低5機は試作しているはずです。余り物として改修実験や解体されているかもしれませんが、そのままのもあるでしょう。そういう試作機で充分です。もうマ・クベ大佐は使うことはないでしょうし」

これが俺が考えていたことだ。

何より操縦しやすいギャンなら、MSに慣れていないシャリア・ブルにはもってこいなのではないか。ドムではシャリア・ブルの能力が生かされない。

それに、ツエーンだつてフラナガン博士の言う事にはMS操縦の負荷を減らした方が真価を出せるということではなかったか。

他にも同様のパイロットがいるかもしれない。

まあ、クスコ・アルはMSの搭乗経験そのものが無いからギャンでも難しいか。

ギャンのことで言えば、あのよく分からない盾だけは外した方がいいな。逆に盾なら対ビームコーティングのあるゲルググの盾を融通してもらおう。

「分かったコンスコン。それならツイマツドに話をつけておこう。俺も実はな、ゲルググではけっこう悩まされているんだ。前線からは、性能はともかく、ベテランしか扱えないほど難しいとか、とにかくうるさい。そして整備からは、各部の整合性が悪くてトラブルが多く、未だに原因すら分からない場合があるらしい」

それはそうだろうな。

ゲルググはジオニック社を主導にして、ツイマッド社、MIP社の合作のはずだ。各部それぞれのソフトウェアは得意分野でいいかもしれないが、全体の統合は難しいだろう。

バグ潰しがそんなに簡単なはずはない。

例えば各駆動部が要求してきたエネルギーを、マイクロ秒単位で適切に優先順位を決めて供給するとか、不具合を起こしたパーツの迂回路を設定してデータを流すとか、そういった上位ソフトウェアを後付けで作るのは大変だろうな。

それにプライドの高い技術者同士をいきなり融合も無理だ。今まで違う社で競っていたんだ。歩み寄ってインターフェースを合わせようとはなかなかしないんじゃないか。

物理的にも、一体のMSの各部で線一本ネジ一本の規格から違えばどうするんだろう。

いやまあそこまで上層部が考えていないはずがない、と信じたい。ただし俺も声を挙げないわけにいかない。それは義務だ。自分に関わり合えない部署だからといって何もしないのは、全体のレベルが低下する。

俺だって自分の分野である艦隊運用について、例え素人から指摘されたとしても聞く耳はあるつもりだ。

「コンスコン、ついでにメカニック班でも見ていったらどうだ？ 俺のビグザムもだいたい修理できたぞ」

え、ええっ！まだビグザムに乗るんですかドズル閣下!!

前線勤務は他の人に任せて下さい！

それで俺はお言葉に甘えてメカニックにやってきた。

本当に慌ただしく人が動いているな！

まあ、一大決戦を控えて当然だろう。

全員がこのア・バオア・クーの運命を間近に感じている。今までは戦場からずっと後方であったこの場所がそうではなくなる。ここに連邦軍がやってきて、技術や整備の人間が戦死することも充分ありえ

る話だ。それでは真剣になるのは当たり前だ。

俺は今、軍服から階級章や勲章を外して来ている。

ここに将官級の人間が来たと知ったら誰でも緊張してしまう。俺としてはそんなことでメカニツクの人間の手を休めてほしくない。

そんな配慮をしたのだが、そのため俺の顔を知らない人間からみたら、普通の中年の兵士、せいぜい下士官にしか見えない。

そして俺は、クスコ・アルだけを伴っている。

ちなみにクスコ・アルは現在准尉に付けている。

モビルアーマーをMS隊の中の一機に位置付けたら、ただの兵士でもいいのかもしれない。しかしそれには運用上無理がある。

逆にモビルアーマーがたった一機でも独立した隊として位置付けるならば、士官を一人はつけるべきだ。

士官学校卒でもなく戦歴もないクスコ・アルだが、こういうわけで折衷案として、特例で准尉としたんだ。

ちなみに俺自身は少将になった。叙任式は結局無かった。ギレン総帥が「このクソ忙しい時にやつてられるか」という実に正しいことではあるが、雑な扱いを受けたせいだ。

それにしてもザビ家でもないのに少将以上の人間といえ、他にはギレン総帥のところの参謀に二人、後方補給担当に一人だけだ。

つまり俺は、全ジオン軍の中でも、艦隊司令としてザビ家の次という恐ろしい程の地位にいる。

その割にみんなからの扱いが良くないけどな！

さてこうしてクスコ・アルと歩いていると、周りからは美人の新任女性准士官を案内するという役得に預かっている中年軍曹にしか見えないだろうな。

俺が楽しいか？ いや全然楽しくないから！

本当にそういうシチュエーションが好きではない。周りに見られて、いたたまれない気がするんだよ。小心かつ負け犬根性だから。

それでもクスコ・アルとメカニツクに来たのは、エルメスについて有用な情報がないか聞かためだ。結果的には「それはメカの問題ではなく、医療分野に近い」とのことだった。

最後に俺はメカニックで妙なものを見つけた。

「何だありや。足が無いぞ」

そんな俺の言葉を聞かれてしまった。

若い技術士官が好戦的な目でこつちを向いてきたじゃないか。

不味い。

言葉自体は俺がうかつだった。見慣れないものを見てつい口から出てしまったのだ。

「……飾りだ。偉い人にはそれが分からんのだ」

「そ、そうか。部外者が分かりもしないのに変なことを言ったな。済まない」

「馬鹿じゃないの!? あんた、これ見て自分で笑わない?」

クスコ・アルがそう言つて話に入ってきた。

おそらく、少将であり、艦隊司令官でもある俺が若僧に謝罪する羽目になったのを見かねたんだろう。ちよっぴり優しいぞ。

「これは足の無いMS? 頭のついたモビルアーマー? 何考えたらこうなるの」

「うるさい! これで100%なんだ! これはジオング。キシリア閣下直々の指示で作られた、シヤア・アズナブル大佐が搭乗する前提で作られた決戦用モビルアーマーだ。遠隔攻撃も可能な最新タイプなんだぞ」

「馬鹿ね」「馬鹿な!」

技術士官の言葉にクスコ・アルと俺は同時に反応してしまった。

「MSってのはね、人間の脳のアウトプットを最大限に活かせるからいいのよ。だから人型なの。それが人間にとって一番自然な形で、最も素早く情報を出せる方法なのよ。足は無駄なんかじゃないわ」

「シヤア大佐が決戦兵器に!? そんな、キシリア閣下はどういうつもりだ。大佐という歴戦の者を使い潰すつもりか! 人を軽んじて、それでジオンが立ち行くとも思っているのか!」

内容はかなり違ったものだが、いずれもこのジオングというものを非難している。

若い技術士官は顔を赤くして黙ってしまった。

第十六話 ザビ家の話し合い

俺は憤然としながらメカニックから戻った。

まあ何か口出しをすることもできない。やれることは、自分の艦隊、コンスコン機動部隊の決戦準備を粛々と進めるだけだ。

しかしそれもまた、補給物資のことから兵士の健康チェックまで本当にいくらかでもやることがあり、優先順位を決めないと終わらない。

俺の部隊だけでなく、各部隊それぞれで大忙しだ。

命をかけた、しかしある意味巨大なお祭りが始まるからには。

そんなことは部隊レベルの話だ。

もつと上のレベルのことは、やはりそれなりの人間が考える。

ア・バオア・クールの最深部、戦略会議室で作戦が話し合われる。しかし会議とは言ってもたった三人だ。ザビ家の者しかいない。事実上、この三人が決めることだ。しかも他の人間が知ってはならない秘匿にすべきことでもある。

「何？ ギレンの兄貴！ それでは俺の部隊は邪魔者か！ 俺の戦力が部署を決めない遊撃だとは、いったいどうやって戦う！」

「ドズル、兄貴ではなく総帥と呼べ。そして別に邪魔者だとは思っていないさ。ソロモンの戦力の大半は脱出できたのだし、その戦力は貴重だ。ただし、ア・バオア・クー戦においては最初の部署を決めず、決定戦力として必要な場所へ必要な時に投入するというだけだ」

「その必要な時が来なければどうする！」

「それならそれでいいじゃないか」

「だが兄貴、最初からNフィールドが狙われることは分かっている！

最初からそこに戦力を集中させておく方がいいんじゃないのか。Nフィールドには兄貴の部隊だけ、いくらドロスの搭載MSが多くとも、支えられるのか。破られそうになってから駆けつけても遅いんだぞ。戦いには勢いってものがある。ただでさえ数の多い連邦が勢い付いたら止められん！」

ドズルは戦術を考えている。多少どころかかなり無鉄砲などころがあるドズルだが、やはり第一線で戦ってきた闘将だ。戦場の流れとか、呼吸というものが分かっている。

数の多い敵には、最小限精神的に引けをとってはならず、主導権を渡してはならない。

その上で怯えさせ、浮足立つように仕向けるのだ。いったん相手に楽勝と思わせたら本当に楽勝にさせてしまう。

「俺の下には優秀な部下が多いが、特にコンスコンがいる。奴は強く、しかも運がいい。これまで負けなしだ。最初から使った方が良いぞ」
「決定事項だ、ドズル。Nフィールドは本国ギレン総帥府の軍で固める。意思統一的にもその方がよく、足並みも揃う」

それなりの理由を付けてギレンが断を下す。

優柔不断よりよほどいい。しかし、その裏を感じ取る者がいた。

「そして戦果を独り占め。総帥の奮戦でジオンは最後の最後で救われる。惚れ惚れするほどの宣伝材料、いっそう兄上のカリスマにも箔がつくことでしょうね」

「言い方に棘があるな。キシリア。つまらん邪推だ。そんな小さなことを考えているとでも？ 考えるのは常に我がジオンとザビ家のことだ」

「本当に？ もしそうなら、ソロモンの段階で送ったのがビッグザムだけとは、いかなる理由で」

「それを言うならキシリア、そちらの応援もたかが十隻程度の艦隊、しかもギリギリ間に合ったとはどういうことかな」

「兄者もキシリアも、終わった話を蒸し返してどうする！」

ドズルがそう言って中断させる。ザビ家は昔からそうだ。兄ギレンと妹キシリアは何かと反発しあう。今までは弟ガルマという接着剤があつたのに、それは失われた。

しかしここはジオンの行く末が決まる大事な会議、そんなことではいけない。

「……それでア・バオア・クーの防備の話に戻れば、私はSフィールドを守ればいいと？」

「その通りだキシリア。Eフィールドに艦隊を到着させたようだが、Eフィールドはカスペンの隊を回してあるから充分だ。Sフィールドに回ってくれ。そのSフィールドも敵襲を受ける可能性がないともいえん。連邦の立場に立ってみれば、同時攻撃で守備側を混乱させ、ついでに戦いながら一番突破しやすい場所を見極めて攻めるだろうからな」

ア・バオア・クーを正面から見て、区分を四つに分けている。

要塞の守備力は、岩石をそのまま利用した岩石弾と、砲台を取り付けた浮遊砲台に大きく依存している。コストが安く作れる分だけけっこうな数がある。

その砲火を浴びながら無理に攻めるのは連邦としても負担が大きい。

そのため、砲台の比較的少ないNフィールドを狙ってくると思えるのが最も順当だ。連邦が堂々と押し迫り、ジオンの機動戦力を壊滅させてから要塞に侵入するつもりならここしかない。

だがしかし、隙について奇襲をかけてくるとすればSフィールドの可能性もなくはない。十字砲火を素早く通過できれば、そこが外郭からエネルギーユニットなどの主要部へ一番早く行けるルートだからだ。

「ただ、任せるといってもキシリア、グラナダから連れてきたのがたつたの六十隻とは？ おかしいな。グラナダには少なくとも百隻以上あったはずだが」

「精鋭を選んで連れてきたので。パイロットはそれなりの水準の者を。装備のMSもほぼゲルググ。それにあのシヤアまでいるので、不足はないでしょう」

「シヤアか。奴をだいぶ買っているようだなキシリア。ガルマを守れなかつた程度の男だろうが。ああ、それでキシリア、重用するのは構わんが父上には隠しておいた方がいい。父上がグレートデギンで出るという噂もあることだ。ズム・シティで話をした際、父上はどうしても前線で兵士を督戦したいと仰ってね。私ももちろん反対したよ、キシリア」

「ち、父上が！ グレートデギンでこんな前線に！ それは危険過ぎる！」

「キシリア、お前は昔から父上のことばかり気にする。まあ、本当かどうか分からぬ噂だ。この私だってグレートデギンが、いつ、どここの航路で来るかなんて、全くもって知らされていないのだからな」

そんな話し合いのことなど俺は知らず、目の前のことに単純に喜んでいる。

ようやく俺の艦隊の陣容が整ったんだ。

ドズル中将からチベとムサイを追加してもらった。

またチベか！ ありがたいけど俺は一生グワジンとは縁がないな。

そして念願のギャンも三機ほど受け取った。

やっぱりあったじゃないか。

試してみたところ、やはりシヤリア・ブルに合っている。

格段に動きが良く、もうずっと前から乗っていたかのような堂に入った乗りっぷりだ。

もう一つ、つまらないことだがマ・クベ大佐が乗っていると思うとギャンは微妙だったが、こうしてまともに向き合おうとけっこうカッコいいな。

ツエーンにもギャンが合っている。ザクより軽いほどの軽量級でありながらエンジンの反応性が機敏なギャンは動きにタイムラグが少なく、楽そうだ。

意外なことだが他の隊員たちには誰もギャンは合わなかった。

反応がスムーズ過ぎて、生身感覚でぞくつとするそうさ。

同じ社の製品とはいえ設計思想の違うMSに乗り換えるのもストレスなので、他の隊員たちは使い慣れたドムに留める。

アナベル・ガトーには、俺の艦隊でたった一機だけ支給されたゲルググを当てた。

ガトーはMSの性能が上がれば上がるほど力を発揮するタイプだ。ゲルググにふさわしいのはガトーしかない。それに操縦系が違うという評判だが、ガトーならそれほど苦労もなく対応するだろう。

ジオンの台所事情が苦しいのは分かっているが、ゲルググが一機だけというのはどういうことかと一応後方部に文句を言った。するとパイロットにあわせたチューニングするというオマケを付けるので、それで勘弁してくれませんか、という返事がきた。

しめしめ、渡りに船、実はそれが狙いだ。

どうせガトーしか乗らないのなら、できるかぎり個人に合わせた調整で性能を上げてもらった方が良い。ゴネる中年は得をするな！

専用機のようなものになる。それならカラーリングするかとガトーに聞いてみた。

「い、いえ、特には。コンスコ司令の思う色にして下さい」

なんか誤解を招きそうな表現だな！

結局、塗り直しはしていない。俺も少し考えたが、今まで使われてない色でこれといった良い色が考えつかなかったんだ。

最大の問題であったクスコ・アルのエルメスについては、まあ解決したとっていい。半壊状態の自機を完全にぶち壊して制御系を抜き取り、新しいエルメスに移植するという荒業を使った。その上で、ビットの数を減らすという方法を同時に試している。

「エルメスの最大九個のビット、それを自在に操るのはララアにしかできないことだった。私はどんなに無理しても六個が手一杯だった。」

ララアは能力的にノナ・ディレクターと呼ばれるレベルという話だ。九個のビットを操るが、それは実は順番が逆であり、ララアの能力を予測して作られたのがエルメスだ。

クスコ・アルはビットをギリギリ六個まで操れるヘキサ・ディレクターというものらしい。一つの違いがとんでもなく大きな落差だということだ。また、ビットを増やすごとにパイロットへの負担が段違いになる。

俺は六個では多いと判断して、ビットを四個にするように命じた。クスコ・アルはそれで非常に楽になったようだ。

やはり人間、無理はいかんよ。

年を取ってから響くんだよ！

俺の方も悩みながらあれこれ準備を進めていたが、用意を整えているのは連邦も同じだった。

あの木馬でさえ驚くようなことがあったんだから！

「アムロ、今度の大作戦で我々はサウス・バニング隊との共同歩調になる。先に連携の調整のため出向いておくんだ」

そう言われたアムロが先行して進んでいく。

星々が全天に見える。

そのはざまに連邦艦の群れが浮かんでいる。黄色が多いが、他に赤や紫もわずかあるようだ。こうして見る限り、戦いの道具とは思えないほど美しい。できれば、戦いが終わっても美しいままで帰還すればいい。

周りには演習なのか調整なのか、MSが動いているのも分かる。

しかしそこで偶然目に入ったものに驚愕の声を上げることになる。

「ああつ！ な、なぜそんな……」

「アムロ？ どうしたの？」

「ホワイトベース！ こちらアムロ・レイ、ガ、ガンダムを発見!!」

「どうしたんだアムロ、それは連邦のMS、敵ではない。別に驚かなくていい。ガンダムが一機しかないと思っていたか」

「で、でもブライトさん、いやブライト艦長、ガンダムがもう二機もあるなんて！ いったいどこにそんな」

「まあ普通は試作機でいろいろ試してから量産化するものだ。特に連邦初のMSなんだ。サイド7だけが実験場ではなく、別なところで試作機があってもおかしくはない。ただ、アムロが驚くのも無理はないな。他の試作機を実戦投入していたとは知らなかった。あの傘の攻略に試作機まで集めて戦わせるとは、連邦もこの戦いに本気だということだ」

アムロの目には、自分のガンダムの他に二機のガンダムが見えている。よく見ると確かに装備は色々と異なった点があった。それも実験の内なんだろう。一機はやけに武装が多く、もう一機はそうでもな

い。

向こうもアムロを見つけたらしい。通信を入れてきた。

「ハイハイ、一番有名なガンダム乗り？ この戦いが終われば二番目に有名なガンダム乗りになるけどな。俺はイオ・フレミング。サンダーボルト宙域を抑えてからやってきた。一つ聞きたいけどいいか、暫定一位のパイロットさん？」

「え、ええ、僕はアムロ・レイ。聞きたいことって」

「ロックとジャズ、どっちが好みだい？ どっちでもないなんて、言わないでくれよ」

第十七話 グレートデギン

部隊編成では順調な話ばかりになってしまったが、実は俺には悩みがある。

ア・バオア・クーの戦い、その前には大きな事件がある。

コロニー・レーザーだ！

それはサイド3のマハル・コロニーを改造して作られた超巨大レーザーのことである。

レーザーというのは、半透過鏡で塞ぎ、内部にエネルギーを貯め込み、位相のそろった光で放射するものである。そういう形に変換されたレーザーはただの光とは違い遠距離でもエネルギーの減衰が少ない。規模とその性格のおかげで巨大レーザーは連邦の鏡の兵器なんかの比ではない威力を持つ。

俺はそれを知っている。ジオンでコロニー・レーザーを準備していることを。

そいつは本当なら決戦が始まってから、ア・バオア・クーへ連邦の部隊を引き付け固めさせ、最大限の効果で使われるはずだった。ところが連邦の動きが慌ただしく、それを拡大解釈した士官が誤って早く発射してしまった。

その結果、あろうことか味方のグレートデギンを誤射して沈めてしまふという悲惨な事故を起こす。ギレン総帥は即座にコロニー・レーザーの担当士官を処刑したらしい。

しかも想定より早い発射のため連邦を殲滅することもできず、連邦の三つある隊の一つを半減させただけにとどまる。そして最悪なことにレビル將軍などの指揮系統を斃してしまう。

このため連邦としても退く判断すらできなくなり、所定の作戦をそのまま実行し、なし崩しに戦闘に突入する。

乱戦の末ア・バオア・クーは陥ちてしまった。ギレン閣下は責任を感じて自害、キシリア閣下も脱出できずサラミスに囲まれて撃墜されたそうだ。

こんな流れだったか、それを知っている俺としては、なんとかジオン優位に事を進めたい。ただし一介の艦隊司令にしか過ぎない俺ができることは……

ほぼ無い。

ドズル中将ならともかく、他のお偉いさんに俺などがお目通りはできない。

直訴など論外だ。それに、こうなりますから信じて下さいといって通じるわけがない。

そんな時に突然、俺はドズル閣下から特命を拝領する。

といっても簡単な任務だ。もちろん重大性ということでは、これ以上重大なことはないのだが。

「コンスコン、今のうちにお前に頼みたいことがある。ゼナとミネバをズム・シテイへ送り届けてくれ」

「ええっ、ドズル閣下、ゼナ様がまだここに!? なんでもまた」

「うむ、もちろんソロモンの轍を踏まず早めに出そうと思っていた。しかしゼナの方が離してくれなくてな」

「……」

「冗談だコンスコン。いや実はグワランはビッグザム搭載に特化するよう改装に入っていて、意外に長引いてしまったからだ。疑うなよコンスコン」

「……」

「本当にそうなんだぞ！ 本当だと言ったら本当だ！ しかし今からグワランで本国に往復するのは時間がかかる。チベの快速なら往復で一日あれば足りるだろう」

こうして俺は今さらズム・シテイ往復に出た。確かにゼナ様とミネバ様は、ザビ家にとって非常に大事な次世代だ。確実にこなさなくてはならない。

航海中、ゼナ様はほぼ自室にこもっていたため、艦橋で警戒態勢をとっている俺とは話すことはなかった。俺はゼナ様と言葉を交わせ

るかど期待していたのだが。ドズル閣下の何か笑えるエピソードを聞き出したかったわけではないぞ。

さて、帰路は気楽である。

もちろん、それなりに急いではいるが、連邦が仕掛けてくるのはまだ少し先と思われた。

ズム・シティから最短コースのゲルトルバ航路を飛ばしていく。

あと二時間もあればア・バオア・クーに辿り着けるところまで来た。

しかしそこで、俺は前方に予想したくないものを見てしまったのだ！

「本艦より前方にグワジン級戦艦発見、艦型グレートデギンです。僚艦チベ三隻、ムサイ四隻」

「な、なに!? あのグレートデギンが、こ、ここに…… 通信は付けられるか?」

「いえ、通信封鎖かけられています。しかも、なぜかミノフスキー粒子が戦闘中並に濃くなっています。そのせいで一般回線も不可能です。もっと接近しませんと」

「何としても通信を取れ!」

艦橋にいた周りの人間が妙な顔をした。副官もそうだ。

確かにグレートデギンはデギン公王の乗艦、ジオン公国のトップが宇宙に出ているとは意外だ。

しかし俺が慌てている理由にはならない。

「コンスコン司令、あと一時間もすれば、通信可能距離になると見込めますが」

「一時間か! どうにかならないのか」

のんびりしているオペレーターと俺との温度差がきつい。

まあ、そうなったのは俺が悪い。

俺は、コロニー・レーザーについて何ができるか考えていたが、自分の保身を全く考えていなかったかという嘘だ。本当なら全力で

当たって見るべきだったんだ。多くの人が一生懸命に戦い、そして死んでいくというのに自分のことばかり考えすぎていた。正直、軍人失格だ。そんな人たちに申し開きができない。

しかしここで思い返したんだ。

グレートデギンを含む目の前の友軍が消滅するのは耐えられない。本当なら敵である連邦軍にもコロニー・レーザーは酷だ。今さら偽善を言うつもりはない。騎士道など現実の戦場に無いのも分かっている。しかし、コロニー・レーザーは問答無用の一方的な兵器なんだ。手を上げて降伏する猶予もなく、意思表示など意味をなさない。虐殺と何も変わらない。これについてはどうせ答えなど見つからないだろうが。

しかし少なくとも友軍は助けたい。

俺は本気でグレートデギンを止めようと思った。

しかし遅すぎた。今さらその方策が見つからない。

通信できたとしても何と言ったらいいか。レーザーが当たるとも言えないだろう。

しかしその前に通信を取ることさえできないとは！

「速度上げろ！ 呼び続けるんだ」

「わ、分かりました。文面は『コンスコン機動部隊からグレートデギンへ、至急応答されたし』でよろしいでしょうか、司令」

「それでいい。一般回線、最大出力で頼む。つながったら直ちに教えてくれ」

そう言ってから、不思議そうにしている副官へ命じる。

「いやなに、連邦はざる賢い。航路遮断してくる可能性を考えてな。グレートデギンは方が一にも失われてはならんだろう」

「なるほど、さすがはコンスコン司令！ 連邦の動きを読んだんですね。それで護衛に付きたいと」

「……そういうことだ」

しかし、最後まで通信が通じることはなかった。なぜかグレートデギンの方も速度を上げてしまったからだ。邪魔されてはならないとでも考えたのだろうか。

「グレートデギン、加速しながら連邦軍本隊の方へ向かっていきます！ いったいなぜ……」

「やむを得ん。これ以上近付けない。先制攻撃を仕掛けるのかと連邦に誤解されたら困る。……追跡は中止だ」

俺は断腸の思いで諦め、グレートデギンを見送ることになる。そしてア・バオア・クーに帰投した。

だが俺の行動が思わぬ波紋となって広がってしまうとは！

さっきの呼びかけが、いくつものジオン艦に聞かれていたのだ。

ここへグレートデギンが来ているという情報がジオン軍の間に浸透していった。

そしてコロニーレーザーが発射される。

次に、グレートデギン、つまりデギン公王が味方に殺されたという事実が知れ渡る。

グレートデギンがいることが分かっているながら誤射ということは考えられない。

後付けのように理由が発表された。

デギン公王は最後の和平交渉を望んでいたが、卑劣な連邦は公王を捕えようとした。自分を取引材料にされるのを恐れた公王は、ジオンのため、連邦艦隊と共に斃されるのを望んで託した、というものだ。どう考えても苦し紛れの言い訳だ。

しかし、誰にとつてもそれを考えている暇はなくなった。

戦いがいきなり始まった。

レビル將軍を喪った連邦がア・バオア・クーへ怒濤のように襲い掛かってきたからだ。

俺はそれをドズル中将麾下の決戦兵力として宇宙から見ている。

連邦はやはりNフィールドから攻めてきた。

突撃隊形ではなく、やや横に広げた斜向陣だ。

堂々と大軍を駆使する構えで来ている。マゼラン、サラミスを中心とする隊、他に空母が中心の隊などが観察できる。

連邦の大攻勢、始めは当然ながら戦艦マゼランの強力な主砲を使ってきた。超長距離の艦砲射撃だ。

光の塊のような斉射が放たれた後は、それぞれの艦で撃っている。それから幾重の筋が流れていき、全く途切れることがない。

「これはどうせ牽制、挨拶のようなものだ。この距離でア・バオア・クーの砲台やベイに当たりはしない。そして外殻の岩石に当たったところでどうということはない。だがこう数が多いとシヨウとしては見ものだな」

「コンスコン司令、やはり連邦は恐ろしい数です」

「これからもっと凄くなるぞ」

「それは、どういう……」

「次はおそらく空母から露払いのMSを出してくる。そして支援に丸いモビルアーマーの大群が来ることになる。最後は揚陸艦を突撃させての白兵戦で乗っ取りか」

「迎撃は可能でしょうか」

「残念だが、とてもジオンのMS戦力では無理だろう。ア・バオア・クーに引き付けて岩礁砲台の力を借りんと押し返せん」

その言葉通り、やがて連邦空母からMSが星の数ほど発艦してくる。

そこでジオン側も迎撃のMSを出す。双方多いが、やはり比べてみればジオンは半分にもならない。

「ドロスもドロワもMSを全部出したのか。しかし勝負にするには、それでも絶対的に足らん。連邦はまだ全部でもないのにな。こいつは厳しいぞ。しかしドロスはなぜ動かないんだ。まさか、砲台として使うのか！ もしそうなら正に背水の陣というものだ」

「司令、我らの隊はいつ動くのでしょうか」

「知らん。上の考え次第としか言えん。ドズル中將がタイミングを逸するとは思えんが」

しかし、趨勢をじりじりと眺めていた俺に突如として命令がきた。聞き慣れたドズル中将の声で。

「コンスコン、頃合いだ。大きく迂回して連邦の横に出ろ」

「そして横撃を加えながら移動。これに驚いた連邦はMSを直掩に回すか迷いが出る。戦力差が大きく縮まる、というわけですね」

「そうだ、やはり分かってくれるか、コンスコン。その通りだ。向こうのMSに濃淡ができれば、付け込む隙も出てくる。分断や突破、やれることも増えるというものだ。せめて戦術で上を行かんとな」

「では閣下、さっそく行つて参ります」

「コンスコン、頼んで言うのもなんだが、無理はするなよ。それが終われば戻つてこい。あくまでちよつかいをかけるだけで、まともに相手をするには戦力不足だからな」

俺はドズル中将の考えはよく分かっている。

伊達に腹心をやってきたんじゃない。

多くの言葉がなくなるとも、戦術の狙いや勘所はすぐに分かる。

俺は艦隊を直ちに発進させ、半円を描いて連邦の横に出ようとした。俺の艦隊の得意とする流れるような動きである。

途中で察知されたようだが、俺の行動の方が断然早い！

「進行方向に捕捉！ 連邦のサラミス群、中隊構成のようです！」

「よし、全艦隊、主砲用意！ 向き直つてくる前に食らわせてやれ！」

「相対速度計算、イエローゾーンまであと十秒！」

「イエローゾーン三秒前から主砲撃て！」

「コンスコン司令？ 有効射程よりだいぶ前になりますが……」

「これは牽制を兼ねてだ、それでいい。撃ちながら斜め方向に接近、そのまま離脱にかかる。たまたま有効射程に入った運の悪いサラミスだけ墜とせばいい。それともう少しMSは待機だ。戦場が移動すれば収容が難しくなる」

「旗艦より順次主砲発射、着弾します」

あれ？

結果に俺は不思議なものを感じた。

「サラミス一隻に直撃、撃沈確認!!」

偶然か？

いやしかし撃沈とは！ ただの一撃で。

有効射程外ではメガ粒子砲は威力が落ちる。拡散するだけではなく、励起された粒子が光の形でエネルギーを自己放出し、温度を失うからだ。

よほどうまく艦の弱点を突くよう当てなければ損傷を与えられない。そうでなければかすり傷にしかないだろう。

それ以前の問題だ。

当たり前だが有効射程外ではまともな照準なんかつけられるはずはない。相手だって動いているんだ。艦のどこかに当てるだけで奇跡なのに。

「エネルギー充填終わり次第、次弾主砲撃て！」

「着弾、またサラミスへ直撃、爆散しました！」

これは偶然なんかであるものか！

俺はMSに自分が乗らないから、MSの本当のところは分からないかもしれない。

しかし、艦隊戦ならよく知っている。

こいつは異常だ。

こんな、はるか射程外から一撃で仕留めるとは。

「いったいどこの艦の、どこの砲が墜とした？ おそらく二度目も同じだろう。偶然でできることじゃない」

「ええ、そうです！ サラミスを沈めたのは、どちらも同じ、本艦の主砲一番砲塔です！」

「この艦だ?!? いったい、誰が主砲を使っている」

「管制はダリル・ローレンツ准尉です！」

な、何！ ダリル・ローレンツといえば手足を失った男ではないか。フラナガン機関の実験材料にされて。

「え、どういうことだ、副官。ダリル・ローレンツはカーラ女医に腕の再接合手術を受ける予定のはずだ、なぜこの艦にいるのだろう」

「それについて、本人の希望と報告されています。この大事な時に、コンスコン司令に恩返しをしたいと。手術は延期し、艦の火器管制に就きたいとのことで一番砲塔へ」

「そ、そうだったのか…… 副官、艦のエネルギー配分の変更を頼む。第一砲塔へ回路常時接続、エネルギーを最優先で供給だ」

ありがたい。

何とありがたいことか。

この天賦の才、俺のチベは別物の火力を持つ。

超遠距離から正確無比に撃ち抜く。破格の攻撃力だ。

第十八話 MS戦へ

俺が最善のタイミングで出撃できたのには理由があった。

ア・バオア・クーのジオン軍全体が連邦に対して合理的な迎撃態勢をとれたことも、全く同じ理由だ。

原因は一つにつながっている。

ア・バオア・クーの中央指令室、ここで何とも暗い争いがあった。

「ソーラ・レイ発射されました…… レーザー光、ゲルトルバ線上を直進」

「そうか、成功したか、それは良い。戦果はどうなった？」

「レビル將軍の連邦本隊に直撃、ほぼ壊滅させました。しかし……」

「どうした。ソーラ・レイは成功した。他に問題は無い。あるはずが無い」

「し、しかし総帥、先ほどから報告が入っていたグレートデギン、識別信号消失しました！ おそらく連邦本隊と同時に……」

「そのことか。大したことではない。まったく父上にも困ったものだ。慣れないことをするから、ジオン艦と連邦本隊をうっかり間違えて接近したのだろう。結果として不幸な結果ではあるが、射線に入ってしまったのはただの事故だ」

「じ、事故、でしょうか」

「そうだ！ 士気を落とさないため、取りあえず兵士たちには釈明をしておかねばならんな。そしてこの戦いが終われば父上にも国葬とは、なかなか忙しい」

それでも戸惑いが隠せていないオペレーターとギレンとの会話が終わる。

わずか一分後、中央指令室にキシリアが入ってきた。すぐさまギレンに問いかける。

「兄上、グレートデギンはどこに配備されました」

「…… 沈んだよ。突出し過ぎてな」

「この父殺しの男がッ!! それをつまらん誤魔化しで隠すとは!」

一触即発の雰囲気だ。

しかしそれはもう一人の男の一喝で消されることになる。

「キシリア! 気持ちはわかるが、ギレンの兄貴に何かしてはならん。仮にも兄弟だろうがッ!」

その男はドズルだ。キシリアに一瞬遅れて入ってきていた。

ドズルは知っている。

キシリアは小賢しいが、昔から父デギンのことになると思えば、感情を発するのだ。今、ギレンが父デギンを斃したと思っただけで感情を出している。しかもキシリアの手に小銃があるのが見えているのではないか。

ドズルはひとまずキシリアを抑えた。

そうせざるを得ない。

ここでザビ家内部の争いが起こったら最悪のタイミングだ。

司令部が機能を失い、乱れた指揮系統のまま連邦との一大決戦に臨めば、勝てるわけがない。ただでさえジオンは敗色濃厚なのにあつさり自滅だ。笑い事にもならない。

このままア・バオア・クーで敗ければ、ジオン公国は滅ぶ。

ドズルは連邦に勝たなくては話にならないことを分かっている。

ただしキシリアの気持ちはよく分かる。ドズルとしても父の死は衝撃的で、兄ギレンが限りなくクロであることがやり切れない。

ところがギレンはキシリアが銃を下ろしたのを見ると、逆に態度を硬化させた。

「トワニング、ドズルとキシリアは公王を事故で失ったシヨックで取り乱している。ここにいたところで、二人には何も任せられん。指令室から退室してもらえ」

しばらく考えていたドズルが、そのギレンの声で意を決した。

諭すような声でギレンに話す。

「ギレンの兄貴、それは違う。ここは逆に兄貴が指揮を離れてくれ。そして、頼むからおとなしく拘束されるんだ。事の真偽がはつきりす

るまでは。そうしたくてするんじゃない。なに、本当に事故ならどう
ということはない」

「何だとドズル!! 総帥たる私を拘束だと! そんなことが認められ
るものか」

ギレンは見誤っていた。自分は今まで権力を拡大させ、ジオンの総
帥にまで昇りつめている。

そして、家族の間でも君臨するのが当たり前だと認識していたのだ
!

頭が良く、しかも抜きんで政略眼を持っている。勇猛なだけのド
ズル、考えの小さいキシリア、優しくも甘いガルマ、これらを統率し
てきた。自分がトップであることがもう当然だと思っていた。

しかし、それは決して兄弟たちから尊敬を受けていたためではな
かったのだ。まして敬愛ではない。

ドズルでさえギレンを立てて愚直に従っていたのは、ギレンが長兄
であるからという理由だけなのである。

ギレンはようやく現状を認識する。ここに至って、デギン公王を謀
殺したことが致命傷になるのか。自分ならどうにでも押し切れると
思っていたのに。

「どうしたトワニング! ドズルとキシリアを退がらせろ。早くせん
か!」

「…… 恐れながらここはドズル閣下とキシリア閣下の仰りようも、
それはそれで理があるかと……」

「何! 寝返るのかッ、貴様まで!」

その時、硬直していた指令室のオペレーターが急を告げる。

「あ、連邦軍動き出しました! 直進してきます! 進行方向N
フィールド、戦艦巡洋艦、多数接近!」

「ついに来たか。連邦め。ドロスの隊に連絡、MSと砲台で迎撃する。
MSは順次発艦、岩礁を利用して艦砲を避けつつ前進」

オペレーターに伝えて指示を出したのはドズルだ。

ギレンは指令室から外された。一旦謹慎し、後でズム・シティへ移

送することとされた。

「キシリア、俺は取りあえず迎撃の指揮を取る。もちろん最善のことをするつもりだ。しかし俺だけではとても手が足りん。戦局を見ながら頼むところが出るだろう」

「……ギレンの兄に、甘すぎる！ 父上は殺されたのだぞ」

「キシリア、そのことは置いておけ。もう戦いは始まっているんだ」

こうしてア・バオア・クーの戦いはドズル・ザビ中将が主役となる。「まずは総戦力の把握と、配分か。いや、先にコンスコンを出撃させておこう。奴ならば自分でなすべきことを判断できるだろうからな」

またしてもサラミスを屠った。もう何隻目だろうか。

俺はこのコンスコン機動部隊を率い、連邦の巡洋艦隊に多大な出血を強いていく。

「連邦艦隊と平行になるよう進路をとり、増速！ 砲撃戦に引きずり出してやるぞ」

さんざんに叩いてやれば、連邦としても注目せざるを得ない。

この面倒な艦隊を潰そうと本気を出してきた。

連邦の戦艦隊が動き始めた。それに加え、MS部隊まで繰り出してくるようだ。

「サラミス、これで九隻撃沈、三隻大破、凄い戦果です。コンスコン司令。こちらはムサイ四隻中小破だけなのに」

「副官、そろそろ退くぞ。引つ掻き回す役割は充分に果たした。連邦は歓迎会の準備をしてくれているようだが、あいにく出席はせん。この艦隊はまたNフィールドの主戦場に戻る」

そしてコンスコン機動部隊は連邦艦隊から距離を取り直す。

連邦が繰り出してきた大量のMSを艦の速力で振り切っていく。MSは短距離での敏捷性はあるが、充分に加速をつけた艦の速力についてこれることはない。

そして俺の艦隊は再び回りこみながら、ア・バオア・クーに戻るコースをとる。

だがしかし、その目論見は叶わなかった。

思いがけないところに連邦の大部隊が控えていた！

「な、何だ!? ここにも連邦が、こんなにも多く…… 連邦はいったいどこまで戦力があるんだ！ こいつはしかも、単なる増援じゃない。ここから直進すればSフィールドか。そうか、連邦め、同時波状攻撃を狙っていたか」

「司令、どうします？ 再度大きく外側を回り、Eフィールドから戻りますか？」

「そうなるのかなり時間がかかる。陽動を仕掛けたつもりがただの遊兵になるとは、この艦隊は笑えない道化になるぞ。やむを得ん、強行突破する」

俺はそう判断してすり抜けようとしたが、そうはいかなかった。

ここにいた連邦の部隊には思ったよりずっと空母が多かったのだ。しっかりとMSの網を張ってこられた。これは多少の覚悟が必要だ。

「MSが多いな。これでは艦に取りつかれるのは避けられん。どうしても排除が必要だ。こつちもMSを出すぞ！」

「各艦、MSいつでも出せるそうです！」

「よし！ ガトー、ゲルググ出る！ 機先を制して叩け！」

俺の艦隊はここからMS戦に移行する。

「クスコ・アルはガトーの支援だ。ツエーン、艦隊の直掩に付け！ シャリア・ブルは撃ち漏らしを見つけ、機動的に排除しろ！」

MS戦は目まぐるしい。同時多発なら猶更だ。

緊張して見守る。もちろん連邦のMSは数多い。だがこちらのMSの方が質という一点において大幅に上だ。

「ガトー機、撃墜数6、7、8！ い、いえ10！ 圧倒しています！」

「よし、さすがはガトー。他はどうだ」

「後衛ムサイに取り付きそうになったMS、排除に成功！ ツエーン機、接近戦で叩きました！」

これで行けるか！

いや、そこまで甘くなかったな。

やはりこうなる、というべきか。

連邦のMS隊の中に、白いMSが見える。クスコ・アルの話によるとガンダムという名があるらしい。

ついにこの艦隊に向かって迫って来た。

ん？　これまで何度も見た奴とわずかわ違う気も……

しかし、その速度、只者でない雰囲気は同じだ。

「白いMS、艦隊中央部に急速接近！　あ！　カヤハワ機のドム、大破しました!!」

「何！　カヤハワが！」

「しかし、生存信号はありません。通信は壊れています。意識あり！」

「急いで救助だ！　カヤハワを何とかしても助ける！　それでガンダムはどこへ」

「更に艦隊へ接近、しかし既にシャリア・ブル機のギャン、向かっていますー！」

そのガンダムの中では、パイロットが通信を受けている。

「バニングからガンダム三号機へ、突出し過ぎるな。ベイト、アデルを待て」

「こちらコウ・ウラキ、了解。しかしジオンMS接近！」

それと同時刻、ア・バオア・クーのベイでは一組の男女が会話をしている。

「大佐、もう出撃ですか？」

「ああ、早めに出ておかないと、あのデカイモビルアーマーに乗せられそうだからな」

「ふふ、悪辣ですね。だから今のうちゲルググで出てしまおう」

「用意してくれたのは嬉しいが、正直持て余すな。誕生日に一抱えもある甘いケーキを送られた気分だ。出るならゲルググの方がいい。

第一、パーソナルカラーにしてもらったゲルググを残しておいても、誰も使わないだろう」

「大佐、お願いがあります」

「何だい、ララア」

「出撃にノーマルスーツを着ないで出て下さい」

「なぜ？ 私はそれで構わないが。しかしララアはいつもノーマルスーツを着るように入るさく言うじゃないか」

「今回の出撃は、わたしが一緒だからです。大佐に誰も近付けさせはしません。一機たりとも。絶対に」

宇宙は、混迷の色に染まる。

あらゆるものを巻き込み、更に深く。

第十九話 戦い方の問題

同じ頃、地球上のあちこちで摩訶不思議な現象が見られたという。突然、家から外に飛び出していく子供がいるのだ。

ピアノでもゲームでも、やっていたことを全て投げ出して。道路へ、公園へ、駆け出す。

そして同じことをする。

腕をまっすぐ上げ、空に向かって指さす。

そこには何も無い。

空しかない。

何も見えるものはない、はずなのに。

次に、そういう子供たちは声もなく涙を流す。

理由は分からない。

聞いても答えられない。

子供たち自身にも分からないのだから。

涙は感情で流れるもの。

その涙は、悲しいことへの涙である。

人が死んでいくのに、悲しいという感情は、当然のこと。

「ジオンMS接近してきます！ 見たことのないタイプ！」

「コウ・ウラキ、そいつを墜としたら合流しろ。第四小队全員でこの艦隊を叩く。こんなところへ急に現れたジオンの艦隊だ。ただものがあるはずがない」

そして連邦のガンダムはシャリア・ブルが搭乗するギャンと戦闘に入る。

俺の方でも最大限注目し、チベのスクリーンにその戦いを拡大投影

させている。

この勝負はコンスコン機動部隊の運命を大きく変えるだろう。

俺の艦隊はこの宙域では孤立無援、たとえ一機であっても、強力な敵MSに好きにさせてしまえばたちまち大損害を被る。懐に入りこまれてしまったMSは艦にとって天敵だ。

しかも、今の相手はただの連邦MSじゃない。

ガンダムなんだ！

どうにかしてガンダムという化け物を抑えなければ。

こちらのシャリア・ブルはギヤンの軽量高機動を生かして迎撃に向かう。

というより接近しないと勝負にならない。連邦はビーム・ライフルの技術ではジオンよりずっと先行している。ジオンも最近になってやっとゲルググにビーム・ライフルの配備が始まったが、それより連邦のものは威力も精度も高い。

前方投影面積を最小にしながら接近するギヤンをガンダムのビーム・ライフルが迎え撃つ。

二撃、三撃、しかし当たらない。

ギヤンに乗るシャリア・ブルの先読み能力なのか、駆け引きの結果なのか分からない。

シャリア・ブルはガンダムが右腕でビーム・ライフルを持っているのを見て取ると、左へ左へと回り込もうとしている。

これは上手い！

上下、あるいは右方向より、左方向へ射軸を変える方がずっと難しいからだ。その人間的な弱点をシャリア・ブルは突いた。

やや上下へ揺らしながら左へと回り込み、射線を躲していくと、一気に下へダイブした。

そして再び浮上してきた時には接近戦の間合いに入っている。

ここからギヤンとガンダムがビーム・サーベルで斬り合う。

かつてあのマ・クベ大佐がMS戦をこなしたのは、ギヤンの特性が大いに役立ったからだ。

先ずギヤンの大きな利点は、ビーム・サーベルが強力なところだ。

ギャンは残念ながらビーム・ライフルへのインターフェースを持っていないが、その分ビームサーベルへの供給経路が整っている。結果、あのガンダムのビーム・サーベルよりもはつきりと長く、強力なものにできる。

そしてもう一つ、ギャンの関節駆動は流体アクセラレーター技術により次世代級のスムーズさを持っている。ツイマツド社はややもすると技術先行型のきらいがあり、コストや整備性を軽視しがちだが、技術的先見の明はある。初期にはどうしようもなくトラブルの続出した新技術だが、ようやくこなれてきた。

手数でスピードでシャリア・ブルのギャンが上回る。

そのビーム・サーベルがガンダムを後手に追いやっている。

押しているじゃないか！ あのガンダムを。

だが、得意の接近戦でも仕留め切れない。やはりガンダムは強い。外装の金属は硬く、熱にも強いようだ。ギャンのビーム・サーベルもかすただけでは切れやしない。決める一撃を叩きこまなくては。

そして、反応性もさすがにガンダムだ。簡単に必殺の斬撃を当てさせない。しかも、戦っているうちに、もつと速くなってきたじゃないか！

学習能力も高い。

パイロット特性なのか、ガンダムの制御プログラム自動最適化のおかげなのかは分からない。分かるのは、ある時を境に逆転されてしまったということだ。

ギャンの方が防戦に回らざるを得なくなった。

ギャンは腕のビーム・サーベルだけに頼るのではなく、空間を撥ねるような動きを繰り返し、ガンダムの攻撃を避ける。

迫るガンダムに合わせ次第に退いていく。離れ過ぎればビーム・ライフルの間合いとなり、近付けば押し込まれて斬られる。心臓に悪い戦いになってきた。

「不味い。ここは他のMSを支援に…… いやダメか。横から手出しのできるレベルの戦いじゃない。しかしシャリア・ブルをこのまま戦わせるわけにいかない。失うわけにはいかないんだ」

大きくガンダムが振り斬った。そこをなんとか躲したギャンは、思いつき後退した。予想通りガンダムは前進しつつサーベルを捨て、ビーム・ライフルを手にする。

万事休す！

この中途半端な距離ではビームを避けることはできない！ 必ず当てられる。しかも一撃で爆散するだろう心臓部へ。

俺のうかつな指示のために、こんなことに！

後悔しても足りない。

しかし不思議なことに、ギャンは背中を見せずゆっくり後退するだけだったんだ。

ギャンがビームに撃たれる、ことはなかった。

そう予期した直後、拡大したスクリーンの半分がいきなりオレンジ一色に染まる。

「な、何！ これは、チベの主砲か！」

その通り、こつちからの主砲がその場を撃ち抜いた。

この遠距離、しかも二機のMSのど真ん中を主砲のメガ粒子が通り過ぎた。

ようやく理解する。

こんな戦い方があったんだ。

シャリア・ブルは驚くほど冷静だった。しかも老練な戦い方をした。

接近戦の斬り合いでさえ、もはや挽回できないほど不利になったことを悟ると、押されていくフリをしたんだ。そしてしだいに俺のチベの方へと誘導していったとは。

もちろんチベの砲撃を信頼してのことだ。シャリア・ブルもダリル・ローレンツが使うチベ主砲の超々精密射撃を知っている。

最後、大きく後退したのは合図のようなものだ。

これでダリル・ローレンツが主砲を撃てるようギャンはガンダムとの間をあけた。

一方、ガンダムも艦の対空砲のことを忘れていたわけじゃない。普

通なら充分、有効射程外にいると確信していたのだろう。

しかし対艦攻撃用の主砲を、こんな精密射撃でMSに撃つてこられると予想できるはずがない。

おまけにギャンを追って前に出ようとしたところだ。直ぐに向きを変えられない態勢にあった。

しかしさすがガンダムだ。墜とされはしなかった。

どれだけ反応が早いのか！

だがそれでも、ビーム・ライフルを持っていた右腕は丸ごと溶かされて消えた。いかに強い金属でも主砲レベルのメガ粒子砲には無力である。

ガンダムはもうシャリア・ブルを追うのは諦めたようだ。

更に一撃、ダリル・ローレンツの主砲を躲すと帰投していった。

「こちらコウ・ウラキ。右腕を失う中破。至急全員に連絡されたし！あの艦隊のMSは予想以上に高機動のタイプ！そして何よりもMSへ遠距離から対空砲を使ってきました！」

俺は艦隊をゆっくり前進させた。

途中、またしてもMSの襲撃を食らってしまう。

艦隊の左から四機、右から五機の二つの連邦MS小隊だ。

さっきの戦闘でチベ主砲を警戒していたためだろうか、連邦MSは慎重に機を伺っていたようだ。こちらは素早く迎撃態勢を整える。

結果的に排除できた。

百戦錬磨の連邦MS、しかも本来なら連携のいい小隊なのだろうと思われる。だが、俺のチベを警戒して動きが若干ギクシャクしている。そして実際に艦砲で分断ができたら、後はドム隊で囲んで叩く。かなり粘られたが、隊長機らしいのを墜とした時点で、向こうは戦意を失ったのだろうか。そのまま退いて行った。

「お前ら生きてるか？ 悪いな。今日で不死身の第四小隊は解散だ。側にライラの小隊がいたはずだから、助けてもらえ」

「バニング隊長！ 機体を捨てて脱出を！」

「アデルか。いや、さっきの攻撃で傷を受けた。もう助からん。こんな有様で、不死身というのは言い過ぎだったな。だがお前らはこの先も生き延びろ」

「そんな、隊長がいなくなったら……」

「らしくないことを言うようだが、最後だから許してくれよ。今迄よくついてきてくれた。俺はお前らの隊長でいられて、楽しかったぞ」

第二十話 ガンダム再び

俺は艦隊をそのまま進める。

そして目にしたものは、死闘だった。

先行して出したガトーのゲルググ、クスコ・アルのエルメスが見事な連携を保ちながら戦っている。

それでも倒せていない。

相手が何かなんて、決まっている。

見慣れたくないのに見慣れてしまった相手、あの化け物MSガンダムだった。

ま、またしてもガンダムなのか！ 俺はガンダムを引き当てやすいらしい。

ガトーは一度ガンダムと戦ったことがある。そのとんでもない強さは分かっているはずだ。もちろんクスコ・アルも知っている。そのガンダムと戦って敗れたところを救助したのが俺の艦隊にいるゆえんだからだ。

できれば戦いたくないだろう。

しかし、俺の艦隊にガンダムを近づけさせないために、逃げるといふ選択肢はない。果敢に立ち向かっているんだ。

クスコ・アルがエルメスのビットを駆使して仕掛ける。

こいつはいっつ見ても凄いと驚嘆させられる。色々な位置にあり、そしてバラバラに動いているビットから敵に向かってビームが放たれるんだ。しかも同時に。

間髪を容れず、次々と仕掛けていく。

まるで鳥かごのようにビームの線がガンダムの周囲に軌跡を描いていく。

だがこれで墜とされるくらいなら化け物ではない。ガンダムはそんな全方位から来るビットの攻撃さえ躲していく。

更に逆襲に転じてきたではないか！

ガンダムのビームライフルがビットを狙い撃つ。あつさりとビットを貫き、閃光と共に消滅させた。そしてもう一度、ガンダムは振り向きざまにビットを撃つ。これもまた命中し、消し去った。どうしてそんなことができるんだ！

しかし、この呼吸を読んでガトーが接近していた。

言葉に出す必要もない連携作戦だ。あえてビットに注意を向けさせ、ゲルググが接近する隙を作った。

ガトーがS字状のビーム・サーベルを回転させ、ぶつからんばかりに急接近し斬りかかる。

これは速い！

以前戦った時のガトーの乗機はドムであり、はつきりと動作に遅れがあった。しかし今はゲルググの性能を活かしている。

ゲルググはジオンの傑作機との呼び声も高い。

これまでのジオンのMS戦闘データを存分にフィードバックして優秀な戦闘支援ソフトウェアを作り出している。確かに連邦も驚異的な速度で優秀なソフトウェアを開発しているが、検討できるデータ量そのものであれば当然ジオンに一日の長がある。

ハードウェア的には、目新しいものはあまりない。ギヤンのような流体アクセラレーターはない。材質もザクよりマシな程度、ただの高張力鋼であり、ガンダムのようなチタンではない。ギヤンでさえ一部にモリブデン・バナジウム特殊鋼を取り入れているのに、それすらない。しかしながら手慣れた技術で非常にバランスよくまとめられている。

ジオニツク社は円熟した技術をとて上手く組み立てる。外装も、無駄に尖った部材も意味の薄い装飾もない。合理的であり洗練された設計である。

ガトーのゲルググとガンダムが斬り結ぶ。だが、ここでもやはりガンダムはガンダムだ。

戦闘力はとてつもなく高い。接近戦でもガトーを打ち破る実力を秘めている。

しかし、今は戦いの場をクスコ・アルの操るビットが取り巻いてい

る。

まだエルメスの二個のビットは残っているのだ。外側から盛んに撃ちかける。

誤射も恐れない猛攻だ。

ビームが途切れることがない。

さすがのガンダムもビットのビームを躲しながらガトーと接近戦を戦うのは骨だと思っただろう。いったんガトーのビーム・サーベルを打ち払うと、大きく距離を取ろうとした。

これをガトーは待っていた！

大きく上体を後ろに反らし、その反作用で足を前に出した！

そしてガンダムの足を引っ掛けたのだ。

まるで肉体の格闘戦である。思わぬことに体勢を崩したガンダムは不利な形で応戦せざるを得ない。

それでもなおガンダムは立ち直り、ガトーに相對する。

今までが本気でなかったかのように鋭い斬撃を繰り出し、ガトーのゲルググに迫る。

やはり化け物だな、と俺は思った。

だが、勝負は突然終わった。

ガンダムはなぜかまた大きく後退し、それでも撃ちかけるビットのビームを避けるとそのまま退いていったのだ。

どういふことか分からない。

勝負をいきなりお預けにするとは。

いや、その数分後に答えがあった。

「連邦艦隊、動き始めました！ 一斉にエンジン全開にした模様です！」

「なるほど、連邦もこちらの艦隊など相手にする義理はない。ア・バオア・クーへの侵攻を始めたというわけか。しかもジオンが主力を置いていないSフィールドへ行く気だ。あのガンダムは木馬へ急に呼び戻されたのだろうか」

俺は副官に対して正直な感想を述べた。

連邦艦隊はこんなところで時間を浪費して予定を狂わせる気はないんだろう。

俺としては当然、追撃をかける。危険でもやるしかない。

「どうします、コンスコン司令」

「追うしかないだろうな。MSを全て收容、その後発進！」

ただしそれはさすがに甘かった。

連邦の指揮官も俺の艦隊に追撃させる気はなく、策を講じていたらしい。

オペレーターが突然叫ぶ。

「ああつ、前方に機雷群発見！」

「何、そんなものを」

「ミノフスキー粒子が濃くて、避けるのは困難と思われます！」

「連邦も馬鹿ではなかったのだな。なるほど、これでは後方から追尾は不可能だ」

非常に濃いミノフスキー粒子と、機雷を置き土産に散布していったのだ。こいつを進行方向に置かれると厄介である。短時間で排除はできない。

「どうします、司令」

「Sフィールドへ行けなとなれば、さっさと切り替えるしか方法がない。このコンスコン機動部隊はNフィールドへ向かって全速前進！あの連邦の艦隊は、Sフィールドにいるキシリア閣下の部隊に任せるしかない」

さて、Nフィールド到着までわずか空いた時間を利用して、俺はいくつかのことをしておきたかった。一つはカヤハワの見舞いだ。カヤハワはドムが大破されたものの救助された。打撲を負ったが重傷ではないと聞いている。

病室に入ると、なんだか人が多い。

カヤハワのベッドはドムパイロットの若い男たちに囲まれていた。

さすがに皆から人気のあるカヤハワだ。

俺はなんだか居心地の悪さを感じながらも見舞いの言葉を言う。

「どうだ、具合は」

「はっ、司令官！　そう遠くないうちに復帰できます！」

「それほど焦らなくていい。副隊長はジョイスに頼むことにする。ゆっくり体を治せ。さて、艦内病室に花は置けないが、リングゴでも剥いてやろうか？」

「司令官殿、ジョイスです！　カヤハワ副隊長のため、リングゴは小官が剥いておきました！」

「は、はは、そうか。ではお大事にな、カヤハワ」

ジョイスは生真面目そうな若者だ。俺の軽い冗談に真面目に答えてきた。確かに切られているリングゴが見える。

若者たちのいる場所にとどまるのは悪いような気がして、俺は早々と立ち去る。

別にカヤハワともっと会話したかったわけではないが、なんか寂しいな！

さて、次に戦闘の模様について直に聞きたいと思った。

特にあのガンダムと戦った人間から。

呼び出すより、こつちから出向いた方が早い。チベは移動に数十分以上かかるほど大きな艦ではない。

パイロット控室に向かう。入る直前、中から大きな声が聞こえる。

「ガトー大尉、あんな危険なこと、もうしたくないわ！」

「しかしそうしなければ、ガンダムに対抗できなかった。ビットのビームがあればこそ接近戦を演じられたのだ」

「でも、間違つて大尉のゲルググに当たってしまったら！　取り返しがつかない。私はそこまで先読みなんかできないわ。私は、ララアじゃないのよ！」

「俺はララアという者のことは知らない。それがどんな能力かも。しかし、だからといってお前が自分をそんな風に思う必要はどこにもない。他の人間と比べる必要は、最初から無い」

「……」

「俺はできると思ったから任せただ。誤射の可能性など考えなかつ

た」

「そんな、私などを信じて……」

「他の人間ではなくクスコ・アルという人間を信頼した。もし撃たれて死んだのなら、それでもいい」

「……」

ちよちよちよちよつと待ってよ、ガトーさん!!

それ言い方違うから!

ガトーとしては、ガンダムと戦う支援としてエルメスのビットを必要としたんだろう。

誤射寸前のギリギリのところで、それは成功した。ガトーは最初からエルメスを信頼に足ると判断したからこそ、その作戦にした。

充分成功の見込みがあったから頼んだまでだと伝えたくて言っているに違いない。

だけどき! ガトーさんはクツソイケメンなんだってばよ!!

絶対誤解されるパターンだつて!

分かんないの? 何でいつも同じパターンなんだ。

もう少し、違う言い方あるだろ!

クスコ・アルはなんか考えてるじゃないか。

それで黙ってしまった。

俺は控室には入らず、そのまま後にした。

艦橋に戻る。途中、ちらりと休憩室が目に入った。そこではツエーンがミルクの入ったパックを手に皆と談笑している。なんとなく俺は、今パイロット控室にツエーンがいなくて良かったな、と思ってしまう。

なんで俺がそこまで考えなくちゃいけないんだよ! というか部外者過ぎる……

このア・バオア・クーの戦い、それは別名エースの戦いと呼ばれている。

たった一割の者が、実に戦果の九割を挙げているからだ。両軍とも

それは同じである。

今の戦いさえ、まるでそよ風のように感じられる、そんな激闘が始まるまでもう少し。

第二十一話 NフィールドとSフィールド

艦橋に着いて間もなく、俺はまた病室に行く羽目になった。

「コンスコン司令、捕虜の一人に意識が戻りました」

「ん？ あのMSから救助した者のことか？ 重傷で病室に入れたという？」

「そうです。容態は安定しているので、簡単な聞き取りなら可能だということですよ」

「なら私が話してみよう。まあ、情報を引き出せるかどうかは分からないが、話して損ではあるまい」

そして俺は衛兵によつて警備されている病室へ行つた。

「救助して頂いたことには感謝する。ジオンにも人間味のある艦があったのだな。だが一切、情報を搾り取ろうなどと思わないことだ。最初にそれは無理だと言っておく」

「それはこちらも期待していない。そして人間味ということなら、ジオンだから存在しないということはないだろう」

相手は日に焼けた顔に金髪で、目に力のある精悍な男だった。いかにも頼りがいのある隊長、という感じだ。

そして捕虜になつている今も毅然としたものである。

「コロニー落としをやったジオンがそれを言うとはな……俺の部下にも聞かせてやりたいものだ。それで一瞬にして恋人を失つた者もいるのだが」

「……それは今の話題ではないだろう。話を元に戻そう。ドズル中将麾下宇宙攻撃軍機動部隊司令コンスコン少将だ。貴官の救助は本当に幸運だ。大破したMSの自動救助信号を受けて近づいたら、負傷で気を失っていた貴官が中にいた。おそらく意識があれば、貴官は抵抗し、こちらはやむなく爆破しただろう。バニング大尉」

俺はこのバニング大尉が、とても立派な士官に見えた。多分意識があれば最後まで戦つただろう。連邦のためか、あるいは部下のため

「こんなことになったのは俺も意外だ。しかし、名前くらいは機体情報から取ったのか。だがコンスコン少将、さっきと同じことを言うが、感謝はするが情報は出ささん。作戦についても、部下についても」「そこまでは期待しない。まあ、ゆっくり養生すればいい。戦いが終わったら、捕虜交換協定に基づき、貴官も連邦に戻れるかもしれない。その時までこの艦が残っていればだが」

「この艦だったら墜ちやしない。俺が保証するのもおかしい話だが、この艦はめっぽう強いからな」

「褒めてもらえたと受け取っておこう、大尉。素直に嬉しい。そう、この艦もMSも、俺の部下は強いぞ。俺は助けてもらってばかりいる」「……面白いな。俺はジオンは嫌いだが、あんたは嫌いじゃないぜ。少将」

ある意味、良い話的な流れになってしまったじゃないか。情報はやっぱり何も得られなかったけどな！

だがその頃、深刻な雰囲気のある場所も存在した。

ア・バオア・クーの中央指令室である。ここではドズル中將が迎撃の指揮をとって奮戦していた。

「第二次防衛線、破られつつあります！」

「ドロス、ドロワ、ミドロの三空母は交代しながら砲撃の手を緩めるな！ 何としてもMSを近づけさせてはならん！ 敵の密集しているところへ岩礁ミサイルを撃て！」

「あつ、敵MSに突破されました！ ドロスに至近です！」

「何!? こんなに早く！」

メインパネルにそれを拡大投影させると、ドズルは驚くことになる。

ジオンのドムを次々と打ち倒し、まるで野獣のように跳ね回る連邦MSがいた。進むことが目的ではなく、あたり一面のジオンMSと戦うことが目的のようだ。しかもビームで貫くだけではない。コックピットを狙って踏みつぶすなどの戦い方をしている。

「あのMSを叩け！ シン・マツナガに連絡！」

その後、白く塗装されたゲルググが移動してきた。ジオンMSに多大な損害を与えた野獣のような連邦MSを見定める。

互いに認識した。

そしてゲルググはビーム・サーベルをゆっくり正眼に構え、その後一気に距離を詰める。

連邦MSの方も素早い反応速度でビーム・サーベルを抜き放った。返しの一撃をくれてやるつもりだ。横薙ぎの姿勢を取る。

だがしかし、ゲルググの方が技量において勝った。

ビーム・サーベルが一閃！

連邦MSを袈裟懸けに斬り払い、ゲルググはそのまま後方に飛びすぎる。一瞬後、連邦MSは爆散して果てた。

連邦空母の一隻ではこの一騎討ちを罵る声があった。

「ジャマイカン艦長、ヤザン・ゲープル中尉、戦死！」

「ちっ、口ばかりの奴が！ 一騎討ちなど馬鹿なのか！ せめて相討ちにでもしたらよかろうが！」

ア・バオア・クーの方では、ドズル中将が一息つく。

「連邦の突破口を封じ、立て直せ！ 移動できる岩礁砲台を使って盾にしろ。だが、そこだけは何とかなつたが、全体として不味い。MSの数も足りないのに、その上脆過ぎる。やはり学徒兵ばかりでは士気は高いが技量は心もとない。いや、それは逆だ。せめて士気が高いことを褒めてやらんとな。ジオンの未来ある若者たちだ」

そこへとびつきりの凶報が舞い込む。

希望の芽を刈り取るようなニュースをオペレーターが叫ぶ。

「あっ！ Sフィールドに新たな敵影！」

「どれくらい規模だッ！」

「艦数、70から80隻、MS多数、急速接近中！」

「くそ、連邦め！ 別動隊といえど大戦力だな」

そしてドズル中将は、同じく戦況を見ていたキシリアに言う。

「キシリア、Sフィールドの迎撃を頼む。こちらからも応援を出した

いが、今すぐは無理だ」

「分かりました。では私は副指令室に行って迎撃の指揮を執りましよう」

「頼んだぞ。取りつかれないようにしてくれ」

「しかしドズルの兄上、今のうちに提案があるのですが」

「何だ？ 早く言ってくれ」

「二人とも指揮を執るのなら、二人が死ぬか捕えられればザビ家の者は幼いミネバだけということに。それはいかにも不味い事態、今のうちにギレンの兄を後方へ送ってはどうかと」

「……なるほど、万が一のため、か。確かにそうだなキシリア、ミネバだけにするわけにもいかん。ならば兄貴は早めにズム・シテイへ送ろう。Eフィールドにいるカスペン大佐から艦を出してもらうか」

「Eフィールドから。なるほど連邦は来ていない。今であれば」

そしてキシリアは中央指令室を出た。腕のインターホンを使ってオペレーターに指示を出す。

「私だ。シャア大佐につないでくれ」

「シャア大佐なら、ゲルググに搭乗して発進直前です」

「構わん、早く頼む」

「キシリア閣下、驚きました。これはさすがにお目が高い。私がジョングを使わないのをもう知っておられたとは」

「？ そうなのかシャア。そんなことはどうでもいい。伝えたいことができたのでな」

「一体何を？ キシリア閣下」

「ギレン総帥がEフィールドから脱出予定だ。サイド3方向へ向かう艦があればおそらくそれに乗っているだろう」

「分かりましたが、それで私に何を？」

「なに、連邦との争いに巻き込まれて失ったりしないようにな。そんな間違いが起らないよう、あらかじめ注意をしたかっただけだ」

「……なるほど。それでわざわざ伝えて下さったとは。では、ギレン総帥が失われるなどといった不幸な事件が起らないよう、微力を

尽くします」

「それでいい、シヤア」

そんな一連のことなど知らない俺は、艦隊を率いてNフィールドへ急行した。ここはジオンの庭のようなものだ。案外早く辿り着けた。

そこで見えたものは正に激戦、ジオンと連邦、共に百隻近い艦艇とその数倍にもなるMSの戦いだっただ。しかしながら、詳しく見れば均等ではない。はつきりとジオンが押されている。戦線維持が精一杯のように思えた。ただしジオンの巨大空母三隻は健在のようので、激しい対空砲火を放っている。

「よし、直ちに戦いに加わるぞ！ 連邦をなんとか押し返す」

「作戦はどうします、コンスコン司令」

「ムサイを前に出した縦列直線編成を取れ。まずはサラミスを沈めて連邦の目を此方に引き付けるんだ」

こうして俺はさっそく連邦の艦隊へ斜め後方から襲い掛かる。

ア・バオア・クーの方でもコンスコン機動部隊の参戦は観測されている。

「ドズル閣下、コンスコン機動部隊発見！ 戻ってきたようです。チベ三隻を含む十六隻、連邦艦隊へ向かって突撃中！」

「なに！ コンスコンが。これは助かる！ しかも奴め、艦をほとんど失っていないとはな。そして今は縦列をとって……なるほど、そういうことか。さすがにコンスコンだ。相変わらず戦術が上手い」

さて、俺が突撃すると連邦艦隊も気付いたようだ。早めにサラミスの一隊が分離して回ってきた。

そして俺の艦隊が縦列と見てとったのだろう、それらのサラミスは散開して戦いに臨む。

理由はよく分かる。

当然そう来るだろうな。

ムサイは前にしか撃てない。

しかし、逆にサラミスは前に撃てるのは半分しかない。

これは艦の構造の問題だ。

サラミスはムサイと違い、艦の前後に砲塔が分かれているんだ。そのため、まっすぐ向き合ってしまうと後ろの砲塔が使えなくなり、威力が半減する。サラミスの艦隊としては横向きにすれ違いになりながらの砲撃戦に持ち込みたいのは理の当然だろう。また包囲した方が動きを抑えられるのも基本である。

ただしそれを待っていた。俺の戦術はドンピシャだ！

「こちらのMSの待機範囲内にサラミスかかりました！」

「よし、MSで奇襲、沈めまくれよ！」

俺は最初からMSを出して、広げておいたんだ。

そこへ散開した連邦のサラミスが自ら引っ掛かっていく。サラミス同士の距離が開いていけば、当然対空砲火は薄くなる。MSで叩くには理想の条件がこれで整った。

すぐさま俺のMS隊がサラミスに取り付く。

「ガトー機、サラミス撃沈！」「シャリア・ブル機もサラミス大破！」「ドム隊、アインス機、フイーナ機でサラミス撃沈！」「更にガトー機、もう一隻撃沈！」

狙った通りだ。かなりの戦果を上げていく。

しかし浮かれている暇はない。

第二十二話 フルアーマーの恐怖

サラミスはもちろん強力な巡洋艦で、数の上では連邦の主力だ。しかしながら戦力で見るとそうではない。マゼラン級戦艦の方がはるかに強力な火砲を持ち、砲撃戦での主力だ。

それと何よりも、MS戦が主流になった今、MS搭載空母が連邦の戦力に大きな比重を占める。

これらが無傷なら連邦にとって大した痛手にはならない。ざっと戦場を見ると、そのマゼランが十隻近く浮いている。

「よし、次は一番近いマゼランをやる。そこへ向かって進め！途中で編成を組み替え、チベを前に出すんだ」

チベを中心としてムサイを従えた矢型の陣形にした上で突き進む。狙ったマゼランを射程内に捉える。

そして撃たれる前に撃つ！

「このチベから順に、メガ粒子砲、撃て！」

メガ粒子砲の美しくも凶暴な線が一直線に伸びていく。

最初の着弾はマゼランの砲塔のやや下だ。いち早く相手の砲撃力を奪いながら、誘爆を招く。そんな絶妙の位置だ。

「マゼラン、艦体中央部に爆発、大破!!」

「よし、後はチベ全隻で叩け！ただし、撃沈が確定したら中止」

「了解しました。しかしそれは？」

「連邦の艦といえど乗員が逃げられる時間くらい残してやれ」

初弾から三分もしないうち、そのマゼランは爆散して消えた。

砲撃戦の行方を決定づけたこの圧倒的な初撃を可能にしたのは、このチベの砲手、ダリル・ローレンツズにおいて他に誰もいない。

射程内であればメガ粒子砲の威力も充分だ。超精密に狙った場所に撃ち込めさえすれば、あのマゼランでさえ一撃で大破に追い込める。

この結果は連邦も予想外、慌てて回頭してくる艦がいくつもある。俺はもう一隻に狙いを定め、同じように砲撃戦で斃した。

この調子でマゼランをもう少し沈めておくか？
いや、優先順位は違う。

先に空母を潰さねばならない。もちろん、戦闘開始からけっこうな時間が経っているため、空母にMSはあまり残っていないだろう。しかし、補給や整備のためにMSが帰ってくる以上、空母が減れば稼働率が大幅に落ちるのは自明だ。連邦のサラミスやマゼランはあまりMS搭載能力がなく、空母を別に設定しているところがこの場合運用上の弱点にもなる

あまり時間がない。

うかうかしていると俺の艦隊の方が連邦MSに囲まれてしまう。いくらこちらのMSが強いとはいえ、数百ものMSを同時に相手にできるはずはない。

艦砲の弱い空母の群れに思い切って接近すると、思うさま砲撃を加えてこれらを斃す。

俺のチベではダリル・ローレンツの第一砲塔に集中してエネルギーを回しているため、砲身冷却が必要な時間以外、連続で撃てる。そして、ダリル・ローレンツは精密なだけではなく連続速射も可能だった。

むろん空母には直掩の連邦MSが付いているものだ。

それらの連邦MSの相手はやはりMSの役目だ。こっちのガトーなどのMSが討ち払う。

さっそく発進させるが、単機で充分なものは単機で、しっかり隊を組むべきものは隊で戦闘をこなすようにした。

シャリア・ブルはそのため単機だ。しかしあれ？ ガトーとエルメスが一緒だ。それほど強敵はいないはずだが。

だが、ここで思わぬことが起きた！

「あつ、ツェーン機に異常！ 操縦系失われています！ 通信も応答なし！」

「ど、どうした！ ツェーンが!? 攻撃を受けたのか!」

「コンスコン司令、いえ、機体に被弾はありません！ 故障でもないようです」

「原因のことは後回しだ。とにかく救助を急げ！ 動けなければ、た

だの標的だぞ!!」

この事態に最も早く動いたのはアナベル・ガトーだった。

対空砲の雨を驚くべきスピードでぐり抜け、動きの止まっているツエーンのギャンの腕をきつと捉え、曳航していく。

ツエーン機が対空砲火の餌食になる寸前で救助できた。

ガトーはツエーン機を俺のチベに置きながら、原因の手がかりを言ってくる。

「おそらくギャンの中で気を失っているんだろう。そういえば、他でも似たような話を聞いたことがある気がする」

「医療班です！ ガトー大尉、それはどんな」

「ニュータイプという能力が発展途上にある者は、近くで人の死があまり多いと、精神にダメージを受けてしまうそうさ。今のツエーンはそんなダメージのせいだろう。こんな大規模な戦場は初めてじゃないか。俺だってそうだが」

「受けたダメージの回復は？」

「それほど時間が経たないうちに意識は戻るそうさ。そして戦場に慣ればそういうこともなくなると聞いた」

俺はそのガトーと医療班の会話を聞きながら、心から安堵した。

大事には至らない。しかし、話の内容からすると、ツエーンはやはりニュータイプの素質を急速に開花させているのだろうか。

そこで俺は意識をこの戦場に戻した。まだ戦いは続いている。

いや、一つの区切りに近づいていた。

連邦MSの排除は思ったより順調に進んでいたんだ。

その光景は順調というべきか空恐ろしいというべきか分からない。ガトーが去ってツエーンを救助した後、そこにぼつんと残されてしまったクスコ・アルのエルメス、それがいきなりビットを全て放った。

これまでにないほど遠距離へ、全方位に展開させると、それを使って連邦MSを容赦なく狩り始めた。絶え間ないビームが連邦MSの隊をバラバラに切り刻み、消滅させていく。

圧倒的だ。もう向こうは既に戦意ゼロなのがスクリーン越しにも分かる。

もちろん戦果が大きいのは嬉しいことなただけれど……
ちよつと怖いよな！

もしかしてもしかするとエルメスさん、八つ当たり、であらせられるのでしょうか……

その後、俺は連邦の空母隊を思うさま叩く。

むろん全部なんかは無理だ。しかし半分に砲撃を当て、その更に半分は大破以上に追い込んだ。

そして直ぐに撤収に転じる。

連邦MSが本気で前線から空母直掩に戻ってくる前に、なんとか迂回してジオンの制空権内に入れた。

岩礁を避けて飛ぶ艦隊運動なら負けやしないよ！

ここからは他の隊と共同歩調で連邦と戦う。

自分で言うのもなんだが、俺の一連の行動により、ジオンに風が吹いている。

このNフィールドの戦いはジオンの有利に転じそうだ。

俺の艦隊の周囲にいたドムたちは学徒兵なのだろうか。素人くさい動きをしているのだが、見る間に生氣を取り戻して攻勢に出ている。

「よくやった、コンスコン！ 見ていたがお前の戦術は見事だ。おかげでNフィールドは連邦を押し返せるぞ。もうひと踏ん張りだ」

「ドズル中将、ありがとうございます。し、しかし、連邦はSフィールドへも艦隊を向かわせたはず。もう到着したと思えますが。決して弱い艦隊ではありません。そのことは申し上げたく」

「それか、それならSフィールドに来ているが、もうキシリアを迎撃に付けた。劣勢は劣勢になるだろうが、少しくらい持ちこたえてくれるだろう」

「それならよろしいのですが……」

「キシリアの秘蔵っ子になっているシャアもいることだ。どこまでやれるのかは知らんが」

そして俺はNフィールドで、砲撃戦にMS戦に更なる激闘を続ける。周りにいた隊もコンスコン機動部隊の超絶優れた能力に驚いているようだ。

ちよつと誇らしい。

俺の力ではないけどな！

気になることといえば、俺の隣にいる隊が若干勢いが無い、というか消極的に見えることだろうか。

まあ、激闘を続けて疲れたのだろう。俺の気のせいかもしれない。

一応、その艦隊をチェックする。

俺の欲しいグワジン級戦艦が旗艦なのかよ！

艦の名はグワデン。率いる司令官はデラーズ大佐という名前らしい。

同じ時、シャアのゲルググとララアのエルメスはSフィールドのゲートから出ている。

「……これは、酷いものだな」

「ええ、大佐」

その光景は地獄だった。

激戦を多く見ていたシャアの目にさえも酷いと映る。

激闘の名残り、艦やMSの残骸が数多く宙に浮かび、静寂の中でダースをしている。それがさっきまで命を含んでいたとは思えない無残さだ。しかもその残骸の多くがジオン側のものである。

「Sフィールドにキシリア閣下の艦隊が50隻は出たはずだ。ゲート内で予備兵力となっているマ・クベ大佐の艦隊を除いたとしても、連邦が70隻程度なら、こんなに一方的になるだろうか」

動いているジオン艦はもう20隻を切っている。しかも刻々と削られていく。

放たれる砲撃の勢いが違う。

連邦の侵攻艦隊は傘にかかって大攻勢をかけ、ジオンに数倍する数の射線を伸ばしている。

そして何より違うのがMSの数だ。ジオンのMSはほとんどいな

い。

詳しく見れば、さすがに連邦艦隊の右翼には、艦列の乱れと損傷した艦があるようだ。ジオン艦隊の抵抗によって叩かれた跡なのだろうが、逆にいえばたったそれだけでしかない。

この惨状をもたらした元凶がいた。そのためにジオンのMSは犠牲になったのだ。

あまりに禍々しい。いつものガンダムの姿に、背部から懸架装置のようなものが付けられている。それぞれが対ビームコートのあるシールドを支えていて、合わせて何と四つもある。その他に武装としてキャノン、ビームライフル、ビームサーベルを背負っているのだ。空いている両手を使って好きな武器で戦える。

それは、地獄の使者の姿だった。

第二十三話 神の化身 VS 地獄の使者

思いもしないジオンの苦戦の跡を見ながら、シヤアが当然の疑問を言う。

「しかし、おかしいな。キシリア閣下は精鋭を投入しているはずだ。サイクロプス隊は重力戦線において半減したそうだがまだ残ってるだろうし、キマイラ隊だって出たのだ。そういえば、名前も知らないが、キマイラ隊といえばあの自信ありげなイチゴMSパイロットはどうしたんだ？」

そしてシヤアの言うサイクロプス隊の隊長機がいる。

もはや戦い敗れ、機体は中破を受け、片腕しか動かせない状態で。「キリング中佐！ キリング中佐！ くそつ、母艦もやられたか。バーナード、ミハイル、生きていれば返事をしてくれ！」

ビームサーベルを左腕で持ち、こんなことになった全ての元凶を見据える。

「お前ら…… そうか、いよいよ俺で最後ってわけか」

隊長機は逃げることなど考えてもいない。

ここに至って敵に背中は見せない。最後の一人として、やるべきことをするだけだ。

闘志を奮い立たせる。

前方に見える相手、フルアーマーガンダムはその気を感じたのだろうか。一瞬止まっている、だがここは戦場、容赦なく戦う気だ。

ビームサーベルを選択し、背中から振り抜くと、一気に恐ろしいほどのスピードを乗せて迫る。

そのまま、電光石火の速さで斬り払う。

隊長機のゲルググは何の仕事もできないまま致命傷を負った。

「クソツタレめ。サイクロプス隊はこれで終わりだ。おい、ジョニー・ライデン！ 聞こえているか！ 俺はお前からキマイラ隊が昔から気に入らなかつたし、その中でもお前はとびつきりだ。だけどな、この

連邦のクソMSより百万倍好きだぜ。後は任せた」

わずか残り数秒の間に思いを乗せる。少ない言葉に託して伝える。それが漢の最後というものだ。

「頼む、ライデン、俺の可愛い部下たちの仇を取ってくれよ。じゃあな！」

隊長機の誇りと共に、サイクロプス隊はここに消えた。

一方、そこからやや離れたところで、キマイラ隊のMSが大量の連邦MSに囲まれている。ジオンの防衛線は既に決壊している。勢い付いた連邦MSが雪崩れ込んできているのだ。

しかし、さすがにキマイラ隊である。

普通の隊なら間違いなくエース級のパイロットを集めて作られた精鋭揃いだ。しかも、身分や士官学校卒かどうかなど拘らず実力で抜擢されている。

そして現在に至るまで期待に違わず目覚ましい戦果を挙げてきたのだ。

キシリアの大いなる功績である。

能力、あるいは結果を重視するキシリアの方針のおかげだ。単に興味好の問題だったのかもしれないが、その方針は間違っていないかった。埋もれていた原石が多数、そうして輝いた。

そして、軍内でどちらかといえば弾かれていた彼らが一躍誇りある隊に選ばれたのである。キシリア麾下の宇宙突撃軍にあってキマイラ隊は勇者の誇りだ。

ゆえに彼らはキシリアを信奉すること尋常ではない。もちろん士気も高い。

その高い技量でなんとか連邦MSの群れに逆撃を食らわせる。

まともにも当たるのではなく、機動力で惑わして一対一に持ち込んでしまえば、キマイラのゲルググが負けるはずはなかった。逆に言えば連邦MSが隊列を崩さず数の利を保ってこられると分が悪い。

結局のところ、大きな損害を出しながらも活路を開くことができた。

もちろん隊長機ジョニー・ライデンの圧倒的な技量がものをいう。連邦MSを蹴散らしていく。恐怖を感じた連邦MSは包囲を解き、いったん広がり遠巻きに見るだけになった。

ジョニー・ライデンの撃墜機数はあつという間に跳ね上がった。だが、その数を誇れるような甘い戦闘状況でもない。語り継ぐべき味方がいなくなれば無意味だろう。

そんな時、ジョニー・ライデンはサイクロプスの隊長シュタイナーの通信を聞いた。

「……言ってくれませシュタイナー、俺もお前のことは嫌いだったからお互い様だ。だがシュタイナー、その遺言は聞いてやる。隊員を失う隊長の気持ちくらい分かってやるからな！」

だが、その時には逆にフルアーマーガンダムがキマイラ隊の方へ目を付けていた。

「こちらフレミング、空母ビーハイヴ、応答してくれ。クローディア、聞こえてるかい？ ジオンに生きのいいMS隊がまだ残ってるようだ。こいつらを片付けてから帰投する」

フルアーマーガンダムがキマイラ隊に向かい、直線で加速をかける。

「ああそうだ、ビアンカに言ってくれ。MSなんか乗らなくても、俺が全部片づけてやる。だけどその間、艦に置いてるドラムやキーボードが壊れないよう、守ってくれよ！ 戦いが終わればすぐセッションだぜ！」

一気に距離を詰め、キマイラ隊にフルアーマーガンダムが迫る。

一番近くにいたゲルググが気付いてビームライフルを撃つ。

しかしまったく当たらない。

「俺を墜とすなんぞ、できっこねえ！」

イオ・フレミングのフルアーマーガンダムは高機動を使い、余裕をもって躲す。

「サンダーボルトのスナイパーだって無理だったんだからよ！」

逆にゲルググをフルアーマーのビームライフルが貫く。一撃で返

り討ちにした。

慌てて寄ってきたゲルググをもう一機斃す。この間わずか数秒だ。

これを見たジョニー・ライデンが急行する。

「あのチエスターと、バツツがやられたのか、一撃で……こいつがサイクロプス隊を殺った連邦MSか。シャアの追っていた連邦の白いMS、いや、聞いていたのと違うな」

フルアーマーガンダムの異様に一瞬驚く。その強さが伝わってくる。

「隊長機から全隊に通達！ お前たちでは敵わん。距離を取れ！ このMSは俺が斃す!!」

ジョニー・ライデンはそれでも挑む。

ジオンの精鋭、誇りあるキマイラの隊長として。

「いくぞッ 連邦のMS！ 俺が真紅の稲妻だッ!!」

ゲルググが加速しながらビームを放つ。さすが、動きながらも狙いは正確だ。

だがフルアーマーガンダムの背部懸架装置に付けられた盾が動き、そのビームを簡単に弾き飛ばした。

驚いている暇はない。

第二、第三撃、全て豆鉄砲かのように弾かれた。

逆にフルアーマーガンダムが撃ってくる。すんでのところでジョニー・ライデンはゲルググの盾を持ち上げて防いだが、そこに大きな穴が開いてしまったではないか。対ビームコーティングがあるのに。同じビームライフルでも威力において格段に違うのだ。

ゲルググの盾では数回以上のビームには耐えられない。性能差は明らかだ。

しかしフルアーマーガンダムはこのままビーム戦にするつもりは無かった。

急接近すると共にビームサーベルを使う。素早く確実に仕留める気だ。さっきのビームの応酬で、このゲルググが少しばかり厄介だと感じたのだろうか。

ゲルググもビームサーベルを繰り出す。

「よし、来てみる化け物！ 斬り合いなら望むところだッ！」

戦いが始まる。

だが、すぐに判明した。はつきりとフルアーマーガンダムの方が強い。

反応速度も威力もケタ違い、まるで大人と子供の戦いだっただ。

十合ほども斬り合うが、まるで逆転の目など無い。

「く、くそッ、俺は真紅の稲妻だ!! こんなところで負けてたまるか！」

フルアーマーガンダムはまるで遊びにも飽きたと言わんばかりだ。

それまでとは段違いに速い斬撃を入れてきた。

易々とゲルググの左腕を斬り飛ばし、更に胴体部へ斜めに斬り込む。

コックピットまで斬撃が届き、空気が漏れる。ノーマルスーツのおかげでまだ生きていられる。真つ二つにされなかったことだけは、さすがに真紅の稲妻といえるだろうか。そこまでが精一杯だったが、当然のごとくフルアーマーガンダムはとどめの第二撃を入れる。

「隊長ー！！！」

そこへ横から飛び込んできたゲルググがいた。青く塗られた機体だった。

「やめろ、ユーマッツ!!」

そのユーマ・ライトニングの乗るゲルググは、フルアーマーガンダムとジョニー・ライデンの間に割って入る。

当然の結果として、フルアーマーの斬撃を代わりに受けた。

だが、これで中破されてもユーマはゲルググのビームサーベルを取り出して戦う。

フルアーマーと三度は斬り結んだ。しかし、四度目はそうはいかなかった。フルアーマーの方が速く、ユーマのゲルググを切り裂いた。

その時、周りにいたキマイラ隊のゲルググたちから幾条のビームが注がれた。

今まで接近戦を演じていたため手を出せなかったが、ここに至っては誤射を恐れていられない。

しかしそんなビームは全て躲されるか、フルアーマーの盾で防がれてしまう。

ただしその間に、エンジンが死んでいなかったユーマのゲルググが、大破したライデンのゲルググを曳航していく。

少しでも距離を開けるのだ。

だが、再びフルアーマーはその二機を追う。

そこへビームライフルを撃ち放しながら、またしてもキマイラ隊のゲルググたちが邪魔に入る。

「隊長とユーマに手を出すんじゃないやねえッ！ この悪魔がッ」

しかし、フルアーマーガンダムはこれらにビームライフルで反撃を撃った。一機のゲルググが四散する。

次にもう一機を進路上に捉え、あっさりビームサーベルで両断した。

こうして二機のゲルググを撃破してもなお、フルアーマーは更にしつつくユーマとライデンを追う。他のゲルググとは違い、ここで逃してはならないと実力を認めているからだ。

「クルツ！ ラザフォード！ お前らまでが…… キマイラ隊ッ、隊長として命令だ！ もうあの連邦MSには手を出すな!! 俺やユーマがやられても振り向くな。お前らだけでも逃げろ！ 分かったな！」

「ライデン隊長…… 済みません。その命令だけは聞くわけにいきません！ 隊長がいてこそそのキマイラ隊ですッ！ キマイラ隊に居られて俺たちは幸せでした。お願いですから隊長、俺たちのことは気にしないで下さい！」

「お前ら、何て馬鹿なことを言うんだ。俺より先に死ぬ姿を見せないでくれ。早く行ってしまえ、頼む……」

通信は音声しか伝えない。

漢たちの涙は伝えない。

それでいい。

戦場において残るのは漢の高貴な魂だ。涙の姿ではない。

邪魔をしてくるゲルググをもう一機斃し、ライデンとユーマにもうわずかで追い付くというその時。

フルアーマーガンダム目の前にビームの網が張られる。

その進路を正確に塞ぎ、どんなに躲して進もうとしても、絶対にそれ以上行かせないという鋼鉄の意思表示で。

「大佐の命令とあれば、わたしがこのMSを斃します。大破したゲルググは今のうちに退避なさい」

それは大型モビルアーマー、エルメスから聞こえる声だ。

不世出のNT、ララア・スンがこの悪鬼に立ち向かう宣言を放った！

「ほう、ジオンも何だか妙なものを出してきたな。これは丁度いい。のろまな4ビット野郎どもが相手では退屈で眠たくなったところだ。このとんがり帽子、お前なら眠気覚ましにくらいなってくれるか。8ビットくらいイケてるんだらうなッ！」

ララアのエルメスが、この戦場に降り立つ。

周りに、九体の守護天使達を引き連れて。さっきのビームはこの天使たちの矢だ。

神の化身対地獄の使者が、今、相討つ。

第二十四話 漢の生き様

エルメスは遠距離からビットを先行させる。

もちろんフルアーマーガンダム相手に接近戦は論外だ。それに持ち込ませるつもりなどない。

先手を取り、ビットから続けざまにビームを放つ。

フルアーマーガンダムはやはり盾を動かし、全てを弾き飛ばした。連邦の技術の粋を集め、惜しげもなく考えられる限り最高の材質を奢って作られたMSだ。連邦は試しながら技術を積み上げて試作機にしたのではない。最初から限界いっぱいのもを作り、そこから量産するのに必要な簡略化、コストを下げるための材質変更をしたのだ。

次にフルアーマーガンダムがビームライフルを撃つ。

それらをエルメスが易々と躲す。

いや、ビームを避けているという甘いレベルではない。

ビームを撃つ直前からその射線を外し、もう移動しているのだ。

この小手調べで互いに実力を推し量る。

どちらも、自分の相手が尋常ではなく、危険なものだと認識した。

「イケてるじゃねえかッ！ とんがり帽子さんよ!!」

「飾りを付け過ぎたクリスマスツリーさん、さっさと切り倒してあげるわ！」

次は本気の連射に入った。

今度の先手はフルアーマーガンダム、そのビームライフルが続けざまに火線を吐く。しかし、いくら撃ちかけても全て躲される。

ただし、エルメスのビットがいくら応射しても、これも防がれる。背面からビットを回り込ませても躲すか盾で防がれるのだ。全方位攻撃が通じないとは、驚く他ない。

「…… そう。これならどう？」

次はこれまでにない輝きだった。

エルメスのビットが同時にビームを放ったのだ。空間を全て把握し、全方向から見る事ができる、ラファ・スンのNT能力がそれを可能にした。

九体のビットがただ一点に向け、ビームを絞り込んだ。

それを当てられたフルアーマーガンダムの盾は、輝きに吞まれ、一瞬にして残骸と化する。

イオ・フレミングも驚く。

ビットがビームを当ててくるだけでも尋常でないのに、同時にビームを、しかも同じ場所に当ててくるとは。

強力な対ビームコーティングを張ってあるはずの盾、ガンダムシールドでも、これは設計値をはるかに超えていて耐えられない。

フルアーマーガンダムはたまらず場所を高速で移動する。

だが、エルメスのビットがそれを逃さない。

またしてもビームが捉える。これでもう一つ盾がダメになった。

「そうか、なめてかかった俺が悪い。だがな、これで優位に立つたと思ってもらっちゃ、気分が悪いぜ！」

そして何と、フルアーマーガンダムは背中の懸架装置を自ら外した。壊れた盾も、無事な盾も捨てた。ついでに重い遠距離用バズーカも捨てた。どのみちそんなものをこのとんがり帽子相手に当てられるわけがない。

敢えて身軽にしたのだ。

これでさつきより更に動きが速くなる。

この高機動に、エルメスのビットでも狙い通り当てるのは難しい。

その間、フルアーマーガンダムはビームライフルとビームサーベルだけを両手に持ち、エルメスに突進する。遠距離戦ではフルアーマーガンダムといえど勝機はなく、ここはやはり接近戦で叩かねばならない。

もちろんエルメスはビットを駆使して接近を防ごうとするが、うかつにビットを近付けてしまった。そこを逃さずフルアーマーのビームライフルが撃ち抜く。

守護天使の一体が墜とされてしまった。

その時、ララアはこの状態に違和感を持っている。相手がいくら速くても、ただ速いだけなら自分が対処できないはずがない。この空間を全て把握しているのだ。

しかし、この連邦MSの動きはとて読みにくい。

だから今も対処が遅れ、ビットを墜とされてしまった。

その原因がおぼろげながら分かってくる。

「このMSのパイロット、意識が掴めない。いいえ、獣のような本能で動いている」

いくらNTでも未来自体を知っているわけではない。

人の意識を読んで、行動の前に感じ取れるから先読みができるのだ。

それが異次元のNTララアの強みの源泉である。その力で楽々とビームを躲したり撃つたりできる。だが、このフルアーマーガンダム相手ではその意識の読みがうまく働かない。そして意識下の本能までは読み取れないのだ。

さっきまでの機動力では可能でも、今の素早い動きでは予測にブレが出てしまい、攻撃も防御も精度を欠く。

そしてついにエルメスにとって危険な間合いへフルアーマーガンダムが踏み込もうとしている。

やむを得ずビットを固めてビームの壁を作りにかかるが、そうするとやはりビットが狙われ、また一体撃ち墜とされてしまう。

エルメスは全力噴射でひとまず距離を開けにかかった。

対処を考えるのは後に回す。いずれは工夫するにしても。

このままでは接近戦になり、そうなればサーベルなど持たないエルメスが叩き斬られてしまう。

幸いにもエルメスの機体性能で直線加速だけならフルアーマーガンダムとそう変わらない。ビットのビームを時折牽制に言えば充分だ。

結果、両者の距離は変わらず保たれる。

「ララアが頑張っているのに、私が何もしないわけにいかないな」

そう呟いたのはシヤアだ。

その目にも、エルメスとフルアーマーガンダムの戦いが互いに決め手を欠き、しばらく膠着状態に入ったのが分かる。

「できることと言えば、例えばそうだな」

シヤアはラアラの元に行くのではなく、別のことを選択した。要は連邦のMSを引き剥がせばいいのだ。

目的の物を探すと、それは案外近くにあった。

連邦の軽空母が浮いていたのだ。正確にはあのMSの母艦かどうかは分からない。しかし試してみても損はないだろう。

シヤアはその空母目がけて最大速度で突進し、射程外からでもビームライフルを放つ。艦壁は通らなくても、もし艦橋に当たれば儲けもの、そのビームで司令所を潰せる。

偶然にもその空母はフルアーマーガンダムの母艦、ビーハイヴだった。すぐさまフルアーマーガンダムにも通信が行く。

「こちら空母ビーハイヴ！ ジオンのMSに攻撃を受けつつあり！ 直掩MSを出しても捉えきれない！ 相手は赤い彗星、シヤア・アズナブル!! 至急行動中のMSは戻られたし」

この報に慌てたのはイオ・フレミングだ。急遽旋回し、母艦を目指す。

そこを逆にラアラのエルメスとビットが追う形となった。

間もなくイオとラアラの目に、その空母が見えてくる。次に、その周りを飛び回りながら、連邦MSを軽くあしらっているジオンMSがいる。

赤い彗星、シヤアだ。

当然イオ・フレミングはシヤアに向かって直進しながら叫ぶ。

「おいッ、そこの赤いお前!! よくもクローディアに手を出しやがったな！ お前だけは絶対に赦さねえ！ 死にさらせっ！」

だが怒りの程度で言えば、ラアラの方こそ精神のメーターを振り切っている。

「大佐と戦うなど、このわたしが絶対に赦さない！ あなただけは消えてもらおうッ！ 地獄に戻りなさいッ!!」

エルメスの全推力を使つて、先回りにかかる。ビットをいくつかぶつけて犠牲にしても無理やりフルアーマーガンダムの進路を曲げにかかっている。

「邪魔するな！ ならばお前から先に片付けてやるッ!!」

フルアーマーガンダムがエルメスに向き直った。

すると、元々エルメスの方が追ってきていたのだ。直ぐに距離が縮まり、接近戦の間合いに入る。このチャンス逃さず即座にフルアーマーガンダムはビームサーベルを振りかざし、躊躇なくエルメスに斬りかかる。

だが、実はこれを待っていたのだ。

エルメスは本体に武装が何も無いわけではない。メガ粒子砲を二つ積んでいる。

だが通常は使わない。単なるビームではなく、本来モビルアーマーに似つかわしくないほど強力なメガ粒子砲だ。もし撃つとその衝撃は全体に伝わり、激しい振動と音になる。

戦艦の砲塔だけで宇宙に浮いているようなものだからだ。

当然、パイロットにもダメージになる。

ララアはわざとこの時まで使わずに、フルアーマーガンダムの油断を誘っていた。

今、近づいたこの間合いで、必殺のメガ粒子砲を放った。

対衝撃性に優れたコックピットでさえ揺れは消しきれず、ララアは軽く気が遠くなる。

だがしかし、フルアーマーガンダムはそれでもやられていなかった。驚くべき反応力だ。それでもビームサーベルを持っていた右腕は無残に消された。

ついでに後ろの方向に向かって飛ばされていく。

ただし、ビームライフルは左腕にまだ持っている。フルアーマーガンダムは尚もエルメスを攻撃する意志を捨ててはおらず、反転を図っている。

だが、そこに十条ものメガ粒子砲の火線が通り過ぎる。

驚いて振り向いたイオ・フレミングは新たに出現したジオン機を見ることになる

それは、足のない大型のMS、いや、モビルアーマーだった。そんなものは初めてだ。

その機体が何か分かるのは、戦いを遠目に見ていたシャアだけだ。今、ララアの救援に急行しながら不思議に思う。

「あれはジオングだな。どうしてジオングが出撃している。一定以上のNTでないと扱えない代物のはずだが。いったい誰が乗っているんだ？」

そのジオングに乗っているのはキマイラ隊のユーマ・ライトニングだった。

大破した自分のゲルググを捨て、無理やりジオングで出撃したのだ。

ユーマ・ライトニングが今度はジオングでフルアーマーガンダムに立ち向かう。

元々ジオングは、ほぼ短期突撃だけの特攻兵器だ。

もちろん普通のMSよりは大きいのだが、それでも武装のバランスがおかしい。何門ものメガ粒子砲を搭載している。当てればサラミスなどは一発撃沈というほどの威力のものを。

それを可能にするため、非常識なほど大型のジェネレーターを積んでいるわけだが、それと引き換えに航続距離は極端に短くなっている。

それなのに今、ユーマ・ライトニングは惜しまずに砲撃を放っている。帰還のことなどはや考えてもいないようだ。確かにこのメガ粒子砲ではフルアーマーガンダムといえど当てられたらあっさり溶かされて消滅するだろう。いや、かすただけでも充分だ。

だがこのジオングの激しい連射を右に左にフルアーマーが躲していく。当てられなければ問題は無い。

おまけにフルアーマーガンダムはビームライフルで反撃する。

ジオングの外装を貫き、ダメージを少しずつ確実に与えていく。

また、ジオングから離れてジョニー・ライデン隊長もこれを見ていた。

ユーマの再出撃をすんでのところで止められなかった。そしていてもたってもいられず僚機に曳航されてここまで来ている。

「馬鹿ッ！ やめろユーマー！」

「隊長、俺はずっとフラナガン機関のオモチャでした。長いこと恨んでました。あれをコンスコン少将が潰してくれてスツとしたくらいです。でも今はちよつとばかり、フラナガン機関に感謝しています。俺は強化人間として、このジオングを操れたんですから」

「そんなことを…… お前は強化人間でも何でもいいじゃないか！」

お前は人間なんだッ 俺の部下なんだッ！」

「嬉しいんです。隊長のために、ジオングを使って強敵を斃せることが」

「おい、何を考えてる、ユーマッ！」

戦況としては今、はつきりとジオングが不利になっている。

強力なメガ粒子砲も全く当てることができず、一方的に撃たれ続けている。簡単に沈まないジオングの堅牢性のためにまだ動いているだけだ。

そこでフルアーマーガンダムはより接近し、致命的となるビームを叩きこもうとした。

その瞬間を狙っていた。

ジオングは全力噴射でフルアーマーガンダムに向かって突き進む。いきなり相対速度が上がり、一瞬のうちに距離が詰まる。

ジオングが頭部のメガ粒子砲を使って最後の砲撃を撃ち放つ！

だがこの一撃も躲されてしまう。

「ジオンは芸がないな。やることがさっきのとんがり帽子とまるで同じじゃないか。しかしまだ迫ってくるとは、何だ？ 体当たりか？ ふん、当たると思っているのか」

ジオングが尚も速度を上げて進む。

それを見て取ると、フルアーマーガンダムは紙一重でジオングを躲しながら至近でビームを叩き込む気になった。

だがそうはならなかった。

ユーマの作戦勝ちだった。

すれ違いにフルアーマーガンダムのビームライフルを食らいながら、ジオングは既に最大限に伸ばしてある腕を使い、そのワイヤーを大きく動かした。

そしてフルアーマーガンダムを絡めとったのだ。これを読めなくするためわざと指のメガ粒子砲を使わず頭部のものを使っていた。

そして捉えたフルアーマーガンダムをジオングに引き寄せていく。重量のあるジオングが力では優る。

「何だこれは？ つまらん。馬鹿めが。無駄だ。無駄なんだよ！」

フルアーマーガンダムにはまだ武器がある。頭部バルカンを撃ち込んでジオングの腕を一つ破壊した。すばやく振りほどいて出ようとする。

だがその瞬間だ。

「隊長、俺を人間に見てくれて、ありがとうございました」

閃光があたり一面に迸る。

ジオングが自爆したのだ。最初からフルアーマーガンダムを抱き取り、道連れにするつもりだった。

煙が拡散すると、もうジオングの姿はない。

ジオングの強力なジェネレーターの爆発は、全てを四散させた。

フルアーマーガンダムは今、残されていた左腕も、肩も失った。右足も無い。あれほどの爆発に巻き込まれながら砕き尽くされなかったのは驚きだが、もはや原形を失うほどの大破だった。

それでもバックパックをなんとか使い、離脱していく。

その場に残されたのは、若者の輝く意志の残滓だけだ。

「ユーマ、大馬鹿野郎。お前は俺の部下だ。いつまでも、俺の可愛い部

下なんだぞ。心にある限り、ずっとな」

Sフィールドの戦いは、こうして一つの区切りを迎えた。

第二十五話 物量作戦

Sフィールドの戦いも落ち着き、ようやくジオンが立て直した。

ある程度の戦線の後退は余儀なくされた。しかしそうするとア・バオア・クーの岩礁砲台の支援を受けられるようになる。しかもア・バオア・クーの形状のため、より効果的な十字砲火に近づき、それはア・バオア・クーに近づくとほど強力なものだ。敵味方損失比であまりに不利になれば、さしもの連邦といえど無茶な攻勢を続けてはいられない。

残り少なくなったジオンMSだが機動的に運用することでどうにか補っている。もちろん、残されたキマイラ隊が活躍している。失った仲間たちのため、気迫の吊い合戦を行っているのだ。

そして逆に連邦の側ではあのガンダムさえ倒されたことが衝撃的だった。連邦の勝利の象徴、圧倒的な強者ガンダムが墜とされてしまったとは。士気に影響しないわけがない。

「無茶言わないで下さい、フレミング少尉」

「もうガンダムは無いのか！ 予備パーツはあるだろ。どうにか組み合わせられないのか。俺はガンダムのパイロットなんだ」

「ガンダムは試作機、換えなんてそうそうあるわけがありません。予備パーツといってもコア部分まで損傷している以上、無意味です」

だがここで、ジオンは余りにも大きな勘違いをしていた。

連邦はNフィールドだけで攻略できればよし、としていただけだ。

それが無理の場合に限り、やむを得ずSフィールドへの分散攻撃に踏み切る予定にしていた。この二ヶ所への同時攻撃でア・バオア・クーを攻略できないことはないかと踏んでいた。

それが叶わないとは想定外である。だがそのことが確定すると、尚も兵力をつぎ込む決定をした。

連邦は何が何でもア・バオア・クーを攻略すると決めている。

そして、それを可能にするだけの物量が連邦の側にはあったのだ。

予備兵力を残していた。

それは元々、ア・バオア・クーを捨てて敗走するジオン戦力を見極めて、横撃を掛けるためのものだ。

潰走する敵を叩くことほど楽で効果的な戦いはない。連邦としては非常に道理にかなったことだ。ジオンの戦力を確実に一掃するためには。

その力を今、ア・バオア・クー攻略のために振り向ける。

「ようやく勝てそうだな。キシリア、よくぞSフィールドを守り切ったな。案外力量はあるじゃないか。いや案外と言ってしまったのは悪い。とにかくよくやってくれた。そういえばシャアとやらも相当活躍したそうだな」

「ドズルの冗上に褒めてもらえる日がくるとは。素直に嬉しいが、まだ勝ったわけでも……こうなっても連邦に撤退する兆しが全く無い、それも妙なこと」

「確かにそうだな。連中もなぜか諦めが悪い」

戦況に光明が見え、一息つきながら中央指令室のドズルと副司令室のキシリアが通信を繋げていた。

しかし、そこへ突然割り込みが入る。

「し、失礼いたします閣下！ ただいま急報が入りました！ 複数の索敵ブイに反応があったそうです。連邦の新しい艦隊が接近中と思われまます！」

「な、何だと！ それはどこだ！ その連邦の新手は、どれくらいだ！」

「進路方向推定、Eフィールドに向かっていているようです！ 詳細はまだ出ませんが、四十隻以上の予測！」

ドズルは落胆した。

底知れない連邦の物量に呆れる思いだ。

そして連邦は一つのフィールドに密集させるより、別のフィールドを襲う方を選択した。どこか一つのフィールドだけでも破ればそこで勝ちだと知っている。ア・バオア・クーのどこの守りが弱いがある

程度の予測はつくが、戦ってみなければ分からないという面があり、また連邦は同時攻撃をするにも余裕がある。

しかし、ドズルはここで自分が動揺してはならないと思り返す。指揮官がしっかりせずはどうする。連邦の戦力が来れば来るほど、討ち果たすのみだ。そうではないか。

「連邦の兵力はどれだけあるというのか…… まるで天井が見えん。だがこうなれば仕方がない。取り付かれ、ア・バオア・クー内の白兵戦になれば厄介だ。最悪破壊工作をされてしまう。Eフィールドは、カスペンの隊だけでは支えきれまい。Nフィールドから戦力を引き抜いて応援を出さざるを得んな」

そのドズルの言葉を聞いたキシリアが言ってくる。

「Eフィールドに連邦の新たな戦力とは…… ドズルの兄上、こちらのSフィールドは支えられている以上、少しはEフィールドに応援を出せるかと」

「おお、それはありがたいキシリア。こちらも後で応援をやる」

「折悪しく、ギレンの兄上もEフィールドにいることですし、どうしても守り切らねば。こちらの最大戦力シヤア大佐を向かわせましょう」

その後、キシリアはすぐさまシヤアに連絡する。

表情はその紫のマスクに隠されて見えない。

「戦いが始まる前に言ったことを覚えているか、シヤア」

「どういうことだったでしょう、キシリア閣下」

「…… まあいい。今入った報告によると、Eフィールドに連邦の新しい手が来る。今のうちにEフィールドへ行つて、自分の思う最善のことをしろ」

「自分の最善？ なるほどキシリア閣下、ご命令は確かに。私もその方が動きやすく助かります」

そしてシヤアはEフィールドに向かって発進する。

むろんラファのエルメスを伴う。

同行するはずの戦力であるムサイ六隻とMS中隊は一緒ではない。「急がなくていい。準備を万端にしてからEフィールドへ向かえばいい」

い。私が先に行っておこう」

「そう言い残したのだ。」

今はシヤアとララアだけで飛行し、ア・バオア・クーを回り込みEフィールドへ向かう。

「大丈夫かララア、私なら一人でもいいのだが」

「大佐が出るところ、私も付いていきます。どんな時でも。体調のことならもう大丈夫、差し支えありません。エルメスのビットも残り六個、わたしには充分です」

途中、連邦の偵察MS小隊に遭遇してしまった。四機ほどの数である。

一度だけではない。Eフィールドの近くまで来ると二度、三度立て続けに出遭った。

その全てを打ち倒す。

赤い彗星のシヤア、並の連邦MSなど寄せ付けない。実際のところは、ララアがほぼ全て倒しているのだが。

「ララア、私も戦いに来ているのだ。これでは公園まで親がついてくる過保護の子供ではないか」

「うふふ、大佐。いつそのこと私の子供になればいいのに」

「勘弁してほしいものだ。それに撃墜スコアに興味はないが、一つも伸びないのも具合が悪い。これでも私は大佐なのだから」

今、シヤアのゲルググはエルメスのビットが飛び回る、その絶対安全圏内にいる。

まるで籠の鳥だ。先の戦いでララアは今さらのようにシヤアを単独にする恐怖を覚えてしまったのかもしれない。いくら言われても離さないのだ。

確かにこれではシヤアの出番はない。

Eフィールドに着くと、そこにいたカスペン大佐に挨拶をする。人に笑顔を見せることはないが実直な士官だ。むろんシヤアの先任士官に当たる。

「シヤア・アズナブル大佐です。キシリア閣下の応援部隊の先遣とし

「て参りました」

「それはありがたい。ここにはまともな戦艦もなく、いるのは実戦で役に立たない新兵ばかりだ」

「そうですか。他以上に大変そうだな。それで、ここの戦力は空母代わりの技術船だけですか。いや、チベも一隻見えるようですが？」

「ああ、しかしあのチベはギレン総帥をサイド3へ送るために用意されたものだ。だがここへ連邦が間近に迫っている以上、もはや出すこともできなくなつた」

「……なるほど。しかしギレン総帥を留めておく方が危険なのでは？ キシリア閣下の意向は、ザビ家のものを一箇所にしておくのは万一を考えれば得策ではない、早く送り出すことと聞いていますが」

「その通りだシヤア大佐。だが後手に回ってしまった。留めるのも危険、しかしもう無理だ」

「そうでしょうか。今からでも遅くはないでしょう、いえ今のうちです。連邦はまだ来ていません。本隊はおろか偵察すら。その証拠に、Sフィールドからここに来る間、連邦の部隊とはただの一度も出遭わなかつたのですから」

シヤアは会話を思うように誘導していく。

カスペン大佐は少し考えた末、ギレン総帥を今のうちに出すことに同意した。

「ギレン総帥は途中まで私のゲルググで送りましょう、カスペン大佐。Eフィールドの守りをお願いします」

そしてシヤアがチベ一隻、ムサイ一隻、ガガウル三隻の艦隊の護衛につく。

「ラアラ、少しばかり別行動になる。こればかりは納得してほしい。そして、このEフィールドの守りに協力してやってくれないか。なに、私はすぐに戻ってくる。そう時間はかからない。それともう一つ頼みがある。さっきの連邦偵察隊との戦闘記録を、エルメスから削除しておいてほしい」

そのわずか40分後、ジオン軍内を驚愕のニュースが駆け巡る。公
式に発表された情報ではない。しかし、ことの重大さにたちまち知れ
渡った。

「ギレン総帥、連邦の大艦隊と不運にも遭遇、戦死！」

第二十六話 頑固者

ギレン総帥斃される、その報は水面下で様々な影響をもたらす。キシリアは一言、「ギレンの兄上もジオンの礎になられた。立派なことだ」と言ったと伝えられている。

それが哀悼なのか、皮肉なのかは聞く人間によって異なる。

ドズルははつきりと悲しみを表した。短くも強い感情で慟哭したのだ。離れていることが多かったとはいえ、やはり兄弟である。小さい頃からの思い出は多々ある。それは大人になって確執が明らかになったとはいえ、決して色褪せるものではない。

わずか12歳ほどのギレンが少年たちの前で偉そうに演説を始め、それを真面目に聞いて感嘆しているのはドズルだけだった、なんていうこともあった。そんな時は飽きて解散しようとする少年たちをドズルが腕力で引き戻したものだ。

雨が降ればギレンはよく「気象コントロール要員の配置と教育」について論じ始め、話が終わる頃にはギレンもドズルもずぶ濡れで家に着いてしまっていた、ということもある。

いずれも幼い日の楽しい記憶だ。常には思い出もしないことでも、ギレンの死を迎えてドズルにはそんな思い出を蘇らせて止まない。

いったいどこで間違ったのだ？

皆、そのままではいられなかったのだろうか。

ジオン公国という巨大組織を動かす立場になった一家、一人一人が公人として権勢を持つ。しかし、家族が共に仲良く暮らすことさえ可能にはできなかつたのだ！

だがしかし、それらを考えて時間を潰すことはドズルにはできない。

今、ア・バオア・クーの命運を握る総司令官であるからには。

まずはギレン総帥死去の模様を問いただし、整理した。

経緯報告によると、Eフィールドを出立したチベはシヤア大佐を先遣として索敵し、そして最終航路を策定した。

その後シヤア大佐自身はゲルググをチベに搭乗させることはせず、Eフィールドに戻り、予定通り応援部隊の指揮をとっている。

一方、チベは全力噴射をかけてサイド3へ向かおうとしたが、その直後連邦のEフィールド攻略艦隊に捕捉されあっさり撃沈された。連邦もまさかギレン総帥が乗っているとは想像もせず、捕縛を考えることもなかった。初撃の集中砲火でチベは降伏も脱出も行うことができず沈められてしまった。

このことは、誰もにガルマ大佐の死去を思い出させる。

シヤア大佐が要人二人の死に関わっていたのは偶然だろうか？

しかしシヤア大佐の行動自体は真つ当なもので、疑惑は大きくとも証拠はない。殺したのが連邦軍であることは間違いない。

索敵が不十分だったことは完全な落ち度で、責められてもいい。しかし誰しも連邦の行動を完全に予知できるはずがないのも当たり前だ。

そして、少なくともこの戦闘継続している場面で拘束して取り調べを行うことなど現実的ではない。

おまけに、誰しもシヤア大佐がギレン総帥を害する動機など見当たらない。ましてガルマ大佐については、シヤア大佐は同期の友人であることが知られている。取り巻きとして出世を図るならわかるがその逆はないだろう。

しかし、それもまた受け取る人によってシロかクロかは異なる。

それよりも今、ドズルは早急に考えなくてはならないことがある。Eフィールドへ迫る連邦軍を差し当たり退けるため、NフィールドからもEフィールドへ応援を出すのだ。

ドズルは候補を二人選んでいる。ここにダニガンがいれば、とふと思っただが、それは叶わない。ダニガンは傷病から復帰できていない。ラコック副官の淹れてくれたコーヒーを飲みながら、ドズルが選び出した二人とはコンスコンとエギーユ・デラーズだった。

二人とも経験豊かな指揮官である。本当ならドズルとしてはコンスコンの方こそEフィールドへ送りたい。その実力は信頼できる。大きな戦力を割けない以上、少数でもきちんと連邦を迎撃してもらわねば困る。Eフィールドの現場で臨機応変に対処できる力量が必要だ。Nフィールドはドズル自身が目を向けられるが、他は対処できない。それはSフィールドを担当しているキシリアも同じだ。

しかしコンスコンは先に陽動作戦でかなりの距離を移動させている。もう一度の移動も頼みにくい。

そしてドズルは、自分の子飼いの将ばかりを好み、手柄を立てさせるのかと批判を浴びる可能性も考えている。これからジオンを支えていくのに当たって、器の小さい将と言われるのは致命的だ。

こんな存亡の時に何を馬鹿など思いはすれど、そう考える人間も現実には多いだろうことはドズルも理解しているのだ。全く本意ではないが、そういう配慮も必要になってくる。

一方、エギーユ・デラーズ大佐はギレン派の闘将として知られていた。戦績もギレン派の中では筆頭格である。最前線に出る機会は多くなかったが、関わった作戦の成功率は9割という驚異的な実績をたたき出していたのだ。

ただし頑固なこともまた有名である。

そのため、立ち回りの上手いトワニング准将に出世面では後れを取ったと言われてもいる。

今、ドズルはコンスコンとデラーズと、二人同時に通信スクリーンに出している。一人をEフィールドへ送ったらもう一人は残ってNフィールドで奮戦してもらわなければならない。それなら二人同時の方が話が早いだろう。

「このどちらかにEフィールドへ応援に行ってもらいたい。キシリアのところのシャア大佐が先に応援に行っている。それと共同歩調をとって連邦を迎撃する」

「ドズル閣下、小官は御免被る」

エギーユ・デラーズは驚きの言葉を言う。頑固うんぬん以前の問題だ。総司令官にのっけから断りを入れるとは。

「戦いが嫌なのではありませんぞ。ドズル閣下、誤解をして頂きたくはない。戦うのは武人の誉れ、戦死するのは覚悟のこと。だがしかし、ギレン総帥亡き今、我らには色々と疑問がある。その死の真相を知った上で戦いを進めていきたい」

「デラーズ、ギレンの兄貴は戦死した。連邦に殺された。何か疑問があるのか」

「少なくともシャア大佐には大いに疑問が。その直属の上司であるキシリア閣下にも」

「憶測で妙なことを言ってはならんぞ！　いくらなんでも家族で、そしてジオンの将帥同士で争うなど荒唐無稽だ」

「多くの者がそう思っているでしょう。そして小官も。それなのに疑惑の渦中のシャア大佐とEフィールドで共同作戦をするなどお断り申し上げる。このNフィールドを守って死ねと言われるほうがよほど本望」

「そう言うか。しかし現実を見ろ。ギレンの兄貴はもういない。兄貴の家来ではなく、ジオンの一員であるべきだろう。こだわるのは良くないぞデラーズ」

「恐れながら申しますが、ギレン総帥の理想は死んでなどおりません」
デラーズは眼光鋭く、姿勢に威厳がある。

その巨軀と大声のため誰もが無駄に畏怖しがちなドズルを前にしても動じる気配がない。しっかりと自分の言いたいことを言い切った。

言っていることは、本当ならそれも私情だろう。軍において軍閥化は決して好ましいものではない。

だがドズルはギレンを奉じているデラーズの姿にむしろ好感を抱く。個人を慕って節を曲げないのもまた、武人の姿だからだ。

「……分かった。俺の方を折れさせるなど大した男だ。Eフィールドの応援にはコンスコンを行かせる。デラーズ、このNフィールドにとどまり、支えを頼む」

「ありがたきこと。ついでにドズル閣下、これも丁度良い機会なので

申し上げますが、連邦の戦いはどうも消耗戦を厭わないものへ変化している兆しが」

さすがにデラーズは頑固ではあるが無能ではない。戦術的な視点から気付いたことがある。

「そうか、なるほど。しかしそれは不味いな。だらだらと消耗戦に入られたらジオンの方が先に消滅してしまう」

「今の優勢は時間が経てば覆され、いずれ戦力が枯渇するのは自明。無理をしても一撃を加えて退かせるしかないものかと」

「しかし要塞から出過ぎてはただの袋叩き。しかもそれで連邦の士気を折れる保証はない。このままではいかんのだが…… まあデラーズ、それを考えている時間はない。後はコンスコンと話がある」

通信パネルからデラーズの投影が消える。残されたのは一人の姿だ。

一瞬後、そこから声がかかる。

「ドズル閣下、こちらならいつでもEフィールドへ出られますが」

「そうか、コンスコン。では頼む、行ってくれ」

「はっ、すぐに。しかし自分もデラーズ大佐の言ったことと同じことを考えていました。連邦のしつこさはどこから来るのかと」

俺は正直言つて、デラーズ大佐は苦手な方だ。

もちろん尊敬はしている。熱い漢は嫌いではない。しかしその頑固なところが何ともいえない。年はあまり変わらないはずなんだからなあ。

冗談の通じるツボがあれば教えてほしい。

だが、今指摘した連邦の単純な消耗戦術については、俺も思っていたことだ。

連邦は急進してNフィールドからア・バオア・クー内部に侵入する意図がないようだ。諦めたのか？ しかしじわじわ寄ってくるのはやめていない。

ドズル中將もそのことはデラーズ大佐に言われなくとも分かって

いたように思う。しかし理屈に合わないことだから口にしていなかったのだろうか。

俺とドズル中將の疑問は、間もなく解消されることになる。

それも、最悪の形で。

この通信パネルに割り込みが入る。またしても嫌な急報だ。

「ご報告申し上げます！ 偵察隊から連絡！ Wフィールドへ進みつつある連邦艦隊を発見！」

「なんだと！ Wフィールドへ！ 連邦はア・バオア・クーへ全方向から同時に仕掛ける気か！」

「連邦艦隊は20隻余り、そ、それで」

「その数、多少厄介だが他よりはマシか」

「しかし、その中に木馬がいます!!」

第二十七話 撤退戦

連邦はこのア・バオア・クーを囲み、叩き切る作戦に転じていたのだ。

物量で押し潰す。

ジオンに何の希望も与えず、追い詰めていく。

勝つことだけが問題なのではない。

地球に逆らうことがどれほど無謀なのか、どれほど愚かしいのか見せつける必要があるのだろう。

勝ち目などなく、そんな希望はあり得ないことを教えるために。

もちろん、戦後もスペースノイドが同じことを企まず従順でいさせるためである。独立など夢にも思わせない。壮大なデモンストレーションとしての戦いに移行しているのだ。

この時、Wフィールドに最後に姿を現した艦隊、そこに木馬がいるということは当然ガンダムもいる。

おそらく、俺が陽動作戦で連邦艦隊の後背に回り込んだ時に出会っていたものが、司令部から別行動を任命されてこのタイミングで来たのだろう。

ジオンの士気を挫く決め手にするため、あえてそうしたのだ。

この大包囲網はまた、ジオンにとって戦意を刈り取られるだけでなく、ア・バオア・クーからの安全な退路を失う危険性がある。要塞がジオンの棺桶になってしまう。

俺はここでドズル中將に一つの意見を言う気になった。

戦いの最中から考えていたことだ。

「ドズル閣下、作戦について少し申し上げたいことが」

「何だコンスコン、Eフィールドを守る算段についてか。それは頼んだ。全体として戦局は極めて困難なものになっている。安心できる

場所の一つくらい欲しいものだ」

「いえ、そういう細かいことではなく、ア・バオア・クーの戦い全体のことです」

「何、全体？ 戦略的なことか。お前のことだから、決して無駄な話ではないのだろうな。俺と同じ考えかもしれないが、聞こう、コンスコン」

「連邦は物量を行使して、何が何でもア・バオア・クーを陥としにかかっています。ここはそれに付きあわず、ア・バオア・クーを捨てるのです。ここで全戦力をすり潰されてはたまりません」

「あえて放棄すると言うか。しかしそれではジオン本国までわずか半日の距離まで連邦の侵攻を許すことになる。それどころか立派な拠点をくれてやることではないか。大体にして今でさえジオンはア・バオア・クーの岩礁砲台があればこそ対抗できているだけなのだぞ」

「あのコロニーレーザーが使えます。いや、実際に撃つことまで必要はないのです。あれをいつ発射されるか連邦が分からなければ、おいそれとまとまった戦力でここから本国に来ることは難しいでしょう。連邦も半分の確率で一方的に焼かれて死ぬかもしれないが、それでも行ってこいと兵士に言えるわけがありません」

「それはそうだが、ジオンの乏しい国力をつぎ込んで作り上げた最大要塞を……」

「要塞をそっくりそのまま使わせてやりましょう。もちろん、資源や食料なんかの物資は一切置いていきません。すると連邦がここに戦力を置くほど、補給が大変になるのは自明。中途半端に使わせるのが一番いいのです。そして補給の途中を徹底して妨害すれば、連邦の物量を次第に削ぎ落してやるのが可能に」

「ここをわざと取らせての吸血作戦、というわけだな。だがコンスコン、いつまでもそれを続けるのは無理だ。いずれは連邦の戦力はそれをも撥ね退けるくらいになる。逆にジオンは工業生産の二割はここで作っているのだから、その分を丸ごと失うぞ」

「その時はその時、改めて戦略を確定すればいいだけです」

「……なるほどな。分かった」

ドズル閣下も歴戦の勇士だ。単純な猛将ではない。俺の言っていることを正確に理解した。

この吸血作戦は言うほど簡単なものではない。高度なゲリラ戦を行える力量がなければたちまち破綻する。

しかし今ここで玉砕してしまうよりははるかにマシだ。

ドズル閣下はキシリア閣下と相談し、撤退の作戦を決めたようだ。決断するとなると早い。

そして俺にもその概要が伝わってきた。それはおよそ考えられる限り最良の作戦に思える。

粛々とそれを行っていく。

先ずは連邦の新手の現れたWフィールド、そこは元々ゲートも少なく、艦船もほとんど置いていない。すっぱり諦めて、ゲートを爆破してしまった。しかも外見では分からないように巧妙に、トラップを幾重にも重ねるといふオマケ付きで。

Wフィールドのゲートに取り付いて侵入しようとした連邦は入った後で、それ以上内部へ進めないのが分かるだろう。これで時間がだいぶ稼げる。その間ガンダム心配をしないで済む。

主戦場であるNフィールド、そこでジオン側は戦力が尽きたかのように装い、戦線を縮小していった。要するに要塞へ引っ込んでいったのだ。連邦は勝ち誇って要塞に取り付いてくる。

「よし今だ！ 岩礁砲台は撃ち尽くせ！ 浮遊砲台もとにかく動け！ 岩石ミサイルも全弾発射！ どうせア・バオア・クーに残してはおけない。どんなものでも撃てるものは撃て！」

このドズル閣下の号令の下、尋常ではないめっちゃやな攻撃の雨あられだ。これではさしもの連邦も大損害を受け、いったん後退せざるを得ない。同じことを二度までも繰り返せば、疑心暗鬼になって連邦も容易には距離を縮めてこなくなる。

そこを一気に出撃していった。一隻も残すことのない、文字通りの全艦発進である。Nフィールドのゲートは艦船ノズルの白熱で満た

された。

四十隻程度残ったドズル閣下の本隊が最大推力でジオン本国を目指す。その中に、空母ドロス、ドロワ、ミドロも含まれている。

えっ！ ちょっと待て!!

正直驚いた。

なぜかビグザムが出撃しているではないか！

確かにビグザムはこういう短時間突進に向いているかもしれない。しかし、それでも危険は危険だろう。いくらビーム攪乱といっても100%じゃない。

心配した連邦からのMS攻撃だけは、ドロスが一緒なら先ずは安心かもしれないが。

意図したことではなかったのだろうか、と思った。ドズル閣下のことだから。

だがしかし、結果的にこの敢闘精神はジオンの士気を保つ上で大いに役立った。この撤退戦、見方を変えればジオンの惨めな敗走だ。そこをしっかりとめられたのはドズル閣下の無謀な出撃のおかげになる。

それでもこんな危険なことは、俺としてはやってほしくない。後でこつそりゼナ様に伝わるようにして絞ってもらおう。

そして、他にエギーユ・デラーズ大佐が旧ギレン統帥本部直属の三十隻程度を取りまとめている。あんな頑固そうな人間なのに人望はあるんだろう。いや、そういう人だから皆が付いていくのか。

その艦隊は輸送船団を守りつつ脱出していく。資源や作りかけのMSパーツなどをア・バオア・クーに残しておけない。輸送船団の保護は重大な任務だ。

その戦いは、俺も傍から見ている舌を巻いた。

鈍足の輸送船は、連邦のMSはおろか、突撃艇。パブリクのミサイル相手にもカモになるほどだ。そんな輸送船を抱えて艦隊運動をするのは容易ではない。それをデラーズは敢えて「見せ玉」に使った。

陣形を広げておき、分かり易いエサである輸送船を使って連邦の突

出を誘う。そこを包み込んで叩く。

これは上手い！

艦隊戦では俺も少しばかり自信はあるが、デラーズ大佐も大した力量を持つ。友達になれるかは分からない、というか無理っぽいけれど指揮能力は凄い。

俺の役割は、十五隻余りの艦隊を率い、Sフィールドの撤退支援をすることだ。

急ぎSフィールドに向かったが、そこに見えたものは死力を尽くしての激戦だ。

ドズル閣下と似たような作戦を取ったのだろう。キシリア閣下も全艦隊をゲートから展開させるのには成功していた。まとめて三十隻ほどのジオン艦が見える。その中にはすっかりおなじみになってしまったマ・クベ大佐のマダガスカルも見える。

きつと壺もあるんだろうな。

だがしかし、Sフィールドの連邦軍はジオンに比べて余りに数が多い。それを振り切れないでいた。

俺は間髪を容れず戦闘への介入を命じた。

「全艦密集して砲撃！ 手数を増やして実数より多く見せかけろ！ MSは順次発進だ」

そうしてから戦闘の詳細を把握していく。

キシリア閣下の艦隊、グワジン級もザンジバル級もいる立派な艦隊だがMSが少なかったのだ。そのため各艦が連邦側のMSへ対空砲火と回避を強いられ、なかなか統一行動ができないでいた。

ジオンのMS隊の方はというと、二十機程といったところだろうか。そこにはキマイラ隊と思われるゲルググ達もいる。少数でも味方として見るとなかなか大した動きをしていて、さすがに強い。連邦の多数のMSがキシリア閣下の艦隊にまだ取り付けないのはこの奮戦のおかげでもある。

だが疲労はたまっているだろう。

それはいずれ、瞬間的な判断ミスという形で表に現れてくる。相手

が見逃してくれなければ即致命傷になる。

こちらのシャリア・ブルとガトーがMS戦の応援についた。

動きの速いこの両機に連邦のMSも翻弄される。

「俺はガトー。コンスコン機動部隊所属のMSだ。応援に入る」

「何！ コンスコン機動部隊だと！ ……以前にはあんなことがあったが、遺恨もなく応援してくれるとはありがたい。俺は真紅の稲妻だ」

思いがけない通信だ。

そしてお互い、先のひどい同士討ちのことは忘れ、共にジオンとして戦う。

しかしその前に当人同士のレベルの低い話があった。

「……本当か？ 真紅？ しかし俺の目がおかしくなったか、全然真紅じゃない普通のゲルググにしか見えないんだが。それともあれか、真紅というのはものの例えというやつか。気持ちの問題？ なんだかお前も奥が深いな」

「何だと！ 下手に出れば馬鹿にしゃがって。たまたま真紅の機体が大破して乗り換えただけだ！」

「俺は悪いと言ってるんじゃない。だが、真紅じゃない真紅なんてやこしいこと最初から言うな！」

ガトーも意外とナチュラルに逆なでしてしまう。

「それはともかく、そっちのMSはそれだけか」

「……ああ、ひどくやられた。キマイラ隊の半分は負傷してしまった。サイクロプス隊もできるだけ救助したつもりだが、戦える状態じゃない」

俺は知らなかったが、ガンダムとの戦いでキマイラ隊は損害を被っていたんだ。

そこへ別のゲルググから通信が割り込んできた。

「ライデン隊長！ クルツやユーマ達の意識が戻りました！ ユーマは、再出撃したがついています！」

「そうか…… だがゆっくり休ませとけ！ この命令を聞かなかつたら縛り付けてもいい。ユーマもさすが強化人間と言いたいところだ

が、あんな怪我をしといて再出撃は認められん。ジオングとやらに脱出装置があったとは知らなかったが、手動ならまだしも自動では完璧じゃなかったからな」

「……なるほど負傷者が多いのか。しかし真紅のなんとか、残りもまとめて休んでくれて構わない。どうせこの戦いはすぐに終わる。コンスコン司令が手を打つだろう」

「変なところで略すな！ やっぱりお前、馬鹿にしてるだろう。だが本当は助かった。実は、限界が近かった」

俺はツエーンのドム隊を連邦MSへは向かわせず、逆に連邦艦隊の方へ進ませた。バズーカは艦隊攻撃の方が有効だ。

連邦MSは連絡を受け、慌てて艦隊へ戻ろうとする。そこを狙いすまして艦隊からの遠距離砲撃だ。

我ながら悪辣なことに、砲撃でかき乱した後、クスコ・アルのエルメスの一撃離脱戦法をとる。ビットを四機に補充した今のエルメスなら、単機でも戦闘力は充分だ。

スピードを充分に乗せて突入し、連邦MSを何機か斃して飛び抜ける。そしてまた遠距離砲撃に切り換える。

この戦法はいくら繰り返しても有効なのだが、こちらの目的はキシリア艦隊の撤退支援だ。

目的をきちんと達成できれば、さっさとこっちも切り上げる。

最後に斉射を行ない、俺の機動部隊もア・バオア・クーを後にする。

第二十八話 ヒヨツ子

この斉射で、俺のチベがとある連邦輸送艦を一隻撃沈している。チベの主砲、ダリル・ローレンツが放つ一撃は正確にエンジン部に当てて一撃爆散させた。そして、その輸送艦は正にビーハイヴという空母に急ぎ荷物を届ける直前だった。

その荷物とは、Nフィールドに置かれていたガンダムの子備機がSフィールドまで回されてきていたものだった！　そして何ら活用されることなく、輸送艦と共に予備機もまた宇宙に消えた。俺の艦隊は知らないところでもなく重大な戦果を上げていたんだ。

こうして俺は無事にキシリア閣下の脱出支援という使命を果たすことができた。

後は、直ちにドズル中将と合流する、そのはずだった。

ジオンのア・バオア・クー撤退戦の最後は、Eフィールドである。シャアとララアのいる艦隊は、連邦艦隊を牽制するのに充分だった。

赤い彗星は連邦にとっておいそれと手を出せる相手ではない。そうして連邦が恐れをなしている隙に、カスペン大佐と技術試験艦ヨーツン Heim が脱出していく。

しかしここで大きな手違いが起こった。

ア・バオア・クーにまだ仕事が残っていた！

一人の技術士官からカスペン大佐に急が告げられる。

「カスペン大佐！　オリヴァーです。ア・バオア・クーを精査していたら大変なことが！」

ア・バオア・クーは大きな要塞であり、その中には補修やドック機能ばかりではない。ジオンの各機体の製造工場も入っている。

もちろんその中に残された、作りかけの部品などは既に回収して持ち去った。動かすのが大変なものは破壊した。製造機械も使えないように破壊したつもりだった。

しかしそれは完全ではなかったのだ。

目に見えるものなら単純だ。問題は、工作機械の中核にある制御情報だったのだ。もちろん分業で製造している工作機械なので、設計図が丸ごと残っていることはない。

だが、いくつものデータをつなぎ合わせれば、全貌を明らかにされてしまう。

ザクやドムは今までの戦いで多く用いられ、結果的に戦闘後、かなりの数が連邦に鹵獲された。それはやむを得ない。それらは連邦の技術部によつて解析にかけられているだろう。

だがしかし、ここであつきりと新鋭機であるゲルググの設計を知られるのは痛すぎる。解析の手間すらなくゲルググの詳細が知られればあつという間に対ゲルググのMSを作られてしまう。特にゲルググには突出した技術的特徴がなく、バランスのとれた設計が命なのだ。何としてもその設計を秘匿しなくてはいけない。

ア・バオア・クーにあつたジオン軍組織図や編制などの情報は撤退の際にきれいに消去されていたのだが、分散した工作機械にある情報は見逃されていた。

一方、カスペン大佐の麾下にある技術部隊は、別に製造そのものに携わっているわけではない。いわば技術といつても、テストやアイデアという分野ばかりだ。しかしそれでも、技術に明るい者が多くいるのも間違いないところで、撤退直前にそんな情報の有無を確認しようとする人間が混ざっていた。

そこで問題が発覚した。先ほどのオリヴァーの報告はそれに基づいている。

カスペン大佐は決断した。

必要な仕事だ。ジオンのため、再度ア・バオア・クーに戻り、情報の完全消去をする。

実際にそれがやれるのはカスペンではなく何人かの技術に明るい者である。カスペン大佐はそれらの者を送り出した。そして必ず生きて撤退させる固い約束をしたのだ。

「ピヨツ子ども。仕事をしてこい。いつまでもここで待っている」

これで驚いたのはシャアの方だ。

長くヨーツンヘイムを守ることはできない。連邦と戦力差は歴然だ。留まっていれば、シャアとララアといえど波状攻撃によつていずれ潰される。

カスペン大佐麾下の戦闘大隊があるとはいっても、MSを扱える者は少数だ。テストパイロットを務めている者はさすがに技量は高いが、数えるほどしかない。

大半は学徒兵のポッドばかりで役に立たない。練度も性能も話にならない。

「カスペン大佐、共倒れになる危険性があります。申し上げにくいことですが早めの脱出を検討されてはいかがでしょうか」

「早めの脱出？ シャア・アズナブル大佐、それはア・バオア・クーに戻った子どもを見捨てるということか？ いや、それはできない。絶対だ」

「合理的な判断をお願いします。私だってそうは言いたくない。恥ずかしながら私も過去幾多の部下を失っています。ある時は部下をザクで大気圏に落下させてしまい、ひどい最期を遂げさせたことだってあります。だからこそ、今の私の役目は最大人数の脱出なのでですから、それを遂行したいものです」

「何度も言うが、それはできない。部下を見捨てるくらいなら俺が最後まで盾になり、連邦を食い止める」

「困りました。では今さらですが、応援を呼びかけましょう。近くにいるジオンの部隊が聞いてくれるかもしれない」

シャアはそう言って引き下がった。

いざとなれば自分とララアが脱出するだけなら何とでもなる。そういう計算があることも確かだ。

そして、技術情報の消去のためEフィールドの脱出が遅れること、応援を求めることを期待もせず回線に流した。

それをキャッチしてしまったのが唯一残っていた俺の機動部隊、と

いうわけだ。ここで聞かなかったフリをするという選択肢はない。「最大速度だ！ 我がコンスコン機動部隊はEフィールドへ向かう。到着したら直ちに戦闘に介入する」

俺はそう言っただけで急ぐしかない。連邦だって馬鹿じゃない。俺の艦隊がア・バオア・クーを後にせず、回り込もうとしていたら妙だと思っただけで目をつけるに違いない。

岩礁をスレスレで避けながら最短距離を飛び、後を追ってくる連邦艦を振り切る。

もしも岩礁が無ければ、チベの主砲でア・バオア・クーを撃つて岩礁を飛び散らすというトリッキーな方法まで使った。

そこで見えてきたのはEフィールドに展開する多数の連邦艦だ。それに対してジオンはというと、一隻のザンジバル、六隻ほどのムサイ、そして箱型の大型輸送艦だけだった。これが技術支援艦なのだろう。そして戦況は正に連邦側からの全面攻勢が始まろうとしているところだった。

俺は砲撃を支援として使い、MSの展開を急いだ。せめて先手を取る。

そこから始まったMS戦、こちらのガトーやシャリア・ブルの活躍はもう見慣れたものだ。連邦のMSをうまく誘導して技術支援艦から引き剥がすという余裕まで見せている。だが、俺はどちらかというところ、シャア・アズナブル大佐とララアなるもののエルメスの方に目を奪われた。

あつという間に連邦MS数機を片付けると、もはや相手は怯んでしまい、近寄ることもできない。これが赤い彗星の名の力だ。絶対的強者の貫禄というものか。

だが俺は知らなかったが、シャアの方ではまた別の感想を持っていた。

「コンスコン機動部隊、やるな。理想的な布陣から機動運用、砲撃の密度や正確さも段違いだ。それにMSも強い。個の力もチームワークも良い。同志としては申し分ない実力、というべきだろうな」

そしてもう一つ、エルメスはエルメス同士での会話もあったんだ。

「これはお姉様！　こんなところで会えるなんて！」

「ララア、フラナガン機関以来ね」

「良かった！　そうだ、マリオンお姉様やハマーンはどうしたのかしら？　フラナガン機関がなくなった後、みんなは？」

「ズムシティへ行ったはずだわ。安心して。また会えるわよ」

「んー、でもわたしの方が行けないわ。これからも大佐と一緒にだから
「相変わらずシャア大佐とべったりなところがあなたらしいわ。でも
気をつけなさい。あんまり束縛するのも困らせる元よ」

「そういうお姉様はべったりしないの？」

「私は……　そんな話はどうでもいいの！」

「自分から話を振ってきたのに……」

「何か言った？　NTでも空気は読みなさいよ。それよりララア、エルメスにビットが六つしか見当たらないわね」

天性のNTララアはエルメスに乗れば、本当なら九つのビットを操るはずだ。それが少ない。

クスコ・アルは疑問に思った。

「それが、戦いで三つは墜とされてしまったわ。そしてもう補充もできな

「まさか！　ララアのビットが、三つも！　どうしたらそうなるのよ……　あ、ビットならこちらに余分がかなりあるわ。でも生体信号にうまくチューニングしないとね」

「お姉様、ちよつと貸してみても下さらない？」

クスコ・アルのエルメスの制御から、ビットを切り離す。そうすると何とララアがそれを動かし始めたではないか！　元からあるビットと何ら遜色ない。

これにはクスコ・アルも驚かざるを得ない。

「……はああ!?　ビットをチューニングするんじゃない、自分の方を合わせたわけね。やっぱりララア、あなた規格外だわ」

そんなことをしているうちに、カスペン大佐の部下がやっと戻って

きたようだ。

全てをヨーツンヘイムにしっかりと押し込む。

よく見たら、最後までそれを行なっているのは隊長マークをつけたゲルググだった。カスペン大佐本人ではないか！

凄いな！

恰好いい。俺もMSに乗ればなあ、と一瞬思ったが、できそうにもないことなので頭から振り払った。

用事が済めば後は脱出だ。後ろに撃てないムサイをしっかりと固めて先行させ、三隻のチベは後衛に回る。スライドさせるように動かしながら間断なく撃ちかけることで連邦に牽制をかけ、振り切った。

俺はその後カスペン大佐に興味を持ち、通信を取った。

スクリーンにいかにも軍人といった風貌の者が映っている。今まで笑ったことはありません、という感じだ。

「カスペン大佐、技術情報の消去、間に合ってよかった。しかも様子を見ていたが漏れなく人員を撤退させられたようで何よりだ」

「ヒヨツ子どもは独り立ちするまで手がかかります」

「それは？ ああそうか、学徒兵がそんなに」

俺はスクリーン越しに周囲の状況も知った。多くの人間が見えたのは、ヨーツンヘイムの艦橋ではなく、MSやポッドの発艦場で通信を受けていたからだ。

いかにも年若い学徒兵ばかりのようだ。

カスペン大佐の言うヒヨツ子なのだろう。生還できた興奮で騒いでいる。本当なら将校の通信中である。声を立てられないはずだが。だがカスペン大佐が守ろうとした気持ちがよく分かる。

皆目が澄んだ若者だったからだ。ジオンの明日を担う者たちだ。しかしこの者たちが大佐のような指揮官を持てた幸せを本当に分かるのは、もっと後なのだろうな。

あれ、しかし学徒兵の中に一人、髪を真ん中で黄色と赤に染め分けただけ変な女がいる。これはあれだ、目を合わせちゃいけないタイプの人間だ。

ここまでくれば撤退戦も一安心である。シャア・アズナブル大佐はいずれまた再会するにせよ、早めにキシリア閣下を探して合流するため、ここで離れた。餞別代わりにエルメスのビットを予備も含めて五つも与えた。クスコ・アルには大破した以前の乗機の分と、今の乗機の分のビットがあつたためまだ八つも残っているので充分だ。

カスペン大佐もまたここで別れた。ズム・シテイへ真つすぐ急行するようだ。

俺はこのコンスコン機動部隊だけで、ドズル閣下の下へ急ぐ。

だがその前にもう一つの事件があつた。

あまりに奇妙な艦隊戦と遭遇してしまったんだ。

第二章 宇宙戦略

第二十九話 第一秘書

その艦隊戦、といってもお互い単艦同士だ。
遭遇戦なんだろうか？

しかしそれでもおかしい！

一方は連邦のサラミスがいた。そして相手は一隻のムサイだ。
それがおかしい。ムサイが逃げていてサラミスが追っているなら
まだ分かるが、そうではなく正面から撃ち合っているではないか。

これは無茶だ！

砲撃戦ならばせめてチベでないとサラミスには渡り合えない。

サラミスは細身だが、MS搭載能力を犠牲にしている代わりに火力
は強い。ムサイは砲門は多くともジェネレーターは弱く、サラミスに
は火力でも防御力でも相手にならない。

現場にもう少し近付くと、ムサイの周りにMSが見えてきた。なん
だ、ザクが三機いるじゃないか。

なるほど、それで理解した。MSがいるならサラミス相手でも充分
に勝算があり、戦いを挑むのは分かる。俺は一安心してしまった。

それがうかつだった！

だったらなぜアウトレンジのMS戦でなく砲撃戦になってしまっ
ているのか気付くのが遅かった。その疑問に気付いたころには、もう
ムサイは撃ち負けていた。エンジン部に直撃を浴びてしまったのだ。

「しまった！ このチベだけでも最大戦速だ！ 今から応援に入る！
遅かったかもしれないが…… しかし、あのザクはいったい何を
やってるんだ！ サラミス一隻に手も出せないとは。ガトー、ゲルグ
グで様子を見てくれ」

より詳しく見ると、ザクの動きはなんとも鈍く、まるで学徒兵が

乗っているようだった。それでもやや先行している二機はまだマシンだ。遅れている一機は奇妙な動きで前に進むこともままならないようだった。要するに回転運動に入ってしまったって、それを止めることさえできないという体たらくだ。

俺がガトーを単機で向かわせたのは技量を信頼してのことだ。それと、実はシャリア・ブルやツエーンのギャンは酷使し過ぎていて、あちこちに不具合が起き始めている。決定的なトラブルを起こさないよう、全機は使わない。そして連邦にMSがない以上、エルメスも出番がない。

到着前に、連邦のサラミスはそんな戦力にもならないザクに砲火を浴びせる。先行していたザク二機は有効な回避もできなかつた。たちまちエンジンや手足を失う大破だ。

次にムサイもエンジン部が爆散し、ついに身動きも取れなくなっている。

ガトーは残ったザク一機を急いで掴み、ゲルググの大推力を活かして砲火を避けていく。

そこで俺のチベはようやく射程内にサラミスを捉えた。

もちろん、ダリル・ローレンツの射程という意味であり、通常の射程よりはるかに遠い。連邦のサラミスは油断したんだろう。もちろんこっちのチベから逃げ始めてはいたが、まだ大丈夫だと思っていたんだろうな。俺も逆の立場ならそう考えるに違いない。

「目標、連邦サラミス、主砲撃て！」

そして一撃で大破に持ち込む。相変わらずの展開だ。

当座の脅威を排除したところで、ガトーがそのザクに通信を入れた。

「とんでもない操縦もあったものだ。整備兵でもこれほど無様ではないぞ」

「……」

「聞こえていないのか、パイロット？　俺はガトー大尉、コンスコン機

動部隊のMSだ。そちらの名前と階級は？ そちらのムサイはどこ
の所属だった？」

「私はアイリーン。セシリア・アイリーン、ギレン様の第一秘書。あの
ムサイは奪ったもの。ギレン様の秘書たちと、近衛兵で」

「な、何だと!! 秘書!? 秘書だったとは、兵ですらないのか! それ
ではあの操縦は当たり前だ。本当の素人だったのか。しかし、なぜこ
こに」

「ギレン様を探すため。あの方が戦死などするはずがない。私たちが
探してお助けしなければ。誰も動いてくれないからには、私たちが動
かなくては」

「……そうか。一つ言いたいが、ギレン総帥が死んだのは事実だ。そ
れは幻でもなんでもない。それどころかア・バオア・クーも陥ちてい
る」

「あなたもそんなことを言うのね。死んでなんかいるもんですか!」

「もう一つ聞け! なぜザクに乗った? 俺はそっちを聞きたい。も
しもお前の操縦でなければ、もつとマシな戦いができたかもしれない
い。ムサイも墜ちなくて済んだかもしれないだろう。それなのに無
理やり乗り込んだとすれば、俺はお前にそっちを追求する」

「そんなこと言われたくない! 私はギレン様の第一秘書! ギレン
様のため戦って死ぬ! そうすれば、ア・バオア・クーに行く前に死
ねるわ。あなたは軍法か何かで私を裁くの? だったら私をここで
殺せば? それがいいわ。そうして頂戴!!」

ここでガトーは理解した。

この女はギレン総帥に殉じようとしている。

もちろん、ギレン総帥が死んだことを信じられない気持ちもある。
しかし、それだけではなく、この女はギレンの死を本当は受け入れて
いるのかもしれない。この相反する気持ちを解決するにはただ
一つの方法しかない。

自分が死んでしまえばいい。

そうすればギレン総帥の死を永遠に認めなくていい。

だから、ア・バオア・クーへ行く途上で自殺のような戦死を遂げたのだ。

ガトーはここで考える。

助かりたい者を助けるのは簡単だ。しかし死にたい者を助けるのは難しい。

ここは戦場、そんな気持ちの者は勝手に死ねと言いたいところだが、このセシリアという女は自分のためではなく主君のためにここまですりつめていなのだ。

それは純粹な、美しい心である。

絶対に死なすわけにいかない。

ここで取った行動は、優しい言葉ではない。ひとまず命を大事にしろとか、考え直せとか、そんなセリフではない。人の気持ちに訴えるにはそんな上辺のセリフは役に立たない。

心の中心に切り込み、縛っている鎖を断ち切ってやるのだ。

いかにもアナベル・ガトーらしいことをした。

「こつちへ来い！ お前が見るべきものがある。いや、見ないで済ませられるものじゃない」

「な、何をするの!? 離して!」

ガトーのゲルググはセシリアのザクの腕を掴んだまま、なぜか大破したムサイの方へ引っ張っていく。しかも一番被害のひどい機関部だ。

「見てみる！ 今まで見たこともないだろう。これが宇宙での戦い、人の死というものだ!」

「!..... こんな、これが.....」

セシリアは絶句した。

ムサイの破壊部から見える艦の内部には、多くの死体があったのだ。

軽巡洋艦ムサイは乗員八十人もいて、特にエンジン部には機関科の兵や整備兵が多く詰めている。

セシリアの思考が停止したのは、ただ死んでいるからではない。その死体の惨状が想像を絶するものだったからだ。熱で焼け焦げ、物理的に潰れ、引きちぎられ、人の形になっていない。

「これを招いたのが何か分かるか。お前の我儘だ。セシリアといったな、それを知っておけ。目を背けることは許さん」

「ひイツ、う、」

セシリアは盛大に吐いた。

これを見てしまえば当たり前だ。

セシリアは頭も良く気丈な女だったが、この光景は前線の経験も無いただの秘書の許容量をはるか超える。

もちろん涙も出るし、何がなにやら分からない。頭の隅にはガトーが正しいのだ、言い訳もできないという思いがあった。

しかしそれだけでガトーは済ませはしなかった。

「うあああ！ ああああ！」

「見ろ！ お前のギレン総帥も死んだんだ！ こういう死体になって。それを認めろ！ しかしお前の罪はそれだけで済む話じゃない。次は贖罪をしろらう」

ガトーはこのムサイに俺のチベから救助が来始めたのを確かめると、セシリアのザクを連れて今度は連邦のサラミスへ向かっている。サラミスは無残に大破しているが爆散まではしていない。

「このサラミスで生きている者を見つけ、救助する。お前にもそれをやってもらおう。ジオンの敵は連邦だ。ギレン総帥を殺したのも連邦だ。しかし、それを敢えてお前に助けさせる」

怖気付いて拒否の構えを見せるセシリアをせっつき、ガトーは救助を手伝わせた。各ブロックの信号を探り、ノーマルスーツがあれば生体反応を見て救助していく。

セシリアの操縦ではものの役に立たないが、わずかでも敢えて任せただの。

途中何度もセシリアは吐き戻した。

吐く物がなくなっても吐いた。

このサラミスはさっきのムサイに優るとも劣らない惨状である。

あり得ないほどねじ曲がった死体、無酸素で喉をかきむしっているものもある。

家族の写真を最後に握っている死体を見ると頭が真っ白になった。まだ目を開けた死体、強い恨みのこもった視線と目が合ってしまったら、セシリアは背筋に震えが来て小便をありつたけ垂れ流してしまった。

「救助は終わりだ。チベに戻る」

ガトーはセシリアと共にチベに戻った。

MS発着場にザクを押し込めると、ガトーは手早くザクのハッチを開ける。

そこには心のエネルギーを失い、放心状態のセシリアがいる。

ピクリとも動かない。

ノーマルスーツは着ていない。代わりにピツシリと形の良い秘書の制服姿だ。

しかし、今や飛び散った吐瀉物に顔も髪も服もまみれ、おまけに小便に浸されている。これ以上なく酷い姿だ。

そこを顔色も変えず、ガトーが言う。

「よく頑張ったな。セシリア」

この報告を聞いた時、俺はとてつもなく嫌な予感がした。

ガトーはよくやった。それは本当にそう思う。

その後回復したセシリア・アイリーンは、救助した兵や秘書課の女性にかいがいしく世話をしているようだ。

もう自殺などは考えていない様子らしい。全てガトーのおかげだ。だがこれを聞いて、俺は自分の頭をガツガツ壁にぶつけていることをイメージしてしまった。

ちよ、ちよつと待つてよ！

これだから！

ガトーさんは態度もクツソイケメンなんだよ!!

これまで容姿も能力も自信があつて、どちらかという和高慢な女が自分のこれ以上なく無様な姿を晒けだしてしまった。

だが少しも笑われず、真摯な言葉で報いられたんだ。

少し考えれば分かる。それはみな、自分の心の痛みを分かり、救おうとする暖かな思いやりから来たことだ。それで心は満たされた。

これがどんな結果になるのか！

頼みますからガトーさん！　そこ分かって下さいよお！

しかし俺は俺でセシリア・アイリーンに事の顛末を聞き出す必要がある。どうしてズム・シテイにいるべき秘書課が艦に乗っていたのだろうか。

「この度は、ご迷惑をかけて申し訳ございません。特に、わたくしのお見苦しいところを。死ぬほど恥ずかしい思いです。できれば、忘れて頂ければありがたいのですが……」

そう言われても俺が別にゲロや小便まみれの姿を見たわけではない。まあ、彼女の側からすればそういう風聞を知られただけで身悶えするほどの事態なんだろうな。

それどころか今、目の前にいるのはさすがはギレン総帥の第一秘書、圧迫感を感じるほどの美女だ。いやそんな姿でもたぶんあなたなら綺麗ですよと言うほど俺も馬鹿ではないが。

「それはともかく、いったいどうしてこんなことに」

そしてセシリア・アイリーンから聞き出したのは、ズム・シテイのゆゆしき状態だ。

ア・バオア・クーの戦いはもちろんズム・シテイの現状は皆の最大関心事だった。ミノフスキー粒子のため遠距離通信はむろん不可能だが、それでも漏れ聞こえる情報はある。伝え聞く戦局は芳しくなく、連邦の物量は果てしがない。

そしてついに、ギレン・ザビ総帥戦死の報が届いてしまう。

これでズム・シテイは大混乱に陥った。

特にひどかったのは市民ではない。首都防衛隊とギレン親衛隊だ。おそらく連邦の本国侵攻そのものへの恐怖もあるだろうが、それにも増して敗戦後の戦犯狩りが恐ろしい。ジオンの戦争犯罪が裁かれる

ならば多くの者が極刑を免れない。身に覚えのある者が多過ぎた。

そして自暴自棄のギレン親衛隊と、それを討伐して連邦に媚びを売りたい首都防衛隊に小競り合いが生じてしまう。

たちまちそれが本格的な戦闘へと燃え上がる。

しかし、どちらも自分のことばかり考えていて、本当にギレン・ザビのことを考えていたのはごく少数しかいなかった。ギレンを信奉する軍人は少なくないが、みな既にア・バオア・クーに出払っていたからだ。

だが、ズム・シテイにいた中でもギレンの近衛警備兵たちと秘書課は別だった。

本当にギレン・ザビを心配し、その死を認められず、ア・バオア・クーに行きたいと願った。だがしかし、いくら訴えても親衛隊も防衛隊も聞く耳を持たない。

仕方なく放置されていたムサイを奪ってここまで来たというわけだ。

「それで手前勝手な願いとは存じておりますが、わたくしが代表して申し上げます。当面この艦隊での保護、いいえ勤務を秘書課一同お願したいのですが」

「むう、それはドズル閣下に報告した上でのことで、おまけにこれほど前例のない配置転換はどう考えても無理だと言っておきたいが……」

そうセシリアが願ったのは理由がある。このままア・バオア・クーに行くのを諦めてズム・シテイへ戻ると、それはそれでまずい。自分とはにかく、秘書課全員に命の危険がある。

あのギレン総帥の秘書課だ。そこにあるささいな情報一つで怯える人間はいくらでもいる。今頃いてもたってもいられないだろう。そういう人間は、秘書課にいる人も情報も丸ごと抹殺すればいいと思ってしまう。短絡的な考えだが、人間とはそういうものだ。高い確率でそうなる。

今、この艦には、ムサイの艦橋に詰めていたギレン総帥秘書課のいずれ劣らぬ美女軍団総勢九人も救助して乗せている。

彼女らを再びズム・シテイの騒乱に巻き込ませては命がない。それは可哀想だ。だがはつきりと約束もできないので言葉を濁した。

遠くない将来、俺は思い知ることになる。

艦隊行動というものは砲撃やMSだけで成り立っているわけではない。いや、むしろそれは最後の段階というのに過ぎない。後方の地味な仕事の上に依って立つ。

俺のコンスコン機動部隊は、通常では考えられない圧倒的に高い稼働率でこの先の連戦を戦い抜けることになる。それを可能にしたのは盤石の統制と物資管理だ。

この時、その原動力を手に入れていたんだ。

第三十話　もう一つの戦い

「ギレン総帥の秘書たちの問題の他、俺はもう一つの仕事を済ませなくてはならない。」

連邦のサラミスから救助した捕虜たちの尋問である。といつても名前と階級くらいしか聞き出せるものがないだろう。

「この艦隊を率いているコンスコン少将だ。そちらは先ほど沈んだサラミスの艦長とお見受けするが、この宙域を航行していた目的と到達予定地を聞かせてもらいたい」

「それは答えられない。無理なものは無理だ。あ、俺は一応艦長をやつてた連邦軍ヘンケン・ベツケナー中佐という」

「まあ、答えられないのはそうだろうな。無理にとは言わない。それに関わらず、協定に基づき、中佐以下救助した捕虜は一定の待遇のもとと過ごしてもらう。この戦いでお互い捕虜も多いだろう。特に連邦に捕らえられたジオン将兵は多いだろうから、おそらく、すぐに捕虜交換で戻れると思う」

「そりゃ、ありがたい。ではそれまでジオンの飯が連邦より美味いか食つてみよう。メニューが違うだけで嬉しいな。単調なメニューにもう飽きていたんだ」

「……このチベは食堂じゃないんだが」

なんだか人懐こい感じの男だった。別のチベに移乗させた捕虜、サウス・バニングとは違うタイプの軍人だ。しかしどちらもいい奴なのには間違いない。

俺が言うのもなんだが、死んでほしくない人間たちだ。戦争さえなければよかったものを。

そしてついに俺はズム・シテイ近くにいたドズル閣下と合流を果たした！

「コンスコン、Sフィールドどころか、Eフィールドでも大活躍だそう

だな！ まったく商売が手広いぞ」

「いやまあ、やむにやまれず。あ、ドズル閣下、聞きたいのですがズム・シテイの騒乱はどうなりました？ 親衛隊などが乱れたと聞いたもので」

「ん？ なぜそんなことをお前が知っているのか？ そう、その通りだ。けっこう騒ぎは大きかった。もう少し戻るのが遅ければコロニーに穴が開いているところだった」

「えっ、そんなにひどく！」

「いやしかし、もう治まった」

それは安堵した。ジオンがこれほど連邦に追い込まれている今、内輪もめなどしている場合じゃない。ジオンの工業生産力も落ちている。そんなところで人も生産物も浪費できるもんか。

「有能な人間がいたんでな。調停にはもってこいだった。トワニング准将だ。ギレンの兄貴が普段から使っていた奴で、軍での実績は特に無いようだが、そういうところで才覚があるようだ。騒ぎの首謀者や逃げ出そうとする者は取り押さえたいらしい」

「なるほど、それは良かった」

「ああそうだコンスコン、ついでに言っとくがお前は中将になる。また式典は無いがな。俺は大将、キシリアは中将だ」

そして俺は人事のことをあつさり聞いた。

ドズル閣下は大将になる。

本当は元帥という地位でないと、元帥府が開けず、形式上政府の裁可を通さないと作戦実行ができなくなってしまう。まあ仕方ないんだろう。ソロモンやア・バオア・クーを失っているのに二階級上がることはできない。

キシリア閣下が中将になるのも道理だ。

だが俺は？

おそらく布告は同日だろうから、何とキシリア閣下と俺が全くの同格の中将になってしまうではないか！ これは恐ろしい地位だ。

よく考えたら、デギン公王とギレン総帥亡き今、俺は地位だけならジオン軍の真正銘三番目じゃないか……

まあ、別に地位が目的だったわけでもなく、それは戦いのただの結果に過ぎない。でも俺も軍人である以上、昇格は少し嬉しい。

「どうだ、中将。コンスコン中将！」

「え、あ、いやあ……」

「中将だぞ。どんな気分だ？ ほれ、中将、ほれ」

「まあ……ははは……」

ドズル閣下とのそんなどうでもいいやり取りは置いておくとして、実際のな面での変化について触れる。

「おそらく少しは艦隊も拡充してやれる。おそらく全部で二十五隻程度、大隊ではなく旅団に近い規模になるだろうな。だがチベやザンジバルは増やしてやれるが、グワジンは諦めてくれ」

ええーっ！ グワジンは無理なのか！

またチベか。

俺はチベコレクターだ。チベで一生終わるんだ！

「済まん。グワジン級はもう五隻しか無くてな。まさかデラーズにグワデンを降りろとも言えん。後はキシリアのグワジンとグワリブ、俺のグワラン、ガンドワか」

「いえ、そんなことは気にしてませんが……」

「あ、そうか？ それなら良かった」

いや気にして欲しいよ！ そこだけは！

それはともかく、他の人間の人事も聞いた。

ア・バオア・クー戦を生き残った者は、戦果がゼロでもなければ多くの者が階級を上げられる。

シャア・アズナブル大佐、マ・クベ大佐、エギーユ・デラーズ大佐、ヘルベルト・フォン・カスペン大佐の四人が新しく准将になり、将官級となる。

気になっていたギレン総帥秘書課の件は、この時にドズル閣下から快諾を頂いた。

絶対的に安全を確保できる新ポストが見つかるまで彼女らは艦隊勤務にしてもらえるそうだ。

ただし、持っている情報は全てバックアップをとり保管すること、また政治的なものについてはダルシア首相とキシリア閣下にも伝えることという命令がついた。まあ、そういうことはあの聡明な第一秘書に任せれば万事やってくれるだろう。

また、俺はドズル閣下から最初の指令を聞いた。

「コンスコン、それで最初にすることは会議だ。将官会議を開く。エギーユ・デラーズが、どこかに寄り道するとかで遅れているのだが、奴が到着しだい直ちに開く」

そこでジオンの行く末が決まる！

混乱した軍の立て直しという以上に、おそらく今後の戦略を策定する、それほど重要な会議だ。

いよいよそれが開かれる、正にその直前だった。

誰もが驚く超特大の悲報が飛び込んできたんだ！

「グラナダ、連邦軍の攻勢に遭い、陥落!!」

それは一日前、ア・バオア・クーでも激戦が行われている最中のことだ。

「警報発令！ 連邦艦隊接近中！」

「まさか！ 連邦は今ア・バオア・クーを攻めているはず。それでもこっちに同時攻撃か！ くそっ、数はどれくらいだッ!!」

「およそ45から50隻の模様！」

「はッ、そうか馬鹿めが。連邦の物量にも限界があつたか。おそらくグラナダに戦力が残ってないと踏んで仕掛けてきたんだろう。だが残念だったな連邦め。キシリア閣下の深慮遠謀により、グラナダに40隻以上残っている。地の利を活かせば互角以上には戦える」

こう言ってグラナダ基地司令ルーゲンス少将が迎撃作戦を展開した。

「広く展開して、突っ込んでくる連邦に十字砲火だ！ それで数を有利にする。各艦、狙点固定しとけ！」

だが、連邦艦隊はそのまま突入してこない。パブリク大量突入からビーム攪乱幕をこれでもかと濃密に張り巡らす。

場所を移動しながら行う艦隊戦と違い、要塞は動かないのでこれが使える。それで敵味方の艦砲の威力を減らした上、連邦はMSを大きく先行させてグラナダに取り付かせる作戦をとってきた。後で使うためにグラナダをなるべく壊さず、そのままそっくり制圧する気だ。しかし、まさか艦数が多い連邦の方から、砲撃戦を選択しないなんて！

この連邦のやり方はソロモンの時と同じだ。しかしソロモンとは違ってグラナダは純軍事要塞ではなく、コロニーに近いような産業都市であり、対空固定砲は少ない。それなのにこの作戦を使うとは。

グラナダのジオン側は予想もしない展開に虚を突かれてしまう。そして連邦のMS部隊が防衛線を易々と越えてきた以上、本格的なMS戦に引きずり込まれてしまった。

MSの数について言えば、艦数以上に両軍には差がある。もちろん連邦の方が多い。

「いや、まだまだだ！ MS戦ならこちらにはエースが多い。しかもここには海兵隊が残っている！ 直ちにシーマ・ガラハウ中佐に連絡！ 降下してきたMSを排除させろ！」

そして海兵隊のMSが出動した。
何と指揮官であるシーマ・ガラハウが先陣を切っている。

MS操縦にも自信があるのだ。しかし、真相はそれだけではない。
「中佐、突出し過ぎです！ どうかお戻りを！ 皆がついてこれません！」

「うるさいね、あたしやこれが一番いいんだ！ ついて来れない奴は弁当抜きだよ！」

「中佐、冗談を」

「あはは、しゃべってないで付いて来な！」

もちろんグラナダに大気はない。しかしシーマ・ガラハウは風を切って進むような鋭さだ。乗機は特別チューニングを施されたゲルググ・マリネ、ジオンMS最高峰の性能を誇る。

今、グラナダを背にして発進、降下してきた連邦MS部隊と即座に交錯する。

連邦MSを次々と餌食にしていく。

シーマ・ガラハウ、もちろん口に見合った強さだ。しかも他の海兵隊員も一騎当千のエース揃いである。

宙には、爆散する連邦MSの姿がたちまち数十にも上った。

「そら、墜ちろ！ 素直に墜ちろっ!!」

この時、シーマ・ガラハウはようやく人間に戻れている。

逆説的だが戦いの最中で本来の生気を取り戻しているのだ。

「ああ、こうしている時だけは、忘れていられる。あんな毒ガスのことなんか……」

それはシーマの心を重く縛っている鎖だ。

あの日のコロニー毒ガス注入作戦は、知らなかったとはいえ、実行してしまったのは自分だ。終了後にコロニーの中で見てしまった。恋人たちが、親子が、会社に向かう人も、学校へ行く子供も、誰も動かない。

静寂の地獄だ。

手足を投げ出し、苦悶の末に死んでいたのだ。無数の動かぬ人々がシーマを睨んでいる。その光の無い暗い瞳でシーマを射抜いている。

なぜ、どうして、何の理由で俺たちが死んだのだ。

何の罪があつてここで命を奪われた。

教えろ。お前がやったことだろう。妻まで死んだんだぞ。

あなたがやったんでしよう。ねえ、せめて子供たちだけでも助けてくれなかったの？ ねえ、どうして？

「毒ガスだなんて知らなかったんだーッ！」

百度呪われて死んでも、千度磔で殺されてもこの罪は終わらない。血の涙を流しても赦してもらえない。

「も、もう、お願いだ、赦しておくれよお……」

これを自覚した時から、シーマ・ガラハウの心は絶対零度に凍ってしまった。

もう無邪気なジオン兵には戻れない。

過去のシーマ、MSを上手に操って褒められ、早い出世に喜んだ。

そんな少女は消えたのだ。全ての喜びは遠い昔に失った。

今も、絶対にふさがることのない心の傷から、赤い血が流れ出て止まることがない。

激しいなら激しいほどいいのだ。

戦いの最中にしか、シーマは生きていられない。

第三十一話 将官会議

だがしかし、戦局は個人の思いなど無視して進む。

MSでの格闘戦が進むにつれ、連邦側に無視できない損害が積み重なっていく。どうせジオンMSなど少数、いくら機体が優秀でも包み込めばすぐに片付くと侮っていたのが間違いだった。海兵隊との戦いにより、思わぬ事態に驚くことになった連邦は、いつまでも同じ戦術に固執しない。

少数の足止めの捨て石を残し、他多数の連邦MSは海兵隊MSを迂回して一目散にグラナダ表面を目指す。

「チイツ、抜かれたか！ グラナダに被害は出せない！ 直ぐに追うよ！」

後ろから追いつつ連邦MSを撃ち墜とすのは楽だ。しかしそれでも数の違いは大きい。ついにグラナダのある月表面に降下を許してしまった。

そこからグラナダ内での市街戦になる。建築物を避けながら戦うのだ。

しかしここでシーマは司令部から不思議な命令を受け取った。

「基地司令ルーゲンスだ。シーマ・ガラハウ中佐、連邦MSと戦わなくていい。そうではなく、うまく誘導して集めるようにするんだ」

「分かりました、司令。しかし向こうはかなり広い範囲に展開しており、急ぎ排除しませんと。このままでは民間施設まで破壊されます！」

「いいから、今から言う通りにやれッ」

そしてシーマ・ガラハウは命令に従う。連邦MSの群れを牽制し、引き付け、重要施設から引き剥がす。

だがここで疑問が浮かんだ。

確かに艦船ドックや工廠、通信施設などの重要施設を攻撃から守るのに、このやり方は正しい。

作戦の有効性に疑う余地はない。

しかし今、逆に連邦MSが集められつつあるのは企業や通商、娯楽といった民間施設のある場所の方ではないか。グラナダにはそういう一般用の区画が大きい。

だが、民間人の避難誘導や脱出の気配がまるで無い。なぜ？

このままでは……

「ルーゲンス少将、これはいったい、どんな目的が!？」

「もう少しだ。シーマ・ガラハウ中佐、海兵隊で連邦MSを民間区画に集中させるんだ。くく、連邦め。美味しいエサだと思つて食いつくらう」

「な!! エ、エサ!? では司令、まさかッ!! 人間を囿に!」

「そうだ、連邦MSを集めたら、艦砲の一斉砲撃で民間区画を焼き尽くす。反応炉は民生用のものがいくらでもある。その誘爆で油断した連邦MSを一掃する。そうすればこの戦い、勝てる!」

「普通の人間が、その中に住んでいるのにッ!!」

「連邦に気付かせないために、民間人の避難や脱出はさせない。よく考えるんだ中佐。民間人の犠牲などこの際考慮する必要はない。大事なのは軍だ」

「!」

ルーゲンス少将は頭の切れる有能な軍人であつた。ただし軍人という範囲内だけで。

シーマ・ガラハウは軍の意図を聞いてしまった。

頭が真っ白になる。

トラウマが一気に甦り、押し潰されそうだ。多くの民間人のうめきと呪いが耳元で聞こえてきた。

お前は どうする、また殺すのか、もう一度俺たちを殺したいのか、と。

幾万という暗い瞳が宙に浮かび、今もこのゲルググ・マリィネを囲んでいる。

シーマは決めた。

そんな中でようやく決断したのだ。シーマという人間が、血の涙の

中、あくまで人間であろうとした叫びだ。

譲れない！

そこだけは、例え地獄に落ちると決まった自分でも、従うわけにいかない！

「その命令は聞かないツ!! あたしや軍を抜けるツ 死んでもそんなことはしないからアア!」

「な、何、何だと!! バカな! シーマ・ガラハウ中佐、命令違反だ!

敵前逃亡は死刑だぞ!」

「嫌だと言ったら、嫌なんだアツ!」

そしてシーマ・ガラハウは民間人を救うため、戦場を離脱する。

もちろん驚き慌てる海兵隊の部下がいる。

「お前らツ、好きにしな。あたしを撃つのもよし。抵抗しやしないよ。ジオンの兵ならそうするのが当然さね」

「そ、そんな、できるわけありません!」

そして自分でも混乱した状態の中、いつの間にやらシーマは自分の家のようなところ、海兵隊の乗艦ザンジバル級リリー・マルレーンに戻ってきていたのだ。

そこで当たり前のように声を掛けられた。

「中佐、いえ、軍じゃなければお頭、じゃないシーマ様、出航します」

「コツセル、お前……」

「シーマ様、海兵隊全員、こうなればどこへでも」

感情が渦巻くが、涙など見せられない。

自分はシーマ・ガラハウだ。指揮官なのだ。

全て、心の痛みは自分だけにしまっておく。

「…… マハルへ戻ろう。元々、ジオンなんて国家、大事じゃないんだ。マハルがあたしらのふるさと。そこへ行こう」

こうしてグラナダからシーマと海兵隊を乗せ、リリー・マルレーンはムサイ七隻を従えながら出ていく。

そして残ったグラナダは乱戦になり、ついにジオンの戦線は崩壊し

た。残存戦力は撤退に転じる。そんな中、基地司令ルーゲンス少将は意地を貫いて戦死した。また、たまたまグラナダ工廠に来ていたシャハト技術少将まで生死不明だ。

連邦もこの戦いで大きな犠牲は出したが、グラナダからジオンを一掃できた。

こうしてジオン最後の拠点グラナダは陥落したのである。

グラナダ陥落、そんな衝撃の中、将官会議が開かれた。

見たところ、会議を主導するのは当たり前だがドズル大将だ。これからのジオン軍を背負って立つ御方だ。すべての戦略に関わり、また責任を負う重圧の中を進まなくてはならない。

他にももちろんキシリア中將がいる。実際の軍行動はドズル大将よりむしろ前線近くにいることになるだろう。

そして恐れ多いがこの俺だ。正直、艦隊戦には少しばかりの自信はあるが、それだけが取り柄とも言える。ただしこの会議では今まで温めてきた考えを主張する気だ。

本当ならメンバーにダニガン中將もいるべきだが、療養中であり、もう現役復帰は無理と言われている。

また、地球表面に取り残され、ゲリラ戦を展開しているノイエン・ビッター准將、ユーリ・ケラーネ少將は当然ながら呼ぶことはできない。

逆に遠く小惑星帯のアクシズに赴任しているマハラジャ・カーン准將も呼べない。

そして先ごろルーゲンス少將、シャハト少將が消えた。

今回の会議で主役になるのは、間違いなく新しい准將四人組だ。

他にも人間がいけないことはないが、デラミン准將などは職人気質で謙虚な人間であり、キシリア閣下の腹心マ・クベ准將に従っているだけだ。トワニング准將は調整型の将であり、ジオンの戦略策定に積極的に関わろうとはするまい。

ちなみに同じ元大佐でもアサクラ大佐は昇格どころかグレート・デ

ギン誤射の責任を問われて謹慎中、近く軍事法廷にかけられるそう
だ。

「議題の最初は、皆も知っているだろう。もちろんグラナダ陥落の話
だ。これでジオンは宇宙の拠点を全て失った」

会議はドズル閣下自らが主導して進む。わざわざ司会を立てる程
の大人数ではないし、ドズル閣下にすればそんなのはまどろっこし
い。

「本国を守るばかりではこの先どうやっても負ける以上、何とかせね
ばならん。単に戦力の問題ではなく、拠点を持ってこそ艦隊も立体的
に運用できるのだ」

「それならば、ここで皆に話しておきたい」

いきなりここでエギーユ・デラーズ准将が話に入ってきた。

腕組みをしながら、背筋をきっちり伸ばしている。いかにも理想的
な軍人、といった姿だ。

皆は一体どんなことを言うのか、不思議に思いながらも注目する。

「今までギレン閣下が腹心以外へは秘密にしていたことを話さねばな
らない。ギレン閣下は偉大なる御方、あらゆることを想定しておられ
たのだ。ジオン本国が戦場になるというほぼ最悪の事態さえそれに
含まれる。それに備え、本営の移転場所を策定しておられた」

「な、何！ ギレンの兄貴はそんなことを！ そこはどこだ？ しか
し我らに全く気付かせないで準備ができたとは思えないが」

「ギレン閣下の深慮遠謀は、最適の場所を選んでいる。それはサイド
5の岩礁地帯の一部であり、これまで廃棄された艦の残骸がデブリと
なって浮かんでいる所である。そこと知って探すのでなければまず
見つかることはない」

「なるほど、そんなところに……」

「準備はもう既に最新の工廠と、艦の修理やドック施設を備えるところ
まで来た。しかも順次拡大中である。実はここへ来る途中通信を
取り、滞りなく進められていることを確認した」

この新事実には、皆は驚かざるを得ない！

確かに今行っているのは国家間戦争だ。首脳部機能を移転できる施設を用意しておくのは道理である。いついかなる急襲や破壊工作があるか分かったものではないからだ。しかしそれほど秘密のうちに、大規模に進められていたとは！

故ギレン総帥腹心のエギーユ・デラーズのもたらした情報は大きな朗報である。

「だからデラーズ、会議にちよつとばかり遅くなったのか…… いやそれは助かる。これでジオンはまだ拠点を持てるのだ！ ちなみに、その拠点に何か名はあるのか？」

「茨の園という呼び名が用意されている」

「そうか、茨の園か。ではデラーズ、ア・バオア・クーを脱出した配下と共にそこを統括し、いつそう整備を進めておけ」

「はっ、ドズル閣下、確かに了解しました」

ここでドズル閣下はキシリア閣下の方を振り向いた。

「キシリア、済まん。その茨の園はデラーズが適任だろう」

「…… 兄上の仰せならば」

キシリア閣下は理解したんだろう。その新しい拠点、まさかキシリア閣下が使うことはできない。

この会議場で、それぞれが以前の派閥を引きずっている。はつきりとギレン派、ドズル派、キシリア派、そして中立派がいる。もちろんこんなジオン危急の事態、皆は派閥争いなどしている場合じゃないことなど理解している。

そこまで無能な将はこの中にはいない。

今は互いの立場を踏まえた上で協力を踏み出しているんだ。ただし、別に仲が良いわけでもない。

その中でも深刻なのは故ギレン総帥の信奉者とキシリア派の関係である。その反目に比べればドズル閣下はどちらからも嫌われていないわけではない。

前々からギレン総帥信奉者はキシリア派と相容れなかった。それが今、更に亀裂が広がっている。

ギレン総帥戦死がキシリア閣下の謀殺ではないかと疑問を持っている。そこが決定的要因になったのだ。特に現場の最も近くにいたシヤア准将を疑い、毛嫌いしている。もともとシヤア准将の方では軽く受け流しているようだが。

そのため、ギレン派の将兵が心血を注いでようやく作り上げた拠点をキシリア閣下が握ってしまえば必ずトラブルになる、そうドズル閣下は気を回したのだ。

第三十二話 政治のキシリア

デラーズ准将からの話が済み、ドズル閣下がまた会議を進めていく。

それはグラナダ失陥そのものについてだ。

「キシリア、グラナダを失ったのは残念だが、どうも釈然とせん。いや、これはとんでもない間違いではないか。もちろん、ジオンではなく連邦にとってだが」

「兄上？ どこが納得がいかないと？」

「当然ではないか！ 分からんかキシリア。どこに連邦がグラナダを攻める意味がある。それはまあ、ジオンを追い詰め、拠点を奪うこと自体は変なことではない。手薄になって今急襲するのも、考えられなくはない。だが比較の問題で言えば、今一番やってはならない選択ではないか」

それはたぶん全員が抱いている疑問だろう。

グラナダ失陥のショックから覚めてみると、それがおかしなことだということに気付く。連邦にとつての悪手だ。

「連邦からすれば、グラナダを奪うことは戦略の一環、いわばジオンを締め上げていく持久策だ。しかしア・バオア・クーであればほどの激戦を戦いながらそういう余剰戦力があつたら、当然本国の方こそ襲うべきだったろう。連邦はソーラ・レイの発射間隔を知らん。しかしいくらなんでも数時間でまた撃てると思うわけがない。本国を攻める方が道理だ。いや例えそうしなくても、ア・バオア・クーをもっと大戦力で攻めて一気に陥落させ、きつちり追撃をかけた方がいいに決まっている。その方がよほどジオンに打撃になっただろうに」

ここでキシリア閣下はふっと息を吐いた。

そしてドズル閣下に向かい、ゆっくり話す。

「ドズルの兄上はいつもいつも軍略、軍略ばかりを言う。いや、そこが良いのか。これがギレンの兄上ならば私も全力で張り合おうとして

しまい、そのため無駄に尖ってしまったのだから」

「…… いったい、何の話を言っている、キシリア」

「軍略で考えるからいつまでたっても先に進まない。兄上、これを政治で考えれば、いとも容易く紐解けるでしょうに」

「政治？ なぜそんなものが大事だ？」

「ソロモンに攻め込んだティアンムと、ア・バオア・クーを攻めようとしたレビル、あまりにも連絡が悪過ぎでしょう。全くの同時作戦ならまだしも、そうでないなら連携がこんなに薄い理由がない」

「……なるほど、確かにそうだ。しかしティアンムとレビル、仲が良いかは知らんが、逆に反目はしていないと聞いた」

「だからこそ変なのです。レビルが消え、戦力が減っても、残ったダグラス・ベーターは作戦をそのまま実行した。ソロモンではティアンムが消えても、そのまま作戦を実行し、グラナダを陥とした。おそらくグラナダを攻めた連邦の大半はソロモンからのものでしょう。いくらなんでも連邦に魔法の壺でもない限り、無限に艦隊が湧き出るはずもない」

「キシリア、要するにレビルとティアンムを抜きにしても、連邦は二つに分かれてまるで別々に動いているようだ、ということか」

「そう、おそらく敵対している二つの何かが背後にあった、と考えるべき。そして更に言えば、そんな分裂があっても、これまで連邦はうまく機能してきた。不思議にも。ということは、その二つを上手いこと操り使いこなしている三番目の人間の存在が予想されることかと。深めに考察すれば」

「…… 連邦にはゴップとかいう狸もいるしな。他に名が聞こえているのは、ダグラス・ベーター、グリーン・ワイアット、ジーン・コリニー、ジョン・コーウェン……」

「誰がどういう立場と思惑を持っているか、今は考える材料が不足。しかし言えることは二つ。一つは連邦も決して一枚岩ではない。もう一つ、この戦争の早期終結を本気で願っているのではない人間も存在する、おそらくは」

「なるほどな……」

しばらく誰も声を出さずに考えている。

そういう考察もできるのか！

確かに、連邦の妙な動きはそう考えると納得できる。

そして会議場の人間の多くが、俺と同じ感想を持ったはずだ。

「政治のキシリア」

本来ならキシリア閣下は政治の方にこそ手腕があったのだろう。しかし現実には宇宙突撃軍や地球侵攻軍などの前線をみる立場になってしまった。それでも並以上の手腕を見せ、少数精鋭の部隊を作り上げているのだが、それが本来ではない。

キシリア自身も思う。これほど素直に考察を言える日が来るとは思わなかった。政治など頭からすっぽり抜け落ちているドズルの兄を前にすると言える。言いたくなる。

今まではギレンの兄がいたから、下手なことは言えない緊張があった。いや、全力で考えて言っても「その程度か、キシリア」と笑われる可能性が高い。過去の自分はそんなことに捉われ、いわば拗ねていた。実につまらない。

今は違う。

この先、自分もジオンもどうなるかは分からない。

だが自分の心に素直でいよう。いずれ結末が来るまでは。

その方が、少なくとも私は、気分がいいのだ！

話が一段落すると、ゆつくりと手を挙げる人物がいた。

マ・クベ准将だった。

「少しここで意見を述べさせてもらってよろしいでしょうか」

「ん？ マ・クベ准将、何だ」

「先ほどからの話の流れでは、グラナダ奪回の優先順位が低いように皆が思っているような。それは看過しかねます」

「グラナダ奪回は、むしろ戦略的に組み込むつもりではあるが……」

「そんな悠長なことは言っていられないのです！ グラナダこそ最重要と申し上げたい。なぜならそこには地球から持ち帰った資源が集積されており、これから加工されるところでした」

グラナダはジオンの工業生産の三割を担うほどに重要だ。

短期間にそれほどの工廠が集積したのは、月の持つ弱い重力が工業生産に適切だったからだ。地球上のような強い重力では物の移動だけで大変になる。しかし、逆に宇宙空間のような無重力では物の固定が厄介になり、作りにくい。液体を扱う工程は特にそうだ。

月のような重力が効率的な工業生産にちょうど都合がいい。特に小型部品の生産においては。

そしてマ・クベは地球から持ち去った鉱物資源をほとんどグラナダに置いていた。

「皆はおそらく工業というものをご存じない。たった一機のMSを造るのにどれほどのパーツが要することか。数万、あるいは数十万という空恐ろしい程の数になる。グラナダで作る部品が無ければたちまちどうにもならない。本国に多い組み立て工廠も、ちよつとした部品がなければ止まってしまふ。だからといって今から部品工場を新たに造り直すのは現実的に無理。すなわちグラナダの早期奪還はジオンの生命線といえる」

マ・クベ准将はクリーム色の緩い軍服に赤いスカーフをしている。

およそ軍人には見えず、デラーズ准将などとは対照的だ。むしろ怪しい古物商に見える。いや確かにその通り、とも言えるが。

恰好はともかく、マ・クベ准将の語っていることはもつともだ。

工業生産が回らなくなったらジリ貧、いやサイド3の生存すらおぼつかなくなる。

更にここでマ・クベ准将は畳みかける。

それは新鮮な情報だった。

「あまり故人のことは言いたくないが、シャハト技術少将は保守的な御方だった。ジオニックス社、ツイマツド社、MIP社に一定の要望を出し、ロードマップを提示してもらい、コストの試算と性能を見て決めていた」

「それは当たり前ではないか」

「その構子定規では、連邦には勝てないのです！ 連邦の国力は物量を作れるだけの話ではない。MSの技術開発においても人材を豊富

に投入できる。現に連邦が短期間に造ったガンダムは強い。私は実際戦い、身をもって知る羽目になった」

ガンダムが強いことは皆が分かっている。機体性能とパイロット、どちらについても。

特に、マ・クベはテキサス・コロニーで思い知らされたんだ。

「そこでMSの開発においても前線主導の特設機関が必要、そうキシリア閣下はお考えになられた。パイロット側の能力向上を図るためにフラナガン機関が設立されたことは皆も知っているとと思う。だがそこではMS自体の開発もさせていた。これがペズン計画である。そこでは、ギヤンの発展形、ドムの発展形、ザクの発展形が研究されていた」

あれ、俺が叩いたフラナガン機関がそんなものを！　しかしそんなものがあつたかな。

とにかく新型の強力なMSができるのなら万々歳だ。特にギヤンの発展形があるのは嬉しい。シャリア・ブルのギヤンは限界に近かったからだ。

「それぞれはもう基本設計を終え、実は各社に委託して試験製造にかかっている。しかしここで問題がある。私の持ってきた鉱物資源が無ければ、本来意図した性能が出せない」

「何だそれは。材質まで変えるというのか」

「そうですズル閣下。連邦のMSが高性能なのはいくつも理由があるのです。優秀なソフトウェア、高精度の製造機械、優れた加工技術があります。しかし、最大の理由は材質そのものが違うからです。特に防御用外殻にジオンのMSは単なる鉄鋼しか使っていませんが、しかし連邦はルナチタニウム合金という贅沢なものを使っています！　それで連邦MSは防御力が優れているのにずっと軽量になる。全体的に機動力も上がり、余裕ができる。この差は大きい。これではいかにジオンが設計思想で頑張ろうと遠からず対抗しきれない日が来るでしょう。その後は一方的に」

俺は噂で聞いたことがある。

マ・クベ准将は地球から撤退する際に「ジオンはあと10年は戦え

る」と言ったそうだ。

それはこういう意味だったのか。

鉱物資源の量を運んできたというだけの問題ではなかった。今の生産に使う資源だけではなかったんだ。

MSを開発するに当たって、新しい材質になり得るもの、そんなものを持ち帰っていた。今から10年先に開発されるMSに使うことまで考えた、新しい材質だ。

マ・クベ准将はさすがに技術に明るい。

そして未来のこともしつかり見ていたのだ。

「当座使えるバナジウム、マグネシウムは当然のこと、他にもこれからの技術に使えるベリリウム、ボロンまで地球から採取し、グラナダに置いてあります」

「なるほど、それではグラナダを取り返さねばならんな」

「これもいい機会ですのもう一つ、MS開発についての試案を申しましよう。先ずペズン計画は本国で進めていくことにして、しかし当面のMS生産ラインは急には変えず、姑息ですが改修で凌ぐことに。生産効率とコストを考えて最良の選択です。むろん、撃墜数の多いエースに期待してゲルググを優先配備、高機動タイプに順次改良して使わせます。一方で主力としてドムの生産ラインは引き続き使いつつ、最小限変更し、これもまた出力と反応性を高めた改修機に置き換えるのです。今のリック・ドムは残念ながら連邦MSに性能で劣りますが、若干でも上回る程度まで逆転させます」

「それは認められん！」

会議場で大きな声が響いた。

それはヘルベルト・フォン・カスペン准将からの声だった。

「マ・クベ准将、効率とコストを考えての製造計画だということとは良く分かる。それに対してむやみに反対するものではない。しかし、ここで一つ当たり前のことを言っておきたい」

あまり口数の多くないカスペン准将が口を差し挟むとは、皆にとつて意外なことだ。

「いったい何を言いたいのだろう。」

「ジオンにとって最重要の資源とは何か。それは人間である！ 鉱物資源ももちろん大事なものだが、人間はそれ以上に重要だ。優秀な機体はエースへ優先的に回すというのは当然の考えなのかもしれない。確かにその方が戦果が上がるだろう。しかし今新兵のヒヨツ子どもの中から未来のエースが育つのだ。ゆめゆめ軽んじてはならん！ 連邦MSに性能が劣るから今度は少しだけ上にする、そんな考えではヒヨツ子は守れん。せつかく良い設計のMSがあるなら、どうしてそれを今すぐに造って渡してやらんのか」

カスペン准将は若者たちに対して情が厚い。

およそ見かけからは信じられないほどだ。

そして言いたいことは、戦いに赴かせるならせめて一番良いMSを彼らに与え、死なないようにしてほしいという単純なことだった。

これに対し、マ・クベ准将も反論しなかった。マ・クベ准将もコストと効果のバランスを考えてしまっただけで、どうせ多くが死ぬ新兵なんかには適当なMSでいいとか無慈悲なことは思ってもいない。

これは高度な戦略判断が求められる。

ドズル閣下が判断を下した。

第三十三話 ジオンの反転攻勢

「ジオンの明日を担う若者が何より大事、か。そうだな。カスペン准将の言うことにも一理ある。MSは速やかに新型機へと切り替える。今の生産ラインとの整合性は度外視していい。一時的に生産が止まることになっても構わん。どのみちジオンの生産能力は限られていゝる以上、どんなに効率よく生産したところで連邦の物量に勝てるわけがない。それなら技術を特化し、いわば鋭い針のようになるしかないのだ。俺は戦いは数という考えを曲げるつもりはないが、今はそうせざるを得ない。そして連邦は物量もあれば、ガンダムという特別機もある。ただしガンダムを数多く揃えることは連邦といえど無理だ。そこをジオンは突く」

次にドズル閣下は驚くべきことを申し渡した。

「マ・クベ准将、新しい機体の選定と生産準備を任せる。いちいち全員を集めて選定の議論はせん。マ・クベ准将に任せるといったら全て任せる。急いで進めろ。そしてもつとMSの性能を上げるため、先々の技術開発も怠るな」

「は、はっ!! ドズル閣下、確かに承りました! ではガルバルディ、ドワス、アクト・ザクの選定と量産を急いで」

ドズル閣下もぶっ飛んだことを言う。

任せるといってもその重要性は計り知れない。

確かにこれが考えられる限り最速のMS開発・生産体制だ。貧弱なジオンの国力でも開発速度で負けるわけにいかない。

マ・クベ准将はとても嬉しそうだつた。

やはり、新しいものを開発するのは楽しみだ。そういう技術者魂があるんだらうな。任せられた責任は重大であるが、MSの選定などは漢が一生をかけるべき価値のある仕事だ。

「そしてカスペン、後進パイロットの教育や育成について全面的に任せる。そして後継機のテストでマ・クベに協力しろ」

「全力を尽くします、ドズル閣下」

「さて、話を元に戻すぞ。当面は残存戦力を使つての抗戦だ。差し当たり本国を防衛しつつ、ア・バオア・クーへ対応せねばならん。これはコンスコンが言つていたことだが、吸血作戦を取る。拠点を奪われたことを逆手に取るのだ」

そうドズル閣下が言った。

本人はあまり考えもせず言ったのだろう。しかし、皆に少しばかり波紋が広がる。なぜなら、ドズル閣下は部下のアイデアを自分の功績とはせず、事実を率直に言う性格だということが改めて分かったからだ。

軍も人の組織である以上、様々な思惑があるものだ。上司が部下の功績を奪うことなど日常茶飯事である。

しかしドズル閣下はそういう悪癖とは無縁だった。

「吸血作戦とは、ア・バオア・クーへの連邦の補給行動を破壊する難しいゲリラ戦だ。もちろん失敗すれば、ア・バオア・クーへ連邦の戦力が集積してしまう。そして連邦がソーラ・レイを撥ねのけ攻め切れると判断した時に本国へ攻勢をかけてくるだろう。ただし、ゲリラ戦もうまくやりすぎてはだめだ。逆にア・バオア・クーを手放す決断をさせない程度にしておかなくてはならん」

「ふむ、それは私に向いていそうだ」

皆が声のする方を一斉に振り向く。

今の声はシャア・アズナブル准将からのものだ。

「ゲリラ戦ならば、なるべく少数の方がいい。素早く襲い、確実に目的を達成して姿を消す。これはとても私に向いている」

「シャア・アズナブル准将？　しかし、技量の問題ではなく将官級の者が実行部隊に加わることはないぞ。今までの大佐の時でもMSに乗るのは感心できなかつたくらいだ」

「ドズル閣下、私が准将にまでなれたのは光栄に思っていますが、それはただの結果に過ぎない。今はまだMSに乗っていたいものです」

確かにドズル閣下の言うことは正しい。

本人の意思に関わらず、地位に伴った行動及び責任というものである。

「いえ兄上、ここはシャア准将の言う通りに。そんな地位のことを言うなら、どこぞの将もビッグザムに乗ったのでは？」

ここでキシリア閣下が横やりを入れる。

確かにドズル閣下が地位に相応しい行動を、などと言えたものではない。難しい顔をして黙ってしまった。

「ありがとうございます、キシリア閣下。では私のザンジバルでゲリラ戦を行いましょう。唯一この作戦に困難があるとすれば、連邦の補給の護衛にガンダムがつくことくらいでしょうが、別にガンダムを倒す必要はない。うまく引き付けておいて、輸送艦を壊せばいい」

「……よし。ではゲリラ戦についてはシャア・アズナブル准将に一任する。さて、次に考えることは大まかな戦略になる。ここでジオンが勝てる方策をひねり出さねばならん。一番難しいことだが」

ついに俺が手を挙げる。

考えていたことを言うべき時だ。

「ん？ コンスコン、何か考えがあるのか」

「ドズル閣下、少しばかり考えていたことがあります。吸血作戦の次はマ・クベ准将の言う通り、グラナダを最優先でいいでしょう。けれど次が問題です。ソロモン、ルナツー、フォンブラウンを奪って宇宙から連邦を駆逐し制宙権を確立するか。それとも先に地球に降り立ち、再び地表作戦を展開するか」

「コンスコン、確かにその二つの道に分けられるが、大きな話だな。だがどちらも現状では夢物語だぞ。難し過ぎる」

「いえ、ドズル閣下。初めに大きなところを考えながら動かなければ、いくら緒戦でうまくいっても以前の二の舞になります。そこで提案したいのは、ア・バオア・クーとグラナダを奪還した後、地球を目がけて攻勢に出ます」

これは皆にとって意外な言葉だった。以前の地球制圧作戦はもの見事に失敗した。ジオンにそのトラウマは大きい。

「な、なぜだ！　以前ジオンはそうやった。結果的に莫大な損失を出して撤退せざるを得なかったではないか」

「目的は地表の制圧ではありません。地球に取り残されたジオン将兵の救出です。今、彼らは絶望的なゲリラ戦を展開し、追い詰められつつあります。しかもそんなことをしても連邦には大した痛手にもならず、宇宙戦の片手間に相手をしているだけです。そしてカスペン准将の言う通り、ジオンは人が資源。彼らを救ってやることは、全体の士気を上げると同時に兵の補充を意味します」

「それはそうだが……」

「長期制圧を目的としなければ機動軍で充分でしょう。宇宙港や往還機は使いません。艦の製造に使う資源を、ある程度MSの生産の方へ振り向けるとしても、艦の製造ラインはある。他の艦種よりザンジバル級を優先的に作り、それで地球に向かえます」

皆も分かっている。ザンジバル級は唯一宇宙と大気圏両用に作られている。チベやグワジンでは大気抵抗は考えられていないし、立派なメガ粒子砲があっても大気内では威力を殺されてしまう。大気圏内での高速飛行とそこそこのMS搭載を両立しているザンジバル級が使いやすい。

「しかしコンスコン、地球作戦は難しいぞ。何もかも勝手が違う」

「いえドズル閣下、本当にジオン兵の救助だけなんです。ジャブローなどには手を出しません」

「？　地球に行くのに、向こうの指導部を叩かないのか。では戦争は終わらせられんぞ」

「どのみちジャブローを叩くのは意味がありません。なぜなら連邦は以前の戦いで『学習』をしまっただけです。いくらジオンが暴れようと、いざれ補給線が切れて続けられない。その時叩けばいいだけだ。一度そう連邦指導部が『学習』したからには、例えばジャブローが囲まれても降伏などするはずがありません」

「で、では本当に終わらんではないか！　持久戦になれば絶対にジオンの負けだ」

「ここが重要なところだ。一息いれて俺は話を続ける。」

「要は持久戦にさせなければいいのです。つまり、連邦の方から持久戦を諦めさせ、決戦に引きずり出すのです」

「な、何だと！ 連邦の方からだと！ いったいそれができるのか。コンスコン」

「できるのです、ドズル閣下。先ほどマ・クベ准将は資源の話をしました。確かに鉱物資源のほとんどは地球にあります。ジオンはマ・クベ准将の先見の明によって確保できましたが」

「これはその通りだ。もちろん宇宙に岩石は山ほどある。しかし意外に使える鉱石は少ないのだ。それには理由があり、地球はその火山活動や水流によって長い時間をかけて成分を濃縮する。特に希少金属はそうやって鉱石になるのだ。宇宙に浮かんでいる小惑星ではそういうことが起きない。」

「しかし、逆に宇宙にしかない資源があります。すなわち重水素やヘリウムです。当然、どちらも核エンジンに不可欠なもの。そしてそれは木星プラントからの供給に頼っています。このプラントからのルートを断ち切り、備蓄を襲撃する。これで地球のエネルギーは破綻します。下手に人口が多いだけに收拾がつかなくなり、慌てて短期決戦をせざるを得ないでしょう」

「木星船団公社との折り合いはどうする。南極条約があるが……」

「公社そのものを敵に回すのは得策ではありません。輸送艦の航路を割り出し、勝手に戦時宙域に設定します。連邦への受け渡しポイントを狭めてやり、積み替え後を狙って襲撃すれば」

「軽いヘリウムなどの資源は、地球にはほぼ無い。地球の重力では引き留めておけず、大気から宇宙に逃げられてしまうからだ。地球から一番近い採取場所は木星である。シャリア・ブルなどはそのために木星船団にいたのだ。」

木星圏からのガス採取、精製、輸送は木星船団公社という非政府組織が受け持っており、ジオンを含む各コロニー、そして地球に供給している。建前上は戦争と関係なく、人類のための共有公社である。

木星圏からの輸送艦は工場まで備える超巨大艦であり、地球の重力

圏までそれほど近づくことはない。基本あまりエンジンを使わない巨大艦なので、地球をスイングバイしながら航行するわけだが、地球に近いルートを通るようにすると、速度が速くなってしまい受け渡しがしにくい。またスイングバイ曲線にいてもなお重力で艦体に歪みが出てはいけなからだ。つまり資源の受け渡しは地球と離れたどこかの宙域で、連邦と事前に示し合わせて行っている。

「……なるほど、そういうことか。資源の面で連邦を締め上げるというわけか。スペースノイドにはスペースノイドのやり方がある。面白い。面白いぞ、コンスコン。それでいこう」

「核エンジンが使えなくなれば艦もMSもガラクタ同然。とはいえ、連邦も馬鹿ではありませんから、こちらの意図に気付いたら備蓄を隠す、受け渡しポイントを秘匿する、ダミーを使ったり、護衛を付けたら、色々なことをしてくるでしょう。その裏をかいて戦い続けませんと」

「それでもやってみる価値はある。いや、それ以外に勝つ方策は見当たらん。コロニー落としを際限なく続けることは、ジオンのやることではない。今さらジオンが人道的など言っても仕方ないことかも知れんが」

「兄上、そうとも言えず、今からでも意味を持たせられるでしょう。ジオンが体制を一新したことをアピールすれば。正直サイドーの残りコロニーは難しいでしょうが、サイド6くらいはジオンの側にもう少し引き寄せられる余地があるかと。そして当然連邦へも交渉余地が残るでしょうし」

キシリア閣下も政略面から、ギレン閣下のやり方からの転換を支持した。

実現可能性や実行案についての細かい検討は本国の制服組がするとしても、これで皆が納得する形で基本方針は定まった。

ジオンはようやく本当の意味で固まったんだ。

「ここから、立ち上がる！」

会議場は若干気の緩んだようなほつとした雰囲気に含まれる。

だがその中、突然思いもかけない凶報が飛び込んできた。

「か、会議中失礼します！ 只今通信が入りました！ ソーラ・レイ管制宙域においてアスクラ大佐叛乱！ 軟禁から脱出し、従う将兵らと共に技術指揮艦ギドルを占拠したとのことです！」

「な、何だと！ こんな時に！ いや、アスクラ大佐としては処罰前にやむに止まれず、ということか。しかしこのタイミングとは、一刻も早く鎮めねばならん。混乱を連邦に悟られてはいかん。では、コンスコン、行つてくれるか」

「承知しました、閣下」

俺が指名されるのは道理だ。

アスクラ大佐がギレン総帥の腹心だったことはよく知られている。

ここでまさかシヤア・アズナブル准将などを鎮圧に差し向ければ、またしてもギレン派を肅清かと疑われる。せつかくうまくいきかけた体制がぶち壊した。逆にギレン派のデラーズ准将などを使えば、妙な温情で取り逃がすかもしれない。ここは比較的ニユートラルな俺がやるべきだろう。

ソーラ・レイ、その前はサイド3マハル・コロニーと呼ばれたれっきとした居住型コロニーだった。そこへ急行する。

第三十四話 マハル・コロニー

会議が終わって退室する際、キシリアは小声でマ・クベに言う。

「直ちにマダガスカルでソーラ・レイへ向かえ。私も同乗する」

「はっ、閣下！ しかし、ソーラ・レイにどうして。コンスコン中将がもう向かったのでは」

「気になることがある。ソーラ・レイは元はマハル・コロニーだ。私の勘が正しければだが、そこにたぶん……」

当のソーラ・レイには、毒づきながら暴れる者がいた。

「くっそ！ どうしてこんなことに！ なぜ俺が責任を取らされる！」

アサクラ大佐はそう言って答えのない問いをするしかない。

自分は命令に従っただけだ！

確かにギレン総帥からの発射命令を聞いたので、あのタイミングでゲルドルバ照準ヘソーラ・レイを放った。結果的にグレート・デギンは沈み、デギン公王は死んだ。それは事実だ。しかし、自分のせいではない！

それがいつの間にか自分の誤射だと思われている！

しかも功に逸って味方位置の確認を怠った愚か者として。

公王を殺した責任となれば極刑以外にない。本当に自分の間違いならともかく、そんなことを納得できるものか！

命令を下したギレン総帥に頼ろうにも、そのギレン総帥はこの世にいない。

そして自分はどうと、発射直後にいきなり拘束され、弁明もできないまま軟禁状態に置かれてしまった。これもまた妙だ。その時点では、誰も発射後の影響など分かるはずが無いのに。

まさか、まさかギレン総帥が？

口封じのため素早く手を回した？

いや、自分は長いことギレン総帥の腹心だった。そんな、ここで切

り捨てられるはずはない……　しかし他に考えようがない。

なぜ自分が！　こんな有能な部下なのに！

幸運なこともあった。

責任を問われているのは自分一人ではない。

ソーラ・レイの照準を確認した者や、実際に発射スイッチを押した者まで拘束された。更に通信要員などにも及び、その時の指揮室要員はあらかた捕らえられた。

ソーラ・レイに関わる人間で、処分される輪はいつたいどこまで広がったのか。

彼らもまた怯えていた。

恐慌をきたし、ついに暴発してしまった。

自分もそうだが、全くいわれのない嫌疑で一方的に処分など甘受できるとはならない。

叛乱を起こすのは簡単だ。

これだけ技術に明るい者が揃っているのだから、艦に隠された予備端末に誰かが取りつけば、ギドルの制御を乗っ取れる。そして叛乱に賛同しない者をこの技術指揮艦ギドルから降ろし、ジオンからの脱走を図る者で艦を動かす。

いつそう幸運なことに、機関兵などの一般兵でも脱走に賛同するものが続々と出てきた。

それには理由がある。

ジオンが戦争でひどく劣勢なことは末端の兵たちでもよく分かっている。

このままでは死ぬ可能性が高いのだ。一回二回の戦いで勝つてもいずれば負け、命はたった一回の負けで失われる。それなら、今までの指揮官と共に、命があるうちに脱走するのも一つの手と思う。

問題はそういう彼らと共にギドルを占拠した後どうするかだが、こうなってしまった以上不本意でも連邦へ赴くしかない。叛乱兵などジオンの敵、討伐から逃げきれぬわけがない。連邦へ投降するしか生きる道は無いのだ。

連邦の方が受け入れるか？

しかし、そこだけには全く不安はない。

なぜなら自分はソーラ・レイの性能や制御を知っているのだ！

ジオンの切り札の兵器、その情報は連邦が喉から手が出る程知りたはずだ。それをこちらが持っている以上、単に受け入れるどころか歓待されるかもしれない。ひよつとして何かの地位を与えてくれるのではないか。今の大佐ではなくとも、せめて士官には……

「よし、ア・バオア・クーへ向けて出航だ。そこに駐留している連邦軍に保護を求める」

アサクラ大佐とその甘い夢を乗せ、ギドルがソーラ・レイ管制宙域を出ようとする。周辺には数隻のムサイがいたが、この大型艦の発進を見送るしかなかった。格が違い過ぎる。そしてMSはそこにいなかった。

しかし発進直後、ギドルはそれら以外の艦が接近してくることを察知した。

「アサクラ大佐！ ギドルに接近する艦隊を捉えました！」

「何？ まさか討伐艦隊がもう!? だ、だがこんなに早いはずはないが……」

「接近中の艦隊、旗艦判明、ザンジバル級リリー・マルレーン。こ、これはキシリア閣下の海兵隊と思われます！」

「何だと！ 海兵隊か。俺の隊じゃないか。通信繋げ！」

スクリーンにシーマ・ガラハウが映る。

「シーマ・ガラハウ中佐と突撃軍海兵隊か。久しぶりだ。指揮官をお前に譲って以来だな」

「…… 確かに久しぶり」

「ところで何しに来た。この宙域にはソーラ・レイしか無いが」

アサクラ大佐はシーマ・ガラハウの脱走のことは知らない。軟禁されていたためだ。いや、大半の者は知らない。ごく上層部の者だけがグラナダの戦闘途中で海兵隊が忽然と姿を消したことを知っている。

「ああ、グラナダの戦いの途中で抜けてきたんだよ。いわゆる脱走さ。そして故郷を見ようとここまで来たんだ」

「な、何!? シーマ・ガラハウ、お前もジオン軍を脱走したのか? はは、俺と同じだな。これは好都合だ! では一緒に来るか?」

「冗談かい、大佐」

「冗談なものか。お前もどのみち脱走したら必ず見つけれられて懲罰されることくらい分かっているだろう。懲罰といっても極刑だけだ。しかし、俺と一緒に連邦へ行けば安心だぞ。俺はこのソーラ・レイの最高責任者だ。連邦は必ず歓迎してくれる。俺と一緒になら、お前もな。悪い話じゃないだろう。代わりにシーマ・ガラハウ、連邦へ行くまでの護衛を頼む。リリー・マルレーンの戦力があればたいがい艦隊に勝てる。これで安心だ」

アサクラ大佐もシーマ・ガラハウと海兵隊の実力は知りすぎる程知っている。ここは味方に付けたい。

それで誘いをかけたが、シーマは表情を厳しくしただけだ。

「ちよつと待っておくれ。聞きたいんだが、このマハル・コロニーをぶち壊し、兵器なんかに変えた責任者って、大佐かい?」

「ああ、俺がギレン総帥から全てを任された」

「どうして、選りにもよってこのマハル・コロニーを?」

「ん? このコロニーをどうしてだど? たまたま位置的にちよつどいいところにあつたんでな。使っただけだ。人口も二百万しかいないから強制疎開も簡単だ。それくらいの理由か」

「……それだけ聞けば充分だよ。いや、分かつてはいたさ。ただ確認したかっただけだ」

アサクラ大佐はあつさりと対応を間違えてしまった。

シーマ・ガラハウと海兵隊のショックを軽く見てしまったのだ。

リリー・マルレーンはこのソーラ・レイを、たまたま発射口、つまり内部も見える方向から寄ってきていた。

できるだけ早く、一目、故郷を見るために。軍を脱走して未来が無いかも知らない、それでも故郷に。

シーマも海兵隊もそれを見ながら近付いていた。

最初はもちろん驚いた! 長いこと帰っていなかった故郷、その姿

を思い出しながら慰められていた故郷。期待したそれとはまるで別物を見て。

コロニー・レーザーの情報はジオン軍全体に固く秘匿されていたが、噂レベルでシーマも知っていた。

しかし、それがよもやマハル・コロニー、自分の故郷が使われたなんて！

そこで見えたものは、もはやコロニーなどではない。

見える一方の端はレーザー発射口として切り取ったように開けられ、もちろん宇宙の真空だ。中の状態は、以前人が住んでいたような形跡は全く無い。生き物など完全に消え、きれいさっぱり、ただのレーザーエネルギーの入れ物でしかない。覗き見える内部には無機質の金属の壁と焼け焦げた土が所々にあるだけだ。

シーマ・ガラハウは思い返す。

故郷マハル・コロニー、そこはかつて美しい緑が広がり、いくつもの湖があった。

鳥たちも魚もいた。

密閉型コロニーならではの地表高低差を活かして、ささやかな小川まであったのだ。

その一方、移民団入植地らしく流れ者が多くいた。雑多な区画には、怪しい行商、ジャンク屋、なんでもありだ。子供たちはそんな活気のある区画が大好きで、親から止められていても通っていたものだ。シーマ・ガラハウ達もそうして育った。

まるで万華鏡のように楽しいふるさとだった。

そんな故郷は酷く変わり果てた。昔の姿はもうどこにもない。

心の記憶だけを残し、永遠に失われた。

「あのマハルがこんなことに。あんたに分かるかい、アサクラ大佐。あたしらの故郷はなくなった」

「何だ、そこに拘るのか。それより命が惜しいだろう。一緒に連邦へ行くんだ」

「あんたとは違う。一緒には行かないさ。死ぬならマハルの側で死

ぬ。鳥も緑も無くなったけれど、このマハルで」

「おかしなことを言うな！ スペースノイドは宇宙で生きる者だ。マハルはただの宇宙に浮かんだ作り物、人が作った一つの居住地ではない。そんなものに拘るべきではないのだ！」

「…… あんたの言う通りかもしれない。鉄で作られた壁、その内側に薄っぺらい土を張り付けただけ。川も湖も緑も全部作り物だ。ただのコロニー一つ。分かっているよ。でもふるさとなんだッ！ 本物でも作り物でもなんでもいい。あたしらのふるさとだったんだよッ！ あのマハルは!!」

「ちよ、ちよっと待て。落ち着け。もし地球へ行けば、本物が見られるんだぞー！」

「うるさいね！ ここであんたに落とす前をつけなきゃいけない。あたしや遠からず地獄へ行くが、あんたを先に送ってやるよ！」

「な、何を言うんだ。済まん、俺の言い方が悪かった。シーマ・ガラハウ、一緒に行かなくてもいい。た、頼む。妙なことだけはしないでくれ……」

シーマはもう通信を切ろうとしていた。

アサクラ大佐がなおも焦って懇願している。情けない声だ。

「マハルの件は、仕方ないんだっ！ ここは見逃してくれ……」

リリー・マルレーンはギドルから距離をとったまま、MSを発進させる。

この敵対行動を察知してギドルが主砲を放ってきた。

「撃てー！ こうなれば、消し飛ばしてやるぞー！」

元はグワジン級戦艦であるギドルだ。どうしてそれが前線に出されることもなくアサクラ大佐に下賜されたのかは謎とされ、ギレン総帥の権勢の誇示と噂されたものだ。

今ではギドルは技術指揮艦としてすっかり改装され、MS搭載のベイもなく代わりに技術開発部が詰められている。砲の数も減った。しかしそれでも主砲の一つくらいは残っているのだ。

ギドルの砲撃は遠く外れた。照準がかなり甘い。おそらくは本来

の砲術士官がいないので代わりのものが撃つたのだろう。しかしさすがに威力は凄く、これならリリー・マルレーンではどこに当たっても一発轟沈だ。

リリー・マルレーンから発進したMSは、隊長機ゲルググ・マリィネを先頭にして進んでいく。

もちろん熾烈な対空砲火に見舞われるが、そこをかいくぐり、なおも接近していく。

取り付く直前、ビーム・ライフルを撃った。しかしさすがに元はグワジン級、傷は付けられても致命傷にはならない。重要区画までいくつもの区画があり、そこまで至らないのだ。

ゲルググ・マリィネは再び飛ぶ。

今度は艦に沿って回り込み、その正面に出た。

ビーム・ライフルを持ち上げ、艦橋を正確に捉える。

「覚悟を決めなッ！ アサクラ大佐！」

第三十五話 落とし前

シーマ・ガラハウは当然、ギドルの艦橋を狙った。

ギドルを墜とすことは必要なく、アサクラ大佐さえ斃せばいいからだ。

ゲルググ・マリーネはピタリと艦橋直前に止まり、そこからビーム・ライフルを撃つ！

まともに艦橋を貫いた。

グワジン級戦艦だったギドルはダメージコントロールも徹底されている。中央制御が失われたら自動的に艦の制御は即座に分散され、こんなことで沈むことはない。しかし少なくとも艦橋に詰めている司令要員が生きていられるはずはない。

「これであたしの最後の仕事は終わったよ。こんなことをしても仕方がないのにさ。あたしも馬鹿だねえ。でもさ、何か言ってくれてもいいだろ、マハル」

だが直後に気付いた。なぜかギドルから今もなおミノフスキー粒子が散布されている。

そして視界の端にわずか、エンジン付きの脱出艇が遠ざかっているのが見えた。既にギドルから発進していたのだろう。

「アサクラ大佐、あんたもしつこいね。マハルのことも、あたしらを騙して毒ガス攻撃をさせたことも、たぶんあんたのせいじゃないんだろう。上からの命令って奴でさ。それでもね、あんたを許せない。落とし前は付けてもらう」

ビーム・ライフルがその脱出艇を狙い撃つ。一度、二度は外した。それは照準をつけるためのものだ。それを十分にフィードバックし、精密に照準を合わせる。

「先に地獄で待つてな！」

三度目に撃った時、脱出艇を貫き、爆散させた。

ここにアサクラ大佐は斃されたのである。

その後、リリー・マルレーンからゲルググ・マリーネに通信が入る。

「この宙域に艦隊接近！ コンスコン機動部隊と思われます！」

「…… そうかい。追手が来たのかい。全員逃げな！ あたしのことは気にしないでおくれ。追手は大丈夫だ。ゲルググ・マリーネがここを通さない」

「シーマ様！ それはできません！」

「馬鹿を言うんじゃないよ！ とつとと撤収しな！」

「いいえシーマ様、生きるも死ぬも、このマハルのみんなで！」

俺はこの宙域にようやく到着できた。

近づいて見えてきたのはなんとも奇妙な光景だった。

グワジン級戦艦を改装して作られた技術指揮艦ギドルが攻撃を受けている。

それがアサクラ大佐が叛乱を起こし、占拠したギドルだ。グワジン級のシルエツトなど見誤るはずが無い。

しかし一体ギドルは何と戦っているのだ？

叛乱を察知して俺より先にここへ来ていた部隊がいたのか？ ドズル閣下からは何も知らされていないが？

MSの他、ギドルに相対している艦隊がいる。ザンジバル級一隻にムサイが何隻かの編成のようだ。おそらく攻撃しているMSはそこから発進したのだろう。

「いったい状況はどうなってるんだ。艦型照合と通信解析を急げ」
そこで得た答えは困惑させられるものだ。

「ギドルから救助要請信号あり！ そして攻撃しているMSと艦隊が判明しました！ キシリア閣下所属、か、海兵隊です！」

「何だど？ 海兵隊はグラナダの戦闘から敵前逃亡したと聞いている。あのザンジバル級がそうか。それが何でここにいる？ アサクラ大佐と一緒に落ちあつて逃亡か？ し、しかしそれがどうして戦いになってるんだ」

俺は意味不明ながらもこの戦いを止めさせなくてはならない。そして捕縛した後に事情を聴き、脱走兵は軍規に基づいて処罰するのだ。

機動部隊を更に接近させる。

ジオン同士の戦いなどしたくもないが、もしも抵抗するなら実力を行使する必要がある。

投降勧告が無視されたのは予測の内だ。

しかし不思議なことに海兵隊の艦隊は何も慌てているところがない。おまけにこちらを砲撃してくることもない。つまり死に物狂いで抵抗するというポーズが見えないのだ。

俺は砲撃戦を選択しなかった。正直言えば、俺の機動部隊の編制なら、砲撃戦で方を付けるのは難しくない。しかし、それをしてはならないような気がしたのだ。

代わりにMSを展開させる。

「シャリア・ブル、ツエーンのドム隊は投降を呼び掛けながら、向こうのMSをギドルから引き剥がせ。クスコ・アルのエルメスは隊長機を探し、それを無力化だ。ガトーは臨機応変に支援に回れ」

こちらのMS隊が発進していくと、向こうのMSたちにも動きがあった。ギドルから離れてまとまりつつある。

その後、意外なことに隊長機が先頭になって突っ込んできたではないか！

かなり遅れて、他のMSたちもまとまって接近してきた。

「隊長機を見つける手間が省けたわ！　ここで止める！」

そう言ってクスコ・アルがエルメスのビットを展開させて迎撃態勢を取った。自信を持って待ち構える。この四つのビットから逃れられるMSなど、ガンダム以外に存在するはずがない。

その時、通信機から向こうのMSの会話が切れ切れに入ってきた。

「シーマ様！　お戻り下さい!!」

「うるさいよ！　脱走兵のあたしが言うのもなんだけど、これは命令だ。全員リリー・マルレーンに戻りな。そして最大戦速でずらかるん

だ」

「その命令は聞けません！ シーマ様がいなければ、俺たちばかり逃げても仕方ありません！」

「…… 何度も言わせるんじゃないよ。お前らだけでも逃げてください、お願いだ」

やがてその後続MSたちも隊長機に追いつき、一団となる。

そして二つのMS隊が交錯した。

エルメスのビットが順次ビームを放つ。

だが、結果は驚くべきものだった。

当たらない！

当てられなかった。それでもエルメスは体勢を立て直す。

だが、これでコンスコン機動部隊MSの目論見は外れてしまった。

最初に隊長機を捕縛あるいは大破して、戦意を失わせ、包囲するとうものだったからだ。

戦いは一気に乱戦になる。ここで改めて思い知ったが、さすがに海兵隊のMSは強い。しかも機体はみなゲルググだ。高性能だが操縦の難しいゲルググを見事に操っている。

そして数に大差はない。

だがそれでも、全体としてはコンスコン機動部隊MSが押ししている。ツエーンやシャリア・ブルのギャンが全体をリードし、常に隊形を整えているからだ。なかなか一対一になる状況を作らせない。逆に隙を見ては、シャリア・ブルが死角から突進しゲルググの手足を斬り飛ばす。

そんな中、艦隊指揮官シーマ・ガラハウ中佐自らが乗っていると判明した隊長機がエルメスに仕掛けてきた。この大型モビルアーマーを潰せばコンスコン側は怯み、活路が開けると踏んだのだろう。それも間違いではない。

接近戦を挑んでくる隊長機、ゲルググ・マリーネにビットが狙いをつけるが、またしても外してしまう。ただしビーム・ライフルの狙いをつけさせるのを妨害した。

するとゲルググ・マリィネはビーム・ライフルを捨て、ビーム・サーベルに持ち替える。これはエルメスの苦手な超接近戦にする気だ。

こんな展開になるとは思いもよらなかった！

俺は盛大に後悔した。

エルメスであればMS相手に楽勝だと油断していたのだ！

海兵隊の隊長機ともなるとEーS級の腕前だろうとは思っていた。しかし、まさかクスコ・アルのエルメスが！

やはり安全に遠距離砲撃戦を選択すべきだった。俺はスクリーンにエルメスを見て、今さらながら撤退を言おうかと通信を用意した。クスコ・アル本人もこんな展開に困惑している。

そしておぼろげながら、なぜこうなっているのか理解できた。

NTは相手の気を読む。そして先取りして動くことができる。

だが今、このゲルググは自分を殺す気が無いのだ。

もちろんこのエルメスを再起不能くらいにするつもりなのだろうが、そこに殺気はない。あるのは全てを捨てた、穏やかな覚悟だけだ。こんな相手には気が読めず、先取りが充分に機能しない。

ゲルググ・マリィネがついにエルメスをビーム・サーベルの間合いに捉えた。

だがクスコ・アルはビットを横から体当たりさせた。ビームの撃てないこの間合い、しかしビットを一つ犠牲にしてでも排除にかかった。

エルメスのビットはビーム用のジェネレーターを積んでいて、決して小さいものではない。それなりに質量はある。

ビーム・サーベルを振りかざした直後、ゲルググ・マリィネはビットを左横腹にぶつけられて飛ばされ、エルメスと距離をとられた。だがゲルググ・マリィネは破壊されたわけではない。再び体勢を取り直す。

そこへ駆けつけてきたのがアナベル・ガトーだった！

「クスコ・アル、よくやった。後は任せるんだ」

「済みません。私としたことが、あのゲルググに後れをとるなんて」

「いや、充分だ。俺は当たり前前のことを言うが、ビットなんかより、お前の方が大事だ」

「……………」

通信を取ろうとした俺は啞然としてしまう。

またかよ！

ちよつと待つて、ガトーさん！

ここでそれ言うの!?! 少し考えてよ！

おそらくクスコ・アルの頭の中では、「俺はお前が大事だ」って都合よく略された文章ができちゃってるはずだ。

そして、やっぱリードしてるわなんてお花畑なこと考えてるよ。

それでいいの!?!

第三十六話 心で見えるもの

今度はアナベル・ガトーが海兵隊隊長機の相手をする。

ガトーはビーム・サーベルを振り抜き、正面からそのゲルググ・マリネに向かって急接近していく。

「海兵隊の隊長機、投降を勧告する！」

「何だいあんた。投降だつて？ 嫌だね。どうせ軍規では脱走兵は銃殺しかないさ。それよりも戦って死にたいよ。ここであんたが戦ってくれるのかい？」

「なに？ お前は……」

「あは、それがいい。あんたは相当腕が立ちそうだ。あたしの最後の一花にちようどいいさね」

「死ぬために戦うなんて止める！ それは戦いじゃない」

「いいから相手しな！ ただし他の海兵隊には手を出すんじゃないよ！ いや、手を出さないでくれ」

接近戦の間合いに入った。

互いにビーム・サーベルを繰り出す。その速さ、これはエース同士の戦いだ。だが幾度か斬り結んでいくと判明してくる。ゲルググ・マリネは確かに優れた機体だった。現時点のジオンで最高の機体だろう。だから、気が読めないとしても全方位空間把握ができるNTクスコ・アルのビットの攻撃さえ、基本回避行動で避けられたのだ。

だがしかし、パイロットとしての技量では歴然とガトーの方が上だった。

ついにガトーはゲルググ・マリネの右腕を切り飛ばした。これでもうゲルググ・マリネのビーム・サーベルはない。

「やつぱり思った通りだ。やるね、あんた。でもあたしは投降しない。止めを刺すんだね。でももう一回は言わせておくれ。部下は助けてやってくれないか。皆、あたしについてきただけで、罪はないんだ。それだけは頼むよ」

「……その部下思いは本物だな。投降したら極刑は免れるかもしれない

ん」

「褒めてくれるのかい。でもさ、あたしはダメなんだ。名前を聞いたことあるかい」

「海兵隊隊長、シーマ・ガラハウ中佐だろう」

「そうさ。毒ガスのシーマ・ガラハウさ。民間人殺し、虐殺のシーマだよ！ みんながそう言っただけを憎む。それだけのことをしたんだから仕方がない。あんたもまともな軍人ならあたしのことは嫌いだろ？」

「……しかし実行したのは命令があったからだろう。それならどうしようもない。断れば別の人間がやっただけだ」

「そう言ってくれるのは嬉しいね。あんたは優しい。けどなんにも分かってやしない。虐殺をやったのは間違いなくあたしだ。コロニーの人間はこの手で殺した。みんな、あたしを恨んで苦しみながら死んだんだ！」

この会話をしながら、シーマ・ガラハウは後ろにゆっくり流されていく。ガトーに気取られないように。

そして最後にさつと左腕を伸ばす。そこには、さつき斬られた右腕に握られていたビーム・サーベルがあった。ガトーもそれに気付く。「これで帳消しにしておくれ！」

ガトーは攻撃を予期して身構えた。しかしゲルググ・マリーネはガトーに仕掛けたのではない。

何と自分のコックピットにビーム・サーベルを突き立てる！

ゲルググは敵に機体を渡さないよう自爆装置を備えている。しかし、パイロットがいればそれは作動しない。だからシーマはこうするしかなかった。自分を消してしまうためには。

だが、そこを素早くアナベル・ガトーが反応した。

ゲルググ・マリーネのコックピットが破壊される寸前、その左腕も薙ぎ払ったのだ。これで再びビーム・サーベルも腕も失い、自壊するすべもなくなった。

「あんた！ 邪魔するのかい！ もう終わりにしておくれよ。あたしの罪は死ななきゃ終わらない」

「それは違う。生きてこそ自分にも部下にも責任がとれる」

「確かにそうなんだろうね。それが真つ当な考えつてもんだらう。でもあたしはもう無理だ。疲れたんだ。分かるかい？ 今も毒ガスで死んだ人たちの呪いの声が聞こえてるよ」

「……」

「もうダメなんだよ。周りの真つ暗な宇宙にさ、みんながあたしを睨んでる。あんただって笑うだろ。誰でもそうさ。あたしがそんなの見てるはずないって言うのさ」

「いや、お前はそれが見えている」

「あはは、本当にそう言ってくれるかい？ 今もさ、このゲルググ・マリーネの周りに目玉が浮かんでるよ。数える気もしない。何万あるんだらうね。一つ一つがどれだけ恨みを込めてるか。笑えるよ。これだけ呪われて、あたしやもう地獄にいるのかねえ。もう疲れちまつたよ。教えておくれ、ここはもう地獄なんだろ？ 目玉に睨まれながらMSで戦い続ける、地獄なんだろ？」

シーマ・ガラハウは精神のタガが外れかけていた。

ここに至って、こらえられなくなってきたのだ。

そこをガトーの声が切り裂いた。

「俺は分かった。お前にはその目玉が見えている」

「そうさ！ ここはあたしのための地獄だからねえ」

「お前はそれにずっと囲まれてきた。いつも、何をしても」

「…… 本気でそう言ってくれるのかい……」

「お前には楽しいことなど何も無い。どんな時も苦しいだけだ」
「……」

「だが知っておけ！ お前には目玉が見えている。しかし、俺にはそんな目玉は見えない。それも事実だ！」

「何が事実だって言うんだよ！」

「事実だから事実だ！ 俺にはそれが見えない。それも間違いない。」

「どうしてか分かるか！」

「な、それは……」

「その闇に浮かぶ目玉はお前の心が見せている。お前が、自分に見せている」

「だけど！ だけど！ 見えるんだ。あたしだって見たくないけど、見えるんだよ……」

「激情が涙になる。」

手足は強張り、体は前に傾き、そのまま涙を落とす。

「お前は苦しい。苦しんだ。しかも逃げられない。自分が自分から逃げられないのは当たり前だ。それでもお前は部下のため、責任のため、頑張ってきた」

「あたしは……」

「ずっと頑張ってきたんだ」

「頑張ってきた……」

「そうだ。お前は、今までそうしてきた」

「あ、あたしは、頑張ってきたんだ！ 苦しかった。苦しかったんだよ。あたしは誰にも赦されれない。赦されれないことをした。だけど苦しい。誰か助けておくれ…… あたしは苦しいんだ。でも、ずっと頑張ってきた」

とめどない涙が、これまでの年月を押し流していく。

「ずっとずっと、頑張ってきたんだよ……」

この時から、シーマ・ガラハウの闇は取り払われた！

見えていた幻は亡霊の呪いなどではない。自分の良心が自分を傷つけていた。それでも頑張ろうとしますます魂が引き裂かれていた。自分の手を踏みながら立ち上がろうとしていたようなものだ。それをガトーが突いた。

心の傷は深く、直ぐに治りはしない。

しかし、そこから流れ出ていた血はもう再び流れることはない。

素直に力を抜き、中破したゲルググ・マリーネは無抵抗でチベへ曳

航されていく。

他の海兵隊MSも投降し、ゲルググには皆、一時動作停止のロックが掛けられた。これはコードを再入力しない限り解けないロックだ。リリー・マルレーンも機関の火を落として停止する。

これをもつて、一連の出来事は全て鎮まった。

幸いなことにツエーンなどの俺の側も海兵隊の側も、どちらにも死者は出ていない。MSはさすがにお互い大破が数機出たが、それだけだ。

やれやれこれで一安心、といきたいところだったが、俺はまた驚くことになる。

チベ艦橋にオペレーターの声が響く。

「コンスコン司令！ 後方より接近中の艦があります！ ザンジバル級の単艦！ 艦型照合出ました、マダガスカル！」

「な、何！ マダガスカルといえばマ・クベ准将の艦ではないか。なぜ今ここに？」

「向こうから通信入っています！」

「出せ！」

「取り込み中のところ失礼申し上げます、コンスコン中将」

「……いや、騒ぎはちょうど今収まったところだ、マ・クベ准将」

「では用件を申し上げよう。この艦にキシリア閣下が乗っておられる。そして今からすぐそちらに移乗したいと仰せである」

「え、ええ!? そんな、キシリア閣下が！ いや、もちろん仰せの通りに。しかしなぜ」

「もう移乗シャトルで出られた」

うわあ！

これは一体どうしたということだ。

もちろんキシリア閣下を直ぐに出迎えるべきだが、その前にやることがある。

ちようど今チベに入ったシーマ・ガラハウ中佐の状態確認と、それに合わせた監禁指示をしなくてはならない。病室なのか、尋問可能な

のか、そしてリリー・マルレーンを当座どうするかなどの話だ。俺はその方を優先してひとまずキシリア閣下の出迎えには副官を行かせた。

俺のチベのMS発着場に腕を失ったゲルググ・マリーネが運び込まれた。

ハッチを自ら開けると中からシーマ・ガラハウが出てくる。

ひらりと着地し、辺りを眺め渡す。顔にかなりの涙の跡がある以外は堂々とした態度だ。

「海兵隊隊長、シーマ・ガラハウだ。単なる脱走兵だけどね」

「この艦隊の司令、コンスコンだ。シーマ・ガラハウ中佐、グラナダからの逃亡を認めるんだな」

「ああそうさ。でも部下は違う。あたしにくつついて来ただけなんだ。そこは分かってほしい」

「……事情がありそうだな。そのあたりの経過についてと、叛乱を起こしたアサクラ大佐との関係について聞かせてもらいたい。特にギドルと戦闘になった理由を。その結果次第で処罰も変わる。当面この艦にて拘禁させてもらうがよろしいかな」

「そうしておくれ、コンスコン司令」

「そこまでだ。コンスコン中将」

直後、この場所に声が響く。

キシリア閣下の声だ。

振り返るとキシリア閣下と俺の副官がいる。おそらくキシリア閣下がさっさとここに歩むのを追いかけてきたのだろう。

「さすがにコンスコン中将、見事な火消しだった。とても感謝する。

しかし、シーマ・ガラハウ中佐を拘束する必要はない。即刻開放してもらおう」

話してくる内容は驚くべきものだ。

俺は丁重にそれに答える。

「は、はあ、キシリア閣下。むろん仰せの通りに！ ですが軍規によりまずと脱走兵への処罰規定があり、これを曲げることは……」

「そこが誤認なのだ！ 最初から間違っている。シーマ・ガラハウは脱走兵などではない！」

「キ、キシリア閣下、それはいったいどういうお話で……」

「シーマ・ガラハウ中佐は、私が事前に出した命令に従ってグラナダからここに来ていたのに過ぎない。グラナダからこのソーラ・レイまでの宙域確保のためだ。スパイ対策で極秘に行いたかったため敢えて脱走兵のフリをするよう命じたのも私だ。シーマ・ガラハウ中佐はここに至るまで忠実にそれを守った。グラナダのルーゲンス少将さえ騙されたのは、まあ誤算だ。つまり海兵隊がそういう任務を行なった、たったそれだけの話だ」

これを聞いて驚いた顔をしたのは俺ではなくむしろシーマ・ガラハウ本人だ。

キシリア閣下は何を言っている？

自分はグラナダからのただの脱走兵なのに……

第三十七話　　そういう話？

「キ、キシリア閣下、では海兵隊がアサクラ大佐と戦闘を引き起こした
ことについては？」

「単なる偶然だろうな。ここに到着したら叛乱に出遭ってしまい、最
優先でそれを阻止することになった、というところか。特に問題では
ない。命令に含まれていないことでも、叛乱という非常事態に直面し
たらそれを阻止するのは艦隊司令として当たり前前の行動だ。そう考
えたのだろうか、シーマ・ガラハウ中佐？」

「い、いいえ！　脱走のフリなんて、そんな命令は最初からどこにも！
本当にただの脱走で！」

「シーマ・ガラハウ、今まで任務ご苦労。海兵隊を取りまとめ原隊に復
帰せよ。コンスコン中将、これで納得してもらえたか？」

「……　確かに理屈は通っています。しかし、聡明なキシリア閣下は
お気づきでしょう。それにはきちんとした報告書の作成と、根拠の提
示が必要です。ドズル閣下や他の将官も最初から脱走と聞いていま
すし、脱走が重罪であればこそそれを覆す証拠がなくてはなりません。
軍が組織であるからには」

「……」

「秘密命令であっても、何がしかは残っていてしかるべきなので
す。何かの理由で失われたのなら仕方ありませんが」

俺は筋論を言つてのけた。

正直損な役回りだ。

過去に俺はキシリア閣下とフラナガン機関を巡っていざこざを引
き起こした。キシリア閣下がそれを好ましく思っていないことはキ
マイラ隊の派遣から明らかだ。ここでいつそう反目する事態にはし
たくない。

俺のためでもあるが、ジオンのためでもある。

今、弱体化したジオンは派閥の枠を超えて譲り合わなくては立ち行
かない。だがギレン派とキシリア派はちよつとやそつとで仲直りは

するまい。この上はドズル閣下の者たちが接着剤になってやる必要があるのだ。

もう三文芝居をするしかないか……

俺はゲルググ・マリィネを指さしてわざとらしい声を上げる！

「ああつ、あれはシーマ・ガラハウ中佐の乗機か！ よく見たら中破、いや大破しているではないか！ これは大変だ！」

皆が急に何を言うのかという顔でげんなりな視線を投げってくる。頭わいてる人を見るような目だ。

くそ！ 痛い、痛いよっ！

俺だって好きでやってんじゃないんだからね！

「このMSはひどい状態だ！ 腕だけでなくコックピット周りも破損している可能性がある！ それでは命令書も残っているかどうか…… いや中佐申し訳ない。こちらの行き違いで戦闘になり、キシリア閣下からの命令書も失われたかもしれない。秘密命令ならその書類も身近なところ、コックピットなどにも持ち込んでいたと拝察するが」

「…… おそらくそうだろう。コンスコン中将の言う通りだ。シーマ・ガラハウ中佐は命令書の紛失を気にすることはない」

「失われたものは、仕方ありません。キシリア閣下」

「コンスコン中将は理解をして、それに合わせた報告をしておいてくれると言うのだな。本当に助かる」

「もちろんキシリア閣下、そのように」

そして俺はすぐにシーマ・ガラハウ中佐を解放した。

むろん俺だって秘密命令があつたなんて思うわけがない。それはシーマ・ガラハウの表情を見ていれば嫌でも分かる。海兵隊は脱走ではなかった？ いや、確かに脱走なのだろう。

だが、この短い会話でもキシリア閣下の思いは充分察せられたのだ。部下であるシーマ・ガラハウを助けたというのが伝わってきた。貴重な感情だ。

閣下は全て承知の上でそれを無しにしようとしている。

だが俺としてもその方がいい。派閥のことはさておき、ジオンに

とって海兵隊は重要な戦力だ。

それに脱走兵の処分などしたいわけがない。

何より俺もシーマ・ガラハウは指揮官として立派な人物に見えたのだ。それを信じる。脱走もそれなりの理由があると思っただけだ。間違いないだろう。

とりあえずただの茶番を演じただけだ。

本人は置いてけぼりのキシリア閣下と俺の茶番である。

全ては、結果オーライだ。

「シーマ・ガラハウ中佐、リリー・マルレーンに戻る前にひとまず一緒にマダガスカルに來い。少し話がある」

シーマ・ガラハウは、キシリア閣下と共に一度マダガスカルへ行く。俺のチベに残されたゲルググ・マリナーは後で送ってやる約束をした。

最後、このMS発着場を出る直前、シーマ・ガラハウは振り返った。そこには、ゲルググから降りてきたアナベル・ガトーがいる。

「あんたが、あのゲルググのパイロットだったのかい？」

「ああ、そうだ。宙に浮く目玉など絶対に見たこともないし、これからも決して見ることはない男だ」

「あたしもね、あんたに言われてから見えなくなったよ。ありがたいね。でも言いたいことは感謝だけじゃない」

「何だ？ 中佐」

「あんた、いい男だね。年下のようだけど、あたしや構わないよ」
ちよつと待つて。

え？ 突然何を言ってるんでしょうか？

このアラサー美女は。

「先ずは生き残っていておくれ。あたしが迎えに行くまでは」

この発言に俺も驚いたが周りもそうだ！

特にエルメスから降りてきたクスコ・アルが顔を青くしたり赤くしたりしているじゃないか。

そんなクスコ・アルにも向かってシーマが言う。

「あんたがああのモビルアーマーのパイロットだったのか。この男の近くにいられるのは、あたしからのハンデと思いな。せいぜい頑張っておくれ。あんたじゃこの男とは釣り合わず、無理だと思うけど」

実にシーマ・ガラハウらしい。

クスコ・アルは思いもよらず正面から挑戦状を叩きつけられた。大人の女であるクスコ・アルも急な発言に、言い返すこともできず口をパクパクさせている。

ガトーが代わりに平然として言った。

「もちろん死ぬ気はない。そして中佐から戦闘技量を褒めてもらうのは光栄だ。だが、海兵隊からの共同作戦の申し込みなら、難しいかもしれない。宇宙突撃軍とこの艦隊とは系統が違う。特殊な狙いがあるればあり得るかもしれないが…… それと中佐は知らないかもしれないが、エルメスは今回の戦いで本来の性能を出せていなかった。普段ならMS戦闘のサポートをしてもらうのに不足はない」

はあ？

ちよつと雰囲気寒いですけど。

ガトーは一人で何を言っている？

完全に浮いてるよ？

俺もぶつたまげたが、周りの全員もそうだった。

「あつはつは…… こういう男だったかい。ますます気に入った。じゃあしばらくお別れだが、待ってておくれ。すぐにまた会う気がするよ！」

そう言っつてシーマ・ガラハウは爽やかに去って行った。

はああ…… 俺は逆にめちやくちや脱力感を覚えた。

やつぱりか！

やつぱりそうなつちやうのか!! ガトーさん！

うん、こうなるかもとは思ってた。

思ってたんだけどさ。

もう俺は笑うしかないよ！

どう決着が付くのか、考えたくもない。

ここにツエーンやセシリアがいなかったのは幸いだ。いや、ここは密室ではない。必ず話が伝わるだろう。下手すれば一時間も経たないうちに。

はあああ……………

そしてマダガスカル艦長室に数人が入室した。

本来、ザンジバル級はそれほど大きくない艦だが、このマダガスカルは艦隊旗艦であることもあり、艦長室は比較的広めにとられている。

ついでに言えば、あるものの存在のため誰が艦長なのか一目で分かるようになっていいる。

ジオン広しといえど、他にこんな艦はない。いや連邦にも絶対無い。

壁には収納棚がしつらえてある。そこに、それぞれ形の違う白磁の壺が並べられているのだ。しかも三段もある。おまけにカーテンのような幕も見えるので、まさかその裏にも棚があるのだろうか。そうすると全部で何段になるだろう。

戦う骨董市といえば恰好良く聞こえるが、実際には何の意味もない。艦隊指揮官の精神を落ち着かせる以外には。

「シーマ・ガラハウ、一時は肝を冷やした。脱走と聞いた時にはな」「キシリア閣下、脱走については申し開きもできません。しかもマハル出身の海兵隊まで巻き込んでしまいました。内々の処分は覚悟しています」

「脱走を責めるつもりは毛頭ない。私はお前のことを信用している。何かの理由があるのだろう。そんなことは聞くまでもないことだ。それにな、これは私ばかりの思いではない。コンスコンもお前を信用したようだ」

「コンスコン中将まで？」

「奴も不思議な男だ。マ・クベの言っていた通りだな。今回もお前を助けるために私の嘘を嘘と知りながら乗ってくれた。あんな臭い芝

居まで打ってだ。先の将官会議でもそうだったが、奴は本当に派閥を超えてジオンをまとめたいのかもな。私も先の遺恨は忘れることにした。いや、協力したいとさえ今では思う」

「…… ありがとうございます。閣下。しかしながら、海兵隊の脱走でグラナダの戦いが一気に不利になったのも事実」

「グラナダはどのみち陥ちた。そこは気にするな。連邦は確固たる意志で陥としにかかったのだ。ア・バオア・クーと同じこと、指揮官はおそらく意地でも陥としたに違いない」

「ですが……」

「グラナダを脱出できたのは海兵隊を除けば二十隻しかない。ア・バオア・クーから私を含めて脱出したのは三十隻程、併せても宇宙突撃軍は今や五十隻だ。それなのに海兵隊の戦力をみすみす捨てるわけにはいかない」

「……」

キシリアは手持ちの戦力の話もした。指揮官としてのシビアな損得勘定だ。

だがそれが脱走を不問にする理由なのか。シーマがそれでも納得していない様子なのを見て、大きく息を吐く。

「実は、それも嘘だ。戦力のためにお前の脱走を無しにしたのではない」

「で、ではなぜあんな秘密命令の作り話までして……」

「本当のことを言うと私にも迷いがあった。お前の顔を見るまではな。しかしお前の顔の表情は、良かったぞ。それで私も無理な嘘を言う気になったのだ」

「表情？ それが変わったと？ おそらく、長く続いた悩みが吹っ切れたからでしょう。今頃になって、ようやく。向こうのパイロットの一人に救われました。変な話ですが戦いながら助けられることに」

「向こうのパイロットに救われた？ お前が最後に話していた銀髪の男のことか。良さそうな男だ。ふふ、私も話してみたいな。大いに興味が湧いて来た」

「冗談を！ キシリア閣下」

「冗談ではないと言ったらどうする？」

「……」

「本気にするな。シーマ・ガラハウ、そういう表情もできるようになったか。熱いな」

第三十八話 連邦の進化

「閣下、からかうのはお止め下さい」

「そうだな。しかし話はそんな楽しいことばかりではない。今のお前に話すべき、いや話したいことがある」

キシリアの言う通り、シーマは今や誰にも見せたことのないような表情をしている。たおやかで、ほころんだ表情だ。いや、これがシーマ本来のものだったのか。

逆になぜかキシリアの方が表情が硬い。

「回りくどい言い様をしてみました。私もこういうことには慣れていないし、難しいな。しかし言わねばならない」

「何をですか？ 閣下」

「毒ガスの件だ」

「！」

一気にその場が緊張する。

シーマ・ガラハウの苦しみの元になった事件だ。せつかくの表情がみるみるうちに強張る。

「ギレンの兄の差し金で海兵隊に来たアサクラ大佐、その者がお前にコロニーへの毒ガス注入をさせた。世間ではどうか知らんが、実際はそうだ。しかしそれもまたアサクラ大佐が自分で考えたのではない。大元はギレンの兄が計画したことだ。命じられたアサクラ大佐は保身のために自分は手を下さず、お前に丸投げした」

「そ、それはそうなのですが……」

「その話自体を言いたいのではない。問題は、私も知っていたということだ。ギレンの兄は、ジオンに敵するコロニーを始末する汚れ役を自分のところだけではなく、私の宇宙突撃軍にもやらせようと企んだ。さすがにドズルの兄にもちかけはしなかったようだが。だがギレンの兄は少なくとも私くらいは共犯にしかかったのだ。それが目的でなければ無理にアサクラ大佐が来るものか。奴は小物であるがギレンの兄の腹心だからな。ただしそうと知りつつ、私は呑み込ん

だ。兄上との政治的な駆け引きを優先し、それを黙認した」

シーマも今まで何度も考えたことのある疑問だ。

なぜ自分は騙されてまで毒ガスを使わされたのか。

それを今、キシリアは自分の口から告白してきたのだ。

「ジオンの暗部を私は知っていた。しかもそのことでお前がずっと苦しんでいたことも承知していた。毒ガスの罪を一身に背負い、お前が世間の厳しい目に晒されていること、いやそれだけだったらいい。お前は自分の良心からひどく苦しめられていたことも。だが私は知らぬフリをしてしまった。小さな損得ばかり考え、いつかお前に話さねばと思いつつ、ここまで来てしまった。せめて私がかかっていると伝えられたら、お前の心もずいぶん救われたに違いないのにな。今回の脱走もおそらくそれに関係することなのだろう？ それでも頑張ってきたお前が突然脱走するとは、よほどのことだ」

「キシリア閣下……」

「済まなかった、シーマ・ガラハウ。この通りだ。赦してくれ」

何ということだ！

およそ人に頭を下げたことのないキシリア・ザビ、勝気な少女時代から、今では硬い鎧をまとった女になった。

そんなキシリアが、なんと今、紫のマスクと尖った飾りのついた帽子まで取った。

そしてシーマ・ガラハウに頭を下げているのだ！

「！ か、閣下！ お止め下さい！ 部下にそんな謝るものではありません！ どうか頭をお上げ下さい」

「私もギレンの兄がいれば謝るなんてことは絶対に無理だったと思う。しかし兄がいなくなったら今、自分がいかに無理をして、強がって、周りと壁を作っていたのか分かってきたのだ。今頃になって、ようやく。お前に対して遅すぎた」

「今頃とはいっても、充分間に合いました！ 閣下。ありがとうございます。本当に、ありがとうございます。このシーマ・ガラハウと海兵隊はいつそう閣下をお支えいたします。全霊の忠誠を持ち、何があろうと、最後まで」

この一連のやり取りをマ・クベが背後から佇んで聞いている。そして小声で呟く。

「キシリア閣下は変わられた。シーマ・ガラハウも」

ギレンは長いこと色々な意味で重しだった。そして、ギレンの死はキシリアの無駄な強がりを解き放ったのだ。

今のキシリアに政治的なライバルは誰もいない。

ドズルはキシリアにとって立ててやりたくなる相手であって、ライバルではない。もしも政治的に対立してしまい、謀略戦になればいつでも勝てるという余裕がある。そうするつもりは全くないが。

つまり、今や頭を押さえられていた絶対的存在は消え去り、柔軟さと闊達さが戻ってきたのだ。

ここで、シーマの心を分かりつつ見殺しにしていたことを認めて口に出すくらいに。

政治の得意なキシリア、そこによくやく人としての温かみ加わった。

そしてマ・クベはこれからのジオンとキシリアの行く末を見たいと強く願うのだ。

「…… ジオンは、もっと強くなる。必ず」

そうしている間にもジオンの軍事行動は止まっていない。

同じ頃、シャア・アズナブル准将はア・バオア・クー近傍で盛んにゲリラ作戦を行っている。

連邦は大量の資材や食糧をア・バオア・クーに運び込まなくてはならない。

ジオンはこの要塞の撤収にあたり、食糧などの消耗品を全て持ち去っている。

それも問題だが、重要なのは補修や交換などに使う工業製品だ。要塞の工廠は破壊されず、そのままにしておかれていたが、むろん原材料は無い。しかし原材料があったとしてもジオンと連邦は製品の規

格がまるで違う。そのため直ぐ使えるパーツの生産などできるわけがない。製造データの書き換え以前の面倒な問題だ。結果的に連邦はそういう工業製品も全て持ち込まなくてはならなくなる。

人員についても、要塞を稼働できるようにするだけでもかなりの人数を使う。そういった後方要員がそれだけ必要なのだ。つまりこのア・バオア・クーを維持するだけで大変である。ソロモンも同じような状況に晒されている。

それなのにルナツーやフォンブラウンからの補給線は余りに長く、その生命線を守り切るのは困難を極める。

シヤアはララアのエルメスを伴い、またしても襲撃に出ていく。

今回の獲物、コロンプス級輸送艦の六隻が見えている。

問題は護衛だが、ゲリラ戦の最初の頃はせいぜいサラミスの二隻がいいところだった。しかしこの襲撃が二度、三度に及ぶと護衛もまた増えてきているのだ。

四度目からは軽空母を伴うようになっていた。サラミスは砲撃は強いがMS搭載能力が低く、業を煮やした連邦は直掩のMSを増やしにかかった。

いずれは護衛任務に木馬とガンダムが付けられることになるのかもしれない。ただし幸運なことに木馬は強襲揚陸艦、戦地や要塞に突撃して橋頭堡を築くのが本来の目的であり、そこを輸送艦の護衛に運用する発想には連邦も今のところ至っていないのだ。連邦上層部の頭の固さが幸いしている。

同じような理由で戦艦マゼランが回されることもない。もつとも、シヤアにとつては木馬よりマゼランの方がよほど組し易いのだが。

今見えているのはサラミス四隻、それだけではなく後方に隠れて軽空母がいる。おそらくそこから発進してきたであろう連邦MSが、ざつと十二機はいるだろうか。けっこうな戦力だ。襲撃も五度目ともなればこうなるのは当然だ。

「ララア、MSを適当に片付けておいてほしい。私は輸送艦の方を叩く」

「大佐、いえ准将、輸送艦はともかくサラミスの対空砲火には気を付け

て下さい！ もしも准将に何かあれば、復讐のためサラミスの人たちを一人ずつ真空に放り出します」

「……ララアは怖いな。私なら最低限弾幕を避けるくらいのNT能力はあるつもりだ」

「でも心配です！ やはり准将はわたしのビットの中にいるべきです」

「大丈夫だ。心配しないでほしい。それよりララア、連邦MSを一気に叩かないでくれないか。あまり力の差があるように見られると、次の護衛が増えすぎてしまう。苦戦していると思われた方がいい」

それは確かにシヤアの言うことが正しい。相手が油断していればこそゲリラ戦ができる。襲撃する側が圧倒的に勝ったりすれば、当然、次には護衛がこれでもかとはばかりに強くなってしまうだろう。程々がいいのだ。

本気を出せばララアのエルメスなら十二機のMSを倒すのにそう苦労はしないのだが。

シヤアとシヤアの率いるゲルググの部隊が連邦輸送艦を目指す。シヤアとしては信頼できる二、三機もいれば充分なのだが、さすがに准将になれば一つの部隊を率いなくてはならない。シヤアを含めて八機が出撃している。

それを危険と見て追ってくる連邦MSの前にララアのエルメスとビットが立ち塞がる。

シヤアの言う通り、相手のビーム・ライフルを苦勞して躲しているように見せかけながら、ゆつくりと料理していく。力をセーブして一機ずつビットで撃破していく。

その間にシヤアの方はサラミスの対空砲火を躲し、コロンブス級輸送艦に近付く。

「あ、赤い彗星が来た！ もうダメだ、散開して逃げろ！ 物資の全滅だけは避けるんだ！」

輸送艦が慌てて散開しようとしても無駄だ。シヤアはあつという間に接近し、艦壁ストレスに取り付くと、エンジン部を狙って繰り返し撃つ。

輸送艦は大破では意味がなく、爆散させておく必要がある。

六隻のコーンブス級は一隻ずつ残骸になっていく。

全て片付けると、その宙域に積み荷の一部が燃え残ってバラまかれていますのが見えた。

「今回の補給物資には、食糧が多かったのか。缶詰まであったようだ。要塞の連邦兵も辛いだろうな。食べ物を減らされては士気も落ちるだろう」

あとはさっさと撤収だ。サラミスを撃沈する必要はない。

「適当に選んだ一隻だけを沈め、後の三隻は残す。ララアの方もMSを九機ほど墜としたところだ。ちょうどいい程度の数である。」

追撃など考えさせない圧倒的速度で手早く消える。

ア・バオア・クーへの補給活動は連邦兵士にとって楽な任務どころではなくなった。

正に命がけの仕事になったのだ。

そして赤い彗星だけでも戦意を消し飛ばすのに、謎の無敵モビルアーマーを相手にしなければならぬとは、何の冗談だろう。

「ア・バオア・クーの亡霊」

そう言って連邦兵士はエルメスに恐れをなすことになる。

もちろん乏しい物資をやり繰りしている要塞兵士の方はもつと大変だ。水と酸素だけは要塞の岩石そのものに含まれるものを使えばいいが、食糧はそうもいかない。ア・バオア・クーはジオンにとってすれば本国に近く、補給線は短かった。そのためわざわざ食糧生産プラントを内部に設置したりしていなかったからである。

シヤアは今回もうまく襲撃をやり遂げ、補給を寸断し連邦を大いに苦しませる。

だが戦いの後、戦闘詳細をもう一度見てみた。

若干の違和感があったためである。

「ララア、妙だな。連邦のMSが強くなっている気がする。むろん、エルメスが苦勞するようなものではない。私やララアにはどうという差ではないが……」

解析の結果は驚くべきものだった。見かけはあまり変わらないが、連邦のMSは大幅に進化していたのだ。

第三十九話 奮闘のマ・クベ

「私とラリアではないジオンの他の部隊にとっては問題となるだろうな。特にゲルググ以外のジオンMSには。撮影したデータはマ・クベ准将に送っておこう」

シヤアは連邦MSがパイロットの技量に関係なく強くなっている気配を感じていた。機体の性能が上がっていたような気がしたのだ。見かけではそれほどの変化がないのに。

シヤアの急報及びデータを受け取ったマ・クベは直ぐにその重大な意味を理解する。

解析の結果、外部に見える改変はわずかだが、連邦MSの性能が大幅に上がっていることが分かった。シヤアの感じた通りだ。しかも、ハードウェア的な進歩とソフトウェア的な進歩の両方が認められるとのことだ。

結果的に新型機と言っても構わないほどの性能向上になっている。元々連邦MSはジオンMSを解析した上に独自技術を乗せた設計をしている。そして更に質の良い材料を使った機体を作れる。

しかし、それにもかかわらず性能は高いと言えるほどではなかった。その性能差は試作機ガンダムとあまりに大きい。それはひとえに一気に量産体制へ移るため、かなりの妥協をしているからである。もちろん設計は簡易化されて部品点数も減らされている。しかしそれだけではなく、各部材・各パーツに過度のゆとりを持たされ、しかもリミッターがあちこちにかけられている。

そのためジムは連邦初のMSにもかかわらず生産工程の歩留まりは高く、深刻な生産ミスは起きていない。数を揃えることができたという点で連邦の戦略は成功した。

全く新しいものを一発で量産できたのは工業的に言えばそれだけで驚くべきことなのだ。

しかし逆に言えば、十分に進歩の余地を残しているということでもある。少しの改変が劇的に効く。そして連邦の技術開発も着実に進

み、最適化の方策を順次見つけているのだ。

この短期間にMSというものを理解し次へ進んでいる。

ジオン情報部へ要請しての調査結果によると、連邦MSはジムと呼ばれる型なのだが、ジム・コマンドという型番に置き換えられつつあるとのことだ。

嫌なことだが、おそらくはその次、更にその次さえもう用意されているに違いない。

もちろんジオンの方もたゆまぬ開発努力を続けている。

ジオンはどちらかという生産工程からフィードバックして地道に改良するよりも、一気に設計を刷新して新型機を投入するのが好む。

これは大きく見込みを外すことがなければ最も早い開発の仕方だ。

MSの用途も戦い方も急激に進歩している以上、この一足飛びのやり方もまた正しい。時折せっかくの開発努力が無に帰す例、ズゴックなどの場合もあるがそれはそれで致し方ない。

今やマ・クベは頭を抱えている。

「連邦の改善されたMS、これにドムで対抗するのは苦しい。今までも接近戦に持ち込めればようやく勝てる程度なのに……ゲルググならまだ優位性が保たれているが、やはり新兵には扱いが難し過ぎる。一日でも早く新型機の目途を立てねばならんのだが……」

今ではジオンの兵器開発はマ・クベに一任されている。

先の将官会議でのドズル大将の決定を受けてそうなったのだ。

次期MS開発は、ギレン派閥のシャフト技術少将が統括するジオン軍技術部と、ジオニツク社などの上層部が癒着して決められていた。そのシャフト技術少将は決して怠けるような人物ではなかったし、技術に明るくないこともなかった。だが以前マ・クベ准将が指摘した通り、常識人過ぎた。

あまりジオニツク社などへ強圧的なことが言えず、開発も生産も主

導権を奪われていたのだ。

急な仕様変更や納期改変などを命じたことがない。MSであれば先行していたジオンが、ビーム兵器で後れをとったり、ギレン総帥自らの肝いりで始まった統合設計案も半端なまままで終わった。

絶対的な性能に優れたゲルググが整備面で非常にやっかいであったり、操縦性が悪かったりするのもそのせいだと言える。

マ・クベは先ず組織改革から断行した。

ギレン派閥の技術開発部を先ずは何とかする。そうすることができると切り札はペズン計画だった。キシリア派のフラナガン研究機関が設計してきた幾つかのMSを叩き台にしてスピードのある開発とはこういうものだということを見せつける。

非常に幸運なことに、技術開発部は他の部署と比べれば頭は固くない。その将校はギレン派ではあったがそこだけに拘っているわけではない。なぜなら技術というものは技術者にとって共通語であり、優れているものは優れていると認めざるを得ないのだ。数字は何も嘘をつかない。

最初は反発を覚えていた技術部将校もマ・クベを受け入れた。

新しいものに対する嗅覚、技術の本質を見抜くセンス、マ・クベは間違いなく技術の天才だったからである。

もつとも、マ・クベ自身がMSを操縦してガンダムと戦った話を聞いた際には皆盛大に吹いたものだ。

「いや、技術者は、自分で性能を確認しなければ本物ではない。そうではないか」

マ・クベはそこで小さな嘘をついた！

シヤアに対抗したくてとか、キシリアに認めてもらいたくてという理由は封印している。

そしてマ・クベの言葉を真に受けてしまった技術開発部はえらく尊敬するようになった。

青白い秀才の多い面々にとって、最前線で技術者自身が開発成果を試すなど異次元としか言いようがない。

ペズン計画に基づき、新型MSの設計が既にいくつか終わられている。

ようやく試作機が出来上がってきた。

次は入念なテストだ。いかに危険な時とはいえそれを省略はできない。しかもこの場合、複数の中から一機だけを絞り込むコンペを同時に兼ねている。

その性能テストは、テストパイロット達、及び計測・記録・判定をするチームによって行われる。これらはカスペン准将の技術大隊から供給される。

「オリヴァー、まずはアクト・ザクからよ！ 機動性、視認性から主観的データにして頂戴。速度や姿勢制御は後でいいわ。数字で取れるものは外部計測で取れるから」

モニク・キャデイルック大尉の下、それは順次進められていく。

だがのっけから新型機、アクト・ザクに欠陥が見つかった。ビーム兵器の稼働と高機動を両立する期待の新型なのに。

テスト結果では、確かにアクト・ザクの戦闘性能自体は良い。

ビーム・ライフルを含めた攻撃力も申し分なく、防御もいい。予想通り機動性もゲルググをかなり上回る。オリヴァー・マイといった技量の高いテストパイロットが扱えばそう見える。

だがしかし、操縦性があまりに悪すぎた。

ザクベースなのにそのシンプルさが全く活かされていない。その上で、ゴテゴテと後付け仕様が多すぎて重心バランスが良くない。おまけに操縦支援システムも増加した推力による俊敏さと合わず、しつくりこない。これではゲルググを難なく操るテストパイロット達ならまだしも、少なくとも新兵にはスムーズに扱うことはできないと思われた。いや、平均水準の一般パイロットでもその通りで、せつかくの機体性能が無駄になる。

ザクがあまりにも完成度が高かったため、そこに引きずられてしまい、考え方の脱却ができていないのだ。一年戦争初期の成功体験が邪魔をして、そのしわ寄せがきている。

テスト結果を踏まえて、マ・クベはカスペンの総括を聞きながらまとめていく。

「カスペン准将、アクト・ザクは予想スペック値では最有力なのに実機試験ではあまりに辛い点ではないか」

「操縦性で新兵には無理、これが結論だ。マ・クベ准将。新兵でまともに扱えたのはほぼいなかった。操縦録画を見ればそれが分かる」

そしてその映像のダイジェスト版をマ・クベも見る。

確かに新兵、学徒兵ではMSの性能を引き出しているようにはとても見えない。俊敏さを扱いかねて機動をかける度に機体はうねり、照準もままならない。

しかしその中で妙なものを見つけた。

「きやははー！ーッ！ これ最高！ みんな何チンタラしてんだよッ！！」

「…… これは何かな、カスペン准将。MSテスト中とは思えないのだが」

「これは、無視してよいバグだ」

「……」

「このパイロットは学徒兵の中でも最年少、キャラ・スーンという者だが妙にMSを乗りこなす。こんなのは特殊な例だ。他の学徒兵では一番操縦の上手いジオルジョ・ミゲルすらアクト・ザクは扱えなかった」

マ・クベは重い溜息をつく。

「アクト・ザクはダメか。しかし、操縦性のいいドワスはビーム兵器が使えない。それ用のジェネレーターもなく、伝達アタッチメントもない。簡単な仕様変更では無理だろうな。これからはビーム兵器の時代、この点で連邦に水をあけられてはならない。連邦はますます接近戦より射撃戦を重視してくる。だから、現時点だけを考えてドワスをメインに選択するのは誤りだ」

考えても袋小路にはまる。

ジオンの命運がかかったこの選択、マ・クベの負う責任はあまりに

重い。

「ここは消去法でガルバルディをメインにせざるを得ないか。ギャンベースのくせに操縦性が易しいとも言えないが、それでもゲルググほど難しいわけではない。一応ビーム兵器が使えるジエネレーターの仕様が入っている」

第四十話　　デラーズ、始動

悩んでも決められず、袋小路に入ったマ・クベは相談相手を求めることにした。

他の派閥の人間に尋ねてげんな顔をされるのも嫌だし、しかし同じキシリア派でもシャアに聞くのは抵抗がある。

「……それで私の所へ来たわけか。マ・クベ」

「は、はあ。非常に難しい判断ですので、お知恵を拝借いたしたく、キシリア閣下」

「私は兵器に詳しくない。いや、はっきり言うが何も知らんぞ」
堂々と言い切る。

その通りだから仕方ない。

「それでも閣下、お知恵はあるかと」

「お前も知つての通り、私はMSに乗るどころか実戦をあまり見たこともない。艦隊指揮も人任せだったしな。自慢できることではないが」

しかし、そこからマ・クベはかいつまんで状況を説明する。

連邦のMSが予想よりハイペースで進化すること、ジオン期待のアクト・ザクに操縦性という思わぬ足かせがあったこと、ドワスにビーム兵器が使えないこと、ゲルググは変に統合された機体のため整備泣かせなこと、しかもゲルググの高機動タイプやスナイパータイプへの改修はコストがかかること、他のケンプファー、ドルメルなども欠点があり主力にできないこと、などである。

「……なるほど、確かに難しいな。兵器開発にもいろいろ考えることがあるものだ」

そこでキシリアにも感じることもある。

「マ・クベ、お前が私の所へ相談しに来た理由がなんとなく分かった。要するにお前は自分で結論を出しているのだろうか。だがそこに自

信がない。だから無意識にでも私を選んだのだ」

「そ、そうかも知れませんが。しかしこれはジオンにとりまことに重大なこと、今後の戦局を左右する決定になります。意見は多いほど良いのではないかと」

「お前は何も分かっているいな。ドズルの兄がお前に任せたのはなぜか考えたことがあるか。気軽にドズルが言ったように思うならそれは大間違いだ。人の気持ちを分かれというのは、とても私が言えたことではないのだが、ここは敢えてそう言う」

「確かにドズル閣下は私などに一任せれましたが……」

「ドズルの言ったことは深い意味があると思え。マ・クベ」

「ふ、深い意味とは？」

「私の口から言うのもなんだが、言っておこう。大事な決定というのは会議室で決めるものではないのだ。そこでは誰もが無責任になり、流れで決まってしまう。誰もがダメと分かる結論さえ通ることがある。そしてたいがい失敗するのだ。そうではなく、誰かが重荷を負い、責任の重大さに歯を食いしばってこそ良い決定ができる。だからマ・クベ、ドズルの兄はたった一人、お前に任せた。お前なら責任を感じながら最善ができるかと踏んだのだ」

「だから、いきなり私だけに……」

「逆に言えばな、責任を感じるという時点でお前にはそれを担う資格があるのだ。自信を持って。マ・クベ」

「ありがとうございます、キシリア閣下」

「お前の決めることで、歴史が作られるのだ。MS選定というのはそれほどのことなんだろう？ 戦争が変わってしまう程の。面白いではないか。これを面白いと言わずになんという」

ようやくマ・クベの顔が晴れていく。迷いが解消されてきた。

特に難しいことをキシリアが言ったわけではないが、その言葉はマ・クベを勇気付けるには役に立った。

キシリアはついでに自分の考えを一応述べる。

「よく分からんのだが、新兵に使えるMSにビーム兵器が無い？ マ・

クベ、それは最初から無理、論外だろう。おそらく新兵は格闘戦など完全に無理だからな。操作性や性能、まして技量の問題ではない。目の前の人間を斬り殺すなどできまい。いくら生身ではなくMSでもな、人間一人の人生を自分の手の動きで消してしまうということなのだぞ。これは人間としての気持ちの問題になる」

「……なるほど閣下、やはり、新兵は遠距離からの射撃のみにしないと計算できる戦力にはならない……」

意外にもキシリアは面白い視点からものを言う。

考えるとそこに答えが見つかってくる。後はマ・クベが明晰な頭脳で形にしていっただけだ。

「ああ、それからマ・クベ、前から思っていたのだが、要塞を攻めると、艦を沈めると、敵MSと戦うのと、どうして同じMSが要るのだ？」

「？ それは閣下」

「どうした、私が何か変なことを言ったか」

思わずマ・クベは含み笑いをした。

確かにキシリアはその点素人同然だ。

政治のキシリア、その地位にあるのは情報操作や駆け引きといった政治面の能力のためである。指揮官として勝利を重ねた結果成り上がったのではない。

兵器の用途別運用と必要能力、そんなことは基礎中の基礎ではないか。

特にMSはわずかのスペックの違いでも設計思想も内部構造もまるで違ってくるものだ。そういう絶妙なバランスを職人芸的に追及する兵器である。その違いにより運用目的も変わってくる。キシリアはもちろん紙上のデータや型番を知ってはいるのだろうが、具体的な戦闘場面は知らず、だからMSを見ても皆一緒の兵器にしか見えないのだろう。

キシリアもそのことは自覚している。分からないものは分からない。そのためマ・クベの表情を見ても不快には思わなかったようだ。

しかしここでマ・クベははたと気が付いた。

キシリアがなぜそんなことを言うのか。それは先のア・バオア・クーの戦いを見ているからだ。その時はさすがにキシリアも最前線にいて戦いを見ている。

マ・クベが思い返すと、その戦いで各MSの運用は決して適切ではなかった。

いや、基本を忘れたデタラメと聞いていい。

リック・ドムはジャイアント・バズをつるべ打ちに撃ったが、何の役にも立っていない。連邦のMSはそれに当たるほど鈍くなく、ほとんど無駄だった。おまけに連邦は艦とMSを分けて運用していたのだが、ドムがMS相手の弾幕運用など間抜けでしかない。ドムが威力を持つのは、艦相手に強襲をかけ、致命的な一撃を与えるスタイルで運用してこそなのに。

逆にザクなどが艦へ向かって、防御が弱すぎて防空網にかかって撃ち墜とされてしまう。

ジオンがそれでも戦いになっていたのは、連邦MSが油断してドムと接近戦になってしまうことも少なからずあったのと、ゲルググの高性能を活かせる場合のためである。

つまりア・バオア・クーでは各MSの持ち味を活かせない酷い総力戦だった。とにかく出て行って戦うというだけだ。

運が良かったのは、連邦がジオン以上に酷かったからに過ぎない。連邦もマゼランを後方にして主砲を撃ちかけて支援に撤し、空母を隠して運用し、強襲揚陸艇を快速で突入させれば良かったのだ。しかしソーラ・レイのために混乱し、編成が乱れたまま戦闘になった。

今、マ・クベに閃くものは多々ある。

「ありがとうございます！ キシリア閣下。国力の乏しいジオン、せめて知恵で上回らせねば戦いになりません」

「そうか、では私も役に立ったと思っただろうか。まさか兵器開発で私が…… 素直に嬉しいな」

キシリアに謝意を述べて、急いでその場を後にしていく。

後は一刻でも早く報告書を作らなくてはならない。

「となると、新兵とドム系の組み合わせで対艦攻撃を主にさせるよう徹底だ。これからますます学徒兵が増え、嫌でも適性の低い者まで投入せざるを得なくなる。そもそも練習量さえ充分に取れず、錬度も低いだろう。それらには防御の高いドムで一撃離脱、これしかない。対艦攻撃に限っていえばジャイアント・バズも充分に有効で、ビーム兵器無しでも構わない。また推力が高いことは積載量の多さにストレートに反映する」

「次に一般機としては、バランスが良く整備性も高いガルバルディで決まりだ。整備性が高ければ、当然稼働率を高く保って理想的だ。性面でもビーム兵器を使え、機動性もゲルググ並みかそれ以上、連邦のMSにまだまだ対抗できるだろう。操作性もまあ問題になるレベルではない。それと主力生産ラインをガルバルディに一本化できるのは大きい。そうなれば大幅に生産性が上がる」

「どうしてもドムから転換できず、しかも接近戦が得意な者には試作ドラスだな。接近戦だけならドムより関節可動域が広く、ガルバルディよりパワーもあって押しきれる」

「逆にエースパイロットならば操作性が多少過敏でも大丈夫だろう。現時点の最高性能機アクト・ザクが使えるのなら使ってもらおう。試作機用ラインを使ってそのまま生産を続行だ。あるいはパイロットの好みにより、アクト・ザクではなくゲルググを高機動型へ改修して使うこともありえる」

「それと逆にリック・ドムIIは不採用に決定する。ドム・フンフも不採用、設計段階のドルメルも凍結としよう。ドム系を少しばかり改良してやつと今の連邦MSに追いつく程度の性能ならば意味が無い。この先必ず不安が残る。ケンプファーも可搬性に優れるという面白いコンセプトだが、防御力が低いのはどうしても気になる。私もカスペン准将に感化されたようだ。人命を最重視すれば防御の弱いMSなど使わせられない」

「それとモビルアーマーもポッド系は全面中止だ。ビグザムは検討余地もあるが、優先順位は高くない」

「問題があるとすれば、ツイマッド系のMSがほぼ全てになってしま
う。ジオニック社のリソースも有効活用したいものだ。ツイマッド
はガルバルデイの生産準備に全力としても、ジオニックには連邦技術
の解析と、未来型MSの研究をやってもらおう。連邦の技術を素早く
盗み、活かさなくてはこの先の開発競争には勝てない」

マ・クベは次々と答えを出した。

もはやここまでくればマ・クベのイメージというより勘に近い。ど
うせ今模擬戦をしてもパイロットや戦い方によつて結果は千差万別
になり、あまり参考にならない。

ここはジオンの勝利を願うマ・クベの勘が、未来を拓くのか。

最終報告書はガルバルデイを選定し、移行を速やかに行うよう強調
して締めくくる。

ジオンの次の主力MSはガルバルデイ、それはゲルググよりやや細
身で高機動である。しかも直線加速が良い。やはり素材の改良で強
度と軽量化を同時に達成しているからだ。これならばパイロットの
技量次第で一撃離脱も格闘戦も両方こなせる。

だが実戦投入は早くて一カ月後、そこまで待たなくてはならない。

その前にジオン戦略は始動している。

シヤアのア・バオ・クー補給線寸断作戦も重要だが、戦略の根幹を
なすのは連邦への重水素とヘリウムの供給を断ち、エネルギー面から
干上らせることだ。

最初はいくまで偶然を装い連邦のヘリウム輸送艦を叩く。

大々的ではなく、いかにもジオンの戦力が枯渇してゲリラ戦しか
できなくなったように装いながら行う。いずれ連邦もジオンの意図
を悟る時がくるだろうが、それが遅ければ遅いほどいい。

悟られてしまったらその時点から本格的に輸送船を叩きまくる。
おそらく輸送途中ではなく木星船団からヘリウムの受け渡しを終え
た直後を襲うようになるだろうが、それはまだ先のことだ。

初期の作戦はデラーズが担当した。

「よし、我らも出番だ！　ここで他の艦隊にばかり活躍させておくわ

けにいかない。埋没してはいかんのだ。ギレン総帥の志を受け継ぐ我らこそ、正統なるジオンである。それがジオンに栄光をもたらすと自他共に認められねばならん」

デラーズ自身が指揮を執り、チベやムサイら五隻で出撃する。こういう襲撃戦にグワデンまで動員せず、茨の園に留めておく。

代わりにMSでは精鋭部隊を使う。

デラーズが認めた一人のパイロットへ先に訓示する。

それはデラーズと似て、いかにも古いタイプの軍人氣質の者だった。見た目も中身も堂々たる武人だ。

「あのキシリア、いやキシリア閣下にはシャアを始めとしてジョニー・ライデンなど多くのエースが付いている。わざわざ集めたのだから当然だ。ドズル閣下にもシン・マツナガが控えている。配下のコンスコン中將にさえアナベル・ガトーという者がいる。残念なことにギレン閣下は多数を操る戦術を重視していたため、あまりエースにこだわることにはなかった。しかし、今は我が陣営にもエースが必要なのだ」「それはいつたい、何のために」

「我が陣営の存在感を増すため、注目すべき何かが必要だからだ。ジオンを奮い立たせる象徴がいるのだ。それができる技量があると踏んだので作戦を任せる。頼んだぞ、ラカン・ダカラン」

第四十一話 勇将健在

デラーズは出撃し、この辺りのはずと見込んだ宙域に索敵をかける。戦争前のヘリウム輸送航路などを手掛かりにして発見の可能性を高めている。敢えて変えたのでなければいるはずだ。

果たして連邦の輸送船団が見つかった！

目的のヘリウム輸送船だつたらよし、もし違つてもそれはそれでいい。ヘリウムばかり襲われたらそれこそ連邦も怪しみ、目的を悟るかもしれない。それは大局的に非常にまずいことだ。

発見したのはコロンブス級輸送艦などの軍用輸送艦ではなかった。大きさはかなりある。まず間違いなくヘリウムを輸送するタンカータイプだ。それが十隻ほどの船団を組んでいる。連邦も軍用物資ではないので油断しているのか護衛はごくわずかしかない。

そこに襲い掛かる。MSを出すまでもなく、船団も護衛駆逐艦も砲撃で片付けた。

初回とその次もこれで済んだが、三度目はこうもいかなかった。

遭遇した相手は輸送船団ではなく部隊移動中の立派な一個中隊だつたのだ。

こちらは五隻だが、相手は八隻の艦隊、素直に逃げるといふ選択肢がある。

しかし、デラーズはここで勝負を挑む！

マイクを取り、全艦隊に指令を下す。

「退くことはない！ 命令を伝える。各艦、距離を取って凹型陣を取れ！ 敵は必ずこちらの弱いと見た部分を集中して破りにかかるはずだ。その進路を読み切った段階でMSを使って叩くぞー！」

連邦艦隊は読み通り、デラーズ側に合わせて更に広く展開させることはなく、むしろコンパクトに収束させてきた。

序盤の砲撃戦の後、やはりこちらの左翼のみを狙って突進してくる。

連邦艦隊にとっては当然の戦法だろう。散開に付き合わず数の優位を活かした各個撃破をかければ、どの場面でも危なげなく勝てるからだ。

「よし、かかったな！ 左翼は後退に転じ、他は網を閉じていけ。しかし決して早すぎるなよ。こちらの移動速度を誤認させる。そして油断を誘いながら、MSだけを先行させて一斉攻撃だ」

デラーズは、艦で間に合わない包囲網を演じながら、MSは先に一点に集中させていく。

連邦側も決して無能ではなく前進速度を上げてきた。それに直掩MSを展開させるのには間に合っていた。

ここで一斉にMS戦に突入する。

数はやはり連邦側が少しばかり上回る。

だが、デラーズ側の隊長機、ラカン・ダカランの圧倒的気迫はその差をあっさりとひっくり返す。

ゲルググを駆りながら、敢えて接近戦に持ち込み斬り伏せていく。ジムの残骸が辺りを漂い、技量を見せつける。

「連邦のハエどもめ。失せろ！」

連邦MSに大損害を与えて怯ませると、直ちに対艦攻撃にかかる。たちまち三隻を行動不能に陥らせてしまった。

この時点で連邦艦隊は完全勝利を諦めた。

MS戦で競り負けたら、長く艦隊戦を行うのは危険に過ぎる。相手が少数だと思っていいたら思わぬ精鋭だったようだ。素直に相手が悪かったと認めざるを得ない。

こんな遭遇戦で勝負する必要はないのだ。

連邦艦隊は最大加速をかけ、この場を離脱にかかるが、その進路にデラーズの艦の一部を捉えている。つまり行きがけの駄賃に一隻でも二隻でも踏み潰しながら離脱しようという算段なのだ。離脱と同時に、受けた損害を少しでも取り返す、合理的というべきだろう。

「逃げるなら完全に後退して逃げればいいものを。相手の司令官は教科書的過ぎて思い切りが悪かったな」

そしてデラーズは思い描いていた通りの勝負に持ち込む。

「連邦艦隊の正面にある艦は全速で斜め方向に離脱、他は包囲速度を一気に加速し、横撃にかかれ！ 主砲、充填終わり次第連邦の旗艦に向け斉射！」

これで終わりだ。

初めに旗艦を失い、算を乱した連邦艦隊を、横あるいは後方から砲撃できるという圧倒的優位な態勢で次々仕留めていく。

戦闘は連邦艦隊全隻撃沈の成果で終了する。ほぼ完勝だ。

エギーユ・デラーズ、並の用兵家ではない。

ギレンの信頼した、練達の指揮能力を持っているのだ。

今もまた切れ味のいい艦隊指揮で艦数に勝る相手を破り去る。

そして、勝因の大きな部分を占めるのは、各艦が決して怯むことなくデラーズの指示通りに行ったこと、つまり信頼とカリスマである。

「ジオンに兵なし」とは故レビル將軍の言葉であった。

しかし、ジオンには誇りあるエースもいれば実力ある将もまだまだ残っている。

ただし戦いの後、デラーズは受けた損害に眉をひそめることになる。ただし戦いの後、デラーズは受けた損害に眉をひそめることになる。

「MSの損害が大きいな…… リック・ドムが六機も撃墜されたのか。報告にあった連邦MSの進化は本物だったか。難しいことだ」

一方、それと同じ頃、ジオン本国にいる俺は四苦八苦している。艦隊の再編成を進めていたのだが、これが難しい。

「コンスコン、約束通りの戦力補充だ！ これで全体26隻の艦隊になるな。そして驚け！ こいつが俺からのプレゼントだ！」

「ドズル閣下、こ、これは！」

「驚き方が足らんぞ！ コンスコン、もっと驚け！」

「驚きました!!」

正直ドズル閣下からのプレゼントという言い方が気持ち悪い。

だがこのプレゼントには嬉しさがこみ上げる！

「閣下この艦は、ティベ級！ 新造艦ではありませんか！」

「そうだ。今のジオンはMSに力を注ぎ、艦を作る能力はあまりない。あってもお前が言う通りザンジバル級が主だ。そんな中で作った貴重な艦だぞ。ほれほれ、こいつを旗艦に使ってみろ。グワジン級のよ
うな豪華設備はないが、砲撃力はかなりのものになっているはずだ」
俺はグワジン級が数少なく、しかも新造する余裕などあるわけないのを知っている。このティベで充分にありがたいと思う。

「本当にもつたいないことです。存分な働き、お約束いたします！」
「うむ。そうしてくれ。実はゼナがお前の活躍を聞いて、褒美をやれ
とうるさいのでな。ティベが良かろうと思ったのだ」

そこかよ！

またそんな家族内の理由!?

でもまあいい。この艦でこれまで以上に活躍するぞ！

次に俺は増えた艦を併せて再編しようとしたのだが、ここで気付く。コンスコン機動部隊は俺の昇進と共に艦が急に増えていったため、任せられる分艦隊司令がないのだ。

本当なら旅団あるいは師団とっていい規模なのだ。分艦隊を駆使すべきところである。

でもそれを言っても仕方がない。ドズル閣下のところも、キシリア閣下のところも、本当に将が足りない。一方で新兵ばかりが増えていく。これではよほどうまく編成しないと艦隊行動が上手くいかない。

おまけにMSパイロットでも新兵が増えている。あの髪の変な女はいないようだ。そこはほっとしたが、皆15, 16歳くらいの幼い若者だ。

俺は再編し、MS隊をいくつか新設しようと思いつく。

ティベやチベの一隻に載せられるMS機体数を基本として、幾つかの隊を作るのだ。

俺がそんなことを考えていると、なぜかツェーンやクスコ・アルが度々視界に入ってくる。

あれ？ 何だろう？

MSのことを考えていたから目に付いたということではなく、明らかに目に入る機会が増えている。艦橋周辺でも、通路でもそうだ。

俺の周りをチョロチョロしているといつて過言ではない。

いつたいどうして？

ここで俺はようやく気付いた。

別に俺自体がどうかではない。

おそらくだが、ツエーンやクスコ・アルはアナベル・ガトーの持つことになる新しいMS隊の副隊長を狙っているのだ。

分かり易いといえば分かり易い努力である。

「最強のMSに守られるモビルアーマー、これで打撃力は万全！ これ以上の相乗効果は無いわ」

そんなことをクスコ・アルが大きめの呟きにして周囲に流している。もちろん俺に聞こえるように。

そうかと思えば、今度はツエーンが意気込んで報告してくる。

「副隊長カヤハワが隊に復帰しました！ もう気合充分、そのまま隊長を代わりにできるほどです！」

ああ、面倒なことになった！

ガトーの副隊長を巡ってこんなことに。

だがしかし、この問題はいきなり解決することになる。何と、新しく補充された兵の中に、ガトーが哨戒艦隊を転々としていた頃の旧知の部下がいたのだ。

その名をカリウス・オットー、これもまたガトーと似て生真面目な感じのパイロットだ。

「…… お久しぶりです。大尉、いえ少佐」

「…… 確かに久しぶりだ。カリウス」

交わした言葉は驚くほど少ない。しかしこの中に思いは充分に込められている。それが漢同士というものだ。

もうこれは、自動的に同じ隊にするしかないではないか。

俺の旗艦ティベにはガトーのMS隊を置く。これが最大機動戦力になる。

副隊長にカリウス・オットー、そしてツエーンのドム隊からアインスなどを異動させた。従順なアインスならば適任だ。そこへ補充兵の中でも、ある程度腕が立つと見込んだ者を加える。総勢16機になる隊だ。

別のチベにはシャリア・ブルのMS隊を編成している。そこには補充の中でも新兵を中心とし、学徒兵も多数混ざっている。総勢14機だ。渋く温厚なシャリア・ブルは学徒兵を育てるには適任だろう。副隊長としてツエーンの下からファイナを異動させた。気が強いファイナが隊を引き締めてくれるだろう。

また一つのチベにはツエーン、カヤハワの気心が知れた組み合わせをそのまま置く。補充兵を加え、これも14機のMS隊とした。

最後にクスコ・アルのエルメスとその護衛のためのMS8機で一隊を形作る。

これで四つの隊が出来上がる。

我ながら非常に順当な編成をしたつもりだ。

ちなみにア・バオア・クーの戦いの後、ガトーは少佐に昇進している。ツエーンは大尉だ。クスコ・アルは非常に難しいところだが、隊を率いる関係上正式に中尉とした。

この人事に納得している者もいれば、納得していない者もいる。

「ちよつと納得できない！ なぜあの女だけが！」

「同じ艦に、どうしてあの女が残るのよ!!」

ツエーンとクスコ・アルが異句同音に叫んだ。

それはセシリア・アイリーンだけがガトーと同じ旗艦ティベに残ったからだ。

お互い、シーマ・ガラハウのように正式に宣戦布告したわけではないが、女の勘でコイツは敵だと認識しているのだろう。

しかしながらセシリアは後方統括として旗艦に置くべきなのは当たり前前だ。

第四十二話　ダリルとカーラ

ツエーンやクスコ・アルが悔しがるのは理解できるが、セシリアが残るのは配置上合理的なことである。それにテイベの最大MS搭載数は18機まであってこれは物理的に変えられない。一つの艦にはそもそも一つの隊しか収容できないのだ。

まあ、そもそもセシリアがこの艦隊に居残ったことが原因といえましょうなのだろうな。

ズム・シテイに治安が回復されテロや襲撃の恐れがなくなった後、俺は元秘書課員全員に身の安全が確保できたので退艦が可能になったことを申し伝えたが、答えは意外なものだった。

「いいえ、私にはこの艦隊に恩義があります。これからは精一杯恩を返すつもりで働かせていただきます」

セシリア・アイリーン、その恩義というのはアナベル・ガトーだろう？　とは思ったが、口には出さず好きにさせた。

どのみちこの艦隊に優秀な主計係は喉から手が出る程欲しい。彼女がいると、書類が飛ぶように片付いていく。

しかもそればかりではない！　次々と問題を突き止めては未然に解決していくとは、さすがにギレン総帥が認めた才媛だ。これで後方には心配がない。

「補給部から来た推進剤の品質が表示より落とされています。コンスコン司令、意図的なものか、それとも本当に払底しているのか、問い合わせしましょうか？」

「三番艦の嗜好品要求が少ないですね。特に酒類は。ストイックな兵が多いのでしょうか。さりげなく褒賞して報いてやった方が」

「それと四番艦も、寄港地でバカ騒ぎをやって通報されるのがこころざらありません。これも褒めてやるべきだと思われまます」

しかも、気が付くのは後方部としてのものだけではない。

「おかしいですね。最右翼エンジンの部品在庫ばかりが他に比べて減りが早くなっています。しかも加速度的に。修理回数と箇所を突き

合わせて、深刻な不調が隠されていたら早めに発見しませんと」

数字を見る目で、他の部署が見るべきものまで見通す力がある。

いやあ、何から何まで助かるな！

当のセシリアは、艦でガトーとすれ違っても軽く挨拶するだけだ。

MS隊員と出会うのはそれほどの回数ではないのに、そんなチャンスを活かして何かするわけではない。しかしその挨拶の後、立ち止まってガトーの後ろ姿を長いこと目で追っているとは健気ではないか。

何とも言えないな！ 俺としては。

しかも、残ったのはセシリアだけではなかった。

思いがけず他の秘書軍団九人の全員が全員、この艦隊への残留を望んだ。そして各艦に分散して後方任務を担う。彼女らの能力は高く、そこでもまた書類が瞬く間に片付いていくのだが、おまけに彼女らならではの士気向上効果がある。

当然ながら彼女らの乗る艦は他の艦から大層うらやましがられることになる。それはそうだが、ランクの違う美人が艦にいるわけだから。

彼女らの方も、まんざらでもなさそうだった。

秘書課では大勢の中の一人に過ぎなくとも、これが艦にいればアイドル級の扱いだ。

プロフィールや写真が飛ぶように艦内を出回る。

人の好みというのは様々で、ちよつとした派閥ができるが、それは気晴らしの範囲内であって咎めることではない。

俺としてはしかし、だから楽しいとも言えない。

彼女らを絶対に戦死させないように、司令官として気を引き締めざるを得ない！

それが残留を認めた指揮官として果たすべき務めだからだ。

それと正式に軍籍に入れる以上、秘書だったセシリアにも階級が必要になる。

ジオンのトップ、あのギレン総帥の最も信頼する第一秘書だったか

らには…… 正直言うとギレン総帥から見ればトワニング准将よりもずっと代えがたい人材だったろう。とすればセシリアも准将クラスだっておかしくないほどだ。しかし士官学校を出ているわけでもなく、途中採用では本来なら士官にすらできない。

しかしまあ、俺は考えに考えた挙句、大尉に任じた。

あまり階級が低いと、ジオン軍後方部と物資について折衝する際、相手方からなめられてしまう。

しかし、ガトーよりも階級を高くすればおそろくセシリアは固辞してくるだろう。そんな気がしたのだ。大尉というのは本人も周りも納得できる線である。

それともう一つ、俺はMSパイロットではないがこの艦隊の重要戦力である人物について、退艦を打診する。これを失うのは大きな痛手だ。しかしそこを敢えて言わねばならない。そういう責任がある。

「ダリル・ローレンツ少尉、君は充分に働いた。退艦して腕の治療に専念したらどうか。せめて右腕だけでも早く取り戻すんだ」

「…… コンスコン司令、ありがとうございます。しかし艦隊戦での砲撃を代わりにできる者は……」

「この艦隊のことを気にしてくれるのはとても嬉しい。驚くほど精密な主砲管制、君の役割は大きく、その力で幾度もピンチを救われてきた。本音を言えば手放したくはない。だが、君の幸せには決して代えられないのだ」

「で、ですが、これから幾度も戦おうという局面で退艦などできません！ フラナガン機関から出してくれた恩義はまだ返せていません！」
「だからこそだ。この先、戦争はいつまで続くか分からず、今を逃せば退艦の機会がないかもしれない。腕の手術は早い方が成功率が高いのだろう？」

「他にも悲惨な兵はいくらでもあります！ リビング・デッド師団にはたくさんいました。それでも皆、戦い続けたんです。この艦隊で今から戦いに行く兵たちの中で、僕だけが特別扱いされる理由がありません！」

「理由はある！ 君をこんなことにしてしまったのは、同じジオン軍だからだ。君は軍の都合による犠牲、いや被害者なのだ。だからこそ少しでも償わねばならないのはこっちだ。後のことは、気にしなくていい」

これは俺の正直な気持ちだ。ダリル・ローレンツは単なる戦いの負傷者ではない。味方であるべきジオン軍、その一部のフラナガン機関から実験材料にされ、最後の腕までも失う目にあっていたのだから決して同列ではない。

ダリルは俺の気持ちを感じ取ったようだ。

下を向いて涙を落とす。

しかし、尚も震え声で呟く。

「それでも僕は残り、この艦で砲を撃ち続けます。そうしたいんです。僕にそこまで言ってくれた司令と艦隊のために。たったそれだけが、僕のできることだから」

ここでダリルに付き添っていたカーラ・ミツチャム教授が口を挟む。

「多少時期が遅れても、大丈夫です！ この私が手術を絶対に成功させてみせます!!」

「だが……」

「コンスコン司令、ここはダリルの言う通りにさせてやってくれませんか？」

彼女もまた途中から激しくもらい泣きをしている。

再生医療の第一人者であり権威、医者にして教授の肩書きを持つ彼女が。

この艦隊で実は彼女の働きは役に立っている。彼女がいなければカヤハワを始めとした負傷兵の回復はもつと遅かった。

そして今分かる通り、非常に豊かな感性を持っているのだろう。

ここまです言われたら俺も同意せざるを得ない。というより戦力的には本当に大助かりだ。正直言うと、今度のティベ級は砲塔数は少ない代わりに一基当たりの砲撃力が連邦のマゼランさえ凌駕する。艦砲として最大クラス、となれば今までと比べても段違いにダリルの能

力が活きるはずだからである。

この二人は本当にいい人間だな！

しかし、カーラに肩を抱かれているダリル、ちよつとうらやましいぞ！

このダリルの話が漏れ伝えられた頃、意外な人物がダリルとカーラの元を訪れた。

アナベル・ガトーだ。

「率直に聞きたい。腕のことだが、負傷はどのくらい回復できるものだろう。いや、俺の友にケリイ・レズナーという男がいるのだが、ア・バオア・クーの戦いで負傷して片腕が動かなくなったそうだ。神経を傷つけたらしい。いい奴なんだが、そのためにMSパイロット適性から漏れてやさぐれているそうなのだ。助けてやりたい」

「ガトー少佐、状態にもよりますが、神経移植がうまくいけばあるいは」

「それができるのか！ いや、失敗してもドクターを責める気はない。是非ともお願いする」

ガトーはその友ケリイとやらの情報をカリウスから聞いていた。そしてカーラ医師による回復手術の予定を勝手に付けていく。強引にでもケリイに受けさせるつもりなのだろう。友であるケリイのことはガトーがよく分かっている。

もちろんガトーは俺にそのことを訴えてきた。

「そうか、そうだろうな。ガトー、心配しなくていい。そのケリイ・レズナーをこの艦隊に呼ぶ算段をしよう」

いやあ、俺の中将という肩書はこういう時役に立つよな！

調べるとカリウスの言う通り、ケリイ・レズナーは前線を外されて後方の補給部に送られてしまっていた。本人はそれでも戦いたがっていたのだが、本当なら行くべき負傷兵専門のリビング・デッド師団が壊滅している今、行くところがない。結果、やさぐれて上司を殴って営倉送りになっていたのだが、そこを呼び寄せることができた。

そしてカーラ教授の元で回復の算段をつける。

またしても俺はガトーからキラキラした目で感謝と尊敬を受けることになる。

女性兵からそういう目で見られることはないけどな！

その頃、遠く離れた宇宙の片隅、地球連邦軍首脳部では連日激論が闘われていた。

しかし、ここでようやく方針が定まる。

ア・バオア・クーやグラナダの占領の結果、連邦内のタカ派の声が予想以上に高まっていた。実績を基に強硬な意見を出し、それらの声を通ったのだ。

「正面からジオンを撃砕する。それは戦争に勝つということばかりを意味しない。今後、スペースノイド誰もが希望や妄想を抱かないよう、完璧に潰してやる。地球に逆らうことがどういふ結果になるか、未来永劫記憶に叩き込んでやるのだ。少しの犠牲を嫌うばかりに持久戦で向こうが崩壊するのを待っていてはならない。そうではなく、政治的な意味から圧倒的な勝利というシヨウが必要だ」

作戦は発動され、運命は再び戦いを呼ぶ。

後の世に本国会戦と呼ばれる戦いが迫ってきていた。

第四十三話 連邦の将

もちろんそこに至るまで連邦内でも盛んに意見が出ている。

シヤアとテラーズの活躍は嫌でも連邦を苛立たせていたからだ。

宇宙はあまりに広く、物量のある連邦軍といえど護衛を完全に付けることは無理である。練達の指揮官によるゲリラ戦を阻止するのは最初からできない。

「向こうがゲリラ戦なら、こちらもゲリラ戦だ！ サイド3を孤立させ白旗を上げさせる」

「馬鹿なのか。数の優位を持つ我らがなぜそれに付きあつてやる必要がある。正面からとつと粉砕して戦争を終わらせてやれ」

「向こうにはコロニー・レーザーがあることを忘れるな。勝てるとはいえ、一定の損害は出る。防ぐすべは無いのだからな」

「そんなことを恐れてはならん。サイド3のコロニーに一隊が取り付けば勝ちだ」

「その後はどうする。ジオン首脳部が仮に降伏してこなければ戦略的方策しかない。すなわちコロニー住民の虐殺だ。それを誰の指示でやったのか、歴史にそんな名前を刻みたいか？」

しかし、議論は結局タカ派の意見に集約された。

ア・バオア・クールの完全前進基地化を待たず、現有戦力を集めてジオン本国を突く。

再びア・バオア・クール周辺宙域に連邦艦隊が集結し、ひしめきあう。連邦の生産力がどれほどの底力を持つかを端的に表している。地球連邦は相変わらず新造艦に新造MSを乗せ、次々と宇宙に打ち出す。また月のフォン・ブラウンにも工廠があり、生産ラインがいくつも存在する。

艦艇はこのア・バオア・クール宙域に集まり、最後の調整を行う。

「見る、これだけの戦力だ。ジオンのカスなど一掃してやる。宇宙において地球連邦こそ絶対正義であることを示してやるのだ。今無

条件降伏をしてこないアホウどもは後悔しながら宇宙の塵に変わるがいい。その恐怖の記憶により、続く者など決して現れることはない」

そう言うのは連邦軍作戦総司令官ジーン・コリニー中将である。

その自信の根拠はむろん、総艦艇数およそ二百二十隻の威容を誇るこの大艦隊だ。先のア・バオア・クー攻防戦に参加した艦艇数はまとめると二百八十隻だったが、その半数近くが撃沈または離脱を余儀なくされたのにもかかわらず、連邦の力はここまでの回復を可能としている。

「この一年戦争の終幕にふさわしい華麗な戦いにするのだ。ベーター、ハイマン、期待している」

「閣下、最初から力を見せつけなければ造作もなかったものを。これまでの慎重策など臆病者の言い訳でしたな」

こう返したのはダグラス・ベーター中将だ。

故レビル將軍の子飼いの将であり、ア・バオア・クーの戦いでレビル將軍の弔い合戦とばかりに勇猛な戦いを見せつけた。

ジーン・コリニーも元は同じくレビル麾下である。その意味ではダグラス・ベーターと同格なのだが、地球連邦軍首脳部は作戦の総司令官をジーン・コリニーに指名した。

建前上はジーン・コリニーの方が前任中将であり、格上なので順当だということにしてある。陰にはゴツプ大将の意向があるとの噂だが、当のダグラス・ベーター本人は人事など気にしていない。ジオン相手に戦えれば何でもいという生粋の猛将だったからである。

ここに連邦軍でも最もタカ派と目される将が集った。

本来ならこれほどの大作戦に中将が作戦総指揮を執ることはないのだが、ジャブローのゴツプ大将は背広組であり実戦には出ることは決してない。また、地球表面でジオン残兵の掃討を続けている将達が勝手の違う宇宙に上がることもなかった。

だが、コリニーらの他にも宇宙での戦いを主とする連邦の中将クラスがいないことはなく、いや二人もいる。

ダグラス・ベーターがここで暗に臆病者と指したのは、そんな中将

たちのことだ。

一人はジョン・コーウエン中将といい、連邦軍でも以前から慎重論を唱えていた。

連邦内では肩身が狭い立場だが、それでも同意する将校らと小さいながらも派閥を形成している。今はグラナダ占領軍の司令としてそのまま留まっていた。

ジョン・コリニーらも作戦のためにわざわざ呼ぶなど考えてもいない。あくまでジオンに止めを刺す功績は自分たちのものだと思っているのだ。

もう一人はグリーン・ワイアット中将だ。

スペースノイドに対し主戦論を唱えるという一点においては似ているといえるが、ジョン・コリニーらの直情的な将とはずいぶん距離を置いている。

ジョン・コリニーからすれば、「何を考えているか分からない」奴である。ダグラス・ベーターはもつと極端に、自分たちとは気質の違う「悪趣味」「キザな野郎」と言ってはばからない。はつきりと嫌っているのだ。

今、そのグリーン・ワイアットはルナツー駐留軍を預かっている。

ここで氣勢を上げるジョン・コリニーとダグラス・ベーターを横目に、ジャミトフ・ハイマン大佐が控えている。

ジョン・コリニーの懐刀として重宝されている参謀格だ。あまり地球から離れることはなかったがこの一大作戦のために呼ばれていた。普段は後方の物資や補給に携わる実務家として有能であり、ここで必要とされる。

物資調達もこの場合重要になるのだ。本当ならア・バオア・クーに作戦用の物資が集積されているはずが、それどころか駐留要員の食いつ持にすら汲々としている有様である。ジオンのゲリラ戦のゆえだ。

むろん、艦隊集結時に各隊は目いっぱい輸送艦を連れてきているが、平均すれば一週間分の物資しかない。うまく調整と配分を行いつつその間に決戦を仕掛ける必要がある。

一方、そのグリーン・ワイアットは常に定時の紅茶を欠かさない。将官になってからはこの習慣を守ってきた。今もまた紅茶と一かけらのスコーンを楽しんでいる。ここは地球と遠く離れたルナツの司令官室なのに。

「インド洋方面にジオンが来なかったのは幸いだな。向こうのラサ基地を叩き、ヒマラヤを越えさせずに食い止められたのが良かった。おかげで紅茶の産地だけは無事だ。私の好きなデインブラやヌワラエリヤが未だに楽しめる」

今もティーカップの端を軽く弾く。かすかに澄んだ音が響く。

「閣下、紅茶の銘柄を楽しんでいる場合ではないかと。あのグリーン・コリニーらは閣下抜きでジオンを陥としてしまいますぞ」

「慌てなくていい。君も紅茶をゆっくり飲んだらどうか。ステファン・ヘボン君」

「で、ですが閣下！」

紅茶紳士と呼ばれるグリーン・ワイアット中将、そして直属のステファン・ヘボン少将が会話を続ける。

「連邦が負け、ジオンが勝てばよし。せいぜい連邦の敗軍を收容してやり、あのグリーン・コリニーに恩を売りつけてやればよい。泣きつ面を見てみたいものだ。向こうが意地にこだわり、こっちに応援を要請しなかったことも好材料になる」

「しかしその可能性は低いかと。分析では連邦とジオンの戦力比は少なくとも二倍、あるいはそれ以上になると想定されます。よほどのことがない限り連邦艦隊はジオンの艦隊などあつという間に蹴散らすでしょう。そのままサイド3に雪崩れ込めばすぐにでも決着が」

「グリーン・コリニーらが勝つなら勝つでそれもまたよし。ステファン・ヘボン君、どのみちそのまま治まるはずはないよ。スペースノイドどもは一筋縄ではいかんだらう。強硬策一辺倒では抑え込めず、グリーン・コリニーなどにうまい火消しができるとも思えんな。あるいはそのゴタゴタも含めて丸ごとゴップ閣下の目的かもしれん。戦争が終わり、平時になれば切り捨てるのも惜しくない人材と見られたのか。同情するわけではないが、哀れだとは思う。軍人も生き残りたければ

政治感覚を持つべきなのだよ」

「では向こうに勝手に戦わせ、閣下は静観なさるので……」

「今はそれが最良だろう。打つ手が無いのに無理をすることは無い。あのアサクラ大佐を逃したのは大きかったな。せつかく焚きつけて叛乱まで持っていったものを。あと一時間で迎いの艦隊が収容したはずだったのに、惜しいことをした。もし手に入れていれば情報を引き出し、それを功績にできたのだが」

「あそこまで下工作をやっておきながら残念です。せめてダルシア首相とのチャンネルは維持しませんと」

「そうだ。頭越しにコーウエンあたりとダルシア首相が結びつくのは阻止しなければな。連邦とジオンがあんまり仲良くなられても困る。我らの存在意義のため、適当に勝つくらいがいいのだ。ゴツプ閣下もおそらく同じ考えだろう。ま、最終的にはジオンなど潰してやるが、急ぐことはない」

グリーン・ワイアット、単純な軍人ではない。

先のアサクラ大佐の叛乱を裏で糸を引いていたのだ。

アサクラ大佐が甘い夢を見るように、さりげなく良いことばかり耳に入るようにしていた。その反面確約は何もしていない。

結果的にアサクラ大佐本人は自分の握っているソーラ・レイの情報ばかり重要視し、連邦が歓迎してくれると勝手に思い込んでいたが、調べればコロニー虐殺への関与などの暗部が分かるだろう。そんな者を連邦が保護などするだろうか。逆に加担していると見られるリスクを負うことになる。グリーン・ワイアットがそんなうかつなことをするはずはなかった。

連邦の生産力からすればどのみちジオンの戦力など問題にならないとは考えている。食卓に紅茶をこぼしたようなもので、拭きとれば終わる。その程度のことだ。

この点でグリーン・ワイアットとジーン・コリニーの考えは同じだが、戦後のスペースノイドの利用の仕方、ひいては連邦内での力関係まで考えている点が違う。

第四十四話 会戦前夜

更に違う場所、グラナダではジョン・コーウエン中將が宙を睨んで
呟いている。

その目に見えるのは、復興が進んだグラナダ基地のまばゆい光とど
こまでも漆黒の宇宙の鮮やかなコントラストだ。

「あの馬鹿どもが…… 戦えばいいというものではない。これからも
地球から宇宙への移民は続く以上、アースノイドとスペースノイドの
区別など意味がない。元は同じ地球発祥の人間、そこへ対立を持ち込
んでどうする。無用な確執は人類全体が弱るだけだ。連邦も落とし
どころを見つけない、いや見つけようともしていないとはな。ジオン
という過激勢力は倒さねばならないにせよ、必要最小限の犠牲にすべ
きだ。人類がようやく国という枠組みから離れて誕生した連邦、そこ
からサイド3が分離して独立国家になるのは認められないが、自治公
国くらい認めてもいいではないか。それくらいなら分離主義が地球
に飛び火することはない。あとは連邦軍が絶対的抑止力として働き、
二度と悲劇が起きないようにすればよいのだ」

ジョン・コーウエンは人類の発展を見据えながら、これからを考
える。

内部にいろいろゴタゴタはありつつも、人類がようやく手に入れた
単一国家、すなわち地球連邦の価値を信じ、その枠組みを信奉する軍
人である。ただし、視点は先を見ている。

「サイド3の住民にとってもその方がいい。今は戦争中だからまと
まっているが、元はザビ家、トト家、ラル家、カーン家といった特権
階級が存在するいびつな社会構造ではないか。移民時の階級をその
ままひきずってしまっている。ダイクンもそれを直すには至らず、途
中で斃された」

そしてジョン・コーウエンは一枚の報告書を手にする。

ジョン・コーウエンは単純な穏健派ではなく、彼なりの軍事的強化
策を考えている。

その報告書も秘密裏に行っている新兵器開発についてのものだった。

「だからこそこの情勢、思想が社会の発展に追いつくのを待つてはいられない。今は力づくで平和を維持する。そのためには強大な連邦軍にならねばならないのだが……くそ、ガンダム計画は予定通り進められそうにないのか……あの高性能ガンダムをそのまま量産に持ち込むことができれば良かったのだがな。そうすれば誰も反逆することはできない」

報告書の内容は、ジョン・コーウエンのひそかに進めるガンダム量産化、つまりガンダム計画が頓挫した経緯が綴られてあった。技術的な困難さが述べられていたが、その文の裏側に連邦軍でMSの供給を担当しているアナハイム・エレクトロニクス社の都合が透けて見える。

実のところ、アナハイム・エレクトロニクス社にとって高性能MSの開発は必要事項ではない。

はつきり言うとしたくないのだ。

なぜなら、多少安価であっても、大量に発注してもらえの方が利益が出るに決まっている。MSをコンスタントに造り、そして順次「消費」をしてもらい、また発注される。そのサイクルを続けて利潤を稼ぎたい。

もちろん、対戦相手のジオンよりもよほど低性能MSであれば企業の存在意義が問われる。その意味では開発自体をやめるわけにもいかない。

しかし正直なところ、ジム程度のMSを使って消費してくれれば一番儲かる。その企業の理屈の中に人類社会の行く末や、まして兵士の命などということに対する配慮など存在しない。

「ガンダムの試作続行は断る、量産化もしないとはな……ジオン技術の解析を待つてより良いものを造りたいなど、アナハイム・エレクトロニクスもよくも言葉を飾ってくれたものだ。まあ、下手に連邦軍内で少数派の私と組んでいると見られたくもないのだろう。政治的

な配慮というやつか。いや、ひよつとしたら開発費の回収さえ危ぶんでいるかもしれん。ただ働きは嫌がる連中だからな。それで結果的にガンダムに残りは一機だけか……」

ジョン・コーウエンはそう言って悔しがる。ただしスペースノイドの都合を理解しようとする彼をもつてしても、ダイクンの語ることを本当の意味では理解はしていない。良心的政治改革者だったという認識に留まっている。今の戦争は社会構造の問題や、民族主義的なもの、あるいは政治闘争の発露がたまたま発展したものと考えているのだ。ダイクンの宇宙移民がもたらす人類の革新はお伽話と知っている。やはりアースノイドとしての認識であり、その点については連邦の他の将と変わりが無い。

ひいてはガンダムの驚異的戦果も機体性能がもたらしたものと考えていたのだ。

連邦軍、動き出す。

ジオンでもそれは掴んでいる。

激しく動き始めた連邦の各艦隊の行動、急速に集結しつつある様子、これは正に大作戦の予兆としか考えられない。

もちろんサイド3、ジオン本国侵攻だろう。

「推定される連邦艦隊、艦艇数二百から二百五十隻！ ソーラ・レイからの陰になるア・バオア・クー宙域にいったん集結してから侵攻する模様」

そういう報告員からの言葉にドズル閣下も緊張している。

「どうだ、コンスコン。やはり連邦はここらで仕掛けるか。奴らにとつてすればあと一歩だからな。政治工作や内部崩壊など待たず攻める気だ」

「おとなしくしてくれませんでしたか…… しかしこれを弾き返せばしばらくは動かないはず。いかに連邦でも戦力が無限でない以上」

「それはそうだがコンスコン、こっちはせいぜい百二十隻、無理してかき集めても百四十隻といったところか。艦船の修復はともかく、新兵

の訓練が追い付かんのだ」

「数で単純に押しまくられたらこちらの負けでしょう。それに付き合っただけの義理はありませんが」

「こちらはソーラ・レイのために戦術バリエーションがとれるだけマシか。どこでどうこれを使うか、有効に活かせたらまだ勝負になる」
「ドズル閣下、そこなのですが、ソーラ・レイの運用については是非申し述べたいことが」

俺は本来作戦参謀ではない。

艦隊司令官と参謀とは明確に役割が違う。

参謀とは豊富な知識と事例を知り、状況を正しく分析するものだ。そしてあらゆる可能性を見落とさず、最善策を考え提示し続けるのが役割だ。司令官はそれとは違い、重大な決断を素早く断固として行う立場である。

しかし今、ジオンは将が不足し、俺もドズル閣下の相談役になってしまっている。

もちろんそれを予期して既に俺なりの迎撃作戦を考えていたんだ。今、この段階ではキシリア閣下もデラース准将も到着していない。

そしてドズル閣下は皆を集めて一からの話し合いで作戦を決めようとは考えていない。時間がかかるのと、キシリア閣下とデラースの仲がまだしっくりきていないのを知っているからだ。骨子となる策を出してから調整しようと思っっている。

俺は考えた作戦をドズル閣下に述べた。

自分でも意外な作戦だと思うが、最善と信じている。

「な、何だとコンスコン、そんなことを！」

ドズル閣下も驚くが、速やかに納得する。

そしてドズル閣下の大いなる美点、決断力が次に示されたのだ。

「分かった。それでいこう。キシリアとデラースにも俺から説明しておく」

「えっ、そんな、皆の意見も」

「それが一番良さそうだ。だったらそうする。それでいいではないか、コンスコン」

今、ジオンは戦力をかき集め、まとめにかかる。少しでも戦力を充実させておきたい。

もちろん艦船の数で連邦にかなわないが、MSの数においてはもつと差がつけられている。MSを開発したジオンが連邦の大量生産に圧倒されているのは皮肉だ。

せめて質では絶対優位を確保したいところだが、マ・クベの手による新型MSの量産はまだまだこれからというもので、ロールアウトしたものはない。

「間に合わないか…… 仕方がない。急ぎ現有の試作機を各艦隊に配布しよう。少しでも戦力の足しにするのだ」

マ・クベは各種機体の試作機を説明員も付けず配布に踏み切った。それら試作機の送り先もまたマ・クベの勘に近いものだ。

そして俺の艦隊にも試作MSが届けられた。

ちなみに俺の艦隊はもう大隊規模を超えているので機動部隊とは呼ばない。かといって特定の方面軍ということもなく、単にコンスコン機動艦隊と言われている。

「コンスコン司令！ 正規補給ルートではありませんが、マ・クベ准将から特別に送られてきました。MSの試作機、新型です！」

「そうか！ それは嬉しい。では早速使えるかやってみよう。セシリア・アイリーン主計部長、すぐにガトーたちを集めてくれ」

第四十五話 本国会戦

セシリアの報告を受け、各パイロットに早速新型MSを試させた。一応、通信で送られていた資料には目を通し、俺にもある程度の考えはあった。

先ずはギヤンの後継だ。

ツエーンとシャリア・ブルのギヤンは、これまでの戦いでもう機体は限界に達し、各種の疲労と不具合が重なっている。交換部品も尽き、しまいにはゲルググの部品まで使ってだましましたまし延命してきたがここで廃棄にする。

この二人には代わりにガルバルディ試作機に乗ってもらおう！

ガルバルディは基本的にギヤンと操作系は変わっていない。ビーム兵器使用などのオプション追加のためにやや煩雑になり、また機体性能が上がったことで反応がより鋭くなっているが。

「なんとかいきます！ 慣れればむしろ使いやすいかも、です」

「大丈夫でしょう、司令。ビーム・ライフルをもう少し確認しておきます」

こう言つて二人ともガルバルディ試作機に乗り換えた。なんとかなりそうだ。

それならば、いずれは現有のドム隊もガルバルディ量産型に切り替えることになる。そこで比較的順応性の高そうなカヤハワを選び、テストケースで機種転換を試してもらおう。多少時間はかかったが可能だった。

そして我が艦隊のエース、アナベル・ガトーにも試作機を試してもらおう。

もちろんガルバルディではなく、ジオン史上最高性能というふれこみのアクト・ザクだ。

ただしとんでもなく扱い難いといういわく付きのMSである。乗りこなせるパイロットがいるのか、というレベルだそう。

ならば俺の艦隊でガトーができれば誰にも無理だろう。

ガトーは定石通り基本動作から始め、一つ一つ機体の反応を確かめていく。多少の戸惑いはあるが修正していき、順次各種機動バリエーションを試していった。

わずかな時間でどんどん進み、やがて限界機動まで至った。

結局、ガトーは乗り始めてわずか三時間で苦も無く操るようになってではないか！

それだけではない。

機体の各所にかけられたリミッターまで外していったのだ。

「おおっ、やはりエースパイロットは違う！ 凄いもんだ。しかしガトーも意外と新しいもの好きなんだな」

俺の驚嘆の声を聞き、側にいたツエーンが「新しいもの好き……つまり若い方が有利……」などと呟いていたのは聞かなかったことのように。

いったん使いこなすとさすがに高性能機アクト・ザク、格段に動きがいいのが傍目にも分かるほどだ。もちろん今までのゲルググでもガトーなら動きにはつきりと他とは違う切れがあったが、それ以上の動きにほれほれする。

他にもアクト・ザクを使えるパイロットがいないのか試すがそうそういるわけではない。

嬉しい誤算でもう一人だけ副隊長カリウス・オットーも乗りこなす技量があった。カリウスは器用でありアクト・ザクもガルバルデイも扱えるが、いったんアクト・ザクを与え補修パーツが減って来ればガルバルデイに変更することとした。ガトーのアクト・ザクを優先にする方針である。

ひとまずこれでコンスコン機動艦隊はガルバルデイ三機、アクト・ザク二機を保有することになる。

そして当座利用予定のない余った試作MSはマ・クベ准将に即刻返す。

それを命じるとセシリアに動揺が走った。人の好いセシリアでもせつかく手に入れた試作MSを手放すとは予想外だったのだろう。「は？ コンスコン司令、何と仰いました!? 試作MSの返却、でしよるか」

「そうだ。この艦隊で当面必要な分は賄った。他の艦隊で必要としているところがあるだろう。残りは最大限有効活用してもらおう」
「し、しかしどこの艦隊でも余剰があれば抱え込んで出したりしないような……」

「主計部長、敢えてそこで返すんだ。この艦隊はジオン全体のことを考える規範とならねばならん。皆が皆、自分のところばかり考えて小狡いことをしては、全体がおかしくなる」

正道である。

この言動により、俺は若干の尊敬を受けることになる。分かってはいたことだが、話を伝え聞いたガトーが一番感動してくれたらしい。ガトーは今さらだが、他はいいのか……

MSの機種転換について、他の部隊の様子も漏れ聞こえてきた。

シヤアはアクト・ザクに乗り換えなかったとのことだ。「今のゲルググに不便はなく、変える必要がない」といういかにもシヤアらしい、実にあっさりした理由だ。

シヤアにとってMSは便利な道具にしか過ぎず、あくまで自分に合えばいいだけなのだ。

すると逆にアクト・ザクに乗りたがった者が存在した。

キシリア閣下のキマイラ隊、ジョニー・ライデンだ。

「俺は真紅の稲妻だ！ この俺が赤い彗星と間違えられるのは前々から不本意だった。しかし今、向こうがゲルググのままなら、敢えてこつちが機体を変えてやるぞ。形の違うアクト・ザクなら誰からも間違えられることはない！」

何とも自分勝手な理由で機種転換する。

だが結果的に苦労しながらもなんとかアクト・ザクを乗りこなすまでに至ったそうである。意地とは凄い。

それから他にアクト・ザクに乗れる者がピンポイント的にカスペン准将のところへ一人、そしてデラーズ准将のところへ一人いるらしい。

戦機熟す。

連邦艦隊は堂々の移動を開始した。

当然それに先立ち、連邦の艦隊司令部だって作戦を定めている。

連邦は最終的に240隻に及ぶ大艦隊を擁するとはいえ、ただ前進して攻めるということをするはずがない。各部隊が上手く機能し、最大限効率よく勝てるようきちんとした作戦を立てる。

ジーン・コリニーもダグラス・バーダーも油断はしない。

また作戦を立て実行する能力があるからその地位に到達したのだ。

初めにジーン・コリニーが大まかなところを言う。

「さて、敵ジオンの最後の抵抗を粉碎し、サイド3を突くこの作戦は『星二号作戦』と名付ける。その戦術を定めよう。敵の残存兵力は少ないとはいえ、だからこそ足をすくわれてはならんのだ。後が無い連中は何をするか分からん」

「閣下、通常なら大軍であることをストレートに活かすところですか。編成もオーソドックスに前衛・中央本隊・右翼左翼・予備兵力を配置し、そのまま押し潰すのが常道。しかし、ここでコロニー・レーザーという不確定要素は無視できず、その対処を考えると……」

「それだけが厄介だ。といっても取れる作戦は限られているだろう。難しい選択肢ではない。コロニー・レーザーの射線からひたすら逃げながら、サイド3の裏側まで大きく迂回して攻める、それも一つの方法」

「言うまでもないですが、それは戦術の選択肢を狭め、なおかつ補給面で制約が出るかと」

「確かにそうだ。艦隊行動を激しく行えば、大軍であるだけに補給物資は三日と持たず、それだけで撤退させられる羽目になる。それもまたリスクだ。ではもう一つの方策しかない」

「それは陽動、でしような」

ジーン・コロニーらは愚将でも無能でもない。

ここできちんと理屈の通った戦術を組み立てる。

それはジオンの切り札とも言えるコロニー・レーザー自体と戦うことなく、丸ごと無力化する恐るべき作戦だった。

「全体兵力の一割を先行させ、ジオン側のコロニー・レーザーを惑わす。おそらく巨大レーザーといってもその発射は会戦中一度だけのことだろう。向こうとしてはコロニー・レーザーを無駄撃ちをすればそれで終い、使うタイミングに迷うに決まっている」

「そこが勝負ですな。当然陽動の方を先走って撃つてしまうか、あくまでこちらの本隊を待って撃つか迷いが出るでしょう。それに頼っているだけに」

「そしてこちらは頃合いを見て本隊を急進させ、間髪を容れずにジオンの兵力とぶつける。そのまま適度にあしらいながらサイド3に雪崩れ込んでやる」

「向こうの兵力を避けず敢えて戦いながら、しかし過度に掃討もしない。つまり敵味方を混合した状況を作る。そうすればコロニー・レーザーそのものを使えない状況に持ち込める、と」

「いわゆる並行追撃だ。こちらの兵力が大幅に勝るのでそれができる。コロニー・レーザーを確実に使わせないためにはそれが一番だ。しかし万が一敵が血迷い、味方ごと撃つてくるかもしれない。念のため俺とは離れた位置にいてくれ、ベーター」

大兵力をダイナミックに活かす。そしてコロニー・レーザーが一度きりしか使えないことを見透かして動く。

俺のジオン側も布陣を開始する。

ア・バオア・クーからかなり思い切った本国寄りのところだ。

ここを突破されれば、本国へわずか4時間で到達されるという距離である。それはギリギリまで連邦に補給線を伸ばさせるという意味がある。

その中央本隊はドズル閣下と俺の艦隊を併せて七十隻だ。そこにドロスなどの三空母も含まれている。

右翼はデラーズ准将の二十隻余り、左翼はキシリア閣下の五十隻、それぞれ出し惜しみせずグワジン級戦艦を投入している。だがしかし、小型の駆逐艦を多く含んでやつとこの数字であり、内容的にも戦力不足は否めない。

大まかにこの三つの隊が横陣を形成している。細かい前衛などの区別はない。

それらから少しばかり離れ、コロニー・レーザー直近にはカスペン准将が布陣している。ヨーツン Heim とカスペン戦闘大隊を直掩に置いて守り、コロニー・レーザー自体はようやく修復したギドルで操作する形になる。

そしてエネルギーの充填は一度の発射に充分なところまで蓄える。

ジオン側は本国や茨の園に最小限の兵力を残している以外、ほぼ総力を展開しているのだ。

連邦艦隊はゆつくりとサイド3周辺宙域に侵攻してくる。

コロニー・レーザーを警戒し、やや散開した形だ。

そこから二十隻余りの艦隊が先んじて急進をかけてきた。前衛にしては本体と離れすぎ、遊撃というタイミングでもない。

明らかに陽動だ。

連邦のその陽動部隊はやや迂回しながら、ジオン左翼に取り付く動きを見せる。

本国会戦と呼ばれる戦いの幕は切って落とされた。

ジオン側は当初固く陣を守って動かない。

互いに射程外から威嚇を撃ちかけるが、どちらにも実害は出ない。業を煮やして連邦の陽動部隊は射程ギリギリまで近づくが、それでもジオン側の突出を誘えない。

「何だ、ジオンは予想より消極的だな。あの数の陽動にも食いつかないとは。ひよっとすると守りを固めるのに徹すると決めているのか

……劣勢を自覚して。後がないのは事実だからな。ならば、陽動部隊をコロニー・レーザーへ向かわせろ。そうすればいくらなんでも無視はできまい」

ジーン・コリニーは多少当てが外れた。

もつとジオン側は慌てると見込んでいたのに。

しかし直ちに思考を切り替え、陽動部隊に対しコロニー・レーザーそのものへの攻撃を掛けるように指示した。これにはたまたまずジオンも何かの対処をするだろう。

だがそれでもジオンは動かない！

いや、わずかな変化がある。それは攻勢に出るものではなく、全体を薄い壁のような陣形に変えるものだった。

ここから戦いは戦史に残るものとなる。

第四十六話 狙う先

連邦の陽動部隊の接近にもかかわらず、コロニー・レーザーはずつと沈黙を続けている。

「なぜだ？ このままでは陽動部隊にコロニー・レーザーを発射できないうちに占拠される可能性すらあるのに」

ジオン側の意図を掴みかねたが、やがてジーン・コリニーは相手の陣形が変化していく様子に気付いた。その横陣が徐々に広がり、ぴつちりした薄い壁のようになるのだが、艦が少数のためそうすればするほど陣の厚み自体は薄くなる。

「何だ、やはり敵は積極策を取らず、ここを突破させないことばかり考えているようだ。普通なら兵力の多いこちらに包囲陣を敷かせ、その上で自分は密集陣をとり、隙を探して食い破る方を選ぶだろうに。少数が勝ちたいなら兵力を集中して局所的に優位にしなければダメだ。そんな兵法の基本すら向こうは忘れてしまったのか。まあ、恐らくサイド3が近いので、ジリ貧と分かっていながらも、どうしても守りの戦術しか選択できないのだろう。気の毒だがこちらは嫌でも勝てるというものだ」

ジーン・コリニーは思いのほか楽勝になりそうな気配に安堵する。唯一の勝機を敵は自分から投げ捨てたように思えたのだ。戦力差以前に、向こうが防衛に徹するなら少なくとも負けはない。

「よし、一気にいくぞ！ 各隊急進し、あの薄い壁に取り付け！ 敵は守りばかりで攻勢には出てこない」

その言葉通りに連邦各隊は何の妨害も受けずに進み、壁の正面まで進んで交戦を開始する。ひよつとしたらと考えていた、ジオンが陣形を急速に変えて突撃を図る可能性も杞憂に終わった。伏兵もない。コロニー・レーザーも相変わらず沈黙を続けている。

ここまでくれば、兵力は連邦が圧倒的に上なのだ。序盤は消耗戦になるとしてもどのみち壁は破れる。そうすれば最後までコロニー・レーザーを使わずに済む混戦が作り出せるだろう。正にジーン・コ

リニーの思う壺だ。

ジオンの壁は思ったよりは厄介だった。

艦を並べて統率の取れた弾幕を張ってくる。それだけではなく、艦の横に守られるように配置されたポッドの群れが弾幕をいつそう濃くしている。接近戦に対して何もできない脆弱なポッド、砲のついた棺桶と言われたものだが、火力自体は決して弱くない。弾幕運用に徹すればそれなりの力を発揮するのだ。

そのため、連邦のMS隊も思うように飛び込めないでいる。

おまけに、強引に突破を図った連邦MSがいても、そこへ強力かつ正確な艦砲が飛んでくるではないか。それはジオン側のただ一艦が撃っているものだが、超々遠距離で主砲を使う。弾幕ではなく狙って当ててくるとは驚きだ。一撃ごとに連邦MSの一機か二機は墜としていくそれには手がつけられない。

「敵も思ったよりはやるな。各隊レベルでの実力は相当なものだ。それに向こうもサイド3の最終防衛、それほど必死だということか。だが無駄だな。単純な砲戦になったところで兵力の差はいずれ重く響き、その粘りも尽きる」

次に、今頃になってようやくジオン側から10艦ほどの隊が飛び出てきた。

いかにも苦し紛れで出て来たようなそれは、外側を迂回しつつ、連邦艦隊の後ろへ向かおうとしている。

「何だあれは。見え見えの陽動とは。退路遮断と見せかけたいのか…… いや違う！ 後方の補給艦を狙っているのか」

さすがにジーン・コリニーは判断が鋭く、そして電光石火の対処に動いた。するとそれは戦闘もせずすぐ戻って行くではないか。「持久態勢の上での補給撃破か。遠征軍を追い返すには常道、敵も狙いは悪くないのだがな。いかんせん戦力の不足とは悲しいものだ。思い切りよくそれを行うこともできやしない」

連邦艦隊は余裕を見せていている。ジオンの打つ手などしよせん悪あがきに過ぎず、何ほどでもない。

すると突然、連邦艦隊最左翼の眼前にジオン側から信号弾が放たれ

た。

「む、あれはいったい？ 何のマネだろう」

直後、その左翼に光の渦が襲い掛かる！ 巨大な柱がまぶしく数秒続き、やがて流れ去った。何かなど考える必要は無い。

コロニー・レーザーが撃たれた！

これにはジーン・コリニーもさすがに驚いた。

対処不能の巨大砲撃だ。まさかこのタイミングで撃ってきたのか！

連邦本隊の移動中でもなく、陽動に向かってでもなく、最終局面の破れかぶれでもなく、今だとは。その意図が分からない。

「どうなっている！ 被害状況を報告せよ！」

「報告します！ 左翼に布陣していたマゼラン級一隻を含む四隻が撃沈！ 大破三隻！」

「な、何？ 何だ、あのコロニー・レーザーを撃たれて損害はたったそれだけか！ はは、これで勝ったぞ！ 馬鹿め、ジオンは焦って無駄撃ちしたな。こっちはかすり傷で済んだ。よし、もう向こうに奥の手は無い。このまま押せばいいだけだ！」

ジーン・コリニーは勝利を確信した。

全く拍子抜けだ。ジオンの虎の子のコロニー・レーザーはほとんど無駄に終わった。もはやその脅威はない。唯一の懸念すら無くなった今、思わず笑みがこぼれる。

そして見たところ、ジオン側も奥の手の失敗に動揺したのか、壁の一部が崩壊しつつあるではないか。

「敵の崩れたところへ突撃だ！ 勝機を逃してはならん！ 一気に蹴散らしてやれ！ もう混戦でコロニー・レーザーの無力化など考える必要もなくなった。叩き潰すだけだ」

ジーン・コリニーは地味に押すだけではなく、華麗に勝ちたい。頭をよぎるのは徐々に連邦軍の中で求心力を増しつつあるグリーン・ワイアットだ。そんなワイアットの姑息な政治工作など、この勝利の実績で無に帰してやる。存在感でワイアットに差を付け、自分たちの夕

カ派を一気に連邦の主流にするまたとないチャンスである。

それでなくともジーン・コリニーは果断をモットーとする将だ。

ここで勝機と見て、艦隊を大きく動かす。

その指示に従い、ジオンの崩れたところへ向けてダグラス・ベーターを中核とした連邦の兵力が殺到していく。これまでストレスのたまる戦いを強いられていただけに連邦の各隊も勢いよく突破し、逆にジオン側は怖気づいたのからくなく抵抗もできない有様だ。

ただし壁を抜けた連邦艦隊が見たものは、満を持していたジオン精鋭MSの隊列だった。

「連邦は編成が乱れている。そこを突けば恐れるに足りん。各MS中隊、ラカン・ダカランのアクト・ザクを中心に突撃せよ！」

エギーユ・デラーズの一喝が響く。グワデンの指揮シートに背を伸ばして座りながら戦況を見ている。

「慢心はいかんが、これは勝ったな。この策を考えたコンスコン中将、かなりの傑物だったか。さすがにドズル閣下の腹心だ。こんな大会戦でまんまと策を成功させるとは尋常ではない」

同じく戦況を見ながら、俺もドズル閣下に通信を付ける。

「連邦は思った通りに動きまじしたな。後は袋叩きに」

「心臓に悪かった、コンスコン。まさかこんな作戦を取るとは。ソーラ・レイの使い道を聞いた時には耳を疑ったぞ」

俺は開戦前にドズル閣下にこう言っていたんだ。

「ソーラ・レイは連邦主力などには使いません」

「? 何だと? 何を言っているコンスコン。ソーラ・レイで連邦を最大限減らさなければ勝負にならないか。戦力は倍以上違うのだ」

「いいえ、もつと悪辣な使い道があるので、そっちに使いませぬ。連邦の艦隊を踊らせる方がよほど有効でしょう」

「躍らせる? それは、いったい何だ」

「そもそも少数が多数に勝つには、戦術的にいくつかの方策があります。例えば地の利を生かして隠密行動をとるか、陽動で不意打ちをかけるか。しかしこれらは無理でしょう」

「それはそうだろう。ここには岩礁地帯なども無いのだからな。いくらミノフスキー粒子を濃くしても索敵は容易だ」

「では戦力を集中して突破戦術をかけるか。ですがこれも現実的には無理。仮にそうしても連邦が柔軟に受け止め、その上で別動隊をジオン本国に向かわせたら万事休すです」

「……そうだ。では何も手が無いではないか。コンスコン」

「いいえ、たった一つあります。それは包囲からの分断戦術です」

「コンスコン、それは一番無理だ。これほど兵力差があるのに包囲などすれば、数の少ないこちらは限りなく薄くなる。もし包囲できたとしてもあつという間に食い破られ、後は各個撃破の餌食にされるだけだ」

「大きく囲めばそうでしょう。そうではなく、こちらの内部に取り込めば、コンパクトな包囲陣の完成です」

「敢えて中に取り込む？ それも危険が伴う。よほどうまく思ったところに誘導しなくてはならんぞ」

「そのためのソーラ・レイです。まずは会戦が始まっても撃たずに連邦を充分牽制しておきます。その上で、敢えて無駄撃ちをして、同時にこちらは崩れた擬態をすればいいのです。その場所はたぶん本隊とデラーズ准将の間が良いでしょう。その擬態によって、心配していたソーラ・レイの脅威が無くなったことで勝利に浮かれた連邦は、必ず崩れたと見えたところから突破を図るに違いありません。落ち着いて考えればソーラ・レイがないのなら、連邦としてはじっくり兵力を活かした包囲でもすれば一番良いのでしょうか、おそらくそこまで考えますまい」

「なるほど…… 心理的な罠になるわけだ。ただの擬態では引っ掛からないかもしれない。だがソーラ・レイの無駄撃ちとセットならいかにもこちらが戦意喪失のように見えるからな。そこを突破したくなる」

「ついでに連邦の補給輸送艦を狙った動きも付ければより良いかと。実際にうまく行く必要ありません」

「補給のことを頭に入れさせ、無意識にでも急戦に傾けさせるか……いやこれは完璧だ、コンスコン」

そして俺はドズル閣下の裁可を得て、詳細を詰めていった。キシリア閣下やデラーズ准将とも入念な調整を行う。この作戦は乱れが出ては何にもならない。

そして実はもう一つ、俺はソーラ・レイに大きな仕事をしてもらうつもりだった。そこまでドズル閣下に言わなかったのだが、実はこれが一番の狙いかもしれない。

ガンダムを斃す！

たったそれだけのために、あのソーラ・レイの巨大レーザーを使つてやる。

ガンダムはあまりにもジオンにとって脅威だ。通常の作戦ではどうやっても斃せるものではない。今、ソーラ・レイの一撃をこれに使わないでどうする。

第四十七話 ソーラ・レイ

ガンダムをソーラ・レイで叩く！

ただし現実的には直径六kmの範囲を確実に消し飛ばせる巨大レーザーとはいえ、逆に言えばたったの六kmなのだ。照準に捉えられたとしても、高機動をしているMSならわずか数秒でその範囲を出てしまう。

そして発射を決めてからシークエンスが始まり、実際にレーザーが出るまでも同じく数秒かかる。つまり、悟られてしまえば計算上きわどい勝負になる。

おまけにソーラ・レイは巨大なだけに照準の変更はそう簡単にいかない。各所に取り付けられたスラストを使って微妙に動かすのだが、綿密な計算をした上で精密に行う必要がある。そうしなければ円筒にわずかでも歪みが出てしまい、発射すらできなくなる。つまり現段階で掃射は到底不可能だ。

策を練っても上手く行くとはい限らない。それでもやってみるしかないではないか。

初めに俺は連邦が陽動を使ってきたことから、そっちの方に木馬とガンダムがいると考えた。これまで木馬はやたらと陽動や囮に使われていたからだ。連邦の中でも腫れ物扱いなのか？

しかし、陽動部隊の中に木馬はおらず、当てが外れた。俺はその陽動を仕方なく放置させ、慎重に木馬を探し続ける。ペガサス級強襲揚陸艦などそうそう数は無いはずだ。

いた！

ジオンの壁に取り付いた連邦艦隊、その最左翼に木馬がいた！

これはラツキーだ。下手に中央部にいたら、ソーラ・レイが無駄撃ちに見せかけられず本来の作戦が成り立たなくなる。それに連邦司令部を下手に潰してしまうと乱戦になる可能性が高く、そんな消耗戦はかえって厄介だ。そもそも味方を巻き込むような照射は絶対にしてはならない。

後はその近くへ出撃しているはずのガンダムを探させる。

見つけたら、次はガンダムへ向かって艦砲の集中を命じる。もちろん弾幕が当たるようなガンダムではない。ただし、高機動を繰り返させることくらいはできる。そして動きが速いほど早めに推進剤とエネルギーパックの補給を受けに戻るはずだ。いくらNTでも物理法則は変えられない。

「ん、あのガンダムだが、何かしら違うような…… 新しくなったのか？ しかし木馬から出てきたのは確かだ。今さら考えても仕方ない」
見つけたガンダムを拡大して見たところ、なんだかいつものガンダムと違う気がした。俺は知らなかったが、実はガンダムはガンダムの方で転換があったのだ。重なる連戦で試作機ガンダムの各部は疲労し、おまけに後付けのマグネットコーティングのためかなりの無理をかけている。部品をやりくりしながら算段をつけても、やがて限界がきたのだ。そこで、アムロ・レイは新たにアレックスガンダムなるものが支給されたと同時に乗り換えていた。

砲撃との我慢比べの末、ようやくガンダムは母艦である木馬へ帰投するコースを辿る。

その頃までには、ソーラ・レイの射軸はピタリと木馬に合わせてある。味方の方も巻き込まれないギリギリのところへそつと後退させる。

後はガンダムが木馬に戻って補給を受け始めるのを見計らい、撃ち抜けばいい。

それで長きに渡った俺とガンダムとの因縁も決着だ！

固唾を飲んで、ガンダムの動きを注視する。

ところが、ガンダムは何かを感じ取ったのか、木馬へのコースの途中で止まってしまったではないか！

くっ、くそ、さすがガンダムだ。万事うまくはいかない。

だがここで逃したらガンダムを斃す機会は失われる。

俺はカスペン准将との連携で、ソーラ・レイの照準を木馬からガンダムの方へずらしてもらおう。木馬よりもガンダムが優先目標だ。

そしてついに枠内に捉えた！

するとなぜかガンダムが急に動き出す。俺も反射的に指示する！
「信号弾、撃て！」

これを合図として、ついにカスペン准将がソーラ・レイを放つ！
巨大な輝きが宙を一閃、眩しく照らす。

これは運命の光だ。

「や、やったか！ ガンダムを斃したか！」

勝負の結果は最高でも最低でもなかった。

ガンダムは照射直前に高機動をかけ、外れる方向に動いていた。憎
たらしい程の先読み能力だ。

しかしそれは完全にうまくいったのではない。ぎりぎりレーザー
の大きさが勝り、その縁にかすつていた。そのため右胴体部から下半
身にかけて、広く溶かされて消えてしまっていた。

その意味では作戦はうまくいき、俺はガンダムを斃すことに成功し
たのだ！

もう復旧などできやしない。

ただしガンダム内部に隠されてあった強固な脱出装置が分離した
のもまた観測された。ノーマルスーツで出たのではなく、そういう保
護ポッドで逃れたのだ。

パイロットは無事なのである。それはジオン側が捕えるより早く、
連邦側に収容されていく。

このソーラ・レイにより、連邦にとっては乗り換えたばかりの真新
しいガンダムを失ったのは痛い。しかし逆に言えば新しい機体だか
らこそ、そこまで移動でき、パイロットが助かったとも言える。

ついでに木馬もレーザーにかすられて、エンジン片方を失ってし
まった。

照射位置にあったはずだが、逃げ出したのだろう。同じように逃げ
た艦、逃げずに沈んだ艦、明暗が分かれたのだ。ともあれ木馬も大破
し当然戦線から離脱していくのが見える。

俺はこの結果を頭の隅にいったん置いた上で、本来の作戦である連

邦艦隊の撃滅に専念する。

「ガトー他MS各隊、全機発進！ デラーズ准将を支援し、突入してきた連邦艦隊を斜め後方から襲って削り取れ！」

信頼する俺のMS隊を出す。

ここが勝負時だ。

早めに叩きのめさないと連邦は立ち直ってしまい、陣を整え急速離脱を図るだろう。そうさせてはならない。

艦隊から光の粒が連邦艦隊を目掛けて次々と発進していく。

そしてもう一つ、俺はドズル閣下から他の将への命令権を預かっている。それでキシリア閣下にも要請を行う。

「キシリア閣下に電文打て。現在交戦中の連邦突入艦隊への攻撃、あるいは未だ突入してきていない連邦残存艦隊への挟撃行動の防止、もしくはソーラ・レイへ向かった連邦陽動部隊への対処、それらのうちいずれかをお願いしたい、と」

俺は敢えて選択肢のある要請をした。

本来なら決めてから命じるべきでもあり、俺は今その権限も持っている。

だがザビ家のキシリア閣下に遠慮したのと同時に、キシリア閣下のやりようを見てみたい気持ちがあった。

その電文を受け取ったキシリア閣下が呟く。

「……コンスコンは食えない奴でもあるな。これほどの作戦を成功させておきながらオマケも忘れないとは。私が本気かどうか試すつもりかもしれないが、奴にはシーマの借りがある」

キシリアは今、チベ級パープル・ウイドウの艦橋にいる。

そしてキシリア自身は陣頭の猛将などではなく、そこに美意識は感じない。指揮官として順当に艦隊後方にいるのだ。

ついでに言えば、コンスコンやドズルとは逆にあまり大戦艦にロマンを感じる人間ではない。

実はこのパープル・ウイドウの方が、自分で名前をつけたほどのお気に入りでもあった。グワジン級グワリブなどはザビ家の象徴とし

て持っているだけで、むしろそれを惜しみなく前線に投入するスタイルをとっている。戦力上その方が有効であり、指揮官のために火力を温存するのは合理的でないとも思っている。

「ここは全力で我が宇宙突撃軍の実力を示しておく！」

今、そのパープル・ウイドウ指揮シートから立ち上がり、張りのある声で指令を発する。

「シャア・アズナブル准将に通達！ 正面の連邦艦隊を50分だけ確実に足止めせよ！ それ以上は必要ない。マ・クベ准将、デラミン准将はその援護に付け。本隊は突破してきた連邦への攻撃に回る。キマイラ隊はその先鋒として突撃！ エース部隊として恥ずかしい戦いだけはするな！ 友軍全てに見せつけるつもりでやれ」

キシリアは自分は政略が本分であり、決して戦術指揮官としての能力が高いとは思っていない。だがここまでお膳立てされたらやるしかない。

そして客観的に見れば、その指揮は非常に的確なものだったのだ。それはキシリアが精神的に少しばかり成長したことだろうか。

「もう一つ命じる。シーマ・ガラハウ及び海兵隊は連邦陽動部隊を急ぎ追いつ、カスペン准将と協力してこれを壊滅せしめよ！ これはソーラ・レイ、いや、マハルコロニーを敵の手から守るためと思え」

キシリアは全部隊を一気に動かす。

その言葉にジョニー・ライデンも奮起するだろうが、特にシーマ・ガラハウはマハルのため死ぬ気で戦うに違いない。

指示を受け、シャアが出る。

未だジオンの陣に突入していない連邦艦隊は五十隻余りいるのだ。いかにマ・クベとデラミンの二十五隻による側方援護があるとはいえ、その数を前にして恐れもせずゲルググが浮かぶ。

逆に連邦の方は、罨にかけられたのをようやく理解した。

既に遅い。

八割方はもう突入してしまった。そして取り込められ、多方面から不利な横撃を食らっている。そこにいた副司令官ダグラス・ベーダー

中将は必死に指揮を執るが、連邦は前進も後退もままならぬまま混乱するのは避けられない。

だが、ジーン・コリニーの手元にはまだ五十隻も残っているのだ。ジーン・コリニーは愚将ではなく、精神的シヨックにいつまでも捉われていることはない。既に立ち直り勝つための新たな策を立てている。

根拠はある。

まだまだ全体として連邦の戦力は大きく、逆転の目がなくなったわけではないのだ。

「くそッ、あの敗走が擬態とは、まんまとやられたか！　だがまだ負けと決まったわけではない。残った艦隊55隻をまとめて大きく迂回させれば、先の味方170隻と呼応して挟撃ができる。ペーダーがいる以上、損害は受けても簡単に瓦解はするまい。連携して挟撃に持ち込めばあつというまに態勢は逆転だ！　ただちに動けば勝てる。いや勝ってやる！」

そこへ立ち塞がるのがシャア・アズナブル、赤い彗星だ。

連邦にとって戦争初期はMSによる悪夢が続いた。

その中心にいる赤い彗星は恐怖の象徴である。連邦といえども一瞬怯まざるを得ない。

ましてや今、すぐ横には無敵のエルメスが万全の態勢で控えている。

第四十八話 エルメスの力

それでも戦闘が始まっている以上、その渦は全てを巻き込む。

連邦艦隊もシヤアを恐れてばかりいられず、ここは勝つために否が応でも前進しなくてはならない。

連邦とジオン双方の熾烈な艦砲が飛び交いだす。その中でMS戦もまた開始された。

シヤアの赤いゲルググが動く度に、連邦のジムが墜とされていく。やはり連邦から恐れられるジオンの象徴だ。その強さは圧倒的である。

ラアのエルメスも万全のフォローに付き、やはりジムをことごとく薙ぎ払っていく。

そこに死角などあるはずがない。

ジオン側はわずかずつ後退を余儀なくされるが、なんとか戦線を支え、持ちこたえられそうだ。もちろん数の上でこれほど劣勢である以上、シヤアの力量を以てしても勝つことは不可能に近い。いくらシヤアでも近付くほど熾烈になる対空砲火の中で十艦も二十艦も沈めることなどできるものではない。

しかしキシリアから命じられたのは単なる時間稼ぎだ。連邦の挟撃戦術を阻み、全体として勝ち切るための。

今、進んでくる連邦に反撃の一撃を与え、攪乱し、逆上させればそれでいい。

シヤアはわざと派手に戦い、敵味方の目を引き付ける。もちろん墜数そのものではエルメスの方が勝るが、シヤアには持ち前の華がある。

ただ撃墜するのではなく、連邦兵の心を折るような華麗な技まで披露するではないか。艦やMSを蹴って加速する、後ろを振り向かずに撃つ、など様々だ。

それでなくとも戦場ではパーソナルカラーの赤がよく目立つ。

赤い彗星の伝説はこうして益々語り継がれるのだ。

だがそんな順調な戦いの中、シヤアを目がけて恐るべきビームの束が襲い掛かってきた！

「准将、危ない！」

ラファが思わずそう言うが、さすがにシヤアはビームを次々に躲していく。それでも一度はスレスレのところ躲すことになった。

「何だろう？ どこから来たビームだ？ 近くにMSはいなかったはずだが」

シヤアが特に慌てもせず見渡すと、遠くに連邦MSの集団がいた。しかし砂粒のようにしか見えない距離であり、普通にはとてもビーム・ライフルの射程ではない。

「確かにあの方向だった。この距離で射撃ができるとも思えないが……」

第二撃の波が来た。もう方向が分かっている以上、シヤアにとって躲すのは別に難しいことではない。

しかし、これにエルメスが怒りを燃やさないはずがなかった。シヤアに対する攻撃は死に値する重罪と一人で決めている。

直ちに報復に動く。

「このMSどもッ!! 准将を狙うとは、もう死ぬ覚悟はできてるんでしようねッ！」

エルメスがそつちに突撃すると同時に、九体の守護天使を先行させる。

そして次々と撃ち放つ。

連邦MSはその度ごとに天使たちの矢に貫かれて撃破されていく。あまりに一方的な交戦ではないか。

もちろん連邦側は驚く。それには理由があり、ただのMS中隊ではなかったのだ。

連邦MSの最新鋭機であるジム・スナイパーIIを擁していた隊だ。それはやつと実戦投入が開始されたばかりのMSである。

もちろん、名前の通り射撃能力に優れているが、決してそれだけではない。反応性でも機動力でもジム・コマンドを大きく上回る性能を与えられている。連邦期待の高性能新型機だ。

ここで連邦の脅威になっている赤い彗星を抑えるため出てきたのだが。

この場合あまりに不運だった。相性が悪かったとしか言いようがない。

せっかくの遠距離射撃もエルメスに通じるわけがなかった。

そしてアウトレンジの戦いなら、エルメスの方がよほど正確だ。その差は絶望的に大きい。どんなにかすかに見える距離でも関係なく当てられる。いや、見えている必要すらない。NT能力を使うララアには何も問題ない。特に、怒りに精神ボルテージが沸騰した今では。「わたしがここを墓場にしてあげるわッ！」

連邦のジム・スナイパーII中隊十六機はやがて全滅させられた。この会戦でせっかくの性能を活かせることもなく、あっさり消え去った。

本気のエルメスはたったの一機たりとも逃げることを許しはしない。

それを見たシヤアは呟く。

「なるほど、遠距離からの射撃戦も興味深いものだ。私は接近戦も決して嫌いではないのだが…… そういえば、マ・クベ准将はMSを代えるのではなく、ゲルググのまま性能を上げる改修ができるという話をしていたな。ゲルググを高機動R型にするか、あるいは狙撃J型にするか可能という話だったか。ならば私のゲルググはJ型にしてもらうのも面白い」

戦場の真ただ中で戦いながらそんなことを考えるゆとりがあるのもシヤアならではだ。

そして注文された50分の時間をきっちり稼ぐと、損害によって破綻する前に本格的な後退に転じた。

赤い彗星による、華麗なステージは終幕だ。

その陰で、さすがに数の違いから砲戦でテラミン准将の艦隊が壊滅

寸前の綱渡りになっていたので。欲張らず、仕事は引き際が大事である。ちなみにマ・クベ准将の艦隊も損害は少なくないが、特に旗艦マダガスカルでは大きな揺れで一番奥に大切にしまっておいた白磁の壺が一つ欠けてしまった。

当人はそのことをまだ知らない。

主戦場から離れたところでもう一つの激しい戦いがあった。

カスペン准将の指示でソーラ・レイが発射されたわずか1時間後、そのタイミングで連邦陽動部隊22隻が襲いかかってきた。

ソーラ・レイは既にこの会戦での役割を終えている。もう戦術的に守る意味はないのだが、それでもジオン本国を守る盾、連邦に占拠または破壊されるわけにいかない。そのために防衛の戦いをするのだ。

ソーラ・レイの指揮艦ギドル、付随するムサイ八隻、そして技術艦ヨーツンヘイムが砲を並べて待ち構える。

それと合わせてヨーツンヘイムから雑多なMSが出撃していく。ザクもドムもいる。パイロットはむろん新兵や学徒兵が大半だ。さすがにオツゴではなく支給されたMSに乗ってはいるのだが、訓練不足は否めない。

「私もゲルググで出る。ヒヨツ子にはお守りが必要だ」

「えっ、カスペン准将自身が？ それはお止め下さい！」

「キャディラック大尉、そう言うなら、そっちもツダで出るのは止めたらどうだ」

カスペン准将も決して無謀な人間ではない。しかし迫る連邦艦隊の規模を知ると学徒兵たちを自分の手で守りたくなる。少しでもヒヨツ子を守りたいのだ。

技術隊のモニク・キャディラック大尉もまた制止を振り切って出撃する。いくら思い入れが強くとも、さすがにツダでは性能不足で、試作ガルバルディに乗って出る。この緊急事態に計測屋を自認するオリヴァーもパイロットとして出るの、それを密かに守るためだ。

来襲してきた連邦陽動部隊、その戦力は予想よりも大きく、高速の軽空母が二隻も含まれていた。そこからMSが続々と発進してくる。

全部で50機もいるだろうか。

たちまち交戦が始まった。

ジオン側40機も最初はカスペン准将がきちんと統率していたが、そこは新兵の集団だ。いつまでも整然としていることはできず、襲われるとたまたまらず隊列を乱してしまう。

「キョロキョロするな！ 隊列を保てば敵の来る方向は限られてくる！」

カスペン准将がいかに声を枯らしても効果は限定的だ。新兵は最初は意気込みはいいのだが、孤独な宇宙で敵を目の前にしたら平静を保ってなどいられない。小便を漏らし思考停止する者、めちやくちやに動く者、味方も敵も分からなくなってしまう者、様々だ。

もはや最初から乱戦に近い。

カスペンやモニクといった技量のある者が必死に押しとどめようとするが明らかに不利であり、損害が増えていく。

だがここを支えるのだ。いったん崩れたらジオン側は敗走し、それこそ新兵など一方的な狩りの獲物になってしまう。

見ると、艦同士の砲戦でも連邦のサラミスをやっと一隻叩く間に何倍もムサイが墜とされてしまう。ギドルも直撃を食らうが防御力でなんとか凌いでいる。

だがそこで不思議なものを見た。

「墜ちろ墜ちろ墜ちろーッ！ とつとと墜ちてしまえッ！」

一機のアクト・ザクが飛び跳ねたり回転運動をしたりしながら連邦のジムを叩き墜としていくではないか。

誰かなど聞く必要もない。

「……あのキャラ・スーンか。つくづく変な奴だ」

カスペン准将がそう呟く。

この頃にはキャラ・スーンの性格を少しは漏れ聞いている。普段はそれほど変ではなく、MSにも乗りたがるふうではないのだが、いったん乗ってしまったら豹変してしまう。その意味で通常ではない。

そして今、キャラ・スーンの技量はともかく、相性のいい試作アクト・ザクの高性能が発揮されている。おかげで全体の戦況は悪いのだ

がやっと一息つける。

そして間に合った。

やっとジオンに待望の援軍が来たのだ。

「済まなかったねえ、マハル。お前をこんなにした上で、また働かせちまったよ。でもお前はよく頑張ってくれた。後はしばらく休んでおくれ」

シーマ・ガラハウは故郷マハル・コロニーを愛おしく見る。

その瞳は幼い目を思い出すのか、限りなく優しい。

リリー・マルレーンがキシリア閣下の指令を受け出立し、ようやくその艦橋からマハルが目視できるところまで来る。海兵隊の他のムサイを置いてけぼりにするくらいのフルスピードだった。

到着すると同時に激戦が展開されているのを観測する。考えるまでもなく、マハルを守るカスペン戦闘大隊と敵連邦陽動部隊との戦いだ。そして戦況はもちろん数の多い連邦の有利に展開している。

「お前たちッ、ただちに突撃だ！ あたしのゲルググ・マリーネについできな!! 連邦なんかマハルは指一本触れさせやしないよ!」

誰も指揮官シーマ・ガラハウを止めない。止めても無駄だと知っているのだ。いや、それよりもマハル出身のパイロットは全員、同じ思いである。よりによってマハルへ攻めてきた連邦を生かして帰すつもりはない。

「マハルを護るッ!!」

瞳が戦闘の色に変わったシーマに率いられ、リリー・マルレーンから出たゲルググ8機がいきなり突っ込む。

各員が優れた技量を持つ海兵隊の参戦により、ジオンの新兵たちもやっと落ち着きを取り戻す。後方や側方に頼もしい味方がいるというだけで、ずいぶん違う。

戦況は互角、いや有利に傾いてきた。

シーマ自身も短時間で4機は墜としていく。

そして時間を追うごとに海兵隊の後続ムサイ7隻が到着してはその都度ゲルググを出してくるのだ。海兵隊は全部で27機のゲルグ

グを保有する強力な隊であり、企まずして時間差戦力投入の形になる。

やがてMS戦で勝利し、掃討にかかると同時に連邦艦への攻撃に転じる。

最後は崩壊に追い込んだ。この連邦陽動部隊にとっては既に意義の見出せない戦いであり、連邦本隊から援軍が来る様子もない。そして相手の戦意がそれほど高いとは。

この方面ではジオンが勝利した。

連邦陽動部隊は瓦解して逃げに転じるが、そこを海兵隊が手を緩めず執拗に追撃をかけていく。結局逃げられたのはわずか五隻に過ぎない。

第四十九話 隊長機

ジオンと連邦との主戦場は、ジオン側に取り込んだ連邦艦隊の包囲戦である。

もちろん態勢を見れば、まんまと罠にはめたジオン側が圧倒的に有利、しかし兵力差だけを見るとやはり連邦の方がずっと多いのも事実である。110隻対180隻、だがMS数ならもっと大きな違いがあり、その差は二倍以上だ。

ここは正念場、一気に攻め立てる。

ドズル閣下の本隊も精鋭を繰り出して切り崩しにかかっている。

効果的な砲戦を仕掛ける陰で、力量のあるMS隊を突進させて先手を取ることに成功した。連邦が広くMSを展開し、数を活かした打撃力を活かす前に封じ込めたのだ。連邦のMSは思い切り暴れる前に、自分の艦隊の直掩に回らざるを得なくなった。

そしてドズル閣下の信頼も厚いMSが活躍する。それはシン・マツナガ、押しも押されぬ実力派である。たちまちその力量によって撃墜数を順当に増やしていく。その戦闘スタイルは独特であり、こんな戦場でも落ち着き払った姿だ。ゲルググのビーム・サーベルを正眼に構え、一瞬の接近戦で方を付けるのだ。

そして今、もう一人のエースであるブレニフ・オグスの正確な射撃も素晴らしい。

しかしドズル閣下がその二枚看板ならこちらは何枚看板になるのだろうか。

俺は今、疲れの見えてきたデラーズの艦隊を支援するため、その横に加わりながら盛んに砲撃を撃ちかけている。

敵はもちろんのこと味方でさえ驚く超々精密砲撃が頼もしい。

そして俺は先にMSを発艦させて、既に連邦艦隊へ向かわせている。その四つの隊が期待通りの活躍をすれば連邦艦隊は大きく力を削がれ、早く瓦解へ近づくだらう。

そしていつ見ても俺の擁するMS隊は見事な働きをする。

ツエーンやカヤハワの試作ガルバルディがいい動きをして連邦MS隊に穴を開け、ドム隊を引張る。うまい位置から対艦攻撃が可能になった。取りついたドム隊の四方からの砲撃により、たちまちサラミスが爆散していく。

その調子だ！

連携は充分うまくいっている。連邦の戦意を刈り取るまで続けられ
ばいい。

だが、強敵もまた存在した！

それはシャリア・ブル隊の異変に現れた。

シャリア・ブル隊の新兵が立て続けに三人も墜とされたではないか。しかも、遠くからの狙撃である。

「私が向かおう。皆は下がっているように」

シャリア・ブルは冷静に力量を推し量り、ひとまず新兵たちを安全圏へ退避させた。そして自分とはいえ、試作ガルバルディの高性能を活かして突進する。

狙撃が来た方向は分かっている。連邦のMS隊がいるが、そこからだいぶ先行した一機が見える。突出しているのだろうか。

そして、おそらくあのMSが攻撃してきたのだ。

確かにそうだった。近づく間にもその機から正確な射撃が来るが、最小限の動きで躲す。

やはりシャリア・ブル、地味でもこういう時にNTの片鱗を見せてくれる。もしもNTの素養が全く無ければ無傷では済まなかったはずだ。

いかに優れたエースで、いかに反応速度が速くとも、いったんビームを撃たれてから対処できるものではない。

それでも躲せるからこそNTというものだ。

脅威の元となる一機のMSと対峙するが、そこでシャリア・ブルは驚く。

連邦MSは新型だった。これもまたジム・スナイパーⅡだったの

だ。

「くそっ、接近されたか！ 反応がいちいち遅いんだよ！ この機体は！」

ジム・スナイパーIIのパイロットが文句を言う。それこそ、コックピットに掛けているジャズの音に負けないほどの大声で。

ジムやジム・コマンドよりもずっと速いはずの新鋭機、ジム・スナイパーIIの性能にさえ不満でいっぱいなのだ。それもそのはずである。

今まで乗っていたのがあのフルアーマーガンダムなのだから。

「だがそれでも勝ってやる！ 今来たのはジオンの新しいMSか？ いったいどれほどのものだ！」

そのパイロット、イオ・フレミングは新しく目にするジオンMSに対しては怯むことはない。闘志はある。

そして文句を言ったものの、自分が特別に1機だけこのジム・スナイパーIIを回してもらったことを理解している。この隊の中で唯一だ。それはこれまでガンダムパイロットとして戦果を重ねた実績と、所属するビーハイヴの艦長クローディアの嘆願のおかげである。

接近戦でもジム・スナイパーIIはさすがに高性能だ。

しかしそれはジム・コマンドに比べてであって、ジオンのMSに対してそうとも言えない。ましてや悪いことに今の相手はドムやザクではなく接近戦に優れたギャンの直系機、ガルバルディだ。機体性能的にまだ水を開けられている。

斬り結んでも、わずかに手が遅い。

それでも決着が容易に付かないのは、イオ・フレミングの天賦の才能のおかげだ。

NT能力の差は闘志で補う。

両者は十合も接近戦を交わし合った。

だが、最後はシャリア・ブルの経験がものをいった。シャリア・ブルは長くギャンで接近戦を戦っていたのだ。射撃主体のフルアーマーガンダムに乗っていたイオとは違う。

シャリア・ブルは微妙なフェイントからジム・スナイパーIIを前の

めりにさせ、素早く左側面に回り込む。向き直ってくる前に左肩を斬り払った。

「くそっ！ 機体がガンダムだったら、あつという間に蹴散らしてやるものを……こんな機体じゃダメだ！ ガンダムはどこかにないのか！ 俺は必ずまたガンダムに乗ってやる」

そう言いながらイオ・フレミングは大破した機体を何とか操り、逃げに転じた。

その頃、隊の他のMSには大きな損害が出てしまっている。本来は決して面倒見の悪くないイオだが、つい自分の戦いに熱くなつて他を見るゆとりがなくなっていたのだ。そのことでクローディアに何を言われるだろうか、と考えつつ母艦ビーハイヴへ帰投する。

俺がシャリア・ブルの活躍を注視している間にも、他の隊は活躍を続けている。

特にアクト・ザクに乗るガトーは圧倒的であり、危なげなく撃墜を増やしていく。これに対抗できる連邦MSは無い。

「さすがガトーだ。連邦MSを寄せ付けない。しかし見方を逆にすれば、ガンダムにやられるジオンの側もこういうふうだったんだな」

そして俺はうかつにも失念していた！

下手に余裕を見せるのは早かった。

なぜなら、俺は無双するガンダムを何とか封ずるため、策を講じたのではないか。だったら連邦の方でもガトーのアクト・ザクに対策を立てても何もおかしくないことを。

「あ！ 不味い！ あれは罠だッ！」

俺は気付いた。

連邦も馬鹿ではなかった。

全力で戦っているフリをしながら、ガトーの隊を誘い出している。その先にはサラミス数隻が対空砲火を控え、待ち構えている。充分に引き付けてから対空砲火を十字に撃ち込み、ガトーの隊をメッタ打ちにするつもりだろう。

ガトーもさすがにその罠に気付く。

だが、隊の他のMSを統率しながら急に高機動をかけられない。なんとか隊の方向転換が終わったとたん、やはり対空砲火が一斉に掛けられる。すんでのところだ。ガトーやカリウスは退避できたが、それでも餌食になる新兵たちもいた。

だが、これでも終わりではなかったのだ。

ガトーらが退避した先には、連邦MSでも精鋭を擁する隊が待ち構えていた！

つまり最初から艦砲の罠が避けられた場合に備えて、二段構えで罠を構築していた。

いろいろな要素と条件を冷静に考えた上で、目的のために幾重にも策を講じる。連邦には憎らしいほどの策士がいる。

ガトーの隊が戦いに入るが、連邦のMS隊は連携が際立って良く、むしろ押されている。これは指揮が優れているせいだ。どこかに司令塔が存在するのだろう。

ガトーはその司令塔を潰さねばならない必要を感じた。

「カリウス、ここは頼む。これ以上新兵に犠牲を出させるな」

ガトーが慎重に観察し、やがて勘と経験で連邦MSの隊長機を見定め、その1機のジム・コマンドに向かってガトーが一文字に進んでいく。

面白いことにその隊長機は自分が戦うのではなく、奥で指揮に専念するスタイルを取っていた。ガトーは途中邪魔してくるMSを墜としながら、そこへ尚も迫る。

接近戦の間合いに入る。ガトーとその隊長機が戦いに入るが、意外にも相手は強かった。ガトーに一撃で決めさせることはない。逆に言えば、自分がこの強さを持ちながら後方で策を練るとは、優れた指揮官ではないか。

だがしかし、こうなってしまうえばガトーとそのアクト・ザクに敵うものではない。

やがて、アクト・ザクはその隊長機を袈裟懸けに斬り払い、勝負はついた。

躊躇なくその隊長機から、脱出してくるパイロットが見える。脱出機構の不備からかノーマルスーツで出てくるではないか。諦めを知らない不屈の精神を持ったパイロットのようだ。

しかも、ノーマルスーツはピンクに水色の線、シルエットは女だった。

だがノーマルスーツで戦場にいるのは危険過ぎるのだ。

乗り捨てたジム・コマンドは爆散寸前だ。

ガトーは急機動をかけ、そのパイロットとジム・コマンドの間に入ろうとした。もちろん護るためである。近距離でMSが爆散しようものなら、無数の破片が高速で全方向に飛ぶ。それがいくら小さいものでもまるで弾丸のようにパイロットをズタズタに切り裂いてしまうだろう。

間に合った。

ガトーのアクト・ザクはそのパイロットを抱きかかえるようにして護る。直後、やはりジム・コマンドは爆散したが、その破片がノーマルスーツのパイロットに及ぶことはない。

どうしても恐怖で体を縮めてしまったが、閃光が止み、破片が流れ去ったのを見届けるとパイロットはそこからアクト・ザクを毅然と見つめる。

しかし、連邦とジオンで通信回線は閉じられていて会話はできない。

ガトーはやむなくアクト・ザクのハッチを開けて身振り伝える。「連邦のパイロット、命を大事にしろ。このアクト・ザクに捕虜を入れるスペースはない。連れ帰ることはできないのでここに置いておく。救助を待て」

ガトーはこのことを伝えようとする。

その間、連邦の隊からジムが近寄ってくるのが分かる。ガトーは慌てずハッチを閉め、アクト・ザクの左手で待てのポーズを取る。下手に撃たれたら、アクト・ザクはともかくノーマルスーツが焼かれてし

まうからだ。そしてガトーはすぐに離脱した。

その場に優しく静止状態で置かれたノーマルスーツのパイロット、ライラ・ミラ・ライラはやってきた味方に救助されることになる。

「いったい、何なのだ。あの男は。戦場で敵パイロットなど撃ち殺すに決まってる。MSの爆散に巻き込まれるならほっておくだろう。護るはずがない。あの男は気がおかしいのか？ 腕は立つが馬鹿なのか？」

ライラ・ミラ・ライラはしばらくそのことを考える。あのジオンの新鋭機アクト・ザクのパイロットは何なのか。

自分の策を無にするほどの技量のこと、戦果や損失のこと、今は頭がない。

「次に会う時には墜としてやる！ そして、わたしの命を助けたことを後悔させてやる！」

だがライラの内心は違う。

次に会った時、どうして敵部隊のパイロットである自分を助けたのか、理由を聞く方が先だと思っていたのだ。

そして一言でいい、感謝を伝えたかった。

あの目元が涼しい男に。

バイザーに光の反射がなかったほんのわずかな部分で、それだけが見えていた。垣間見えた左目の記憶で心は一杯だ。

ライラは自分でもこんな戦争の中、策士として生きているのがいいことなのか分からない。能力が発揮できるからそうしているだけだ。ジオンは敵、もちろんそれに納得しているから軍にいる。

しかし殺し合うより、生かし合う方がよほどいいことなのも分かっている。

好んで人を殺すほど腐りたくはないと思っていたのだ。

第五十話 追撃戦へ

ジオンMSが連邦の直掩MSをいなし、連邦艦へ近づいては有効弾を叩き込む。ドムのジャイアント・バズが最大限の効果を發揮する場面だ。二、三発も食らって大破し、コントロールを失うか、エンジンが停止してしまった連邦艦は艦列から脱落する。そうなればジオン側の艦砲の餌食になる運命が待っている。

戦いの趨勢は次第に明らかになってきた。

やはり包囲という絶対有利の態勢が数の不足を帳消しにしたのだ。敵味方損失比のカウントでジオンの優位が三倍を超え、大きくリードしている。このまま行けば加速度的に差が広がり、最後はジオン艦隊だけが残る計算になる。

それぞれの隊同士での戦いを見ても、その数字が嘘ではないことを証明するようにほとんどのケースでジオン側が勝利している。ここに至って連邦の混乱と士気の低下は顕著だ。

連邦指揮官、ダグラス・ベーダー中將は刻々と不利になる戦況を見ながら、それでもジオンの隙を見て突破を狙う。

「戦いはまだ終わっていない！ 慌てるな！ 損傷を受けて速度を保てなくなった艦は乗員移乗後、廃棄しろ。勿体ないと思わず思い切つてやれ。まだこちらには120隻はある。機動力確保が何より優先だ」

しかし、ジオンの中でも最も活発に動いていた隊がついに防衛陣を突破し、司令部付近にまで近づく。

「何だ!? 敵の中に赤いMSがいるぞ！ ま、まさか、赤い彗星のシャアがここに来たのか！ くっ、これは厄介だな」

だがそれはシャアではなかった。

見えたのはキマイラ隊、そしてジョニー・ライデンだ。

「俺は真紅の稲妻ツ！ 勝負したいMSはいるか！ いるなら向かって来い！」

そう言いながら、司令部直属のMSを相手取り、真紅に似合った派手な戦いをしている。よく見れば違いがわかるのだが、ぱつと目にはシヤアと区別がつかない。赤いとしか見えななのだ。それはどちらに不幸なのか、あるいはどちらにも不幸なことか。

けれどジョニー・ライデンとアクト・ザクの動き、そして戦果は伊達ではなかった。ついでに言えばキマイラ隊もさすがにエース部隊であり、数の濁流に押し流されることさえなければ期待通りの活躍を見せていく。各員優れた技量を持つ28機もの強力なMS部隊である。

ダグラス・ベーターはやむを得ず苦渋の決断をした。

「ジオンは憎らしいほど隙がなく、このまま頭を抑えられてのたうち回っても罅が明かない。先にこっちが消滅するだけだ。無念だがこの戦いは諦め、次に繋げる。損害を少なくして戦場を離脱しよう。各隊に通達！ 各中隊ごとに分散し、それぞれが別の方向へ急速離脱せよ」

普通なら陣形をコンパクトにすべきだが、この場合は下手にまとまっているとかえって横撃で消耗させられるだけだ。ダグラス・ベーターは合理的な撤退に転じた。瓦解ではなく規律を保った上で小集団の同時離脱を図る。これならジオンはいつまでも包囲はできない。

しかしこの時点で連邦の敗北が確定した。

結果的にジーン・コリニーが急ぎ目指していた作戦、つまり包囲網内外からの挟撃は間に合わなかった。シヤアによる足止めが最後まで響いたのだ。ジーン・コリニー指揮下の艦隊がジオンの陣に突入しようとしたところで、ダグラス・ベーターら取り込められた味方がバラバラに抜け出てきたのが見えた。

「くそっ！ 遅かったか…… 負けは負けだ。しかし、出直してくるだけだ！」

こうなれば継戦は断念する。ジーン・コリニーも後退に転じながら味方の撤退を支援しようとした。今できるのは損失を減らすことである。

ジーン・コリニーは連邦艦隊の最後尾についてこれを守る。

「ドズル閣下、連邦は総退却の様様！」

「そうか、奴らは諦めたか！ 勝ったな。ジオン本国はこれで守れた」

ジオンの各艦、各将兵はもちろん勝利に沸き立つ！

「ジーク、ジオン！ ジオンに栄光あれ！！ ドズル大将、万歳！」

各艦の中で勝利の声が響いてやまない。歓喜の叫びが木霊する。

この大事な本国会戦、数で大きく勝る連邦軍に大打撃を与え、敗走せしめたのだ。各艦、各MSの奮戦と、折れない士気、そして優れた戦術のおかげだ。

この勝利の余韻の中、艦の応急修理、行方不明者の搜索及び救出、今すぐやらなくてはならないことは多い。物資の集計、航路デブリマップの作製など、やるべきことは山ほどある。

しかしここでドズルへキシリアから通信が入った。

「ドズルの兄者！ ここで気を緩めてはなりません。一気に追撃を！」

「何だキシリア、そうしたいのは山々だが…… 勝ち切ったとはいえわが軍も消耗は大きい。当面向こうから仕掛けられなくなった以上、無理をすることはない。下手に追って逆撃に遭えば勝利がフィになるのだぞ」

「いえ、ここで無理しなかったらいつするのです」

「…… キシリア、何か、そうすべき理由があるのか」

ドズルもキシリアの差し迫った態度に、耳を傾ける気になった。おそらく理由があるのだ。

「判明した情報によれば、連邦の指揮官はジーン・コリニーとダグラス・ベーダー、連邦内でも相当のタカ派将校だと。そしてこの力押しでの大攻勢は正にその証明。だからこそ今、何としても叩けるだけ叩き、連邦内でタカ派の居場所を失くさせることで、今後長く連邦を封じておけるのです」

「…… なるほどな。この際政治的な意味で徹底的に叩くのか。タカ派の面目を潰せば連邦に積極姿勢が無くなり後がやりやすくなる」

キシリアの思考は常に政治にある。

今後、ジオンがコンスコンの言うエネルギー枯渇作戦を取るにせよ、あるいは和平をもちかけるにせよ、邪魔なのは連邦軍の威勢のいいタカ派だ。当面彼らに要らぬちよっかいを掛けられたくない。この会戦の大敗北と人的損害で発言権を失わせればそれがかなうのだ。今、無理を承知で追撃をすることは具体的な戦果以上の収穫をもたらす。キシリアは連邦内の考えも一枚岩でないことを見通している。「分かった、キシリア。ここの後始末は俺がやっておく。お前の艦隊と、カスペンの隊、おまけにコンスコンの艦隊も出してやるから追撃をかける。ただし無理はするな。ルナツーなどが伏兵を出していたら厄介だ」

そしてジオン側は執拗な追撃に出る。

追撃に参加する艦隊を集めつつ、連邦艦隊を追う。

連邦の側では、いかに生産力があるとはいえこれだけの艦隊を自沈というのは考えられない。

撤退先を考えた場合、ア・バオア・クーはジオン本国に近すぎて無理だ。しかも、ただでさえ不足している補給物資の問題から見てもあり得ない。といってグラナダはその成り立ち上都市に近く、本格的な軍事要塞ではない以上防衛設備が少ないため、今の傷ついた艦隊の収容には適切ではない。

おそらく連邦艦隊はソロモン方向へ撤退すると推定された。

そのためソーラ・レイ近辺にいたカスペン准将の技術大隊とキシリア麾下の海兵隊は先回りをしてソロモン直前での伏兵となる。

元々このあたりの宙域はジオンにとって知り尽くしたところだ。追撃も先回りも、最短を進むことができる。

「整備は終わったか？ 終わった艦から出撃だ。まずはキシリア閣下の各隊と歩調を合わせて攻勢に出るように。追撃の要点は、破れかぶれになった相手に対し、巻き込まれず整然と対処することだ。相手の戦力をひたすら削りとることに専念し、逆撃の気配を感じれば直ちに

距離を取り直せ」

俺はこの追撃戦に参加を命じられている。正直疲れているが、追撃は可能だった。そこにも実は理由がある。

セシリアがきちんと最後の予備物資を計算して確保しているのだ。

いやあ、有能な主計部は役に立つ！

そしてついに追撃部隊は連邦艦隊の後背を捉えた！

この圧倒的に有利な位置から砲撃戦が始まった。

探知できる範囲での連邦艦は80隻余り、追うジオン側は60隻である。思ったより連邦艦が少ないのが不思議だが、離れている艦もあるのだろう。

それでも連邦艦の数はこちらより多く油断はならない。しかし、この態勢を保つ限り連邦側は砲を有効に使えないのだ。予想通り、連邦はたまたまずMSを出してこちらの鋭鋒を挫く一撃を加えようとするが、そこはじっくりと迎撃させてもらう。

俺の艦隊へ近づくMSもあるが、クスコ・アルのエルメスがそれを通さない。その索敵とアウトレンジ攻撃から逃れられる連邦MSなど多くはなく、あつたとしてもシャリア・ブルの隊が片付ける。

タイミングを見て俺は艦隊を小刻みに前進させ、連邦艦を狙い撃つ。

横を見ればキシリア閣下の各部隊も順調に戦っている。

特に、シャア准将の部隊とキマイラ隊が競うように攻勢をかけているのが見えた。いや本当に競っているのだろう。おそらく一方だけが無駄に意識しているのだろうが。

その頃、もちろん連邦艦隊司令部は沈痛な中であつた。

「MS未帰還多数、空母部隊も損失大！ ジャマイカン・ダニンガン大尉戦死！ バスク・オム中佐生死不明！」

「…… 仕方ない。このままではジオンの追撃を振り切れない。一度は艦首回頭し、大規模に逆撃を加えなくてはならん。この司令部と直掩艦隊は反転！ 時計回りに回転しながら敵に一撃を与える」

ジーン・コリニーは勇猛にも自らと司令部が反撃の役割を買って出

た。計十五隻が揃って出る。

その意図も戦法もさすがと言うべきものだ。

「ジオンに連邦の意地を見せてやれ！ 撃って撃って撃ちまくれ！」
楽な追撃戦と思っとうかつにも突出していたジオン艦が薙ぎ払われてしまう。さすがに連邦司令部直掩は精鋭、連射も狙撃も一流だ。これに怯み、艦列を乱したジオン艦隊が見える。おそらくキシリア閣下のデラミン准将の艦隊だろう。

だが、この連邦の逆撃も俺の艦隊の近くまで来たのが最後だ。

「挑発に乗らず、ゆっくり有効射程外まで退避だ。連邦の無茶な逆撃はいつまでも続けられるもんじやない。タイミングを見てもう一度押し返す」

俺は連邦の最後の攻勢に耐え、勝機を待つ。

「よし・今だ！ ダリル・ローレンツの主砲を撃て！ それを合図に再攻勢だ」

メガ粒子砲の輝跡が宇宙に直線を描く。

それが連邦の最後の抵抗を撃砕していく。

戦いはもう終局に入った。奮戦した連邦司令部はわずか三隻を残して失われた。だがそのおかげで最大限の連邦艦が追撃を振り切って逃げる事ができたのだ。

「……一応の役割は果たせたか。降伏勧告は無視しろ」

ジョン・コリニーは悔しいながらも、最後にほんのわずかの満足を得た。ジオンを慌てさせる猛将の意地を貫いた。

その最後の三隻はジオン側に包囲されつつある。

それに対する俺としては、心意気を充分に理解できる。戦いには敗れたが、指揮官は責任を取って散ろうとしている。立派なものだ。

救ってやりたいのは山々だが、続けての降伏勧告を無視された以上、エネルギー切れで相手の砲火が収まるのを待つて集中攻撃をかけるしかない。いや、それが猛将へかける礼儀でもある。

包囲した俺の艦隊は停止し、MSを全て出してマゼラン級戦艦の間

合いをかいくぐらせ、所定の位置に並ばせる。ツエーンのドム隊が合図とともにジャイアント・バズをつるべ打ちに放つ。

連邦艦隊旗艦へ向け、左右から二十を超す弾丸が放たれ、艦体に吸い込まれた。一瞬おいて、まばゆい輝きを放ち爆散する。

「連邦、万歳!!」

ジーン・コリニーはタカ派軍人らしく見事な最期を遂げた。

ちなみに直前、脱出シャトルも出ていたが、それにはジャミトフ・ハイマンらの参謀が乗っていた。だがしかし、運悪くその爆散の破片に直撃され、沈むことになった。

事実上、それが本国会戦の末尾になる。

一方、ソロモン近辺で連邦の残存艦隊を叩くべく待ち構えていたカスペン准将とシーマ・ガラハウは空振りに終わっていた。

「おかしい…… 獲物がこんなに少ないとは…… しかも長くは航行できなほほど損傷した連邦艦ばかりやってくる。してやられた! 奴らはソロモンに撤退するのではなかったのか!」

その通り、事前にジーン・コリニーとダグラス・ベーターはジオンの裏をかいて、逃走先を何とルナツーに設定していたのだ。

もちろん本国会戦のあったサイド3近辺とルナツーはあまりに遠い。

しかし、だからこそジオン側の想定を外すことができた。

各補給ポイントの情報を全ての艦で共有し、乏しい物資を互いにやり繰りし、十日もの日をかけてルナツーに辿り着く。何とか指揮系統はダグラス・ベーターが守り、ジーン・コリニーとは違う形で責任を全うしようと奮闘した。

「ルナツーへようこそ。ゆっくりおくつろぎ下さい、ベーター中將。戦いのことをいったんお忘れになったらいかがです? 仮にジオンがここまで追ってきたとしても、我らに全てお任せを」

「慇懃無礼が透けて見えるぞ、ワイアット中將」

「いいえとんでもない。勇戦を尊敬しているのです。それに私もジーン

ン・コリニー中将のこと、残念に思っております。連邦にとってあまりに惜しい将でした」

「……よく口が回るものだ。皮肉にしか聞こえないのは俺の受け取り方が悪いのか」

ダグラス・ベーダーはルナツーに着いても終始苦虫を噛み潰した顔をしている。そのの相手をするグリーン・ワイアットは嫌な顔をせず丁寧な態度に終始する。

グリーン・ワイアットとダグラス・ベーダーは同じ中将だが、任官順で見たらダグラス・ベーダーの方が上だからだ。

ただしそうは言うもののグリーン・ワイアットは心中で笑いが止まらない。

その内心の笑みが外見に出ないように気を遣うが、完全に成功しているとは言い難い。ダグラス・ベーダーもそこを見て取ったのだ。

会戦の結果はグリーン・ワイアットにいいことづくめである。

何しろZION・コリニーは戦死、ダグラス・ベーダーも敗戦の責で降格になるか、そうでなくとも発言力は大いに削られるだろう。彼らの急進派はもはや派閥として死に体になるのは明らかだ。

そうなれば、グリーン・ワイアットが一気に主流に躍り出るチャンスである。急進派を取り込み、中道派を切り崩し、まとめる。その上で穏健派のゴップ大将と裏取引でもすれば連邦軍内での地位は盤石だ。

いや、この戦争が続く限り、地球連邦軍の実質的な最上位とも言えるのではないか。

手持ちの戦力を見ても、わざわざ残存艦隊はルナツーにまとめて来てくれた。この点は死んだZION・コリニーに感謝するしかない。今や連邦宇宙戦力のほとんどはグリーン・ワイアットの指揮下に入った。

キシリアが強行させたZIONの長駆追撃戦は大成功を収めたが、それがZIONにとって吉と出るのかはまだ分からない。

「ステファン・ヘボン君、願ってもない展開になったようだね。これは予想以上に嬉しい誤算だよ。ああそうだ、先の会戦の詳細を知りたい。誰がどう動いた結果、連邦が負けたのか知る必要があるからね」
記録映像の再生をするしばらくの時間の後、グリーン・ワイアットはため息を漏らした。

「……これほどとは……ジオンの戦術は凄いというほかない。ジーン・コリニーも決して悪くなかったし、ダグラス・ベーカーもうまくやった。定石を外さず、柔軟性も備える力量があった。だがしかし、ジオンには彼らを大きく超える策士がいたのだ。偶然などではなく連邦は負けるべくして負けたんだよ、ステファン・ヘボン君」

もうこの日の紅茶の時間を過ぎていた。それを忘れるとは珍しいこともあるものだ。ステファン・ヘボン少将は内心驚く。更に言えばその上官は紅茶でリラックスどころか戦いの雰囲気をもとつていないか。

グリーン・ワイアットは更に考え込んだあげく、独り言のように言う。

「これに勝たねばならないか……この恐るべき戦術家に。連邦の智将と言われたこの私だ。負けるとは思わない。しかし、たぶん簡単にはいかないだろうね」

それは連邦とジオン、共に火花を散らす戦いの幕開けになる。

今後の主役となるこの二人、連邦のグリーン・ワイアットとジオンのコンスコンが互いに策略を巡らし、撃ち合う。

戦いの次元は、一つ上へ上がった。

第五十一話 グラナダ攻略

もう一つ、グリーン・ワイアットには考えることがあった。

「そういえば、ジョン・コーウエンの奴はどうしているのだろう。グラナダも危ないということを理解しているのか」

グリーン・ワイアットは明晰な頭脳で頭に戦略図を描き、ジオンの次の狙いを読もうとしていた。

ジオンは大会戦に勝利した今、このまま連邦を押し戻すことを考えるか…… ア・バオア・クーやソロモンを奪い返して。

いや、そうではない。

それらは重要な防衛拠点ではあるが、それ以上のものではない。なるほどジオン本国を守る盾にはなる。しかしそれで戦争には勝てない。ジオンにとって戦略的には生産工場と通商港湾をきっちり抑えることが重要になるのだ。

そう考えるとグラナダが狙われる公算が大きい。

本心を言えば、ジョン・コーウエンにも失脚してもらいたい。グリーン・ワイアットに隔意を見せるジョン・コーウエンもまた潰しておきたいのは山々だ。グラナダでジオンと勝手に戦って死んでくれるのが理想的である。

しかし、グリーン・ワイアットも連邦軍人としての本分はわきまえている。グラナダはジオンにとって重要なものと同様に、連邦にとっても重要なところであり、陥とさせてはならない。

この先、戦争が終わった後のことも考える。

位置的なことから、ルナツーとグラナダの二つを軍事的に拡充し、スペースノイドを抑えるのが肝心だ。

ジオンなどがこんな戦争を起こしてしまったのは、元をただせば直接戦力をコロニー近くに配置しなかったせいなのだ。どうせ地球連邦に逆らう度胸などないと高を括り、コロニーに駐留している連邦軍は過少にすぎた。本当にコロニーが戦う気になった時に全く無力だったのだ。そしてティアンムなどのいたルナツーはサイド7を除

く各コロニーからは遠すぎたため初動があまりに遅くなった。

あらゆる意味でグラナダこそ連邦としては戦略的に保持しておくべきである。

「ステファン・ヘボン君。一応ジョン・コーウエン少将に連絡してくれたまえ。ジオンの動きに充分注意するように、そしてこちらも牽制程度はする、と」

ただし、ルナツーからグラナダへ応援艦隊を派遣することはできない。

あまりに遠すぎるのだ。物理的距離、こればかりはグリーン・ワイアットもどうにもできない。

厳密に言えば、絶対に出せない訳ではないが、ジオンの艦隊規模などの情報がないうちに応援を出したらそれこそ戦力の逐次投入にもなりかねない。そうなれば目的を遂げられないどころか損害ばかり目立つ結果になる。そうでなくとも偽情報などで釣りだされ、途中で待ち伏せになど遭ったらそれこそ目も当てられない失態になるだろう。

ワイアットの懸念は当たっていた。

ジオンではその頃、次の一手はグラナダ奪還と決めて動いていた。その戦略方針はマ・クベ准将がグラナダの重要性を説いた時から既に決まっていたからだ。そのためジオンの動きは誰の予想よりも素早かった。

連邦艦隊への長駆追撃に出たキシリアの艦隊、カスペン准将、コンスコン中将を除くジオンの戦力、つまりドズル大将の本隊とテラーズ准将の艦隊は補給と修理を済ませてグラナダ攻略のため出撃した。

グラナダに駐留している連邦艦隊は三十から四十隻と見積もられた。

それに対し、ジオン側は併せて六十隻以上で攻める。充分に勝算が見込める戦力比になる。

俺が追撃戦を終えてジオン本国近くに戻ってきた時、ドズル閣下と

デラーズ准将の出撃を知った。

ドズル閣下のメッセージが残されている。

充分に補給と休養を済ませたら、キシリア閣下と共にグラナダに来るように、だ。元々グラナダはキシリア閣下の領分なので再び任せ、ドズル閣下とデラーズ准将はグラナダに長居しないつもりなのだろう。

もう一つ、俺は面白いものを発見した！

ドズル閣下は本国会戦の終了後、勝利演説を行っていたのだ。本人はかなり嫌がっているのが分かる。ギレン総帥なら喜んで演説したろうが、ドズル閣下がそういうのが苦手なことは自他共に知っている。

半分怖い物見たさに記録映像を再生した。

「…… 本当に俺が演説か？ 俺は兄貴のように上手い演説なんかできんが、承知の上なら聞いてくれ。皆知つての通り、ジオンはこの本国会戦に勝った。連邦艦隊はジオンの力を思い知り、尻尾を巻いて逃げた。ソロモンやア・バオア・クー以来、待ちに待ったジオンの勝利だ！ 本国にもう連邦の手は伸びない」

おお、ドズル閣下、意外と言ったら失礼だが出だしはまともな演説ではないか！

「……………」

しかし、この後の言葉が続かない。

考えがまとまらないのか？ 丸々三十秒が過ぎ、だんだん不安になつたところでいきなり始まる。

「つまり、俺は嬉しいんだ！ 本当に嬉しいぞ！ お前たちも嬉しいだろう！ みんな嬉しい！ いや待て連邦は嬉しくないな。ま、どうでもいい」

ええええ!? ここ笑うところ？

本当に思うまま述べている。

「とにかくだ、俺は感謝している。みんなが頑張ったおかげだ。そしてこれからも勝つ！ ジオンの力を集め、どこまでも勝つ！ なにが

なんでも勝つ！」

ドズル閣下らしい勢いの良さだ。

生で聞いていればその音量に圧倒されたかもしれないな。

「なぜなら、俺たちは正義だ！ ジオンが正義なんだ！ その理由は、俺にもよく分からん！ 頭が悪い上に、兄貴の話を真面目に聞いてなかったからな。知りたい奴がいたら後でキシリアにでも聞いてくれ」
なんだそりゃ！ 俺は腹を抱えて笑った。

「あ、コンスコンでもいいぞ。奴なら俺よりはマシだ」

俺に振らないで下さい。お願いします！

てかドズル閣下と比較されるレベル……

「だが、これからだ。戦いは続く。皆、力を貸してくれ。俺たちは皆ジオン、これからもジオンだ！ それだけでいい。俺たちはやるぞ！ 必ず連邦を倒す!!」

それで終わってしまった。

ドズル閣下の演説はグダグダだ。

実にドズル閣下らしく不器用なものだ。正直意味不明である。本人の言う通り、亡きギレン総帥とは演説の巧みさにおいて雲泥の差がある。俺も途中で大いに笑ってしまった。

しかし最後は不思議と胸に響いたのだ！

力が湧いてくる。心が元気になる。聞いていた者は皆そう思ったろう。

俺もまたドズル閣下への忠誠を厚くした。

一方、ドズル大将とデラーズ准将はグラナダを分厚く包囲した。戦力差を活かした定石だ。

これに対しジョン・コーウエンもまた一点突破という定石で応える。

むろん、ドズルもデラーズもそれを許すほど下手な用兵家ではない。しかもジオンの繰り出すエース、シン・マツナガとラカン・ダカランは期待に応え、連邦を押し返すことに成功する。

こうなるともうジョン・コーウエンには手ががない。多少戦いを引き

延ばすくらいが精一杯で、だがそれをしたところで早期に応援が見込めない以上意味が無い。

ドズルに向け、グラナダから通信が入る。

「グラナダ駐留連邦軍司令官ジョン・コーウエン中将だ。ジオンの指揮官と話がしたい」

「ジオンのドズル・ザビ大将だ。降伏の話か？」

「降伏などはしない！ 交渉だ。そこを勘違いしないでもらいたい」

「交渉など笑止ではないか。この態勢から降伏以外、何の交渉だ」

「二度も言わせるな。降伏ではない。こちらも武人、戦って死ぬのを躊躇しているわけではないのだ！」

「……む、そうか。失礼した。では何の話なんだ」

ジョン・コーウエンは堂々として卑屈なところがない。ドズルもまた話を聞こうという気になった。

「このグラナダには民間人も多い。こちらが徹底抗戦に持ち込み、戦い続ければグラナダは破壊され兵はおろか民間人まで被害が及ぶだろう。こちらがグラナダのメイン反応炉を自爆させなどしたら確実にそうなる。そういった事態を避けたい。そこでこちらの脱出を認めて発砲しないでくれれば、グラナダの施設を破壊したり、トラップを仕掛けたりしないことを約束する。むろん、こちらの首くらいは差し出してやるが、他は逃がしてやってくれ」

それは降伏とは違う、無血開城の取り引きだった。自分以外の連邦兵の脱出を認め、無用な攻撃をしなければ代わりに施設の破壊をしないというものだ。

「……ジョン・コーウエンとやら、そうすれば自分は捕虜になり、それだけならまだしも連邦軍内では戦いを避けた卑怯者と呼ばれるぞ。下手をしたら命冥加にもあえて早めに捕虜になったと誇られかねん」
「そんな個人の名誉など、部下の命には代えられないことだ。まして、大勢の民間人に迷惑はかけられん。人を守るのが軍人だからな」

ここでドズル閣下とデラーズ准将が話し合う。

「どうするデラーズ。向こうのジョン・コーウエンとやらも立派な奴だ。そこまで部下と民間人のことを考えているとは。ここは話に乗

るか」

「ドズル閣下、その意見に小官も賛成です」

あつさり意見は一致した。

敢えて言えば、ドズルとエギーユ・デラーズには共通する項目がある。それは「武人」というところだ。

武人は戦い抜くべき時には恐れを知らず戦い抜く。死んで魂になつてさえ戦う。

しかし、相手もまた武人であることを知った時、戦う相手にも敬意を払う。そして無駄な殺生はせず、真摯に対応する。そういう性質がある。

もしここにキシリアがいれば結果はまた別になつただろう。取引材料にするため他にも将官を要求するか、交渉を長引かせて焦りを誘うか、他にも何かの手を使ったかもしれない。ただし逆に連邦側が態度を硬化させ、死に物狂いで戦った可能性もある。そうなればジオン側の損害も少ないものではなく、第一グラナダが灰燼に帰してしまえば元も子もない。

グラナダの無血開城は受け入れられた。

ジョン・コーウエン中将を残し、グラナダ駐留連邦艦隊は粛々と出て行く。その艦隊はいったんソロモン方面に向かったようだが、最終的にルナツーなのかもしれない。

ともあれグラナダはたいした犠牲も無しにジオンの手に戻つただ。

ただしここから動乱が起きるとは誰も予想しなかった。

それには月面の他の都市、主にフォン・ブラウン市が関係している。

第三章 未来への道標

第五十二話 フォン・ブラウンの学徒兵

月面にはグラナダの他にもいくつか都市があり、その一番大きなものはフォン・ブラウン市だ。

月面ではグラナダとちょうど正反対の位置に作られている。この二つの都市は戦争でまるで異なる運命を辿ることになった。開戦初期、ジオンは大攻勢をかけてグラナダをあつさり手に入れている。ジオンとしてはまだア・バオア・クーなどが充分に基地化されていなかった時期であり、本国に近い月表面に拠点を得る必要があった。

しかし、もう一つの都市フォン・ブラウンは攻撃を受けることなく依然として連邦の勢力下であり続けたのだ。位置が微妙に遠く、戦略的に優先順位が低かったので目標にされることになかったということだ。

もちろんそれは表向きの理由である。実際は民生、軍需問わず多くの工業製品に組み込まれているアナハイム・エレクトロニクス社製の部品の供給を断ちたくないというジオン側の思惑が大きい。その部品、あるいは部品の部品は深く根を張っている。このことを大つぴらに言えないのは、アナハイム・エレクトロニクスが連邦政府とのつながりを断たれそうになってしまえば、返す刀でジオンとの関係も断つてしまう恐れがあるからだ。

もちろんそれさえ実は表向きの理由かもしれない。その深淵なところは普通には知られない。

ともあれ、そのアナハイム・エレクトロニクスは不思議にもフォン・ブラウンにその中枢を置き続けて動かない。その月の低重力がやはり先端技術開発や高度工業を発展させるのに最適だからと説明されている。

だが、フォン・ブラウン市に緊張が無いといったらそれは嘘だ。

なんといっても月は地球に比べたら直径にして1/4しかない。いくら反対の位置とはいえ、例えば巡航艦のフルスピードなら数時間で到達できるほどの距離であり、軍事的に最前線ともいえる。

特にフォン・ブラウンの市民レベルでは、ジオンがコロニー落としや毒ガス使用などをしたというニュースが伝えられる度にどんどん不安が増していく。

ジオンは何をするかわからず、突発的にとんでもないことでもやるかもしれない。ある日突然フォン・ブラウン市が廃墟ということもありえる。ここは逃げ場のない月表面、市民の悪夢は尽きることがない。

そんな折、連邦がやっとグラナダからジオンを追い出したという朗報が届いた。市民はそれでやっと安堵できたというのに、またもやそれが危うくなった。

ここでフォン・ブラウンがグラナダの状況を座して見ているはずがない。

独自に義勇兵を募り、応じた若者たちを連邦軍に準ずるものとしてグラナダへ送り込んでいたのだ。アナハイム・エレクトロニクスはそれについて我関せずの態度だった。

「ちよつと、あんた本当に行くの？ 何のつもりか分からないけど危ないわよ！」

「忠告は感謝するわ。でも、もう決めたの。フォン・ブラウンを守るため、学徒兵の一人になってグラナダへ行くわ」

「行つたって何の役に立つのよ！ 役に立たない内に死んだらどうするの！ というかあなた、もしかして死にたいの？」

「そんなふうに見える？ まさか死にたくないわよ。でも、絶対死なない、なんてことあるわけないわね。それが戦場というものなんだから」

「やっぱり…… 昔からそういうところがあったわ。レコアには」

ジオンが無血のまま接收したグラナダにはいったんどズル閣下の

艦隊だけ残り、デラーズ准将は茨の園へ戻っている。

ちなみにこの頃には茨の園も基地として十分な規模になった。急ピッチで拡充されたのだ。それは艦隊運用のことばかりではなく、将兵も狭い艦ばかりにはいられず、基地で十分な息抜きができればストレスが溜まってしまいうからである。

そして俺はというと、なぜかパープル・ウイドウの艦橋にいる！

キシリア閣下の艦隊と共にグラナダへ進発したのだが早々にキシリア閣下に呼び出されてしまったからだ。

「コンスコン中将」

「は、はいっ!!」

「……何を怯えている」

正直、怖い。

用件は何だろう。悪いことか。

「このパープル・ウイドウまで呼び出してすまん。私の用事と言うのは、先のフラナガン機関のことだが」

「は、や、やっぱり!? いえ閣下、それはその、特に閣下の機関だからという意図は無く、ええ完全に無く……」

ああっ、キシリア閣下、やはり覚えていらっしやっただか！

まずい！ ここで吊るし上げのピンチだとは。

「そんなことはどうでもいい！ コンスコン中将。何か誤解しているようだがフラナガン機関についての遺恨などもうありはしない」

「それならよいのですが……」

「まったく見事に潰してくれて突撃機動軍と仮にもザビ家の一員である私の顔に思い切り泥を塗られたようなものだが、それを言いたいのではない」

「ほ、本当に……」

「くどい！ 話が進まん」

「……………」

「言いたいことは単純だ。フラナガン機関からカーラ・ミツチャム教授を連れ出しているだろう。彼女を貸してはもらえないか。こちら

にア・バオア・クーの戦いで負傷兵が出ているのだが、あまりに重傷過ぎてこのままでは完全治癒しない。だがカーラ・ミツチャム教授の力があれば、なんとかなる可能性がある」

「何ですと？ 負傷兵の治療を？」

「治したいのは我が突撃機動軍サイクロプス隊の隊長ほか数名だ」

「そ、そういうことでしたら、協力を惜しみません。私からもカーラ教授にお願ひし、了承を得たら直ぐに治療に向かわせましょう」

「よろしく頼む」

はあ、死ぬかと思った。気にしてないなんて絶対嘘だろ。

だが負傷兵の治療の話であれば一も二もなく協力させてもらう。

そして、話はもう少しだけあった。パープル・ウイドウを離れるため艦橋から退室しようとした時、何気なく言われたのだ。

「…… そうだ、コンスコン中将。そちらの艦隊にアナベル・ガトーというエース・パイロットがいるだろう。詳しく調べさせてもらった。戦果もそうだが、良い奴らしいな。いや、どうということはないのだが…… 実は私はこちらのシーマ・ガラハウ中佐に多少の負い目があるのだな。こんな戦争の最中だ、彼女に多少の花を持たせてやっても良いかと思っただけだ。舌足らずな説明になったが、意味が分かるか」

「……」

「まあ、つまらん戯れ言だ。コンスコン中将、気にするな」

無茶苦茶気にするよ！

そう言われたって無理、というか何にもできん。なるようにしかないものだ。

さて、俺が自分のテイベに戻ってから間もなく艦隊はグラナダに着く。

ドズル閣下は入れ替わりにジオン本国へ向かう。

俺の仕事は、キシリア閣下が円滑にまたグラナダを根拠地にするのを補佐することだ。物資の目録や生産設備の精査などが終わり次第、俺もグラナダを後にする予定である。本当なら俺などがそんな作業

をすることなく、マ・クベ准将がいればそれでいいようなものだが、ジョンは工業生産を一刻も早く行わなければならぬ関係上人手が多い方がいい。

最初にやらねばならないのは、連邦が設備に何かの破壊工作をしていないかチェックすることだ。

ドズル閣下の話を伝え聞いた限りではジョン・コーウエンは信頼できる将であり、連邦がそういうことを行った可能性は限りなく低い。それでもチェックしないまま使うことはできない。

早速技術員をあちこちの工業施設に派遣し決まった作業に当てる。確かに爆発物などは存在せず、一安心する。これなら早めに生産を始めるられるだろう。

しかし、直ぐにそれどころではない事態になる！

「コンスコン司令、大変です!! 技術員三人が撃たれました! いずれも重傷です!」

「何!?! 副官、詳しい報告を頼む」

そして上がってきた報告は予想よりも深刻だった。

「これは、偶発的な軋轢などではない。計画された狙撃だ! 副官、このグラナダに連邦のゲリラがいるぞ! 問題はどれほどの規模か、どれほど本気か、だ。それに応じて狩りようも変わってくる」

「新しい情報です! 宿舎近くに爆発、携行型の小型ロケット弾と思われるます!」

「何だと! そこまで…… やむを得ん。散らばっている一般兵を下がらせる! 向こうが重火器を持っていると判明した以上、下手な警備行動はかえってゲリラの思う壺、危険だ」

ゲリラとはまた厄介だ。

グラナダは元が都市であるだけに構造も複雑で、しかも民間区画が多い。更にその民間人もゲリラに協力している恐れがある。

深刻なのは先の無血開城での信頼関係にヒビが入ることだ。俺もジョン・コーウエン少将は関わっていないものと思っている。ただし、全員がそう思うかといえば別だろう。

このまま続けばジョン・コーウエン少将とドズル閣下の評判が落ちてしまうが、問題はそれにとどまらない。

戦争でジオンと連邦は深く傷つき、相互不信は根強い。将来和平が結ばれても感情的なところで納得できなければ和平は続かない。今回の無血開城のような小さな信頼を注意深く育てていけば、やがては平和の実が成ろうというものだ。ゲリラはその大きなところを分かっているだろうか。

俺はゲリラをあらゆる意味で早めに解決すべきと断じた。

ただしそうしている間に散発的な襲撃でまたもや被害が続出する。

「くそつ、しかしゲリラに飛行装置や装甲車両などは無いようだな…… 兵の被害を防ぐにはやはりMSを出すしかないか」

俺は手持ちのMSを出すも、皆は直接戦闘には慣れていないが、細心の注意のいるゲリラ対策には向いていない。神経ばかり使い、せっかく対面する希少なチャンスを手損でもあつという間に隠れられて成果を出せない。都市というものは本当にゲリラに向いている。

この状況に俺は一計を案じた。

早速、マ・クベ准将と協議を始める。

「マ・クベ准将、このままでは埒が明かない。ゲリラを探すのは短時間では無理だ。おびき出して叩く、これしかない！」

「それは分かりますがコンスコン中将、おびき出す、とはいってもそんなに都合よく……」

「もちろん簡単ではないが、ちようどいいエサがあるじゃないか」

「何ですと！ そんなうまいエサが、どこに」

「あるんだ。自分でも知っていると思うぞマ・クベ准将。確か地球の鉱物資源をまとめてグラナダに置いてあると言っていたはずだ。それは貴重なものなんだろう。その事実をベースに、もしそれを失えば工業生産ができず、ジオンは撤退せざるを得ないとでも噂を流せばいい」

「なるほど…… 上手い手だ…… それならばゲリラも食いつくで

しよう！」

俺はマ・クベ准将が感心するのを見てちよつと気分が良くなった。ひよつとしてマ・クベ准将はそういうところで才能があるのか？ 上司を気分よくさせるとか……

それはともかく、聞いたところでは、マ・クベ准将はそんな鉱物資源をグラナダ内ではなくその近郊の月表面に隠してあるとのことである。ア・バオア・クーでの戦いの前からそんな注意を払っていたとはさすがだ。むろん万が一連邦軍がグラナダに来て、占領された場合を考え、押収されなかったための予防処置だ。

いい仕事だ、マ・クベ君。

この場合好都合だ。純粋な市街戦よりも少し離れていた方がこちらでも戦いやすい。

第五十三話 弱さと強さと迷いと

「ですがコンスコン中将、ゲリラの罠に使うために何も本当に資源の在り処を言う必要もなく、ニセ情報でも構わないのでは」

「いや、情報というのは本物を混ぜることで使える武器になるんだ。マ・クベ准将」

これでゲリラを捕まえる罠を構築すればいい。

鉱物資源はグラナダの外縁から2kmほど離れた月表面の浅い地下倉庫の中に保管されていた。

俺は山のようなものを想像していたのだが、そうではなく意外にコンパクトなもので、MS十台分が入るほどのスペースに整然と並べられている。マ・クベ准将は鉱物資源を地球上でできるだけきれいに精錬してから持ってきていたのだ。やはりいい仕事をする。

そして作戦通りの噂を流した。最重要資源の存在と、それを近日中に分散させる予定であるという情報だ。

この期限のつけられた襲撃機会、やはり食いついたらしく、ゲリラの方で動きがある。

その鉱物資源とは全く遠い地点で同時にいくつも爆破テロがある。俺はこれをゲリラの側で陽動を行なったつもりと読み切った。

この俺が引つ掛かるかよ！

あくまで本命は鉱物資源、そうだろう。

俺は機動力で随一のガトーのMS隊を使い、地下倉庫入り口からわずか離れたところに伏させておいた。

そんなに待つことは必要なかった。グラナダの数あるゲートの一つからバーニヤを使った歩兵のようなものが二十数名ほども出てきたではないか。月の重力をバーニヤで相殺し、時折地面を蹴って跳ねることで加速して迫る。

ゲリラだ。

そのうちの数名は背にリュックのようなものを背負っている。ゲリラにとって鉱物資源を奪うことは必要ない。おそらく放射能汚染でもやって使えなくさせればいいという算段なのだろう。

「奴らを充分引き付けろ。言うまでもないがガトー、これはもう二度とできない作戦なんだ。このチャンス、全部とはいわないがほとんどは捕えなければゲリラ戦は終息しない」

まあ、確かに言うまでもなかった。ガトーは充分に釣り出すまで待つてから行動を起こした。ゲリラがこのまま作戦を実行すべきか、直ちに中止して逃げるか迷うような絶妙なタイミングだ。

月表面にあるクレーター状の凹凸を利用して隠れていたMS隊が、ガトーのアクト・ザクの合図で一斉に躍り上がる。

ゲリラのグループをMS隊であつという間に取り囲み、しかも上を取った。歩兵のバーニヤは無重力化で運用するものであり、いくら月が低重力とはいえそれに逆らう上昇力は小さくなく、MSの大出力エンジンによる上昇には敵わない。これで勝負あった。

と思ったのはまだ早かった。ゲリラの戦意は予想外に高かったのだ。

ゲリラは素早く衝撃から立ち直り、役割分担をしたようだ。

足止め組らしきものがランダムに飛び回り、小回りを活かして盛んにMSへ小銃を撃ちかけて牽制する。そして別の一部がグラナダへ引き返そうとしている。さすがに罠であると理解したのか、鉱物資源へ向かう者はいない。

だが、このままでは不味い。

こちらにはゲリラの専門家どころか警察的なことに長けたものはいない。ゲリラ戦には本当に向いていないのだ。グラナダへ引き返しているゲリラをここで逃すわけにはいかない。

するとこちらのMS隊からガトーが抜け、戻るゲリラへ先回りしにかかった。

ガトーはゲリラの前進方向から離して慎重に警告射撃を放つ。どう考えても歩兵がMSに敵うはずがなく、降伏しかあり得ない。それを促すのだ。

ガトーでも誰でも一方的な虐殺のようなことをしたいわけがない。だが、そんな思惑をよそにゲリラは抵抗を止めてこなかった！

ガトーともあろうものが予想外のことには発砲を一瞬ためらってしまい、隙を突かれてしまう。掃射を始めて半分を倒したが、残りは取り逃がし、グラナダ市内に入られた。そのままガトーはMSでグラナダ市内のゲリラを追う。

一方、足止め組に対峙していたMS隊は、なるべく致命傷にならないように狙いながらやつのことでゲリラを行動不能に追い込んでいる。

市街の障害物の多い中でも、さすがにガトーのアクト・ザクはスビードを落とさず器用に避けながら進む。そしてゲリラを撃ち墜としていく。だが、次第に混み入る中限界が来る。ガトーは躊躇なくアクト・ザクを乗り捨てて、単身ゲリラを追う。

俺はガトーの場所と動きを計器で見ながら、妙なことに気付いた。残り僅かなゲリラはただ逃げているのではなさそうだ。普通なら逃げ込みやすい民間人居住区にでも行きそうなものだが、そうではなくひたすら公的施設に向かっているとは……

わずか遅かった！俺としたことがゲリラの狙いを理解するのが遅かったのが悔やまれる。

ゲリラの向かう先、そこは市内全域にエネルギーを供給する中央反応炉があるのだ！工業が盛んで、そして寒暖差の大きいグラナダ、反応炉もまた特別大きい。これに自爆テロでも掛けられたら市内の大半が消し飛ぶ。

本当ならゲリラは鉱物資源を潰して事が済めば良し、とでも考えていたのだろう。そこに失敗し追い込まれた今、グラナダを破壊する手段としてやむを得ず反応炉に狙いを変えたのかもしれない。

その危惧はガトーも共有するものだ。ガトーはゲリラを見失わず追い、また一人と倒していく。だが、二、三人は中央反応炉区画に飛

び込まれた。

もちろんガトーも入ったが、冷静に考える。この反応炉は大型であるだけに部材は厚く、小さな爆発物では暴走させることはできない。ゲリラが狙うのは中央に堂々と設置されている炉ではなく、制御室であろう。そう考えて足を止め、拳銃の射線を制御室へ繋がる通路に固定する。ガトーの持つのは精度のいい拳銃とはいえ、小銃と違って射程は短い。だがしつかり狙いを固めていれば別だ。

ゲリラの動きは読み通り、ガトーはそれらを倒す。

ガトーはMSパイロットとして最優秀だが、こういう戦闘においても流石といえる高い能力を保持していることを証明できた。

ただし、ゲリラの最後の一人に制御室へ入られてしまった！

むろん遅れてガトーも飛び込む。

その間十秒。間に合ったか、間に合わなかったか！

ガトーの目に映ったのは反応炉制御盤に小銃を向け、固まっている一人のゲリラだ。

いや、固まっているというのは適切ではない。大きく肩で息をして極度の緊張をしているのは間違いない。

目付きは鋭く、力が入っている。

そしてもう一つの特徴があった。

栗色の髪を短くして軽く七三にしている。それは女だ。

「……何をしようとしているのか分かっているのか」

「何？ 質問？ 時間稼ぎなら無駄よ。今さら何をしても私の銃が制御盤を撃つ方が早いわ」

「時間稼ぎではない。自分が何をしたか分かって死ぬ方が何も知らないよりマシだと思うからだ」

「言われるまでもないわ。この制御が壊れたら反応炉は暴走、あたり一面吹き飛ぶ。ジオンは大打撃を受けるはずよ。もちろん私もあなたも死ぬ」

「やはり分かっていたいなかったか……」

「何を言うの？ どこか間違ってる？」

「親切に教えてやるが、ジオンでも連邦でも兵が死ぬならまだいい。自爆テロという無茶な方法も理解できなくもない。だが、それ以上に大勢の民間人が死ぬぞ。その中には今日プロポーズをして指輪を送った者さえいるかもしれない」

「何それ、即興のお涙頂戴かしら？」

「未来ある若者もいれば、それどころか小さい子供たちも多い。そんな何も分からない、何も罪のない子供がこのテロで焼かれることになるな。働いているパパの帰りを待ち、ママの料理を小さな手で手伝い、褒めてもらえて喜んでいいる子供たちが死んでいく」

「……」

「自分でも分かっているのだろう。それくらいは。だから直ぐに制御盤を撃てなかった」

「黙って！ 知ったようなことを！ 私は騙されないわ！ そうよ、ここは戦場、フォン・ブラウンをジオンから護るための戦い。安っぽいヒューマニズムなんか今さら」

「おまけに人が死ぬということも分かっているじゃない」

「それならあなたこそ何よ！ さっきの戦い、MSで最初から撃つか踏み潰すかすればよかったじゃない。笑っちゃうわ。兵士のくせに」
「それを言われると返す言葉がないな。確かに、これまで数多く戦い、敵兵を斃してきた俺がためらってしまったのはおかしいことだ。明らかに偽善だろう」

「……」

「だがそれも死というものを知っているからだ。お前にも教えてやろう。目の前で俺が血を流し、死んでやれば嫌でも分かる」

ガトーは驚くべき行動に出る。

拳銃を自分の頭に当てていく！

「……何それ、面白くもない演技ね。脅しのつもり？」
「脅しだと思うか？」

そしてゆっくりと安全装置を外す。

女ゲリラの目が大きく開かれて、息が激しくなる。

「本当にやる気!? 面白くないって言ったでしょー！」

「別に俺にためらう理由なんかない。どうせその制御盤を壊せば皆死ぬ、何が違う」

「何なの、死んだら終わりじゃないの!」

「不思議なことを言う。死んだら終わり、どんな未来も断たれてしまふ。その死をお前はこれから何万作るんだろうな。それが正にお望みなんだろう? 俺の知っている奴で、知らなかったとはいえ市民を何万となく殺したら、その目玉に睨まれて気が狂う寸前まで追い詰められた者がいる。お前は強いな。最初から市民を殺すと決めてやるのだから」

「……」

「さあ、死というものを見ておけ」

場の緊張感が極限に達し、感情が渦を巻く。

「や、やめなさい!!」

ゲリラは制御盤へ向けていた小銃をガトーの方に向け直す!

その顔は蒼白だ。

だが、ガトーは拳銃を下ろすことなく平然としている。

しばらくの間が空く。

よく考えたら、死ぬと言っている者に小銃を向けても何の意味もない。

それに気付くと、ゲリラは慌てて小銃を捨てた。

ようやくガトーは指の力を緩め、拳銃をわざと床に落とした。礼儀として拳銃をゲリラに向けるという選択肢はない。

「私の負けね。あなたの言うような強さなんか無いのよ。苦しみもかく市民なんか作れない。自分が何をしているか分からない。笑われべきなのは私の方。当然だわ」

「……そうか」

「ただ教えて。どうしてこんな真似をしたの? 危険な賭けでしょうに」

ガトーは脅しでなく、ゲリラが反応しなければ本当に死んでいた。そのことは疑問を挟む余地はない。

ただしガトーは既に分かっていたのだ!

「お前は強くないかもしれないが、別のものを持っている。根本的な優しさだ。俺はそう感じた。だから目の前で人が死ぬのを許容しない、そう思えた。同時に生き急いでいるようにも思ったけどな。とにかくそんなに危険な賭けじゃない」

「そこまで見抜いたの…… ふふ、やっぱり負けね。私はレコア・ロンド、フォン・ブラウンの義勇兵よ。あなたは？」

「俺はコンスコン機動艦隊所属、ガトー少佐だ。レコア・ロンド、捕縛はしない。一緒に来て出頭してくれ」

そしてそのゲリラ、レコアは投降する。最後に一言言った。

「ガトー少佐。私を優しいと言ってくれたわね。別の形でまた会えたら、もう一度言ってくれる？」

「それは俺の問題じゃない。変わらないでいたら、俺は何度でも同じことを言うしかない」

「ありがとう。とても嬉しいわ」

俺は事の顛末をガトーから聞いた。

危険を冒し、身を呈して本当にギリギリのところまで被害を防いだがトーにはたまげた。これは並大抵のことではなく、いくら賞賛しても足りない。やっぱりこいつは凄い漢だ！

しかし同時に少しばかり悪い予感がする。会話の内容的にだ。いや、やっぱり不味い。

ガトーさん、まさか、またやらかしてくれちゃったりしたの……

その女ゲリラの心情に特別なものをインプットしたりした？

頼みますよお！ そういう方向の無敵感はナシにしてよ！

俺は心の中で頭を壁に打ち付けるイメージを展開せざるを得なかった。

こうしてゲリラの問題は終息に向かう。

ただしこれは新たな問題の呼び水にしか過ぎなかったのだ。

第五十四話 見捨てられた者

負傷しているところを捕えたゲリラたちを治療しながら、俺は当然ごとく情報を吐かせようと試みた。

どうせこの若者たちは志が高く、情報をペラペラしゃべることはないだろうとは思った。事実そうである。心は愛郷心に燃えていて、おまけに悪い言い方をすれば自分勝手なヒロイズムに酔っている。捕らわれたことさえヒロイズムの一環くらいに感じている。そんな時には自分たちがあわや大惨事を招いた意味など考えてもいない。

だがしかし、残酷な事実がある。

彼らは自分の立場が分かっているのだ。

通常戦闘ならまだしも、非正規のゲリラ戦を行ってしまったのである。非正規ということは正にルールに外れていることであり、それならば逆に彼らもまたルールに守られやしないということである。むしろこちらの方が気を使ってしっかり捕虜認定してやらなければ、ただの犯罪者として報復を受けるだけの身なのに。

だが今そんなことを説いても聞く耳は持たないだろう。哀れなほど純粋な若者たちだ。

まあ、尋問については無理をすることはない。巧みに誘導しながらヒントを出させることに徹する。軍事能力についての直球ではなく、民間人の暮らしや一般工業についてならばガードは緩いかもしれない。

事件から一日が経ち、キシリアがグラナダに到着した。

本当ならマ・クベ准将などと同時に到達するところまで来ていたはずであったが、グラナダを逆に進発したドズルと重要な話し合いを持っていたために到着が遅くなっている。

ドズルのグワランにキシリアがパープル・ウィドウから移乗して話し合った。

「……ではキシリア、コンスコンは大将にするか」

「それが順当でしょう兄上。本国会戦において作戦面でも戦闘指揮でもコンスコンの貢献は大きく、とうてい無視はできず、しかもザビ家以外の者でも出世できるのを見える形で示すことが一般兵にとって大きな意義を持つからには」

「まあ本人は地球表面で苦しい戦いをしているノイエン・ビッターなどを差し置いて自分ばかりが出世するのは心苦しかろうが」

「それは仕方ありません、兄上。置かれた状況によるのですから。そしてもう一つ、より重要なことがあります。ザビ家以外で地位を与えられるのは、逆に言えばコンスコン以外にいないでしょう。あの者は毛ほども反逆する気配がないと見えます。むしろ臆病なくらいに」

「確かにそこだけは確実だ。奴は昔から誠実で、戦い以外のことには妙に臆病だ。特に、恋愛のような個人ごとは」

二人の話し合いというのは、ジオンの今後に大きな影響を及ぼす昇進人事のことだった。本国会戦を皆で戦い、乗り越えたのだ。それは正しく行わなければならないし、そうでなければ隠れた歪を生む。

ドズルとキシリアについては問題ない。どちらも昇進だ。

ドズルが元帥になるのは、軍行動の自由を得るという意味でも必須のことであり既定路線だ。それで初めて行政府への報告義務や予算配分などの縛りがなくなり、また人事も完全に自由になる。

併せてキシリアが大将になるのも順当といえる。

コンスコンについては先ほどの会話に尽きている。本人がどう思おうと昇進させなければ周りに示しがつかない。

「問題は他の面々だ。将官が本当に少ない今のジオンでは、今いる将官たちを出世させること自体は不都合ないのだが……しかし一律に昇格させれば今度は下の者たちをどうするか、頭が痛い。本国会戦ではジオンにあまり損害はなく、士官の皆が皆出世ということもできんし」

激戦の割に損害が少ないのはもちろん喜ばしいのだが、軍組織上、皆が昇進はあり得ないことになる。といって中途半端な人数だけ昇進では、逆に昇進しなかった者の不満が出るかもしれない。下級士官にとつては出世は名誉だけでなく給料に関わる切実な問題なのだ。

難しいところである。

「まあ、全員が納得するのは無理だろうな。では細かいところは置いておくとして、准将組をどうする」

「一律昇進でなければ、デラミン、バロム、トワニング、このあたりを准将のままに。一方でマ・クベは亡きシャハト技術少将に代わって開発を任せる以上、少将へ。他のカスペン、デラーズ、シヤアは戦果を考えてやはり少将へ。兄上はシヤアを昇進させるのには反対かもしれませんが」

「そう言いたいのは山々だが戦いでこの奴の活躍は評価せねばならん。しかし、こうして見ると少しばかりバランスが悪くないか」

「確かに。頑なに派閥意識を持っているデラーズは、相対的に埋没させられている感を抱くやもしれません。しかし解決策はあるかと」

二人には懸念がある。デラーズだけは旧ギレン派の矜持を持ち続けているのだ。自分が一段階昇進するとしても、キシリア自身及びキシリア派のマ・クベやシヤアなど多数が昇進するのでは納得しないだろう。

「解決策とは、何だ？」

「こちらの突撃機動軍からバロムを外し、デラーズに付けてやれば。バロムは特筆すべき才覚はなくとも温厚な性格で適任でしょう。そしてもう一つ、デラミンを分艦隊としてコンスコンのところへ」

「それでいいのか、キシリア。どちらも突撃機動軍の戦力、そっちは数が減るぞ」

「突撃機動軍はもっと精鋭に特化し、シヤア、海兵隊、キマイラ隊、サイクロプス隊を中心に柔軟性を持たせるべきと前々から思っていたところですから」

「そうか。昔から精鋭主義だったな。では本国やグラナダが落ち着き次第、人事を発令することにしよう」

疲れる話し合いを終え、再びパープル・ウィドウでグラナダを目指す。ようやくグラナダに到着したキシリアを待っていたのはマ・クベ准将からの報告だ。

本当にマ・クベ准将には損な役割である。

その驚くべき事態の報告を聞くにつれ、やはりキシリア閣下は激昂することになる。

「おのれ、ゲリラなどの卑怯者が！ 私のグラナダを破壊しようなどとふざけたマネを！ 捕えた者は見せしめにせよ！ いやその前に背後関係を徹底的に洗い出せ」

キシリアにとってこのグラナダはジオンが接收した一つの都市ということ以上の意味を持つ。ギレンの意向だったのは当然にせよ、形の上でここはキシリアが確かに父デギンから拜命をうけた拠点なのだ。規模や位置の問題ではなく、父より頂いた記念すべき拠点であり、数少ない絆の場所なのだ。そのため自分の家同然に思ってきた。

それが一瞬とはいえ危機に陥ったとは赦せない。

キシリアの怒りを受けながら、マ・クベ准将は淡々と報告を連ねる。

それは時間稼ぎのためだ。人間の瞬間的な怒りは6分経つと下がってくる。これをアンガータイムというのだが、マ・クベ准将はそれを知っていた。

事実、時間が経つとキシリアも少しは冷静になってきた。

「…… いまいますが、それはそれとしてコンスコン中将には礼を言わねばならんな。それに今後の対処についての相談もだ」

「コンスコン中将は捕えたゲリラの尋問を順次進めている模様で、間もなく概略が出るでしょう」

そして今度は俺が報告する番になる。

恐いので、失礼だがキシリア閣下には通信で対応させてもらおう。キシリア閣下の横にいるマ・クベ君には、大変だなあ、と他人事感で同情してしまう。

「キシリア閣下、結論から言えば特筆すべき情報はありませんでした」
「何だ、いきなり失望させるのかコンスコン中将。尋問したとのことだが、その方法が手ぬるいのではないか。もっとやりようもあるだろう」

キシリア閣下が暗に示すことくらい、伝わり過ぎるくらいに伝わっ

てくる。

ただし俺はいくらゲリラとはいえ拷問のような方法は取らない。

「いえ、情報が出ないということもまた情報なのです、閣下」

「それはいったいどういうことだ、コンスコン中将」

「あのゲリラたちはフォン・ブラウンの義勇兵と言っています。確かに連邦軍の指揮は受けていないようです。命令系統は連邦軍とつながりが無く、つまりは独立部隊ということかと」

「な、何！ そんなはずはない！ ……いや、なるほど分かった。それは意図的なものだろう。全く酷いな」

「確かに、酷い話です」

キシリア閣下の明晰な頭脳は直ぐに俺の言いたいことが分かったらしい。

本当に連邦軍が一から十までゲリラと無関係ならいい。そうではなく、フォン・ブラウンにも少しくらい連邦軍が駐留しているはずで、少なくとも始めは装備や情報を与えたものと見て間違いない。でなければ素人のやることにしてはむしろ手際が良すぎて、マニュアルが存在しなければおかしい。

だが連邦軍は意図的にゲリラたちを切り離し、グラナダに放り込んだのだ。

おそらくゲリラの若者たちは義勇兵というものがいかにもカッコ良いものであるかのように騙されている。一方、連邦はゲリラとは無関係であり、たとえグラナダ市民に犠牲が出ても預かり知らぬこと、暴走した若者が勝手に事件を起こしたとそうぞぶくだろう。連邦は何も汚れを被らない。

「キシリア閣下、このままでは若者たちは重度犯罪者として極刑を受けるだけになります。フォン・ブラウンを揺さぶり、最低限ゲリラの事実を認めさせませんと」

「そうだな。賠償を問うためにも、先ずはフォン・ブラウンと交渉しよう」

だが、フォン・ブラウンの返答はにべもないものだった。一切そん

な事件とは無関係であり、知らなかったというものだ。

若者たちをあつさりで見捨てた。

「馬鹿な！ 連邦軍どころかフォン・ブラウンまで何も庇護しないとは！ 最初から存在しない者扱いということか」

「まあ、そういうことだコンスコン。使い捨ての駒だ。むしろ戻ってこられては困るくらいなのだろう」

俺はさすがに怒った!!

フォン・ブラウンを護ろうとした若者たちが、まさか自分の都市にも裏切られた！

何のつもりだ！

やろうとした事ほとんどもないが、若者たちは純粹な気持ちだったのに。これではあの若者たちを捕虜扱いにしたくてもできなくなる。

「キシリア閣下、実は尋問でほんのわずかですが分かったことがあります。通常なら自白でなければ司法取引にならないとしても、そこを曲げて彼らを捕虜待遇に変えて頂ければ」

「……ゲリラどもに優し過ぎるな。コンスコン。ただし分かっていると思うが私がそうするかどうかは、得た情報とやらによる」

「先ずはフォン・ブラウンの工業生産はこちらの予想よりもはるかに大きいことが分かりました」

「フォン・ブラウンがそれほどに？」

「それだけではなく、中心企業のアナハイム・エレクトロニクスの生産量はうなぎ上りに上がっている模様です」

これは直接ジオン軍に響く事柄である。

フォン・ブラウンを牛耳るアナハイム・エレクトロニクスが連邦にもジオンにも製品を供給していることくらい、ジオンの上層部は最初から承知している。

ただし、それをより重大に突き付けられる情報だ。

「なるほど、連邦軍はウエリントン社が調達先の中心であり、アナハイム・エレクトロニクスはさほど食い込んでいない話ではなかったか。事実はそのではなく、アナハイム・エレクトロニクスが主役級の供給をしていると……」

「キシリア閣下、つまりは一杯食わされました」

ジオン側がこうまで現実と乖離した認識を持っていたのは、アナハイム・エレクトロニクスが情報を操作し、ジオンに誤った認識を植え付けたために違いない。

俺はそういつたことを話しながら既に心の内に決めていた。

フォン・ブラウンを含めた月面、今こそ侵攻すべき、と

第五十五話 その陰には

フォン・ブラウンのアナハイム・エレクトロニクス、連邦とジオンの戦争を予想以上に支配している。

この事実、ジオンにとつてまずい状況なのが理解できる。単に生産量だけの問題ではない。

これではアナハイム・エレクトロニクスの思惑一つでジオンの生産状況どころか技術開発まで連邦軍に筒抜けになる。たかが部品の発注といえどそれだけで分かる情報は余りに多いのだ。

むろん逆も真なりではある。だが、技術情報の大切さではジオンの方が切実である。絶対的な数において劣るジオンは、せめて技術優位を保たなければ戦いになるはずがない。逆に連邦なら数で無理押しができる。

「キシリア閣下、意見具申いたします。ドズル閣下にもお伝え下さい。総合的にフォン・ブラウンとアナハイム・エレクトロニクスをこのままにする方が害が大きく、侵攻すべきと存じます」

「そうか。やる気か、コンスコン。タイミング的に連邦の大規模な応援は無い。やるなら今、だな」

「中途半端ではなく月表面を全て押さえる作戦がよろしいでしょう」「月面を丸ごとジオンの手に、そういうことか」

そして、ドズル閣下の裁可も得た。

数日の準備の後、ここにジオンによる月面作戦が発動される。

その主役はキシリア閣下の突撃機動軍だ。

基本的には都市を艦隊で囲み、降伏を促す作戦になる。直接戦闘は可能な限り避けなくてはならない。民間人を抱えているのは攻める方にも守る方にも弱みなのだ。

民間人殺傷という事態を、どちらの側も自分の方から招くわけにいかない。

更に言えば、攻めるジオンの側としてはなるべく設備を無傷で接收したいため市街戦突入は避けたい。

俺の艦隊はそういった都市戦には参加していない。もしも連邦がジオンの動きを察知し、応援艦隊を送ってきたらそれを叩くため、月表面から少しばかり離れたところに遊弋している。俺の艦隊の総数は本国会戦で失った艦を除き二十二隻、そこそこの戦力といえる。

まあ、現実的には出番はないと思われる。

月面で戦いが起きても連邦が本気で応援艦隊をよこすとも思えない。月が連邦にとって重要かどうかではなく、ルナツーからは距離がありすぎ、仮に艦隊を出してもおそらく間に合わないのは向こうも承知だ。

ましてや他のソロモンやア・バオア・クーにいる連邦は戦力的にそんな余裕があるわけがなく、無理な話だ。

だが、それが単なる俺の思い込みだったことをすぐに思い知らされることになる。

ジオンが動き出す前から既に月へ向かっていた艦隊があったのだ。

それはルナツーでの会話に遡る。

「ステファン・ヘボン君。通信によるとグラナダでゲリラが何かやっているようだ。やれやれ、全く馬鹿なことだよ」

「は？ お言葉ですが司令、ジオンが取り戻したばかりの拠点都市、効果的に打撃を与えるにはゲリラこそ常道。上手いやり方なのでは？」

「まあ、普通ならそう考えるかもしれないね。しかし、大局的にはいかにもまずい。これでは藪をつついたようなものだ」

「なるほど……つまり、こんなタイミングに要らぬ軍事行動の呼び水になる、と」

「おお、分かったかい？ では至急艦隊を用意したまえ。規模は三十隻ほどが一番指揮が執りやすいね」

「何と！ ワイアット司令、まさか、このルナツーから艦隊を月まで送るとっ！」

「仕方がないだろう？ 艦種は高速に動けるサラミスだけでいい。鈍

足の戦艦や空母は必要ない。そのサラミスに二機ずつのジム・スナイパーIIを付けるように。MSは小隊単位が普通だが今度ばかりは変則的でも仕方がない。そして補給艦も満載にして随時進発、ただし帰路での補給のためだ。サラミスに随伴する必要は無い」

「……了解しました。直ちに」

「では私も用意がある。発進準備の進捗を随時知らせてくれたまえ。ステファン・ヘボン君」

「え、ま、まさか!? ワイアット司令、自らがお出になるのですか？

それは危険です！ ジオンも大会戦をこなしたばかりとはいえ、艦隊戦力は決して少なくありません！ 帰りの航路を遮断し包囲してく可能性ががあります。そんな事態になれば、こちらは後詰を出すにはあまりに遠すぎて事実上不可能でしょう。お止め下さい」

「そんなものにひっかかる気はないよ。過信するつもりはないが、私もそれくらいは承知している。それにどのみち長居はしない。戦いに行くのではなく、フォン・ブラウンなどにある技術情報、技術者の脱出を支援するのが目的だ。しかしそれがどれほど重要なことか、ジャブローの制服組に分かってもらえないのは少しばかり悲しいね」

「それなら、小官だけを遣わせばよろしいのでは！ 何も司令自らでなくとも」

「君だけを遣わせば、ダグラス・ベーターあたりがなぜ自分でないのか騒ぎそうだ。まあ、それだけの理由でもないが、ここは私が行ったほうがいいだろう。留守を頼むよ、ステファン・ヘボン君。当面紅茶は一緒に楽しめないが、仕方がないね」

結局ワイアットは自ら出撃する事を押し通した。そこにはステファン・ヘボン少将に敢えて言わなかった理由がある。

ジオンの月面にいると思われる部隊編成について、ルナツーでは断片的な情報ばかりしか手に入らない。

だが、その中でコンスコン機動艦隊の名が入っていたのだ。

そこに反応せざるを得ない。今ではコンスコンという将があの本国会戦を演出し、見事なオーケストラを奏でたことが分かっている。そこで連邦艦隊はまるで道化のように踊らされ、見事に敗退する羽目

になった。

コンスコンとはいったい、どんな将だ。

出てくるならば見てみたい。

一方、ジオンは本命のフォン・ブラウンから攻めるのではなく、キシリア閣下は周辺の小都市から陥としにかかっている。正直そういった小都市に戦略的利用価値は何もないのだが、これはジオンのやり方をフォン・ブラウンに見せるためのステップである。

こういうところがキシリア閣下の上手いところだ。

絶対的な戦力で有無を言わさず降伏に持ち込む。だが一方では降伏した都市を決して手荒に扱わず、住民に安心をもたらす。何と移動の自由さえ許した。

「連邦軍の施設は電撃的に叩く。シーマ中佐の海兵隊をこれに当たらせる。抵抗は徹底的に排除せよ。だが民間人には絶対に手を出してはならない。ただし、これを機会に暴動を起こすような輩がいたら、それは徹底的に取り締まれ！ どのみちそんな者ら、残しておいても価値はない。逆に脱出して他の都市に行く民間人がいたら勝手に行っていい。いや、そうしてくれなければ困る。こちらのやり方をタダで宣伝してもらおうのだから」

そしてジオンが虐殺などを行わないことが広まった頃、ようやく最後の目標であるフォン・ブラウンを囲む。

さすがに月面随一の大都市として君臨し、長いこと一方的にライバル視していたグラナダなど寄せ付けない大きさだ。そして駐留している連邦軍にはそれなりの数の兵士と、おまけに艦がある。

「連邦艦はシヤア准将に片付けさせよ。簡単すぎる任務で文句を言われるかもしれないが」

フォン・ブラウンには、一隻のサラミスと五隻の駆逐艦が停泊していた。

だが、そんな程度、シヤアにとつては目をつぶっても片付けられる相手だ。むしろ宇宙港に残骸を撒き散らされて始末に困らないよう、

ある程度発進を許し、浮上してから叩くという余裕ぶりだ。その場合艦のエンジンが始動しているため対空砲火が撃ちかけられるが、そんなものに当てられるシヤアではない。

「……こんな楽な戦いばかりしていたら腕がなまってしまうな」

「ふふ、准将、戦いながらそう言うくらいでは、戦いが無くなつてしまえばどうします?」

「ララア、戦いが過去のものになるなら、それはそれでいいじゃないか。誤解されるといけないが私は何も戦いが趣味ではないよ」

「あら、本当かしら?」

「それより今頃連邦のMSが出てきたようだ。下手に市街に分散されたら大型モビルアーマーのエルメスでは対処できない。今のうちに全滅させておいてくれないか」

やはり駐留している戦力では一気に攻め立てる突撃機動軍に抗し得るはずがない。事前に何か罫でも仕掛けるべきだったが、この連邦軍はどうせ攻められるはずがないと平和に慣れ切っていた。あつという間に制宙権を取られ、MSもほぼ失った以上、フォン・ブラウン駐留連邦軍はもはや抵抗のしようもない。降伏しかあり得なかった。

こうしてフォン・ブラウンはジオンの支配下に入った。

月面を押さえたのはジオンにとり大きな前進だったが、キシリアの手際の良さと、シヤアなどの強さに磨きがかかっているためにさしたる困難もなく済んだ。

もちろんこの軍事侵攻という悪夢にフォン・ブラウンの市長や議会は蒼白になり、為すすべもない。先のゲリラなどの交渉などもはやそよ風に感じられる事態に、どうしてこれだけは避けられなかったのか、なぜ譲歩せずに若者を見捨てたのか、いくら後悔しても遅い。

ただし直接的な物的被害が少なかったために、かえってフォン・ブラウンから避難しようとする民間宇宙船がひっきりなしに飛び去っている。ジオンのやることに信用が置けず、震え上がった市民は多いのだ。そしてさすがに月面の大都市、旅客艇も輸送船も多かった。皆

命からがら地球を目指している。

「本当なら、いったん宙域を閉鎖して重要人物を逃さない方がいいのだが…… おそらくアナハイム・エレクトロニクスの幹部や技術者はこそこそ逃げ出しにかかっているだろうな。取って食うわけでもないのに。しかし、強制的に封鎖するのは難しいか。様々な宇宙船が出ている以上、警告射撃だけでも民間人はパニックになり、余計逃げ出す方向に行くだろう。ちよつと手が付けられないな」

ここでキシリアは現実的な判断をした。無理に全て封じ込めようとしたら軋轢は避けられない。本音としてはアナハイム・エレクトロニクスをそっくり丸ごと押さえたかったが、一般の技術者や生産設備の大半を確保できたことで満足すべきだ。

むろん、アナハイム・エレクトロニクスからの脱出者とその船が判明した場合には厳しく追ひ、停船させて拿捕する努力を惜しみはしなかった。だがその網に引掛かるケースは多くなかったのだ。

念には念を入れ輸送船に潜り込んでまで脱出を図り、それに成功したアナハイム・エレクトロニクスの幹部と、そこへ不可分なほど癒着した財団の幹部たちが異口同音に眩きを漏らした。

「あの御方に報告しなくてはならん。ジオンの馬鹿め。最初にコロニー落としなどをしてあの御方を怒らせるから、アナハイム・エレクトロニクスは連邦寄りになったのだ。元からそうなのではない。下らない過激思想などではなく地道に努力する方を選んでいたなら、あの御方は確実にスペースノイドの味方であり続けたはずなのに。これからジオンはどこへ向かい、どう人を導くのだ。それによりあの御方も態度をお決めなさるだろう。そしてこのつまらん戦争の行方も変わるに違いない」

第五十六話 月下の死闘 〔連邦の魔術師〕

俺はテイベの艦橋にいる。

艦隊はもう月面から離れているが、それでも視界に大きく月が映っている。

ただしそれでも戦いの様子まで見えるわけではなく、ジオンの侵攻状況は通信によって知るしかない。

そしてその状況は狙った通り進んでいる。ジオンはこれで月表面全域を手中に収めることだろう。

主な目的であったフォン・ブラウン市、そのアナハイム・エレクトロニクスの一大拠点も得ることができる。もちろんアナハイム・エレクトロニクスの拠点は一つだけではなく、地球表面にも多く存在していることは分かっているが、それでも大きな収穫に違いない。

当然、侵攻を受けた時点で技術データの消去や設備の破壊くらいはあると思われるが、予測の内だ。逆に言えば、もしうまく復旧できるデータがあれば、連邦の軍事技術さえ手に入るかもしれないではないか。

その中に連邦MSなどの核心技術があるかもしれない。運しだいではあるが見つけられれば凄い。それは正にマ・クベ准将の頑張りに期待する。

「フォン・ブラウンの為政者も後悔しているだろうか。皮肉にも若者を見捨てたフォン・ブラウンが今度は連邦軍に見捨てられるのだからな」

「コンスコン司令、キシリア閣下から入電！ 作戦は成功し、フォン・ブラウン市の鎮圧はほぼ終了。ついでに脱出する民間艇を牽制し、部分的な捕に協力されたし、とのことですよ」

「そうか。了解、と返しておけ」

拡大して見ると確かにフォン・ブラウンから飛び立つ民間艇は多い。まあ、これを全部抑えるのは現実的ではなく、重要なものだけ抑えるという判断をしたのだろうか。

俺はその支援作戦のために艦隊の再編と移動を指示しようとした。

しかし、このタイミングで恐るべき報告がもたらされた！

「た、只今、索敵航路ブイに反応あり!! 接近する艦隊を捉えました。ジオンの識別信号なく、これは連邦艦隊です!」

「な、何だと! 連邦の応援とは早すぎる! 各艦直ちに厳戒態勢から戦闘態勢へ! エンジン出力目いっぱい上げておけ!」

俺は対応を指示しつつも、思いもかけないことに慌ててしまったのは事実だ。あらゆる意味でおかしい。

「連邦の応援艦隊はいつたどこから来た! 到着時刻、規模はどれくらいか、分かり次第報告しろ!」

しかし、次々入ってくる報告に驚くばかりである。

「このままの速度では、あと二時間以内に接触! 連邦艦隊の規模、およそ三十から三十五隻!」

「そこまで近付けさせたか…… うまく忍んできたものだな。向こうの指揮官の腕がいいのだろう。そしてなかなかの数ときている。こいつは厄介だ!」

「進行方向から推察して、ルナツーから来た可能性大!」

「何! そんなことがあり得るのか? もし本当ならジオンの作戦前にルナツーを出て来たことになるではないか!」

疑問は大いにあるが、それを細かく考えている時間はなく、現実を優先だ。

とにかくきつちり戦闘態勢を整え、陣形を決めなければならない。こちらは二十二隻、相手は確実にこれより多い。生半可なことではやられる。

「連邦艦隊の数が確定しました! 三十四隻です。艦種は、見えるものだけで全てサラミス! 戦艦、駆逐艦とも見当たりません!」

「それは…… 何とまあ思い切っているんだ……!」

連邦艦隊の指揮官はかなりの知恵者と見た。なるほど、全てサラミスにすることで統率を容易にし、行動速度を極限まで増したのだら

う。

ただしそれは諸刃の剣、逆に単一艦種では戦術バリエーションは極端に少なくなってしまう。サラミスは火力も防御も航続距離も優れた万能型の巡洋艦だが、さすがにジオンのチベやティベからのアウトレンジ砲撃に対処できない。おまけにMSに肉薄されたら、対空弾幕も充分ではない。

しかし向こうの指揮官はリスクを完全に承知の上でそうしたと思われる。胆力があり、しかも戦術構築に相当の自信があるという、恐ろしい奴だ。

「連邦艦隊の陣形が分かるか？ MSもいるはずだが、どうなっている？」

「サラミスの大半は、紡錘型に整えた上で中央に配置の模様、やや下がって左右に二つの分隊が展開しています。MSはまだ見えません」
「なるほど、戦理にかなっている。こちらの数を見切った上で打撃力と柔軟性を両立させた陣形だ。中央本隊は数の優位を確保しながら戦い、左右の分隊は遊撃あるいは決定戦力に残すということか。こいつはかなりやるな。感心している場合ではないが」

やってきた連邦艦隊の方では、グリーン・ワイアットもまた気を引き締めている。

「かなり隠蔽には気を遣ったつもりのだが……ジオンの艦隊はもう動き始めているとは、さすがに早い反応と言うべきか。まあ、相手がコンスコン機動艦隊だったこと自体は僥倖だ。しかも数の上で優位を取れたのは大きい」

ワイアットの狙い通りといえそうだが、幸運を感謝せずにいられない。

ジオンのコンスコンと対決する機会が得られたのだ。

しかも周囲に他のジオン艦隊はいない。おそらく月表面で作戦行動中なのだろう。そのためジオン側の応援は直ぐに来れやしない。

宇宙船自体はひっきりなしに飛んでいるのが見えるが、全て民間用のものだ。本当ならそれを支援し警護すべきだが、ここにコンスコン

のジオン艦隊がいる以上、それは不可能だ。つまりお互いに戦わないでは済まない。

「さて、どう出るかな。お手並を見せて欲しいものだ、ジオンのコンスコン中将。ここまで来たのだから期待に応えてくれるだろうね」

「よし、こちらも対応した陣形を取る。全体として半月陣にするのだ。再編急げ！」

俺はコンパクトな半月陣を最善と判断した。

艦数に劣る以上、相手を包囲殲滅などは考えず、機動力優先の形にする。

つまり局所的な打撃力を高めて、連邦艦隊を早めに瓦解させるための陣形だ。こちらは二十二隻とはいえ小型の駆逐艦ガガウルまで含めての数字であり、平均的な質でいえば残念なことにサラミスに劣ってしまう。だが、逆に言えばコンスコン機動艦隊には規格外の砲撃力を持つこのティベの存在がある。そして全幅の信頼を置くガトー、クスコ・アルなどの強力なMS隊もいる。戦い方を間違えなければ勝てるはずだ。

始めに連邦の右翼にいる分隊を狙って前進するという偽装を仕掛けた。

連邦としてはそれをされたら数の優位を削り取られてしまう。思った通り全体陣形を回転させてきたのは、右翼をカバーしつつこちらの横を襲える可能性があるからである。

狙い通りだ。

俺は確信を持って命じる。

「今だ！ 進路を修正しつつ、半月陣を鋭くして連邦の本隊へ突入しろ！ ティベの主砲で奴らの鼻先を叩くぞ。その後、各MS隊は一斉に発進、連邦本隊の中心部を引つ掻き回し、指令系統を潰せ。それで連邦艦隊の戦意を刈り取れる」

俺は急戦によって決着をつけるつもりで突入を命じた。それに対し、連邦本隊はあっさりと後退していく。艦が反転回頭したわけでは

ないので、こちらが追い付けないほどの後退速度には至らない。

しかし決して狼狽したようなものではなく、整然とした後退であることに違和感を覚えざるを得ない。

「この動き…… してやったり、罠に嵌めたとでも言いたげな行動だ。いや、本当にそのつもりなのだろう。しかし、ダリル・ローレンツの砲撃まで読み切っているのか、もしもそうなら褒めてやるぞ、連邦軍!!」

俺はティベを駆り、砲撃の間合いまで距離を詰める。

「よし、連邦艦隊前列に向け、主砲撃てー！ー！」

これでたちまちサラミス一隻を轟沈させる。

やはり連邦はティベの主砲の間合いを見誤っていたようだ。

序盤の駆け引きには勝った。だが戦いはまだまだこれからである。

「コンスコン司令、連邦MS多数が展開しつつ急速接近、一次迎撃ライン突破されつつあり！」

「何、早い…… そういうことか。全体としてこちらは追い、向こうは後退する。MSの接近速度はその分向こうが早くなるという理屈だな。そこが狙いだったのか！ しかし慌てることはない。向こうに空母がない以上、出せるMSの数に大差はないはずだ」

「連邦MS総数、約五十機！」

「やはりか。よし、こちらのMS隊を連邦艦隊には向かわせず、全機艦隊直掩にして迎撃、時間を稼ぐ。連邦艦隊とはこのまま砲撃戦で決着を付ける」

戦いは相手のあること、刻々と変わる情勢に臨機応変に対応し、手の内を探りながら、連邦の策に対処するのだ。そうしている間にもう一隻サラミスを葬った。

「連邦MSが、盛んに撃ってきますー！」

「MSが？ 確かに火線が見える。こちらの砲撃を邪魔する牽制のつもりか…… 確かにまぐれでも艦橋に当たるとはあるからな……」

「あ、ガガウル一隻撃沈！ もう一隻、ムサイ直撃三発、大破！ いえ

続けて直撃、撃沈！」

「何だと、偶然か…… いやそうじゃない！ まさか、あの連邦MSは新型なのか！ これは遠くからでも撃って当ててくるぞ！ 急ぎ弾幕管制を遠距離にして再セット、直ちに撃ち始めろ！ そして迎撃に出たMSのうちドムは下がらせるんだ。連邦MSのいい的にしかならん」

今度は俺の方が見誤ってしまった。

俺は連邦の新型MSの存在について、本国会戦でシャリア・ブルが戦うのを見て知っていた。むろんジム・スナイパーIIという名前まで分かるはずはないが、正確な遠距離射撃を仕掛けてくるのは見ている。

そんな新型をこれほどの数まで揃えているとは驚く他ない。実は本国会戦でラファがそんな中隊と戦っていたのだが、まだ戦いの総括をしていない以上、俺のところまで情報が来ていなかったのだ。

恐るべき性能を持つ新型を試作などではなく既に量産化していたとは連邦の底力を垣間見るようでぞつとする。

素早く考え、俺の艦隊ではまともなこいつと戦えるMSはガトーやカリウスなど少数だけだと計算する。性能的にドムでは対処させられない。これで艦のみならずMSでも数的優位を作られてしまったとは、何という体たらくだ。

逃げ遅れた新兵のドムが爆散するのが見えた。貴重な若者なのに…… ジオンのため、覚悟を持って軍に来たのだろう。崇高な精神なのか、英雄になつてみたいという野心があったのか、それとも別の何かがあるのか、そこまで分からない。だが少なくとも家族の側では今も帰りを待っているはずなのに。

くそつ、この逆境、何か手はないのか…… 考えるんだ。

「やはり機動力を叩き付けるのが最善だ。策としてドムは各艦に入らず艦壁に縋っておけ。その上で全艦最大戦速、連邦本隊へ接触と同時に離艦し、艦の速度を得て一撃離脱の攻撃を仕掛けるんだ。艦砲と併

せて一瞬だけ最大火力を得られる。これで連邦に出血を強いながら突っ切るぞ」

俺は一度しか使えない変則的な策に出る。全てを一丸とした高速の一撃離脱戦法だ。

しかし、これだけではいけない。

「背後に連邦MSを残すことになってしまう。ムサイなどは前にしか撃てない以上、防空の役に立たず、やられる一方になる。ガトー、ツェーン、クスコ・アルは後背からのMS接近を何とか阻止してくれ」

そして彼らを送り出す。

やはり俺の艦隊のエースクラスは凄い。

接近戦になればいくら頑張っても数で押し込められるのを理解している。積極的に動きながら、射撃を仕掛けていく。そして俺にとっても予想外なことに、ただの牽制で終わっていない。あの射撃の強い連邦MSのお株を奪うごとく斃していくではないか。

クスコ・アルのエルメスならば、ビットによる射撃が本業であるので理解できる。しかしツェーンのガルバルデイまでも射撃を当てている。最近NT能力が増しつつあったのは理解していたつもりだがそれを目の当たりにするとは。

「すぐ傍にいるんだから……ここで活躍を見せとかなくちや、いつするのよ……」

そんなツェーンの思惑は黒かったが、小声なので俺には聞こえていなかった。

「くっ、絶対チャンスと思っているわね。小娘、そのせいで実力以上の動きを！ま、負けているわけにはいかないわッ！」

NTであるクスコ・アルはツェーンのNT能力の程度も分かるがゆえに、その尋常でない気迫の出どころも知っている。

連邦MSを慎重にさせて、艦隊への接近阻止という役割を果たし終わるとドンピシャのタイミングでガトーが帰艦を指示する。そこで戦闘は終わりだ。

「帰艦するぞ。二人とも、よくやったな」

「……」「……」

「どうした。二人、どちらも戦果を挙げて良かったじゃないか」

俺の艦隊が前方へ加速を続け、MSよりも速くなればガトーらは取り残され敵中に孤立してしまう。そのギリギリを見計らったの帰艦、やはりガトーは冷静で、戦いというものを分かっている。逆にそれ以外のことは全く分かっていないのが変だ。

艦隊の方は一気に連邦本隊へ迫り、接触する。

「今だ！ 全MS、発艦！」

そのタイミング、シャリア・ブル、カヤハワ、カリウスが先導する形でドムが一斉に離艦していく。艦の速度にMSの推力を足し算する格好になり、直線を猛スピードで飛んでいくのだ。そして存分に火力を叩き付ける。

しかし得られた戦果は思ったより多くなく、勝ちには至らない。連邦側では直前で俺のやろうとすることを見抜き、既に退避行動に入っていたのだ。

連邦指揮官の洞察力はいまましいほど優れている。

だが全体として連邦の陣形を突き崩し、戦場を突っ切ることは成功していた。

距離を取り直し、お互いに陣形を整えていく。衰えない戦意のまま再び対峙する。

戦いの第一幕は痛み分けの格好だ。

俺の方も連邦も、自分の強みを理解しそれを活かす策を駆使したのだ。俺は主に個人の力量を、連邦は主に新型MSの性能を。

結果、どちらも数隻の損失を出した。MSもそれなりの数を失った。

俺としてはそれも手痛いことだが、考えるべきは連邦側の司令官の力量である。連邦にも傑物はいるものだ。

しかしその認識すら甘く、連邦指揮官の戦術能力、いや魔術を見せつけられるのはこれからだった。直ぐにその事実を思い知らされることになる。

第五十七話 月下の死闘 く名将の条件く

連邦艦隊の方ではグリーン・ワイアットが感想を述べている。今は聞いてくれるステファン・ヘボン少将はいないので独り言でしかない。

「なるほど、私としたことが見誤ってしまったようだね。それは相手のある戦いである以上、完全には避けられないことだが、多すぎた。おかげでサラミスを五隻も墜とされるとは痛い誤算だよ」

それはさすがに淡々とはいかず、ため息に近い部分がある。

「コンスコン中将、とにかく決断が早く思い切りがいい。戦術傾向を見ると一点集中が多いようだ。それを可能にする要因として、やはり艦隊の砲撃力もMSの技量も大したものといえる。さつきはそれでやられた。だがコンスコン中将の強みはそこより一段上にあるようだ。表現しにくいだが、もたれかかると、信頼するのは違う。コンスコン中将はしつかり信頼しているからブレがなく、これでは部下も戦い易いだろうね」

そう分析しながら、グリーン・ワイアットは早くも次の手を打つ。ルナツーからはるばる来たのは情報収集のためだけではない。

「ここからが本番だよ。コンスコン中将。やれやれ、私は自分がケチだとは思わないがこういう手を使うのは心苦しいものだね」

戦いはこれより第二幕に入った。

今度はグリーン・ワイアットから仕掛け、ジオンが対処する。

「連邦艦隊、動き始めました！ 先ほどと同じ陣形です！」

「来たか…… よし、今度は距離を精密に保つぞ。数の撃ち合いにさせないよう、アウトレンジを維持し、ヒットアンドアウェイに徹する」
ゆつくりと距離が縮まっていく。

そんな緊張の高まる中、突然それは起こった。

「あ、連邦艦隊の右翼左翼分艦隊、大きく散開していきます！ そ、そ

れも全てが単艦で！」

「何だと！ 馬鹿な、そんなことがあるのか！」

報告は間違いではなかった。

確かに連邦の右翼左翼にいた計八艦ほどが、前進しつつ散開、つまり戦場を包んでいく。

数で勝る連邦が包囲戦術をとるのはむしろ常識の範囲内で、もちろん俺はそこに驚いたわけじゃない。

そうではなく、いくら包囲でも完全に単艦行動などあり得ないのだ。なぜならサラミスは突撃艦ではなく汎用艦ではあるが、それでも全方向に撃てるわけじゃない。後方や下方には少なくとも死角ができる。おまけに砲撃中はそのエネルギーの余波で索敵などが不能になる時間があるのだ。そのため、通常なら四艦、どんなに悪くても二艦で対になって行動するのが会戦の基本だろう。それを敢えて破る意図はいったい何だ。

疑問を持って余していると、それらの単艦のサラミスがもう撃つてきたではないか。とうていイエローゾーンにすら遠い距離、当たりはしない。それに照準もまるでなっていない。

「向こうは照準が悪いな。これは助かるが…… いやおかしい！」

俺はある可能性を思いつき、サラミスの一艦を選んでそこへ集中的に撃ちかけさせた。

それもまた遠すぎて当たらない。しかし、そこで判明したことがある。サラミスは回避行動もまた全然上手くないのだ。いや、あり得ないほど酷い。

これで俺は確信を持った。

「あのサラミスは無人艦だ！ やられた。あれは案山子、こちらの戦力を分散させるためだけのものだ」

無人艦ならば、距離さえ近づけば撃破するのは容易だ。しかしそのためにこちらが艦を割いてしまうと、ただでさえ戦力の差が大きいのに絶望的にその差が広がる。

連邦側は無人艦八隻を引いても二十一隻残っている。対してこちら

らは十八隻、ここから戦力を分けてしまつたら勝負にならない。

その無人艦に対して無視をするわけにもいかない。一応撃つてくる以上は。

そしてもつと悪辣なことすらあるかもしれないのだ。無人艦の擬態をしていて、こちらが片付けるのは楽な作業とばかりに近づいたらいきなり牙をむいてくる可能性が無くはない。むろん向こうも部下を危険に晒すわけにもいかない以上、全部が全部実は有人艦ということとはあり得ないだろう。ただしそんな艦がいる危険性を考えれば、こちらも単艦で向かわせるわけにいかないではないか。そうなると余計に戦力が削られる。

連邦の指揮官は魔術師か。

無人艦戦術、そんな大胆かつ恐ろしい手を使ってきた。これまでも無人艦を囷に使う例が無いこともないが、それはたいてい敗走時の苦し紛れだ。このように攻勢時に大量運用されたことはない。全艦隊の二割にもなる数を一度に使ってくるとは。

くそつ、確かに、先ほどの第一幕で連邦左右の分隊は何もせず、こちらの側面を突くなどの動きをしなかった。その時おかしいことに気付くべきだったのだ。

その連邦の指揮官もまた椅子に座り、戦況を見る。

「やれやれ、これだけのサラミスを使い捨てるのだから後で苦情が来そうだ。先の会戦でポンコツ前になった艦の始末だとしても。いや、むしろジム・スナイパーIIをその分持つてこれなかった弊害の方が大きいね」

その通り、それらのサラミスは本国会戦で敗走し、命からがらルナツに辿り着いた艦だ。戦いによる損傷、あるいはエンジン過負荷のために、戦闘復帰させるにはどのみち少なからず修理を要する艦だった。

それらを最初からこうやって使い捨てる予定にしていたのだ。

しかしそのため、MSについて本来サラミスにはMSを三機、最大四機収容できるはずだったのに二機ずつ乗せるのに留めたのである。

帰路には必ずサラミスの数が減るため、ゆとりが必要だったのだ。

俺はある決断をして、それに合わせた戦術をとる。

「やむを得ん。ゆっくり後退しながら距離を保つ。連邦の無人艦には、中途半端な対処はしない。戦力を割くのは論外、かといって駆逐艦だけ向かわせるのも危険、MSだけなら遅すぎる」

戦いは連邦の鋭鋒を避けながら、艦隊全体としてひたすらアウトレンジを心掛ける。

一方ではMSの戦いも始められているが、それも攪乱に徹する。ガトーとカリウスの連携に引っかけられた連邦MSを斃すくらいで、敢えて全面的な乱戦に持ち込ませない。

もちろん連邦はそんな俺の消極姿勢に対し、様々な方法を使って誘ってくるのを忘れない。敢えて作った艦列の乱れや突出である。それもまた本当か、と思うほど上手い誘いのだが、それには全て乗らない。乗る必要は無い。

「またガガウル一隻、中破！」

無人艦から定期的に撃ってくる。自動管制なのだろう。

ここでも少し誤算があった。

連邦の艦は火器管制が人手によらなくとも、時折至近弾になることがある。おそらくレーダー制御がジオンのものより高度なせいだ。ここは月に近い宙域、工業も民間航路も密な以上、ミノフスキー粒子をあまり濃くはできない。それで、無人のサラミスでもレーダー砲撃が有効になった場合に限ってそれなりの精度で撃ててしまう。

稀には本当に当たってしまうことすらあるのだ。この距離でも運悪く直撃を受けたら小型艦には被害が出る。

それもまた忍んで、俺は待っている。

「よし、今だ！ 前列のテイベとチベは主砲斉射！ 向こうを止めた隙に艦首回頭、最大戦速で月面に撤退せよ！」

俺はいきなり急速撤退を命じた。

これでいい。

連邦の方では戸惑っているようだが、意味は分かるだろう。

「ジオン艦隊、急速後退に転じています！」

「よし！ 追撃！ い、いやそうではない。なるほど…… 私としたことが、勝ちを前にして目が曇ってしまったようだ。本艦隊も後退する。無人艦は全て自爆シークエンスを起動。MSはそれぞれ手近なサラミスに分乗するように。その後、ルナツーに向け撤収せよ」

連邦艦隊もまた撤退の構えになる。グリーン・ワイアットも大局を理解したのだ。

「ジオンのコンスコン中將、噂以上の将だった。名將と言うべきなのだろう。そういう人物が連邦の敵なのは不運なのか、幸運なのか……」

お互いに撤退になった原因は全て、時間切れにある。

フォン・ブラウンからの民間船脱出は時間と共に一段落ついていた。コンスコン機動艦隊はそれらの拿捕の補助を、ワイアットの連邦艦隊は脱出の手助けをするのが本来の目的である。民間船がいなくなれば、どちらも作戦目的を失ってしまう。

それ以上戦う意味がない。

こんな局地戦でとことん勝負をつけても、戦略的には何も価値がない。コンスコンが勝っても連邦の物量には大きな影響がなく、ワイアットが勝ってもグラナダやフォン・ブラウンから新たなジオンの応援が到着した時点でお終いだ。実際に応援が見えてからでは遅い。

それが分からぬグリーン・ワイアットではない。

「今回は引き分けのようだ。いや、私の負けか。行動しながらも戦略的な見地を片時も忘れなかった向こうに一步及ばなかった。艦の損失を見ても、いくら予定されたポンコツの自爆を含むとはいえサラミス十二隻を失ってしまったのだからね。ジオン艦を七隻墜とせただうだが、向こうは小型艦ばかりで割に合わないことだ。ダグラス・ペーダーあたりの嫌味は聞き流すとして、ステファン・ヘボン君に言

い訳をこさえておく必要があるね」

もう一つ、グリーン・ワイアットは思い付いて、宙域から去る直前
ジオンのコンスコンへ向けて通信を打たせた。

一方、俺の方では連邦サラミスの自爆を見ている。

大きく外側に回っていた単艦八隻のうち、六隻が自爆で消えた。それらがおそらく無人艦であり、鹵獲されるのを避けたというわけだ。

逆に言えば、残りの二艦は有人艦だったことになる。つまり、これは連邦の指揮官が欺瞞を完璧にするために有人艦を混ぜ込んでいたことを意味する。

どうせ無人艦と侮りこちらも単艦で向かったらガガウルはもとよ
りムサイでも一瞬で餌食になっただろう。どれが無人艦か有人艦か
分からない以上、こちらはうかつに手を出さないのが最善だったの
だ。

それが連邦の優れた戦術だということとは分かる。

ただし俺は少しばかりモヤつとするものがあつた。

たった二艦、されど二艦、である。

サラミス単艦で突出させることは、やはり部下の命を危険に晒すこ
とだ。本気でこちらが対処にかかれれば終わっている。もちろん戦い
である以上、損失のリスクと戦果を天秤にかけて冷静に戦術を組み立
てるべきだが、少し違うのではないか。

この連邦の将の戦術能力は高く、その上戦略的意義も理解する将で
あることは、こちらが退き始めると追撃もせずさつさとルナツーに帰
るところからも明らかだ。

だが、部下と心からの絆で結ばれ、危機も勝利も分かち合う将、す
なわち名将ではない。

その条件を満たしていない気がするのだ。

「ただ、そうは言っても連邦の将は凄いな奴だった。これは強敵になる
ぞ。いずれ、この将とはもつと大きなところで再戦になるだろう。そ
れまでに戦略で勝負を付けられたら良いのだが……」

「コンスコン司令、電文入りました！ 連邦艦隊からです！」

「何だど？ 読んでくれ」

「貴官の勇戦に敬意を表する。再戦の日まで壮健であられたし。地球連邦軍ルナツー基地司令グリーン・ワイアット中将」

「能力はともかく、キザな感じがするな」

「司令、返信はどうしますか？」

「いや、必要ないだろう。向こうもそれを期待してないだろうし」

激烈な艦隊戦だった。この戦いが月面動乱の締めとなった。

それはジオンのグラナダ奪還から始まり、ゲリラ騒動、それが月面全体を巻き込むように拡大し、最大都市フォン・ブラウンまで至る動乱になってしまった。

ここで、裏では幾多の思惑が渦巻いているとはいえ、直接戦闘はいったん終わる。

だが連邦とジオンの戦いは続き、歴史は安寧を許さない。

次の事件の発端は既に始まっていたのだ。誰もが予想もつかない場所です。

それは、ジオンの連邦兵捕虜収容所での事件である。

第五十八話 收容所の確執

「フォン・ブラウン周辺宙域を哨戒中ルナツィからの連邦応援艦隊と遭遇、これと交戦しました。残念ながら、撃破できなかつたどころか撤退すらやつとのことという体たらく、損失は七隻に達します。力及ばず申し訳ありません」

俺はグラナダのキシリア閣下にも報告したが、艦の修理と補給を受けて

もちろん後でドズル閣下にも報告するが、艦の修理と補給を受けてから本国に行く以上、先に言っておく必要があった。

それに対するキシリア閣下の返答は斜め上のものだ。

「ん？ それがどうしたというのだ。分かんない、コンスコン。連邦の応援艦隊を足止めし、フォン・ブラウンの民間人保護を阻止したのだろう。十分な戦果ではないか。これで連邦軍は肝心の民間人保護の役に立たない、その安全を保障できないと政治宣伝ができる。ジオンの寛大さと対比するともいい材料になった。それを大戦果と言わず何と言おう」

キシリア閣下は本当にブレが無いな！

考えるベースが全て政治なのだ。

まあ、この場合は俺も助かるし、キシリア閣下の言う事も正にその通りだ。

ジオンの悪評もわずかばかりは払拭できるだろうか。それも大事なことだ。地道にそういうことを積み重ねていかないと連邦とジオンの相互不信の溝は埋まらず、戦いは果てしなくなる。

その後俺はジオン本国に向け出立した。

そして部下共々久しぶりにズム・シティを楽しむことができた。まあ、俺はほんの一時だけになったが。

ドズル閣下への報告の後、何気なく言われたことがあったからだ。

「コンスコン、ズム・シティで叙任式がある。必ず出席しろよ。何しろお前が主役のようなもんだ。驚け、今度は大将だからな!!」

「ええっ！　いくらなんでも中將になってから二カ月も経ってないのでは」

「間に本国会戦があっただろう。そこでの功績での昇進は当然だ。何なら勲章も付けてやろうか。カッコいいぞ」

「いえまさか！」

「まさかとは何だ、新しくドズル勲章を作ってお前を第一号にしてやろうと思ったのに。デザインはゼナとミネバがやった。最高の出来だ」

それ本気だったのかよ！　てかミネバ様幼児だろ。どんだけ親バカなんだ。

「ドズル閣下、そうではなく、功績といっても会戦で何とか勝てたからで、それで昇進とは。ノイエン・ビッター准将やユーリ・ケラーネ少將が地球で苦闘しているのを考えれば……　地球のジオン軍はまさに会戦すらかなわぬ乏しい戦力と物資の中で」

「そこまで考えるな。それに、将官ではデラーズ、カスペン、マ・クベ、シヤアもそれぞれ少將にする予定にしている」

「……」

「お前が昇進しなければ、その下の者も昇進できなくなる。当たり前のことだ」

うーん、大將か……

ほんの少し前までドズル閣下のいた地位ではないか。何とも実感の湧かないものである。

そんなことを考えながら歩いていたら、俺は実直そうな顔をした將に偶然出くわした。

トワニング准將だ。

そして思いがけず向こうから話しかけてきた。

「コンスコン閣下、ズム・シテイはいかがでしょう。戦時中とは思えぬ明るさと清潔感なのは」

「あ、ああ、そのようだ。ここは照明も空調も制限がないのだろう。いいことだ。せめてズム・シテイくらいはこうでなくてはな。戦時中だ

からこそそのどかな場所があってもいい」

確かに今歩いている政府関係ビルの谷間の道路は清潔で、きちんと行き届いている。

しかし、トワニング准将の言いたいことはそういうことでは無いのだろう。

トワニング准将は長くギレン総帥の傍にありながら、キシリア閣下やドズル閣下へも親交を結んできた。いや、そのための人材といって過言ではない。あまり戦闘指揮官としてのキャリアはなく、調整を取り持つタイプで、だからこそギレン総帥は重宝したのだろう。

下手に才能が有りすぎると野心が大きくなってしまう。

ギレン総帥なら才能は自分一人で充分、部下には無い方が従順で使いやすいこともあるのだ。

そして今となればドズル閣下とキシリア閣下の意思疎通は問題なく良好であり、調整というトワニング准将の本来の仕事は必要なくなった。先のズム・シテイの混乱を収めてから、その流れでズム・シテイを含む本国の保安や警備という閑職に就かされている。

つまり簡単に言うとな俺とは接点がない。

話をしたこともこれまで数えるほどしかない。それなのにここでもいかにも話しかけてきたのは、俺におもねる気持ちがあるに違いない。

対抗心を抑え込み、ズム・シテイの様子をさりげなくアピールして自分のポイントを稼ぎたいのだ。

そういうところで俺はわずかに不快感を持ったが、すぐに考え直した。

トワニング准将は宇宙で命のやり取りを繰り返している俺のような経験はしていない。前線指揮官でなければ、その方が普通だ。そうなることやはり目の前の地位や出世に囚われてしまうのは人間として仕方がないことなのだ。

もう一つ、同情すべき点がある。

ドズル閣下は准将組の昇進の話をしていたが、そこにトワニング准将の話は確か入っていなかった。つまりトワニング准将は今回昇進

せず、他の准将と差を付けられてしまうということだ。おそらく本人もそういう情報は入ってきているに違いない。必死さにも拍車がかろうというものだ。

同情を通り越して哀れな気にさえなった。

俺としてはできるだけ丁寧に接し、話を合わせてやろうじゃないか。

「エネルギー事情も良く、清潔で、治安も良さそうだ。これはトワニング准将のおかげだな」

「そう言って頂けるのは何よりです。苦勞してズム・シテイだけでも快適に」

「ん、その言い方だと本国の他のコロニーは違うのか？」

「残念ながらそれは当然、努力はしていますが、なにぶん割ける人的物的リソースには限りがありますので」

「まあ、そうだろうな。トワニング准将が頑張っても今のジオンでは仕方がない。特に人的には逼迫しているのだろう」

「あらゆる点で人が足らず、工業も農業も戦時体制では……唯一増える労働力として捕虜収容所があっても、うまく回ってくれず、投入したリソース以上にはなかなかな……むしろ食い潰す有様で。捕虜は反抗的なばかりか先日来事件を絶えず起こし、私としても頭が痛いところですよ」

「何？ 労働力はともかく、捕虜収容所が今、本国に？」

それは初耳だった。連邦兵の捕虜収容所は元々サイド5周辺か、ア・バオア・クー周辺宙域にあったはずだ。今は本国にあるのか……

それならばトワニング准将が責任者になるのも分かる。

「コンスコン閣下はご存じありませんでしたか。捕虜収容所は戦況悪化とともに本国の21バンチに一本化されたのです。下手に連邦が奪還作戦など考えないよう、本国深くへ」

「なるほど、それも道理だ。しかし捕虜を何かの生産活動に使おうという意図があるようだが、まさか酷使したりしていないのか。それが元で反抗的になっているとか」

「まさか！ 南極条約にて決められた捕虜待遇はきちんと守っております。それでも反抗して事件を起こす始末で」

「そうか、実情も知らず、憶測だけで失礼なことを言ってしまった。トワニング准将、前言は撤回する。まあ、連邦の兵士はジオンに敵愾心を持つている場合が多いだろう。これまでの戦争の経過を考えればそれも当然だ。そこを運営するのはなるほど難しいだろうな」

「それでも今までは良かったのですが、本国会戦後に新しく捕虜が入ってきたとたんに問題が急に増え、しかも捕虜同士で争いが始まるとは困ったものです」

「それは何だろう、連邦兵同士で争うとは、いったいどうなっているんだ…… 具体的にはどんな事件を起こすのだろうか」

「まあ、閣下にお聞かせするような話でもないのですが」

「そう言つてトワニング准将が一つの例えとして、典型的な事件の話をした。」

！
俺はそれを普通に聞いていたが、思わず途中で声を上げてしまった

「な、何だと！ その者は知っている！」

「閣下？」

「何かの間違いだ。変な騒ぎなど起こすはずがない！ こう言つてはなんだが立派な奴らなんだ。サウス・バニング大尉とヘンケン・ベツケナー中佐は!!」

「し、しかし報告では……」

「その二人は最初にこちらの艦隊で捕虜になったという縁がある。だから知っている。トワニング准将、越権行為ということは重々承知しているが、調査をもう一度やった方がいい。もっと詳しく経過を追えば結論は変わると思う」

ジオンのコンスコン艦隊での拘禁生活は愉快ではないが、少なくとも不快ではなく、虜囚であることを意識させられることもなかった。暴力どころか嘲笑すらなく拍子抜けだ。

ただしこれは、おそらくこの艦隊がたまたまそうだったというだけでジオン全体が捕虜に対し丁寧ということはないだろう。

そう思ったのはサウス・バニングもヘンケン・ベツケナーも同じだ。どちらもコンスコン艦隊に捕虜としてしばらく逗留し、そこそこの待遇を受けている。そこで二人は言葉を交わすことがあり、似た者同士でそれなりの絆を持った。

歴戦の勇士であるところも、連邦の在り方に一家言あるところも同じなのだ。

コンスコン艦隊が本国会戦に赴く前、この二人を含む捕虜たちは降ろされ、移送された。

そしてジオン本国にあるコロニーの一角を使った収容所で過ごしている。そこでは一応強制労働はあったが過酷ともいえない。確かに食事は若干貧相だったが労働時間は守られ、放射性物質などの危険物を扱わされることもなかった。

耐えられない環境ではないため、捕虜は大規模な反抗やサボタージュを企てることはない。

中にはジオンの兵器を作らされることに拒否反応を示す者もいたが、決して多くはない。

サウス・バニングもヘンケン・ベツケナーも連邦に戻りたいとはもちろん考えていても、無理な脱走などは考えなかった。

そんな折、本国会戦終了後に新たな連邦捕虜が大量に入ってきた。それだけなら一時的に混乱するだけの話だ。

ただし、とある過激な男が入ってきたことからわかに騒がしくなる。

その者は上背があり、態度も尊大で周囲に威圧感を放っている。話すことは徹底したスペースノイド差別主義だ。

名前をバスク・オム中佐という。

第五十九話 差別主義

バスク・オム中佐は捕虜収容所に入れられた時には、どこにでもいる捕虜の一人だった。むしろその威圧感と態度から嫌われ、敢えて話しかけようという者がいないかったほどである。

しかしそこから直ぐにシンパを増やしていったのだ。

特に演説が上手いわけではない。その主義主張そのものが爆発的に同調者を生んだのである。極端な主張というものはその性質上一切の迷いが無い。しかも単純だ。そこを説得力と感ずる者は多い。

「すべてはジオンが悪い！　そしてジオン軍だけが悪いのではなく、スペースノイドという棄民の末裔が悪いのだ。食い詰めて地球から出て行つたくせに増長して牙を剥くとは。せつかくの戦争だ、スペースノイドというゴミは宇宙から一気に掃除してやれ！」

連邦軍人は近親を戦争で亡くした者が多くいる。それに加えて僚友を亡くしていることもある。ましてや捕虜収容所にいるような場合は、激戦で大破し航行不能、あるいは降伏した艦にいたのだ。その惨状が小さくないトラウマになっている。

ただでさえジオンを憎んでいる中、ジオンとスペースノイドを完全に悪と決めつけ妥協を許さないスローガンが浸透するのは当たり前前である。

たちまちのうちにバスク・オム中佐を中心とする過激なグループが出来上がっていく。このコロニー内に捕虜は八千人もいて、管理の関係から十の区画に分けられていたのだが、その一つの区画にいる捕虜の大半がグループに入った。更に他の区画にさえ広がり始めている。

氣勢を上げるだけなら問題はない。

しかし、必然的に様々な工作を始めてしまう。

単純な仮病から、わざと不良品を作るような巧妙なサボタージユを行うのだ。嫌がらせである。時にはワイヤーを片付け忘れた振りをしてジオン警備兵の足を引っ掛けるなどの姑息な真似をした。

これにはジオン兵の方だって反発せざるを得ない。

一気に収容所の空気が悪くなる。ジオン兵の側では連邦捕虜に遠慮する義務もなく、やられたらやり返すだけで、対立が深まるばかりになる。

そんな中、サウス・バニングとヘンケン・ベツケナーの陽気な振る舞いは貴重なムードメーカーになった。言うこともしごく常識的な範囲のことである。

「ジオンの奴らはぶっ潰す。しかし、それは収容所を出てから、正々堂々とやるもんだ。収容所にいる間は大人しくして骨休めをすればいい。ここのジオン兵に嫌がらせなど卑怯者のやることだ」

収容所の雰囲気は複雑なものになった。

連邦兵の多くは差別主義を根底とするバスク・オム派だ。

しかし、理性的に考え、アースノイドとスペースノイドの未来像を思う者も決していないことはない。あるいは目の前に置かれた工業部品をジオンの物とはいえ綺麗に作り上げるという、愚直な職人気質を保ち続ける者もいる。そういう者はわざと不良品を作るといふ真似はできない。

それらは居丈高に同調を押し付けてくるバスク・オムに反発し、必然的にサウス・バニングらの方にシンパシーを感じたのだ。

残念ながら数としては少数派にならざるを得なかったのだが。

そんな中、やはりというべきか小競り合いが起きた。

バスク・オム派にいる若手がうかつにも脱走を計画した。

それは何とも杜撰なもので、収容所を出てからのことを考えられていない。なるほど目の前の工作機械をちよろまかし、武器を作り、各種ゲートを偽アクセスで突破することはできるだろう。上手くいけば人質を取って宇宙船を奪えるところまでいく可能性もゼロではない。しかしここはジオン本国、どう考えても何日にも渡って哨戒をくぐり抜けられるわけがないのだ。

そしてサウス・バニングが脱走計画の相談の場面に出くわしてしまった。

驚き呆れるほかはない。

「馬鹿だろうお前ら。ヒーローにでもなったつもりか。敵の弾が当たらないとでも思っているなら間違いだ。何度か幸運があっても、最後に一発食らえば終わるんだぞ。やめろ、そんなつまらん計画」

「何！ 臆病者のくせに！ スペースノイドに尻尾を振って恥ずかしくないのか！ 報酬は何だ、美味いメシか。連邦軍人にもとんだクズがいたもんだ！」

「キャンキャン吠えるな。うるさい。お前らのために言っているだけだ。道理の分からん奴でも連邦軍人が無駄死にするのは寝覚めが悪い。特にお前らのような若造は。俺の小隊にはもつと若い学徒兵がいたくらいだしな」

捕虜生活で鬱憤が溜まっていたのだろう。

若者たちは口で敵わないとみるや実力行使に出てきた。

サウス・バニングに殴りかかってきたではないか。だが、サウス・バニングは筋骨逞しい方ではないが、無駄な脂肪のない強靱な肉体を持っている。

「分かりやすくいい。そういうのは嫌いじゃない」

たちまちのうちに返り討ちにしていく。

最初は薄茶の髪を分けたキザっぽい若者だったが、あっさり一発で沈められた。その後の二、三人も同じ運命になる。しかしその次に出てきた者はそこそこの体を持っていた。サウス・バニングと数発のパンチを交わすが紙一重で避け、逆襲までしてきたではないか。

「やるな、若造。いい動体視力を持っている。良いパイロットになるぞ」

「うるさいジジイ！」

「口も達者か。名前は何という」

「ブラン・ブルタークだ」

そこで勝負がついた。

サウス・バニングのパンチが腹に食い込み、たまらず体を折り曲げたところでアッパーカットの餌食になる。体力はともかく、やはり経験というところでサウス・バニングの方が一枚も二枚も上だった。その時だ。

ブラン・ブルタークを倒し、息を整えているサウス・バニングに横から強い口調で声がかかる。

「貴様、何をしている」

バスク・オムだった。この騒動を知らされてやってきたのだろう。すぐ横には一番初めにのされたはずのキザな若者がそばにいる。

だが、バスク・オムの尊大な態度にも下手に出るようなサウス・バニングではなかった。

「お前さんか。何か文句があるのか。いや、こつちにはある。先に言わせてもらおう。皆を焚きつけていたのはお前さんだろ。ジオンとスペースノイドをわざとごちゃ混ぜにして煽っていたな。はつきり言っておくが、それは間違いだ。それどころかジオンにさえ話の分かる奴がいる。少なくとも俺を捕まえたコンスコンは悪い奴じゃない。お前さんは有害だ。ジオンじゃなく、連邦軍にとつてだ」

「スペースノイドに騙された馬鹿者が！ スペースノイドなどお情けで生かされているゴミ虫に過ぎん。大人しく地球に資源を送り、それだけを存在意義に思えばいいものを」

「……前から思っていたが、やっぱりお前さんとは話ができんようだ。連邦軍人としても、人間としても」

「連邦軍人というなら上官には従え。さつきから大尉のくせに中佐に何という口の利き方をするか！」

「捕虜ならば相手機関の指示にのみ従い、一時的に元の身分階級による指揮系統はなくなる。当たり前のこと知らないのか」

「……いずれここを出る時が来れば、分かっているだろうな」

続けて脅しをかけようとしたバスク・オムよりも、早く口を出してきた者がいた。

ようやくこの場に駆けつけてきたのだ。

「途中からで悪いが、俺はヘンケン・ベツケナーという者だ。何か階級の話が聞こえていたようだが、連邦軍での身分でいえば俺も一応中佐で、巡洋艦スルガの艦長をしていた。ついでに任官順ではバスク・オム中佐、少しの差ではあるが俺の方が上だったと思うんだが記憶違いなら言ってくれ。そして記憶違いでないとすれば、これ以上階級のことを言うべきではないだろう」

これでバスク・オムは言葉に詰まり、もはや無言で睨む。それをサウス・バニングとヘンケン・ベツケナーが受け止める

その時意外な者が声を出してきた。

ブラン・ブルタークが殴られて倒れていたが、意識を取り戻したようだ。

「余計なことをするな、ベン・ウツダー！」

その視線の先にあるのは、バスク・オムを呼んできたと思われる細身のキザ男だ。どうやらそれが気に入らない。ブラン・ブルタークはバスク・オムに来てほしくなかった。主張に少しだけ納得できる部分があるのでバスク・オムに味方するグループにいたのだが、ソリが合わず、心底手下になったわけではない。

ここで、バスク・オムとベン・ウツダー vs サウス・バニングとヘンケン・ベツケナー vs ブラン・ブルタークという奇妙な睨み合いが展開された。

この場はそこで収まる。

だが数日後、驚くべき結果となってしまった。

「何をしたっていうんだ！ ふざけるな！」

何とサウス・バニングとヘンケン・ベツケナーが逮捕され尋問房に移されたのだ。

脱出計画の首謀者であるとの情報が流れ、ジオン側としては当然のように拘束した。

誰かが罪をこの二人に擦り付けた。バスク・オム本人か、忖度した取り巻きかは分からないが、ともかく冤罪なのだがこの時点では分からない。

当然、責任者であるトワニング准将に報告が行く。

トワニング准将も馬鹿ではなく、情報の根拠である証言を総合すると、何かしら辻褄の合わないところがあるとは感じた。だがそれで最初の証言を無効にできるわけでもない以上拘束は解けない。

しかし偶然にもトワニング准将が俺、つまりコンスコンに会い、綿密な再調査をしたところから事の顛末が判明してきたのだ。もちろんサウス・バニングとヘンケン・ベツケナーは釈放、そして逆にバスク・オムを尋問、そう決められた。

これで終われば何も問題なかった。

ところが、本当に脱走が始まったことから事態は急変する。

管理側にとって最悪のタイミングだった。脱走計画がバレて首謀者が逮捕された直後だというのに、誰が脱走を企てるだろうか。予想外のことに盲点を突かれた。

第六十話 脱走

俺はその頃、艦隊再編に取り組んでいる。

大将就任と同時に、またしても艦隊規模が大きくなったのだ。

いや、それは俺の大将就任というより、ドズル閣下の元帥昇進の副産物という面が大きい。

基本、これからドズル閣下は全てを統括する立場になる。表向きは元帥として軍事と予算を見るわけだが、実質的には治安や産業を含めた政務全般を見るのは明らかだ。そしてジオン公国は現時点で公王不在であってもあくまで公国であり、そういった独裁体制は法的に問題がない。

すると当然ドズル閣下は本国にすることがほとんどになり、滅多に動けないだろう。麾下の宇宙攻撃軍は本国が根拠地になってしまう。それでは宝の持ち腐れだ。攻撃軍というからには攻勢に出るのが本領で、拠点の防衛を続けるのは名前に合わない。

そこで、15隻まで減っていた俺の艦隊へ新造艦を中心として18隻もの戦力が加えられた。それだけではない。更には俺のところへデラミン准将が異動してきたのだが、その麾下にある10隻を伴っている。

合計で43隻にも膨れ上がったのだ。

もはや大隊はもちろん旅団でもなく、方面軍とでも呼ぶべき規模である。俺としてはグワジン級が一隻も無いのは残念極まるが、総合戦力はドズル閣下の手持ちすら大きく超える。つまり俺のコンスコン艦隊は名目上宇宙攻撃軍の一部でありながら、完全に母屋を乗っ取った格好なのだ。

俺はもう一つの背景にも気付いている。これほどの戦力を預けることから必然的に分かることだ。ドズル閣下は俺が裏切つてジオン公国を奪うという可能性を全く考えていない。これは俺にはとても嬉しいことだ。もちろん俺はその信頼に応えて、最後までジオンとドズル閣下のために働くつもりである。

「デラミン准将、着任いたしました」

「ご苦労。期待している」

「はっ！」

デラミン准将が着任の挨拶をしてきたが、会話は続かなかった。デラミン准将はあまり余計なことを言わない人間らしい。見た目も生真面目そうだ。まあ、柔軟性に少々欠けたとしても、逆に言えば堅実に動いてくれるだろう。分艦隊というものは基本的に単一の目標をこなすもので、過度の柔軟性は必要なく、局面を任せられたらそれで不都合はない。

さて、再編と出撃準備をしている中、トワニング准将から連絡が入ってきた。捕虜収容所の件だろう。

「先のサウス・バニングとヘンケン・ベツケナーの件ですが、やはり閣下のご指摘通り、その二人が事件を引き起こしたのではなく、誤認でした」

「そうか、きっとそうだとは思っていた」

「二人には謝罪をして、その上で騒ぎの本当の中心人物を捕らえる予定です」

「それがいい」

その話もここで終わる。

二人は、俺の艦隊と縁のある人物のこと、その謝罪に立ち会おうかとも思ったのだが収容所のことにはトワニング准将の管轄である。それ以上俺が口を出していいものではないと考えた。

だが、結果的にまたしても関わることになるとは想像もしていなかった。

艦隊の合流と再編のため、サイド3内をゆっくりと航行していたのだが、捕虜収容所のある21バンチの近くにいたのはほんの偶然に過ぎなかった。

「スペースノイドどもに囚われているのは屈辱だ！」

「この機会を逃せば次はないぞ!!」

「地球に戻れないならば死んだと同じだ! スペースノイドはどうせ最後に俺たちを殺すんだ! 毒ガスを使って」

連邦捕虜の若者たちはそう言っただけで氣勢を上げる。

バスク・オムの過激思想に染まってしまい、スペースノイドとの共存を不可能と断じた彼らは必然的に捕虜のままであることを良しとしなかった。

ついに脱走計画を実行に移してしまう。

もちろん深く作り込まれた計画とは言えないが、全く荒唐無稽でもない。捕虜は一般民間人の集団ではなく専門家集団であるのは確かだ。それもスキルは並大抵ではない。

もちろんジオン側も決して兵器になりそうな機械を扱わせているわけではなく、そして警戒と監視カメラは充分に備えているはずだった。だが、そこを上手いことすり抜ける工夫をされた。ただの充電池を発火道具や刺激性ガスに変えたり、燃料を焼夷ゲルに変えるなどあらゆる多彩な工夫だ。

始めはこつそりした脱走に過ぎない。しかし発覚すると捕虜たちは遠慮なく行動を広げる。

これに対し、優れた武器を持つジオン警備側は反撃する。

当たり前だが、いかなる抵抗も排して制圧することは可能と思われる。何しろ捕虜には本格的な重火器は無いのだ。逆にジオン側には重火器も装甲車両もある。

しかし、そういったことがジオン側の油断に繋がったのは仕方がない。おまけにトワニング准将は前線勤務がほとんどなかったために、連邦兵に対する敵愾心は薄く、必要以上の強硬措置を取らなかつたことも災いした。ゆっくり制圧していくだけで満足してしまったのだ。

もう一つジオンにとって不運なことがある。このコロニーにおいて捕虜収容所の区画は一部に過ぎず、残りは軍用区画と一般居住区画になっている。そのため麻痺ガス注入などの瞬時制圧手段は使えない。捕虜収容所にこのコロニーが使われたのは労働力をより有効に使いたためだったがそれが裏目に出た格好だ。

実は、時間さえ稼げば捕虜たちには打てる手があった。

それはコロニー制御の乗っ取りだ。

いつときだけでいい。いくらかでも制御を手に入れば、捕虜側には格段に取れるバリエーションが広がる。

これは密閉型コロニーである。完全人工照明であり、扱うエネルギー量が大きい。

ちなみに密閉型コロニーは周囲に配置された太陽電池を主にして補助に反応炉を使ってエネルギーを得ている。密閉型は数多くの利点がある形式だが、総合的にはやはり太陽光を直接取り入れる方がコストが安いことが判明し、サイド3以降のコロニーでは用いられていない。

制御を奪った後、エネルギー経路をシャットダウンする方向に使ってもあまり実害がない。せいぜい暗くなったり気象コントローラができない程度だ。しかし、過供給で設備を破壊するのは別だ。そして一番問題になるのは、設備そのものの話ではなく、人為的な小爆発をうまく繋げて外壁に穴を開けてしまうことだ。

そして小さな破れでも自動修復を絶った状態でそれをされたら空気を失ってしまい、コロニーの存亡に関わる。それは小さな出血でも血が固まらないと出血死するのと似ている。

状況が容易ならざるものになったことを理解し、トワニング准将は青ざめた。コントロールを乗っ取られたことを知ると一旦制圧部隊を下げる。

そして面子にこだわらずコロニー内外に助けを求めたのだ。

そして捕虜の側でも青ざめているものがある。

「馬鹿な！　なぜこうなった！」
バスク・オムだ。

周りの若い捕虜たちはそんな声を聞いても怪訝な顔をする。それもそのはず、バスク・オムのために今蜂起したといっても過言ではない。サウス・バニングとヘンケン・ベツケナーの釈放後、バスク・オ

ムが尋問を受けることになるのは秒読みだったからだ。オピニオンリーダーたるバスク・オムを助けるためのタイミングでもあった。そしてコロニーの制御乗っ取りに一部成功した今、大きなカードを手に入れたとっていい。

しかし、バスク・オム自身はこんな蜂起は最初から無謀だと考えている。いかに状況を有利にしても、結局は宇宙艇で逃げ出さなければならぬからだ。綿密に打ち合わせた上で外部からの連邦艦隊と同時作戦を取るならともかく、単純に逃げ切るなどできないに決まっている。

だがバスク・オムは神輿に担がれた以上逃げも隠れもできない。心ではジオン側と行う交渉の算段を考えながら、仕方なしに中心にいるしかない。

「マニュアル操作でベイハッチを開ける！ 突入するのはこのタイプと、新造のチベ改、ガガウル二隻程度の小隊でいい」

トワニング准将からの通信を受け取った俺はすぐさま向かった。先のトワニング准将との話のおかげで、捕虜収容所の落ち着かない状況は知っている。それで蜂起を驚かずに受け止められた。何も予備知識がなければさぞかし驚いただろう。

そしてコロニー内に入る。ベイハッチはいかなる時でもマニュアルで開けられるように設定されているため、妨害は受けない。これでジオン側は艦やMSという圧倒的戦力を鎮圧へ向けられる。

さてここからが問題だ。

新鋭重巡タイプへの威容を見せつけて反抗捕虜を委縮させるか、逆に刺激しないように隠すか……俺としては色々考えることもあるが、いずれにせよトワニング准将の判断に従うべきだ。階級と関係なく、収容所管理のトップはトワニング准将なのだから。

すると、やはりというべきかトワニング准将は穏便な方を選択した。

「コンスコン閣下、艦砲や爆撃はせず、歩兵による鎮圧を優先したいと存じます。万一に備えて、MSの支援をお願いしたいのですが」

「分かった。老婆心までに言うが、話し合いによる投降ができなければ速やかに行動した方がいい。下手に傷が広がればどちらも収まりがつかなくなる」

事態は誰もが予想できない方向へと進んでいく。

第六十一話 妙手

収容所を占拠した捕虜たちはやはり投降には応じず、再びジオン側の制圧作戦が開始された。というより放置してはおけない。

しかし、やはりトワニング准将は荒事向けではなく、核心を直に突く作戦を取れていない。見ているともどかしく感じるが制圧までには若干の時間がかかりそうだ。

まずいな、と俺は思う。

人間というものは、あつという間に事態が急変すると狼狽はするものの、かえって破滅的なことまでしないものなのだ。しかしゆっくりと事態が悪化していくと心理的圧力が臨界点を超える。

つまり時間が掛かるほどに、捕虜たちが非合理的な行動に走る危険が増してしまう。

この場合、最初から艦やMSで踏み込み、問答無用に制圧すべきだった。しかしそれをしなかったからには、次善の策で行くしかない。トワニング准将の目論見通り、非殺傷兵器を主に使い、捕虜を決して殺すことなく鎮圧すればいい。そういう穏当さを見せれば問題ない、というかそれしかない。

俺もトワニング准将の意を酌み取って艦やMSを捕虜から見えないところに着座させている。

ところがこのコロニーに駆けつけてきたのは俺の艦隊だけではないかった！

もちろんドズル閣下やキシリア閣下も急報を受けていたが、先に行動したのは首都防衛隊である。首都防衛隊はズム・シテイを含めたサイド3の治安維持がその本分であるし、即応性なら通常艦隊に勝る。

俺の艦隊の後から、このコロニーに突入してきた。

首都防衛隊は最新装備はないものの、戦力が少ないということはない。そして直ちに戦闘態勢で介入してきたのだ！ 捕虜鎮圧でトワニング准将がチンタラしているように見えたのだろう。

たかが捕虜相手に何を無様な、と。

そして最悪の選択をしたではないか！

コロニー中心、つまり収容所の上空からザク中隊を降下させてきたのだ。

「な、何を勝手なことを！ 言っってはなんだが大将の俺がトワニング准将の指示に従おうというのに、どういうつもりだ！」

俺の方が慌ててしまい、即座にそう言ったが、首都防衛隊の考えもおぼろげながら分かる。トワニング准将が今の任に就いたのはつい最近のこと、首都防衛隊としては突然の変化に戸惑わざるを得ない。ギレン体制からトワニング准将への交代はあまりに違い過ぎる。そのため、捕虜鎮圧の手柄を立てて立場を強化したいと思ったのかもしれない。そして捕虜鎮圧の最中ならば、差し出がましく割り込んでも助けに来ましたと言えば名分が立つ。

そして恐れていた事態になる。

捕虜に対して主に非殺傷兵器を使うというトワニング准将の穏当さが台無しになってしまった。捕虜たちはやはりジオン側を信用できないと思っただけで、最終的手段を取ってしまった。

コロニー内にかすかな爆音が響く。

外壁殻内での爆発であり、そして決して爆発物を使ったものでない以上、それほど大した音ではない。閃光も煙もない。ただしこれは恐るべき事態なのだ。さすがに直径6kmのコロニーは外壁が破れても直ぐに空気を失うことはなく、暴風が吹き荒れることもないが、やがて死に向かってしまう。

「しまった！ コロニーの外壁が破れば、一両日中に空気を失い、どれだけ犠牲が出るか分からない。その破壊部に急行、規模を確認して処置を決める。最大緊急だ。急げ！」

破損部は捕虜収容所から離れた工業地区にあった。幸いにも居住区ではないためまだ人的被害はない。吹き出しではなく吸い込みのため風は弱いが、さすがに近寄るほど急激に強い風になる。MSでさ

え引き込まれてしまいそうだ。何とか観測したところ意外に大きな穴になっていて、十数メートルにもなる規模だった。

とりあえず大まかにでも塞いでおかないとまずい。

「くそ、この大きさか…… 手っ取り早く、強度のあるものでなければ塞げない」

これは緊急事態、MSで適当に建物を引き剥がして使うか……

「いや、そうか！ このティベを使えばいい！」

我ながらナイスアイデアだ！

一塊で大きさがあり、しかも動かせるものといえば艦じゃないか。俺はティベを破れ目の上に持っていき、そのまま着座させた。むろんティベの方がはるかに大きく、吸い込まれたり歪んだりすることはない。艦底でほぼ塞げば、細かいところは風で飛んできた物で勝手に塞がる。これで空気が漏れることはなくなり当座の危機は回避できた。

だが、艦の数が限られている以上、次々と外壁に穴を開けられたら対処できないのも確かだ。コロニーを守り切る手段が失われている状況は変わらない。

一方の収容所内は半ばパニックに陥っている。

強硬派はまたしても外壁に穴を開ける方策を考えていた。その考えの元は、ジオン側への不信感である。捕虜の蜂起を圧殺し、それどころかこれ幸いと皆殺しまで考えているに違いない。ザクマシニングの音が何よりの証拠だ。

こうなった以上、死なば諸共で行くしかない。

だが、一方では恐怖に震えて固まってしまった者が多く存在する。理由は簡単だ。

宇宙艦乗りにとつて、空気を失うほど恐ろしいものはない。それは嫌というほど心に刷り込まれ続けている。常に宇宙という死の空間と隣り合わせにいる者は、そのことを忘れるよう努めなければ平常心を保てない程なのだ。艦に乗っていてさえそんな状況なのに、このコロニーで現実に空気を失っていくのを知れば恐怖に支配されるのは

当然である。

「おいこら、やめんか！ 全員を殺すつもりか！」

そして捕虜に呼び掛けながら暴れているのはヘンケン・ベツケナーだった。尋問から解放され、収容所内に戻ってすぐこの騒乱に直面したのだ。何とか鎮めようと思ったがたちまち強硬派と衝突した。そしてヘンケン・ベツケナーは演説で説得するようなタイプではない。直ちに肉体を使う。

すなわち、強硬派の血走った面々を殴り飛ばしていく。

十人まではそれで行けた。ただし最後は数に負けて押さえ込まれてしまう。

「お前ら、死にたければ自分だけで死ね！ 俺は連邦に帰る希望を捨てちゃいない。そんな人間までお前らの破滅に付き合う義務はないぞ！ しかもこのコロニーにはジオン側といえど民間人がいるんだ。そいつまで忘れてコロニーをぶっ壊すとは、連邦軍人の誇りはどこへ行った！」

それでも口だけはまだ動く。強硬派としても同じ捕虜であるヘンケン・ベツケナーを殺すことまで考えているわけではなく、取り押さえたはいいが困惑するばかりだ。それは結果的に貴重な時間を稼いだことになる。

一方、なぜか強硬派は判断を仰ぐべきバスク・オムを見失っていた。いつの間にもやらグループの中心にいたバスク・オムが消えている。もちろんどこかへ行ったのだ。その意味するところが分からない。強硬派たちは次第に右往左往していき、ヘンケン・ベツケナーの言うことに耳を傾ける者さえ出てくる。

最後、コロニー制御を乗っ取ったコンソールから人が離れた。これでコロニーを危険に晒すことはなくなる。

民間人を含めた大量殺戮の危機はヘンケン・ベツケナーの蛮勇により防がれた。

同じ時間、俺は首都防衛隊のザクを後退させている。

「馬鹿者！」

と一喝し、俺の威厳でもって首都防衛隊を平伏させたと言いたかったがそれは違う。悲しいがそういうことではない。

やはりここでも活躍したのはガトーだ。ティベから発艦させておいたガトーのアクト・ザク及びMS中隊が首都防衛隊のザクへ追いつき、物理的に抑え込んだ。まさか百戦錬磨かつMSの性能も圧倒的に勝るこちらが首都防衛隊に負けることはない。武装はザク相手に意味のない催涙弾や照明弾だけしか持つていかなかったが使う必要もない。

むろん首都防衛隊としては当たり前だが大将階級の艦隊の意向を目の当たりにした今、逆らえるはずもなく、手柄の機会を物欲しそうにしなから諦めて引き下がった。

「さてしかし、ここからがまた問題だ。地道に投降を呼びかけながら制圧するしかないが、先のザクの攻撃によって捕虜側はこちらを信用しないかもしれないな」

それでも何とかしないといけないと思った。俺は今までに接した捕虜、ヘンケン・ベツケナーやサウス・バニングなどの顔を思い起こしたので。

「捕虜側だって破滅を望んでいる輩ばかりじゃないだろう。そういう者たちが巻き込まれて死ぬのは忍びないことだ」

彼らは勇敢だが過激ではない。その二つは全く違う。連邦兵だって色々いる。戦場でもないこんなところで犬死にさせてはいけぬ者もいるはずだ。

そんなことを思案していれば、予期しないことに直面した。

「コンスコン司令、このティベに通信です！」

「そうか、やっと捕虜側から話が来たか」

「い、いえ、そうではありません！ 通信はズム・シティからです！」

「な、何！ ズム・シティからだと……くそ、もう少し収まったタイミングなら良いものを……」

ジオンの首脳部もこの收容所の騒動を聞き、何かの判断をしたのだ

ろうな。

その通達をしてきたのに間違いない。経過報告を求めるだけとは思えない。

「仕方ないな、繋げ」

俺はどうか穏便なものでありますように、と願うしかない。

話し合いをすると嘘を言って時間を稼ぎ、こつそりエネルギー経路の大元を断ち切って外壁爆破をできないようにした上で、捕虜を囲んで皆殺しにする。そんなことに決めたかもしれないのだ。そんなところか。普通に考えれば明らかにその方が尤もな判断と言える。ジョンとしては騒ぎを起こした捕虜を生かす必然性はない。

俺は苦みを感じながら通信を取った。

「コンスコン、捕虜の騒動はまだ続いているようだな」

「え、こ、これはキシリア閣下!」

「どうした。ドズルの兄上でなかったのが不思議か」

いやそこは不思議だろう。なぜキシリア閣下が？

「まあ、そうだろうなコンスコン。連邦捕虜に対しての処置など私が気にしたこともないし、何かを命じたこともないのだから。全くの管轄外だ。しかし今回、少しばかり言いたいことがあったものでないや、これは決定した命令になる」

「キシリア閣下、それに決して異を唱えるものではありませんが、できれば現場の意見を聞いた上でご判断頂ければ、と」

「面白いことを言う。現場の意見とは何だ？」

「捕虜たちは決起したものの逃げることはできません。そして追い詰められて自暴自棄になった面もありますが、むしろ彼ら自身も破壊するようなコロニー破壊を選ぶのは不合理、冷静になれば必ず話し合いを求めてきます。その時に改めて考えればいいことで、今すぐ処罰を決定することはありますまい。捕虜の中にも巻き込まれただけの無実の者がいるでしょうし、殺さない道があればそうするべきでしょう」

「ん？ 捕虜を殺す？ 誰がそんなことを。まさかトワニングではないだろう」

「え？ キシリア閣下、では捕虜の処置はいつたい……」

「さつきから何を言っているのだコンスコン」

この後、キシリア閣下の話に俺はびっくり仰天させられた。

そして今こそキシリア閣下の政治的手腕が燦然と発揮される。

後の世から、この戦争におけるキシリア・ザビ最大の功績と讃えられることになるのだ。

「コンスコン、捕虜を殺しなどしない。むしろそうされたら困る。私の判断で捕虜交換をしたらいいと思っっているのだからな。連邦にいるジオン捕虜と一対一交換をして、我がジオンに兵を取り戻す」

「ほ、捕虜交換!!」

「この話でもって今の騒乱を速やかに収めよ」

第六十二話 ふさわしい罰

キシリア閣下の考え、それが何と捕虜交換とは……これは驚きだ。

ともあれ良かった。

穏便に済みそうだ。こんな無駄なところで死ぬ者を出さずに済めばそれが一番いい。この捕虜交換の話を伝えたら捕虜だって矛を収め、騒乱は無事に終わってくれるだろう。

それにしても妙手ではないか。

さすがに政治感覚のあるキシリア閣下だ。

今のジオンは絶対的に人員が足りない。

それを多く手に入れ、回復できるのだから、これほど結構なことはない。兵器生産がいくら順当に行っても扱う兵がいなければ話にならない。まして今のジオンはグラナダどころか一大工業都市フォン・ブラウンまで手に入れている。そして今後ア・バオア・クーも取り戻すかもしれない。

これから工業生産力は、連邦に及ばないまでも大きく増やせることが分かっている。とにかく人員が重要なことは自明だ。

もちろん、人口の多い連邦の方とはいえども兵は足らず、学徒兵まで動員されていることもわかっている。ただし逼迫しているといってもジオンに比べたら切実さの度合いがまるで違う。

実際に捕虜交換するとなれば、お互いスパイや工作員を交ぜ込み、謀略戦を展開するかもしれない。しかしそれは後の話、人員の数の確保が何といっても最優先である。

はつきり言うところ捕虜交換は圧倒的にジオンの益になるのだ。

しかも巧妙なことに連邦側がそれを理解していたとしても拒めない。

人道に沿う処置と先にジオンから政治宣伝をされたら、建前上連邦

としては仕方なく受け入れざるを得ない。そして今、連邦捕虜たちは決起してしまい、のつびきならないところへ追い込まれている。連邦政府へこの捕虜たちの悲鳴を届ければ、動かざるを得ないだろう。

おまけに捕虜交換は必ず一対一になるはずだ。例えば連邦が交渉で交換比率を変えようと企んでも、それはそれで命の重みがどうかという面倒な話になってしまい、無理である。

ただし、話の本筋とは関係ないところでちよつとした疑問がわいた。

なぜキシリア閣下は、捕虜交換についての通信を責任者であるトワニング准将ではなく俺の方へよこしたのか？

騒動の現場にいる中で、一番階級の高い者から先に話を通すというだけの単純なことだろうか。

いや、キシリア閣下はさつき何と言っていた？

「まさかトワニングではないだろう」

これはトワニング准将が捕虜を決して殺すことのないように計らうのを知っていた、つまり、捕虜交換のアイデアを以前からトワニング准将に漏らしていた、ということではないのか。

それなら、俺はまるで道化だよ！

くそつ、トワニング准将はやっぱり狸だ！ まあ、丸く治まる方向だからいいのだけれど。

ひよつとして首都防衛隊の先走りの真相は……

下手な鎮圧により、外壁爆破へつながったわけだが、結果だけ見ると捕虜を追い詰めた形になった。これで捕虜交換を連邦側も受け入れる下地がいつそう整った。捕虜が虐待によつて悲鳴を上げるならともかく、捕虜自身の決起によるものならジオン側に非はない。連邦政府と交渉する上で有利な立場に立てる。

まさか、キシリア閣下はトワニング准将だけでなく、首都防衛隊にまで何かの含みを持たせて送った？ こういう状況を作り出すために。

いや、いくら政治に非凡な才を持つキシリア閣下とはいえ、それは

俺の想像の膨らませ過ぎだよな……

とにかく今の騒動を収めよう。

俺は正直にジオン側に捕虜交換の考えがあることを伝え、捕虜たちに武装解除を求めた。

時はそれよりほんのわずか遡る。

「こうなった以上、とりあえずは宇宙艇のあるコロニー両端へ行き、潜むとするか。そしてコロニーを出るタイミングを計るのだ」

バスク・オムはやはり自分だけは逃げようとしていた。

自分の煽りで動いた強硬派がコロニー制御を乗っ取ったと知った段階で、これは危ないと感じた。コロニーの外壁破壊までやってしまいうに違いない。必ずそうなる。

その前に何とか宇宙艇を奪って乗り込まないといけないのだ。

そうすれば最低限コロニーに空気が無くなっても生きていることはできる。

「まったく、馬鹿どもが暴走しおって！ 巻き込まれてはたまらんぞ。いや待て。そうか、コロニーが大惨事になれば必然的にスペースノイドどもが大騒ぎするだろう。慌てて脱出する宇宙艇がそれこそいくらでも出てくる。好都合だ。本当に脱出できるかもしれない」

捕虜の強硬派をあつさりで見捨て、そればかりか彼らの命すら自分の利用価値に転じている。自分の命だけが重いのだ。

バスク・オムとその側近数人がひた走る。

収容所を抜け、工業施設を過ぎ、緑化地帯に入っている。それは膝上までの草とまばらな木々のあるような場所だ。

時間帯は夕暮れにコントロールされていて、光量が次第に減ってきていたが走るのには問題ない。

だが、その逃走は間もなく中断されることになった。突然の呼びかけによって。

「バスク・オムさんとやら。収容所からここまでお散歩、いやジョギン

グか。体を鍛えるのはいいことだ」

「なっ！ 貴様！ 確かサウス・バニングとかいったな。どういうつもりだ。一緒に逃げたいのか。それとも邪魔するのか。時間がない、早く返答しろ！」

「焦るな。そしてそういう愚問はするな。邪魔するに決まってるだろう？ 収容所の仲間を見捨てて逃げる奴なんか赦すはずはない」

「貴様もあの馬鹿どもと一緒にか！」

「ああ、馬鹿で結構だ。お前さんとは違って、俺は部下を見捨てるなどできないくらい馬鹿なんだよ」

サウス・バニングは収容所のことにはヘンケン・ベッケナーに任せ、バスク・オムを追ってきたのだ。

どうせバスク・オムは自分ばかり脱出するため宇宙艇を目指すに決まっている。追うのは簡単だ。今、その背後10mまで迫ってから声を掛けた。説得できればよし、でなければ実力行使をする予定である。

しばし睨みあう。

しかしそれは長くは続かず、どちらも驚くことになる。

更に別の者が到着したのだ。

「卑怯者は俺も赦さん！ 前から気に入らなかったが、今はもつと気に入らん」

それはブラン・ブルタークだった。サウス・バニングとは別ルートで追ってきていたのだ。

ここに至って対立は決定的なものになる。

しかもこの場にいる全員が収容所内で銃を奪って持ってきていた。バスク・オムとその側近たち、サウス・バニング、そしてブラン・ブルタークがそれぞれ銃を取り出す。

「二応言うが、自分ばかり逃げようとせずに収容所に戻って騒動を収めろ。今からでも遅くない。それが責任ってものだ」

そう言うサウス・バニングに対し、返事の代わりにバスク・オムらは銃に力を込めた。

是非もなく、サウス・バニングもブラン・ブルタークも射撃体勢に入る。

ついに発砲された！

薄明に光と音が広がった。

全員が撃つたのだが、サウス・バニングとブラン・ブルタークはバスク・オムに対し遠く射線を外している。

警告のつもりだからである。同じ連邦軍同士、同じ捕虜同士で殺し合うことはない。

「う、くっ、」

しかしバスク・オムは違う。本気だった。殺すつもりで撃つたのだ。

ブラン・ブルタークが呻いて崩れ落ちる。どこかに当たったのだろう。それを見たサウス・バニングはブラン・ブルタークに駆け寄る。

「おい、しっかりしろ！ こんなところで死んでいいのか！」

「うるさいジジイ、死ぬもんか」

「俺はジジイじゃない。まあ、その元気があれば、とりあえず大丈夫そうだ」

「お節介め……」

「その負けん気といい、お前はどこかベイトに似ているな。連邦に帰れたら俺の第四小隊に來い。俺の隊はライラの隊の次に厳しいが、お前なら鍛えがいがありそうだ」

その姿を見るとバスク・オムらはもう用はないとばかりに背を向けて先を急ぐ。しかし、貴重な時間を失っていた。

耳に鈍い音が入る。

規則的な振動と低音、何かなど考えるまでもなく、MSの走行音である。

銃声のせいかジオンのMSがこの逃走に気付いたのだ。そして探索をかけている。

バスク・オムらはそれでも走った。

他に選択肢はなく、逃げ切る方に賭けるしかない。

ジオンMSはしばらく探索してもあぶり出せないのに業を煮やし、広範囲に警告しようと試みる。

そのためには催涙弾は不適切だ。迷わず閃光弾を選択した。もちろんコロニーに傷をつけるようなものではなく、そして人間にも非殺傷のものしか使わないつもりだ。

その閃光弾を薄くバラまいた。

バスク・オムはこれまでの人生で決して不運な方ではなく、むしろ幸運だったに違いない。

だが、ここでは間違はなく最上級の不運に襲われてしまった。

閃光弾の一発が、あろうことか至近弾になったのだ。側近のベン・ウツダーらは強く目がくらんだだけで済んだ。しかし、バスク・オムは炸裂する閃光弾の光輝をまともに浴びた。それは20cmと離れていない距離、正に眼前といえる。

「がッ、あアアッ、」

それは瞬間的に網膜の9割以上を焼いた。調節機能もあつさりとは破壊した。

これ以降、一生の間バスク・オムの目は視覚支援装置に頼らざるをえず、その装着なしにはまともに像を結ぶこともできなくなった。

そしてバスク・オムらは捕らえられる。

収容所の騒動も沈静化し、すべてはひとまず終結した。いや、捕虜たちは喜んでいいる。もちろんジオン側が捕虜交換を提案する予定と聞き、連邦に帰れる希望が持てたからだ。

ただしジオンが連邦に帰すのは全員ではない。

俺はそれに該当する数人に通告した。

「ジオン公国大将コンスコンだ。バスク・オム地球連邦軍中佐、並びに数名、貴官らには無駄な望みを持たないよう予め言っておく。捕虜交換で連邦に引き渡すことはなく、残りの人生の大半をここで強制労働に従事させる。この処置は刑罰となる」

もちろん罵りと怒号が返ってきたが、それを無視して言葉を繋ぐ。「騒動の中心だったというだけでこの処置を決定したのではない。同じ連邦の人間に重傷を負わせたという時点で、貴官らの立場は捕虜から犯罪者に変わったのだ。それなら捕虜交換に該当しなくなるのは当たり前だろう。不服があるか」

第六十三話 私は帰ってきた

俺はバスク・オムという人物とは初対面だったが、最初から印象が良くない。そのため、積極的に悪意をぶつけることはしないまでも事務的な対応をしてしまった。

報告書を見て分かってている。收容所その他の捕虜を見捨てて逃げるような奴に同情することはない。

尚も暴れようとするバスク・オムやその取り巻きたちを引っ立てさせた。

その逆に、サウス・バニングやヘンケン・ベツケナーとは旧交を温める。

ジオン軍人である俺が連邦の捕虜にそんな感情を抱くのはおかしなことで、偽善と言われるかもしれないが、実際にそうなのだから仕方がない。

「いろんなことがあったようだな。報告書で知った。災難というか何というか」

「全くだ。ジオンの大将」「そういや、文字通り大将になったそうだな」「特にサウス・バニング大尉、銃撃戦で当てられなくてよかった」

「悪運があるのさ。不死身の第四小隊だからな。近々連邦とジオンで捕虜交換をしてくれるそうだが、大将、俺が連邦に行ったら、手ごわい敵になって戻ってくるぜ。おまけに今度活きのいいのをスカウトしたんだ。覚悟しといてくれ」

それはお手柔らかに、と微笑むしかない。

捕虜というのは時の運でなってしまうもの、お互い様だ。そういう機会でもなければ敵味方同士で話すことはなく、それを活かすのはいいことではないか。

さて、捕虜交換のことはジオンから外交ルートに則り、正式に連邦

へ提案された。キシリア閣下の思惑通りである。ちなみにドズル閣下も感心しながら全面的に賛成しているそうだ。

その一方でジオンは更にもう一つの作戦を始める。

これもやはりキシリア閣下がドズル閣下を動かしている。政略に關するならキシリア閣下、適材適所、そういうものだ。

この作戦には背景がある。

ジオンが月周辺の制宙権を得たことで自動的にア・バオア・クーの包囲ができるようになった。ルナツーからのルートは遮断され、もはやア・バオア・クーに連邦から補給物資を送り届ける方法はない。

むろんルナツーのグリーン・ワイアットはいくつかの対処を考えた。サイド6経由などの変則的なルートを試みたりしたのだ。しかし、そんなことで包囲をかくぐろうとした輸送艦隊など相変わらずシヤアの餌食にしなければならない。

シヤアのゲルググはJ型に改装され、これまで以上に赤い彗星の恐怖を連邦に与え続けている。

ジオンの目的はア・バオア・クーを攻略すること自体ではない。徹底的に補給を断ち、孤立させ、降伏を引き出すのが主眼になる。

捕虜交換を実施すると決めた以上、その前に連邦捕虜をできるだけ多く手に入れておきたい。

それが政略でジオンを強化する道、キシリアの考えである。

しかし、その思惑は半分だけ報われた格好になる。

ア・バオア・クーの連邦軍は思い切ったことをした。ア・バオア・クーにこだわらず、全軍出撃し、一気にソロモンへ撤退しア・バオア・クーを捨て去ったのだ。連邦としては近場のソロモンと合流し戦力の集中を図るのは合理的な選択である。

さすがに周到に準備された一気呵成の大移動はシヤアといえど中途半端に手は出せず、見送るにとどめている。

もちろんこれも、恐るべき機略を持つグリーン・ワイアットの指示

によるものであることは当然である。

「ステファン・ヘボン君。ア・バオア・クー要塞への補給は無理になつたようだ。これはもう要塞を放棄するしかないね」

「要塞を放棄、でしょうか？ あれほど苦勞して手に入れた要塞を…… サイド3の至近に位置し、橋頭堡として重要な価値があるものかと」

「サイド3に近いからこそ、ここからの補給が難しいのだよ。むしろルナツの大艦隊を動員すれば物資輸送も不可能とまでは言わないが、下手すればそれこそ一大決戦になり、現時点でそれはリスクが大きい。ジャブローの高官どもも首を縦には振らないだろうね」

「それはそうでしょう。しかし愚考しますが、要塞を放棄するのも、それはそれでジャブローの不興を買うのでは。いくら説明しても納得しない者はいるでしょうし、閣下のお立場にまで影響する可能性が」
「ありがとう。だがそれくらいは覚悟しているよ」

「閣下……」
「とにかく要塞は放棄する。補給が無くなり、困窮する将兵を捨ててはおけないからね」

「ではもう少しだけ粘って抗戦すれば。時間が経つほどルナツの戦力は大きくなり、撤退支援をするにしてもやりやすいでしょう」

「ステファン・ヘボン君、それはできない。これが地球であつたなら、野生動物でも捕まえて食べと命令もできるのだろう。しかし宇宙ではそうもいかない。宇宙は残酷で、補給を失った軍は死んだと同じだよ。ジャブローの高官には分からないだろうがね。しかし少なくとも私はそんな状態にしておくつもりはない」

「それほど将兵のことを…… 閣下は少しばかり変わられたように思えます」

そして結果だ。ア・バオア・クーは戦うことなく再びジオンの要塞へと戻った。

さすがに製造設備は機械を壊されていて、すぐに復旧はできないが、少なくとも艦隊係留設備やドックなどは使える。

さあ、これで舞台は整った。

今、ソロモンに連邦軍が固まっているのだ。

俺は予期した命令を予期した通りに受け取る。ズム・シティのドズル閣下から通信が届けられた。

「コンスコン、少しばかり戦略に変更だ。ジオンは、先にソロモンを獲る！」

「承知しました！ ドズル閣下」

「ソロモンにいる連邦の戦力は艦艇15隻余り、MSもそれなりと見込まれる。そこへア・バオア・クーから20隻ほどが逃げ込んで合流したのも分かっている。それをまとめて叩いてくれ。この作戦にはキシリアのところからも部隊をいくつか出す予定になっている。具体的に言えば海兵隊とシャアの隊だ。デラーズやカスペンも合流させたいが、これはルナツーへの牽制に残す予定だ」

「戦力的にはそれで攻略も可能でしょう。欲を言えば、戦いの終盤、ソロモンから連邦が素直に撤退できないようにして降伏に持ち込むのが一番かと。今、捕虜をできるだけ多く取っておきたいというキシリア閣下の思惑もその辺にあると察します」

「分かるか、その通りだ。しかしお前には言うまでもないが、欲ばつてもいかんぞ。俺はミネバがあんまり可愛いから将来スターになると確信しているが、いつもゼナから欲を出し過ぎるなど言われている」
「……」

声が出なくなった。いいんだけどさ。

さあ、我らが懐かしき古巣、ソロモンの攻略戦だ。そこにいる連邦残存兵力をルナツーからの邪魔が入る前に叩く。

さつそく編成を済ませ、物資を積み込み出撃する。

ソロモンが連邦に奪われたのはつい五ヶ月前に過ぎないが、それがだいぶ昔に感じられる。

しかし感慨深いのは俺だけではなかったようだ。

出動し、一日半の行程を進み、ようやくソロモンが点となって見え

てきた。

それは細かな星屑の一つとして埋もれている状態から、次第にそれらとは違う姿を見せてくれる。

たまたま打ち合わせを終えて艦橋から出ようとしていたガトーが窓からそれを眺め、しばし立ち止まる。

「ソロモンよ、私は帰ってきた……」

眩きは小さなものだったが、ガトーの通る声に乗って艦橋にいた者たちへ届けられていく。

それをセシリア・アイリーンが聴き取り、うつとりしたように眺めている。

くそっ、やっぱそうなるよな……

その時、テイベへ高速で接近してくる一機のMSがある。連邦機のはずはない。見た目にもジオンのガルバルディなのだが、細かいところではちよつと印象が違うような気もする。きちんとジオンの識別信号が出ているため、そのまま近付けさせた。

確認のために連絡を取ろうかと思ったところで向こうから通信してきた。

「こちら海兵隊長、シーマ・ガラハウ中佐。試作MSのテストを兼ね、連絡事項を伝えに来たところだ。コンスコン大将に取り次ぎ願いたい」

「コンスコンだ。今回のソロモン攻略戦、キシリア閣下の海兵隊と共同作戦になると聞いている。宜しく頼む。ところで、そのMSは何だ？ ゲルググ・マリーネではないようだが、試作とは？」

「こちらこそコンスコン閣下と共同作戦とは光栄の極み」

そして聞き出した。

妙なMSはガルバルディをベースに構造材を最新のチタン合金に置き換えた試作機だったのだ。

フォン・ブラウンに残されていた連邦技術の一つ、チタンの大量製造法が、ついにマ・クベ少将の努力によってジオンの知るところとなった。

元々チタンを含む鉍石自体は宇宙にいくらでもあるが、今までは精練法の問題で多くは手に入らなかつた。ジオンMSはそのためスチール製に甘んじざるを得ず、設計で何とかカバーしていたとはいえ、性能の重い足かせになっていた。

しかしこれから以後、ジオンは待望のチタン合金が使えるのだ。付け加えて言うと、マ・クベ少将は自分が地球から持ち帰った資源と合わせ、連邦MSに使われているチタン合金以上の超高性能合金の開発を目指しているらしい。

これはかなりの朗報だ。

もちろん素材が違えば最適形状も加工法も違ってくるだろう。そのため試作の繰り返しが必要だが、完成すればガルバルディの改良型はもう一つ上の高みへと進めるはずだ。

「最後にコンスコン閣下、一つ言つてをお願いしたい」

「言つて？ それは何なりと、シーマ・ガラハウ中佐」

「そちらのMS隊に、『小娘ども、戦いではあつしとの格の違いを思い知らせてやるよ、なんなら誰がガトー少佐にふさわしいか勝負するかい』と伝えて頂ければ」

「……………」

ああ、やっぱり、そうなるのか。

第六十四話　パイロット

そんな個人ごとの伝言はさておいて、シーマ・ガラハウ中佐からの連絡事項に意外なことが含まれている。

俺の艦隊の出撃前に、一つの荷物が届けられていたのだ。

それはマ・クベ少将からのものだったのだが、それについての伝言である。

「ペズン計画からグラナダが引き継いだ遺産があったのでコンスコン艦隊に贈る。有効活用されたし」

その伝言だけでは何の意味か分からないが、サプライズプレゼントのつもりだろうか。

マ・クベ少将らしからぬ洒落っ気である。

とりあえず包装シートを取ってみて驚いた！

それはモビルアーマーの一機ではないか。エルメスより大きく、ビグザムよりは小さい。形はどちらとも違っている。とにかく流線型のスマートな形なのだ。いかにも高速が出そうに見える。スペックシートを見てみると全くその通りで、突撃性能は高く、おまけに対ビームコーティングが本体に施されているという豪華仕様だ。また、搭載火力は主砲副砲ともMS相手にはオーバースペックなくらい威力があるらしい。

これはかなり強力なモビルアーマーだ。特に要塞を翻弄するのにうってつけではないか！

名をヴァル・ヴァロという。

さっそく使ってみよう。

先ずはこのモビルアーマーのパイロットを選定する必要があるが、一人だけ心当たりがある。

以前ガトーから紹介され、カーラ・ミツチャム教授の手術を受けた男だ。

ケリイ・レズナーという。

腕の麻痺は手術の甲斐あって回復してきている。ただし、さすがに負傷する前のMSを自在に操っていた頃のようにはいかない。ならばこのモビルアーマーが適しているのではないか。

本人に打診してみよう。

「ケリイ・レズナー大尉、このモビル・アーマーのパイロットをやってみる気はないか。以前ビッグロというモビルアーマーに搭乗していた記録があったが、このヴァル・ヴァロはそれよりはるかに高性能だ。興味があるだろう」

「興味！　コンスコン司令、興味なんてもんじやない。俺をパイロットに戻してくれるのか。それなら、それなら本当に感謝する」

こちらがびっくりするほど大喜びされた。それほどパイロットに復帰したかったのだろうか。

「ならば決まりだ。ケリイ・レズナー大尉、貴官をヴァル・ヴァロのパイロットに任命する。この大きさのためチベ一隻を専用に使わせるを得んが、行動はガトーのMS隊に加わってくれ」

「はっ！　コンスコン閣下！」

ケリイ・レズナーという男、やはりガトーの戦友というだけあり、武骨で実直な人間だ。おまけにイケメンではないか！　癖のある金髪と筋肉質の体がまた合っている。パイロットに筋肉が必要かどうかは分からないが……　とにかく俺のぶよぶよ腹とは違うよ！

ケリイ・レズナーはあつという間にヴァル・ヴァロに乗り込み、ちやうどそこへガトーからの通信が映される。

「どうだ、ケリイ。再び轡を並べて戦える日が来たな。俺は嬉しい」

「ああ、俺もだ。俺はやはりパイロットだ。それにしてもガトー、お前はこんなところにいたんだな。あのコンスコン司令の下に」

「そうだ。コンスコン司令は必ずジオンの栄光を永遠のものにしてくれると信じている」

この後に行われたソロモン攻略戦において、ケリイ・レズナーの乗るヴァル・ヴァロは特筆すべき戦果を挙げている。

「ヴァル・ヴァロだ！」

そう言っただけで突撃する度、連邦の砲台かMSを血祭りにしないではお

かない。

やがて始まるソロモン攻略戦、結論を言えば成功した。

ソロモン周辺宙域における艦隊戦は、問題なく圧倒した。

連邦艦は四十隻近い数だったが、こちらはそれを充分に上回り、内容的には更に上だ。結果的に戦力が二倍どころではなく違うのだから当たり前だ。砲撃戦でもMS戦でも理想的な戦いができる。

海兵隊もシャアの隊も、もちろんこちらのガトー、ツエーン、クスコ・アルも活躍している。新兵の多いシャリア・ブル隊は直掩に残した。今回初めて分艦隊に用いたデラミン准将はやはり堅実で、相手の突進を抑え込む防御に妙があるのを発見できたのは幸いだ。

そして力の差を思い知った連邦は早々とソロモンに引き戻った。

「あはは、よりどりみどり、片づけまくるさね！ 小娘ども、こんな真似ができるかい！」

などとシーマ・ガラハウ中佐が言えば、

「次ッ、ほら次ッ、始末するわ！ こんなはつきりした勝負に持ち込んでくれたのは上等、見てなさいよ！」

と言いなながらツエーンも、そしてクスコ・アルも鬼気迫る戦いをしている。

本気だ。

シーマ・ガラハウ中佐も余裕で挑戦状を叩きつけたかのようだが、その一方で乗りなれたゲルググ・マリーネから少しでも性能の高い試作改良型ガルバルディに替えているのだから周到である。指揮官を長くやっていただけのことはあり、案外と策士な一面があるらしい。だが結果は皆が没面を作ることになる。

肝心の戦果、撃墜数で見ればそんな各人の違いより、明らかにラアのエルメスが上だった！ 段違いに高いNT能力の結果だ。

これと比べるのは残酷だろう。そのため、勝負的なことが立ち消えになったのは良いことだ。お門違いの勝負をして相手の心を折ろうとしたシーマ・ガラハウも、それを返り討ちにしようと思気込んでいたツエーンとクスコ・アルも拍子抜けだ。

しかし順調なのはここまでだった。

予想外の苦勞がここから待ち構えていたのだ。

ソロモンに近づくにつれ、周辺岩石に設置された浮遊砲台の弾幕が濃くなる。こんなところで損害を出したくない以上、MSを近付けさせるのはリスクが大きい。

ましてエルメスはこの場合無力だったのだ。

エルメスの大きさからくる物理的な問題は如何ともしがたい。つまり、いくらNT能力で先読みができて、弾幕が一定以上濃くなれば避けることはできず、必ず被弾してしまう。これは意外な弱点だった。

まずは艦砲を使うか、それこそヴァル・ヴァアの主砲で岩石ごと吹き飛ばして砲台を沈黙させなくては話が進まない。

「くそっ、勝手知ったるジオンの要塞、地の利があると思ったのは間違いだった。連邦が鏡の兵器で広範囲制圧を狙った気持ちがよく分かる」

それでも単に攻略するだけなら充分可能で、多少時間がかかるだけの話で済む。

しかしそれではいけない。

いつソロモンの連邦軍が全兵で撤退するため一気に発進してくるか分からない。連邦はジオンの動員した戦力を見て、ソロモンを守り切れないと悟っただろう。それなら死守せず、ア・バオア・クーと同様にソロモンを放棄するのは自明だ。

ジオンはできる限り素早く内部にMSを入り込ませ、その一斉撤退を妨害する必要がある。でなければ綺麗な撤退をされてしまうのではないか。一番まずいのは、砲台の破壊に時間がかかって、連邦に準備万端の時間を与えてしまい、ようやくこちらがMSを突入させたタイミングで一斉にソロモンから脱出されたら最悪だ。

ん、いや待てよ。連邦としては当然それを狙っているはずだから

……

俺はゆつくり確実に浮遊砲台を叩く。

頃合いを見てMSを一度に発進させ、ソロモンに突入させる。

その十分後、予期した通りソロモンから連邦の艦艇がありつたけ出てきた。

「やはりか。連邦め、かかったな！　こちらがソロモンにかかりきりになったと思っただろう！」

ここで俺は全てのMSに命じる。

「全機、ソロモンから飛び出て連邦艦を追え！　足で跳ねて行け！」

グズグズすると連邦艦が加速してMSでは追いつけなくなる」

はっはっは、俺は欺瞞を仕掛けたのだ！

MSをソロモンに突入させた際、制圧にかかるフリをさせた。決して内部に入り込まず、姿を隠すだけで直ぐに飛び出られる態勢に準備させておいたのだ。どうせソロモンは無人になっているだろうから造作もない。

連邦は、ジオンMSがソロモンを制圧すべく中枢目指して内部を深く進み、簡単には出てこれないと考えただろうが。

ジオンMSの群れが脱出した連邦艦に迫る。

長く加速すれば艦の方がMSより速くなるのは当たり前だが、短時間の機動力ならMSが上である。これで後背にMSの大群を受け、連邦艦としてはあまりにも絶望的な態勢になってしまふ。もちろん連邦にも直掩MSはまだまだ残っているが、戦場をできるだけ早く離脱しようとしている以上、うかつに出すわけにもいかない。

その一方、俺は艦隊を指揮して連邦艦隊の頭を押さえにかかると。先回りし、テイベの主砲の射程に収めた。

勝負ありだ。

もはや連邦艦隊は詰んでいる。俺は撃滅ではなく降伏させるのが狙いなので、まだ撃たず降伏を勧告する。

しかし連邦艦隊は降伏に応じなかった。やむを得ず俺は威嚇の一連斉射を仕掛けたのだが、何を血迷ったか反撃してきたではないか。そこで俺は敢えてガトーやカリウスを前面に出し、おまけに赤いゲルググJで出ているシャア少将にまで要請し、敢えて連邦艦隊に見せつ

けるような動きをしてもらった。要するにジオンのエースパイロットの勇名を利用して心を折る。

ついに連邦艦隊の抵抗は尽き、降伏の受諾を伝えてきた。

思わぬ反撃によって少しは取り逃がしてしまったものの、残り二十五隻に及ぶ艦艇と人員、そこへ満載されていたソロモンとア・バオア・クーの守備兵、計三千もの将兵を手に入れる。

過度に破壊することもなく、連邦兵の大半を捕虜にするというオマケ付きでソロモン攻略戦は完遂だ。

ソロモンは再びジオンのものとなった。

しかも、これで宇宙における連邦の拠点はルナツーだけになってしまったのだ。ジオンの勢力圏は、ルナツー及び中立のサイド6周辺宙域以外の全てに及ぶ。

さて、次のジオンの手は捕虜交換とそのためが発生する謀略戦だろう。

俺の出番はない。あるはずがない。

あくまで現場指揮官が俺の本領だ。そういうことは餅は餅屋、謀略の得意な人間に任せておけばいい。

そう思っていたのは甘かった。

否応なく謀略戦に巻き込まれる羽目になった。

しかも、俺でなければならぬという理由付きで。

第六十五話 知らぬが仏

その一方、宇宙の違うところでは短くも激烈な戦いが展開されていた。

ソロモンから脱出してきた連邦艦の撤退支援のため、やはりルナツーから艦隊が来ていたのだ。

指揮はもちろんこの男である。

「…… ステファン・ヘボン君、作戦には重大な齟齬があったようだ。ア・バオア・クーから撤退させ、ソロモン要塞に合流させたのは、より大きな戦力にして安全に退かせるためだった。それなのにまたも要塞に籠ってしまったのでは何の意味もない。ジオン側の準備ができる前にソロモンを諦め、さっさと退くべきだった」

「それはそうですが、閣下……」

「特にソロモンにやってきたジオン軍はコンスコン大将らしい。コンスコン大将なら、半端なことをするはずがない。やれやれ、私の指示が甘かったようだね」

「ワイアット閣下、結果として、どちらの要塞の守備兵も助けられなかったのは残念です。しかし最悪というわけではなかったではありませんか」

「確かに君の言う通りだろう。この少数だけでも救えるのは幸いだ。ソロモンで少しは戦ってくれたおかげで、私が間に合ったとも言えるのだから。しかし、悔しいね」

ソロモン宙域から連邦艦が十隻近く逃げ出し、ルナツーに向かう途上にあつた。

それをデラーズ艦隊とカスペン技術大隊が捕捉したのだ。直ちに追跡にかかる。

ほとんど同時にグリーン・ワイアットの連邦艦隊も到着したのだ。

ソロモンからの脱出艦隊を巡り、一方は阻止するため、一方は支援するため対峙することになる。

ここにいるジオン側艦艇は計四十隻程度、連邦側は脱出してきた艦艇を戦力に入れずとも五十五隻だ。これはルナツー駐留連邦艦隊の1/3にもなる。

先の本国会戦で負け、ルナツーへ命からがら逃げ込んだ連邦艦は結局百隻以上あったが、後から来たものほどボロボロだ。結果として状態のいい六十隻を除いて廃棄せざるを得なかった。損傷艦を下手に大規模修理をしたのでは、新しく造るよりもコストが高くつくからである。つまり本国会戦で連邦が被った被害は最終的に甚大なものになつていたので。

その残った分だけが元からのルナツー駐留艦隊四十隻と合流している。

だがそこから連邦は恐るべき工業生産力を活かし、次から次へと地球から新造艦を送り届け、再び数が膨れ上がってくる。今、このルナツー周辺だけでもジオン全軍より多いくらいだ。フォン・ブラウンを失ったのは確かに大きな痛手になり、生産ペースに陰りが見えるようになったものの、連邦はジオンと比較にならない底力を持つ。

そして今回、ワイアットは単一作戦行動としては破格の動員をしている。残兵を綺麗に收容するためには大兵力を用い、可及的に速やかに行うのが一番、そのセオリーを守ったせいだ。

グリーン・ワイアットはこの戦力差と自身の戦術能力の自負により負けはないと踏んでいる。

だが一方、ジオンのデラーズも敵味方に闘将として知られた男だ。

あつさり尻尾を巻くことはない。

「せっかくコンスコン大将がソロモン攻略戦を成し遂げたのだ。それをジオンの完勝にできるかどうかの瀬戸際、儂が何もせず引き下がれるか」

兵は拙速を尊ぶ。

それを知るデラーズは下手に戦術を検討して機を逃すのではなく、直ちに激烈な砲火とMS展開を仕掛け、先手を取る。

このデラーズ艦隊に呼応し、カスペン技術大隊からもMSが発進していく。

「連邦め、調子に乗ってんじゃないよーっ！」

どちらが調子に乗っているのか分からない。

技術大隊も、もう慣れたものだ。アクト・ザクを駆るキャラ・スーのメチャクチャな高機動とその度を越したハイテンションには。

戦闘は激しい。だがしかし、戦局としてはまるで動いていなかった。いかにジオンが猛攻を仕掛けようとも連邦の艦列に隙はできず整然としたままだ。防御陣は乱されるやいなや綺麗に修復され、崩れるところを見せないのだ。

艦隊がそんな状態にあるため、理想的にコントロールされた対空砲火に牽制されてジオンMSはあと一歩対艦攻撃に届かない。

更にMS同士の戦いもまた一進一退、均衡は崩れそうになかった。むしろ対空砲火に誘導されたジオンMSに撃墜が相次ぐ。

実のところそれも予想外である。

ジオンのMSはやつとガルバルディの量産が進み、主力機としての位置にいる。もうドムやザクは脇役に押しやられた。そのため全体としてMSの性能は上がり、連邦の新鋭機ジム・スナイパーIIに対しても優位を保っているはずなのに。

確かにジム・スナイパーIIは強力かつ高精度のビーム兵器を持ち、おまけに俊敏さも兼ね備えたMSかもしれない。だがガルバルディはパワーと防御力に優れた傑作機である。

デラーズは膠着した戦況に苦渋の決断をすることになった。無理押しは長く続けられない。歴戦のデラーズには均衡の裏に見えるものがある。今はいなされて若干の距離を取られ、どちらにも大した損害はないが、いずれはこちらに損害が増えるばかりになる。

「無念だが、仕方がないか。連邦にはまだ余力があるようだ。消耗戦にするわけにいかん」

そう言いながらデラーズは後退に転じるよう命じた。

それに対しワイアットもまた追撃などすることなく、ソロモン脱出艦を収容すると綺麗に引き下がった。

「ステファン・ヘボン君。ジオンにも人材はあるものだね。先ほどの結構な猛攻だったよ。もう少し続けば私も涼しい顔をしていられないところだった」

「閣下、ご謙遜を」

「まあね。ともかく作戦は終了、こちらも欲張ることはなく、ルナツーに戻ろう」

砲火が収まり、誰もが安堵する。

しかし一部の人間にそれは当てはまらない。カスペン技術大隊の解析部にはまだ仕事が残っている。

妙なデータがあるのだ。

先ほどの戦闘で、連邦軍のMSはジム・スナイパーIIを主体とし、少数のジム・コマンドを加えて成り立っているはずだった。

しかし、それに当てはまらないMSの存在が示唆されているのだ！この戦闘に技術大隊が加わっていたのは幸いなのか不幸なのか、だからこそ見つけられたかすかなデータだった。

恐ろしい想像をすると、連邦はジム・スナイパーIIに飽き足らず、早くも新型機を開発したのかもしれない。その先行タイプを実戦テストしている可能性がある。

解析結果が出た。担当していた技術大隊モニク・キャディラック特務大尉がそれを知り、慄然とする。

「ああ、そ、そんな…… 本当に、連邦のMSに新型がいた……」

まさかそんな、嘘だと思いたかった。

しかしこれは現実、めまいがするような衝撃を受けた。

「し、しかも、二種類も……」

俺はソロモン攻略の後、いったんズム・シティに戻った。

その後腰を落ち着ける間もなく、何とサイド6への航路にいる羽目になった。乗っているのはもちろんティベだが随伴するのは他にチベ三隻だけだ。

捕虜交換を連邦政府が受諾した。

そして、水面下で協議された結果、その捕虜交換は中立コロニーであるサイド6で行われることになったのだ。これはどちらにも受け入れられる結果である。ジオンとしてはもちろん地球表面での捕虜交換は論外であり、このこと降下することはできない。かといって連邦としてもジオン制宙権下の宙域で行うのは認められない。

必然的に数少ない中立地帯であるサイド6を使うしかない。

それに先立ち、調印式もまたサイド6で開かれる予定である。これはテレビ中継もされる大々的なセレモニーになる。なぜなら格好の政治ショーになるからだ。南極条約以来、連邦とジオンでこういった接触はなく、嫌でも注目を集めるだろう。

調印式に地球連邦からゴツプ大将が出席するとの通達が来た。他にも随伴する将がいる。しかし逆に言えば軍部の者しか来ず、政府高官が含まれているわけではない。これはおかしなことで、おそらく彼らは宇宙に行くのを怖がって逃げたのだろうと推測が付く。

まあ連邦の都合のことはさておいて、とにかくバランス上からいえばジオン側も大将クラスが調印しないと格好がつかない。

当然こちらはキシリア閣下が出席するはずだった。地位が大将であるということの他、政治ショーならキシリア閣下しかいないではないか。微妙な呼吸を読んでの駆け引きなどは常人にはできない。

しかし不思議なことにキシリア閣下は別の用事があるとのことであられなくなった。

結果的に俺にお鉢が回ってきたというわけだ。適材適所などまるで無視、大将という地位のためにこんな似合わない任務をするとは……

もうさっさと済ませたい。

後から思えば、俺はこの時もつと考えるべきだったのだ。

キシリア閣下がこの最重要のセレモニーに来ることができないほどの用事、それほど重要な用事が何かということ。

第六十六話 セレモニー

平和への第一歩とも受け取れるこの捕虜交換調印式、連邦側を刺激しないよう俺は最小限の艦数で来ている。

それは必要だ。

ただ調印すればいいというのではなく、ジオンの礼節を見せよう。

そもそも地球連邦はジオンを独立国家と認めていない節がある。勝手に辺境が蜂起し、挙句の果てに開き直り、国と名乗っているならず者集団とでも感じているのだろう。悪くすればコロニー住民を洗脳して手先に使うテロリストと違っていても不思議ではない。国と名乗れば対国家間の話になり、悪行を糾弾されずに済むという姑息な計算をした悪党という見方もできる。

ここはジオンもまたきちんとした礼儀を守る集団という印象を与え、少しでも信用を得るべきなのだ。

艦が少ないといっても、俺の護衛としてはガトー以下最高のメンバーが一緒なので実際の戦闘力に不足はない。もしも万が一連邦が騙し討ちを企んでも返り討ちにしてやれると思えるメンバーなのである。実際にはそんな事態にはならないだろうが。

さてテイベが進み、サイド6宙域に入ったところで意外なところから待ったがかかる。

「ジオン公国重巡洋艦に告げる。こちらはサイド6宙域管理局。捕虜交換調印式に向かうコンスコン大将の艦隊と見受けられるが、どうか」

「いかにもそうだ。入港許可を求める」

「では監察官として私カムラン・ブルーム監察主任の同乗と、決められたルートのみを通るため、水先案内に従うことをお願いしたい」

おや、とは思ったが俺に否はない。

素直に従い、テイベにカムラン・ブルームという監察官を乗せる。無線のやり取りではいかにも居丈高だったが、実際会うとメガネをか

けた気弱そうな若者だった。おそらく侮られないように敢えて気を張って話をしていたのだろうか。

「監察官、以前はこんな手続きは必要無く、ジオン軍艦でもコロニー宇宙港に直接入れたように思うのだが」

「おっしゃる通りですが軍用艦には厳しく保安対策が強化されましたので。万が一にでも核のような広範囲殺傷兵器がコロニーに持ち込まれてはなりません」

「なるほど、核か……。いや、そういう心配があることは理解した」

「一応お伝えしますが、連邦艦にも同様の処置をお願いしています」

案外と丁寧な監察官に、少しばかり聞いてみたいことがあった。

「連邦とジオンを同等に扱っているという理解でよろしいか。しかし、以前はどちらかというサイド6はジオンへ友好的だと思っていたが、それは違うのだろうか。同じスペースノイドの立場としてのよしみがある。ジオンのために、例えば、艦船修理のため浮きドックを提供していたはずだ」

「政治的な話は避けてもらいましょう。私が話せるのは、入港の監察においては連邦もジオンも平等に扱うという事実のみです」

「分かった。サイド6がそのまま中立を保つのもいいだろう。逃げ場のないコロニーで戦いに巻き込まれるのは悲惨だからな。特にサイド6のコロニーは大きな湖を持っていて、宇宙で一番豊かに地球の生態系を再現していると聞いている。白鳥さえ飛んでいるとか」

「ええ、それはもう！ 美しい湖はこのコロニーの自慢です」

俺は監察官の言葉から、コロニー愛といふべきものを感じ取った。ここに住んでいる者もまたふるさとに愛着を持っているのだ。

もう一つ分かったことがある。おそらくサイド6の上層部は以前のジオン寄りの立場から中立に移行しているのだろう。連邦とジオンの力関係を敏感に感じ取り、ジオンが地球から叩き出されたことで立ち位置を変えているのだ。それは理解できる。誰しも負け組に入り、とばっちりを受けたくはない。

しかし俺はこのことをむしろプラスに捉えた。

ふらふら立場を変えるなら、逆にジオンが優勢になればまた擦り

寄ってくるに違いない。下手に首尾一貫しているよりよほど見込みがある。いずれジオンがこのサイド6を味方につけなければいけない時がやってくるのを考えればその方がいいのだ。

まあ、まずはジオンの優勢を見せなければ話にもならないし、それが一番難しいのだが。

さて、入港し一日置いてセレモニーだ。有名な湖も白鳥も見そびれた。

逆に、今見えているもの、それはやや太り気味の老人である。

ゴツプ大将だ。

連邦軍の補給や生産を一手に担い、後方業務のカリスマとも呼べる人物である。事実上、ゴツプ大将がいなければ連邦軍は回らないとされている。もちろん、連邦側の戦略策定にも関わっている。

その横にがっしりした体形の将、ジョン・コーウエン中将与紹介を受けた者がいる。俺は先のグラナダ攻略戦に参加していないために顔を知らなかった。ジョン・コーウエンはグラナダで一時ジオンに捕らえられたが、捕虜交換とは別に既に外交ルートを通じて引き渡されていたのだ。

セレモニーが始まり、俺はそれらの連邦の将と真向かいにいる。

こちらは俺とテラミン准将である。連邦よりちよつと見劣りする気がしないでもないが、こんな形ばかりのセレモニー、さっさと調印して済ませれば問題ない。

他の随員も見ないことにしよう。

こちらには護衛のガトー、ケリイ、クスコ・アルも同席しているのだが、連邦側の随員はもつと多い。おまけにこの場にはサイド6の高官もいるため、いちいち覚えていられない。

サイド6で一番大きいホテルの広間で行われていたのだが、隙間なく人がいる。

クスコ・アルなどはやはり場違いなところにいるせいかわ落ち着きがない。

ガトーは微動だにせず、連邦の将を前にして眼光鋭い。さすがだ。

俺はといえば調印とか握手とか慣れない作業をするのに必死である。俺がビビり症だというわけではなく、誰でもこうなる、と思いたい。しかし、アツプにされているだろう調印の指先が震えて見えないか心配、とまで思うのは我ながら小物だと思う。

「コンスコン大将、高名な貴官に会えて光栄に思つとる。先の本国会戦の作戦立案者と聞く」

ようやくそういつた作業を済ませ、天井のでかいシャンデリアを見ながらぼーつとしていると、ゴツプ大将から話しかけられたではないか。

「いえ、こちらこそゴツプ大将に会えて光栄です。ジオンを戦略で苦しめる立役者であるゴツプ大将、お手柔らかに願いたい」

それだけで、別に中身のある話をすることもない。お互い形ばかりのセレモニーでたまたま会っただけだ。

調印自体はすぐに終わり、次に空虚な謳い文句が続くが、聞き流せばいい。どうせ実務の話し合いはついている。

ジオン側から一万四千人の連邦捕虜を引き渡す。これは主にヘンケン・ベツケナーらを含むジオン本国の捕虜収容所にいた者たちだ。それに加え他の捕虜収容所の者、そしてソロモン攻略戦で得た捕虜、おまけにレコア・ロンドなどのグラナダで捕虜待遇とされていた者を合わせた数字である。

これとびつたり同数のジオン捕虜が帰還してくることになる。

捕虜の数自体は、今でも連邦に囚われているジオン捕虜の方が少しばかり多いので、連邦が揃えるのは簡単だろう。

初めから急戦を選択したジオンは地球表面に戦線を拡大し過ぎ、そのあげく取り残されてしまった兵が多いからだ。結果的に捕虜になつてしまう。もちろん、そればかりではなく今も抗戦し続けている者たちがいる。ジオンのために奮闘し、主にインド洋からアフリカ方面に合流しつつ戦っていると聞いた。

とにかく、捕虜交換が済めばジオンはかなり強化されるだろう。残念なこと引き渡せる連邦の将官が豊富ではないためジオン将官級

の返還は望めないのは仕方がない。

逆に佐官クラス、尉官クラスについて言えばジオンが引き渡す分だけ連邦もまた相応の者を用意したことが渡された名簿で分かる。連邦はあまり姑息なごまかしをするつもりはないようだ。俺はそれを連邦の誠意と見た。

捕虜の受け渡しはどちらにもリスクがないように考えられ、引き続きサイド6を使いながら少しずつピストン輸送されるはずだ。

セレモニーは済んだ。

だが俺はすぐにサイド3へ帰る、というわけにいかなくなった。テイベに戻って出発しようとした瞬間、ドズル閣下から通信が入ったせいである。

「おおコンスコン、ようやくテイベに戻ったか。いやなに、サイド6が盗聴する可能性があるのではな、ホテルの方へ通信をするわけにいかなかった。テイベなら安心だ」

「それはドズル閣下、用心に越したことはありません」

ドズル閣下らしからぬ用心深さだな、と少し驚いたが、通信画面を見れば納得がいった。

画面にはキシリア閣下も映っていたのだ。

テイベに戻るまで待つようにしたのはキシリア閣下だろう。

それはそれでなぜその二人が並んで俺に通信をよこしたのか謎だ。しかも、それほどまで用心深くしなくてはならず、俺がサイド3に戻るまで待てない用件とは。

「それでドズル閣下、どういったことで……」

「用件というのはだな、コンスコン、ジオンを裏切ってはくれないか？」

「はあ？ え？ ぁー！ーッ！ そ、それはいったい何を、ドズル閣下!!」

「何を驚くコンスコン。あ、いや済まん済まん。言い方が悪かった」

俺はあらゆる意味で驚いた！ いやもう驚いた!!

ジオンを裏切る？

いったいなぜ、この俺が？

しかも敬愛するドズル閣下がそれを言ってくるとは！ おまけに当たり前のように言っているではないか。

俺があまりに混乱して二の句が継げなくなっていると、画面の隅にいたキシリア閣下が険しい顔をして、おまけにドズル閣下に思いつきり体当たりしてどかした。

さすがのドズル閣下も画面から消えていく。痛くないか。

今度は画面の中央に立ったキシリア閣下が言う。

「しかしここまで…… ドズルの兄者は説明が下手だとは思っていたがこれほどとは…… やはり最初から私がしゃべるべきだった。コンスコン、今の意味について説明しよう」

「は、はあキシリア閣下、よく分かりませんがお願いします」

「コンスコン、この捕虜交換で連邦から工員が紛れ込んでくるのは避けられない。それはお前も分かるだろう。まあ、だからこそ連邦は捕虜交換を受諾したのだろうからな」

「それはそうでしょう。連邦も間抜けばかりではなく、この機会を狙って工員を送ってくるでしょう。残念なことに大勢の中から工員を見分けるなど事実上不可能ですから」

「もちろん逆もまた考えている。情報戦だ。抜かりなくジオンからも工員を送り込む。ただしそれはスパイとしてのもので、連邦政府をひっくり返そうというものではない。そこまでの工作はさすがに不可能だ」

俺にも少しずつ分かってきた。キシリア閣下の考えというものが。「ただし、連邦としてはジオンをひっくり返そうとするだろうな。きつとそうするだろうことには確信を持っている。独裁体制を倒す方がその逆より楽だ」

「実際、それを行うには……」

「もうお前なら分かるだろう、コンスコン。連邦側はザビ家でないお前に接近し、取り込み、ジオンに反乱を起こさせようと企むに違いない」

「なるほど……」

「お前は戦術家として名が売れている。それこそ、お前が自分で思っているよりずっと大きく。もちろん評判通りの実力を持ち、指揮下に置く戦力も多い。おまけに反乱を起こす大儀名分を作るのは簡単だ。連邦と和平をしてサイド3を発展させるとでも言えばいかようにも名目が立つ」

「それはまあ……」

「連邦側は反乱が成功しても失敗してもどちらでもいいのだ。ジオンが弱体化すれば何でもいい。本当に連邦にとってはノーリスクでおいしい作戦だろうな」

「……」

「だから囮としてサイド6に留まれコンスコン。そして返り討ちにするのだ」

ややこしいことになったなあ。

だが、キシリア閣下の話はこれで終わりではない。続く話こそキシリア閣下ならではの本当の謀略だった。

それは思いがけず、ジオンの暗部へとつながっていたのだ。

第六十七話 仕掛けられた罠

キシリア閣下の話はだいたい分かった。

しかし、そもそも俺はそういう策謀には無関係で生きてきた人間なので、上手くできるかは疑問なのだが。

「分かりましたが、そんな微妙な情報戦を……」

「コンスコン、そう構えるな。実際は難しい話ではない。単に、接触してくる人間から連邦の工作員らしいのを選別し、意図を察し、話を合わせながら言質を取らせなければいい。そうして安心させたところで逆に情報を引き出すだけのことだ。なに、そう考えれば大したことではなく、誰でもできる」

「……………」

何が簡単だよ!!

どういう基準で考えたらそう言えるのだろうか。キシリア閣下もたしいがい自分基準じゃないか。

「……コンスコン、大丈夫な理由は他にもある。実は連邦の工作員が仕掛ける情報戦の主力はそこではない。主力は別のところに仕掛けてくるはずだ。まあ、そこへは私が関与し、連邦の意図を砕いてやるわけだがな。もうその仕込みは終えている」

話をもつとややこしいことになっている。

連邦の工作は俺の方だけではなく、別のところにもあるのか。そっちの方が主だと。

俺はキシリア閣下の絶大な政治的能力を信頼していないわけじゃない。工作への対策をしているというなら、たぶん大丈夫だろう。口ぶりではキシリア閣下自身も対処は万全に思っている。

だが連邦もバカじゃなく、それなりに考え手筈を整えてくるはずだ。俺は話をできるだけ詳しく聞いておきたい。

「完全に納得したという顔ではないな、コンスコン。ではお前にも教えておこう。いや、最初から教えるつもりでいた。連邦は連動して動

いてくるだろうからな」

そしてキシリア閣下は妙なことをしたではないか。

画面の片隅に別の映像を流し始めたのだ。

今回の策謀に何か関係があるのだろうか、これはいったい何だ？

一人の幼児が遊んでいる姿ではないか！ それは可愛らしい男の子に見える。国家間の情報戦の話をしているこの場にはそぐわない、あまりにかけ離れた平和過ぎる映像だ。

一体何の意味がある？

「工作というものは、どこを狙ってくるか分からないから対処が難しく、逆に言えば、狙いどころが分かれば簡単だ。そのためにはエサを用意して、そこに誘導すればいい。そして連邦はこの幼児へ絶対に食いついてくる。それほどエサなのだ、コンスコン」

「はあ？ こ、この幼児に連邦の工作が…… ちよつと意味がわかりかねます」

本当に意味が分からない。

何で軍人や政治家でなく幼児？

キシリア閣下は何を言いたいのか、早く説明してほしい。

「この幼児の名はグレミー・トト。ギレンの兄者の隠し子だ」

「え？ な、何ですと!! そんな、ギレン総帥に隠し子が！」

これは驚いた！

あのギレン総帥の隠し子！ ああ、それならば話は分かる。

今のジオンのやつと固まったドズル・キシリア体制にヒビを入れ、再び派閥争いで自滅させるのには恰好のコマではないか。

連邦がこの情報を得れば、なるほど食いつかないはずがない。

このグレミー・トトという幼児を拉致し、うまく旗印に仕立て上げるだけでジオンは割れ、恐ろしいほどの混乱に叩きこまれる。そんなことは火を見るより明らかだ。

「これは面白い。コンスコン、思慮のあるお前ですらそういう反応か」「そう言われますのは？」

「もう一度よく見ろ、コンスコン。その子はギレンの兄者と似ても似

つかないではないか」

「た、確かに……」

それは金髪の子供、しかも顔立ちはかなり整っている。

「で、ですが、ドズル閣下のミネバ様の例も考えますと、父親に似ず美形の子供になる可能性も」

「ドズルの兄者に限りなく失礼な物言いだな。……私も同意するが」

一時画面から消えていたドズル閣下が少し顔を出してきた。ミネバという言葉に反応したのだろう。

「まあいい、結論から言えば本当に隠し子である可能性は限りなく低い。ギレンの兄者はああ見えて奥手なところがあるのだ。そういうことはしていないだろう。そしてこの話が仮に本当だとしたら、始末の手際にしても甘すぎて、とうてい兄者のすることとは思えない。ただしトト家に大金と共に兄者が預けたのは事実だ。それでトト家の者は兄者の隠し子だと本気で信じている」

「そういうことでしたか……」

「思い出したがコンスコン、確かそっちの艦隊にギレンの兄者の秘書を匿っているそうだな。結構な美人だとかいう情報も聞いているぞ。その者に聞いてみればいい。もし兄者に愛人がいたら秘書にまで隠し通せるはずはないだろう」

「ふえっ、キシリア閣下、それは人間きが悪い…… 総帥秘書課の者たちが艦隊に転属してきて、後方業務をしてもらっているだけのことです！」

おっ、という顔をしてから、ドズル閣下がニタニタしている。「そうなのか、コンスコン」とでも言いたげだ。

いやいやいや、キシリア閣下は面白がってわざとそういう言い方をしたのだ。

まったく、誤解を招く言いようだ！ 俺が好んで秘書課を引っ張ってきたわけじゃない。

それはともかくセシリア・アイリーンは確かにギレン総帥に心酔していた。総帥に愛人の存在などないに違いない。

「たぶんギレンの兄者は頼まれたか何かでそういう処置をしただけなのだろう。兄者は競争相手には微塵も隙を見せない厳しい人間だった。だから政治力で競う私などにはひどく冷たかったが、逆に頼りにしてくる人間にはとても甘いところがあつたのだ。例えばガルマのような者にはな」

そう言うキシリア閣下の表情は一瞬陰った。

ガルマ・ザビ、皆に愛され、ザビ家のマスコットであり、一家をかりうじて繋ぎ止めていた唯一の結節点だった。それを失つたのは悲劇だ。

「話を戻そう、コンスコン。おそらく連邦はお前を懐柔して反乱を起こさせるか、グレミー・トトを利用してやはり反乱に持ち込もうとするだろう。いや、どちらも連動して行う。想像だが、お前が洩つた場合に強力に背中を押すため、大義名分に使える情報として持ち出すのだろうか。私が連邦の立場ならきつとそうする」

「おそらく、おっしゃる通りでしょう」

「ついでにコンスコン、理解してくれるだろうがお前でない対処を頼めない理由はそこにある。仮にデラーズだったら大変なことだ」

「……」

「人というものは、自分の信じたいものを信じる。悲しいことにそれが人の性だ。デラーズならばグレミー・トトをギレンの兄者の遺児と信じ込み、あっさり反乱を起こしてもおかしくない」

同じことを俺も思った。

もちろんエギーユ・デラーズ、有能かつ謹厳、そして固い信念を持つ素晴らしい漢だ。

しかしそれが却って仇をなし、グレミー・トトを目前にすれば、それを奉じて立つだろう。

ジオンの全てをグレミー・トトの手に帰すべく。

ギレン総帥の遺志を正義と信じ、そのために自分を投げうち、殉ずる覚悟で。

「分かるかコンスコン、反乱を起こす可能性が低いお前だからこそ話

したのだ」

これはキシリア閣下にしては余計な言葉だった。ほんのわずか引っ掛かる。

俺にそれを教えたのは、俺を信頼してという形を取りながら、実のところ牽制の意味で話しておいたような感がある。キシリア閣下のそのニュアンスを感じ取り、俺は決して不快というわけではないが、心では明確に否定の言葉を考えてしまう。

「可能性が低い」ではなく、無いのだ！

キシリア閣下は俺とドズル閣下の間柄を理解していない。

俺はかつて無一文に近い状態で、タダで入れる唯一の学校であるサイド3士官学校へ入学した。それしか道がなかったのだ。

その後、士官学校の一学年下へドズル閣下もまた入学してきた。

俺は当初、ザビ家のお坊ちやまが入ってきたと思った。箔を付けるだけのために名家の子息が士官学校に入学することはよくある。背伸びをしたい次男三男に特に多い。それらは勇ましいフリをしたいだけで、戦いなど考えもしない者たちだ。卒業してもどうせ軍には入らず、淑女の関心を引くためでうち上げの武勇談を語るだけの。

そんな先入観で誤解し、線が細くて青白くて、いけ好かない奴が入って来たと思ったものだ。

ところがドズル閣下はそれとは真逆だった！

親の威光もクソもなく、腕力と漢気でのし上がっていった。たちまち暴れん坊チームの棟梁になり、筋を通さない奴には相手が生徒だろうと教官だろうと闘うのだ。

俺はちよūdその頃、クラスメートの苛められっ子を助けたことから、逆に苛めグループに目を付けられていた。もちろん俺も反撃するが向こうは数の圧迫を加えてくる。そんな時、ドズル閣下のチームがそれを聞きつけ、苛めグループを文字通りの意味で叩き潰してくれた。

それが最初の縁だった。

以来、俺もドズル閣下のグループに入り親交を深めてきたのだ。

卒業後、俺は一般士官としての道を行き、ドズル閣下はもちろん名家ザビ家の中枢として士官学校を押しえる立場になっていった。

そしてこの独立戦争だ。俺は偶然にもドズル閣下の指揮下に入ることになった。だがそこから一度も転属せず、勝って戦果を上げ続け、ドズル閣下はそんな俺を正当に評価してくれた。とんとん拍子に昇進し、いつのまにやらドズル閣下の懐刀と言われるようになっていく。しかし何のことはない、その立場は懐かしい士官学校の頃に戻ったようなものだ。

俺とドズル閣下にはそんな十年にも遡る付き合いがある。ドズル閣下からゼナ様を口説くにはどうすればいいか相談されたのもたぶん俺だけだろう。

裏切るなど最初からあり得ないのだ。

もう一つ言えば、それは俺だけじゃない。ドズル麾下の将兵はみな閣下を敬愛している。

正直俺から見ると、ドズル閣下の立てる作戦は穴があることも多い。決して万能でも常勝でもない。だが、そういう欠点も含めた上での敬愛だ。それはやはりドズル閣下の勇氣と漢気のせいによる。

特にルウム戦役において、ドズル閣下は沈みゆく艦や将兵を思つて涙を流した。これだけでも凄いが、しかし真に驚いたのは戦いが終わった後のことである。

ドズル閣下は、「全ての戦死した者に向けて、敬礼！」と命じた。

これは語り草になっている。

ジオン兵のみならず、この戦いで亡くなった連邦兵のためにもそれを命じたのだ。

敵である連邦兵だって人間だ。己の身命を賭し、信ずるところに殉じ、散つていったのは同じである。

これは武人の魂がなければ出るはずのない言葉ではないか！

俺も、他の者も、それを聞いて心が震えたものである。

キシリア閣下の麾下にいるキマイラ隊やサイクロプス隊の者たちもキシリア閣下を深く敬愛していると聞いているが、こっちだってそ

れに決して負けていない。

第六十八話 宇宙はカレイドスコープ

そういうわけで俺はいつまでもドズル閣下の下で働くのだ。

俺がしばしそんなことを考えていると、キシリア閣下の話はもう先に進んでいる。

そこから紡がれた言葉もまた、驚くべき内容だった。

「ところでコンスコン、連邦がなぜジオンの独立を許さないか考えたことがあるか」

「えっ、そ、それはもちろん、ジオンが独立するため、戦争を仕掛けてきたからでは……」

「そう思うか。私の考えではそれは結果に過ぎない。順序が逆だ。連邦の方がずっと以前から、ずっと根深く、ジオンを許さなかった。その理由はありていに言えば社会構造の問題だ」

「じゃ、社会構造……」

いきなり何だろう。オウム返しになるのは俺でなくとも当たり前前だ。

キシリア閣下の話は飛び過ぎていてついていけない。

戦争の理由だつて？ 一体何の話になるのか。

「そうだ。宇宙に移民が始まった初期、フロンティアといえれば格好良いが、実態は過酷だった。地球は余った人口を宇宙に追いやったのだ。文字通りの棄民、宇宙に捨てた。その時に生じたわだかまりが今日にまで引きずられ、スペースノイドの潜在的な恨みになっている。しかし私はそれを話したいのではない。もっと直接的なことなのだ。移民の混乱から格差というものが生じてしまった。それはコロニー発展の陰でさらに拡大されていき貧富の差はどんどん広がっていった。そして固定化され、最終的に特権階級というものが誕生し、それが今日まで引き継がれてきた」

「……」

「それはサイド3に限った話ではないが、一番はつきりしていたのは

サイド3だ。その特権階級の中でも突出した地位と権力を持つ六つの家がある。具体的に言えば我がザビ家と、その他にラル家、カーン家、サハリン家、セロ家、トト家、この六つだ。実質的にこの六大家がサイド3に君臨していたといつてよい」

そう、ジオンの社会体制は歪み切っていた。

この階級社会は、何か大きな物事でもない限り是正できないほど根強く。

それは俺も聞くまでもなく分かっている。

「お前もよく知っている通りだ。そしてそれを嫌っていたはずだな。コンスコン、いやコンスコン・セロ」

「！」

「皆はコンスコンと呼び、あたかもコンス・コンであるかのように誤解している。いや、させられている。だがお前の名はコンスコン・セロ、名門セロ家の者だ。それどころか次期当主の地位にいた。しかしお前は何を思ったかその座を弟に譲り、あつさり家を捨てて出て行った。その後まもなく士官学校に入ったのだったな」

「確かにそうですが……」

「誤解してほしくないが、そのことを咎めようというのではない。咎めるべき理由は何もない。私だって偶然に知ったのだ。実はお前とは別に、同じように名を捨てた者がいるのだが、その者の行方を辿っていくうちに知っただけだ」

「……」

「ついでに言えばお前は家柄の重みと階級社会に嫌気がさしてそんな無謀なことをしたのだろうか。私の勝手な想像だが、そんなに外れてはいないだろう。まあその気持ちは分からんでもない」

ここでそんな話になるとは思わなかった！

俺自身の話とは思わず冷や汗が出る。

「ドズルの兄者は知っていたんだろう。たぶん、家柄が何だというのか、お前はお前だ、それでいい、とでも言ったのではないか？ ドズルの兄者の言うことなど容易に想像がつく。皆がコンスコンとしか

呼ばなくなったのも兄者の配慮かもしれない。私には理解できないことだが、男の友情、とかいうものなのだろうか」

ドズル閣下はキシリア閣下から顔をあさつての方に向け、目を泳がせている。口笛を吹かないだけマシかもしれない。

それはともかくキシリア閣下の言うことは当たっていて、ドズル閣下はまさにその通り、生まれなんかよりどういう人間になりたいかの方がはるかに重要だと言ってくれたものだ。

「繰り返す言うが、それが悪いと言っただけだ。だがな、一言言っておきたい。個人的な忠告というやつだ、コンスコン。出自というのは自分が思った以上に付きまといつて離さないものだぞ。宿命というのは、重く、抗えない場合が多い」

キシリア閣下の声は、最後の方で思いのほか沈んでいる。

まるでその運命というのが自分について言った独り言のようだ。もちろん、高慢で陰湿だったセロ家なんかの比ではなく、ザビ家に生まれた宿命というものがどれほどのものか俺の想像の範疇にはない。

しかし、キシリア閣下は自分の中に沈みかけた思念を振り払い、言いたかったことの核心へと話を紡ぐ。

「お前についての話はここまでだ。次に進めよう。連邦はジオンの階級体制をずっと苦々しく思い、いつか手を入れ、御しやすいように作り替えようと考えていたろう。その証拠など言うまでもない。考えてもみる。連邦は軍組織を作っていたが、多数の宇宙艦を備え、明らかに地球向けではなく宇宙移民に向け着々と準備されていた。その上、コロニーに駐留していた連邦軍の大半はサイド3に置かれていた。これはおかしなことではないか。確かにサイド3には先端工業が置かれ、それなりの力があるのは確かだが、サイド1やサイド2の方が古くてずっと人口も経済力も上だろうに。これはサイド3を狙い撃ちするつもりだったと考えて間違いない」

キシリア閣下の話は壮大になってきた。

確かに連邦は、ルナツーを除けばサイド3に最も規模の大きい兵舎や輸送基地、そして武器庫を置いていた。ガルマ・ザビとシャア・ア

ズナブルの暁の蜂起はよく成功したものだ。

「連邦はサイド3をひっくり返すか、潰すか、どちらかをやると決めていた。今回の戦争はジオンが仕掛けたものだが、タイミング上そうならただで逆になってもおかしくなかった。いずれ戦争は起きるものだったのだ。そして大事なことを言うが、戦争はジオンの社会体制を連邦が許容できるようにしなくては終わらない。今はもちろん連邦はジオンに勝って完全占領をしてから作り替えるつもりだろうが、しかしそれ以外なら、つまり戦いで多少勝とうが負けようが和平にはならない」

「……　そ、それでは、いったいこの先どうすれば……」

「そう、ジオンが例え優勢になっても連邦は和平のテーブルに着くとすらないだろう」

キシリア閣下は、このままでは落としどころが無いと言っているのだ。

頑張つてジオンを優勢にしようとしている俺や将兵たちには救いのない話である。もちろん逆に連邦を完全占領してやれば問題ないだろうが、そんなことは戦力的にも人員的にも考えられない。かつてジャブローまで攻め込んだのは超短期戦だったからで、再び繰り返すはずもない。しかもそれでも連邦は和平など言いはしなかった。戦争はどちらかが消滅するまで戦うのは現実的ではなく、どこかで手打ちにすべきなのに、それができないのか。

しかしキシリア閣下の言うところは何ら矛盾がなく、否定のしようがない。

「戦いを始めるのも政治、終わらすのも政治だ。市民感情的に地球の者どもはジオンを相当恨んでいるだろう。ブリテイッシュ作戦の傷跡はあまりに深く、ジオンはやり過ぎた。しかしそんな感情が和平への最大障害になるのではない。政治はあくまでも連邦政府の高官が決めることであり、奴らには末端の者の犠牲も感情もどうでもよく、思想や体制といった物の方が大事なのだ」

もうお腹いっぱいだ。

キシリア閣下の政治能力と洞察力はよく分かったが、多少ここで整理しておきたい。

「キシリア閣下、話が壮大で、今の情報戦の話とはどこに繋がるのでしょうか」

「済まん、口が滑らかなになり過ぎたな。実際にすることは単純なことなのだ。私はグレミー・トトを利用してジオンの特権階級を潰したい。この機会を利用して、グレミー・トトの話を特権階級にリークして、それに乗ってきた者どもを一掃するのだ。それは六大家であっても例外ではない」

「それはしかし、一歩間違えば争いの種になるのでは…… この情勢で揉め事など」

「もちろん、実害が出ないようにこの私がコントロールする。うまいことにザビ家の責任には決してならない。なぜなら実行犯は連邦工作員だからな。これは笑える道化になる。連邦は調子よく各家を説いて回るだろう。我らのためにせいぜいタダ働きをしてもらうのだ」
俺も少し分かった。

さっきのキシリア閣下の話は連邦との最終和平に向け、ジオンの社会体制を変え、下地を作るつもりなのだ。

悪辣にも連邦の工作を逆利用することで。
しかし、肝心のことが抜けている。キシリア閣下自身については？
それにザビ家は他にドズル閣下、そして次世代にはミネバ様がいる。いったいどうするのだろうか。

そういえば、キシリア閣下はグレミー・トトを利用するがトト自身を害しようという考えはないようだ。

しかしそこまで聞いても答えは返してくれないような気がした。

「思い返せば、ジオン・ズム・ダイクン、彼は偉大な政治家だった。ラル家の後ろ盾があったとはいえよくあそこまでできたものだ。しかも目指すところは権力ではなく社会改革だった。つくづく惜しい。足元を掬われることさえなければ…… そして後継ぎが同じような

理想主義者であってくれたなら」

何を言うのか？ ダイクンの後継ぎ、その二人の子は死んだはずだが？ 旅客船事故で。

「皮肉なことにダイクンの目指したものはギレンの兄者が実行した。それが功績と言えるのだろうか」

「それがギレン総帥の、功績でしようか」

「私の言う功績は軍事的な作戦のことではなく、演説の上手さやカリスマ性でもない。特権階級を叩き、権力も財力も取り上げ、国庫を潤したことについてだ。結果、財政が改善したが、それ以上に庶民からの人気は熱狂的なままでになった。苦しい戦争でもジオンの結束が崩れず、これまでやってこれたのはギレンの兄者の演説が理由ではなく、これがあったせいだ。権力を求め独裁への道筋を作るのが目的だったのはダイクンと真逆だが、やることが同じだったとはな」

「……」

「その速さはさすがギレンの兄者、天才といえる。ダイクンのような穏健派では成し得なかつたろう。しかしそれでも半分しか完成していない。特権階級というのは姑息で隠れ蓑を作るのが上手いからな。だから残りは私が片付けてやるのだ。いやコンスコン、また話が逸れてしまった。お前はサイド6で連邦の工作を翻弄してくればそれでいい。お前に期待するのはそれだけだ。しっかり頼む」

捕虜交換調印式のセレモニー、その模様は全宇宙的にテレビ中継されていた。

万民にとつて喜ばしいニュースであり、兵舎を含めてどこにも検閲なしで流されていた。

それは俺の知らないところでいくつかの波紋を呼んでいたのだ。

「あれは…… 確かにあの男だ!! 見間違いじゃない。ザクの改良型に乗っていた男だ!」

ここは連邦軍士官用宿舎である。

その自室でそう叫んだのはライラ・ミラ・ライラだった。

あの時のことは片時も忘れていない。激しい大会戦の中、MS戦で

自分に勝ち、次に自分を救ってくれたジオンMSのエースパイロットのことだ。士官権限でデータベースにアクセスすると、名はアナベル・ガトー、ジオン軍の少佐であることは突き止められた。しかしそれ以外のプロフィールは知りようがなく、行き詰っていた。

思いがけないところで再び姿を見ることができようとは。

「捕虜交換調印式に在るといふことは、ジオン将官の護衛といったところか。MSの操縦だけではなく地上戦もできるということだろう。そして将官から充分に信頼されていることが分かるな。しかしまあ、何とも涼やかな男だ……」

分析などついでのことだ。

あの時、ノーマルスーツのバイザー越しにわずか見えた顔、それを今はつきりと見た。

ガトーの生き様をそのまま現すかのような佇まいに見とれてしまう。それこそ自分で自分が苛立たしくなってくるほどに。

この日、ライラ・ミラ・ライラは心が騒ぎ、一人でグラスを四杯も空にして酔いつぶれることになった。

その夜半のことである。

呼び出し回線のけたたましい音で叩き起こされた。

さすがにライラ、一瞬のうちに、それが緊急出撃を命じる音ではなく通信呼び出しの音であることを聞き分けた。しかしそれならばそれで、上官への通信画面で寝ぼけた顔をするわけにいかない。

「ライラ・ミラ・ライラ中尉、こんな夜半に済まない」

「いえ、いつなりと」

敬礼で答えたが、ライラには不思議なことがある。いつもの上官が画面に見えるのだが、横にもう一人の者がいて、そちらから話かけられたからだ。

「私は連邦情報部の者だ。君に秘密任務を与える」

宇宙は、いつでも万華鏡カレイド・スコップのようなものである。

第六十九話 道先

連邦情報部の者からライラ・ミラ・ライラに指令内容が伝えられていく。

「現在、サイド6にジオンのコンスコン大将が逗留している。任務とこののはこのコンスコン大将への情報戦についてだ」

「情報戦とは？ それは情報部の者がすること、まさか一介のMS隊長のするようなことではありませんまい」

いつものライラらしくなく多少の反発を見せた。最前線のMSパイロットには体を張って戦う誇りがあり、こそこそした情報戦の真似事などしたいわけがない。

第一、なぜパイロットの中でも自分に命じられるのかが分からない。

「そう思うのは道理だな。ライラ・ミラ・ライラ中尉、誤解してほしくないが、やってほしいことは口先を使う情報戦そのものではなく、実行する者の護衛だ。そしてサイド6にいる前線隊長が何人かいる中でも君が適任なのだ。君はMS隊長として常に冷静かつ的確な判断をしてきた実績がある。地上戦や銃撃でも相当の腕前と聞いている。まさにうってつけだ」

「なるほど、口先を使う任務ではなく人物の護衛、でしょうか……」

「ただの護衛役ではない。監視役も兼ねている。この際オブラートに包むことはやめよう。その者が連邦の指令に反した時、速やかに始末してほしい。それが主な任務だ」

「そ、それは！ もっと手っ取り早く言えば、裏切者が出たらその始末、ということでしょうか」

「理解が早くて助かる。そのためには手段を選ばずとも構わない。サイド6は中立区域だが、多少の騒ぎなら揉み消しは可能だ、ライラ中尉」

それで話は終わる。日程と詳細、準備物などについては後ほどライ

ラに送られてくるだろう。

だが、暗くなつた画面の向こうではライラの知らぬところでもう少しばかり話が続いていたのだ。

「情報部はいったい何を考えておいでですか！」

ライラの上司が情報部の男に食つて掛かる。実はもう一つ裏があつたのだ。

「最善だよ。連邦にとっての最善だ。君も今さら決まり切つたことを聞くものだ」

情報部の者は顔色も変えない。感情を隠すのが上手いわけでもない。本当にそう思っているから言つただけだ。

「し、しかしですね、ライラ・ミラ・ライラは優秀なMSパイロットで部下からの信頼も厚く、希少な者であることは……」

「希少だから何だね。君の単なる情のように聞こえる。そんなことを言えばジオンの大将ならもつと希少だ。比べたらお釣りがくるどころではない」

「……」

「別にライラ中尉が失われると決まつたわけではない。コンスコン大将对する策謀がうまくいけばそれで万々歳、連邦にとって慶事だ。ライラ中尉も無事に帰ってくる」

「うまくいかなければ……」

「それでもライラ中尉があつさり後始末を終えれば問題ない。心配はあくまで騒動が大きくなつた場合だ。その場合、ライラ中尉もコンスコン大将も丸ごと消えてもらう」

「そ、そんなことを、しかもサイド6で」

「体裁はつけられる。中立地帯で揉め事を起こしたのを遺憾に思つた連邦が速やかな收拾を凶つたということで。なに、中立地帯で一般士官が揉め事を起こすなんて珍しいことではない。その当事者を過剰に罰した際、巻き込まれた人間も出てしまった、それだけのことだ」

連邦も馬鹿ではなかつたのだ。二重三重の罟を張ることを忘れるはずはない。

「それよりも君は周辺にMSの配備をしつかりやつておきたまえ。そ

れとルナツーから応援の艦隊が来ることになっている。それを使つてサイド6を秘密裏に包囲するのだ」

そして宇宙の別のところでは、捕虜交換式についてまた異なる感想を漏らす者がいた。

「調印式を見たかね、ステファン・ヘボン君。嬉しいことにコンスコン大將は私の願った通り壮健のようだよ。調印式も無事終わってなによりだ」

「ワイアット閣下、そんなことよりも……」

「おお、君も気付いていたとはさすがだね。ゴツプ大將の横にジョン・コーウエンがいるとは…… 思いがけないことだ。この二人はいつの間接近していたのかな。たぶん、捕虜交換前にゴツプ大將がゴリ押しをしてジョン・コーウエンを取り戻させたことが契機なのだろうが」

「閣下、これは油断なりません！ ジョン・コーウエン中將は元から独白色の強い人物、あまり他と組むことはしなかつたはず。それが今、ゴツプ大將に近づいているとなればそれなりの意図と計算があるでしょう」

「そう、その通りだ。おそらくは自分の考えにこだわり、実現させようとでも思っているのだろう。そのために近付いたのか。確かコーウエンはガンダムに執着し、量産化すべきとうるさいくらい叫んでいたのではなかつたかな」

「ガンダムの量産化…… し、しかしコストが一桁二桁、いやそれ以上変わってくるのでは」

「コストは度外視、ガンダムさえあれば戦争を終わらせられると。そしてスペースノイドどもをそれで封じ込めておけるのだと。だが、君の言う通りコストを考えたら狂気の沙汰だ。今ではその計画は凍結されているはずだろう。連邦技術部のガンダムMKII開発も中止され、ジョン・コーウエンがフライングでアナハイム・エレクトロニクスに発注したガンダム開発計画も頓挫したと聞いている。資金が回収されない恐れがあればアナハイム・エレクトロニクスも動くわけは

ない。そこが不満なのかもしれないな。ジョン・コーウエンは何としてもガンダムを造りたい。これは、ゴツプ大将の口利きで本当にガンダムが造られるのかもしれない」

「閣下、ジョン・コーウエン中将の思惑はそれとして、逆にゴツプ大将の考えは明らかです。連邦軍の中で減っている将官の中から味方を増やしたい、といったところでしょうか」

「そんなところだろう。だから恩着せがましく早めに取り戻したのだな。連邦の将は地球上のことしか知らないものばかりで、そうでない者の中でもダグラス・ベーターは死に体だ。そして私ときたら決して御しやすい人間ではなく、ゴツプ大将からすればたまったものではないからね。ステファン・ヘボン君、私としてもジャブローに潜ってばかりでここで一緒に紅茶も楽しめない者を上官に仰ぐ気などあるはずもない。私でさえ、ゴツプ大将はせっかくサイド6まで来たのだからルナツーに督戦に来ると思っていたのだよ。将兵の忠誠を高めるのに絶好じゃないか。しかし私の見込み違いだった！」

「閣下……」

「ゴツプ大将は宇宙で戦う将兵を見るよりもジャブローの巢が恋しかったようだ。私は連邦軍人である以前にコロニー落としをしたジオンを赦さない。しかし、彼らの気持ちの百分の一は分かった気がする。地球で安穩としている者どもから指図を受けるのは、宇宙で暮らす者からすれば決して気分が良くはない」

「それでも通信だけは届けてきましたか……」

「ああ、サイド6に少しばかり艦隊を割いて送れという話だろう。確かに捕虜交換への備えだとか言っていたが何を今さら……だがそんなことはどうでもいい。連邦上層部は私を煙たがっているのか、肝心なことは見事に蚊帳の外にしてくれた」

「蚊帳の外とおっしゃいますと？」

「まさに蚊帳の外だよ。この捕虜交換を利用して、連邦もジオンも謀略戦を仕掛けるに違いない。当然のことだね。しかし私は全く関与できず、頼まれもしない。謀略戦の方こそルナツーで暇を持て余している私がやるべきなのに」

「それはそうでしょうが、閣下……」

「ジャブローの連中は誤解している。悔り過ぎなのだ。なるほど物量では我が連邦が圧倒していて、いずれこのつまらない戦争にも勝つだろう。だが個々人の力量は別だ。ジオンにはコンスコンのような傑出した将がいるし、前線で戦うパイロットの能力も高い。ならば謀略戦でもジオンに有能な者がいてもおかしくないというのに」

「ご不満は分かりますが…… 我々も仕事が全くないわけではないと存じます」

「ステファン・ヘボン君、それはひよつとするとMSのことか。技術部と生産管理部から時々来る注文のことだね。宇宙での耐久性、整備性、そして戦闘力のデータを取って送り返す、単純なことだ」

「しかしその実戦データはここでしか取れず、それは今後のMS開発を左右する大変貴重なものであるかと」

「いつもガラクタじゃないか。やたらとエンジンの数ばかり増やしたものだとか、そんなものばかりでセンスの欠片もない。技術部にバランスという言葉を教えてやりたいね。航続距離だとか整備性だとか、そんなものは実戦テスト以前に考えるべき問題だろうに。いつぞやは装備を目一杯取り付けただけの物が送られてきた。索敵も操縦性も悪くて使い物にならなかったね。あれだけメーターが多ければそうもなるだろう。結果はあわや同士討ちのところだった」

「確かに、そういうものもありましたな」

「技術部もいったい何を考えて仕事をしているんだろうか。予算ばかり食って結果がそんなものとは。ジョン・コーウェンではないが試作を百回繰り返し暇があればガンダムを一つ造った方がマシに思えてきた」

「駄作がほとんどなのも否定できませんが、直近の戦闘で試したMSはそれなりだったではありませんか」

「あの二種類のことかな。確かに君の言う通りだ。我が連邦の予算食いもあの二種類だけはそこそこ良いものを造ったようだ。私も見ていたが試作機にしてはだいぶ使えそうな予感がする。名前は確かジーラインとジム・カスタムだったかな。私見を言わせてもらえばジ

ム・カスタムの方を勧めたい。整備性も操縦性も良いと記憶に残っているからね。私のその注釈を書き添えて、データを技術部に送っておきたまえ、ステファン・ヘボン君」

第七十話 俺のキャプテン

おお、あれがサイド6の湖か！

さすがに自慢の湖だ。大きく、見応えがある。

水はさざ波を立て光をまき散らしている。

とても美しい。

湖という造形も素晴らしいのだが、スペースノイドにとって大量の水というものは豊かさの象徴であり何とも心がなごむ。なぜなら宇宙にある水は水ではなく、冷たい氷の塊にしか過ぎず手にも触れられない。

残念なのは白鳥もいるという話だったが、今は別のところに移動しているらしく見られなかった。しかし観光には充分だ。サイド6の湖は本当に希少で、このまま平和であれかしとさえ思う。

俺はそういう景色を満喫できる気分にいる。

サイド6における連邦とジオンの捕虜交換は済んだ。千人ずつ十回にも分けた捕虜の輸送は問題なく終わり、そして約束通り連邦から同数のジオン捕虜を受け取った。今、順次本人照合をかけているが、それが終わると彼らは正式に捕虜という身分から解き放たれる。どんどんそんな者が増えているのだ。

このサイド6に喜びの声が溢れているようで、実際にそんな声が聞こえなくとも何かしら気分が良い。

だから今、護衛のガトー、カリウス、ケリイ、そして急な仕事でも取り次げるようセシリアも連れて湖の観光に来ているのだ。どうせ忙しい艦隊勤務は目前に迫ってきている。一瞬でもくつろいでおくのはいい。

俺以外の者も大変楽しそうだ。ガトー、カリウス、ケリイは旧知の仲、そしてセシリアはもちろんガトーの近くにいられて嬉しくないはずがない。

まあ、逆に地団駄踏んでいる者が数名いるのは確かだろうが。

皆は明るい気分の中、湖に到着する直前で連邦兵と思われる少年を助けてあげてもいる。ここはサイド6だ。ジオンが連邦兵を助けて悪いことは何もない。中立地帯ならではのことである。

降雨予報を聞いていなかった連邦兵がジープを運転していたらしいが、突然の雨で生じた泥の深みにタイヤを取られて動けなくなっていた。そこを通りがかつたのだ。

「おい若造、エンジンに無茶をさせるな。こりゃあ牽引しないと出られんぞ」

主にケリイ・レズナーが助けている。メカにやたらと詳しいこともあるが、こいつは見た目とは違って面倒見が良いのだ。困った者を見捨てない性質なのである。特に未来ある若者には。

「あ、ありがとうございます！」

その連邦兵は栗色の天然パーマで小柄だった。よく見るととても若く、民間人と言ってもおかしくないほど線が細い。そしてこちらのジオン軍服を見ると一瞬で硬直し、とてもぎこちない礼を言つてすぐに去っていった。まあ、連邦の学徒兵か何かだと思うが、ジオン将兵と直接顔を合わせれば緊張もするだろう。

「あれが、ジオンのコンスコン大将…… あ、どうして分かったんだろう……」

そんな連邦少年兵の声が俺に届いているわけではない。

湖の観光を終えて戻ろうとした時だった。

驚きの事態が待ち構えていたのだ！

水面の反射光に照らされながら、近付いてきた者たちがいた。三人だ。

中心にいた一人が、よお、とでもいいたげに挨拶代わりに右手を上げている。

俺のよく知っている人物である。

俺は叫んだ。もちろん、喜びの叫びだ。

「キャ、キャプテン!!」

「おつ、コンスコン、いやコンスコン大将様、元気そうだな。いやご壮

健で何よりです」

おどけて見せている。

一応俺の地位に敬意を払っているように見せ、実のところ親しみを隠そうとしていない。俺に会えて嬉しいということが伝わってきて、なおさら俺も笑顔になる。

その男はまるで変わっていない。

髭をつけ、豪放磊落な雰囲気を漂わせている。もちろん中身もそう
だ。

かつてはいつもユーモア溢れ、漢気があり、戦いに臨んでは常に勇者だった。そして艦長職でありながら皆にキャプテンと呼ばれ親しまれていたものだ。

そんな俺の様子を見てガトーがその者は誰なのか聞きたがっている顔をした。一目で分かったのだろう。勇士は勇士を知る、そういうことかもしれない。俺はガトーと皆に紹介する。

「この人はスベロア・ジンネマン大尉だ。私が士官学校を出て初めて乗り込んだのは小さな哨戒艦だったが、その艦長だった」

「おいおい、小さいは余計だ。それにその艦で海賊の仮装巡洋艦を叩きのめしたこともある」

「そうだった……」

「そうだったじゃない。お前が最初にミサイルをぶち当てたんじやないか。その一発で皆はミラクルコンスコンと呼んでいたが、後は一発も当たらず、まぐれコンスコンと言うように変わった。なあに、俺に言わせれば同じまぐれでも最初に当たりを出しただけで大したものだ」

俺は褒められているのか貶されているのか分からないが、とにかくスベロア・ジンネマンが生きていてくれて嬉しい。

というのもどうしてここで再会したのかおおよそのところは分かっている。

スベロア・ジンネマンは地球表面作戦に加わっていたからだ。

「それでキャプテン、サイド6にいるということはやっぱり捕虜交換で？」

「そうだ。アフリカ戦線に辿り着いたまでは良かったが、そこで運を使い果たしたようだ。連邦に捕まっちゃまい、ようやく出てこれたところよ」

スベロア・ジンネマンともあろう歴戦の勇士まで捕虜になったのだ。地球でのジオン軍の苦境は察するに余りある。ジオンはノイエ・ビッター少将の指揮でアフリカ戦線に集約させつつあると聞いているが長くもつはずはない。

そんなことを考えながら、俺はジンネマンの横にいた二人を見る。どちらも俺は会ったことがない。一人はクリーム色の髪を横分けにした二十代くらいの女性、もう一人は紫がかった髪をした十二、三歳くらいの女の子だった。

「キャプテン、こちらの二人は？ ええと、奥様とお子さんで？」

「あ？ ああコンスコン、言い忘れていた」

俺はなんの気なしに残りの二人について尋ねた。おそらくスベロア・ジンネマンが捕虜から解放されるのを待ちかねて、危険を冒してまでサイド6にやってきた妻子なのだろう。確かジンネマンは本国に妻と一人娘がいたはずだ。そして娘をたいそう可愛がっていたと記憶している。

「俺の妻がこんなに若いはずはない。ええと、妻の妹のライラで、いつも世話になっている。そしてこっちは娘のマリーダだ」

なぜだろう。

なぜかジンネマンは目を泳がせたような気がした。

一瞬言いよどんでもいる。まさか嘘だとでもいうのか？

おまけにライラと紹介された女は一言も言葉を発していない。

口が動くが言葉にならないのは、明らかに動揺しているからだ。それがありありと分かる。

しかしその一瞬後のことだった。

可愛い声が響き、雰囲気をいっぺんに和やかにした。

「うん、マリーダだよ！ おじちゃん、よろしくね！」

「おじちゃんという年では…… あ、いや、お兄さんとはさすがに言えんしなあ……」

俺の疑問は氷解した。

そのマリーダという娘は十二、三歳くらいだろうか。紫がかった髪をした将来の美人さんだ。

それが全く邪気のない声でそう言ったからだ。

腹芸などできる年でもなく、そして嘘などどこにもない、見える年齢よりもいつそう子供らしい声だった。

これは紛れもなくジンネマンの娘だろうな。

そして俺はジンネマンと楽しい会談を済ませ、また近々会う約束をする。なんでもジンネマンは捕虜交換の最初の方で解放されたので部隊編入まではまだ暇があるそうだ。

最後はまたマリーダが手を振る可愛い姿を見て終わった。

その一方、どんどん胸の中が重たくなる人間がいた。

ライラ・ミラ・ライラである。

ジオンのコンスコン大将に対する謀略を担当するスベロア・ジンネマンに護衛兼監視として付いている。

ジンネマンは見たところ質実剛健、頼もしい勇士である。どうしてもそんな者が謀略なんかさせられているのか…… たぶん妻子か部下の命を握られているのではないか。そして脅されて。

そこは上から教えられていないし、分かりようがない。だがジンネマンが選ばれた理由ははっきりしている。なるほどジオンのコンスコン大将の元上官で、これ以上なく厚い信頼を置かれている人物なのだ。

そして自分はどういうと、あれほど練習したのに会談では上手な演技どころか何とかボロを出さずに済みますだけで精一杯だった。やっぱりMS乗りには無理のある任務なのか。

最初は上の空といていい。

ライラにとって非常に個人的な理由で。

なぜなら、ついにアナベル・ガトーと顔を合わせたからだ！

今この時、小さな画像では分からなかった立体感、細かな表情がよく見える。向こうが全く分かっていないのは当然、戦場で邂逅した時

にこっちの顔を見られていない。

そしてガトーの引き締まった表情、信念のある漢の顔にますます魅き付けられてしまった。

それはもう自分でもどうしようもない。

一つ気になったのは傍にいた女だ。

その女は明らかに戦場とは無縁な風貌であり、非常な美人だ。秘書か何かだろうと思う。それならコンスコン大将に付いている秘書としか考えられない。しかし、その女はなぜかガトーの方をチラチラ見ているではないか！ 見てはいけなと思うっていても見てしまう、というような。これが非常に気に障る！

だがしかし会談の途中から別の戦慄に取って代わられていく。

それは自分と共にジンネマンに付けられたもう一人の人間、紫髪の少女のせいである。もちろん初対面の少女なのだが作戦前に見せられたファイルにはこう記されていた。

年齢：13歳

氏名：無し 仮称としてロザミアと付けられていたが、作戦前にマリーダと刷り込み済み

状態：スベロア・ジンネマンの娘と刷り込み済み 今のところ安定的 そしてスベロア・ジンネマンのためなら確定的に自己犠牲

この少女は強化人間というものだったのだ！

作戦を行うにあたって、ジオンのコンスコン大将を安心させるために付けられた娘役だ。そして何か変事があれば進んで捨て駒になるように付けられた。

いや、作られた。

こんな、強化人間など初めて見た。

見かけはただの少女なのに、何がどうなっているのだと最初は半信半疑だった。

だが少女はあまりにも自然にスベロア・ジンネマンの娘になっているのではないか！

もはやマリーダそのものだ。

吐き気がする。

自分が正義と信じた連邦軍は怪物だったのか。

こんなものを作る組織を自分は仰いでいたのか。

連邦軍がそのような非人道的な研究をしていることは風の便りで知っていた。おまけに先頃はジオンを追われた優秀な科学者が一人亡命してきて、連邦研究所に加わっているとも聞いたことがある。そのため研究が飛躍的に発展していると。

今までは他人事だったがその成果を今、まざまざと見せつけられた。

何が強化人間だ！ 何が強化だ！

強化人間というのは正しい言い方ではなく、これでは、人間でさえない！

このマリーダ、あるいはロザミアという少女は不憫だ。

正に道具であり、そこに人としての尊厳は何もない。

記憶を塗り替えられるということは全ての意思も感情も塗り替えられるということだ。

今までの人生は無しにされる。

それどころかこれからの人生も無しにされる。

誰かの思いのままに動く人生となるのだ。しかも、そこに追いやった人間を憎むことさえできず、その人間のために動かされる羽目になる。しかも自分の意思で進んでやるように変えられてしまつて。

囚われの奴隷でさえ自分の感情という最低限の抵抗ができるが、それさえも許されないとはい。

これではただ死んだ方が百倍マシだ。

自分が敵にもしも記憶を塗り替えられたら…… その結果敵に忠誠を誓い、心の底から自分の意思で敵の手駒になることを選ぶことになる。それを想像したら寒気がする。

軍が強くなるためなら何をやってもいいというのは違う。それは絶対の間違いだ。

宿舎に着くと、ライラは本当に吐いた。

第七十一話 お目付け役

数日後、ジンネマンから俺に連絡があった。

なんでも前回は見そびれてしまった白鳥が今湖にいるから、見てみないか、とのことだ。正直言えば湖観光は一度で充分、ことさら白鳥は見なくてもいい。

だがせっかくジンネマンがそういうのだから、また行ってみようという気になった。

そしてまた観光をするのなら今度は少し違うメンバーの方がいいだろう。

メンバーといえば、俺はサイド6に少数戦力で来ているが、だからこそメンバーについては選び抜いている。特にMSパイロットはシヤリア・ブル、ツエーン、カヤハワらを厳選して連れてきている。

そこで二度目の湖観光はガトーとツエーン、カヤハワを伴って赴いた。もちろん予想した通りツエーンは二つ返事でOKだ。犬の尻尾ならそれこそちぎれんばかりに振るといえるのだろうか、首を縦にぶんぶん振っていた。

当然のことだがその陰では荒れている人間が存在する。特にクスコ・アルはまたしてもガトーと一緒に観光から外されてしまい荒れ方も尋常ではない。

ただしこれは仕方がない。全員をいつぺんに、というわけにいかないではないか！

それでは全員が全員とも満足しないだろう。最高指揮官なのにとこういう気苦労をさせられているんだか俺は。

そしてジンネマンの方はというと、やはり前回の二人を伴っていた。

「よお、白鳥が見えるだろ」

「キャプテン、やっぱり白鳥がいたんだ。湖には白鳥が似合うなあ」

「あつちに湖の展望台がある。近くで見えるぞ。行ってみないか」

俺は何も疑わずジンネマンの誘いに乗り、ガトーとツエーン、カヤハワをそこに置いたまま展望台に移動した。それは湖の上に飛び出ている、棧橋の上の通路を行くと広間になっている形のものだ。そこからはほぼ全周に渡って湖が見渡せる。

白鳥を見た後、俺は何気なくジンネマンの方に視線を戻す。

するといつになく険しい表情のジンネマンの顔があった。少しばかり嫌な予感がする。

「コンスコン、ちよつと話がある」

「何だろう、キャプテン」

「連邦の手は意外に伸びているぞ。気を付けろ」

「ええっ？」

「連邦は俺を使って工作をやるうとしている。よく考えついたといえはよく考えた。しかし間抜けと言えば間抜けだ」

な、何だって!!

地球連邦は俺に工作を仕掛けてきた？

いや、そのことだけなら以前キシリア閣下に警告された通りだ。予期したことがその通りになっただけと言える。

しかしこの出会いが連邦の仕掛けだとは！

連邦がスベロア・ジンネマンともあろう勇士を工作員に仕立て上げるとは驚く他ない。そして同時に分かることがある。ジンネマンが俺にそれを打ち明けるといふことはやっぱりジンネマンなのだ。

俺の尊敬するキャプテンは俺を騙すことなど決してない。そこは間違つてなかった！

だがジンネマンの言葉に素早く反応した者がいた。先日妻の妹だと紹介されたライラという女だ。

「貴様！ それを言うとはどういうつもりだ！」

「連邦の嬢ちゃん、芝居は止めにしようや。どのみち俺もあんたも下手な芝居だったけどよ。言っとくが俺は連邦のための工作などする気はねえ」

しかし、ライラという女は口だけではなかった。

バッグから素早く拳銃を取り出ししている。サイド6は銃の携帯が許されているが、これは明らかに護身用などではなく実用重視の軍用拳銃だ。精度も威力も普通の拳銃のものではない。ライラはジンネマンの言葉によると連邦軍人なのだろう。

そして流れるような動作で拳銃を構える。

体は横になり、腕と拳銃が一直線に見える。美しくも凶悪な姿だ。

「スベロア・ジンネマン、連邦を裏切るつもりか！ はつきりと返事をしろ。返答如何によつては処罰する！」

「俺は最初から裏切っちゃいねえよ。痩せても枯れても俺はジオンの人間だ。最初っから最後までそうさ。連邦がどう考えようがそこは譲れねえ」

「貴様ぬけぬけと……」

「俺は死んでいい。いや、死なないとお前ら連邦は妻子に手を出すだろ。そら、お目付け役の仕事を果たすんだな」

そこでライラ・ミラ・ライラはジンネマンに向けて警告射撃をした。上方かつきり1mを銃弾が通過する。

当てるつもりなら簡単だという意味表示だ。腕は確かであり、この部分では連邦がライラを選んだのは正しかった。

だがライラの性格までは適格ではなかったのだ。いきなり撃ち殺すことには躊躇してしまっている。ライラの見るところ、スベロア・ジンネマンはジオン側とはいえ、尊敬すべき勇者、己の身命を賭けコンスコンとジオンのために行動している。

できれば殺したくはない。

「やれやれ、あんたは硬いだけの女かと思ったら案外情け深いんだな。いい女だ。だが今は情けをかけなくていい。俺がそう望んでいるんだ。恨むことはないから早いとこやってくれ、連邦の嬢ちゃん」

俺の方はこの二人を見ていて、やっと理解したのだ。

ジンネマンはジオンを裏切らない。その代わりに自分が死のうとしている。話から察するにたぶん妻子を殺すとか脅されているのだ

ろう。そしてジンネマンとしては自分が生きている限り妻子に危険が及ぶが、しかし、死んで利用価値が無くなれば妻子が助かる可能性がある。

くそッ！ 連邦め、なんという卑劣な！ 家族の命で脅しをかけるとは！

そしておそらくブラフではない。サイド3における連邦情報網は深く、そんなことまで実行できる力を持っているということを示している。

一方、ライラという女はお目付け役、ジンネマンが裏切ればそれを始末するということか。

ジンネマンの言葉では情け深いとのことだが、見ると確かに迷っているようだ。だが決して甘い表情ではない。それなりの軍人の表情を崩していない。構えた銃を下すことはなく、殺すのがやむを得ないことと踏ん切りをつけた瞬間、きつと撃つ。

そしてライラの祈りを込めた警告は意外な事態を引き起こした。

突然、そこへ飛び出してきた人間がいたのだ！

「お父さんに何をするの！ やめて！」

マリーダ、いやロザミアだった。

ジンネマンの前に立ちふさがってきた。

ライラも思わず再び警告射撃を撃ってしまったが、それは横1mを通過する。その銃声が湖に響き渡ってもなおロザミアはジンネマンの前に立って動かない。

微塵も恐れがない。断固とした決意。

この事態にライラは宇宙で戦うよりも冷や汗が流れる。

植え付けられた偽物の親子。偽物の記憶。そんなもののために少女は死を厭わないのだ。人は記憶から意志を生じさせ、疑うことを知らない。

本当ならジオン側がジンネマンを疑って始末しようとした際にこの少女は盾になるはずだったのかもしれない。それが本来の用途なのだろう。しかし今ジンネマンそのものが連邦を裏切り、逆に始末を

しようとしたライラの邪魔をするとは。皮肉なものだ。

「俺の知らない娘さん。お前は俺の娘じゃない。こんなことをする必要はないんだ。どいてくれ」

「何を言ってるのお父さん。私はマリィダよ」

「お前はマリィダじゃない。俺のマリィダじゃないんだ」

「え、お父さん、どうかしちやったの？ ずっとずっと、私はマリィダだよ。いつも一緒にいたじゃない」

「よく考えてみる。娘だというなら、幾つも思い出があるはずだ。思い出せるのか」

ロザミアの目が泳いだ。

否定の言葉が勢いよく口から出かかったが、それが次第にゆっくりになり、最後まで紡ぐことができず動きが止まる。

そこから精神が少しずつ崩壊していった。

「私はマリィダよ。マリィダなんだから……」

言葉だけでなく動作まで糸の切れた操り人形のように完全に止まった。

この事態から立ち直ったのはライラだ。もはや迷うことはない。ロザミアを掠めるかもしれないが、ジンネマンを仕留められる射撃コースを見定めた。今はジンネマンを倒し、この哀れな少女を救い出すのを優先する。

「よく分からないが、俺のキャプテンを撃たないでもらおう」

ここで俺も介入する。一応拳銃を取り出し、ライラに向けている。まあ、俺の腕ではおそらく対抗するのは無理で、撃ち合えばきつと負ける。そこには自信がある。

だがしかし、時間さえ稼げればそれで充分なのだ！

余裕で事態を好転させられるのは分かり切っている。走って数分の距離にガトーらがいるのだから。さっきのライラの射撃音が聞こえれば直ちに来るに決まっている。

俺はあまりに樂觀し過ぎていた。

「な、何?！」

それを真っ向から否定する物体がライラの背後に白い糸を曳きながら落ちてきた。

湖に落ちた一瞬後、激しい音と水柱を噴き上げるではないか。それが次々に飛んでくる。

「こ、これは、ロケット弾か？　こんなものがどうして!!」

その数瞬前、ガトーらも舌打ちをしている。

ライラの撃った銃声が聞こえるや否や、もちろん直ぐに銃を取り出し湖に出た展望台へ向けて走っている。

しかし、視界の隅に入ってきたのだ。

「連邦のMSがいるぞ！　4、5、総勢6機！　最初から囲んでいたのか、まずいな。ツェーン大尉、ジオン軍の周波数で全方位に応援要請だ」

連邦MSはある程度以上接近してくることはなく、代わりにロケット弾を撃ち出したではないか。MS携帯型の小口径連装ロケット弾だ。

むろんコンスコン大将がいる湖の展望台を狙っているが、それにしてもひっきりなしに撃っている。

狙いは正確ではなく、着弾は湖や岸边一帯にまで広がっていく。しかし歴戦のガトーには連邦の意図が分かる。

範囲殲滅だ。

コロニーの構造材を壊さない程度の威力にしなから多数をばら撒く。

手早くこの辺り一帯を死の荒野にするためだ。中立地帯のサイド6でこんなことをするとは暴挙に過ぎないが、コンスコン大将を葬るのはそれほど価値があると思っっているのか。だが確かにその通りなのだ。考えるまでもない。コンスコン大将がジオンから失われるなどあつてはならない。

憎らしいことに連邦のとった戦術は的確で、ガトーらも容易には近付くことができなくなった。連邦MSの動きとロケット弾を見極めて進路を細かく修正しなくてはいけない。

そしてこの攻撃に対し展望台の中はというと、驚いたのは俺もライラもジンネマンも同じだった。

連邦からの攻撃にライラも非常に驚いたようだが、直ぐに立ち直る。最前線にいる軍人というものは、何があつたとしてもどうしてなどと考えた瞬間に死んでしまう。考えるのは後でいい。

とりあえず争うのは止め、皆で協力して展望台を早いところ脱出しなくては死ぬだけだ。皆で栈橋の上に付けられた通路から陸地に戻ろうとした。

その一瞬後、展望台は直撃を受け粉微塵になる。

間一髪、危なかった。

しかしぬか喜びに過ぎない。

今まさに渡ろうとした通路にもロケット弾が着弾したのだ！

俺たちに当たったのではないが、通路は脆くも崩れ落ちる。

全員湖に投げ出されてしまった。

第七十二話 戦場のカオス

俺は壊された栈橋から空中に投げ出されたショックで一瞬意識が薄くなる。

しかし次に来た感触に慌てることになる。湖に落ち、冷たい水に触れて意識を取り戻したのはいいが、このままでは大いにまずい。

俺は泳げないんだ！

コロニー育ちの俺が泳ぎの練習などするわけがない。

しかも重い服を着ていればなおさら沈んでしまう。

しかし、落ち着けば湖のその辺りは浅瀬だったのだ。コロニー内の湖がそれほど深いわけはなく、慌てないで立てばなんとか呼吸できる程度の深さだった。俺は一呼吸入れた後、ジンネマンの姿を認めた。ジンネマンも意識はあり、動いているようだ。俺は安心してひとまず岸边まで移動する。

だが岸边までもう少しというところで気付いた。ライラという連邦軍人とマリィダという少女が湖から上がってこない。俺やジンネマンより岸边から遠くの位置に落ちたようだが、姿が見えるのに動いていない。

おまけに湖のその辺の色が変わっている。

血の赤だ。その二人のうちどちらか、あるいは二人とも負傷し、動けないのだろう。このままでは溺れてしまう。

ジンネマンもそれを見たようだ。岸边から湖に向かって引き返そうという動きをしているではないか！

だが俺もジンネマンも柔らかい泥を全力で踏みながら移動してきたため、直ぐに動ける体力は残っていない。

その時に気付いた。ロケット弾がほとんど止んでいる。

同じ時、俺の艦隊から応援が来ていたのだ！

こんなにも早く応援が来れたのは理由があった。

クスコ・アルがカリウスとシャリア・ブルに頼み、MSの模擬戦を

やっていた最中だったのだ。なぜなら、クスコ・アルは普段エルメスにしか乗っていないのだが、ここサイド6にはエルメスを持ってきていない。テイベはMSを載せるだけで手一杯であり、大型モビルアーマーのエルメスやヴァル・ヴァア口を入れるゆとりがなかったという単純な理由である。

そのため、クスコ・アルはどうせだからMSの搭乗訓練をしようと思いついた。

観光に二度とも外されてしまった憂さを別のところに向けたかっただというわけではない。まあ訓練といっても場所がサイド6のベイである以上火器が使えるはずもなく、せいぜいMSの身のこなし程度の基礎だ。

そこに応援要請を受け取ったのだから、正に間髪を容れず出撃できる。

一番早く到着したのはシャリア・ブルである。素早く状況を確認し、一番近い所にいた連邦MSに突進しその足を斬り飛ばす。連邦の方がどういいうつもりであれ、火器はやはり使わない方がいいと判断した。

最初にするべきことは自分達が危険な存在であるアピールだ。連邦MSたちの注意を引き付け、作戦を中断させることが肝要である。

連邦MSは思わぬ邪魔に驚き、もちろん応戦してくる。連邦側もまたビーム兵器は使っていない。狙いが逸れたらビームは直進していく以上、コロニー内のどこかに必ず当たってしまうからで、さすがにそれはまずいと判断している。結果的にシャリア・ブルに対してビーム・サーベルを使って斬りかかるスタイルで戦おうとするが、連邦MSが数で勝るとしても、やすやすと片付けられるようなシャリア・ブルではなかった。

そこへ続いてカリウスが到着した。素早く一機を大破に追い込むと、眼下にガトーがいるのを見つけ、拡声器で伝える。

「ここは食い止めます！早く行って下さい！」

カリウスもまた腕は確かだ。そしてシャリア・ブル同様に一步も退かず、連邦MSの足を止めるのに専念する。連邦MSは決して弱くは

なかったが、どちら側も接近戦を選択しているため決着はつきにくい。

遅れて到着したクスコ・アルは怪しげな操縦であっても、さすがにNT、少なくとも一機を引き付けその攻撃を紙一重で避け続けることだけは可能だった。

信頼するカリウスの声を受け、ガトーが一直線に走る。

湖の岸辺に近付いたところで俺とジンネマンの無事を確認できたようだ。ただしここで俺がガトーに叫ぶ。

「ガトー、俺たちはいい。湖にまだ負傷した二人がいる。そっちを助けてやってくれ！」

ライラという女を助けたら、またもやジンネマンを狙ってくるかもしれない。助けることは本当はまずいのだろうか。

しかし、だからといってここで溺れ死ぬのを黙って見ているなどできないではないか！

ジンネマンに裏切りを強要し、おまけに中立地帯なのにMSを使った攻撃を仕掛けてきたのは連邦、赦せるものではないがそれとこれとは別のことだ。

ガトーはこの命令を聞き、湖に向かっていく。もうわずか遅ければ水に完全に没して見えなくなっていたところだった。

驚くほど速く進みガトーが辿り着く。そこから水面に血の赤色を引きながら二人を岸辺近くまで持つてくる。俺やジンネマンも協力しようやく陸地に引き上げた。

二人とも負傷していた。

紫髪の少女の方は軽傷だがライラと呼ばれる女の方が重傷だ。右脇腹から出血している。おそらくライラの方が着弾の瞬間少女をかばったのだろう。見たわけではないが自然にそう思える。

やがて二人とも息を吹き返す。それでも少女の方は意識が混濁しているのか、何かぼやとした感じのままだ。一方のライラという女は体を横にして動かせず、片膝をついたガトーに圧迫止血を含めた応急処置を受けていた。

だがこっちは意識が戻ると直ぐに口を利いてくる。ジンネマンや俺に対してではなく、すぐ横のガトーに向かつて。なぜだ。

「ふっ、またお前か。助けてもらったのは二度目だな」

「…… 不思議なことを言う。どういうことだ。前に助けたことがあるとでも言いたそうだが」

「あるさ。一度目は戦場で助けてもらった。私はこんな諜報部員のよ
うな真似なんかやりたくてやったんじゃない。普段はMS乗りだ。
そしてお前はかつて戦場で私のMSに勝ち、そしてMSの爆発から助
けてくれたんだ。まあ、そんなことを普段から何度もしているのな
ら、思い出してくれないのかもしれないが」

「……」

単に助けてもらった礼か？

いや違う！

俺はまた妙な会話を聞く羽目になったじゃないか!!

「いつか礼を言おうと思っていた。いや、もう一度会えればと思っ
ていた。できたらバーのカウンターでグラスを合わせたかったが、まさ
か湖の中で会うとはな。完全に意表を突かれた。お前はいつだつて
とんでもない男のようだ」

「こっちも好き好んでとんでもないことをしているつもりはない」

「誤解するな。貶しているんじゃない。そういうハプニングならいつ
でも大歓迎だと言いたい。ただし戦争が終わって二人とも生きてい
れば、その時こそバーに誘ってやるぞ。美味しいカクテルを作る店を
知ってるんだ」

「その前にMSで戦うことが無ければいいが」

「全く同感だ。ガトー少佐、お前は強いからな。また戦っても勝てる
気がしない。勝負なら酒の飲み比べで頼みたいものだ」

「そういう平和な勝負なら望むところだな」

「ふふっ、言ったな。約束だぞ。言っておくが、私は執念深いんだ」
えええっ!?

ちよつと待つて下さいお願いします。

相手は年頃の女とはいえ、ガチガチの連邦兵なんだよ？ いや、連邦兵じゃなくても問題がある。

本当、ガトー君、そこは遠慮したまえ……

俺は岸边が泥じゃなければ頭をガンガン打っていたところだ。

その時も連邦MSとこちらのMSとの戦いは続いている。

連邦の指揮官は決して無能ではなかった。事態の急変があつても柔軟な戦術を取り、適切なカバーをしてくる。そして戦いの目標を見失うようなこともなかった！ ジオンMSの目的が足止めにあると見透かした上で、部下をこれに当て、自分の一機だけで目標中心地である湖の岸边に向かう。

近付けばより精密に狙いが付けられる。範囲殲滅などという時間のかかることをしなくて済む。ジオン側のMSが今の三機だけなのか、あるいはそれ以上来るのか分からない以上、戦術の切り替えが妥当と判断した。

そして敵の姿を捉えたら直ちに始末し、作戦終了にする。

だが、MSから視界に入ってきたもの、正確に言えば見えた人物に對し驚愕することになる！

「な、何だつて!! くそつ、こんなことがあるか!」

岸边にいる一団へ更に近付くと拡声器を使う。腕は下したまま、武器を使うつもりがないことを見える形で示しながら。

「おい、そこにいるのはコンスコンの大將じゃないか！ そしてライラ？ いったい、何がどうなつていやがる!」

俺たちは近付いてくる連邦MSに對し身構えていた。味方のMSは数が足らず、やはり抑えきるまでには至らなかつたようだ。

しかし、不思議なことにその連邦MSは撃つてこない。

さつきまではあれほど撃つていたのに。

そして響いてきた声に驚いた!

「そ、その声は、まさかサウス・バニング大尉か!」

「おいおい冗談だろ？ 大将、本物か？」

「それはこっちのセリフだ！ サイド6でロケット弾とは何だ。しかもここに連邦の女性兵までいるんだぞ！」

「これは任務だったんだが…… やつと捕虜から原隊復帰できたと思っただけなりの作戦行動、それがここの範囲殲滅だったのさ。銃声が響いたと思っただけで直ぐに攻撃命令が出た」

「なるほど、しかしここはサイド6の中立地帯だろうが」

「そいつは俺だって知っているが、しかし、ジオンのテロを未然に防ぐため止むを得ないものと聞かされて…… コンスコンの大将がそんなことをするわけもないか」

「当たり前だ！ テロは連邦の方だ。銃声まで待つてからにしたのも何か言い訳を作るための姑息な策だ」

「…… 大将、あんたは嘘を言う人間じゃない。たぶんその通りなんだろうな。ライラがいる以上、込み入った事情があるという気がする。後でライラから顛末を聞かせてもらう。こっちは引き上げだ。なあに、連邦兵の回収と保護を優先したっていう名目がありやあ、上官と渡り合えるってもんさ。せいぜい嫌味を食らうだけで済む」

第七十三話 新たなる作戦

攻撃してきた連邦MSの隊長機がサウス・バニングだったのには驚いたが、それは全員にとつて幸いだったのだ。サウス・バニングは道理の分かる人間で事情が判明してしまえば後退に転じてくれるという。これが有無を言わず任務だからといってライラごと殲滅を遂行して当たり前と思うような軍人だったなら、結果はどれほど違つたろう。

「そうか…… そういうことだったかバニング大尉。不幸中の幸いだった。しかし命じられた任務を、なんか済まんな」

「そんなことを言う必要はないぜ、大将。最初からここは中立地帯なんだしジオンのテロも嘘だったんだからな。何よりもライラを撃ち殺してたら死ぬほど後悔するところだった。まあ少しは負傷しているようだが、ちつとは大人しい方が女らしくなるってもんだ。これを機会に酒も控えるんだな」

俺とサウス・バニングとの会話をここまで黙って聞いていたライラがやつと呼吸を整え、息を吸い込み反撃の言葉を入れてくる。

「バニング大尉！ 私は少しの負傷じゃない。そして女らしくなるは余計だ！ 最初から充分女らしい」

「ライラ、それだけ面白い冗談が言えれば長生きするぜ」

「それと、こんなところで吞兵衛みたいに言わないでくれ！ 印象が悪くなつたらどうしてくれる」

「分かんが、何でカッコつけるんだ？ そいつだって嘘じゃねえだろうが。まったく、負傷しても気が強いところは変わんねえなあ。せっかく私服なんだからそこも控えとけよ。お前さんは私服の方がきれいだぜ」

「うっ、ぬけぬけとキザなことを…… 一度結婚して別れたような男が……」

「はっは、ライラ、そいつを言われたら俺の負けだ。しかし話は戻るが、その少女は何だ？ 見たところ兵士のような年でもなさそうだ

し、民間人か？」

「あ、この少女は…… いや、話せば長くなる。とりあえず私と一緒に回収してくれ」

ライラという女とサウス・バニングは気安い会話をしているようだ。この時点で俺は知らなかったが、ライラというのは連邦軍中尉であり、かつてバニングの指揮下にあったことがあるらしい。その意味でバニングが上官なのだが、ライラは士官学校卒のエリート、あつという間に自分の隊を任されるようになりバニングとは戦友的なポジションなのである。

そしてカッコつける目的は明らかだろう。横にいるガトーも聞いているのだから。まったく、俺がそんなことを考えるのはどうでもいいんだけどな！

ともあれ連邦MSたちとこちらの三機のMSは停戦、そしてお互い撤退にかかる。これまでの接近戦で連邦MSに大破が幾つか出たが死者はない。こちらもクスコ・アルが最後に中破を食らったがそれだけだ。

そして、俺は連邦MSがライラとマリィダという少女の二人を回収していくのを見る。

だがしかし、ここで話が終わらない。

悲鳴がその場を切り裂いた！

「何をするの！ 行きたくない！ お父さんがそこにいるじゃない。どうして離そうとするの！」

マリィダが叫ぶ。救助の手を差し伸べる連邦兵を拒んでいる。空気が凍った。

問題は何も解決していないのだ！ ライラもジンネマンも何とも言えない顔をしている。ジンネマンを父親と思い込まされた少女の精神は救われていない。

「何か言っつてよ、お父さん！」

「さつきも言っつたが、お前は俺の娘じゃない」

「あ、ああア…… お父、さん……」

マリーダと言われた少女は何か錯乱を始めている。

立ち上がることもなく両手で頭を抱え込んでうめくだけだ。

そこでジンネマンがやっと言葉を選び終えたようだ。少女に諭すように話をしていく。

「俺は父親ではないが、最後にそれらしいことを言っておく。よく聞いておけ」

ここで目と目が合う。

ジンネマンが目にも力を込める！ それは言葉を心に刻むための力だ。

「お前はどれほど過酷な運命にあったんだろう。本当に可哀想なことだ。しかし、まだ死んじやいないぞ。終わっちゃいない。洗脳だか強化だか知らないが、そんなものに負けるな。お前は誰のものでもない。本当の自分を取り返せ！」

「……」

「そしていつか、自分の名をしつかりと持つんだ。今度こそ誰にも奪われないよう自分の名を握り締めておけ。それができたら、養女にでもしてやる」

「お父さん……」

「いつときでも俺の娘だったんだ。それなら本当に娘になればいいじゃないか。いつまでも待っている」

サイド6での騒ぎはこれで終わった。俺はジンネマンともいったん離れる。しかしこの歴戦の勇士をジオンが使わないことはなく、いずれどこかの戦場で共に働くことになるのだろう。

「キャプテン、カツコ良かった。さすがは俺のキャプテンだ！」

「コンスコン、お前に褒められても照れる気もせん。それより一つ頼みたいことがある」

「分かってる。もう準備はさせている。しかし一つ？ いや、二つだろっ？」

俺は急いでテイベに戻ると、直ぐにズム・シテイへ連絡をつける。

岸边にいる時から俺は滅多に使わない将官連絡用緊急回線を準備させていたのだ。それを使ってキシリア閣下を呼び出す。本当ならこういうことに使うべきではないが、十分に緊急性がある！

「急なことで申し訳ありません、キシリア閣下。サイド6で大きな騒動があり一応終息しましたが、それは後ほど報告致します。しかしその前にお願ひがあります。捕虜からの帰還兵の家族について早急なる保護を、これは一分一秒を争う事態ですので」

「なるほど、コンスコン、それはスベロア・ジンネマンの家族ということだろう？」

「え？ は？ 閣下、ご存じで」

「もうその保護は終わっている。この私が連邦工作員にサイド3内で好き勝手させるものか。この際ネズミ退治もしておいた」

「で、ではまさかキシリア閣下は最初から……」

「そんな顔をするなコンスコン。まあ、ジンネマンという男がお前に接触してきた段階で調べ、予防処置をとっただけだ。私とて最初から全て把握していたわけではない」

「……」

本当だろうか…… 最初から分かっていたわぎと泳がせていたのではないのか……

「そこまで分かるはずがなろう。疑うな。少し疑い深くなったようだな、コンスコン」

この騒動、一歩間違えれば皆死んでいた事態だったのだ。まあ、逆に言えばキシリア閣下も連邦の思惑を全て分かっていたわけではないという証拠でもある。

結果だけを見れば皆無事だったのだし、俺としてもとりあえずジンネマンの家族が守られれば充分なのだが。

「コンスコン、とにかく連邦は失態を犯した。これは外交カードとして政治的に貴重なものだ。なにしろ中立地帯を謳うサイド6の面目を潰し、連邦の傍若無人ぶりが明らかになったわけだからな。使いよるによっては連邦を混乱させるだけではなく、ついでにサイド6の親

連邦派を一掃し、うまくいけばジオンに歩調を合わせるよう舵を切らせることもできる」

キシリア閣下の表情はマスクのため伺い知れないが口調は満足げだ。外交と工作によってサイド6を親ジオンに塗りつぶすことができれば戦略的に大きな進歩になるだろう。

だが俺は更に直接的な軍事行動を考えているのだ！

「政治的なことはさておき、キシリア閣下、もう一つ言うべきことがあります。今後の作戦についてのものです、もちろんドブル閣下にも同様に具申するつもりではありますが先にお話しいたします」

「何だ、コンスコン」

「地球再侵攻を具申致します」

「！」

これはキシリア閣下としても予想外だったようだ。しばし間が空いた。

「……正気かコンスコン。先の侵攻でジオンは総力を挙げて行い、それでもあつさり跳ね返された。軍事的に攻め、連邦中枢を陥とし切ることは不可能に近い。そもそもお前が自分で言っていた戦略と矛盾するではないか。エネルギー資源で連邦を締め上げるのが戦略の根幹だったはずだ」

「もちろん戦略はみだりに変えるものではなく、資源戦略に変わるところはありません。地球へ出動するのは連邦を潰すのではなく、ジオン将兵救出が目的ですが、ただし作戦行動を追加して行うということです」

「何だそれは」

「連邦の開発拠点を叩きます。連邦のMS開発が加速し、新型機投入が予想されるという情報があるのはご存じでしょうが、やはりそこを叩かねばどう頑張ってもジオンの質的優位はひっくり返されるでしょう。そうなってしまおうと資源戦略をしている時間もなく追い込まれてしまいます。そしてもっと恐ろしいことに、連邦は人間の精神そのものを作り変える実験まで行っていると分かった以上、早いとこ

ろ潰さねば不幸な人間が大勢出てしまいます！」

「気持ちにはわかるがコンスコン、作戦行動というものは明確な数字上の戦果を予想して決めるものだ。それがなければ作戦とは言わんだぞ」

「ジオンにとって潜在的な脅威になると思われますが……」

「ここでキシリア閣下は考えている。」

「ようやく口にしたのは俺も驚く言葉だった。」

「作戦の裁可はドズルの兄者がすること、私から口添えするのは構わんが必ずそうなるとは限らん。それを承知してもらった上でコンスコン、火に油を注ぐように言いにくいのだが連邦の実験について秘匿していた情報を教えよう」

「秘匿情報？ キシリア閣下、それは……」

「ジオンにだって情報網はあり、今は私が統括している。それによるとコンスコン、連邦の人体実験とやらは北米のオーガスタ研究所、アジアのムラサメ研究所で行われているらしい」

キシリア閣下はさすがに把握していたのだ！ 俺が知るよりはるかに多くのことを。

「ここで明かしてきたのは俺の作戦行動に理解を示しているということの意味する。」

「連邦もジオンも戦争となれば非人道的な実験もするが、今やジオンが中止している一方、連邦の方では積極的にやっている。それには一つの理由があるのだ」

「理由、とは？」

「ジオンから逃げ出したフラナガン・ロム博士が責任者となって進めている」

「な、何ですと！ フラナガン・ロム！」

第七十四話 サイド6の戦闘

俺は驚くほかない。

連邦で強化人間なるものを作り出しているのがフラナガン・ロムだったとは！

それはかつてジオンでフラナガン機関を率い、NTの実験をしていた奴の名だ。いや、それ以外にも強化人間、神経接続などあらゆる人体実験をしていた。奴からすればむしろNTの実験の方こそどちらかといえばオマケなのかもしれない。NTは天性の素質がモノをいい、やれることといえばせいぜいリファインするだけだ。しかし強化人間は人間をいじくりまわせれば作り出せる。

他人の人生を破壊することに良心の呵責を覚えず、自分の科学的興味を優先させる人間にとっては天国のような環境だったろう。軍事的に必要な研究といえば何でも許される。

それどころか奴には軍事ですら副産物かもしれないのだ。奴に言わせれば、軍事なんて低い次元ではなく、人間の可能性を拓く必要不可欠な実験だとしても表現するのだろう。

たぶん以前俺が試みたような話し合いは最初から無駄なことで、どこまでも平行線にしかならない。研究を進めることこそ何より優先すべき大儀と確信している奴は、自分が科学の忠実な信徒、あるいは未来を築く冒険者と思っていない。

「コンスコン、ジオンからフラナガン・ロム博士が脱走、連邦に亡命した。本来ならアサクラ大佐と合流して亡命するはずだったろうが、そちらはお前も知っての通りシーマ・ガラハウが阻止している。しかし博士の方はそのまま逃げ、ルナツーが先に保護してしまったようだ。その後地球表面に移り連邦の研究所にいる」

「そこで今度は連邦のために研究を……」

「そうだ。おそらく博士としては自分の研究ができればどこの誰のためでも構わないのだろうな。まあ、そんなことを承知で私も奴を使っていたわけだが」

「ならば連邦はどんどん博士に研究させ、多くの者が実験と称した悲劇に見舞われることに」

「それだけではないぞ、コンスコン。奴の思想信条はともかく、研究能力は本物だ。軍事的に使えるものを今度こそ量産してくる可能性がある。確かに悪夢だな」

俺はキシリア閣下も地球降下作戦に半ば賛同してくれていることに感謝する。フラナガン機関で研究をしていたのは博士だが、機関を創設したのはキシリア閣下だ。その後始末を付けたということもあるだろうし、誰よりも研究を危険視していて不思議はない。

この分だとドズル閣下も賛同してくれるだろう。むろん、戦術計画は失敗がないよう練りに練らなくてはいけないが。

「ドズルの兄者に口添えはする。そうだコンスコン、もしも地球表面に行くなら役に立つ隊を付けてやる。お前から借りていたカーラ・ミツチャム教授のおかげでサイクロプス隊を再建できたからな。サイクロプス隊は以前地球で隠密行動をしていた経験があるから道案内に適任だ。それともう一つ、カーラ・ミツチャム教授を返すついでにお土産をやろう。楽しみにしている」

これでキシリア閣下との通信が終わる。

俺は次に艦隊のメンバーに通達をする番だ。サイド6での騒動は皆が知っている。俺の身は本当に危うかった。カリウスらがいち早く出動できたこと、相手がサウス・バニングだったこと、そんな希少な偶然が重なってようやく生還できたのだ。関わった皆には説明する義務がある。

先に俺は艦隊をサイド6から出港させた。もうサイド6の用事は全て終わっており、いったんサイド3本国に戻るためである。

全艦の出港操作から巡航に移ったあたりで全員を集めた。

ただし、俺は連邦の陰謀と襲撃を話すだけで終わるつもりはない。本当に話したいことは連邦が企てている強化人間についてだ。

俺はスベロア・ジンネマンに聞いて真相を知っている。

あの紫髪の少女はジオンのコロニー墜としのショックで記憶を

失ったのだ。ロザミアという名ですら本当かどうか分からない。

そしてあろうことか連邦は少女をこれ幸いと接收し、その体を使つて思う存分実験をした。結果、少女は二セの記憶を植え付けられ口ポットのようになされた。

いや、ロボットや人形ならまだいい。少女はまるで元から自分の意思であるかのように思いこまされてしまい、自ら操られるだけの存在だ。目的が済めばまた記憶を書き換えられ、生きている限り都合よく何度でも使い回される。

感情すら歪められる奴隷に成り下がった。

「そんな、そんなことって……」

話の途中からもう泣いている。最後は号泣だ。それは感性豊かなツエーンである。

その隣にいるカヤハワも同じような感じだった。

「……」

セシリアは黙って俯いている。

彼女のことだ、明晰な頭脳で記憶を変えられるということがどれほど悲惨なことか充分に理解しただろう。

あるいは自分に置き換えているのかもしれない。

例えば、連邦に捕まって記憶を変えられようなるか。

もしもガトーを敵とするストーリーを作られ、記憶に植え付けられれば、本来の敵である連邦の方を心から愛し、ガトーを敵として殺しかかるかもしれないのだ！

クスコ・アル、シヤリア・ブルもまたフラナガン機関にいた者としてその危険性は熟知している。その悪夢は何としても止めなくてはならない。

ガトー、カリウス、ケリイらも同じようなことを考えているに違いない。

彼らも泣くことはないが、真摯な表情を崩さない。

おそらく自分たちの戦いの意義を再認識しているのだ。もしも連邦が勝ってしまえばそういった非人道的な研究は決して表に出るこ

とはなく、ますます盛んになる。ジオンが勝ってはじめて研究を進めた者どもを断罪できるのだ。他人の人生を搾り取った罪を問うことができる。

連邦を倒す！

ジオンを奉じて立つ我らこそ正義であり、連邦との戦いは決して無駄ではない！

俺が話を終える。

「…… そういうわけだ。連邦の研究所にはロザミア以外にも多勢の人間が捕らえられ、実験されているらしい。無視などできん。フラナガン・ロムの所業を止めさせなくてはならない。これはジオンばかりではなく全ての人間の未来に関わる。キシリア閣下には既に地球作戦の具申をした。コンスコン機動艦隊はそのために動く！」

声は返ってこない。その場に緊張が張り詰める。

「おそらく困難な戦いが待ち受けている。連邦は強く、地球は彼らのテリトリーなのだ。それでもやり抜かなければならない！ ついてきてくれるか？」

「やるわよ！」

「了解！」

「やってやるしかないわね」

「私もよ」

「この意義は命をかけるに値する」

「このガトー、どこまでも司令に従います！」

「隊長と同じです！」

「止めたってやるぜ！」

その場の雰囲気は明らかに戦闘態勢に変わった。

全員がやる気になっているのだ！

そこへ警報が鳴り響く。オペレーターが探知情報を伝えてきた。

「コンスコン司令！ 連邦艦隊の接近を感知！ まだサイド6の戦闘禁止宙域なのに……」

「いや、向こうはやる気だろう。どのみちサイド6コロニー内であれだけの騒動を引き起こした連中だ。何の成果も無いとなれば連邦軍の中で誰かの首が飛ぶんだろうな。もうなりふり構わずこっちを消し去るつもりだ。油断するな、向こうは必死だぞ」

「詳細出ました！ マゼラン二隻、サラミス六隻、軽空母三隻、中隊規模です！ 続々とMSを発艦させている模様」

「そうか…… こっちはテイベと、他を合わせても七隻だけだ。これはなかなか難敵だな」

俺は冷静に分析し戦術を考える。俺がサイド6に来た時は四隻だけだったが、同行する駐留艦を加えてその数になったのだ。とはいえ大きく変わったわけではなく、明らかに劣勢だ。状況は思ったより厳しい。

くそっ、連邦側はこっちの戦力を見計らった上で充分な数を用意し、手ぐすね引いて待っていたらしい。

「数が不利なだけじゃない。連邦の思惑がどうであれ我々の側から撃つわけにはいかん。相手の発砲を待つ必要がある。この戦闘禁止宙域では。つまりこっちとしてはテイベの射程の有利さが使えないわけだ。難しいな。どうにかして戦闘を避け、散開して逆方向からの回避もあり得るが……」

ここで俺は気付いた。

全員の視線が俺に集まっているじゃないか。

その目は断固として拒否を訴えている！

連邦の虚を突いて逃げる、俺にそんな戦術はとって欲しくないぞ。

「…… そうか。ではやるか」

戦術指揮官としてはあまり褒められたことではないが、俺にも皆の熱が移ったようだ。

瞬時に戦術を編み出す。

「よし、緊急戦闘！ 全艦、機関最大出力！ 目一杯増速しろー！」

全員が持ち場に駆ける。ガトーらMSパイロットは発着場に行き、いつでも出られる態勢につく。普段MSに乗らないクスコ・アルやケ

リイまでもそうしていたので、俺は一応後衛に回るよう注意しておいた。そこまで無茶はさせられない。

「全艦、敵連邦艦隊の右翼方向に回れ！ いったん逃げるフリをする。連邦MSを引き付けたら、連邦艦隊の中央に向け回頭だ。そこから縦進隊形で艦の火力を最大限に活かし、そのまま撃砕しつつ中央を突破する。そして戦意を刈り取り決着だ。MSは連邦MS群と交錯直前に全機発進、連邦MSがこっちの艦に取りつく前に叩き落とせ！」

釣り出された連邦MSにこちらのMSが襲いかかる。数が半分以上だろうとお構いなしだ。相変わらずガトーのアクト・ザクやカリウスのがルバルデイは強い。連邦MS隊を切り裂いていく。

連邦MSが足止めされたのを確認し、その隙を突いて艦隊は砲戦に持ち込む。

弧を描いた艦隊は猛進し、先に防御の弱い空母を側面から捉え、その爆散の混乱を使って一気に中央突破だ。連邦艦隊の動きは鈍く、かつて俺がフォン・ブラウン周辺で戦った艦隊に及びもつかない戦術レベルなのが幸いだ。問題となるマゼランに仕事をされる前に斃せる。

戦闘はわずか一時間足らずで終わった。

各員の活躍は言うまでもない。

俺の艦隊は軽い手傷を負ったくらいで悠々とその場を去る。

後には過去連邦艦だった残骸が漂うだけだ。ちなみにサイド6で暗躍した連邦情報将校も無念のうちに運命を共にしたがそんなことを気に留める者は誰もいない。

第七十五話 マ・クベの思い付き

その頃、マ・クベは深い悩みの中にあった。

少し前まではそんなことはなかった。むしろ技術者としての興奮の中にあつたのだ。

フォン・ブラウンに残されていた連邦技術をいくつも発見、接收している。それにより、ジオンの艦艇やMSの技術も更なる発展が見込めていたからだ。その中でも特にチタン大量製造技術はジオンMSの性能を飛躍的に向上させるはずのものであり、マ・クベを小躍りさせるのに充分だった。

せっかくジオンMSは基本設計で優れているのに、素材技術でネックがあつたことに長いこと歯噛みする思いだったからだ。

コロニー建設の関係上、宇宙ではとにかく鉄材ばかり多く求められている。そのため鉄系合金は安価で豊富であり、当然ジオンMSは鉄系で作られ、そのためのためにあれほど短時間で多数を製造できたのだ。

しかしながら後で登場した連邦MSの素材はチタン系、明らかに鉄系より軽量で強い。絶対的な性能を考えたらMSにはチタン系を用いる方が優れている。ますます高性能化するMSに、この先も鉄系を使い続けるのが無理なのは明らかだった。

いつかその限界が来ると怯えていたからこそマ・クベはあれほど地球表面で鉱物資源に執着を見せていたのだ。

そして事実、ガルバルディに大量生産された高強度チタン合金を惜しげもなく用いると見違えるような性能になった！

防御力が飛躍的に上がったただけではなく、軽量になった分だけ元々のパワーを十分に活かし機動性も段違いだ。

この成果を見るやいなやマ・クベは決断した。

テストや先行量産をすつ飛ばし、マ・クベは即座にガルバルディの生産ラインをチタン用に切り替えさせた。型番を新しくすることも考えたが、設計自体に変更点は多くないためガルバルディのまま。後期型と呼ぶのも長たらしいのでガルバルディ改と仮に呼んでいる。

続々とロールアウトする新しい機体、このガルバルデイ改によってジオンMSの優位性は圧倒的になるはずだった。

ところがここにカスペン少将から報告が届く。

連邦MSもまた驚くべき速さで開発が進んでいたのだ！

しかも連邦はその恐るべきマンパワーを活かし、同時にいくつものMSを設計・開発しているのだ。開発チームが複数あり、競う形で多く設計し、その中から使えるものを絞り込むというやり方だろう。開発者そのものが桁違いに多いからこそできる芸当なのだ。

そして今、連邦の新型と目されているMSの予想性能は恐ろしく高い。投入も至近に迫っている。

そして考えたくもない想像だが連邦はその次、更にその次も考えているのに違いはないのだ。

無限に続く開発レース、命を懸けたデッドヒートであり気の休まる暇がない。

しかしそのことだけなら、技術者マ・クベの本懐でもあるし、高性能MSの開発にひたすら没頭すればいいだけだったかもしれない。

しかしある意味それ以上に大きな問題が立ち塞がっていた。

ジオンが苦勞して捕虜交換をお膳立てしてまでも手に入れた復帰将兵に問題があった。

彼らは主に地球表面で戦ってきた者たちだ。

ほとんどはザク、稀にそれが陸戦特化されたグフに乗っていた。貴重なMSを整備しつつ戦ってきた彼らにとってMSとはザクと同義語であり、正に愛機なのである。

結果的に機種転換がうまくいかない。

ザクとガルバルデイでは違い過ぎる。

そもそもジオニック社とツイマッド社で設計思想が異なるところへ設計年代が違うのだ。むしろ新兵がガルバルデイに乗れるのに、復帰してきた兵が実力を出せないでいる。

だが、困ったとばかり言っていられない。

せつかく復帰した熟練兵を活用しなければジオンの未来はない。かといってまたザクに乗せるのは論外である。もはや熟練の技量があっても連邦MSとの性能差はどうにもならない。

解決策はあくまで技術によって見出さなくてはならない。

では単純にザクにチタン合金を応用したらどうか……

いや結論から言えばそれもダメだ。

ザクの設計のままではバランスを崩してしまう。アクト・ザクがそのいい例ではないか。操縦性があまりに悪化してしまい、それでは何にもならない。

ダメ押しにもう一つ問題があった。地球からの熟練兵は実弾兵器を好みビーム兵器を使いたがらないのだ。確かに実弾兵器は地球表面においては信頼性があり、それに慣れ親しんでいるのは分かる。熟練兵なら実弾兵器を主体とした接近戦が適していることもある。

また、確かに実弾兵器がビームに勝ることもあるのだ。

弾幕運用ならば一瞬で通過するビームよりも実弾が有効になるのは当たり前だ。

そして、敵の密集地帯で散開して子爆弾になるいわゆるクラスター弾などは実弾兵器ならではの使い方であり、ビームに真似はできない。

「いったい、彼らに乗せるべき最善のMSはないものか…… 考えに考える。」

時はわずか遡る。

ジオンの戦略はエネルギー資源戦略なのは変わっていない。粛々とそれを継続している。

主にそれを担当しているのはデラーズ艦隊であり、茨の園から反復攻撃を加えている。

その出撃の最中、驚くべきものを発見したのだ。

「な、なんだ！ あれは…… そんな、あり得ない！」

「どうした！ 何を言っている」

「れ、連邦MS隊の中にザクがいます！ 本当です！」

「そんな馬鹿なことが……」

その時の指揮官はバロム准将だったが、見間違いかと一笑に付すことはなかった。

連邦がザクを使っている？ それは決して幻ではなかった。ジオン側では当初、鹵獲されたザクが連邦に使われたのかと認識した。しかしそれにしては動きが速いのだ。

バロム准将から報告を受けたエギーユ・デラーズはそのデータを直ちにカスペン技術大隊に送った。

今のジオンは以前とは異なり、ずいぶんと風通しが良くなっていく。各部の連携が改善されているのが幸いした。さすがにデラーズはキシリア派閥のマ・クベに直接データを渡すことはしなかったが、自分のところだけに情報をとどめておくことはなかったのだ。

データを解析したカスペン技術大隊はまたしてもため息をつくことになる。

わずかな違いからそれはジオンのザクではなく、またしても連邦側の試作MSという結論が出たのだ。

それがザク型とは何という皮肉なことだろう。しかもザク型ということは、連邦はジオン側の技術も柔軟に取り込み、試験をしていると思われた。ジオン側が連邦技術の解析にやっきになっっているのと同じくらい連邦もジオン技術を参考に行っている。そして、面子にこだわらず大胆にジオンの真似をしよう、そういう発想をもった開発チームもあったに違いない。

実際それは当たっていた。

連邦の技術部の一チームはザクをベースに、フィールドモーターとチタン複合材という連邦技術を一部組み込んだ簡素で安価なMSを企画した。それはハイ・パフォーマンス・ザックという仮称で呼ばれる試験機だ。

結局のところこのMSが採用されることはない。それは連邦兵にとってザク型MSなど悪い冗談である。戦争が終わって時間が経てばともかく、今はザク型など見たくもない。とうてい受け入れられる

ものではないのだ。結果、量産性に優れると思われたこの企画は無駄に終わっている。

ただし、これはジオン側に予想外の効果をもたらした。

カスペン技術大隊からその要約を受け取ったマ・クベはこれを悲報とは受け取らなかつた。

「連邦がザク型に興味を…… まだザク型に可能性があるということか」

実のところマ・クベはザク型に興味を失っていて、熟練兵の問題もザク型で解決しようとは全く思っていないなかつた。しかしこの時もう一度考えてみようと思つたのだ。もちろん新規設計のザクⅢともいうべきものを作れる時間的余裕があるはずはない。といって連邦の試験機を真似しようとも連邦技術がどこにどう使われているか分からない以上、不可能である。

だが、一つのアイデアが降って湧いた！

ザク型で新規設計のものがジオンにもあるではないか！

それはペズン計画の遺産とも言うべきケンプファーである。

敵地突入を想定して設計された特異なMSではあるが、それでもザク型の系譜に連なる機体で、操縦はさして変わるところがない。

だが設計自体は新しく、何より凄いい点はその強大なパワーだ。1550 MWという常識外れのエンジンが積まれている。こればかりはアクト・ザクどころか大パワーを誇るガルバルディすら軽く上回り、もちろん予想されるどの次期連邦MSより上だ。

実弾兵器しか使えない仕様だが、熟練兵が使う分には問題ない。

可搬性というコンセプトのため犠牲になつていた防御力は、いまやふんだんにあるチタン系合金を使えば補って余りある。おまけにゲルググ生産の終了に伴い遊んでいたジオニツク社の生産リソースを活用できるではないか。

正にこれしかない。

マ・クベはケンプファーを素材換装したケンプファー改の生産開始を指示した。

これ以降、ジオン量産MSは一般兵向けのガルバルディ改、熟練兵

向けのケンプファー改の二つでいくことになる。

第七十六話 侵攻前夜

俺はズム・シテイに着くまでにいろいろと作戦案を考えている。もちろん地球侵攻に関するものだ。

俺から提案した以上、ふわつとした方針などではダメで、少なくとも現実的な案を考えておかななくてはいけない。それが責任というものだ。皆の生死とジオンの未来がかかっている。

俺は考えに考え、これしかないというものを作り上げた。

作戦の骨子は、正面突破など論外である以上、陽動が中心となる。かといってリスクのある陽動は避けたい。

ここで俺は一つのアイデアを持っている。人員を使わない仕掛け、それを可能にするものがたった一つ存在する。

月にあるマスドライバーだ。

もちろん、マスドライバーとは兵器ではなく、コロニー建設用の資材を月から打ち上げる装置のことである。月表面の工場で鉱物から製錬・加工された資材は、動力を使って宇宙に戻され、コロニーとして組み立てられるのだ。

マス・ドライバーは月の重力が地球の1/6しかないためにできる芸当である。エンジンを使う宇宙船にわざわざ資材を乗せて運搬する手間を省き、資材のみを輸送することができるので、非常にコストが安くなる。

そんなマス・ドライバーは月表面にいくつも存在するが、もつとも主要なものは小規模月面都市エアーズの近郊にあり、もちろん今はジオンの手中にある。

これを調整しコロニーではなく地球に向かって岩石を打ち込む。当然岩石は落下により強いエネルギーを持つ。

だが単純に考えれば兵器として使うには問題があり、有効とは言えない。

なにしろ月から地球までは最短距離でも四十万kmもあるのだ。途中で修正しない打ちっぱなしの場合、いくら計算しても着弾点にブ

レが出て、特定の施設を狙うのはとうてい不可能である。

加えて俺としても流れ弾で地表に被害を及ぼすのは本意ではないのだ。そのため、多数の岩石を散弾的に使い、各岩石の大きさは大気でぎりぎり燃え尽きる程度にしておくつもりである。

ただしジャブローの連邦中枢部は慌てるだろうな。さぞかし肝が冷えるだろう。

可能性が極小でも、でかい岩石がジャブローに直撃したら核爆弾以上の破壊力で地下施設といえども無事に済むはずがないからだ。

連中の思考力を奪い、その隙を突いて更に陽動部隊を降下させる。

これはヨーロッパか中央アジアあたりがいいだろうか。いかにもマ・クベの忘れ物を取りに来たふうを装うのだ。もちろん、白磁の壺ではなく隠した鉱物資源を狙ったように。

そっちへ連邦の実戦部隊が釣られたタイミングを見計らい、俺の艦隊が目的である連邦の研究施設を急襲するという算段である。

誤差を極小にして一気に降下できるとすると、軌道上から数時間で到達できる。

そこからの行動もモタモタしてられない。救出を素早く済ませ、一方で連邦の研究施設は徹底的に叩く。フラナガン・ロムの研究施設も、新型MSの開発施設もまとめて灰にしてやるのだ。

更に脱出路について案が二つある。連邦の動きが早ければ俺はそのまま宇宙に還る方を選び、アフリカに集中しているジオン地球残存部隊との合流はもう一度改めて行う。

しかし連邦の動きが鈍く隙を突けるようならそのままアフリカへ向かえばいい。

裁可を得たこの作戦、さっそく準備行動が始まった。

さて、予定通りジオン本国で俺を待ち受けている者が一人いた。

キシリア閣下のところから送り返されてきたカーラ・ミツチャム教授である。

そして教授は俺と会うや否や、ダリル・ローレンツと俺を格納庫に

引つ張っていったのだ。途中からはたと気が付いた。確かキシリア閣下は教授を返すだけでなく「お土産」を付けてくれると言っていたではないか。なるほどそれを見せるためなのだろう。

「教授、格納庫の中にある物とは、何かの新しい兵器ですか？」

「そうだとも言えるし、そうでないとも言えます」

妙な言い方だな、と思ったがそれでも期待しつつ中に入って教授の指し示すものを見る。

それはまばゆくライトに照らされてはいたが……

「な、何だこれは……」

俺はちよつと意表を突かれてしまった！ いや、落胆とっていいい。

あのキシリア閣下が意味ありげに「お土産」と称したものがこれだったとは。

ただのドムじゃないか!!

各所がリファインされているような気がするが、既に見慣れてしまったドムには違いない。これが今さらどうだというのだろう。

俺ばかりではなく、ダリルも同様に困惑している。

しかし不思議なことにカラー・ミツチャム教授はそれに見とれているようなのだ。

「ええと、教授、分からんですがこのドムがお土産とはいいたい……」

「コンスコン司令、このドムはダリル専用なのです」

「ダリル・ローレンツの専用？ で、ではダリル・ローレンツ少尉はMSに乗って戦えると？」

「正直これの開発は気が進みませんでした。なにか、フラナガン博士のレールに乗ってダリルを兵器とするようで。しかし、気が変わったのです。神経接続技術が進んでも、本物の腕や足のような義手義足を作るのにはまだ時間がかかるでしょう。小型の支援計算機やジェネレーターが作れないからです。しかし、大きさに制約がないMSならばもっと早く完成できます」

「するとつまりMSという形はとっているものの、教授としてはダリ

ル・ローレンツ少尉を自由に動かせるための……」

「そうです。いずれ手術で右腕だけは必ず取り戻します。しかしそれ以外を早く動かせて上げたかった。でもそれだけではありません。ダリルは司令のためにもっと戦いたがっているんです。どうか地球作戦を行うならこのドムで連れて行って下さい」

なるほど。それではただのドム、ただの兵器ではない。

カーラ・ミツチャムのダリルに対する愛ゆえに造り上げられたMSだった！

ダリル・ローレンツの当座の義手義足の代わりになるMSなのだ。

結論だけ見ればフラナガン・ロムと同じことのようにでも、動機は100%、まるつきり違う。ならばこれは当然使ってやるべきものだ。

ダリルはやはり感激していた。

義手をカーラ教授に伸ばす。それは申し訳程度の義手であり、ただの細い棒きれでしかなく、傷病兵を見慣れたはずの俺から見ても気の毒なものである。

それなのに教授はダリルの本物の腕であるかのように胸で抱き留める。

お互いの気持ちは充分に通じ合い、更に二人の距離は縮まってく。

おいおいおい、熱いよ！ 相思相愛のお二人さん。こんな戦争の最中でも、いやそんな刹那にこそ育つものがあるとは。

しかし、頼むからそういう姿をセシリアやクスコ・アルなどには見せないでくれ。

あの連中を下手に刺激すると暴走しかねず、司令官である俺の心労が増すばかりなんだから。

「名前はサイコ・ドムとでも言えばいいでしょうか。ドムが余っているようなのでそれをベースにして、いくつも失敗はしましたがようやく形にできました。かつてフラナガン博士が試験的に造ったサイコ・ザクはかろうじて伝達がつなげられたという程度ですが、これはそんなものではありません。自分の手足以上の感覚と反応速度で動かせ

ます。もちろん、MSとしての基本性能だけでもザクより上でしよう」

確かにカーラ・ミツチャム教授の言う通り、ジオン全体として急速にガルバルデイヘ機種転換が進められている今、ドムは余っている。

もちろん外したエンジンなどは他にいくらかでも使い道があるし、各部材もリサイクルはされている。だが教授の実験に使う分くらいは余裕があり、キシリア閣下も快く許可したのだろう。

何にしる助かった。

地表作戦に俺のティベを持っていくことはない以上、せっかくのダリル・ローレンツの射撃の腕が無意味になってしまふところだった。

このサイコ・ドムを使うことでダリル・ローレンツを戦力として加えることができれば大いに役立つ。もつと言えばドムは元々地球表面で使うように設計されたMSであり、その意味でも適切だ。

後の世にコンスコン三人衆と呼ばれる圧倒的な戦果をもたらす三人がいる。

アナベル・ガトー、クスコ・アル、シャリア・ブルである。しかし俺の艦隊には他にもツェーン、カヤハワ、カリウス、ケリイといった名脇役が存在するのだ。

ここに今、サイコ・ドムを駆るダリル・ローレンツという強力な戦力が加わる。

第四章 永遠のコンスコ 第七十七話 ララアの黒い計算

粛々と作戦準備が進められる中、困っている人間が一人いる。

それはクスコ・アルであった。

以前コンスコン機動部隊がフラナガン機関を急襲したことがあったが、その際囚われていたNTの卵たちを発見し、收容できたのはクスコ・アルのおかげでもあった。居場所をなんとなく感知し救出部隊を誘導できている。

しかしそれはクスコ・アルがそれらの者たちと知り合いであり、精神をよく知っていたからこそできた芸当である。

今度行う地球降下作戦では連邦研究所が狙いであり、そんなわけにいかない。

自分が検知できるとはとうてい思えない。

確かにサイド6でロザミアという少女とはチラリと邂逅した。だがロザミア自身はNTではなくクスコ・アルと精神感応したわけではないため、また認識できるかと言われたら全然無理だろう。

作戦自体はジオン情報部の探り出した情報を基に行うわけだが、破壊だけならともかく囚われている人間の救出というものは難しい。その最後の発見に自分が頼られるかもしれず、いや、期待されていないとしても役に立ちたい気持ちがある。

だが解決策が全く存在しないわけではないのだ。たった一つ可能性がある。

その策とは自分より強力なNTの支援を受け、思念を拡張し、能力を増幅してもらうことである。

それを可能にするだけのNTをクスコ・アルは二人だけ知っている。

どちらも強力無比なNTであることは折り紙付きだ。しかも年下

であり、かつてフラナガン機関で妹分としてたいそう可愛がっていた者たちである。逆にそれらの者たちはクスコ・アルを頼りになる姉ではなくむしろポンコツなところをカバーしてあげようと生暖かく見ていたのだが、そこまでクスコ・アルが知っていることはない。

その二人のうち一人はララア・スン、もう一人はハマーン・カーンのことだ。クスコ・アルは天性のNT能力でこの二人に敵わないのを自覚している。

その中でハマーン・カーンはそもそも軍属ではなくサイド3六大家の一つカーン家の令嬢であり、おまけに今は父マハラジャ・カーンにいるアクシズに向かって旅立っているはずだった。

ならばララア・スンしかない。

本来は他部隊の者と接触する前にコンスコン司令に話を通すべきものである。これは作戦に関わることだから。しかしその方法が可成かすらも分からない以上、先にララアに聞いてみる。

ただしクスコ・アルは多少気が重い。

作戦に巻き込んでしまうことになれば、ララアにはきつと迷惑になる。

ララアはクスコ・アルを積極的に手伝おうと思わないはずだ。それは別に仲が悪いわけではなく、今回の作戦が地球だからだ。

なぜなら地球表面でエルメスは使えない。そのためララアは直接的な戦力になることはできない。例えシャア少将が同行したとしても、こちらの手助けにはなるがシャア少将に対する手伝いにはならない。

決して気分の良いことではないだろう。

クスコ・アルの知るところ、ララアはシャア少将を護ることを生きがいとしているだけで、ジオンなど本来どうでもいいのだから。

「……というわけをお願いしたいなあ、なんて思っ……」

「お姉様、それができるかやってみなければ分からないでしょうけど、とりあえず地球に行けばいいんですね」

「へ!? ララア、あなた本当にいいの?」

「だって、否もなにも、軍とはそういうものでしょう」

「……」

驚いたことにララアはあつさりと了承した。

クスコ・アルとしては嬉しい誤算というか、拍子抜けだ。シヤア以外何も見ていなそうなララアの口からそんな正論が出るとは思わなかった。

その澄ました顔を見ても何も分からないがとにかく協力は得られそうだ。

話はその一日前に遡る。

今回の作戦行動と前後して各部隊に新しい兵士の補充がある。

当然のことながら、地球降下作戦に参加する隊には精鋭の熟練兵、もしくは最優秀の学徒兵が与えられるのだ。その逆に参加しない隊には一般的な新兵を中心として配属されることとなっている。

シヤアは当初降下作戦に参加の予定ではなかった。

エネルギー戦略の実行部隊としての働きの方を期待されているからだ。

そして出撃の合い間のひととき、思い立って新兵の教習を見に行つた。それを統括しているカスペン少将のところである。

シヤアはララアを伴い、カスペン少将と挨拶を交わす。シヤアとカスペンの間に特に因縁はなく、デラーズを始めとして敵の多いシヤアにしては珍しくフランクに接することのできる相手だった。

「カスペン少将、どうかな、新兵の様子は。私も別に自分の隊を大きくしようとは考えてもいないが、優秀な部下は常に欲しいものだ」

「シヤア少将は先頭を切って自分でMSに乗るからには……ヒヨツ子の中でも精鋭MSパイロットを補佐につけてやりたいもの。この中でエース候補の実力があるのはキャラ・スーン、戦闘中は少しばかりおかしくなっているので扱いに注意が要るが、普段はそういうことはない」

「なるほど、しかし一人ということはないだろうし、他は」

「それを除けば五十歩百歩…… そういえばシヤア少将、地球降下作

戦には参加しないそうですね。ならばエースではなく必然的に平均スコアの者をあてがわなくてはならず、残念ですが」

「それは確かに残念なことだが、全体方針だから仕方がないな」

それはちよūdと昼時であった。新兵たちの休憩時間なのだろうか、思い思いにくつろいでいるようだったが、見るとその一か所になぜか人だかりができています。何かを中心にして集まっているようなのだ。

それがシャアの目に留まった。

「いったい何だろう、カスペン少将」

「ああ、あれは、せめてジオン本国での研修期間だけでも家族との交流を許可しているのです、おそらくジョルジョ・ミゲルという訓練兵の妹さんが昼食でも持ってきたんでしょう。その妹さんは可愛い盛り、訓練兵たちのちよūdとしたアイドルになってしまったようで、来れば毎回あの始末に」

「そうなのか？ 兵たちに過度の緊張がないのもいいものだが」

その時のことだ。

急にラアラがシャアの袖を引っ張る。有無を言わせないほど強く。「ん、どうしたラアラ。そうか、カスペン少将の時間を取り過ぎてしまったな。済まなかったカスペン少将、新兵の補充については任せるでしょう。では」

そう言つてシャアとラアラはカスペン少将のところを離れる。

もちろんラアラには感知するものがあつたのだ！

NT能力のゆえなのか、ただの女の勘なのかは分からないが、あの場にいたら危険な邂逅があるのを予期した。それでシャアを強引に引き離す拳に出たのである。

結果的にシャアとジョルジョ・ミゲルの妹ナナイ・ミゲルが会うことはなくなつた。

しかしそれでもラアラには懸念が残る。

シャアからそれまで新兵補充についての詳しい話は聞かされていなかったが、地球降下作戦に参加しないシャアには平均的な新兵が補充されることになるらしい。だとすると、ひよつとしてその妹を持つ

新兵がシャアの配下にやってきてしまうかもしれない、とすれば妹にも何らかの拍子に出会うということがあり得るではないか。

そんなところへクスコ・アルが何と都合の良い話を持ってきた。

ララアとしては一も二もなく乗るしかない。

ララア自身が地球降下作戦を手伝うのなら、おそらくシャアはララアだけをクスコ・アルに同行させることはない。シャアの隊もまた地球降下作戦に参加するようお願い出るに違いない。そうなれば、話を聞いた限り精鋭の方が補充されその新兵が来ることはなくなるだろう。

ララアの黒い計算、ほんの小さなそれが波紋となる。

元々シャアはエギーユ・デラーズとはどうしてもソリが合わず、一緒にエネルギー輸送船団を襲う作戦に従事しているのは窮屈に感じていた。

更に、今回の地球降下作戦にはできるだけ多くのザンジバル級が必要とされる。

コンスコン機動艦隊へ優先的に集められた新造のザンジバル級は六隻あるが、そこへシャアの旗艦であるザンジバルが加わるのは戦力的に心強い。

こういったベースのあるところにララアの口添えが決定打となり、シャアとジオン上層部を動かす。

地球降下作戦はコンスコン機動艦隊、キシリア配下のサイクロプス隊、シャアの部隊が担うことと正式に決定された。

運命の作戦が発動される。

「3, 2, 1, ゼロ!! メインコイル動力接続! ガイドレーン良し、冷却装置正常、インジェクターオールグリーン!」

それは美しく華麗なものから始まった。

戦争開始以来長らく使われてこなかった月面のマス・ドライバーが突如稼働を始めた。

真空の月面で音が響くことはないが周囲の岩盤に振動が伝わる。

目で見て分かる震えが、音が無いだけにかえってエネルギーを感じさせる。

「予定エネルギー、フルチャージ！ 制御コンピューター指示出ました！」

「よし！ 続いてフィードエレメント装填、射出、開始！」

ついに射出口から小岩石が撃ち出された。それは次々と途切れることなく続いていく。

狙いは本来の目標である建設中のサイド5から地球への落下軌道に変えられた。予想落下地点はジャブローを含む広範囲だ。

月面都市エアーズのみならず付近の都市の中央反応炉はフル稼働し、その全てのエネルギーがマス・ドライバーへ巨大電力として供給されている。

マス・ドライバーから撃ち出され、地球落下軌道に乗った小岩石は文字通り加速度的にスピードを増し、しかし地表に到達する前に表面熱で爆裂する。また更に粉々になりながら最後は大気との摩擦で燃え尽きる。

それは全く美しい。

岩石の温度と鉱物の具合により赤にも黄色にも輝き、膨大な流星群となつて夜空を彩るのだ。

第七十八話 ジャブローの無理解

まるでイルミネーションのように流星雨が輝く、夜空のこんな光景に喜んだのは無邪気な子供だけである。

多くの連邦市民は恐れおののいた。戦いは連邦の有利に推移し、終結を待っただけではなかったのか？ どうしてジオンの力を再び見る羽目になるのか？ 疑問の行く末はもちろん連邦政府首脳部だ。

そうでなくともジャブローの地球連邦政府高官たちは最初は真つ赤に激怒し、次に青くなる。

すなわちこのショーはジオンがジャブローを狙える可能性を示すものだ。今は不思議なことに途中で燃え尽きる程度の小岩石しか使っていないようだが、もつと大規模な岩石も撃ち出せるという試算が出ている。連邦はこの原因がマス・ドライバーであることも、またその能力も充分知っている。

もちろん地上に到達できる大きさの岩石を落とされたとしてもジャブローに直撃するかといわれたらそんな可能性はほとんどない。だがいくら小さい可能性でもゼロではないのだ。

地下施設というものは非常に頑強なものであり、仮に核攻撃を受けても耐えられるかもしれない。だがしかし、宇宙からの質量弾の破壊力はすさまじく、直撃されたら壊滅的な被害が出ると計算された。

せつかくジオンの地表制圧攻撃を跳ねのけ、宇宙に叩き出したと思えばまたしても危機だとは。

政府高官たちは最後にまた激怒した。矛先は軍部だ。何がなんでもこの脅威を片付けるようねじ込んだ。どんな無理があってもいい、とにかくそれを優先しろと迫る。

この圧力を受け連邦軍上層部は最も有効な対案を提示した。

それは政府高官をいったん地表あちこちに分散させることでリスク回避を図るのである。

だがしかし、これはあつさり拒否された。

政府高官たちにとっては自分の命が大事なのだ。彼らにとって政府機能の保全などその次だ。ジャブローが最も強固だから今そこにいるのであり、留まるのが危険としても、かといって出るのも嫌なのである。

そうなれば軍部はやむを得ず代わりの方策を出さざるを得ない。

一つは現有戦力で宇宙に上げられそうなものを片っ端から上げる。もう一つはルナツーにある艦隊戦力でもって早急に月面攻撃をさせる。厳しい命令がルナツーに向け発信された。

「何を馬鹿なことを！ どうせ政府高官どもが素人考えでねじ込んできたんだろが、軍部まで引きずられることはないだろうに！」

「それはそうですが、ワイアット閣下……」

「いや、確かに興奮しても始まらない。済まないなステファン・ヘボン君」

「しかし軍上層部からの正式命令とあれば無茶とはいえど無視はできないかと」

「そうだね。私もそれは分かっている。だが結論は決まっている。なんやかんやと理由をつけて引き延ばすしかないな。あるいは形ばかり出動してみるか」

「閣下……」

「それしかないだろう？ いかにも現有百九十隻の大艦隊といえど、慌てて出ればリスクが大きすぎる。なぜならジオン側に時期も航路も分かられた上での決戦など不利なことだらけ、不可能としかいいようがない。私が相手の立場なら禁忌の機雷攻撃を仕掛けるところだな」

「まさかそんな……」

今グリーン・ワイアットが言った宇宙機雷は暗黙の禁忌とされている。兵器としてはこんなに効果的なものはなく、低コストで敵艦艇を撃破、あるいは動きを確実に封鎖することができる。だが戦闘後の使用済みを実に自爆させられるかは分からない。そうなれば、スペースデブリなどの比ではなく危険な代物に転じ、限りなく長きに渡ってその航路が人類に使えないものになる。

何も考え無しに使うのは論外だ。

だが今回のようにマス・ドライバーまでの最短航路を絞り切り、非常に狭い場所に限定すれば使えなくもない。連邦艦隊がそんな死地にこのこ飛び込んだら地獄だ。

「そうかな？　一つの可能性だよステファン・ヘボン君。高い可能性だがね」

「閣下、禁忌といえど命令文にはそれとなく核の使用まで匂わせているような。あらゆる攻撃オプションを許可といういかにもそれらしい形で」

「それこそ政治家どもが焦っている証拠だ。別に核は連邦だけじゃなくジオンの方でも持っている。しかも充分な数を。南極条約は持ちつちやいけないとは書かれていないからね。ここで核合戦に持ち込むわけにはいかないだろう。元々南極条約はジオンを縛るように不利に作られたもので、こちらから無茶をすることはない。第一その命令文がおかしい。何か問題になれば現地司令官の暴走ということも片付けるに違いないな。古典的だが効果的な悪知恵だ」

「それは確かに……やはりゴツプ大将でしょうか」

「分からない。その詮索をしても仕方がないが、とにかくマス・ドライバーには向かわない。歴史上智将と呼ばれた人間が主君の都合に振り回され敗北した例は多々あるが、私はそれに倣う気はないよ。ジオンとの決戦はいずれ行うにしても当初の予定通り戦力比で四倍、あるいは五倍まで待つてから行う。本当の戦術家というのは少数を駆使して華々しく戦う者ではなくリスクを減らす者のことを言うのだ。決戦は圧倒的優位のもので、確実に、堂々と、踏みつぶす」

「決戦のタイミングはそれが最良と心得ます。こちらの艦艇数は今も着々と積み重なり、質の面でもあの計画が進めば」

「そう、あの計画も含めてだ。もはや連邦技術部をあてにしてはられない。ルナツー独自開発のMSを造るのだ。ジム・カスタムの配備も進んでいるが、それをベースにこころナツーで高性能機を造り上げる。名前はジム・クウエル、実に素晴らしいじゃないかステファン・ヘボン君。これで戦争を決めてやる」

「ただし少なくともあと三カ月は必要になるかと」

「時間は連邦の味方だよ。今のマス・ドライバーの問題など高官どもの頭が冷える頃には忘れられる。あんな不確定なもの、兵器としては最初から脅しにしか使えないじゃないか。ではなぜジオンがこのタイミングで脅しを行う気になったのか、しかも害はないとはいえ南極条約のかぎりなく黒いグレーゾーンまで踏み込んで……その辺りの方が重要だが、正直まだ読み切れないね。まあいい、ステファン・ヘボン君。私も気を取り直そう。今日の紅茶は軽やかでしかもしつとりしたヌワラエリヤにしておこうか」

連邦軍の至宝であり随一の智将グリーン・ワイアット、だがまさかジオンの動きが連邦研究所の強化人間救出がその発案になったことなど思い至らない。やはり正統派軍人として眉唾ものの研究には興味がなかったからである。

そしてグリーン・ワイアットは戦力差が十分に拡大するまで待つべきだと思っていたので、ここで可能な限り正しい対処をしたつもりだし、実際客観的には正しい。だがこのとき連邦上層部の意向に多少なりとも逆らってしまった。それもまた事実であり、後で政治的に手痛いしっぺ返しになって返ってくるとは予想もしていない。

同じ時、闇に紛れて降下する者たちがいる。

旗艦をザンジバル級にしているサイクロプス隊だ。今、補充兵を追加して総勢十一人の隊で作戦に参加している。

作戦行動に使うMSは急遽試作されたケンプファー改を優先的に配備してもらい、他は乗り慣れたゲルググを使い、半々の割合の構成になっている。

作戦地域はヨーロッパ中央から北部、かつてジオンがオデッサで連邦軍の反撃を食らったところと近い。さすがにこの地域ではマス・ドライバーによる流星群も見えないのは、それが南米のジャブローを中心として落とされているからだ。

サイクロプス隊は陽動としてこの地域を担当し、活動することになる。

当初はコンスコン機動艦隊やシャアの隊と同行するはずだったが、単独での陽動に切り替えられた。どのみち以前サイクロプス隊が地球で活動したのは連邦軍北極基地でありコンスコン機動艦隊の道案内にはならない。それに何よりサイクロプス隊は隠密行動のゲリラ戦に適すると期待されている。

今、夕闇を選んで降下しているのには理由がある。

どのみち大気圏でミノフスキー粒子を濃く撒けない以上、降下の最後の最後にはレーダーで発見されてしまい、ここはジオン支配地域ではない以上迎撃をされる可能性がある。ただしそれを逆手に取るのだ。

多数のバルーンを用意して欺瞞を仕掛ける。圧倒的多数のバルーンはレーダーでいかにも大軍に見せかけられる。それに紛れれば安全に降下できると共に連邦軍を慌てさせ、陽動としての本来の任務を果たせることにもなる。昼間なら光学的に欺瞞が見抜かれるかもしれないが、この時間なら黒いバルーンは見抜かれることはない。

「準備はいいか、行くぞ！ 特にワイズマン曹長、遅れるなよ。もう新兵じゃないんだぞ」

「当たり前ですよ、隊長！」

「ほう、いい返事をするようになったじゃないか」

「俺はエースになるんです。そう決めたんです！ 隊長こそ手術から日が浅いから無理しなくとも」

「頼もしいが…… まったく、お前は相変わらず一言多い癖があるから治しとけ。ではサイクロプス隊総員、降下開始！」

シユナイダー隊長以下十一機が降下し、無事に地表に辿り着いた。そこから間髪を容れず移動する。

この時、知らないところでわずかな誤算があった。

戦いは相手のあることだ。最も降下地点に近い連邦軍基地は北極基地だった。そこはサイクロプス隊とは因縁があり、NTガンダムの奪取に失敗した過去がある。それはさておき、基地は拡充されて戦力も案外と大きなものになっていたため、突然のジオン襲来に大慌てし

ながらも三個中隊規模の戦力を出動させる能力があったのだ。

「チェック完了！ 装備・推進剤ともに準備よし、新型機、いつでも行けます！」

「目標データは順次送る。しかし大丈夫か、クリスチーナ・マツケンジー中尉。本来テストパイロットの君までスクランブル発進など」

「そういった状況での即応性を見るのもテストの内です。私がたまたま搭乗中だったので行くのは当然でしょう」

「気を付けたまえ。相手戦力も目的も不明なところが多すぎる」

第七十九話　ゲリラ戦

サイクロプス隊は澱みなく手順通りの行動に移る。

先ずは降下地点からできるだけ距離を取るのだ。そして翌朝、連邦部隊が欺瞞のバルーンに気付いたところから勝負になる。集まってきた連邦部隊の背後に回り込み、奇襲を掛けて一撃を与える。

そこから各個撃破を基本とした盛大なゲリラ戦を行っていく予定である。

派手にゲリラ戦というのも妙な話だが、連邦にジオン降下部隊の規模を誤認させ、しつかり陽動としての働きをしなくてはならない。

ただし作戦行動はきつかり三日間だけだ。それが終われば素早く宇宙に撤収する算段である。ジオン地球作戦主力のコンスコン機動艦隊が北米オーガスタ基地に急襲をかけるまでの陽動としては充分、それ以上は必要ない。

朝の薄明が訪れる。

赤みがかった光が、なだらかに何段にも重なった丘陵地帯の陰影を映し出していく。サイクロプス隊は窪地や所々にある森林を利用して連邦航空部隊の索敵から逃れ、バルーンに釣られてきた連邦MS隊の背後へ慎重に回り込む。

ただしそこにいた連邦MSは想定よりも数が多かった。もちろん、降下地点をどこに選ぼうと連邦基地からの出動を免れられることはない。しかし、少なくとも複数の主要基地から同時出動ができないような場所だからこそ北部ヨーロッパを選んだはずなのに。

「チッ、見える限り十機はいるな。ここでいきなり消耗戦にするわけにはいかないが……　しかしどんどん数を増やされても厄介だ。その前に撃破しておいた方がいいか」

そう判断し、サイクロプス隊シユタイナー隊長は迷わず襲撃の合図を送る。

それに応え大推力を持つケンプファー改六機が猛然と突撃を始め

た。

その推力は恐ろしいほど高く、機体重量の二倍にも達するものだ。いったん走り込み、足で蹴って浮遊し、推進剤を惜しみなく使えば地球重力に逆らって水平突撃まで可能になる仕様である。

そんな急襲に対処できる連邦MSは多くない。たちまちケンプファー専用ショットガンの射程に捉えられ、的確な射撃で打ち倒されていく。そこから逃れたとしても、瞬時にケンプファーの間合いから接近戦に持ち込まれる。そして接近戦こそがその名の由来通りケンプファーの持ち味だ。軽量かつ大パワーで動きは俊敏である。

連携を取りつつビームサーベル振るい、次々と連邦MSを餌食にしていく。

幸いなことに連邦軍は新鋭MSほど宇宙に送っていたため単なるジムコマンドばかりが地球に残されていた。

遠巻きに配置したゲルググからビームライフルによって狙撃支援をするはずであったが、そんな必要もなく連邦MS隊を制圧できたのだ。

「上出来だ。しかし、この機体はとてつもないものだな。マ・クベ少将には感謝をしないといかん」

シユタイナー隊長の言う通りケンプファー改の性能は申し分ない。戦いはさすがに無傷には終わらず被弾したケンプファーも四機ある。いずれも連邦MS機が苦し紛れに放ったバルカンによるものだが、純チタンに近い高性能チタン合金装甲はほぼ貫かれることはなく、センサー類を失うだけの中破以下にとどまり行動不能には至っていない。

ぐずぐずせずにそこから離脱する。

間一髪、連邦MS隊の第二波に背後を取られる前に逃れることができた。

その連邦MS隊の一つにクリスチーナ・マツケンジー中尉も加わっている。元々サイド6育ちの彼女だが、MS操縦技術を買われて連邦のテストパイロットに抜擢されている。そのため、開発拠点や性能

評価拠点を回っているのだが、たまたま今はその一つである北極基地に異動していたのだ。

MSを乗りこなす技術には非凡なところがあると見られていた。しかし性格的に温厚であり、最前線には適せずというのが彼女に対する評価だった。

現場に到着してすぐ連邦MSの先遣部隊が壊滅しているのを目にする。

ジオン側がバルーン欺瞞を仕掛けたと知った時点で少数を多数に見せかける作戦を取ったのかと思ったが、実はそうではなく、実はジオンでもかなりの有力部隊が降下していたのだと思に至る。

いったん後退し、慎重姿勢を取った。戦力がある程度整えてからジオン側を追跡にかかる。

各十四機ごとの三つの中隊に分かれて追うのだ。

一方のサイクロプス隊はランダムウオークに近いジグザクに進路を取っている。

最終的に隊はザンジバルで回収されるはずであり、その合流地点に居なくてはならないのが絶対条件である。ただしその場所を事前に気取られてはならない、そのためである。

おまけにジグザグのコースを取れば連邦がこちらの作戦目標を勝手に深読みして戸惑ってくれる。事実連邦軍北極基地も意図を測りかねている。

それは偶然、いやそうではないのだろう。

クリスチーナの入っている連邦中隊とサイクロプス隊が遭遇戦になったのは。

「センサー反応あり！ ジオンMS機、います！ 距離8000m！」
クリスチーナの乗る試作MSがサイクロプス隊を捉えたのだ。

普通ならばそういった索敵能力ならジオンMSの方がお家芸だ。たいがい連邦MSより優れているものだが、この場合は逆になった。それはサイクロプス隊が飛行索敵機にばかり注意していたせいもある。

るが、連邦の新型試作MSが高性能だったからだ。

MSというものはコンセプトを煮詰めてから設計を書き起こし、実際に試作機が作られるのはせいぜい3つに一つしかない。もつと言えば試作からテストを経て、コンペで勝って採用され、量産までこぎつけるのはその中から3つに一つくらいなものだ。

今、クリスチーナの乗る新型試作機もそういう手順にある機体の一つに過ぎない。うまく採用まで至ればジムⅡとかいう名称になるらしいが。

連邦MS中隊はさつそく追跡しながら他の中隊にも連絡し、三方からジオンの隊を取り囲んで叩く策に出た。

ただしサイクロプス隊も決して無能ではない。追跡されている気配を感じると、そのまま追い込まれて袋のネズミになるのを待っていることはない。その前に一気に逆進し、クリスチーナの隊を撃破にかかると。

「これはいったい何だ……」

サイクロプス隊シユタイナー隊長は妙な感触を受けた。やはりケンプファー改の実力は高く、危なげなく連邦のジムコマンドを倒していく。ただし最初の戦闘とは違い苦戦している場合もいくつか見られたのだ。それは今まで見たことのない新型連邦機を相手にした場合である。そんな数機の中でもスタイルが洗練され、ひときわ動きの良い新型機が一機存在するではないか。

これでは連邦MS隊を早期に全滅させることはできない。ここで長く戦い、下手に足止めを食わされるのはかえって危険と断じた。

連邦MSを半数倒した段階で素早い撤収に移行する。そして速度を上げて逃走にかかったのだ。

その動きの良い連邦試作機に乗るクリスチーナは選択を迫られたが、大破された味方機の救助を他に任せると、単機で再びジオンMS隊を追跡にかかる。それはクリスチーナの責任感による。

「このジオン隊は強い、精鋭だわ。野放しにしたらきつと脅威になる。今、これを見失ってはまずい」

ところがまたしてもサイクロプス隊の方が上手だった。追ってくる連邦MSがいるのを始めから予期し、罠を張っていたのだ。

サイクロプス隊の最後尾を任されたバーナード・ワイズマンのケンプファー改がしつかりと待ち受ける。

やってきたクリスチーナ機を一気に捉え接近戦を仕掛ける。潜み、横合いからビームサーベルで斬りかかる。

「何よこのジオンの新型、さつきから動きが速い！」

「これは連邦の新型なのか!? ケンプファーについてこれるとは」

お互いに驚く。クリスチーナはケンプファーのビームサーベルを辛うじて躲し、数合立ち会ったのち頭部バルカンを叩き込む。バーナードもまた連邦機へ咄嗟に頭部バルカンを撃ち返す。しかしそれが数発命中したくらいではどちらも致命傷にはならない。

だがここでクリスチーナはジオンMSがビーム兵器を持っていないのに気付く。

だったら接近戦の間合いから離れば優位に立てるではないか、そう考えて大きく距離を取り直した。

それが罠だった。

周辺に静止し、充分に照準を付けたゲルググたちがクリスチーナを狙撃にかかったのだ。クロスファイアから幾条ものビームを当てられてしまい、クリスチーナもたまらずコックピットから脱出した。

あたりは灌木の茂る森林である。

幸いにもケガもなく脱出できたクリスチーナはうまく逃げおおせることができる。

だがここで、長距離通信機も付けていないノーマルスーツのままであることに気付いてしまった。

基地から緊急で発進したのが仇となったのだ。

おまけにここは北極圏に近く五月とはいえ夜は極寒だ。そしてもう昼下がりに近い時間になっている。

落ち葉と薄雪に足を取られながら、必死に一時間も小走りで行くと細い街道が見つかった。そこから更に一時間、やっと小さな集落に辿り着く。

これで一安心と思いきや、クリスチーナは重大なことに思い至る。「しまった！ 新型機の完全破壊を確認していないわ…… 技術情報が……」

青くなるほかない。テスト中の新型機であれば貴重な技術情報がいくらでも詰まっている。これが下手にジオン側に盗まれてしまえば大変なことになってしまうではないか。

これはまずい。早く完全破壊をしておくべきだ。

クリスチーナはさっきの場所へ密かに戻り、始末することを決意した。

第八十話 嘘の話

今のところジオン側は連邦基地を襲ったり新型MS機を奪取したりするような構えを見せていない。連邦MSの技術を狙って来たようなそぶりはないが、しかし過去北極基地はそのために襲われたことがあったのではないか。その時はNT用ガンダムが狙われていたのだ。

今回はそうでないという確証はない。

それに、連邦技術が主目的でないとしても、行きがけの駄賃とばかりにMSの技術情報を盗んでいくかもしれない。大破した機体丸ごとは無理でも、その中枢制御装置くらいは。

新型試作機が勿体ないなどと言っていられないのは当然だ。試作機体をもう一つ造るくらいは連邦の生産力にとってそう困難でもなく、盗まれる可能性がわずかにでもあるならできるだけ早く完全破壊すべきである。

クリスチーナは集落で村娘の格好に着替え、しっかり防寒をした上で試作MSまで戻る。

途中までは村人の車両で送ってもらいながらも残り半分は慎重に徒歩で迫る。民間人を巻き込まない配慮のせいだ。

この往復で体は極度に疲労し、足取りも鉛のように重たかった。そこを意志の力を総動員してねじ伏せる。

「戻ってきて良かった！ やはり爆散していなかったわ」

ようやく見つけた試作MS機体はビームを食らっても爆散せず大破のままだ。ビームの狙撃からいったん距離を取ろうと大きくバックステップをした際だったので、中心には当たらなかったのだろう。そして着地の直前にコックピットから脱出したわけだが、機体はそのまま地面に倒れて横になっていた。

これは幸いだ。機体をよじ登ってハッチに辿り着ける。

クリスチーナは周囲にジオン兵がいないことを見て取ると、なんと

か開けられたハッチから潜り込む。そして素早くチェックしてまだ何も盗まれていないのを確認する。

後は自爆プログラムに繋がるキーを打ち込み、起動するだけだ。だが、ここで表示装置に不具合があり、あれこれ苦労するが思いのほか時間がかかる。

「何をしているんだ、お嬢さん。答えてもらおうか」

注意がおろそかになっていた！ 仕事に夢中になりすぎていた。

ジオン側はいったん散開し、後続の連邦MSが来ないのを見届けた上でもう一度ここに集合してから野営予定地に移動する算段だった。それは最悪のタイミングだった。クリスチーナはコックピットにいるところを見つけられてしまったのだ。

銃を向けられていることを理解し、クリスチーナは震えが来る。責任感は一瞬、気丈な女と言われるクリスチーナも最前線で戦った経験はほとんどない。

まして今はMS越しではなく生身に死を予感させられているのだ。

一方、クリスチーナを発見して銃を突きつけたサイクロプス隊のミハイル・カミンスキー、つまりミーシャも大いに困惑している。

大破した連邦MS機に人影があったので確認すれば、何と年若い女だった。

しかも村娘の格好をしているではないか！

ロシア系のミーシャは古い写真などで知っていて、この辺りの村の一般的な衣装だろうと見当がつく。

「どうした、ミーシャ」

「シユタイナー隊長、連邦機のコックピットに変なのがいって……」

そしてミーシャはクリスチーナをコックピットから出て地面に降り立つよう促し、シユタイナー隊長の前に行かせた。

尋問を行い、連邦軍人なのか、ただの民間人なのかはつきりさせる必要がある。それによって対処がだいぶ変わってくるのは当たり前だ。

「名前は何だ？ 連邦軍の階級は？」

先ずは連邦軍人であると思なして尋問を始めていく。

シユタイナーが疑いからかかるとは当然のことである。

「な、名前は、エマ・ストーン！ 連邦軍とか階級とか何のこと？ 大きな音がしたと思つたら珍しい機械があるじゃない。それを見てただけよ。何が悪いの？ そつちは誰よ？」

クリスチーナは慌てて嘘を紡ぎ出し、通りがかりの現地人を装う。いくら不自然でもしようがないのだ。

連邦軍人だとバレたらどうなるか分からない。

とつきの偽名で、自分とは赤毛であることだけが共通項の古いムービースターの名を借りてしまった。一瞬後またしてもうかつなことを言つたと思つたが幸いにして誰もそれを知らないようだった。

このまま何も知らない民間人、好奇心旺盛の通りがかりを装い、知らぬ存ぜぬを貫くしかない。

だがそれは甘かった！

連邦MS機のコックピットに入って操作を始めていたミーシャから鋭い声が飛んだ。

「そいつは違う！ 全然ロシア訛りじゃない。いや、その訛りは聞いたことがあるな。サイド6あたりではそういう訛りがある」

「え、ええっ!？」

「きつとそうなんだろう？ サイド6リボーコロニー出身、二十二歳、連邦軍北極基地所属クリスチーナ・マッケンジー中尉さん!!」

口を利用してしまえばミーシャにはクリスチーナがこの辺りの出身でないことは直ぐに分かる。

そしてミーシャは今、連邦MS機にスイッチを入れ、わずかに見えた表示から現在のパイロット情報を読み取つて言つたのだ。

もはや万事休す。

クリスチーナは更に青くなる。だが、なおも強弁した。

「訛りが違うのは当たり前前だわ！ なぜって、私はこの辺の村に来たばかりなもの！」

「ほう、それじゃどつから来たんだ。今やリボーコロニーは戦闘宙域に囲まれ、民間人が移動できるわけがない。それでもやつぱり来たと言うのかい？」

「ち、違うわ！ そんな宇宙コロニーなんか知らない。そうじゃなくて、私はオーストラリアから疎開して来たのよ！ そこがコロニー墜としに遭ったのは知ってるでしょう！ だから難民になって」

受け答えしているミーシャも正直いつてその女がクロだと思っている。あくまで嘘を重ねていくのが滑稽にすら見えてきた。確かにコロニー墜としてオーストラリアのシドニーが一番被害に遭ったのは事実だが、それを言ってきたとは。

「何だ、オーストラリアだったのか。ずいぶん遠くからよく来たな。そいつは気の毒だ。オーストラリアといえばコアラはどうだ？ 見たことあるか？」

「以前はたくさんいたものだわ」

「暖かいし、食うには困らない土地だったんだろ。カンガルーもいるしな」

「そうよ。ここよりずっと暖かくて、カンガルーの美味しい所よ」
ここで静寂が訪れた。

相手をしていたミーシャももう黙っている。

なぜならこんな茶番を続ける必要が無くなったからだ。この村娘の格好をした女は嘘を吐いていると確定した。地球に詳しくなくともそれくらいは分かる。

嘘を吐くなら、その理由は当然連邦軍人であることを隠すためとしか思えず、ならばやはり連邦MSパイロットのクリスチーナ・マツケンジー中尉に間違いない。

周りの幾人かがこの連邦軍中尉を拘束に動く。

だがしかし、意外なことにシユタイナー隊長が押しとどめた。

「皆勘違いするな。案外この女の話は本当かもしれん。聞いたことがある。オーストラリアでは増えすぎたカンガルーを食用にすることがあるそうだ。現地でしか出回らない食材で、見た目があれだからと

「いつて愛玩動物とばかりも言えない」

「そうなのか？」

「カンガルーって食える？ 聞いたこともない話に皆は戸惑うしかない。」

そしてこの命のかかった緊張が続く場面、ただでさえ疲労の極限にあったクリスチーナの糸がついに切れた。

目の前が暗くなり、一瞬ふらついた後ぼたりと倒れる。

次に目を開けると静寂と暗闇の中だ。

しかし、遠くに焚火の火が見える。体は暖かい毛布にくるまれていて。特に拘束はされていないようだった。

「気が付いたかい？ エマさんだったっけ、夜明けまで休んでいるといい。そうしたら解放だ。送ってやれないのが残念だけどね」

クリスチーナが最初に思ったのは、自分が助かったという安堵感だ。間もなく解放されるという話である。

次に声をかけてきた相手を見る。

「…… そう。あなたは誰？」

「僕はジオン軍のバーナード・ワイズマン曹長。今は君の世話役に付けられてるんだ。だけど、これでもMSのパイロットだよ！ 君もさつき連邦のMSを見ただろ、そいつを倒したのも僕なんだぜ！」

それは明るいクリーム色の髪に、優しい表情をした男の子だった。見たところ自分より年下なので男の子と言っても構わないだろう。

なぜだかMSのパイロットであるのを誇りとして、多少事実と違う自慢をしてくるのも微笑ましい。背伸びをした年頃なのだろう。

本当はクリスチーナ機は格闘戦で負けたのではなく、ビームの狙撃にやられただけなのに。

だが、この子が自分と戦ったMSに乗っていたとは！

戦争とはいえ、自分はこんな優しい気な子供とビームサーベルで斬り合い、戦っていたとは！ クリスチーナにはなんだか出どころの分からない罪悪感がある。

「今、ホットミルクを用意してるから、それを飲むといい。あったかい

よ」

「……ありがとう」

一方のバーナード・ワイズマンはというと会話ができて嬉しきでいっぱいだ。相手はかわいい村娘である。赤毛を分けて広く見せている額が勝ち気な感じを作り出し、目元はこれでもかというほどキュートなのだ。

こんな妙な出会いだがバーナード・ワイズマンは一目惚れに近い。

「僕はサイド3の出身だ。ほら、月を見てごらん。あの三日月の、そこから右に四つ分のところにあるはずなんだ。見えないかもしれないけど」

そういつて夜空を指で示す。

クリスチーナも思わず目で追う。

ついでにクリスチーナは自分の出身のサイド6リボーコロニーも夜空に探してしまうが、やはりどちらも見えなかった。

夜の森の静寂が心の鍵を開き、二人の距離が縮まる。

第八十一話 未来は二人で

そこから二人は様々な話をした。

クリスチーナはジオン降下部隊があのだ連邦試作MS機をどうしたか知りたかった。聞いた限り、特に機体情報を探って持ち帰られたりはしていないようだ。この点でも安堵した。本当のところはクリスチーナの尋問のために予定外の時間を使ってしまったサイクロプス隊が移動優先のために放置した、つまりクリスチーナは立派に役に立っていたのだが。

それ以外にも二人は、互いのこと、他のこと、話が尽きることはなかった。

互いの印象は強く心に刻まれていく。

朝になって北極圏特有の斜めの日差しを浴び、バーナード・ワイズマンは大きく手を振って別れを惜しむ。

「元気で！ また会えるといいね。いや、きつと会いたい！」

「そうね、私もそうよ。会いに行くわ、年下君！」

クリスチーナ・マッケンジーはそこからまた集落を経由して北極基地に帰投した。すぐさま一般兵用のジム・コマンドに乗り、自分で大破した試作実験機を回収し終わる。

一方、その頃にはサイクロプス隊はほぼ任務を果たして後は宇宙に還るだけだ。

予定通り連邦軍を引っ掻き回して混乱を引き起こした。陽動の任務は必要十分に行ったのだ。

北極基地からの連絡により、被害の大きさからジャブローの連邦軍首脳部はジオンの有力部隊の降下とそれによる地表侵攻と判断した。そのため全体的な兵力の移動を指示してしまっている。

サイクロプス隊は早めにザンジバルとの合流地点に到着した。だがここで一波乱が起きてしまう。

最後の最後、連邦軍の索敵機に見つかる。そして連邦側は各MS中隊をとりまとめ、総勢三十機ものMSで包囲しサイクロプス隊に仕掛けてきたのだ。

戦力的にも状況的にも厳しくなった。

負ければもとより、宇宙に還れなくなったらその時点で終わりだ。「慌てる必要はない。もうじきザンジバルが来る。いつもの戦法でいなしてやれ」

シユタイナー隊長がそう指示する。

ケンプファー改が一団となって連邦MSの密集地帯の中まで躍り込む。

それは余りに速い。連邦側の反応の遅れを突き、至近から四方へ火器を放っていくという凶悪な攻撃だ。その銃弾に加えて接近戦のビームサーベルが閃く。これに慌ててしまい算を乱す連邦MSの背後から、伏せた姿勢でビームライフルを地面に固定したゲルググが狙い撃つ。

この連携も幾度か繰り返すうちに板についてきた。

しよっぱなから大きな損害を食らってしまった連邦MS隊だがさすがに馬鹿ではない。

それに対応した戦術に切り替えてきた。

前進速度を大きく落とし、そして無駄撃ちを厭わず牽制射撃を密にする。

これであつに距離を縮められることなく射撃戦のみで決着をつけるのだ。数の優位を活かす。

おまけに射撃戦なら実弾兵器を使うジオンMSは補給がない以上、撃てる回数に制限があるはずだから、その弾切れを待てばいい。堅実かつ合理的な策だ。

この状況でもサイクロプス隊に焦りはなかった。皆がシユタイナー隊長を信じている。

その時、結構な轟音と共に周囲に三回ほど爆発がある。

今、やつとザンジバルが降下してきたのだ！

そこから艦砲を牽制のために撃ち込んできた。もちろん味方への誤射を考えたら戦場にやたらと撃つことはできないが、周辺に撃ち込むだけでも連邦MSを浮足立たせるのには役に立つ。

そして地面スレスレに降下していく。

だが連邦MSも混乱から立ち直り、思いの外早く事態を飲み込んだ。

それにはクリスチーナが関係している。ジム・コマンドのまま連邦MS隊の中に加わっていたクリスチーナが叫んだのだ！

「あれは…… 宇宙に撤収するための艦艇だわ！」

「今のは誰だ？ クリスチーナ・マツケンジー中尉か？ 君がそう見た根拠は？」

「あの艦は背中に大型のロケットブースターを持っています！ つまりペイロードを降ろすために来たのではなく、目一杯積んだ状態で宇宙に戻るための形でしょう」

「なるほど…… そう言われれば理にかなっている。さすがに技術畑の君だ。感服したよ」

今、連邦MS隊が緊急に考えるべきなのはあのジオン艦が増援を連れてきた可能性だった。ジオンが地表侵攻を本意に意図しているなら、今対峙しているのは威力偵察隊と考えられ、あの艦が増援を連れてやってきたと思うべきだ。そうであれば連邦MS隊としてはただでさえ早期決着が無理なのだから、更に形勢が不利になる前にいったん撤収した方がいい。その判断を迫られていた。

だが、クリスチーナの言葉に連邦MS隊の隊長も納得した。

言われてみればジオン艦は背中に大きなロケットブースターを持っていて。つまり、決して増援を連れてきたのではなく、むしろジオンMS隊の撤収のためと推定される。

ジオンのザンジバル級巡洋艦は地球大気圏でも航行できるような大推力を持っている。また胴体部で揚力を得られる機体形状にもなっている。

しかし、さすがに静止状態から加速して宇宙に飛び出るのは無理が

ある。

そこまで上昇する前に推進剤を使い切ってしまうだろう。そのため多少なりともロケットブースターの力を借りなくてはならないが、特に今はMSを十一機も収容してペイロードが本来の上限を超えてしまう。そのため通常よりはるか大型のロケットブースターを背中に連結した形になっていたのだ。

ジオンMS隊が撤収にかかっているのなら急進してそれを妨害すればいい。そう連邦MS隊は判断した。

再び熾烈な射撃戦が展開される。

手早く収容されるジオン側が早いか、有効射程に入ってそれを妨害する連邦側が早いか。

そしてサイクロプス隊は慌てることもなく動作も速かった。

連邦MSを近付けさせないまま収容作業を進め、もうあと数機を残すばかりになる。

だが全てを終える時間はなかったのだ。

その前にザンジバル級の収容ゲートを連邦MSが捉える時が来た。「時間がない。一斉に撃つことはせず、照準をつけた者から順次放て！」

そう連邦MS隊の隊長が指示する。

前進していたクリスチーナ・マツケンジーもきつちりその命令に従いビームライフルを構える。

スコープを位置にセットすると、数機のジオンMS、その背中が動いて見えている。

そして最も狙いやすい最後尾にいるMSを捉え照準を固定した。

ここで撃つ！

だがしかし、最後の最後、クリスチーナはその射軸をわざと遠く外した。

ビームがむなしく逸れて飛んでいく。

ふう、と一つ大きなため息を吐いた。

「ホットミルクが美味しかったわ。年下君」

ケンプフアー改もゲルググも全てを収容したザンジバルはようやくそのロケットブースターに火を入れる。

轟音と白煙を引きながら、最適角度のカーブを描いて飛翔していく。

たちまちマツハを超える加速に入ってしまったえば連邦から攻撃する手段はない。

サイクロプス隊はこうして宇宙に戻ったのだ。

……そしてちょうど四年が過ぎた。

クリスチーナ・マツケンジーはとづくに連邦軍を退役している。

元々彼女は軍ではなく純粋な技術者の方が向いている。MS操縦の技量はたまたま天から与えられたギフトの一つであっただけの話で、惜しくはない。

バーナード・ワイズマンもまた退役し、新興のジャンク屋の中でも一番勢いのある、ブツホ・カンパニーの腕利きの仕入れ人として忙しい毎日を送っている。

どちらから探し当てたのか、あるいはどちらも探していたのだろうか、二人は再び運命の出会いを果たした。

「アナハイム・エレクトロニクス社新規開発部門第三課のクリスチーナ・マツケンジーです。ブツホ社のリサイクル工程を確認しに来ました」

「それはこちらにまでわざわざ…… あ、ええっ！」

「お邪魔するわ、ジオンのパイロットさん」

「き、君は!! あの時の…… 間違いないよね」

「エマよ。いいえ、エマじゃなくクリスチーナだけど」

「探していたんだ! ずっと僕は探してたんだ!!」

そこから間もなくのことである。

リボーコロニーにウェディング・ベルが鳴り響く。

コロニーには誰が決めたのか、粋な規約が一つ存在する。

それは、結婚式がある時間だけはこれでもかというほど快晴にすることになっているのだ。

その青空を白い鳩が舞う。

皆が二人の結婚を祝った。皆が二人の明るい未来を願った。若干一名、「憧れの隣のお姉ちゃん」を取られてむくれているアル少年を除けば。

結婚式はいくつかの祝辞が済み、その次にはバーナード・ワイズマンの元部隊の皆による下手な合唱の番になる。さっぱり調子の合わない男性合唱で、リード役のシユタイナー隊長も苦勞していたが最後はどうにでもなれと投げ出している。さすがに歌には作戦行動ほどの責任感はないようだ。しかし歌う方も酔っているが聴く方も酔っているのだからどうい塩梅なのかもしれない。

それが終わると更につまらない余興があつた。

カンガルーの着ぐるみが出てきたのだ！

酔っぱらったミーシャが入っているので大きな着ぐるみになっている。いる。

そこに可愛らしさはどこにもなく、造形も素人臭くてかなり雑だ。おまけにふらついて宴席のテーブルにぶつかって歩くから大騒ぎになる。

もちろん、このカンガルーは二人のなれそめに関係している意味なのだ。

一部の出席者には大受けしたが、クリスチーナは没面を作った。

その夜のことだ。二人はいつものように楽しい会話を交わす。

「式は大変だったけど、楽しかった。羽目を外した連中のことは赦してくれよ、クリス」

「そんなことはいいわよバーニー。でもみんな、こんなご時世によく来てくれたわ」

「そうだね…… 本当に感謝だ。できれば歌も練習してくれれば良かったんだけどね。あ、そういえば余興で出てきたカンガルーの着ぐるみ！ いつあんなの用意したんだろう」

「え、その話？ あの時のこと思い出しちゃうわよ。やめてほしいわ、まったく」

「それはそうだろうさ」

「こっちは大変だったんだから……」

「しかしあの時のクリスは凄かったよ！ よく嘘を言い通したね。あれでみんな騙されて、君を疎開してきた民間人だと誤解したんだから」

これを聞いて驚いたのはクリスチーナである。

「ええっ！ まさか、まさかだけどバーニイ、あの時の嘘がバレてなかったとでも思ってるの!？」

「だから君がオーストラリアから来た話だろ？ よく考え付いたもんだ」

はあ、と力のない溜息をつくのだった。

そしてクリスチーナは今さらながらの説明をした。

「どうやってたらそう思えるのよ。バレてないわけないじゃない。あの時のジオンの隊長さんは分かっていたんだわ。でも、隊が敵地での隠密行動である以上、連邦の捕虜を連れて歩けるわけではない。しかし連邦の兵と分かって釈放することもできない。だったら理由を付けて殺してしまうしかなくなってしまっじゃない。けれど隊長さんは私を殺したくないと思ったのよ。だから私のくだらない嘘にこれ幸いと乗って、こじつけた。カンガルーの話なんて本当はどうでもよかつたんだわ」

「……」

バーナード・ワイズマンは元からシユタイナー隊長を尊敬していたが、更に大きく感謝を加えるのだった。

第八十二話 オーガスタ、急襲！

連邦はマス・ドライバーによる作戦とサイクロプス隊の陽動によって乱れた。

そしていったん異動命令が出て、所属が変わったばかりの隊は即応が難しいのだ。軍であるからには命令系統自体はしっかりしているが、それでも上司と部下というものは阿吽の呼吸というものが存在する。上司は部下の能力と忠誠心を把握して始めて使いこなせるものだ。逆に部下は上司が信頼に足る者かどうか常に推し量っている。部隊の異動と所属の変化はいったんこれをご破算にすることもできる。

おまけに前線部隊以上に後方勤務の者は忙しくなってしまう。部隊の移動だけでも大変なのに、補給物資生産や購入、連絡窓口など考えることは山ほど出てきて膨大な処理に追われる。

そこを突き、ついにジオンの地表作戦は本番に入ったのだ。

コンスコン機動艦隊はザンジバル級六隻を中心としてムサイ五隻、輸送艦三隻を従えながら降下する。

ザンジバルはいったん降下し、MSを含めた部隊を送ったのち再び上昇、成層圏上層で待機に入る予定である。

一方のムサイは大気圏航行能力は無いためそのまま降下・着地させた後は動かず、ただの砲台になって作戦支援に回る。最後の最後に人員だけ脱出させ、自沈する使い捨てだ。

それともう一隻、シャアのザンジバルもまた同行し支援に入る。

ザンジバル級は大きさに比べてあまり積載量は多くなく、MSは通常九機しか載せられない。その一方で砲撃力はチベよりずっと弱く、砲撃戦にも向いていない。そういう意味で大気圏内ならともかく宇宙ではたいそう効率の悪い艦のだが、シャアは以前から好んで旗艦に使い続けているのだ。それは大推力を持ち、ここぞという時の加速に優れるせいである。

自分もMSで突撃するシヤアのこと、オーソドックスな砲撃戦ではなく機を見て一気にMSで勝負を決める戦法をとるのに大変使い勝手がいい艦なのだ。

俺はついに作戦開始を指示する。

「先ずはムサイを先行させる。目標、連邦オーガスタ基地上空で逆噴射をかけながら自然重力で降下、途中早いうちに対空ミサイルポッドを見つけて潰す、それが仕事だ。そしてオーガスタ周辺を封鎖するように着地しろ。同時に別ルートからザンジバル級全隻で大気圏滑空に入る」

こうして急襲の手筈を整えていく。考えに考えた作戦である。

「そして目標のオーガスタ基地の直前まで来たら機首を上げ、失速によりスピードを落とし、ガトーらの降下部隊を発艦させる。その後艦は上昇、旋回しながら輸送艦から目一杯推進剤を受け取り続ける。輸送艦は空になれば連邦のMS格納庫目がけて墜としてやれ」

待つてろよ連邦オーガスタ！

半日で片付けてやる！

作戦通りムサイたちが降下に入った。

たちまち熾烈な対空砲火に迎えられ、それをかいくぐらなくてはならないことになる。だがムサイたちもそれに対し反撃を始め、連邦オーガスタ基地対空陣地に打撃を与える。

これは必須のことなのだ。

大気圏中ではミノフスキー粒子はあまり濃くできない。そのため、旧来のレーザー兵器やホーミングミサイルといったものも至近では有効になってしまい、これを叩かないと危険だ。

おまけに地球表面に限り熱核エンジンを使わないいわゆる戦闘機も脅威になる。そして、こちらの襲撃に気付いた連邦が最も早く送ってくる戦力は歩兵ではなくそういう戦闘機なのは自明である。

いかに宇宙空間では無敵のMSとはいえ、地球重力下で自由には動けない。高速で三次元移動ができる戦闘機が優位に立つこともあり

える。それらの排除も担うのだ。

ムサイの頑張りを確認し、次の段階に移行する。

俺の乗る艦を含め、ザンジバル級が一斉に大気圏に突入し滑空を始める。その強靱な外壁耐熱剤が摩擦熱によってたちまち高温になり暗赤色に変わっていく。その性能を試すかのごとく耐熱温度ギリギリで航行する。もちろん滑空ではなく単に落下する方が速いのは当たり前だが、それでは減速する時に推進剤を大量に消費してしまい、上昇できなくなってしまうのでこうするのが合理的である。

完璧に空調が効いているはずの艦内だがわずか温度が上がったような気がした。緊張で汗ばんできたせいだろうか。

ようやく連邦オーガスタ基地が見えてきた。

そこから十秒もすると格納庫らしきものから連邦MSが出てくるのが分かる。まるで動く砂粒のように小さく、また数が多い。

連邦オーガスタ基地は想定よりも大規模だったのだ。ジオン側が情報を入手した時点から更に拡充されたのだろう。連邦の重要な開発拠点として発展し、当然のように守備も決して手薄ではない。

だからといって作戦を中止することはない。

ザンジバル級が次々と機首を上げ、失速により最後のブレーキをかける。

だがここで驚くべきものを見る。

「な、何ー！ もう発艦しているMSがいる!? この高度で、まさかー！ こちらの艦隊からMSが一機もう出ているではないか。

誰が出撃したのか。

考える必要はなかった。それが赤いMSであるからには、シヤア少将しかあり得ない。

もちろんそのシヤア少将から作戦指揮官である俺に通信が入る。

「コンスコン司令、予定通りのMSによる強襲、先に行かせて頂きました」

「シヤア少将、どうしたというのだ！ あまりに危険だぞ！ 単機では降下中に狙い撃たれたらどうにもできない。中高度からのパラ

シユート降下では逃げようがないではないか」

「パラシユート？ ああ、コンスコン司令、それならばご心配なく」

全くいつもの調子を崩さず、人を食ったような態度のシヤアに俺も啞然とする。

そして表示器にシヤアの乗るゲルググJ改のスペックシートを出させてはじめて、俺にもその自信の根拠が分かってきた。

ゲルググJ改、装甲も武装も平凡である。しかし推力だけが馬鹿みたいに大きいのだ。なるほど、それでは短時間なら降下にパラシユートが必要ないということか。ついでに言えばパラシユートを付けていなければシヤアは降下中に狙撃されたとしても躲す自信があるらしい。

実はこれまでシヤアは技術部からガルバルデイ改への移乗を勧められていた。しかし、あつさりとは断っていたのだ。

「別に機種を変えたくなくて言ってるんじゃない。必要があれば私はいつでも変えられる。だが今のところその必要はなさそうだ。ゲルググJ改は私の戦闘スタイルにとてもよく合う」

しかし、降下した後でもしばらく単機ではないか。その危険性は変わらない。

もし撃破されたらシヤアの自業自得というだけでは収まらず、事はジオン全軍の士気に関わる問題になる。

シヤアの思わぬ独断専行に複雑な気分になっていた俺になぜか艦橋のセシリア・アイリーンが言ってきた。

「司令、シヤア少将の動機はスタンドプレーなどではなく、たぶん単純で、可愛いものですよ」

「動機？ どういうことだろう。シヤア少将は昔から自信過剰で戦いに際して派手好きだが」

「女だから女のことは分かります。あのララアという女は従順なようできて恋人を縛り付けるタイプ。今、シヤア少将は一人で羽を伸ばせる機会を待ちかねたのでしょう。母が大好きでどうせ母の元に帰るのに、それでもたまには一人で冒険したい子供のようなものです」

「なるほど。シヤア少将は子供、か」

それで気持ち的にはなんとなく納得できた。

しかし早めに後続のMSを出さなくてはいけないのは同じである。「高度40、完全静止を待たずにMS隊は順次発艦だ！ 先頭はガトーの隊とする」

ついにこちらのMS隊が出撃して戦闘に入る。

信頼性のあるガトーやカリウスのMS隊総勢十六機が降り立つ。ハッチが開かれたとたん、吹き込む風にMSが巻かれる。それをものともせず出て、そのまま風を切りながら落下し、最後は脚部の着地と共に重い音を立てる。宇宙しか知らないパイロットがいたらおそらく戸惑っただろう。そんな風や音は地表ならではの洗礼だ。

そして早いところ連邦MSを派手に葬り続けていたシヤアと合流する。それは、シヤア自身の部下であるMS隊が追い付いてくるまで一時的に合同で戦うためである。

次にシヤリア・ブルの隊十四機、そしてツエーンの隊十三機が続いて発艦する。今回の作戦、モビルアーマー乗りの二人のうちケリイは悔しさをこらえて残留に回ってもらった。もう一人のクスコ・アルはもちろんシヤアのララア・スンと共同で別の仕事がある。

突撃していくこちらのMS隊は実に頼もしいものだが、対する連邦MSもまた想定より多かった。

ざっと見ても百機以上はいるのではないか。

もちろん全部を倒す必要はさらさらなく、こっちの作戦行動を邪魔されないようにすれば問題ない。まあ、戦意を刈り取るには半分は倒さねばならないだろうが。

連邦MSはその内容的に、今となつては旧式に分類されるジム前期型、あるいはジム・コマンドばかりなのは幸いだ。既に高性能機の方は残らず宇宙に送られてしまっているのだろう。

それならばこちらの主力であるジオン最新鋭機ガルバルディ改の方が数段上の性能になる。地表の気や重力に慣れてしまえばこちららのもの。分断されて袋叩きにされない限りまず負けることはない。

ましてやこちらにはジオンでもエース級がいる。戦いぶりを見れば明らかだ。

シヤア少将は全く連邦MSを寄せ付けず、撃墜スコアを伸ばし続ける。もはや「赤い彗星」の恐怖に連邦MSは立ちすくんでいるように見えた。

事実、地球に残っている連邦将兵でシヤアの伝説を知らない者はいない。

それは赤いシヤアズゴックが何と振り向いて見ることすらせずに横から来たジムを一撃で斃した、というものである。

そして今、伝説を再現するかのようにゲルググJ改のビームナギナタが閃く。

ただ黙々と戦うのではなく、一連の動作で前方のジム、後方のジム、二機を同時に片付けたりにしている。

そんな華麗な技が赤いMSとよく似合う。

そして俺の方は、シヤアやガトーなどの活躍を見るだけではなく、隠し玉と連絡を取ったのだ。

これが初の実戦投入となる。

「カーラ・ミツチャム教授、どうでしょう」

「それはもう神経接続は完了、ダリルのサイコ・ドム、いつでも行けます！」

第八十三話 好敵手

連邦オーガスタ基地急襲はシャアの先行出撃というハプニングはあつたものの順調に推移している。

地上に居座つたムサイが連邦の増援に対して睨みを利かせ、一方では基地を守備する連邦MSとの戦いで確実に勝利へ近付いている。

ここで俺はカーラ・ミツチャム教授の言葉を聞き、ダリル・ローレンツの出撃を命じた。

「よし、ではサイコ・ドムを発艦へ」

それは期待通りだった。

いや、それ以上だ。

地表に降下し、連邦のジム隊と接触したダリル・ローレンツのサイコ・ドムがたちまち戦果を挙げていく。

それも見ていておかしいことがある。

動きが速いのは神経接続とやらのせいだと理解できる。本来重いドムが考えられないほど切れのいい動きになっているのが分かる。

だが、不思議なのはドムの標準的な武器であるジャイアント・バズをそのまま使っているのだが、その弾を確実に連邦のジムに当てているのではないか！ まるで連邦ジムの来るべきところへ先に撃つているような塩梅だ。

「凄いな！ あんなに正確に撃てるものなのか」

ジャイアント・バズは威力はともかく初速は遅く、無駄撃ちを一度二度して相手MSの足を止めてから仕留めにかかるものだが、ダリルにはその常識が通用しないらしい。いや、俺は今までダリルをチベの砲手にしていたが本来の狙撃能力にはこんなものもあつたということだろうか。それがチベの主砲より連射ができる状態でいつそう発揮されているのだ。

こうしてダリルのサイコ・ドムの戦力が加わって戦況は更に順調、もう少し押せば連邦MSの組織的抵抗は崩れる。

ここでようやくシヤア少将の本来の部下たちが追いついてきた。シヤアのザンジバルに搭載されていた八機ほどのMS隊である。もちろんすぐさま戦いに加わった。

俺はまたもや目を疑う。

何？ おかしいな。ガトーのアクト・ザクがもう一機いる？ なぜアクト・ザクが……

しかもその挙動が変だった。

その一機だけ妙な戦いぶりなのだ。突然背面飛びなどをして、背中を柔軟にしならせながら連邦MSを撃っている。そんな機動法がマニュアルにあるか？

「どけどけー！！ お前ら邪魔なんだよ！」

これはシヤアの隊にキャラ・スーン学徒兵が補充として配属されていたのだ。むろん彼女が訓練所でハイスコアを叩き出していたから、今回の地上作戦前に加えられたというわけだ。俺は無茶苦茶な戦いぶりを初めて見ている。むろんシヤアも初めて見て呆れているんだろう、一瞬動きを止めてそれを眺めているようだ。

ついに連邦MSの排除に成功した。次々出てきたものも片付けた。散り散りになって逃走したり、行動不能になって脱落した連邦MSを深追いする必要は無く、放置していい。

これで目標の一つである連邦のMS開発部を徹底的に叩ける。

建物はもとより、造りかけの試作MSや部品、その生産ラインを破壊するだけにとどめては意味がない。技術開発部の人員はどうせ地下道でもう逃げていているだろうからその脳内の分は仕方ないが、せめて開発データを格納しているところまで叩く必要があるのだ。

その途中で連邦の研究途上のMSを撮影する。

データも重要そうなものがあれば、ジオンの今後のため頂く。こうした機会でなければ手に入らない連邦のMS技術情報はマ・クベ少将へのいい土産になるだろう。

そこで驚くのは一見して分かる量だ。研究中のため試作にも至ら

ずパーツにとどまっているものも多いが、とてつもなく多岐に渡っている。

連邦はどれほど底力があるのだろうか。

技術開発に割けるリソースがジオンとは桁違いに違う。

連邦はジオンと違い、MSはできるだけシンプルな機種構成にして大量生産をかけてくるのが常だった。コストバランスを重視するためだが、それは正に戦争に勝つのが前提の強者の余裕でもある。想定用途ごとに新たな設計を起こし、例えば水中用のゴッグなどを造ることまでして、少しでも寡兵を有効に使おうというジオンのやりかたとは真逆だ。

だが、結果的な量産としてはそうであっても連邦は決して初期開発自体を緩めてはいない。改めて目の前にそれが示された。

逆に言えばジオンが未だに性能の優位性を保っているのが不思議なくらいだ。ジオンMS開発の基礎となったザクがいかに画期的なものだったか分かる。

作戦が順調なのに気分が暗くなってしまう。

おまけに衝撃の事実が俺を襲った。

俺はそういつた連邦の研究MS機体の中にあるものを見つけた。

何と、ガンダムタイプもあつたのだ！

そこにあつたのは完成には程遠いものばかりで、おまけに連邦MSは白を基調としていてどれも似たように見えるものだが、この俺だけはガンダムを見間違えることなどあり得ない！ その恐ろしさは誰よりも知っている。

ガンダムには勝てない。

これだけは無理なんだ。

どんな戦況でも関係ない。こつちがどんなに戦術を駆使して、圧倒的に追い込んだとしても勝つことがかなわない、それがガンダムだ。く、くそ、連邦はまだガンダムの開発を諦めていないのか……

俺が感じた不安の通り、世の中というものは万事がうまくいくもの

ではない。

ちょうど同じ頃、連邦軍北極基地に一人の男が着いた。

大きな期待を胸に基地に入ると出迎えたMS整備主任から声を掛けられる。

「お待ちしていました、イオ・フレミング少尉」

「挨拶はいい。早く、例のMSを見せてくれ」

「基地司令への答礼はどうします？ 今からお連れしましょうか」

「いや、先に目的のものを見た方がいい。ここに来た意味はそこにかかない。答礼はその後だ」

年配の整備主任は下士官階級なのでイオ・フレミングに一応敬語は使うが、苦笑せざるを得ない。

到着したパイロットはまるで駄々っ子ではないか。

おもちゃを欲しくてたまらない子供のようだ。

「そんなに焦らなくてもいいでしょう。もう用意はさせていますよ。各部チェックは終わり、問題が無いのは確認しています。そのための北極基地ですから。ただし、汎用機体ではないので少尉を待つて実働テストに入ることになります」

「俺は一分一秒でも早く乗ってみたいんだ。ノーマルスーツに着替える時間も惜しい。どこだ、どこにある」

「直ぐに格納庫に案内しますよ」

その新しい機体に搭乗させるべきパイロットは上層部から指定され、どんな人間かと待っていれば大人になったやんちゃ坊主だった。

この機体はそれまでガンダムパイロットだった者の中から選ばれることになっていた。本当ならばアムロ・レイ曹長が最有力だったのだ。それまでの戦果の積み重ねがものを言った。

しかし、寸前でそれがひっくり返ってしまった。

なぜならアムロ・レイには「ちよつとした検査」を受ける必要があるという横やりが入ったからだ。連邦のオーガスタ基地、正確にはその中にある胡散臭い研究所の要請である。

面白いことにアムロ・レイ曹長の所属する強襲揚陸艦ホワイトベアスはそれに涉り続け、ルナツーへの戦力集中を盾にとってアムロ・レ

イの放出を遅らせている。

結果としてこの機体のパイロットにはイオ・フレミング少尉が就く。言うまでもなく本人も乗り気である。

そして格納庫に着いた。

そこには、ジョン・コーウエンがゴツプ大将に勧め続けたガンダム計画の残滓がある。

ジョン・コーウエンは熱弁をふるったが、どんなに請われてもゴツプ大将はガンダム大量生産にうんとは言わなかった。

コスト面であまりにも荒唐無稽過ぎる。普通に考えればジムを着実にバージョンアップし、穴がないように改良していった方がいいに決まっている。回り道のようにでもコスト的にはずっと合理的だ。

ガンダムは試作機だからこそ一切の妥協をせず造られたのであって、兵器としては考えられないコストになる。その部品からして既存のものをほとんど使わず特注の塊だ。材質から始まり、規格すら捻じ曲げ、例えば駆動電圧どころかネジのピッチすらも機体各所でバラバラに最適化されるといってもないことがされている。

かつて連邦上層部は天才テム・レイに対し、戦局打開のためとにかく早く高性能MSを造れと要請した。ルウム会戦でジオンMSに完敗したショックがあまりに大きかったためである。そしてテム・レイは偏った天才らしくそれを全く言葉通りに受け取ってしまった。結果的に期待以上の仕事をしたがコスト的な合理性という視点はすっぽり抜け落ちていたのだ。

連邦の政治屋との関係を重視、いや癒着しているゴツプ大将としては、そんな数字しか見ない連中にガンダム生産など言えるわけがない。

しかしゴツプ大将は老獪だった。ジョン・コーウエンを派閥に取り込むメリットを天秤にかけ、政治的な配慮というものをした。生産など全く予定しなくともガンダムタイプの研究開発だけは妨げないポーズを取る。ガンダムマークIIというスローガンは建前として空虚に残された。

ただしそれだけではジョン・コーウエンは納得しないかもしれない。そこでゴツプ大將は、ガンダム計画においてただ一機、造りかけて中止されていた機体を完成させるよう指示したのだ。

ここに唯一無二、ガンダムの名を冠するMSが誕生した。

「少尉、このMSです。現在の連邦にたった一つだけのガンダムタイプMSですよ。コードネームはゼフィランサス」

「ゼフィランサスカ、可愛い名じゃないか。しかし、この性能は殺戮の悪鬼なのだろう?」

それは不敵に笑っているようにも見えるMSだ。見慣れたジムのような優美な感じはなく、骨太で力がみなぎっている。関節部の強化と特徴的なシールドの形がそういう印象を持たせるのかもしれない。

今、ダリル・ローレンツの因縁のライバルが再びガンダムに乗る。

「気に入りませんか」

「気に入らないわけがない。いいや、大いに気に入った。このガンダムとなら俺はジオンなどに負けやしない。世界の果てまで行けそう
だ」

第八十四話 二者択一

「やれやれ、ここまで嫌われているとは知らなかった。自覚がなかったのは幸運なのか、あるいは不幸か判断に困るね」

「そうは言っていられません、ワイアット閣下！ このままでは取り返しのつかない事態になります！ 閣下はお怒りになりませんか」

「怒っているさ。君の言う通りだステファン・ヘボン君。自分の身の振り方に関わることだけでなく、連邦が追い込まれるのは楽しいことではないよ」

それは一通の通知が原因だった。

連邦軍首脳部は嫌味たらしく報告書の提出を要求してきたのだ。それは先に首脳部が悲痛なほどマス・ドライバー攻略命令を発していたのにもかかわらず、それを怠ったグリーン・ワイアットを非難したためである。

命令に従わなかった正当かつ事実である理由が無かったとしたら、何とグリーン・ワイアットを現在のルナツー基地司令という立場から「適正な部署」への異動を命じることまで匂わせてある。もちろんワイアットを連邦宇宙戦力を一手に握る立場から追い落とすことを意味する。

連邦宇宙艦隊を率いる人材としてワイアットが最も適任という認識はさすがに連邦軍首脳部も共有しているが、それでも今回ばかりは不興を買った。首脳部の自己保身からくる八つ当たりではあるが。

もちろん、グリーン・ワイアットも馬鹿ではない。

首脳部が何らかの圧力を加えることは既に予想していた。それだけならグリーン・ワイアットは圧力を跳ね返し、何とか対処できる実力がある。これまで培ってきた政治力は伊達ではないのだ。

グリーン・ワイアットがここで困っているのは別のことがあるためだった。

逆に連邦軍首脳部を説得しなくてはならない重大な問題が存在する。

ソロモンをジオンに奪い返されてから一段と通商破壊が激化している。実のところそれはお互い様ともいえる。連邦とジオン、どちらもサイド6を始めとした残存コロニーとの通商が残っているゆえんだ。

ただし比率としては連邦の被害の方がだいぶ大きい。それは、ルナツー単独では完結できるわけはなく常に地球表面、サイド6、作りかけのサイド7などから補給を受ける必要があるからだ。しかもその航路が長いため確保するのは大変である。

ジオン側からはひっきりなしにデラーズ艦隊とカスペン大隊が攻撃して連邦航路を寸断にかかる。

連邦側は逆撃を企図するがうまくいかない。追えば散って逃げる。そもそもこういう戦いでは輸送船を襲う方が襲われる方よりも圧倒的に有利なのである。狙いをつけて潜み、機動力を駆使して襲撃されたら少なくとも初撃は防げない。

グリーン・ワイアットは重要性を認識し、その護衛として配備が始まったばかりの連邦最新鋭MS、ジムカスタムを惜しげもなく投入する。

これにはさすがにジオン側も少なくない被害を出してしまう。ガルバルディ前期型でもジムカスタムに対して性能は上回るかもしれないが、その差は限りなく縮まり、連邦の数に対し質で対抗することができなくなったからだ。

それでもジオンによる通商破壊は止むことがなく、執念があるのかのように続けられている。

グリーン・ワイアットはそれに疑問を抱く。

ついにある真実に気付いたのだ。

「古今東西、戦争というのは地味なところで勝敗が決まるものだ。輸送船を狙うのは実に正しいね」

「閣下？ 一般論としてそれは確かですが、今さらなぜ？」

「恐ろしいね。全く恐ろしい。ジオン側は一見ルナツーを飢えさせ、宇宙戦力を弱らせるためにやっているようだが、それは見せかけだ。

真の狙いはヘリウム3だけだ」

「ワイアット閣下、それはいったいどういうことでしょう。確かに以前からヘリウム3輸送船は頻繁に襲撃されていましたが、他の補給船だってやられているのでは」

「ステファン・ヘボン君、逆なんだ。だからこそごまかされてしまった。ヘリウム3を狙うには、ジオンでさえ木星船団に手を出せない以上、連邦輸送船に受け渡された後からしかできない。その受け渡しポイントには連邦から決めている。つまり、ジオンがヘリウム3輸送船を襲うにはよほど周到に情報を集め、準備する必要がある。そんな骨の折れることでも彼らは全く厭わない。おかしいだろう?」

「そ、それでは……」

「たまたまヘリウム3輸送船が襲われたとしては被襲撃率が不自然に高いのだよ。これは、明らかに意図をもって襲っている。むしろ他の補給船の方がごまかしのためのオマケだ」

核燃料資源であるヘリウム3は木星圏から輸送されてくる。それを一手に担っている木星船団公社は今回の戦争に関与せず中立を保ち、言い換えれば連邦にもジオンにもヘリウム3を供給している。誰もそこに手を出せることはない。

そして木星からの超大型輸送船は長い航路をなるべく燃料を使わないで航海しなくてはならない。そのため地球をスイングバイする航路を取る。地球圏の重力で向きを変え、また木星に戻るのだ。その際は決して速度を落とさず通り過ぎる。ヘリウム3は通常輸送船がそれに速度を同期させ、荷を移し替える形で受け取っているのだが、それは必ず宇宙で行われる。しかも木星からの大型輸送船の航路は地球公転軌道のため最初から厳密に決まっているもので、変更はできない。

つまり、荷を移すのがいつなのか当たりをつければ自動的に受け渡し宙域が特定されてしまう。

そこから地球に向かおうとする連邦輸送船を襲撃するのは木星船団公社には手を出さない形で可能なのだ。

「ワイアット閣下、ヘリウム3をジオンが狙うというのは、戦略的なこ

とになるでしょうか」

「もちろんだ、ステファン・ヘボン君。言うまでもなくエネルギー資源で連邦を追い詰める戦略だな。いったい誰が考えたのやら。策を練るのが上手いキシリア・ザビという辺りかもしれない。いずれにせよジオンがそれほど壮大な戦略を駆使しているのなら、このまま連邦が無策のままでは危険だ。今まではジオンなどいずれ駆除する羽虫のように思っていたがこの戦略に嵌ればどうなるか分からない」

「エネルギー資源が無ければ、戦艦も何も動かず、大戦力も宝の持ち腐れに…… それどころか工場が止まってしまえば連邦の生産力も根こそぎ無意味になると」

「だからこそ今のうちにヘリウム3の備蓄が必要になる。そして輸送船を倍増、いや十倍増にして少しでもジオンの目をかいくぐって運ばないと大変なことになる」

グリーン・ワイアットはそこまで看破していたのだ。

このままではいけないという危機感がある。しかしグリーン・ワイアットは前線指揮官に過ぎず、軍首脳部でも政治家でもない。できることは限られている。せいぜい非効率的でも護衛を増すことくらいだ。一刻も早く連邦上層部の能天気な気分を改めさせ、大規模なエネルギー供給体制の変革をなさしめなくてはならないが、それは簡単なことではない。

そんなタイミングでワイアット自身が首脳部に疎まれるとは。

ワイアットはここで考える。

連邦にとつてどちらが良いのだろうか？

自分がルナツー基地司令としてとどまることを優先した方がいいのか？ 他の無能な前線指揮官にとって代わられたらこの先の戦いがどうなってしまうのだろうか。

あるいは逆に職を賭してでもヘリウム3確保を言いつつの方がいいのか。しつこく毎日でも騒げばいくら戦略能のない連邦高官でも考えるかもしれない。

どちらも手にすることはできない。これは厳しい二者択一なのだ。

グリーン・ワイアットは考えに考えを重ねた挙句、ルナツー基地司令でありつづける方を優先し、首脳部にはジオンのエネルギー戦略について警告するだけにとどめた。おそらく首脳部にとって日付が変われば忘れてしまう程度の軽いものにししか受け取られないだろうが。こうしている間にも、ヘリウム3輸送は滞っている。連邦へ渡るヘリウム3は急激に先細りになりつつあるのだ。

宇宙ではそんな会話がなされている。

それと同時に、地球上ではジオンによる連邦オーガスタ基地急襲も大詰めを迎えていたのだ。

俺は今こそ悪魔の機関を探り出して叩く！

人間を改造しようとする連邦版フラナガン機関、あのフラナガン・ロムが性懲りもなく作ったものだ。このままにしてはおけない。

俺はザンジバル級を上空旋回させながら、艦橋にクスコ・アルとラア・スンの兩名をスタンバイさせた。

基地といっても広い。これをやみくもに探す時間はない。

中にある研究機関の位置を特定しなくてはならないが、それには材料にされている人間の位置を探ればいい。

「ラアア、私の持つイメージが分かる？ それを手がかりにして」

「お姉様、そうしたいのだけど、見つけれないわ」

「もつと頑張つて！」

「で、でも無理…… ぼやけていて分からない」

それは失敗だった。

クスコ・アルが励ますがうまくいかない。

いくら最強のNTラアア・スンでもクスコ・アルの持つロザミアのイメージから探し当てるのは無理だった。それができれば超能力者だ。俺は無理と分かっているけども期待していたのだが、やはりダメか。今回はそれらしいところを爆撃するだけで引き揚げるしかないのか。

「あつ！ 何か光があるわ。お姉さまのイメージとは違うけど、これは確かにNTの存在……」

「えっ、ラレア、NTがいるのは確かなのねッ」

「少なくとも一人、強いNTがいるわ。その場所なら分かる」

「どこなの！ ラレア」

分かるのか！ ラレア・スンがここに来た意味があった。さすがにラレアは見ず知らずであつても、それが強いNTであれば検知できたのだ。

NTを一人でも見つけられたら、そこがすなわち連邦の研究機関だろう。

俺は直ちにケリイ・レズナーを含む探索部隊を降下させてその位置へ向かわせた。

地下は地下だがそんなに深くなかったのは幸いだった。

十層も二十層も下ならどうにもならなかつたろう。

部隊は素早く電磁ロックを破壊し、扉を開ける。一見美しいが、非人間的なまでに無機質で青白く照らされた通路が続いている。進むとまた扉に出くわす。時折は守備兵を撃ち倒す。そんなことが繰り返される。

しかし、嚴重になっているほど中に重要なものがあることを意味するものだ。

とうとう見つけ出した！

それは狭い居住区、中には囚われた一団がいた。

第八十五話 思わぬ拾い物

フラナガン・ロムの実験材料にされていた一団が見つかった。

それは囚人より少しマシな程度の住居房に閉じ込められ、生きるだけなら充分ではあってもとうてい人間らしい部屋など与えられてはいない。

飾りのついた小物も、趣味の道具も何一つ無いのだ。

第一行動の自由が無い。陽を浴びることすらあったのか疑問だ。フラナガン・ロムは生物として生きていれば実験体には充分、という考えなのか。

ケリイがその者たち全てを救出し、俺の艦に連れてきた。ついでに施設の研究者とおぼしき者も捕らえ、こちらは強制的に連行した。俺は期待してそれらの者を見る。

至極残念なことにその中にフラナガン・ロムはいなかった。

どうしてなのか研究員の一人を尋問して聞き出したが、それによると奴はいち早く逃げ出したのではなくて、たまたま連邦の別の研究所に出かけていたため今はオーガスタにいなかったらしい。

くそつ、悪運の強い奴だ。ここでは是非とも捕まえたかった。

逆にもう一つの目的は達成できたようだ。囚えられていた一団の中にはやはりロザミアがいたんだ！

黒紫の髪とその顔は間違えようがない。ただし、向こうはこちらを見ても何もしやべってこないではないか。

どうということか、俺は言葉に迷いながらも声をかけてみることにする。

「ええと、ジオンのコンスコンだ。ロザミア？ いや、マリーダ？ どちらだろう」

「……」

「見覚えがないか？ 俺はスベロア・ジンネマンの知り合いで、あの時湖の展望台にいた。しかも湖と一緒に落ちてしまったじゃないか。

白鳥でもないのにドボンと。それも覚えていないか？」

「……」

俺のつまらないジョークにも反応がない。逆にうぶぶ顔のケリイがうつとおしい。思い出し笑いをするな。

「ならばお父さんはどうだ？ スベロア・ジンネマンのことだ。お父さんじゃないか」

「え？ お父さん？ 私にお父さんはいないわ。いるはずがない」

俺はここで理解した。ロザミアがちよつとおかしいのはあれから再び記憶を操作されているためだろう。これは、またしてもロザミアが連邦のおもちゃにされている証拠だ。何かの用途のために使う準備でもされたのか。

「しかし、あの時はあれほど……」

「お父さん…… 知らない、でもいたような…… ヒゲの私のお父さん、優しい。確かにマリィダと呼んでくれた…… 私を。でも分からない」

尚も焦点の定まらない様子のマリィダを船室へ連れて行かせた。

少し安心できるのは、ロザミアはジンネマンのことを忘れていないわけじゃなかった。

連邦の研究員にいつそう厳しく問いただしたところ、ロザミアは記憶の消去にひどく抵抗したそうである。

俺は肅然としてしまう。

ロザミアはジンネマンの言葉をしっかりと握り、あくまでそれを守り、記憶を保とうと頑張ったのだ。

それは崇高な戦士ではないか！

その孤独な戦いを想像すれば涙が出そうになる。

彼女は自分が自分であるために全力で戦い抜いたのだ。

結果的には力尽き、消去に抵抗したせいで彼女はなおさら乱暴かつ強引な操作をされてしまった。今や脳内のノイズがひどくて錯乱している。できれば俺は彼女をジンネマンの元に送り、今はしっかりと静養させてやりたい。忠実な戦士には労りでもって報いてあげなくてはいけない。

いずれにせよこんな研究は非人道的だ！

決して許されない。人間にやっていい実験じゃない。少女の記憶をいじって利用するなど許していいわけがない。

誰が何と言ってもこの報いはきっちり受けさせてやる。

しかしここまででは俺の予測の範囲内だ。悲しいことに悪い方の予測だが。

予想もしない驚きはこの先にあった。

囚えられていた者たちは8人ほどだが、その中に何と7、8歳くらいの子供が交ざっている。しかも三人も。この研究所はこんな子供さえも材料にしていたのか。

「ミシエル、どうする？ ジオンだつてさ」

「どうしようヨナ。研究所から逃げてやろうとは思ってたけど余計やばくなった。リタはどう思う？ リタならどうしたらいいか分かるだろう？」

「……この船の人たちは、たぶん悪くない、と思う。ここから逃げなくていい」

「リタが言うならそれで決まりだ。とりあえずメシが美味いかどうか見てから考えようぜ」

「ヨナは前向き過ぎるぞー！」

意外にもこの境遇にめげることなく元気な様子であり、今は子供らしくなんだかごちゃごちゃ言っている。その三人の相談がまるつきり聞こえているが、特にひねくれ者でも馬鹿でもなさそうで、こんな場所とタイミングでなければ微笑ましいと言えるだろうが。

うくん、もう面倒だから保留だ。

連邦基地内に囚われていた以上、兵ではないのだから捕虜にはならない。しかしこちらが保護する義務もない。美味しいメシでも食わせたい、どうしたいか聞いてみても遅くはないだろう。

それは細かいことだった。そんなことより目を引くような特異な人間がいた。

その者はこんな状況でも不自然なほど落ち着き払っている。

「我々は感謝をすべきでしょう」

「か、感謝ですか、僧正様。しかしこうなるとは予想もしませんでした。いったいどうすれば」

「分かっていません。悪いようにはならないでしょう。今はこのジオンの方々に協力すべきです」

周りの者たちはその男を僧正という不思議な呼び方をしているではないか。

何だそれは？ 意味が分からない。

次にその男は全て見通したかのような目で俺を見ている。

「私はレヴァン・フウと申します。皆には僧正と呼ばれていますが、別に僧侶の家系でもなく、何かの教団を作っているわけでもありません。今のところは、ですが」

「ジオンのコンスコン大将だ。事実確認をしたいが、君らは連邦の研究施設に囚われていたこと、それは確かかな？」

「その通りです。ここで我々は連邦研究員から実験とやらを受けていました」

「ならばジオンは君らを救出し、戦時捕虜ではなく一時預かり対象とする。取り引きというわけではないが後で政治宣伝のために事実を言ってもらうことがあるかもしれない。君らには嫌かもしれないが、仕方ないことだと思ってもらえればありがたい。構わないか」

「もちろん構いません」

その接見中、俺の近くにいたララア・スンが浅い呼吸をしている。

俺は改めて気付いたが、ララアは終始落ち着きをなくしていたではないか。その理由など聞くまでもない。ララアが基地内に見出した輝点、強いNTというのはおそらくこのレヴァン・フウという者だったのだ。

「間違いなく強いNT……でもなんだか底が知れない」

ララアが思わずそんな呟きを漏らしている。

しかし、当のレヴァン・フウの方はそんなララアをチラリと見たが特に表情を変えることもなく、また俺の方を向いている。

「逆に少しばかり取り引きをしたいのですが、コンスコン大将」

「ん？ それはいったい何のことだ？ レヴァン・フウ僧正」

「いいえ、取り引きではないですね。お願いに近いものです。お探しのフラナガン・ロム博士の居場所を教える代わりに我々をいずれ南洋同盟にお返し頂きたい。そうすれば必ず変化が現れます。我々にとっても、そちらにとっても良い方向に」

「それは願ってもないこと、と言いたいが南洋同盟はここから遠く、返せるかどうかは情勢次第のため不確定としか言えない。申し訳ないが」

「まことに正直な方ですね、コンスコン大将。しかしその意思があれば私には充分、では先に言います。フラナガン・ロム博士はアジアのムラサメ研究所にいます。私には大体の方角が分かるので間違いないでしょう」

「ムラサメ研究所！ 確かに連邦のNT研究所として名を聞いたことがある」

「そこでは、このオーガスタに勝るとも劣らない実験が繰り返されているのです」

俺は幾つかのことを考えて唸る。ここで僧正の言う南洋同盟というのは地球連邦に属する一つの行政区だ。

今の連邦は北米閥の政治家が幅を利かせ、それ以外の行政区から反感を買っているらしいことは知っている。北米以外の発言権は以前にもまして限りなく低下しているのだ。この戦争によりオセアニアは壊滅、ヨーロッパは荒廃、アフリカは未だジオン残党が立てこもっている状況がそれを助長している。経済や生産では北米と東南アジアが主要なセンターになっている。

ただし、だからといって不満を感じている行政区が連邦政府に対しあからさまな抗議や離脱活動をしたこともないし、そんな噂もない。実際の思惑や雰囲気は、俺が政略について詳しくないために分からないのだが。

そしてもう一つ、ムラサメ研究所をどうするか、である。

いったん宇宙に撤収し頃合いを見て再度降下作戦を行うのがいい

のか、このままザンジバルでアジアに移動して仕掛けるか。

どちらを選ぶか判断は難しい。

日数を置けば連邦側はムラサメ研究所に十分な備えをしてしまうだろう。かといって今からザンジバルで移動するにしても既にムサ伊を廃棄した以上、今度はその支援はなく、連邦が大気圏内戦闘機の大量投入によって飽和攻撃をしてくる懸念が出てくる……。

だが俺は決断した。拙速は下手な判断に勝る。見敵必殺がコンスコン機動艦隊だ。

経路が太平洋上になるため少なくとも地上部隊からの攻撃はなく、そして高々度成層圏を行けば戦闘機からの攻撃も減ると考えた。

このままムラサメ研究所を叩きに行く！

第八十六話 数字の女

元が何かも分からない残骸たちと、明らかにMSと分かる残骸たちと、どちらも転がっている。

ほとんどどれもが黒煙を立ち昇らせている。

そんな戦闘の跡が残るオーガスタを後にして飛び立つ。今、俺はザンジバル級ばかり七隻の艦で編隊を組ませ、一路ムラサメ研究所を目指して進むのだ。

洋上の飛行は思ったほど妨害を受けなかった。連邦の航空戦力が元々多くなかったのか、俺が通常の戦闘機では追い付けない高々度を飛ぶように指示したせいかは分からない。ザンジバルはその重量のためマツハ超のスピードは出せないが、逆に核エネルギーを使っている以上燃料を燃やすための酸素は必要ない。そして宇宙用に造られている艦体は当たり前のことだがどんな低気圧にも耐えられる。対流圏の上、宇宙への入り口ともいえる成層圏の飛行は絶妙にザンジバルの独壇場なのだ。

尤も、そのまま上昇を続けて中間圏、熱圏、そして衛星軌道へ戻ることはできず、完全に地球重力を脱する推力を得るには専用のカタパルトかあるいはロケットブースターが必要なのだが。

それでも連邦は高々度戦闘機を少数ながらも所持していたため、それらが取りすがってきた。俺はMSを並べて対空機銃代わりに使って撃退しようと思っていたが、その必要はなかった。

シヤア少将のゲルググJ改一機がほぼ全てを片付けたからだ。

短時間なら最大推力を使って浮遊さえ可能になり、しかも射撃精度が群を抜いて高いJタイプMSが威力を發揮している。

ザンジバルを優しく蹴りながら編隊内を上下左右に飛び回り、十五機ほどもあった連邦戦闘機を危険なほど近付けさせることもなく全て撃ち墜としていく。

つくづくシヤア少将は華があり、美味しいところを持っていく人間

だ。

そして雲の下にうつすらと陸地が見えてきたと思えば、もう目標である連邦ムラサメ研究所は至近にある。ここまでの移動でたったの9時間余りとは宇宙の長い航行に慣れた身にすれば随分と近くに感じられるものだ。

俺はすぐさま行動にかかる。

「直ちにMSは発艦、連邦ムラサメ研究所を制圧するんだ！」

ムラサメ研究所は怪しい実験をするためだけに作られた施設であり、オーガスタより随分と小ぶりだ。そしてオーガスタとは違い平原にあるわけではない。緑の深い山岳地の斜面に作られている。そのため車両での侵入路は限られてくるが、それこそMSでの襲撃ならば何も問題ない。

わずかな対空ポッドを潰した後にMSで包囲、そして制圧戦にとりかかる。

今度はララアも何も検知できなかつた。つまりここに強いNTはいないということだ。しかしこの大きさの施設ならば特に問題なく探索できるだろう。レヴァン・フウ僧正もここにフラナガン・ロムがいると示した後は静かに見ているだけである。

再びケレイ・レスナーを中心とする救出チームが出動し研究所内を探っていく。二回目となれば慣れたもの、さほど時間がかからない内に收容されている者たちが見つかった。

その時のことだ。

施設がある山の反対側の斜面に動きがあった。

緑に偽装されたハッチが開き、中からオートジャイロが発進して行くようにしている！

たぶん研究所には逃亡用の地下道が用意しており、そこに繋がるジャイロなのだ。

「あ、あれはおそらくフラナガン・ロムが逃げようとしている！ ツェーン隊、行け！ ここで逃したら意味がない。何としても捕らえ

ろ！」

フラナガン・ロム博士は優秀な科学者であつてもおそろく戦術のプロではない。俺だったらそのオートジャイロを囷に使い、自分だけひそかに下山する作戦を取るだろう。ある程度の距離を行けばそこで身を隠し、連邦の応援を待つ方が確実だからだ。しかし博士はそんな作戦を取らず一目散にこの場を離れる方を選ぶだろうな。

そしてツエーンは俺の期待に応えた。

だいぶ以前のことだが、ツエーンが戦闘で指を二本喪つてしまったことを聞きフラナガン・ロムが大喜びしたことがあつたのだ。

ツエーンはそれを忘れず、しっかりと根に持っていたらしい。

「フラナガン・ロム、墜ちなさいよ！ いったんオートジャイロから地上へ。そして、次に地上から地獄へ」

ツエーンのガルバルデイ改は腰を落ともしっかり狙いをつける。

地上から上空に向かって閃光がひらめく。狙撃はジャイロのエンジン片方だけを上手く傷つけた。ジャイロはその性質上全部のエンジンが回らないと飛行できず、たちまち黒煙を引きながら旋回しつつ高度を下げていく。最後は斜面に手荒くぶつかる。爆発炎上するほどの衝撃ではなくまだ不時着の範囲内だ。

そこをMSで取り囲む。これで詰み、そのはずだ。

「フラナガン・ロム博士、投降しなさい」

ツエーンがガルバルデイ改からサンプルにそう呼びかける。負傷で動けないほどではないと見込んでそれを待つ。

そしてその通り、博士は別に怪我をしたわけではない。しかし怖がって出てこようとはしなかった。博士には自分の行った人体実験が悪かったなどと露ほども思っていない。崇高な科学のためであり、実際に成果を上げたという自負というべきものさえ持っていて、研究をしたことで裁かれるとは考えてもいない。ただしジオンを裏切つて抜け出したということは理解していたのだ。ここでジオンに捕まるのは大変まずいのは分かっている。

しばらく待っても出てこないのでツエーンのガルバルデイ改が近付く。急な爆発炎上の危険性があるためMSに乗ったままである。

ますます博士は怖がるが、ジャイロの黒煙が内部にも流れ込んでいたためその熱に耐えられなくなる。一気にジャイロから出て走ることを選択した。

ツエーンは咄嗟のことに十分な反応ができなかった。

拳銃を持っているのならともかく、今はMSの武器しかない。ジャイロから飛び出てきた博士に対し殺さずに済ませるほど威力の小さい武器がないのだ。

しかし博士を逃すなど考えてもいない。その背後から、走っていく前方へ向けて警告射撃を放つ。

「この、往生際が悪い！ さっさと止まりなさい！」

それでもパニックになった博士は止まらない。博士の人生では弾が飛び交う戦場など体験したことも想像したこともなかったろう。自分はそれ用に作り上げた人間を送り出すのに。

結局、博士はそれでも走り止まらず、逃げる先を探して右往左往する。ツエーンはこうなった以上MSから降り、拳銃を持って追跡しようとした。

しかしその時、博士は山が急斜面に転じるところから滑落していった。

その崖下には川があった。博士はそこまで落ちてしまう。冬の水温ではないため直接それで死ぬことはなく、間もなく引き上げられザンジバルに収容された。

だがしかし、意識が戻らない。

「医療班、フラナガン・ロム博士はどうなってるんだ。意識が無いのは尋問のしようもない」

「コンスコン司令、調べたところただの昏睡ではなく博士には脳障害があり、話を聞く限り最初のジャイロ内で低酸素に遭ったためでしょう。そして滑落の衝撃と川に落ちたことでそれが決定的になった、ということですよ」

「なるほど、ジャイロが半端に燃えていたからな。それで警告射撃でも止まらなかったのか。その時点でフラナガン・ロムは既に錯乱して

いたというわけだな。しかし意識は戻るのか」

「時間を置けば意識は戻るでしょうが、それでも脳障害は残ると思われる、通常こういう場合には創造性や感情といったものにダメージが及ぶものです」

その通り、フラナガン・ロム博士には脳障害が残った。

端的に言えばもう二度と研究の最前線に立てるような能力は失われ、日常生活でやつとの状態になる。ジオンの監視下にあるかどうか以前の問題で、自負心の高いフラナガン・ロムにとってこれから生きている限り屈辱の日々が待っていることになる。研究だけが生きがい、人生の全てなのだから。

下手に死ぬよりお似合いの罰ではないだろうか。事実、並以下の人間になってしまったフラナガン・ロムがこの後、苦悩の末に自殺するまでさほどの期間は必要なかったのだ。

そして俺は研究所から救出された者たちを見ている。

ここで実験材料にされていて、ケリイが救出できた人員は六人である。年齢も性別もバラバラだ。

だいたいは感情の薄い顔をしている。長く実験材料にされて、擦り切れたためだろうか。

だが中に二人だけ感情豊かに見える者がいた。

一人は髪が深い緑で、整った顔立ちをしている。俺の艦隊で言えばセシリアとタイプは違うが優るとも劣らない美人だ。

「ジオンのコンスコンだ。この研究所について詳しく話を聞きたいが、先ずは名前と年齢を教えてください」

「マウアー・ファラオという。年は十五よ。この研究所にまでジオンとは、全く余計なことをしてくれたものね」

本当に十五歳なのか？ もっと上だと思っただのは、あまりに大人びているからだ。そして雰囲気が非常にさばさばしている。

そして今何と言った？ 救出されても全く嬉しそうではない。

「な、何？ この研究所に囚われていたのではないのか？」

「囚われていたのは確か。否応なく連れてこられたという意味では

ね。しかしここが嫌いじゃない。受けていたのも主に筋力強化だけで、それは将来役に立つだろうし」

「その役に立つというのは戦争の道具だろう。そこまでして戦争の道具になるのは決して正しいことではなく、そして幸せではないと思うが」

「だから？ 方法なんかどうだっていいわ。誰かの為になるならためらうこともないでしょうに」

「それは連邦のためか？ 議論をする気はないが、一言言っておく。連邦も決して善ではない」

「連邦のためかもしれないし、そうでないかもしれない。でも準備するのは無駄じゃないはずよ」

俺はだんだん理解してきた。このマウアーという者は、見かけよりずっと芯が強く、一本気の善良な性格のようだ。ただし、なんとか自分を大事にせず、「尽くす」心が強いように思える。それがどうしてなのか分からないが、将来において忠誠の対象を間違えたら大変だという要らぬ心配までさせられる。

俺は多少疲れを覚えながら、マウアー・ファラオをいったん下からせ、もう一人と向き合う。

その者はマウアーよりも淡い緑、エメラルド色ともいえる髪を持つ。そして話をする以前に非常に暖かく柔らかい雰囲気を持っている。年齢はさっきのマウアーと同じ程度に見えた。

「先ずは名前と年齢を聞きたい」

「名前は、一応フォウ・ムラサメと呼ばれています。年齢は、分かりません…… 申し訳ないのですが」

「フォウ・ムラサメとはいったい…… ま、まさか、それは名前ではなく数字か？ なぜ数字で呼ばれるんだ……」

「それはもちろん他と区別するためでしょう」

「あ、いや、そうではなく、名前が無いのはどういうことかと」

「名前を含めて何も残っていません。覚えていないのです」

「なんと…… それは、全ての記憶を奪われたのか。そして代わりの名を与えられるどころか、数字とは」

俺は絶句する。

この女はフォウ・ムラサメ、ただの4番目の実験体であり、単純にそう呼ばれているだけの材料だ。

俺も別にコンスコン・セロという自分の名を気に入っているわけじゃない。しかし、コンスコン・セロというのが単に他の人間と区別するためだけの記号ではなく、自分の核であるのも事実である。

何というか嫌な気分だ。

人間を決して記号や数字で呼ぶべきではない、そういう雑なことをしていいはずがないではないか！

「記憶を操作されてしまったのは君だけじゃなく、そういう悲劇は他にもある。ジオンは最大限支援し記憶を取り戻す手伝いをさせてもらう。先ずはこの艦で静養してほしい」

「とても感謝します」

これが俺の連邦研究所急襲の幕切れになる。

二つの研究所を潰し、いくつかの成果を得ることができた。俺はただちに撤収しザンジバル級全てを発進させた。

今度はムラサメ研究所から南下するのだ。

ただし、なるべく海洋上を行きたいのだが全てがそういうわけにいかない。マレー半島の辺りはどうしても陸地の上を通らざるを得ない。俺はそこからの対空攻撃を警戒し、ザンジバル級二隻を先行させてある程度の地上制圧を狙った。

だがそこへ連邦軍香港基地の大部隊が近付いていたのだ。

激戦はもはや避けられない。

第八十七話 追跡者

連邦軍香港基地はごった返している。

ジオンの有力部隊が地球に降下してきたことは、当初から本部からの連絡で知っている。その時から出動準備を始めていた。だが最初は本当に出撃するとは考えていなかったのだ。ジオンの降下場所が北米だった以上、香港基地よりもっと近い連邦軍基地はいくらでもある。なんとになれば連邦ジャブローの本部基地の方が香港よりずっと近いくらいだ。香港基地の出番が来るとは思えない。

だが、ジオンの部隊は連邦オーガスタ基地を急襲した後、そこを占拠などせず、北米から素早く移動して何とここアジアに向かってくるのではないか。それでは香港基地が主役にならざるを得ない。

ただしジオン部隊は香港基地を目標して来るわけではなかった。なぜかムラサメ研究所という小さな施設の方が襲われたのだ。ジオンの狙いが連邦有数の規模を誇るオーガスタ基地の次にちつぽけなムラサメ研究所とは意味が分からない。

その後、再びジオン部隊の移動が確認されたが、どう見ても香港基地を直撃するコースではなく、またしても無視されている。

香港基地がジオンの狙いではないのか？ いったい何をしたいのか？

ここで難しい判断を迫られることになってしまう。

この時、香港基地司令はホーキングズ・マーネリ准将である。その性格の通り堅実な判断を下した。

「香港基地は東南アジア最大の連邦軍基地だ。ジオンの狙いがこの基地でないと充分判明するまではその防備が何よりも重要であり、怠るわけにはいかない」

ジオン部隊が南下を続け、明らかに香港基地から遠ざかっていくと分かるまでは動くことはなかった。

しかし決して馬鹿ではなく、それを確認してからは直ちに攻撃させジオン部隊撃滅を図っている。

ただし香港基地の主役である洋上艦隊はもはや間に合わない。

飛行するジオン部隊に先回りすることは時間的に無理である。代わりにマーネリ准将は輸送機に目一杯の迎撃戦力を載せて想定通過ポイントへ送り出した。

それがマレー半島である。

ボルネオ沖から西側に進路を転じたジオン部隊がこの辺りの上空を行くと見込んだのだ。その直下へ高々度用ミサイルとメガ粒子砲台を持ち込めば撃滅が可能になるだろう。

だが俺の方ではそんな連邦の思惑はとうに見切っている。

先行させたザンジバル級からMSを降下させ、連邦の地上部隊へ一撃を加える。その混乱に乗じて一気に上空を通過するのだ。

そしてその通り、俺のMS部隊の中でも選りすぐりの精鋭MSが陸地に降り立ったが、それは連邦の大型輸送機が到着したのとほぼ同時だった。

際どい勝負に勝った！

俺は少しばかり緊張していたのだ。もしもこっちが遅れていれば、対空陣地を構築され、先行したザンジバル級がMS降下のために近づくこともできなかつたろう。

「ガトー、連邦MSを片付けろ！ ダリルのサイコ・ドムは連邦輸送機を叩け！ 何としても積み荷を吐き出して展開される前に破壊するんだ」

再びこちらのMSが連邦のジム・コマンドを相手取って戦う。

やはり数だけでいえば輸送機護衛の連邦MSの方が多い。ただし、その数的優位を活かされないよう立ち回るのに神経を使いすぎるのも、逆に言うところさえ注意すればまず負けない。こちら側が圧倒していると言ってもいい。ガトーのアクト・ザクが連邦ジムの懐に入ってしまうえば、ジムが対処しようとしても間に合うはずもなく、胴体部を断ち切られる運命になる。

そしてダリル・ローレンツのサイコ・ドムはまるで面白いように連邦輸送機を叩き続ける。そのジャイアント・バズが一撃必中、輸送機

のエンジン基部などの致命点へ吸い込まれるように当たっていく。そのため予想よりずっと早く大半を残骸に変えた。

このマレー半島の局地戦でも勝利した。連邦の陣地構築を無に帰し、そこからの地对空攻撃を妨害することができた。もちろんこれで充分である。掃討などせず、やはり素早く撤収し更に西を目指して飛行する。

そして今、俺はスリランカに到着している。

ここはもう南洋同盟の勢力圏、やっと辿り着けたのだ。

レヴァン・フウ僧正をここで開放できる。

もちろんレヴァン・フウ僧正との約束だけのために、わざわざ艦隊を危険に晒してここに来たわけではなく、理由がある。

俺はムラサメ研究所からいったん宇宙に撤収しアフリカに行く予定を変更したからだ。

宇宙に上がるのではなく東南アジアとインド洋の空を突っ切り一気に向かおうとしていた。そのキンバライド基地にジオン残党が集結しているのだが、それを救出して作戦終了となる。

「僧正、ここで解放する。君は連邦軍に不当に囚われていた民間人として、私の権限でそうする。短かったがもうお別れだ。僧正にはここで何かする思惑があるようだが、それがジオンのためになることを願っている。それが約束だ」

「もちろん、忘れてはいませんが、コンスコン大将。南洋同盟は元から独自色の強い地域ですが、私はここで教団を作り、その影響力で更に地球連邦と適切な関係になるよう努力します。それがひいてはスペースコロニーを含めた人類全てを調和した関係に導く呼び水になるでしょう」

やや具体性に欠けているが、その僧正の言葉を信じた。

俺は一つ考えていることがある。

この地球降下作戦で改めて分かったことがあるのだ。

それは、「地球はやはり大きい」ということだ。

通常のスペースコロニーは直径6kmもあり、普通に住むには何の不都合もない。狭苦しいということもない。頭上を見上げてみても視界に映る別の都市は霞んで見えるくらい距離がある。

ただしがっちり安心感に包まれるというのは違うのだ。やはり宇宙に浮かんだちっぽけな人工物、地球に似せてはいるがかりそめの空間であるというのが無意識にでも感じられてしまう。

しかし地球は違う。

さすがに人類を育んだ場所だ。せつせと運び入れた薄っぺらい土ではなく本物の「大地」がここにある。宇宙の氷塊を溶かして作った水たまりではなく本物の「海洋」もある。

ここに最初から生まれ育てば、スペースコロニーで暮らす人々への関心を失っていても仕方がないのではないか。良い悪いはもちろん別として。

スペースコロニーなど地球から遙か彼方の宇宙、知識として知っているが実感はないだろう。

地球育ちのアースノイドとコロニーのスペースノイドは頭で考える以上の隔たりがある。

これをきちんと理解しないでは本質的に争いは無くならないのではないか。

この戦争でジオンが勝つとか、連邦が勝つとかいうのはただの軍事の話であり、表層の問題に過ぎない。僧正の言う適切な関係、どういう形が理想なのか分からないが、そうなって欲しいと願う。

俺はそんなことを考えながらレヴァン・フウ僧正とそれに従うグループを解放し、その背が遠ざかるのを見送る。

その直後、俺はオペレーターの報告を聞く。

「コンスコ司令、連邦輸送機がここへ近付いています！」

「その規模と方角は？」

「それが、たった一機、方向からすると先ほどのマレー半島からのものかと」

「なるほど、きつきの残りが追跡してきたのか。しかし一機だけとはどういうつもりだ」

確かに一機の連邦大型輸送機がゆっくり飛行してくる。

水平線上ぎりぎりなのはもちろんこちらが迎撃しにくくなるためだろう。そして同時に目的が爆撃ではなく、陸上戦力の輸送であろうことが想像できる。

俺が知るはずもないがその連邦機の中では三人の若者が侃々諤々の言い争いをしていた。

先ずは輸送機の操縦をしていた男が傍の男に言う。

「おいおい、いくらなんでも無茶だぜ。やめた方がいい。ジェリド、お前からも何とか言ってくれ」

「言っても止めるような女じゃない。分かってるだろう、カクリコン」
「お前も実は面白がつてるな。クソつたれ、俺たち学徒兵が三人で何ができるっていうんだ」

「カクリコン、この輸送機には一応ジムが積まれてる。お前の分も入れてちようど三機だ」

「ジェリド、だから何だっつんだ！ ジオンが離れて行くならしいじゃないか。追っかけてまで首を突っ込むこたあない。別に俺たちが何もしなくても」

その瞬間、横にいた一人の女が腕をしならせ、スピードを乗せたまま手の平を振り抜いた。

「修正!!」

その年で既に額が広がっている男がビンタを食らう。

お約束の展開であるかのように見事にヒットしたのだ。

「わたしたちの輸送機は無傷で残った。ただ逃げるつもり？ 学徒兵だからといって臆病でいいってことはないわよ、カクリコン」

「痛えなあ、エマ。正論に聞こえるが俺たち学徒兵が勝手に追跡する方がよっぽど規約違反じゃないのか。指揮系統が失われた場合、現状維持または撤収が原則だぞ」

「でも、連邦のためにやれることはあるわ。そっちの方が大事。今、わ

たしたちだけでもジオンを追跡して牽制することくらいはできる」

その女、エマ・シーンの意志は固い。

ことさら正義感の強いエマ・シーンがやや暴走してしまったのは若さのせいかもしれない。あるいははまだ一度も宇宙に出たことがなく実戦を経験していないからなのか。

残りの二人の者、カクリコン・カクーラーとジェリド・メサも結局は同意した。

もう一度エマから「修正」など食らいたくないのもあるが、なんのかの言って、この三人は同期であり同じ香港基地に配属され仲が良いい。

「結局何もできやしない。規約違反で終わるんだ。俺は止めろと言ったからな！ エマ、ジェリド」

「何だその捨てセリフは、子供か！」「あんたも同罪よ！」

その輸送機は引き返すことなく進む。

何かジオン側が隙を見せれば、MSで出撃して手を出そうと伺っている。

そして実際に隙ができてしまったのだ！

エマら三人の輸送機の他に別の連邦輸送機が最大速度で迫ってきていた。はるか北の北極基地から来たものである。

そちらにはたった一機のMSだけが積まれていた。

第八十八話 宿敵！ ダリルVSイオ

MSの性能の違いが戦力の決定的な差ではない。

だがしかし、最新鋭のガルバルディ改やアクト・ザクほどの性能になると、今では旧式となってしまうたジム・コマンドを寄せ付けるものではない。

この地球降下作戦では何度もそれを見届けた。全く頼もしい戦いぶりだ。もちろん性能を活かせるパイロット操縦技術があればこそだが。

俺はそう思っていたのだが、それが逆になった時のことを考えていなかったのは慢心と言われても仕方がない。

時として作戦が上手く行き過ぎてしまうのは油断に繋がる原因でもある。

俺はそれを目の前に突き付けられ、暗澹たる気分になった。

「ど、どうして、ガンダムが……まさか完成体が存在していたなんて」

決して見たくなかった現実がここにある。スクリーン越しにあの悪魔、絶対無敵の巨人の姿があるのだ。

悪夢は再びここに始まる。

その少し前のことだ。

連邦軍北極基地にもジオン部隊地表侵攻のニュースは届いている。

しかし重大なこととは捉えられず、表立って動くことはない。なぜなら北極基地は新型機のテスト基地でもあるが、本来は海中潜航艦の母港として機能しているものである。ジオン部隊が飛行移動で刻々と位置を変えている以上、北極基地の潜航艦など接点がない。

だがそれでも出撃を強硬に言い張った人間がいる。

もちろん、連邦ただ一機のガンダムタイプMSゼファイランサスを与えられたイオ・フレミングである。

「わざわざ地球にジオンが来たのは好都合じゃないか。返り討ちにすればいい。これ以上好き勝手に暴れさせておくものか！」

しかし北極基地司令ホーキンズはイオの出撃を簡単には許可しなかった。

普通の新型テスト機ならともかく、何といっても虎の子のゼフィランサスである。万が一それが失われてしまったらガンダム計画を進めていたジョン・コーウエン中将に申し開きが立たない。

「イオ・フレミング少尉、君は理解しているのか。あの機体は一機しかないのだ。しかも追加で作る予定もない。それに寄せられている期待を考えたら軽はずみな真似はできないのがわかるだろう」

「いえ、しかし、実戦の戦闘データが無いままでは…… それこそ未知数のまま宇宙に送られることになってしまい、かえって新型ならではの不測のことが起きるのではないかと」

そう言っただけでイオが説得していく。

ホーキンズはイオがただ戦いたくてそんなことを言っているのを見透かしている。しかし理屈の上ではそれも間違いではない。

そこへ一つの情報が飛び込んできたことにより、条件を厳命した上で渋々許可した。

「では少尉、出撃を許可するが、それはあくまでテストデータを得るためだ。これを頭に入れておきたまえ。決して危険な行動はせず、データを必要充分に蓄えたら状況に関わらず安全に帰投することだ。こんなところで戦果を追い求めることは禁止する。それともう一つ、ジオン部隊には連邦ポートモレスビー部隊が迎撃に向かっているという情報が入った。その現地到着を待ち、確実に数的優位を確保した状況下でのみ行動してくれ。これが守るべき絶対条件だ」

もちろんイオは勇んで即刻出撃する。ホーキンズはポートモレスビー部隊に期待し、複雑な表情のままそれを見送る。

大型輸送機一機に載せられ、ゼフィランサスはついに北極基地を飛び立ったのだ。

輸送機内の余ったスペースは測定技術員や整備メカニックが使う。

ただしこれにもちよつとした波乱があつた。

携わる整備士は今回の出撃に少しばかり不満がある。手順無視でいきなり危険な戦場行きを命じられ、しかもそれがパイロット個人の意向が発端だとは。しかしながら正規の連邦整備兵は心に思うだけで口にすることはない。軍人として命令に従うのが当たり前だからだ。

だがそこにいるのは連邦兵だけではない。

このゼフィランサスは元々連邦軍技術部での開発ではなくアナハイム・エレクトロニクス社の開発物であり、そのため幾人も社員が出向いて最終整備に就いていたのだ。アナハイム・エレクトロニクスはゼフィランサス完成に乗り気ではないが作つた責任を取るの当たり前である。

かつてニナ・パープルトンが主任として携わっていたものだが、開発中止と共にそれは去り、再び開発が始まった今はメツチャー・ムチャという男がその地位にいる。

「行きたくないな！ あんなジャズ野郎に付き合つてなぜ行かなくちやならない」

そう言つて、新米の部下へ役割を押し付けて送り出そうとした。

一方その新米部下であるエマリー・オンスは、アナハイム・エレクトロニクス社に入つてわずか数カ月ではあるが、高いメカニック能力を買われて抜擢されていた。

度胸もあるエマリー・オンスはむしろ面白い機会とばかりに任に任にいた。皮肉なことにメツチャー・ムチャは自分だけ基地に残るつもりだったが結局のところ逃れられず同行することになる。

北極基地からの輸送機は、連邦ポートモレスビー基地部隊の位置を刻々と伝えられながら襲撃の機会を伺う。

一方、そのポートモレスビー基地部隊は大型輸送機八機、護衛戦闘機十機の大部隊で急行していたが、慎重さを崩すことはなかった。

互いに探知される距離まで来ても急襲はせず様子を伺い、編隊を広く展開させている。

この頃には連邦軍でも問題のジオン部隊がコンスコン大将指揮下にあるものと把握している。その力量が分かっている以上、下手な突撃は損失を増やすだけだ。おまけに、いずれここスリランカから移動するのが確実であれば、その時に追撃をかける方が確実と踏んでいる。

しかし、この我慢比べもジオン側の勝ちに終わった。

イオの北極基地輸送機が不用意に近付き過ぎたのだ。もちろんさつさと戦端が開かれないうせいで焦ったからである。

ジオン側の迎撃の砲火が始まると、輸送機はやむにやまれず高度を下げ、ゼフィランサスを発艦させる。

「へいへい、ジオンのスクラップども、さつさと本物のスクラップになつてもらおうか！」

出撃が予定より早くなったことはイオにとってラッキー以外の何物でもない。

突出の危険など顧みずイオがさつさと仕掛ける。

これが俺がガンダムの出現に驚くことになった真相である。もちろん驚いてばかりもいられず、直ぐに命令を発する。

「艦隊は撤退の算段だ！ ガトー、隊を広く展開させて奴を足止めしてくれ！ 伏せながらの遠距離射撃で近付けさせなければそれでいい」

そんなことは言うまでもなかった。ガトーも分かっている。ガンダムがどれほど恐ろしいかを。もちろん、シヤアも含めて誰もが知っている。

ラファ・スンもまた愕然としながら眩きを漏らす。

NT能力でパイロットの正体をおぼろげながら感知していた。

「あれは…… 前にわたしがア・バオア・クーで対戦したパイロット…… やはり生きていたのね」

地表にビームが飛び交う。

圧倒的にガトーの隊のビームが多いのに、それでもガンダムを止められない。シールドを上手く使うこともあるがとにかく動きが速いのだ。そのため射撃で捉えられない。特に足で地面を蹴って急角度で移動するのは恐ろしくパワーが強いせいに違いない。

ガトー隊に初の犠牲が出た。宇宙とは違い、爆散に伴い轟音が響き、ついで欠片が放物線を描いて地表に落ちる。

その時、俺は別のところから通信音声聞いた。

「こちらダリル・ローレンツ。コンスコン司令、出撃許可願います！」

あいつがかつてのガンダムパイロットなら、因縁があります！」

「む、そうか、ダリルに出撃を許可する。射撃で加勢してくれ。頼んだぞ！」

こうして俺はダリル・ローレンツにも出撃を命じた。その間にも続けて犠牲が出ている。ガトーは隊を上手く取りまとめ距離を取らせようとしている。かいくぐって前進してくるガンダムによって徐々に詰められている状況だ。

そこへダリルのサイコ・ドムが加わる。

「サンダーボルトでリビング・デッド師団を殺したのはお前か！ 仇は取らせてもらう！」

普段は優しい表情を保ち、感情を抑える男、ダリル・ローレンツが思いがけず声を上げる。かつてサイド5サンダーボルト宙域を守っていたダリルの仲間たちのほとんどはガンダムの急襲によって面白いように塵へ変えられた。

ダリルはジャイアント・バズを続けざまに撃ち、驚くべき正確さでガンダムの進路を捉える。

それらは全てガンダムの高機動により寸前で避けられてしまったが、実はダリルの予測の内だった。

「なっ、これが狙いか！ ジオン野郎め、下らねえことしやがって！」

土煙がもうもうと巻き上げられているではないか。地上戦ならではの光景だ。

ビームではなくジャイアント・バズのような実体弾は着弾と同時に

爆発し、盛大にスリランカの赤土を吹き上げた。

ダリルは意気込みは強いが冷静であり、土煙を利用してガンダムの視界を奪い、機動力を封じる策を講じていたのだ。

土煙が薄くなった瞬間、ガンダムを狙い撃つ。それで終いにする。

だがしかし、今度はダリルが驚く番だった。

ガンダムは視界の取れないまま一直線に突っ切り、突進を始めていた。

イオも馬鹿ではない。その陰には計算がある。

突進の方向には一番手近なジオンのザンジバル級がいる。エンジンをかけているがまだ地上を発進していない。ならばそれを守る以上、その方向にいたジオンMSは動かないと踏んだのだ。

その通り、ガルバルディ改一機がたちまち接近されイオによるビーム・サーベルの餌食になる。

今はジャイアント・バズを使えない、そう踏んだダリルは迷いもせずヒートホークを手に接近を図る。

「向かってくるのか。接近戦とはいいい度胸だジオン野郎。ムーアの仇はとりあえずお前から取らせてもらおうぜ！」

イオ・フレミングはアースノイドの出身ではない。故郷はサイド4ムーア、この戦争の初期に壊滅させられたコロニーの生き残りである。その元凶であるジオン相手に戦意は高い。

今、このガンダムタイプMSゼファイランサスの性能を得て、絶対の自信と共に戦いに臨む。

イオのゼファイランサスとダリルのサイコ・ドムの接近戦は見る者を驚かせた。俺はダリルの射撃能力にばかり期待し、接近戦をさせるなど考えてもいなかったのだが実際の様相は異なるものだった。

むろん、ゼファイランサスのパワーが目を引く。あの重量級のドムが押し負けるのだ。パワー、推力、絶対的な性能ではドムが敵うはずはない。

しかし細かく見ればサイコ・ドムの反応性にこそ最大の驚きがあ

る。

動き始めの反応性が段違いに鋭く、まるでMSではなく人間そのものに見える。さすがはサイコ・リユース・デバイスの力、それを可能にした再生医学の権威カーラ・ミツチャム教授だ！

そこだけとればゼフィランサスさえ上回る。

特に防御において俊敏な反応性が活かされ、ゼフィランサスのビームサーベルが幾度も空を切らされる。

そのため本来鈍重なはずのドムが体勢を入れ替えながら攻撃をいなし、隙を伺う構図だ。

しかし最初こそ拮抗していたが、残念なことにダリルの劣勢が明らかになってきた。

何のことはない、反応性が優れていてもドム自体のパワーが足りなければ大きな動きはできない以上、ゼフィランサスとしては下手に狙いすました攻撃ではなくゆとりを持たせればいい。つまりわざと大振りにすれば、いずれ攻撃は届くと気付いてしまったのだ。そしてゼフィランサスはそのビームサーベルも性能が高く、ドムの装甲などいともたやすく斬ってしまえる。

しかしこの瞬間、別なところから一閃がひらめく！

ガトーだ。

この戦いをしっかりと見据えていた。

第八十九話 三人の活躍

さすがはガトーだ。

この二人の戦を横から観察し、イオがダリルに手を焼き攻撃が雑になるのを見逃すはずはなかった。イオのゼフィランサスがビームサーベルを大振りした最終到達点、その瞬間を捉えガトーが鋭く斬り込む！

ゼフィランサスの左腕が斬られて飛んだ。

さすがに最新鋭ガンダムタイプMSゼフィランサス、とつきの反応も素早かったがそれでも片腕を犠牲にして守らざるを得なかった。

「くそつ、俺のゼフィランサスが、こんなところで！」

しかしイオの戦意がかき消されることはなく、むしろ強引に踏み込み、まだ右腕に持っているビームサーベルを思い切りよく横薙ぎにした。

それがダリルのサイコ・ドムを捉えてしまう。

ぎりぎりコックピット上限を斬り払われたサイコ・ドムは爆散はしないまでも機能停止に追い込まれる。

イオはその一撃を終えると大きく後ろに跳んだ。新たな敵であるアクト・ザクに対し、例え片腕がなくなるとも戦って負けるとはまるで考えていない。しかしながら、さすがにこの損傷はまずい。戦いの推移に関わらず機体の保全が最優先、基地司令からあらかじめ厳命されたことであり、万が一にもそれ以上の損傷はいけないと今さら思い返す。

ここでの戦いは、戦局には意味がない単なる個人的な感情の問題であり、この異常なほど強いドムに何とか競り勝ったことで充分とする分別があった。いったん輸送機への後退を選択し、ゼフィランサスの大推力で戻り始める。

一方、戦場はますます広がり混迷を深めていたのだ。

ジオン側の混乱を見てチャンスと思った例の三人組が輸送機を突入させ、無謀にもジム・コマンド三機で乗り込んでしまった！
「本当にいいのかよ……こんなこと仕出かしちまって。俺は出世したいんだ！ 責任とつてくれよ、ジェリド、エマ」
「カクリコン、文句は後で聞くから黙って戦え。とりあえず生き残れよ」「あんたの出世なんて知らないわ。MSで修正されたい？ カクリコン」
「二人とも、つ、冷てえ……」

おまけに機を窺っていた連邦ポトモレスビー部隊もたまたまこれに加わる。

「何だあれは!? 無茶が過ぎるぞ！ いったいどこのアハウどもが仕掛けた」

「し、司令、あれは香港基地の輸送機です。特に事前連絡は受けていません」

「…… 見殺しにもできん。全機、包囲網を縮める。MS発艦用意だ」
ポトモレスビーの部隊司令は、先日の捕虜交換でやつと連邦軍に復帰し、その任に就いたばかりのヘンケン・ベツケナーだった。

今は思わぬことに頭を抱える。
コンスコン大将の機動部隊が柔なはずはないと知り尽くしているからだ。

その三人はというと、さすがにガトーらのジオンMSに正面から対決するのを避けた。そして別方向からジオンのザンジバル級を狙ったのである。

普通ならそんなことができるわけではないが、誰もがイオのゼフィランスに目を奪われていたのが幸運だった。死角からザンジバル級を狙える位置にまで急進できてしまったのだ。

三人は乱射し、そのうち一発が今まさに推力を出そうと点火したばかりのエンジンに吸い込まれた。

戦場に大音響が響く。

一隻のザンジバル級が片舷エンジンを失う。そればかりかエネルギー供給系統に沿って燃え広がり、消火活動が間に合いそうもないことは一目で明らかだ。

おまけにこのザンジバル級が艦隊の旗艦だったとは、俺にはどうても笑えない話だ。

「くそっ、やられたか。どうだ、この艦は持ちそうか」

「コンスコン司令、残念ながらそれは無理かと……」

「仕方ない。総員退避だ。直ちに別の艦に分乗しろ」

緊急退艦するのはソロモン以来だな、などと俺は考える。

手早く所定の手続きにのっとり熱核エンジンの臨界解除と閉鎖、そして自沈用意を終えていく。ついで艦乗務員やMS整備要員、そしてここまでの降下作戦で連邦基地からジオン側へ連れてきた者たちを退艦させる。

ここで思わぬトラブルが発生してしまった。

彼らの中に、この移乗騒動が絶好のチャンスとばかりに逃亡を試みる者がいたのだ。それは捕虜として連れてきた連邦オーガスタ研究所の科学者たちだった。

その一団が周りの制止を振り切って駆けだす。

途中、研究所で実験体だった者にも声をかけたようだが、もちろん科学者の声に従うものなどいるはずがない。

「こんな炎上する現場に、科学者たちが戦闘服も着ないで……しかし今さら呼びかけても投降はせず、かえって逃げるだけでどうしようもない。銃撃をかけるまではしなくていい。深追いするな」

俺は多少甘いとは思ったが逃げるに任せた。それが逆に彼らの不幸になってしまったのは、ある意味仕方がない。

やはり科学者たちはこんな事態での動き方など知りはしなかった。俺やジオン兵は皆、脱出ハッチから出れば速やかに機首方向へ移動している。しかし科学者たちは逃げることはばかり考え、それとは逆の方向に向かっていったのだ。だがそんな艦尾近くこそエネルギー機器が多くて危険なのである。

これを見ていた例の三人組のジムは、はつきり事情を理解したわけではないがジオン艦の周囲に人が残っているのを確認した。しかも、今にも爆散しそうな艦尾の近くに。

ジムで更に近付こうとしたが、今までの幸運を使い果たしたかのごとく不運が待ち受けている。

コンスコン機動艦隊の旗艦に連邦MSが近付けば、迎撃のために周囲が動かないわけがないのだ。

そしてもつとも速いのは、速さがトレードマークのあの者しかない。

「げえっ！ 赤い彗星!!」

カクリコン・カクラーのジムの正面に赤いゲルググJ改が滑り込むように立ちはだかる。

続けて「嘘だろ!?!」という言葉を口にする時間もない。

ゲルググJ改が間髪を容れずにカクリコンのジムを斬り裂く。だがそのジムは赤い彗星を認めた瞬間から腰が引けていたおかげでコックピットまでは斬られず、大破で済んだ。自分が斬られたような感覚に見舞われ泡を吹き、死んだと思つたカクリコンだが、落ち着けば脱出はできる。

そしてさすがにシャア、残り二機のジムもまた一瞬で無力化した。学徒兵が三人集まって意気込んでもあのシャアに敵うはずなどないのだ。

ゲルググJ改はカクリコンのジムを斬つた一瞬後、力を溜め、脚部から腰、肩に力を伝達し強力なシオルダーチャージを仕掛けた。

それは先ずエマ・シーンのジムを吹き飛ばす。

軽くてパワーも弱いジム・コマンドはひとたまりもない。

ついでエマのジムはジェリドのジムに当たり、玉突き状態になる。赤い彗星の出現に慌ててビームサーベルを取り出そうとしていたジェリドのジムは重心も高く、あっさり弾き飛ばされた。

そして手荒く横倒しになってしまう。

しかしちようどそこがジオン艦の近くでもあった。

その一瞬後のことだ。

ついにジオン艦のエンジンが爆散した。

一気に膨張した熱風が周囲を薙ぎ払い、MSにさえダメージになるほどの激しさで襲いかかる。

艦の周囲にいた科学者たちはあつさり宙を舞い、焼き焦がされる。オーガスタで副所長であったローレン・ナカモト博士なるものもここで命を失う。

だが、たつた一人だけは別だった。

驚くべき反応力と跳躍力でジェリドのジムの陰に滑り込んだのだ！

それは実験体の中で一人だけ科学者と同調して逃走を選択していたマウアー・ファラオである。

彼女だけは科学者たちに恨みも恐れもなく、そしてジオン側についていくつもりもなかったからだ。

しかしながら、いったん爆風をジムによって避けたものの移動しなければいずれば延焼が及ぶ。

当然マウアーはジムから背を向け走り去ろうとしたが、ふと振り返った。赤い炎に照り返されたジムのコックピット辺りを注視する。

「このジムはどうなっているんだ？　パイロットがまだ居る？」

そうマウアーがつぶやいた通り、ジムの中ではジェリド・メサが格闘していた。タイミング悪くビームサーベルを半分抜いた状態で飛ばされたせいでジムは故障し、横になったまま動けない。

ジェリドは諦めて脱出を図ったがそこで重大な問題に気付いた！

ちようどエマのジムがぶつかってきた場所が悪く、ハッチすら歪んでしまつて充分に開かなくなつていたのだ。わずかな隙間が開くだけで通り抜けられるほどにならない。

スイッチを幾度押ししてもそれ以上開かず、ジェリドは次第に焦らざるを得ない。

そんなジムを外から見ていたマウアーも異変に気付いている。

ハッチが幾度も少し動いては戻るのを見れば、パイロットが脱出しようと悪戦苦闘しているに違いない。

「世話が焼けるっ！」

マウアーは駆け戻り、ジムへ跳躍するとそのハッチに手をかけた。

「おい、パイロット、直ぐにここにも火が来る。ハッチが開かないのか？」

「そ、そうみたいだ。早く開きたいんだが」

「ではこちらからハッチを引っ張る。そっちからも押せ！」

「このハッチをか？ けっこう歪みがきついぞ」

「黙ってやれ！ 死にたいのか」

そして二人が協力して力を込めると、ようやくハッチの隙間はジェリドが抜け出せるほどに広がったのだ。その後マウアーに引かれてジェリドが脱出できた。

すると次にマウアーは何とジェリドを抱いたままジムから飛び降りた。それは急ぐためイチかバチかやったというような切羽詰まった感じはなく、当たり前のようにしてのけた。ジェリドは自分の格好悪さも忘れて感嘆してしまう。

「これは驚いた！ 凄い筋力だ。いったいどうなってる」

「いつまで私の腕にいるつもりだ。さっさと逃げるぞ」

そして二人はようやく危険地帯から脱する。同じように脱出したカクリコンやエマ・シーンが見えるところまで来た。

「私はマウアー・ファラオという。ムラサメ研究所にいた。ジムのパイロット、これはおあいこということだな。こちらはジムがああ場所に倒れていたおかげで死なずに済んだ。礼を言う」

「俺はジェリド・メサ。連邦軍香港基地所属の学徒兵だ」

「……」

ジェリドは、少女の雰囲気を持たないわけではないが不思議に大人びた顔立ちのマウアーに釘付けになってしまう。

するとマウアーは表情を少し険しくする。

「どうした。礼を言わないのか。おあいこだと言ったろう」

「あ、ああ、そうか。こっちもジムのハッチを開けてくれて本当に助かった。済まない」

「それでいい。素直なのは、いい男になるための第一歩だからな」

そこで初めてマウアー・ファラオは深緑色の髪を揺らし、年相応の微笑みを浮かべる。

それが最初だった。

この戦争でもその後でも、はるか未来まで続くジェリドとマウアーの付き合いはこうして始まったのだ。

第九十話 正々堂々

一方、その頃イオのゼフィランサスは後退している。

戦闘力を失ったわけではないが斬り落とされた左腕の損傷が心配である。そこからのエネルギー漏れが続き、それが原因で損傷が拡大したらしゃれにならない。万が一コア部分にまで及べば、イオの失態どころの話では済まず連邦軍全体にとって取り返しがつかない。

戦場からやや離れた場所に停泊している輸送機のところまで戻っている。一気にゼフィランサスの大推力を使って高速移動をしたことでジオン側が追ってこれないと踏んだ。

それは完全に間違いだったのだ。

追っているガトーのアクト・ザクは確かに引き離され見失いはしたが、ガトーの戦場で培われた勘をごまかせることはない。そういう戦場心理なら深い駆け引きもできる男である。

むろん、ジオン側がコンパクトに守備隊形を敷いている今、本来ならそのMS隊長であるガトーがそんな深追いなどするはずがない。ジオンMSは今、ザンジバル級の撤退支援が最優先事項なのだから。だが、ガトーはその先を見ている。

連邦のガンダムタイプMSがこの先も計り知れない脅威になることを分かっていたのだ。ガンダムというものはいつだって戦場を一変させる力がある。

コンスコン司令も同じことを考えるだろう。それは聞くまでもない。

このまま逃すことなく、深追いしてもガンダムを叩き切るべきだと結論付けた。幸いにもガンダムを左腕を失う中破状態に追い込めたのだ。今ならそれが叶う可能性がある。

方向に当たりをつけながら探索し、ついに連邦輸送機を発見できた！

一方、イオのゼフィランサスはその時緊急メンテナンスの最中だった

た。

万が一の暴発を考えてそれは輸送艦内ではなく、傍で行っている。メカニックが左腕切断部分を探査し、先ずはガス冷却をかけてあらかた冷やし、ついでエネルギー経路を最適な順番で落としていく。それが終わった後、丁寧にショート部分を封じていくのだ。

「ふう、電磁漏れは止まった。スパークはないし、とりあえずはこれでいいわね。応急の応急だけど仕方がないわ。左腕だけなら基地の予備パーツを使えばなんとかなるし」

そう言うのは作業に当たっていたエマリー・オンスである。

彼女は夢中になりながら的確な処置を講じていく。火花から出るオゾンの匂いも嫌がらず、その短いブロンズが煙によってたちまち煤けて黄色と茶色のまだらに変わってしまったのを気に掛けるそぶりもない。

対照的に上司のメツチャー・ムチャは手伝うどころか輸送機から出てくることもしていない。勝手に突出し、連邦ポートモレスビー部隊との連携も不十分なまま戦ってしまい、その挙句中破を受けて戻ってきたイオに対する怒りで不貞腐れていたのだ。なぜそんな奴のため手を汚して整備しなくてはいけない！

現場に出ていたのはエマリー・オンス他わずか数人、しかも最後までやり切ったのはエマリー・オンスだけである。彼女にとつてどんな理由で緊急整備するのかは関係ないことで、忠実にやるだけだ。というより元からメカ整備が好きなのである。

腕利きメカニックの彼女が一人でどんどん作業を進めていった。

ガトーは連邦輸送機を認め、そこにガンダムがいると踏んだが、全くその通りガンダムタイプMSが輸送機のすぐ側にいた。

直ちに急襲をかける！

本当ならばそつと近付き、必殺の間合いに踏み込んでから撃ちかけるべきだろう。しかし、相手はガンダム、索敵範囲も未知数である以上あまり慎重になっても機を逃すことになる。この難しい選択、ガトーは接近しながら攻撃することにした。

ガトーのアクト・ザクはビームを撃ちながら全力で疾走し、ガンダムに迫る。

残念なことにビームは外れてしまったが、それでも勢いに任せて突っ込む。最後はビームライフルを捨てビームサーベルを抜き放つ。その時イオはゼファイランサスを降りることなくコックピットにいたが、大音量でジャズをかけて目を閉じていた。

これがイオなりの精神安定法である。

中途半端で終わった先の戦いの高ぶりを鎮めるためだ。

イオをよく知る者なら問題ないが、そういう姿がイオをよく知らない人間から見たらふてぶてしい態度に見え、例えばメツチャー・ムチャの反感を買ったりするのだが仕方がない。

しかしこの場合はそうしているべきではなかった。

せつかくのゼファイランサスの広範囲索敵機能、そのアラームに対する反応が一步遅れてしまったのだ。

そのわずかな差によってイオは急いで全機能起動にかかるがアクト・ザクの接近を許すことになる。

ガトーのアクト・ザクはビームサーベルを手にして躍り上がる。一直線にガンダムに迫り、もう遮られることはない。

そのガンダムはまだ動き出さず、ここで両断してしまえる、はずだった。

だがガトーはアクト・ザクのコックピットから見てしまう。

ガンダムの周囲に整備兵が残っているではないか。

だからどうだということはない。整備兵とはいえ連邦兵であることと変わりはなく、逆に一人でも多く斃しておいた方が戦略的利益になるのは当たり前のことである。

しかし、ガトーは一瞬ためらってしまったのだ。

整備兵というものは危険な戦場の真ただ中に出て、パイロット並みの危険を甘受しながらも自分で戦ったり運命を決めたりはできない。自分の努力にほぼ関係ないところで、偶然や運命によって生き

残ったり、死んだりする。それはMSパイロットの生き死にとは別次元ともいえる理不尽なことではないか。

そのためガトーは連邦整備兵に対してもただの巻き添えで犬死にさせることをためらう。

ここでガンダムを斬れば間違いなく整備兵も死ぬ。宇宙での大会戦ならば真つ先に連邦空母を狙って沈め、MSの帰る場所を整備兵もろとも屠る戦法を使うことはよくあること、むしろ普通だ。

いや、そもそも兵が死ぬこと自体珍しくもなんでもないではないか。戦争だからそれが当然で今考えていることなど単なる偽善に過ぎない。

しかし、そうだとしても。

ガトーの見た連邦整備兵とは、正確にはアナハイム・エレクトロニクス社から出向してきたメカニックなのだが、もちろんエマリー・オンスのことだ。

エマリー・オンスは整備に集中し過ぎていたため退避が遅れてしまった。ゼファイランサスの出力ゲージが跳ね上がったことでその起動に気付いたほどである。

そしてこの瞬間、敵ジオンMS、アクト・ザクを目の前に見る。

おまけに凶暴なエネルギーを撒き散らすビームサーベルを眼前にしまったのだ。そこで体は固まってしまう。

しかしあっさり死んでしまう予感に反し、ジオンMSは斬りつけてこなかった！

ゼファイランサスを斬るチャンスに動きを止めている。

それがどうしてなのか、言葉によらずとも分かっている。

この刹那、ジオンMSのモノアイがエマリー・オンスへ真つすぐに向いていた。

それは正に一瞬だけのこと、驚くべき速さで起動したゼファイランサスはすぐに立ち上がり、残った右腕でビームサーベルを引き抜く。イオももちろんエマリー・オンスを認め、それを傷つけぬよう一歩ず

らし、そうしたところでガトーのアクト・ザクと対峙する。

そこからはガトーが激しく斬りつける。

だがゼフィランサスは防御も強く、パワーも段違いだ。それが動きの速さにつながり、何と右腕一本でも互角以上に戦える。

ガトーは容易に勝つことはできないと悟った。むしろ少しづつ押されてきているほどである。

戦いは十合を超えてなお続く様子だったが、突然終わりを告げた。仕掛けたガトーの方が急な撤退に転じたのだ。

その理由、上空高くジオン側の信号弾が上がったのを感知した。明滅と色が教えるものは、全機急速撤退の命令だった。その意味するところはたった一つしかなく、ザンジバル級の離陸が始まっている。

ガトーのアクト・ザクは機を見て後ろに跳び、ゼフィランサスもそれを追うことはない。

決着は持ち越された。

どうせ避けることはできない。いずれ行われる宇宙での戦い、そこに勝負は預けられた。

ガトーは最後に当然の戦術を実行した。このガンダムタイプMSは損傷のため追ってこないように思えるが、それでも確実に足止めしておかなくてはならない。

連邦輸送機が飛び立てないようダメージを加えるべく、そっちの艦橋にビームをお見舞いする。

これにより偶然にも艦橋に出ていたメツチャー・ムチャの方が直撃を食らって戦死してしまう。何とも皮肉な巡り合わせだ。

ガトーのアクト・ザクがザンジバル級のところに帰り着く。

そこで見えたのは奇妙にロケットブースターをくつつけられたザンジバル級である。

実はそこにもドラマがあったのだ。

「コンスコン司令、ブースター届きました！ 艦数分あります！」

「よし、間に合ったぞ！ 弾幕をもっと濃くして、降下されるブースターを守れ」

オペレーターがそう叫んだ。

俺はしてやったりと思った。実はザンジバル級用のロケットブースターはいつでも宇宙から地表に投下できる態勢にしておいたのだ。衛星軌道上にコンスコン機動艦隊副司令のデラミン准将を配してあり、その中の輸送艦には必要充分なロケットブースターを用意させている。

もちろん、最後までロケットブースターを使わずアフリカ・キンバライド基地に行ければそれに越したことはなかったのだが、予定外のことがあれば直ちに高々度へ退避するための策は怠っていない。ブースターの中でも最も小型のタイプ、それが今やつと届けられたのだ。

連邦側もこれを黙って見ていることはない。

敵部隊司令ヘンケン・ベツケナーもまたひとかどの人物だ。一目でジオン側の意図を見破る。

「む、今のはたぶんロケットブースター、なるほどそれを使って退避する気だな。そうはさせない。猶予を与えぬよう、直ちに攻勢を強めろ！」

こうなれば時間との勝負だ。

しかしジオン側に一つ問題点があった。

「コンスコン司令、作業には多少の時間がかかります。ロケットブースターを艦体へ連結するには」

「そうか、猶予はないのだが、どれくらいかかる」

「妨害が無いとしても、少なくとも見積もって50分程度かと」

「無理だな。そこまで防衛網を支えきれん。どうにかしないと……」

そこで俺は考える。無茶な発想は実は俺の得意だ！

「そうか、要するに艦にブースターをくつつつけてしまえばいいんだ。それなら別にアタッチメントを用意するまでもない。もっと手っ取り早い方法がある」

「し、司令…… それはいったいどんな……」

「ロケットブースターを艦体の金属部分に直接くっつける。慎重に、溶接で」

「よ、溶接？　しかし溶接といってもそれこそドックもないのに、どうしたら……」

「MSがあるじゃないか。そのビームサーベルを使うんだ！」

「ええっ、斬るためのビームサーベルを溶接に!？」

発想が突飛過ぎてオペレーターには通じなかったようだが、俺の意図はツエーンが理解してくれた。

「コンスコン司令が考えることって……　まったくもう、前はドムで連邦の鏡の兵器を蹴り飛ばしたこともあったけど、今度はMSで溶接作業……　ほんと無茶を言ってくれるわね！」

ツエーンの隊は次々にザンジバル級の艦体にロケットブースターを留めていく。そんな用途にビームサーベルの熱を使うなど正に想定外だろう。簡単なことに見えるが、下手に時間をかけ過ぎて熱が溜まればロケットブースターそのものが燃えてしまう。そこを何とか器用にやってのけてくれた。

第九十一話 一目で

溶接作業は終わり、これで間に合う！

ガトーが戻って合流してきたのはこの時だった。全てのMSを収容し撤退開始である。

艦に付けられたロケットブースターに火が入ると次々に飛び立っていく。

一気にスピードに乗り、超音速になれば連邦の部隊も手の出しようもなく、連邦のヘンケン・ベツケナーは見送るしかない。

(さすがにコンスコン大将、脱帽だ。まともに戦うのも小技もどちらもこなすとはな)

ザンジバル級各艦はたちまちのうちに対流圏から成層圏、そして中間圏まで高度を上げていく。今回のロケットブースターは小型のものであり、宇宙まで上げられるほどの力はなくここで役割を終えるのが必要十分な仕事をしてくれる。

このスリランカの戦いで俺はMSのいくばくかと旗艦のザンジバル級一隻を失ってしまった。おまけに捕虜の半分に逃げられてしまうことにもなった。

しかし撤退には成功したのだ。

一安心してから俺はガトーの報告を聞いている。

もちろんそれは俺が見ていないところの話、ガトーのアクト・ザクが連邦のガンダムタイプMSを追って行った戦いに関するものである。

ガトーは武人らしく、何も付け足さず、削ることもなく報告してくれる。とても不器用な男だ。

「……一瞬、連邦整備兵の方に気を取られてしまい、みすみすチャンスを逃しました。そうでなければ撃破できた可能性があったのにも関わらず」

「そうかガトー。しかし、終わったことは仕方がない。それに間違い

でもなんでもない。俺が同じ立場だったとしてもやっぱり同じことをしただろうな」

「しかしここでガンダムを逃したのはあまりに大きく」

「間違いではないと言ったろう。人を常に最大限殺していくのなんて機械じみたことで、人間のすることじゃない。戦争中に言うのもなんだが」

話はやはりそこになる。ガトーが言うのは連邦のガンダムタイプMSを仕留めそこなったことに尽きる。

ガンダムを撃破できなかったこと自体は大変に残念なことではあるが、かといって経緯も動機もおかしなことはない。

俺が言ったことは本心だ。報告を聞いた俺もまたガトーと同じ気持ちだ。連邦がわざと若い整備兵を置いて同情を誘ったのならともかく、単にタイミング的にそうなたただけではないか。

それでいい。

常に公明正大、それがガトーという男だ。

それを誰が違うと言えよう。

「なあにガトー、次にガンダムを倒せばいいんだ。簡単にいかないのは当たり前だが、成し遂げる方法ならちゃんと考えておく。それが俺の仕事だ。任せておけ」

とりあえずガトー君がまた感動してくれているようだから、それで充分！

太っ腹に見せかけたが、ガンダムを撃破するアイデアなんて思いつくわけがないけどな！ あつたら俺の方が教えて欲しいよ！

それと同じ時刻、今度は輸送機の方の応急修理を始めていたエマリー・オンスもまた考えている。

精密な手作業をしていながら上の空というのも器用なことだ。

それはもちろん自分を見て攻撃を控えたジオンMS、そのパイロットのことで頭が一杯なせいである。パイロットが誰かということとは、その後真っ先にデータベースを検索したので知っている。敵方の情報であってもアクト・ザクは極少数であり検索は難しくない。

「あのパイロット、アナベル・ガトー少佐…… ジオンにも良い人がいるのね。今度ミリイにも教えてあげないと」

そんなことをにやけながら言っている。ミリイとはエマリーの後輩に当たるアナハイム・エレクトロニクスのメカニック、ミリイ・チルダーのことだ。エマリーはおさげ髪でとても幼く見えるミリイ・チルダーを可愛がり、普段から仲良くしている。

ただし、エマリーはミリイ・チルダーから思い込みが強すぎるとやんわり言われたことが一度ならずある。

それが今まさに杞憂でなくなってしまったのだ。

「ガトー少佐、これは運命なんだわ…… そこに私がいたのも、助けてもらったのも。ふふっ、あなたはメカニックを好きかしら。私はあなたにきつとまた会える、いいえ、また会うのよ」

一方、別の場所では少しばかり緊張感があつた。

連邦軍ポートモレスビー部隊司令ヘンケン・ベツケナーがあこの学徒兵三人を詰問しなくてはならない。

「ヘンケン・ベツケナー中佐だ。初めに確認するが、カクリコン・カクーラー、エマ・シーン、並びにジェリド・メサ、三人とも香港基地所属の学徒兵で間違いのないな」

むろん三人は緊張する。

将帥でなくとも中佐というのは学徒兵にとってすれば充分に雲の上の存在だ。

「全く、無茶を…… 追跡許可もなくスリランカまで来たというだけで重大な違反行為、それは分かっているな。どう言い繕ってもそれしか言いようがない。それだけではなく、結果としてこちらの攻勢の足並みを乱し、作戦に変更を強いることになった」

何も弁解できるものではなく三人は神妙にしているほかない。もちろん若者らしい無鉄砲な面が出ただけで、敵ジオンを叩きたいという動機は純粹であり、決して悪いものではないのだが。

「だいたいにして学徒兵は学徒兵らしくできなかつたものか」

だがそのセリフが言われた瞬間、エマ・シーンにスイッチが入ってしまった！

エマの目に力が入る。それだけではなく手にも力が籠る。

そこで慌てたのは横にいるカクリコン・カクーラーだった。長い付き合いで雰囲気からエマの心理状態が手にとるように分かる。

(げ！ ま、まずい！ エマ、無茶しないでくれよ！ 頼む、お願いします！)

全く同じ理由でジェリド・メサも冷や汗を流している。

(堪えてくれエマ！ 相手は中佐だぞ、「修正」は絶対ダメだからな！)

その気持ちは、そうだ後でカクリコンにでもぶつけてやれ)

カクリコンとジェリドは元から仲が良かったが、二人の思いがこれほど一致したことはない。

(エマあ、ここで「修正」はダメだああ!!)

むろん二人ともエマ・シーンの主張したいことは理解できないでもない。

たかが十隻にも満たないジオンの一部隊にいいように振り回され、何もできないでいる連邦軍が齒がゆかった。それも地球という連邦軍のホームグラウンドなのにさんざんやられたとは。

だから思わず突出してしまったのだ。

こんな体たらくではなく、まともに連邦軍が勝っていればそんなことをする必要もなかったのに。

しかしここは階級が絶対である軍、そんな気持ちのままエマが手を出したらとんでもないことになる。三人の未来がそこで終わってしまう。

だがその雰囲気を讀んだのか讀んでいないのか、次の言葉でこの場は収まった。

「おまけに最後はジム三機をまとめて失うことになった。これも損失だ。しかし説教はここまでにしよう。次は戦果についてのことだが、ジオン側に肉薄し、巡洋艦一隻を見事に沈めてくれた。これは大した

ものだ。おそらく今回のことでは功の方が大きく、少なくとも咎められることはないだろう。個人的に言えばあそこまで突出し、赤い彗星に対峙したというだけで褒めてやりたい気分だ。誰にでもできるとじゃない」

ヘンケン・ベツケナーの言う功は多分に偶然が絡んだ結果なのだが、しかし行動しなければ結果も生まれなかったのは確かである。

「俺からは香港基地にそう伝えておく。以上だ。何か質問はあるか」
「学徒兵、ジエリド・メサです。ジオン艦から脱出したマウアーという者は、いったいどうなるのでしょうか」

「ああ、そうか。その者をジオン艦から取り返したという功もあった。はつきりしたことは言えないが、ムラサメ研究所は既に壊滅している以上、その者は隊に復帰するのではないかな。香港基地が一番近いわけだが、そこになるかどうかまでは分からん」

それで話は終わる。

ヘンケン・ベツケナーは退室していく三人を見ながら、考えていることは全く別のことだ。

(か、可愛い……………)

この心の声が漏れていないかさえ気になった。もちろんエマ・シーンについてである。

一目惚れに近い。

それほどヘンケン・ベツケナーにとってどストライクだったのだ。もうどうしようもない。濃いブラウンの髪をきつちり真ん中で分けているところも、澄んだ翠の瞳も、全てが可愛く見えて仕方がない。もちろん感情が豊かで分かりやすいところもいい。先ほどの話の途中で少し怒ったようになっていたのも透けて見えるなんてものじゃなく、丸分かりだった。その怒りやすいところさえ魅力的に思える。

ヘンケン・ベツケナーは見かけよりずっと純情な男だった。ここでエマ・シーンに声をかけたりするのは控えた。部隊司令として当たり前のことである。

しかしそのチャンスは後で回ってくることになるのだ。

再び始まるジオンとの宇宙における戦い、そこに学徒兵も動員される。エマ・シーンらも優秀な成績を収めたパイロットとして当然それに加わることになる。

そしてヘンケン・ベツケナーの指揮する強襲揚陸艦にエマが配属され、それが契機になったのだ。

お互い第一印象は正反対のものだったが、いつまでもそうではない。

特にエマは、カクリコンやジェリドから「あの部隊長はいい人だったな。普通なら嫌味たらしく何倍も説教するものだし、下手したら功績を横取りしたりするもんだ。公正で潔い人なんだろうよ」と言われ、そうだったのかと思いついて直している。「修正」はしないでよかったのだ。

そして幾度も戦いを重ね、互いの能力を知るにつれ信頼が深まり、それと共に感情も変化する。

ヘンケン・ベツケナーは結局のところチャンスを活かすことができた。

第九十二話 作戦終了

「よし、再降下用意！ 各艦、角度調整、予定進路確認の上で同期かけろ！ 途中でぶつかるんじゃないぞ」

俺はそう言つて再び地球降下を命じている。

ザンジバル級各艦は小型ロケットブースターの力で高々度にまで到達したが、地球重力から脱するほどの能力はない。別にそれは必要ない。

いったんスリランカの連邦軍から退避し、今や眼下に見え始めているアフリカ大陸まで行ければいいのだ。

艦の速度はむろん速いが、この高度ならば気圧はほぼ無い空間になる。これならぎりぎりMSを艦外作業に使うことができる。これがもう少し下だったなら、空気の断熱圧縮による温度上昇にMSが耐えられなかったらう。

俺はMSたちを使い、ロケットブースターの溶接部を再び切つて落とさせた。これで再降下の用意が整つたというわけだ。

これで地球降下作戦の最終目標、アフリカ・キンバライド基地にようやく到達できる。

すると俺の艦隊はキンバライド基地から熱烈な歓迎を受けた。

ジオン本国から久しくなかつた応援が来たのだから当たり前だ。この将兵たちは劣勢の中、補給さえ受けられない中今迄凌いできた。自暴自棄になることなく、纏まりを崩さなかつただけでも大したことである。だからこそ全滅はしなかつたのだ。

「これはありがたい！ ジオン本国は我らを見捨ててはいなかつたのか。ジーク・ジオン！ 忠誠を守り、撤退を重ねながらも連邦に屈しない甲斐があつた」

今も俺の目の前で二人の将が同音異句に礼を言つてきた。現在キンバライド基地を率いているユーリ・ケラーネ、ノイエン・ビツターの二人のことだ。

ちなみにこの作戦の直前、この二人とも中将昇進の内示が出されている。

見かけはさすがにジオンの猛将と豪将、どちらもたくましいものだな！

多少は引き締まったとはいえまだまだ柔らかい俺の腹とは大違いだ。

「ユーリ・ケラーネ中将、ノイエン・ビッター中将、こちらこそ礼を言います。ジオンのためよくぞ戦い続けてくれました。その苦労は察するに余りあります」

「敬語はやめてもらいたい。コンスコン大将、今はあなたが上官だ。しかもそれにふさわしく宇宙で活躍に次ぐ活躍だと聞いている」

相変わらずだな、そう言いたげに苦笑を返された。

少し前まではこの二人の方がずっと階級は上だったんだから急には直らない。俺としては微妙に腰が低くなってしまふのは自然なことだ。ちなみに二人は地球攻撃を主導したキリシア閣下の宇宙突撃軍に所属していたわけだが、もちろん俺も面識はあった。

「まあ、それは置いとしまして、一刻でも早く宇宙へ撤退する準備をしなければ。ここに来たのはアフリカを制圧するためではなく将兵を宇宙に帰すためです」

「コンスコン大将、そうだろうな。それが一番合理的、ここで将兵たちがただ消耗していくのを見るのはもう耐えられない。理解はできるが、正直残念でないと言えば嘘になる。今までの我らの戦いが無駄でなかったと思いたいものだ」

「連邦をさんざん苦しめたのです。ここが頑張っていたからこそ灯台として地球表面のジオン残存部隊が希望を持てたのです。そして今、こうして間に合ったこと自体、地球での戦いが無駄でなかった証でしょう。ここでの借りは宇宙で返せばいいだけでは」

「そうだな…… 宇宙で倍にして返してやるか」

「その通りです。さて具体案に入りますが、もちろんここに来たザンジバル級だけで将兵を収容できるわけはなく、衛星軌道上に用意されている往還機とブースターを降下させて使います。デラミン准将が

必要な数を用意しているはずですが、先ずはここにいる将兵の正確な人数を把握しませんと」

「そのことならコンスコン大将、実は少しばかり問題がある」

俺はこの地球降下作戦を、大規模なザンジバル級艦隊を使って成し遂げる予定だった。

しかし結果的にはジオンの生産力ではザンジバル級を六隻しか新造できなかった。もちろんこの後に続く宇宙での戦いを見据えた場合、ザンジバル級は効率が悪く、その意味でも無理に作らせるわけにいかない。

そんな中、スリランカでの戦いで更に一隻失ってしまい、この状態では大して人数を収容できないのだ。そして時間的な問題でピンポン輸送など論外である。

次善の策としては往還機を使って一気にジオン兵を宇宙に還す。

俺の艦隊の役割は、往還機の発着する脆弱な時間を狙って連邦が妨害してくるのを排除することだ。そうでなければ防御が無いに等しい往還機はひとたまりもない。

しかしノイエン・ビッター中将はそれについて解決しなければならぬ問題を見せてきた。

「今、このキンバライド基地にいるジオン兵はわずか千五百人しかない。他の八千人もの兵は基地周辺の防衛網に配備しているのだが、簡単には動かせない」

「ノイエン・ビッター中将、それはなぜ？」

「理由は簡単だ。連邦はつい最近ここからわずか三百キロという至近にキリマンジャロ基地を建設してしまった。そして大部隊を配置し始めている。もちろん連邦が本腰を入れてキンバライド基地とジオン兵を殲滅するために作った出城のようなもんだな」

「なるほど…… そんなものを」

「こちらはそれに対応し、防衛陣地を急遽作らざるを得なかった。そのキリマンジャロの連邦兵力を何とかしない限り、こちらはキンバライド基地に集合することすらままならない」

「分かりました。先ずはその連邦兵力を叩きましょう」

また戦わないでは済まされないようだ。

俺はガトー、ツエーン、シャリア・ブルなどの精鋭MS戦力を頭に入れてそう請け合う。地球表面なのでクスコ・アルなどのエルメス、ケリーのヴァル・ヴァロを持ってきていないわけだが、連邦基地に一撃を加えるだけならそれでも充分だろう。ついでにダリルのサイコ・ドムもまた先のガンダムとの戦いで大破してしまったが仕方がない。

しかしそこに思わぬ追い打ちがかかったとは！

ガトーのアクト・ザクがために稼働不可になった。

アクト・ザクは量産されなかったため最初からパーツの補給がままならず、今までも綱渡りでやり繰りしていた。他からのパーツを細工して流用しながらここまで激戦を戦ってこれた方が奇跡だ。そして先の旗艦撃沈でそんなパーツすら失われたのが痛い。

そして最後、宇宙ではあり得ない地球での砂塵交じりの風が各部を痛め、とどめになった。

まあ、いずれ予想された事態がその通りに起きただけでも言えるが、嫌なタイミングで起きたものだ。ちなみに別のアクト・ザクであるキャラ・スーンの機体も無理な高機動が原因で予備パーツは既に無く、間もなく稼働不可になる。

しかしそこで諦めたりなどするものか。地球での最後の戦い、そんな逆風をもともせずには勝ってやるぜ！

常勝のコンスコン機動艦隊だ（と思いたい）からな！

ただし冷静に考えると力押しでは難しい。

俺はオーソドックスに釣り出し戦法を使った。

先ずはキンバライド基地に残っている老朽化したザクを集めさせた。ただ動くだけという廃棄寸前のももの併せ、総数四十機は揃えることができた。

それをこれ見よがしに連邦キリマンジャロ基地の前に遊弋させたのだ。

向こうは当然これに食いつく。

元から連邦キリマンジャロ基地は守備をするための砦ではなく、攻勢のための前進基地なのだからそうなるだろう。弱い獲物と見て総数五十機ものジム・コマンドを繰り出してきたではないか。絶好の殴殺の機会に見えたに違いない。

これを見てザクたちは慌てて後退していく。もちろん擬態だ。

後は簡単である。

ザクを狩り立ててくるジム・コマンドの群れに頃合いを見て伏兵からの急襲を掛ければいい。その役割はシャリア・ブルが果たす。いいタイミングで麾下の隊と共に横合いから突っ込む。

むろんMS数は13機と少ないが、奇襲で隊列を崩されたジム・コマンドが相手、しかもこちらは段違いに性能の高いガルバルディ改とシャリア・ブルなのだから問題ない。

それよりも俺の驚きは違うところにあった。

実はガトーが旧式ザクに乗って釣り出しのためのザク部隊を率いてくれていたのだが、ガトーはただ逃げるだけではない。擬態が終われば機を見て逆撃を仕掛け、連邦のジム・コマンドを撃破していく。通常にはザクマシンガンは軽戦車相手ならともかく、ジム相手には効果が薄いはずだ。それを的確に脆弱部を狙って通していくではないか。

さすがはガトーだ。

こうして連邦のジム部隊をさんざんに叩き、押し返すことに成功する。

同時にキンバライド基地へ上空から多数の往還機が降下してくる。空に咲くパラシュートの花が華やかだ。

だが、ここで連邦のキリマンジャロ基地はありったけの戦力を吐き出してきた。

一度は囷に釣り出されてしまい、したたかに打撃を被ったが、ここで怯むことはない。

ジオン側の狙いがおそらく往還機を守るためと知った。そうであるからにはもう一度でも仕掛けざるを得ない。それにおそらくジオン側はもう安心して撤退用意を始めているだろう。

今度は九十機ものジム・コマンドと支援機の群れだ。

しかしながらこれらもまた思わぬ奇襲を受けてしまう。

潜んで待ち構えていた別のガルバルディ改に襲いかかれてしまったのだ。

それは俺の用意させていたツエーンの隊と、今は副隊長カリウスの指揮しているガトーの隊である。

まあ、要するに俺は二段構えの伏兵を仕込んでいたというわけだ！一度叩かれたくらいで連邦が諦めるなんて甘い予想などするものか。最初から二段に組んでいた。

短時間でも激しい戦闘が終わり、今度こそ連邦はジムの大半を失うことになる。

戦いの最後の最後に俺はシャア少将のゲルググJ改を登場させた。赤い彗星の姿、これがとどめだ。これで連邦側は心を折られ、キリマンジャロ基地に引込まざるを得なくなる。もはや容易に出撃しようとは思わないだろう。

この一連の戦闘を見ていたユーリ・ケラーネ、ノイエン・ビツターの二人も呟く。

「どうだビツター、見ていたか。面白いように策が決まるとは……さすがに大将になるだけのことはあるな。コンスコン大将、巧緻な策を使う。特に心理戦で逃れられない罠を作り出す」

「見事だ。伏兵となった隊の動きもいいし、それを信頼して任せるのも大したものだ。だが俺が見るところシャア少将を使うタイミングが一番の決め手だった。もちろん早く使えば連邦も警戒して安易に釣り出されることはなかったろうし、最後の切り札に使うことで連邦の戦意を刈り取るとはな」

さあ、これでいよいよ撤退の下準備が整った。

急いで全ジオン将兵の準備をさせるが、残念なことに宇宙に持って行けるのは人員だけのことだ。

航空機やMSまで詰め込むことはできない。もともと、航空機や砲台などは地球上で使う以外に意味は無く、宇宙に持っていくわけがない。

問題はMSだ。しかし、それにしたところで今さらザクやグフなどを後生大事に持って行って行っても仕方がない。せつかくの人員に今後もそういう古いMSを使わせるつもりはないのだ。

ただしこれを言うと古参のジオン兵は大変残念がっていた。彼らのMSを見ればよく分かる。

旧式のMSをメンテナンスし続けなんとか使用に耐えるように苦労を重ねてきたのだ。残っているMSは彼らの苦労の結晶といえる。煤け、汚れ、弾丸の痕を無理やり補修して塞いだようなMSばかりだ。当然それに愛着もあるのだろう。本当に地球表面でギリギリの戦いを強いられてきた彼らには頭が下がる。

さて、ザンジバル級にも今度は溶接などではなく、まともにロケットブースターを取り付けていく。そして再び轟音と共に上昇するのだ。

今度こそ本格的に地上から離脱し、もう戻ることはない。

もはや懐かしいとさえ思える星空の世界に帰る。

人類を育んできた地球よりも宇宙が懐かしいとはやはり俺は根っからのスペースノイドなんだろうな。

艦橋から見える景色についつい感傷的になってしまう。

高度が上がると空は暗くなり、そして眼前に地球が大きな青い球体として見えてくるが、それに圧倒されていた宇宙の漆黒が徐々に割合を増し、やがてそればかりの世界になる。

これで今回の俺の作戦は一切が終了する、そのはずだった。

だがそうはならない。

最後の試練が待ち構えていたのだ。

八隻ほどで構成される連邦艦隊が二組、先を争うように俺の艦隊に迫りつつあった。

それは連邦の低軌道守備艦隊などではない。はるかルナツーより

発進してきたものだ。

それらの艦隊は戦術能力にひととき優れた二人の連邦指揮官にそれぞれ率いられている。

「ワイアットの投げナイフ」

そう称される二つの艦隊が弧を描き、宙を切り裂く。

第九十三話 投げナイフ

これらの連邦艦隊、率いるのは折り紙付きの優秀な指揮官である。一人はガデイ・キンゼー少佐、もう一人はエイパー・シナプス少佐だ。

どちらも眼光は鋭く、深い思慮と隙の無さが伺える。グリーン・ワイアットが希少な能力を見出し、育て上げ、独立高速機動小隊を任せた実力派の者たちである。

その少し前ルナツーではこんな会話がされていた。

「本当はもう少し艦隊規模を大きくしてやりたかった。残念なことだ。少佐という地位から小隊の枠を超えないくらいにしかしてやれない」

「いいえワイアット閣下、この程度の方が小回りが利いていいでしょう。数が増えれば高速機動が難しくなり、本末転倒です」
「そうお考えくださって恐縮です、閣下。それにこの少佐という地位さえ破格ではないでしょうか」

グリーン・ワイアットの言葉に対し、ガデイ・キンゼーとエイパー・シナプスがそれぞれそう答える。

この二人は元々からのグリーン・ワイアットの子飼いではなかった。

最初は連邦軍エルラン中将の下に配属されていたのだ。

そのエルラン中将は連邦軍史上に残る有名なスキヤンダルを起している。

この戦争の中期、その頃地球表面のヨーロッパ戦線を席卷していたのはジオンのマ・クベ大佐だったのだが、何とエルラン中将はそれと内通していた疑いにより逮捕され、迅速に処罰された。

この原因については未だに不明とされる。

将官級がそんな馬鹿なことをするとは普通には考えられない。ましてやエルラン中将は軽率という言葉から縁遠く、何でもそつなくこ

なす有能な将という評判だったのに。

しかも闇の部分が多過ぎる。エルラン中将が私利私欲のためにそんなことをしたのではないとしても、極端な和平派だったのか、当時の戦局に不安があったのか、それもまた分からない。

一説にはマ・クベ大佐が秘密裏に核、それも桁外れの威力を持つ水爆を所持しているらしいという情報を得て、その真偽を探るためとも言われる。更にそれが本当だと知ったエルラン中将はヨーロッパ市民をその暴威から守るため苦渋の決断をした。ジオンとの取り引きという形で。

それもまた真実かどうかは分からない。

ただし一つだけ、エルラン中将はヨーロッパ出身であり、北米閥に染まりつつある連邦軍を信用していなかった。連邦軍がヨーロッパを軽視していたせいでこれほどの戦禍になった、と日頃から公言していたのはれっきとした事実だ。

だが事件によりエルラン中将個人のこととはともかく、必然的に部下たちもまた何も預かり知らぬのに冷たい視線を受けることになった。特にエルラン中将直属である司令部付けの士官はことごとく前線から排除され、降格、そして閑職に回される憂き目に遭ったのだ。

しかし、そこを助けたのがグリーン・ワイアットである。

元々彼らから見てグリーン・ワイアットはエルラン中将と同じくヨーロッパ閥の雄なのだ。最初から親和性は高い。

そのグリーン・ワイアットは実力を重視する立場からそんな彼らでも能力があれば引き入れ、それに応じた地位に抜擢していった。

当然彼らはこの上なく感激する。

グリーン・ワイアットに深い恩義を感じ、それを戦果で返したいと願っている。

一方のグリーン・ワイアットとしても優秀な中級指揮官は是非とも欲しいところだ。

常に傍にいたステファン・ヘボン少将は分析力に優れ、また戦力をきちんと稼働できる状態に整えることに非凡な才能があった。だからこそグリーン・ワイアットはステファン・ヘボンを参謀として重宝

している。いや、それ以上に自分の考えをまとめるための話し相手という大きな価値を見出している。

しかしながら艦隊指揮官として考えると物足りない。

グリーン・ワイアットの見るところ、ステファン・ヘボンは柔軟性に欠け、視野が狭いきらいがあった。そのためステファン・ヘボンに分艦隊を預けることはせず参謀のままにしている。

一方、ガデイ・キンゼーとエイパー・シナプスはヨーロッパ出身ではなかったがたまたまエルラン中将麾下にいたのが運の尽き、閑職に落ちて嘆いていた。そこを拾ったグリーン・ワイアットはその実力を認め、中級指揮官候補の筆頭格として期待していたのだ。

今、高速艦で組まれた二つの小隊、それぞれ独立小隊とした上でルナツから送り出す。

「地球表面を引つ掻き回すコンスコン機動艦隊、これは看過できない。それに何もしないでは私の立場もない。あの二人に任せることにしよう」

一方、その頃の俺は後処理にかかっていた。

ザンジバル級全艦、及び宇宙往還機が衛星軌道上にまで達すると隊列を組み直さなくてはならない。

待つまでもなくそのポイントへデラミン准将が出迎えてくれる。

一つは用意してくれた輸送艦へ往還機に詰め込まれていた将兵を移乗させなくてはならない。ここから宇宙を航行するには往還機を使わない。輸送艦がいくら鈍足だとはいっても核エンジンを積んでいる以上、往還機よりは速いからだ。

もう一つ、俺や司令部の者も乗り換える。本来のコンスコン機動艦隊の旗艦ティベへ移れるのだ。

「おお、懐かしき我がティベ、我が艦橋」

そんなことを言っている暇は実はなかった。

「コンスコン司令、用意整いました！ 進発できます」

「そうか、では全艦、ジオン本国へ向け航行開始！」

だがしかし、このわずか五分後、オペレーターが緊張と共に伝えてきたのだ

「進路方向に艦隊発見！ 連邦艦隊です！ こちらに向けて高速接近中！」

「何だと！ こんなタイミングでか…… どこから仕掛けてきた」

「方向からすると低軌道ではなく…… ルナツーからと思われます。艦数、十五から二十の間。ああつ、更に増速、接触予定時間四十分から三十分に修正！」

「くそつ、多過ぎるな……」

はるばるルナツーから俺を目がけてだと！ 何だつて嫌なタイミングの襲撃だ。

おまけに戦意が高いと思われる。牽制などではなく、ここで殺る気だろう。

その一方で俺の方は大した戦力はない。

地球から上がってきたザンジバル級が全部で六隻、それに合流したのも使える戦闘艦はこのテイベを入れて五隻しかない。デラミン准将は当然のことだがコンスコン機動艦隊をジオン本国から全艦出撃させるようなことをせず、輸送艦を中心としてその護衛だけの戦力を考えていたからだ。

やむを得ない。劣勢である以上、いったん防衛陣を作るしかない。

何といつてもこの場合、俺が戦術バリエーションを広くとれないのは輸送艦の存在だ。これを守りながら戦うのは難しいが、そうしなければ地球降下作戦の意味がない。

その連邦艦では、指揮官二人が前方を見据えている。戦いは間近だ。

「くそつ、遅くなってしまったか…… ジオン艦隊はもう動ける態勢に入っているようだ」

「いやエイパー、そう悪いタイミングでもない。今からでも充分に先

手は取れる。それに向こうはもう輸送艦を退避させる時間はない。これは向こうにとつて大いに足枷だ」

「まあ確かに。ガデイ、考えてみればこのジオン艦隊がわずか四日しか地球表面にいることなく、鮮やかに宇宙に戻ったのが想定外だったからな」

「想定外と思うか？　いや、俺は想定内だったぞ。地球の連中の体たらくを考えたら、な」

「それはそうだ。もしも、もしもエルラン閣下がご存命だったならそんなことにはならなかつたろうに」

「気持ちは分かるがもう終わつたことを言うな。それよりもエイパー、これからの料理をどうする？」

「ガデイ、決まっている。得意なやり方をするだけだ。また後で会おう」

そう言つてエイパー・シナプスが八隻を率い、進路を少しばかり変え別方向へと進んでいく。お互い細かい打ち合わせなどしなくても何が狙いかといった意思疎通はできている。

俺は迫る連邦艦隊に対し防衛陣を作り、後の先を取る準備をした。

「各艦、エネルギーは充分貯めとけ！　クロスファイヤーポイント設定、データーリンク！　迎撃の利を活かし、射軸精度目一杯上げろ！」

「コンスコン司令、連邦艦隊は二つに分かれました！　それぞれ同数と思われます。一方は直進ではなく、やや弧を描くような進路に」

「何だと！　包囲、そんなわけはない」

俺は連邦艦隊の意図を推測にかかる。

それが分からなければこの戦いは負ける。

「並行進撃、波状攻撃、いいや単にそんなことのために分けたのなら各個撃破されて終わる。とすれば何か。陽動からの突入かもしれんな。狙いを輸送艦に絞つた上で。悪辣だが確かに効果的だ」

そして対応するよう陣形の移動を命じた。

「ザンジバル級は輸送艦と密接し、これと離れることなく守れ。他は正面からの連邦艦隊をいなすことに専念する」

正面から来る連邦艦隊は意外なことに速度を落とさず接触してきた。

短いが激烈な砲戦が展開される。

その後も向こうは足を止めることなく、やや進路を傾けて飛びすぎる。だがこの一撃だけに満足せず、再びやってくることは確定だろう。

「報告します！　ムサイ一隻大破、延焼ひどく、自沈が適当との連絡です。他、ガガウル一隻撃沈、一隻中破」

「そうか……　それで挙げた戦果の方が中破二隻とは、まるで割に合わないな。だが向こうのやり方は分かった。艦隊をまるでナイフのようを使い、こつちを切り刻む気だ」

向こうの意図は分かった。連邦艦隊の指揮官は優秀な奴だ。普通なら高速機動をしながら艦隊をまとめ切り、同時に攻勢をかけるのは難しい。砲撃を斉射にして集中砲火とするには艦隊形の維持が不可欠だからだ。しかしそれをやり切る能力があり、またそこに自信があるのだろう。

だが最悪の事態ではない。

こつちが現時点でMS戦力において万端な状態でないのを知らない。今はモビルアーマーたちも、ガトーのアクト・ザクもダリルのサイコ・ドムもないのだが。

だからこそ向こうは足を止めMSを出したりしなかった。MS戦にしようするそぶりすらなく、むしろそれを警戒しMSに取りすがられないため速度を落とさなかった。

その頃、弧を描いて斜め後方まで来ていた連邦の別の隊もまた同じように高速の砲撃戦をかけてきている。やはりそこでも被った損害は少なくない。

ザンジバル級各艦は迎撃に奮闘し、連邦艦隊を突入させることはなかったものの、二隻が大破されている。そして何より、輸送艦たちに

幾つも直撃弾を食らっている。幸いなことに輸送艦はエネルギー系統がほぼエンジン部に限られるので、そこに運悪く食らわれない限り爆散はせず、直ぐに救助すれば乗っている将兵の被害は最小限に済ませられる。

だがそれも再び攻撃を浴びればどうなるか分からない。憎らしいことにその連邦艦隊もまた正面のものと同じく高機動をかけながら再び向かってくる。

「くそっ、このままではいかな。しかし、ここで輸送艦を見捨てるなどできない。せつかく地球から取り戻した将兵なんだ。ここで捕虜に変えてどうする。何とか策を講じないと……」

輸送艦を置いて逃げるなどするものか。

考える。そうでなければみんな宇宙の藻屑だ。

俺は一つの考えを編み出し、伝えた。

第九十四話 困りごと

その頃連邦艦ではガデイ・キンゼーもエイパー・シナプスも同じようなことを言っている。

「よし、先ずは上手くいった。出来過ぎくらいだ。さて、次にかける第二撃で瓦解に持ち込めたらいいのだが……それが無理でも第三撃で勝負を決めてやる」

勝機と見れば迷うことはない。一気呵成だ。

続けて第二撃を仕掛けるためどちらも動くが、次のターンは艦隊運動で回転半径が小さく済んだエイパー・シナプスが先になる。

またしても輸送艦とザンジバル級の方へ迫るエイパー・シナプス、眼光鋭くそれらを進路上に見据える。

だが次の瞬間、不思議なものを見てしまう。

「何だあの壁は。いや、違う、船……宇宙往還機か……」

見えたままを口にしたがその通りだ。

地球表面からジオン将兵をこのポイントまで運ぶのに使い、今は不要となった往還機たちが前面に並べられている。

もちろん広い壁にできるほどの数ではなく、隙間も空いている。

せいぜい宙に浮かんだ円盤のような何かといったところだ。

その妙なものにエイパー・シナプスが訝しんでいると、その繋ぎ目から撃ってきたではないか！

それはもちろん砲ではない。宇宙往還機に砲などない。

全てMSの仕業である。

宇宙往還機を並べたジオンMSがそこに隠れながらつるべ打ちに撃ってくる。使うビームライフルは艦砲などより一撃の威力は小さく照準も甘いが、とにかく数は多い。油断しているとまぐれ当たりでも細かな損害を食らってしまう。

「そうきたかジオンのコンスコン大将。突飛な工夫、いや、苦肉の策というべきか……だがそんな薄い壁、こっちの砲の前では紙のような

ものだ」

連邦艦から主砲を撃ちかけると、往還機の外壁などとうてい装甲と呼べる代物ではない以上、何の抵抗もできはしない。確かに簡単に穴が開く。

だが、それだけのことだった。

燃料を使い切った宇宙往還機は誘爆などしない。

そしてエイパー・シナプスは思ったより事態が厄介になったのを理解した。

ジオンMSは宇宙往還機を盾に使っているのではない。連邦艦からの砲撃を妨げることができないのは承知の上だ。

ただし姿を隠して狙いを付けさせないことはできる。

それが目的だった。ジオンMSたちは射かけるとすぐに裏に引込み、場所を移動するので、連邦艦からすれば見えなくなるため狙い撃つことができない。でたために撃ち返しても往還機に穴が開くだけで意味はないのだ。つまりは薄い傘である。

「なるほど……こんな戦い方は既視感がある。宇宙の戦いとは違い、地球表面での白兵戦ならむしろ隠れながらするものだ。隠れ方が上手い方が勝つからな。まるで戦車を市街戦に引きずり込み歩兵で叩くようなやり方ではないか」

嘆息するしかない。

このまま砲戦を継続していけば、小破程度の損害でも積み重なり、肝心の機動力を削がれる。そうなれば高速の突入戦法などおぼつかない。

「ジオンのコンスコン大将とは恐ろしい奴だ。短い地球表面での滞在でそんな地球流の戦法を身に付け、アレンジして使ってくるのか」

エイパー・シナプスはそうと決めたら第二撃を諦めいったん距離を取りなおす。

別に勝利を諦めたわけではなく、ガディ・キンゼーの方を見守る。そっちが優勢なら再び合流するのが合理的だ。

一方のガディ・キンゼーもまた思わぬ罠に落ちている。

高速機動をかけて砲撃しようとするれば相手のジオン艦が逃げに転じるのだ。それこそ算を乱したように。

こんなに脆いはずはない、妙だな、と思った頃答えが得られた。

ジオン艦から撃ってくる。それも砲塔とは無関係のようだ。ジオン艦の外壁にジオンMSが取りすがり、そちらから盛んに撃ちかけてくるのだ。

小賢しい技、どうせMSのビームライフルなど大したことはない、と判断した。背に腹は代えられず目くらましに使っているだけなのだろうと。ビームライフルの射撃精度からすれば、しっかり艦隊戦の間合いを確保し、接近し過ぎなければ脅威にはならないはずだ。

しかしそれは半分間違いだった。

ジオン艦は逃げる時にでも攻撃の手数が減ることがない。艦の砲塔が有効かどうかには関係なく、MSから撃っている以上そうなる。

それはとても嫌なことだったのだ。

艦隊戦においては互いに背を見せ合うことは少なくない。特に足を止めず回り込む機動をしている時には。そうした場合、ジオン艦側はMSを使って撃ってくるのに連邦艦の砲撃と比較してどうしても薄くなり、不利は否めない。

そしてこのMSからの射撃が目くらましでも何でもなく現実の脅威になる時がくる。

「右エンジンに被弾！ 外壁破られています！」

「何!? こんな距離からでもジオン艦のMSから直撃を食らっただど！」

「エネルギー漏れ検知、緊急閉鎖弁作動します！ この動力系カットにより艦の推力は60%に低下！」

「嫌なところを…… これは狙われたのか？ エンジン部を的確にいったいどういうことだ。拡大投影してみろ」

そこで見えたのは連邦側の最も見たくないものだ。

「あのジオンMSは赤色、そうか、赤い彗星だったか！」

赤い彗星のシャアもまた狙撃してくるのだ。それは他とは段違い

に精度が高い。

シヤア個人の能力ももちろん推測しようがないが、そもそも連邦側のデータには狙撃型改修のゲルググJ改の性能は載せられていない。あまりに例が少ないからだ。結果的にどれほどの距離をとればいいのか分かりようがない。

「赤い彗星の伝説なんか信じたくないが…… 仕方ない。いったん離脱方向に転じる」

ガデイ・キンゼーは現実的な選択をした。

下がって陣形を取り直し、エイパー・シナプスと合流を図ろうとした。二方向からの攻勢でジオン輸送艦を狙うことはいったん棚上げにして、とにかく戦力の統合をしなければ優勢確保ができない。

だが、エイパー・シナプスとの合流は果たせなかった。

その予想ポイントへジオン側から濃密な集中砲火が飛んでくるのだ。まるで見抜かれている。その意味をガデイ・キンゼーは読み取らざるを得ない。

「どうやらジオンのコンスコン大將はこちらの意図どころか進行速度さえ見切りはじめた。これ以上の攻勢はおそらく消耗戦にしかならんだろう。かといって足を止めてのMS戦にしてしまえばあの優秀なMS隊が相手になる。相討ち覚悟の泥沼など論外、残念だがこちらが潮時だな」

優秀な指揮官とは、そういうことが分かる者のことを指す。

ガデイ・キンゼーとエイパー・シナプスは程々の戦果だけを手に撤回にかかる。

その二日後、ルナツーに辿り着いた二人をグリーン・ワイアットは温かく迎える。

「よくやってくれた。あのジオンのコンスコン大將を苦しめたとは、とても愉快だ」

「しかし、撃滅には至らず申し開きもできません」「戦果は満足と程遠く、折角のチャンスを活かせなかったことは身の不明です」

「二人ともそんな言葉は不要だ。私が指揮していたところで似たり寄つたりのことしかできなかつたろう。謙遜でなくそう思う。それに戦果について言えば充分過ぎるほどじゃないか。一つはこのルナツーから動いたという確かな事実が残り、私もジャブローにそう言うことができる。もう一つは、そう、コンスコン大将の恐ろしさを貴官らに認識してもらえたことだ。これが明日への糧になるだろう」

そしてグリーン・ワイアットは気分よく辞令を与える。

どのみち同じ辞令を与えるつもりだったが、この状態で渡せるというのは重畳だ。

「ガディ・キンゼー少佐、エイパー・シナプス少佐の両名、今回作戦を滞りなく遂行しジオン艦隊に一撃を与え、心胆を寒からしめた功により中佐に任じる。以後、どちらも独立中隊を指揮せよ。実はね、既にそれぞれ十五隻の艦隊を用意しているんだ。なあに、どのみちコンスコン大将との再戦はある。二人にはそのときに大戦果を期待するよ」この二人、「ワイアットの投げナイフ」はいつそう強度を増し、再戦の日を待ち望むことになる。

それと全く同じ時、俺もまたサイド3に帰着した。

わずかな日数しか離れていなかったのにとても懐かしい気がする。それほど地球降下作戦はあれこれ内容が濃かつたのだ。その最中は幾度の戦いがあったのだろう。おかげで合い間に仮眠を繰り返すしか休めていないくらいだ。

その甲斐あって作戦自体はとても上手くいった。予定通り連邦の研究施設を叩き、ジオン将兵を地表から脱出させられた。

幸運という要素が多分にあつたおかげでもある。

最後の宇宙における戦いは思いがけず不利な状況になり、正直慌てさせられたが、相手の指揮官が常識人であつたために辛くも凌ぐことができた。これだって幸運である。損害を意に介さないでひたすら攻めにかかる猛将が相手だったらどうなっていたか分からない。

とにかく、今いるのはジオンの首都、華やかなりしズム・シテイである。

ここにいるドズル閣下とキシリア閣下に、今回作戦をまとめた報告書を渡さなくてはならないからだ。

だがほっとした気分だったのはわずかな時間に過ぎなかった。俺はここで驚くべきことに直面している。

ジオン本国が今、ひどい動揺の最中にあるのだ。

俺の地球降下作戦成功と九千人以上ものジオン将兵の帰還はとも明るいニュースであり、もちろん市民も大いに沸き立ったのだが、そんなお祭りムードも一瞬の花火にしかならない。

それほど街は不穏になっている。出歩く市民は多くなく、いても3, 4人ほどのグループを形成してはひそひそと井戸端会議をしているのではないか。そんな通常でない空気が俺にも感じられる。

そうなった原因は明らかだった。

第九十五話 ジオンの結束

ズム・シテイの市民にさえ影を落とす社会不安、その原因を考えるのは難しくない。

それはキシリア閣下にあった。

以前キシリア閣下はサイド3の社会的改革を成し遂げると俺に語ったことがあった。

ギレン総帥のやりかけたことをどうしても自分がやると言って。

ついにそれに手をつけたのだ。

今このタイミングでキシリア閣下はジオン六大家とそれに連なる名家を集め、次々と「適切な処置」を下している。

その政治的経済的激震があらゆるところに及び、市民にも先の見えない不安を与えてしまっているのだ。

俺はそれをまずいと感じている。

連邦との戦局は一時的な小康状態にあるとはいえ、いずれ激しく矛を交えるに決まっている。それなのにジオン国内が乱れるとは。

キシリア閣下がそんなことを考慮していないはずもないが、万が一にもそれを軽視しているようではいけない。これは真意を聞く必要がある。

そこで、どのみちキシリア閣下に地球作戦の報告をするのだから、それについて聞いてみようと思ったのだ。

「キシリア閣下、ついでに申し上げますが、その、ズム・シテイの雰囲気は少しばかり良くないというか、悪くなっているというか、そんなような」

「……………」

「あくまで一般論としてですが、何かの政策実行には摩擦が付き物というか、感情というものは往々にしてそれについていかなない場合があるというか、なんと言いましょう」

「はつきり言えコンスコン。つまり私に文句が言いたいのだろう」

キシリア閣下の表情は苦笑いを崩していない。

おそらく俺が意見したがっていることも、その意見の内容もとうに分かっているのだろうか。

「完璧に理解しろとは言わないがコンスコン、一応の説明はしといてやろう」

「お、お願いいたします」

「先ずは私の行った事実からだ。初めにサイド3六大家の一つ、トト家には退場願った。トト家の持つ債権のほとんどは国庫に納め、せいぜい上級市民として生きられる分だけを残した。これはトト家がグレミー・トトを利用して画策しようとした罰だ。正直自分では甘過ぎる処置だと思うが…… 未遂でもその証拠を掴んでいると言ったらトト家は震え上がって納得してくれた。そして次にサハリン家だ。これも当主ギニアス・サハリン、その妹アイナ・サハリン共に行方不明、よって親類縁者がいくら騒ごうとも後継者不在により資産は凍結、しばらく様子を見てから国庫に入れる」

「そ、それは大胆な…… トト家が軽挙なことを考えたとしても、こちらが敢えて泳がせていた連邦工作員に乗せられただけでは…… あ、それでキシリア閣下、グレミー・トトという幼児はいつたい？」

「ああ、言い忘れたな。グレミー・トト自身は私の手元に置く。誰かに利用されないためにはそれが一番いい。それにな、変なことを周りから吹き込まれて育てばねじ曲がった信念を持つてしまう。それは必ず不幸を招くことになる。周りにはもちろんのこと、グレミー・トト本人にも。おまけに資質が優秀なほど不幸も大きくなる。それだけは避けたいのだ」

ここでキシリア閣下は一息入れた。なぜか少し疲れているようだ。「話を進めよう。ここから先は今からの予定のことになる。肝心の我がザビ家については私とドズルの兄者が話し合い、父デギン公王の持っていた資産分は国庫に納めることにする。私も兄者もケチではないからな。これははじめとして率先してやらねばならん。次に、ラル家はそこそこの戦争協力金だけで済ませる。ラル家にはいろいろ言いたいことも積もり積もっているのだが、結論としてはそうする。

同じようにセロ家も協力金だけだ。言っておくがコンスコン、お前がセロ家だからという理由ではないぞ。お前の弟の現当主はそこそこ立派な運営をしており害はなく、次期当主、マッシュマー・セロも健全な成長をしていると聞く」

「そ、それはまあ……」

「協力金は、ジオン国家に対する影響力を大幅に削ぐことになるが貴族家として立ち行かないほどではない。そして最後にカーン家、これには少しばかり策を用いた。当主のマハラジャ・カーンをわざわざアクシズ駐留から本国に呼び戻して様子を見ても、トト家や連邦工作員の口車に乗るそぶりはなかった。その忠誠により、協力金くらいに済ませるつもりだ」

「キシリア閣下、なるほどそれぞれ六大家へ合わせた処置、理にかなっていることは分かりました。ですがそれほどまでのことを、ここで一度に…… それでは社会不安が増大するのは当たり前では。昨日までの常識が今日通じないとなれば」

どうしてもそれを言う必要がある。

例えば良いことをするのであっても、タイミングというものがあるだろう。

「そう言うと思ったぞコンスコン。だがな、これはジオンの発展には必要なことだ。それだけではない。いつぞやも言ったが、サイド3の貴族支配を終わらせることは、連邦との和平に向けて必ずしなくてはならない、地ならしなのだ。その象徴たる六大家の力は早いところ削がねばならん」

「し、しかし、一時的にでも生産力にまで影響することも考えられません。それがジオンの戦力の低下へと。おまけにキシリア閣下がご存じないこともあります」

「それはいったい何だ？ コンスコン」

「直接戦力の低下に結びつくことがあり得るのです！ 実際に戦う将兵の動揺のせいで。なぜなら 将兵は必ずしも一般市民だけではありません。何らかの形で六大家に結び付いている者も多いのです。むしろ軍だからこそ貴族階級の出である者が多くいます」

「コンスコン、お前のようにか。それは特殊な例としても、確かに貴族の子弟が軍に行く場合は多い。それは私も理解できる。しかしな、それくらい何とでもできる。いやお前が何とかしろ。私としてはお前こそジオン結束のキーだとさえ思っているのだぞ」

「……」

「お前がギレンの兄者のように演説をしろとは言わないが、まあそれは無理でも、少しはカリスマを使ったらどうだ」

「カ、カリスマと言われましても……」

「何だ。自覚もないのか。ジオンのコンスコン大将、普段はのっそりしていても戦えばほぼ常勝のくせに。しかも、これまでどんな難しい局面にあっても必ず策を出し、それを見事に当てて切り抜けてきた。結果的に驚くべき勝利を続け、おまけに死傷率は異常に低い。ジオン将兵がお前をどう思っているか、ちよつと考えたら分かりそうなものだが」

ま、まあガトー君やケリイ、ダリルくらいには受けが良いのは分かっているが、他の将兵に対してはどうだろう。ツェーンなどは今でも邪険にしてくるような感じだ。

俺は男にばかり人気があるような気がするが、考え過ぎか？ そうではないと思いたい。

「そうだコンスコン、具体的なことは可哀想だから言わないが、ついで見かけをもう少し変えたらどうだ。きっと受けも変わってこよう」

「ええっ、そんな…… しかも何をどう変えろと……」

「冗談だ」

「……」

持ち上げられて落とされたような気がしたぞ。

「コンスコン、話を戻すが、お前は何か勘違いをしている。今はジオン国民も動揺しているようでも、この処置はいずれ結束を強めるように働く。国民の一体感として必ず実を結ぶ。そしてそれは連邦との戦いに勝ちを収める上で必要不可欠なことでもある」

「なるほど、しかし必要不可欠とまで……」

「当たり前だ。そうでなくては戦争に勝てるはずがない」

「……逆に言えば現状のまとまり程度では勝てない」と

「もつと詳しく言わないといけないのか、コンスコン。考えてもみる。今、ジオンが行っているエネルギー戦略が連邦を締め上げるだけでなく、ジオンの方にも影響しないと思うか」

「ジオンの側に、それは？」

「本格的にエネルギー戦略を進めれば、おそらく連邦からジオンに入ってくる物もまた無くなるだろう。今でもサイド6を経由した迂回貿易で民生用品の横流しはあるのだからな。もちろん、木材などの贅沢品が入ってこなくともどうでもいい。しかし地球表面でないと手に入らない希少金属などもある。残念ながらマ・クベの持ってきた資源はほぼ軍事用に限られたもので、民間へ供給するには足りるはずがない。このままだと民間用、市民生活用の核反応炉の修理さえできなくなる。早急ではなくとも」

「要するにこれからジオン側も窮乏する一面があると。しかもそれが一般市民にも深刻に及ぶレベルで」

「そうだ。だからこそ今のうちに改革を成し遂げて、ジオンは一丸とならねばならない」

「そうしないと勝てない……」

「コンスコン、戦争はもうそのレベルになったと知っておけ。私はそこを見ているのだ。この戦争は撃ち合いが重要ではない。結束を崩さない方が勝つ。崩れた方が負ける。そういう戦いになった」

そうキシリア閣下に言われてしまえば、俺はそういうものかと思つてしまう。

正直分らない面もあるのだが、「政治のキシリア」閣下の考えなのだからたぶん正しいのだろう。

ジオンでただ一人、あの連邦の狸どもと渡り合えるキシリア閣下なのである。そのジオン随一の政治センスによって俺とは見えているものが違うのだ。今はその片鱗を知った。

俺はそんなことを思いながら退出した。

第九十六話 キシリアの二つの顔

一方、コンスコンを見送ったキシリア・ザビは先ほどまでの熱気を嘘のように拡散させている。

強く政策を語り、ジオンの未来を論じ、コンスコンを相手に光彩を放っていた。相変わらずキシリアは自信を持ち、才能の冴えを見せ、それが部屋中に拡散しているかのようだった。

しかし今はその欠片もない。

代わりに物憂げな表情で覆われていくではないか。

その手はデスクに置かれたある一つの報告書の上に置かれている。そこには、地球降下作戦でまたしても名を上げたシャア・アズナブル少将のその後の動きについて書かれてあった。

キシリアが最初から予期し、秘密裏に探らせていたからだ。

それによると、シャア・アズナブル少将は政治的な変動を感じるやいなや、この機を逃さないと言わんばかりに没落必須のトト家やサハリン家などへ渡りをつけようと画策している事実がある。報告書にはそれがまとめて記されている。

「シャア、いやキャスバル、やはりそんなことを…… 悪い方の予想が当たった。まだお前は囚われているのか！ 大義を見失い、つまらない意地を張り通すのがいかに狭量なことなのか、未だに分かっていないとは」

キシリア・ザビはゆっくりとそこから目を離し、デスクに備え付けられた椅子に深く腰掛ける。

「キャスバル、それを学ぶべきさえ無かったのだな。ジンバ・ラルよ、キャスバルをかくまい、下らぬ教育を施した罪は重いぞ。どういうつもりでキャスバルにそんなことをしたのか問うつもりはない。貴様なりの正義かもしれん。だが私は断罪したい。結果的にキャスバルの真つ白であるべき未来を余計なことで塗り込めたのだから」

疲れた声を絞り出しながら、独白を続けていくのだ。

「……元々聡明だったキャスバルは歪んだ。貴様に吹き込まれたことだけを全ての真実と思い込み、自分の目が曇っていることに気付きもしない。気付こうともしない。このままでは過去の妄執に囚われた哀しいピエロだ。どうかして目覚めてはくれないのか」
「いったん沈み込んだ視線はむしろ上へ上げたが、何にも焦点を合わせているわけではなく、何を見ているわけでもない。
「取り返しのつかないことになる前に、分かってくれ。頼むから私に肅清させてくれるな」

今だけはジオン随一の謀略家キシリア・ザビではない。

その顔は怜悯とはほど遠く、悩んでも仕方のないことを悩む、とても人間らしい顔である。

その心に思い浮かべるのはシヤアの昔の姿だ。

キシリアはその頃の様子を鮮明に覚えている。

なぜなら、幾度も幾度も思い出してはそれをなぞっているから、忘れられるはずがない。

シヤアがただの幼子キャスバル・レム・ダイクンだった頃、全てが始まる前。

その頃、キシリアは幾度もそのキャスバルの遊び相手をしたものだ。キャスバルだけではない。その妹アルテイシアも一緒だった。大人たちが集まって難しい話をしている間、捨て置かれたその二人の相手をする人間が必要だったからだ。

もっぱらその担当がキシリアだったのである。

他は当てにならない。ギレンはギレンで一人難解な本を読むのが好きで、子供にレベルを合わせることができない。タイトルからして難しい本の内容など誰も興味を持つはずがない。

一方でドズルは決して子供嫌いではなく、それどころかキャスバルやアルテイシアに近付くこともあった。しかしドズルにとって残念なことその二人の子供の方が怖気づいてしまう。それにドズルのできる遊びは木の棒を持ったチャンバラ遊びなどの体力勝負のものであり、さすがに小さい子供相手では適切ではない。

キシリアはその時々に応じて遊びを工夫し、二人の子供を飽きさせることがなかった。

快晴の日には庭で花飾りを作り、雨の日には部屋でパズルなどをしたものだ。

そしてキシリア自身もそれを苦にするどころか楽しむことを忘れない。

ある時、庭のブランコを使ったこともある。気持ちのいい日差しの中、キヤスバルとアルテイシアを交互に膝にのせて。

一度はキシリアが調子に乗って、地面をぐいんと強く蹴り、ブランコを水平近くまで漕ぎ上げたことがある。

すると幼いキヤスバルは男の子とは思えないほど怖がりで泣き虫、あつという間に泣き顔になり痛いほどしがみついていたものだ。

キヤスバルはその速さが怖かったのだろう。
その点アルテイシアの方が肝が据わっていたくらいだ。

そんな美しくも儂い思い出の中にいる。

それはキシリアにとっては貴重な、自分もまた天真爛漫な少女でいられた時代の嬉しい思い出でもある。

その頃、ザビ家はもちろん貴族で政治家ではあったが、しかし決して他家より突出したものではなかった。そして家の中には諍いも緊張もない、ただの家族だった。ちよつとばかり個性的な面々だったのは確かだが、仲が悪いことはない。

それどころかキヤスバルのいるダイクン一家、おまけにラル家とも仲良くしていた、そんな時代が確かにあったのだ。

その過去に浸っているのもキシリアの一面である。
ただし、いつまでもそうしていることはできない。どんなに心に苛烈な負担を強いても現実には立ち戻ることが必要なのだ。今はジオンという一国を全面的に背負うキシリア・ザビなのだから。

「だがキヤスバル、ザビ家に復讐を企んだとしても無駄だ。この私に謀略戦を挑む？ 勝てるはずなどあるまいに。私の目をかいくぐり、今の情勢を利用し、藁をも掴む思いの貴族たちを取り込もうとして

も、甘過ぎる。それが分かっているにもか……」

だがここで、ふと頭をよぎることがある。

さつきまで会話をしていたコンスコンのことだ。

「そうだ、コンスコンを見習え。下らぬ謀略など忘れてどうかそうしてくれ。あ奴は出身や過去はどうであれ、それを笑い飛ばし前を向き、常に信義と愛国で動いている。おそらく正しきを尊ぶから人としての道を間違えたりしないのだ」

キシリアも馬鹿ではなくコンスコンのことをしつかり見ている。

ただコンスコン本人にそんなことを言わないのは、褒めるよりもかからかって遊ぶ方が面白いからだ。

「そしてコンスコンは傍から見ても悔しいくらいドズルの兄者と固い絆で結ばれている…… キヤスバル、お前はそういうになれないのか。本当に無理なのか、なあ、キヤスバルよ」

その頃、俺は全然関係ないところで忙しくしている。

このズム・シティでできるだけ早く片付けるべき用事があるからだ。

一つは地球表面から連れ帰った何人かの者たちに安住の場所を用意しなくてはならない。これは絶対だ。せつかく連邦のオーガスタ研究所やムラサメ研究所から解放したのに宙ぶらりんでは意味がなく、それらの者たちに申し訳ない。

まずはオーガスタから連れてきたロザミア・バタム、これはサイド3内でしばらく保護観察に置かれ、そして同時に治療を受けさせなくてはならない。未だ不安定な精神が落ち着き、記憶が統合されてまともりがつくまでは必要なことだ。

とはいえ生活自体はかなりの自由が許される。それには街を出歩く楽しみさえ含まれる。

第一その監察官というのがあのスベロア・ジンネマンに指定されたのだから世話はない。ロザミアにジンネマンは温かい普通の家庭というものを教え、きつと良い方へ進むだろう。俺としては、願うこと

ならジンネマンの娘として確立されて欲しい。むろんロザミアが真実の過去を思い起こせたらいいのだが、その可能性が限りなく低いのなら、いつそのことジンネマンの娘でいいじゃないか。それで心身ともに安定したらきつと幸せになる。

そして次に、リタ、ミシエル、ヨナのいたずらっ子三人組はまとめて戦災孤児施設行きだ。

多少は貧乏な生活になるかもしれないが、少なくともオーガスタにいた頃のような「研究」をされることはない。いたって普通の子供扱いだ。

実際、そこで三人は非常に満足らしい。衣食住のグレードなんかよ、三人が共にいられるということが当人たちにとって最大の関心事のようだった。

最後にムラサメ研究所からのフォウ・ムラサメのことである。

元が素直な性格なのだろう、記憶の消去が完全にされていて、そのためかえってロザミアのような不安定さがなくなっている。

記憶を無くし、筋力や反応性に優れていること以外は穏やかな普通の少女である。いや、更にいえば意外に器用かつ頭も良かった。

紆余曲折の末、民間協力員というややこしい身分にして俺の艦隊に残ることになった。当面はセシリア・アイリーンの下で見習いをする。

それには理由がある。かつてのフラナガン機関の蛮行によって、ジオンはそういった特殊な人間へのイメージがあまり良くなく、ならば下手に風当たりが強い場所に置くより俺の艦隊にいるのがいいと判断したからだ。コンスコン機動艦隊の中ならクスコ・アルやダリルといった似たような境遇の者たちがいる。

さあ、ここまでではいい。

俺のすべきこと、もう一つはかなりの難題になる。

第九十七話 アクシズからの客

俺の抱えている問題、それはMS戦力のことである。

是非とも解決しなくてはならない大きな問題なのだが光明が見えない。

今現在、乗り手を選ぶのが難点ではあるがジオンMS最高性能を誇るアクト・ザクは失われてしまった。もはやガトーを含めたエースの乗るべきMSが無くなってしまっている。それは直接的には地表作戦で勝利を得た代償ともいえるが、いずれはこうなると分かっていたことだ。しかも俺の艦隊ばかりの問題ではない。デラーズ艦隊のラカン・ダカラン、キマイラ隊のジョニー・ライデン、それぞれのエースの乗るアクト・ザクも近いうちに稼働不可になるのは明らかだ。

その他のエース機、シヤアのゲルググJだけはベースがゲルググであるだけに補修部品はかなりのところを流用できるのだが、それでも有限なことは確かである。

これはジオン全体の戦力からすれば由々しき問題になる。

エースクラスのMSパイロットにその能力を発揮してもらわなくては影響が大きい。直接的な戦闘力以外にも全体の士気が低くなってしまう。そして何より艦隊司令官級に対し、その戦術選択の幅を狭めることになり作戦立案においてかなりの負担を強いる結果になる。

エースの乗るにふさわしいフラッグシップMS、その高性能MSをどう調達するか。

既存の改良で何とかできるのか、あるいはこれから新規開発をするのか、そもそもどうやって無理なのか、そろそろはつきりさせたい。だが実は俺がそんなことを考えていても仕方がない。

一番ふさわしい人物に聞くしかないか。

すなわちジオンのMS開発を一手に担うマ・クベ少将のところへ相談に行くのが早道である。

俺は技術開発部にいるマ・クベ少将に連絡をつけたところ、面倒くさがるどころか歓迎してくれる様子だった。しかし、なぜか不思議な

ことにしっかりと訪問日時を指定してきたのだ。

「妙だとは思いますが、俺はその時間に合わせ技術開発部へ向かった。」

「ここで共に連れて行っただけがケリイとクスコ・アルの二人だったのは、それ以外の組み合わせにしようとする色々とややこしそうだったからだ。特にガトーを絡めるとガトー本人の問題ではなく取り合わせに考えることが出てきてしまう。俺も妙な気苦労をするものだ。」

「そして俺はマ・クベ少将のオフィスへ入ったのだが、意外な人物が見えたではないか！」

「あつ、これはマハラジャ・カーン准将！ お久しぶりです！」

「これは俺にとつて思いがけない。」

「本当ならマ・クベ少将のオフィスなのだから、足を踏み入れれば真っ先に白磁の壺でも見ることになるのかと思っていた。いつもマ・クベ少将はずらりと並べた大小さまざまな壺を見せつけるのが普通だからである。まあ、本当なら見せるだけでなく壺の説明まで延々と語りたいたいのだろうが、どうせそれを聞いても俺は分からない。第一見た目の違いも分からない。だからマ・クベ少将には残念だろうが俺は下手に話をそつちに振り向けることは避けている。」

「まあしかし、マ・クベ少将が白磁の壺を愛好すること自体はおかしなことではなく、心情を理解もできる。」

「スペースコロニーにおいては育つのに何十年もかかる木材は超高級品だ。金属なんかとは比べ物にならない価値があり、高値で取り引きされている。それを家具などに加工して使うならともかく、惜しげもなく窯で燃やして焼き物を作るなど非現実過ぎてできるはずがない。つまり白磁の壺は芸術的価値以上にスペースノイドにとつては地球で作られたモノという象徴でもあるのだ。」

「それはともかく、オフィスには今、マ・クベ少将とそのウラガン副官の他に先客がいた。」

「俺が思わず声を上げてしまった相手、それがマハラジャ・カーン准将である。」

俺よりかなり年齢は上で、当然のように軍歴も長い将である。戦いでは特に守勢で粘り強いことに定評があり、良将と言われる。

だがマハラジャ・カーン准将の何よりの特徴はもう一つの立場を持つことだ。何とサイド3六大家の一つカーン家の当主でもある。

だから貴族同士の交流で、俺がセロ家にまだいた頃、幼児から少年時代までも知られている。園遊会で幾度も会っていたわけだが生気な少年とでも思われていたのではないかな。それ以下でなかったことを願いたい。俺の方では少しばかりしか憶えていないのだが、マハラジャ・カーンは謹厳過ぎてちよいと苦手なオツサンというイメージなのである。

「おお、これはコンスコン大将、こちらも会えて嬉しい」

そう言つて手を握られる。マハラジャ・カーンは貴族らしからぬ裏表のない笑顔だ。

俺の方では「アクシズからいつ戻られましたか？」という言葉を飲み込んだ。それは先日、キシリア閣下から、ジオン六大家の動静を確認するという政治的意図のためカーン准将をわざわざアクシズから呼んだと聞かされていたからだ。

俺の内心を知つてか知らずかカーン准将の方からそれに触れてきた。

「いや、驚かれるのも無理はない。実はキシリア閣下から呼ばれてサイド3に戻つたのだ。やはり遠いな。高速巡洋艦でも八十日かかってしまったよ。娘などはせっかくサイド3からアクシズに向かつてきていたのに、到着直前とんぼ帰りになつてしまいいささか機嫌が悪い」

その言葉を聞いて、俺はあろうことかちよつとした頭痛を自覚してしまつた。何ということだろう。

実はこのオフィスに入った途端、体調が悪い感じはしていたのだ。そしてマハラジャ・カーンは一人でいたのではなく、横にもう一人少

女を連れていたのは分かっていたのだが、そちらを無意識に見ないよう
うにしていたのかもしれない。それが体調不良の原因と感じとって。
しかし今、マハラジャ・カーンの言葉によってその少女をまともに
見た。

そして頭痛に見舞われたというわけだ。大したものではないのだ
が、シヤア少将と一緒にいる時に感じるものとはほぼ同質のものであ
る。

その少女、マハラジャ・カーンの娘はまだ十二歳くらいなのだろう
か。

なぜか着ている服は子供服とは程遠い。深い赤紫色とその同系色
だけでまとめられていて、形もやけにぴっちりしたものだ。そのため
に痩せているのがいつそうはつきりして小さく見える。

だが何よりも先にピンクの髪が目を引く。切りそろえられたピン
クの髪がちよつとばかり変わった印象を持たせている。

その少女は俺に対し普通に挨拶しようと口を開いた。

しかし思いがけず、俺の隣にいたクスコ・アルが先に声を上げた！

「ああっ、ハマーン！ ハマーンじゃないの！ ここで会えたなんて
…… 無事だったのね。良かったわ。それが分かって本当に嬉しい」

「…… フラナガン機関では世話になった。改めて礼を言う」

「そんなのいいのよ。それよりもあなたの無事をララアにも教えてあ
げないと。きつと喜ぶわ」

「…… まあ、それは構わないが」

思わぬことに俺は傍から見ているだけだが、ちよつと違和感があ
る。

このハマーンという少女はなんだか硬い。

会話に使う言葉が大人びているのだ。そのため少女である見かけ
と合わない。

それ以外にも妙なことがある。

クスコ・アルの方はこの思いがけない再会を単純に喜んでいるよう
だ。

俺も前に聞いたことがあるような気がするが、クスコ・アルはフラナガン機関でララアとハマーンという可愛い妹分がいると言ったような。おまけにその妹分は二人ともとんでもなく強力なNTだと。ただしこの場で見る限り、クスコ・アルの純粹さと違い、ハマーン・カーンの方はそれほど無邪気な表情ではない。

子供にしてはすっと切れ長の目をしているのだがそれを引き絞ったままなのだ。そこに笑みはなく相好を崩したりしていない。

俺は想像するのだが、おそらくこの娘はフラナガン機関であまりいい目に遭わなかったのだろうな。だからクスコ・アルに対して悪気はなくとも、フラナガン機関を思い起こしてしまうため、戸惑ったというところだろうか。

しかしまあ、俺が言うのもなんだが、クスコ・アルはそんな空気を見事なまでに読めていない！

クスコ・アルはやっぱポンコツなところがある。そういう部分を含めてクスコ・アルの良さといえばそうなのだが。

「クスコ・アル大尉だったかな。娘がよく話してくれたから知っているが、大変お世話になった。なに、娘の言い方は気にしないでくれ。昔からぶつきらぼうで分かりにくい娘だが、君に会えて本当は喜んでるのだ。その証拠に表情が2ミリほどいい方向に動いている。親である私には分かる。本当にどうでもいいときには、この俗物、とでも言わんばかりな表情になる」

俺と同じことを考えたのだろう、マハラジャ・カーンがそう言っ取りなしてくれた。

その時、この場にあつてしばらく傍観者でいるしかなかったマ・クベ少将が口を挟む。

「……その辺でよろしいかな。ここで旧交を温めるのも結構だが、元々このセッティングを行ったのは私だ。コンスコン大将、マハラジャ・カーン准将、ご両名にいてもらえるようにわざわざ合わせたのだ。それには重要な意味がある」

ここから本題が始まるらしい。

「まずは現状の認識が先に来るだろう。それを理解する上で私がまとめたところを先ず言わせてもらう」

俺がMS調達の相談をするためにマ・クベ少将を頼ってジオン軍技術部に来た甲斐があるのか。

しかし、俺の方はそういう明確な用事があつて来たのだが、一方でマハラジャ・カーン准将はどうして？ マ・クベ少将や技術開発部の関わりが分からない。

まあ、焦ることはない。先ずはマ・クベ少将の言葉を待とう。

第九十八話 開発の妙

そこからマ・クベ少将は淡々と語り続ける。

誰が相手でも、何の内容でも、口調が変わらないというのはある意味凄いいことだ。

「ジオンにおけるMS開発は残念なことに手詰まりにあった。なるほどガルバルディ改とケンプファー改の生産は皆の努力により順調に進み、間もなくジオンの主力MSといえるほど置き換えられるだろう。比率としてはガルバルディ改が3、ケンプファー改が1といったところか。先頃の捕虜交換で戻ってきた兵、コンスコン大将が地球から救出してきた兵、彼らにもそれら新造MSを与えることができる。その意味でMS戦力の底上げは嬉しいことに予定通り進んでいる。しかしながら次が見えないのだ」

いつもながら声のトーンは平板、うっかり聞き逃しそうになるが、内容的には重大なことを含んでいる。

「今のMSをチューンナップ、あるいは小改良を施してもすぐに性能に限界がきてしまう。そこを何とかするため、小手先ではなく基本設計から抜本的に変えないといけないが、それが分かっても手を付けられなかった。ジオンの技術部にはそんな余裕はなかった。ただでさえ少ない技術者もじつくり落ち着いて研究してもらうことはできず、生産現場の方へ回してもらうしかなかったからだ。結果的に今あるジオンMSのベースはどれもこれも半年前からそのままである。ジオンの開発状況がそんな足踏み状態なのに、その一方で連邦はどうか」

そんな比較は聞かれるまでもなく、答えなんて明らかだろう。

「悔しいことに連邦の方は着実に進歩している。連邦は量産汎用機タイプのMSをジムと呼んでいるが、それは主にコストと生産設備の流用を示すだけのこと。機体性能上の縛りはさほどない。そこで連邦は膨大な開発リソースに物を言わせ、複数の開発チームによって幾つもの新しい設計を同時にこなし、アイデアを試しつつ、その中から使

えるものを選ぶ方式をとっている。予算によって変わるかもしれないが、これでは進化自体はあきれるほど容易だ」

ああ、やっぱりそうなるだろう。

連邦はジオンと生産力も人的資源も、なにもかも地力が違う。

その差は絶望的に大きい。

「そしてとどめに連邦にはガンダムという超々高級機の存在がある。これを目指すべき一つの性能極大点として、開発のリファレンスに使える利点も大きい」

それを聞くと俺もなおさら気分が落ち込む。

確かにそうなんだ。

ガンダムは戦って強いばかりでなく、その存在自体が連邦のMS開発でも役に立つ。

これではジオンは勝てない。

エース機どころの話ではない。それどころか、せっかくのガルバルディ改もケンプファー改も、数ばかりか性能面でもいずれは逆転されその後は置いていかれる一方になるのだろうか。

「ここまでの理解はよろしいか。だが今、ジオンMSの更なる発展の芽が出てきたのだ」

少しばかり驚きがある！

マ・クベ少将の話は今までジオンの憂うべき現状のことだったのに、それと違うことがあるのか。

「え、発展の芽?!? そんなものが、どこに」

「まず一つ、コンスコン大将が地球表面から持ち帰った連邦の技術データ、これが大きい。それらの中から公平な目でジオンより優良な技術を細かく選び出し、置き換えていくというアプローチを最初に考えた。ただしそれは言うほど簡単ではないのが分かった。やはり基本の設計思想の違い、そして今までの流れというものが大きく、一部を取り入れた継ぎはぎは現実に難しい」

「そうなるか…… マ・クベ少将、ジオン技術と連邦技術を融合させて

まとめるのは簡単ではなかった、ということか」

「その通り。具体的なところを上げれば関節駆動やエネルギー分散構造などは変えようがない」

「…… マ・クベ少将、一ついいかな。それならばジオンMSに連邦技術を入れるのではなく、連邦MSを丸ごとコピーし、ここで造ればいいのではないか。つまり持ってきた技術データからジオンでもガンダムは造れないのか」

「……」

自分でもいいことを思いついた。そう、こつちもガンダムを持つんだ！

「そうなれば凄いぞ。ジオン製のガンダムさえできれば！」

「コンスコン大将、それは努力しても無理と思われる。ガンダム製造に要求される部品の精度、スペックは文字通りケタ違いに高く、今のジオンの無理をした工業生産では絶対的に及ばない。連邦さえたじろぐほどのコストを敢えて度外視したとしても、ガンダムは残念ながら分厚い工業集積のある連邦でしか造れない」

「なるほど。分かった。それなら仕方がない。素人くさい発想で申し訳ない」

やっぱりそうなるのか。そうはうまく行かないようだ。

「しかし話はここから朗報になる。連邦技術をもっと大きなブロックごとなら置き換えられる可能性もある。それにはスラスタや武器アタッチャーなどいくつもあるが、ジェネレーターが一番分かりやすい。今まではジオン製ジェネレーターの方が全体的に高性能だったが、連邦の次世代MS、あるいはその次になればジオンを越えてくる。エネルギー出力の点でもそうだが、一番は効率がいい分冷却が簡単になり、結果的にかなりの軽量にできる」

「MSのパワーの基になるジェネレーターの性能で連邦に逆転されてしまうということか、大ごとだな…… だがそれが朗報とはどういう意味だ？ いやそもそも次世代のことなどどうして」

「それこそが今回判明した核心部分といえるもの、連邦の最新MS試作機はジムⅡということが分かったのだが、実はそれどころではな

く、設計段階ではその次、更にその次まで存在するらしい。さすがに連邦だ。しかしその技術情報までこちらが手に入れてしまった。とすれば、連邦にはまだ存在しないジエネレーターまでジオンが先に実用化してしまえる、そうすれば優位に立てる」

「マ・クベ少将、そういうことだったか。素晴らしい。そんな方法で連邦の一步先に行けるとは…… だがしかし、肝心の基本設計は変わらないでも大丈夫なのだろうか。初めの話と矛盾するように思えて仕方がない。ジエネレーターを進歩させることはともかく、今の設計のままではいけないということではなかったか」

「それは当然の疑問、しかしその答えはアクシズにあった」

ここでマ・クベ少将はマハラジャ・カーン准将に目を向ける。話がアクシズのことになったので説明の続きを振り向けたのだろう。

それに応じてカーン准将が口を開く。

「では私から話そう。アクシズは皆も知っている通り、一大工業拠点ではあっても軍事拠点ではなく、そしてもちろんMSには全く関係ない。しかし、MSの原型とも言うべき有人作業機械ならばどこよりも多く、またその技術ノウハウは豊富にある。いや、それらの頑健さとメンテナンス性の良さならば軍事用のMSさえ上回るレベルと自負している」

アクシズ、それは火星軌道よりやや外側に存在する小惑星帯の基地である。

宇宙世紀が始まり、本格的にスペースコロニーが建設されるようになると地球から資材を運ぶことは土台無理な話だ。直径6kmのコロニーの重さなど計り知れない。それは月表面から調達することになるが、それでも掘削や月重力という問題が残る。

そのため小惑星帯を資源として利用する案が浮上した。

浮かんでいる岩石や氷を直接使う。その方法を使ったからこそ短期間で百以上のコロニーを造ることができたのだ。宇宙世紀はエネルギー資源を木星から、建設資材は小惑星帯から、それぞれ調達することで支えられるようになった。

小惑星帯にたくさん採掘基地が造られた。アクシズもそうして始まった小さな基地の一つだったのだ。

そんな中、アクシズは工業を発達させていき、精錬や部材生産までも行い始めていった。すると、コンパクトにしてから輸送できる分、コストが下がり他より優位に立てるのは自明である。この好循環が回り始めると雪ダルマ式にどんどんアクシズへ集約されていき、なおさら発展していく。

今では各種大規模工場の他、従事する住民のための立派な住居施設、おまけに娯楽施設まで作られコロニーに準ずるほどになっている。

そして何より、カーン准将の言う通り鉍石採掘のための大パワーの作業機械を使うだけではなく何と自前で開発する能力を持っている。

政治的には、アクシズは事実上サイド3の管轄にある。

その戦略的重要性は言うまでもない。サイド3のジオン公国宣言と同時にそこへ実力のある将を送り込んで防衛を図る必要があった。まあ、結局のところ連邦はアクシズまで遠征艦隊を送ってくることはなかったが、それは連邦もジオンも長期戦略をとらないという推移によるものであり、正に結果論に過ぎない。

そしてアクシズに置くのは能力だけでもいけない。

ジオン本国との距離を考えると下手に独立叛乱を起こされたらたまらない。そこでザビ家と特に交友関係が深いカーン家の当主、忠誠心の厚いマハラジャ・カーン准将がずっと赴任していたのだ。

「そのアクシズへ到着した一団がいた。以前ペズン計画に携わっていたMS開発技術者たちが、ジオン本国に居づらくなったためにやってきた。ハマーンが来る少しばかり前のことだ。彼らはアクシズ独自の技術蓄積に興味を持ち、さっそく新たな開発に夢中になっていたの好きにさせている。先ほど通信で確認したところでは、かなりの進展と成果が見込めるようだ」

何ということだ！

かつてのフラナガン機関に併設されていた研究所のことか……

その名をまたしても聞くことになった。俺がやった行動が回りまわってそんなことになっていたのか。

「具体的には新規開発MSのコンセプト策定と性能目標までは決まっている。ペズン計画同様、ドム後継にドライセン、ギャン後継にジャジャ、ザク後継にザクⅢという仮称まで」

「…… そこまで …… 凄いな」

「まあしかし、期待させて何なのだが、達成すべき技術ハードルは各部に渡ってとんでもなく高い。つまり今の技術でまとめるのではなく、未来においてできるだろうことを盛り込んでしまっているからだ。開発という言葉さえちよつと語弊があり、いわば紙に描いた理想のよなものと思えばいい。そのため、無数にあるハードルを全てクリアし、きちんと実機にできるのはどんなに頑張っても年単位で先になつてしまう。一番容易に思えるザクⅢでさえも」

「カーン准将、やっぱりそうだろうな。全く新しいMS開発など簡単なことには思えない。ではこの戦争には全然間に合わないということか……」

「そのはずだった。だがしかし、ここで連邦の技術、スラスタや高性能ジェネレーターを利用できれば他のところに注力でき、もっと早く形にできる可能性が出てきた。努力次第では半年から一年後というくらいに。もちろんやつつけ仕事になり意図した性能にとても及ばないだろうが、曲りなりに形にだけは」

「なるほど！ 簡単に言えば、ジオン技術に連邦技術を取り込み、その上でアクシズ技術でまとめ上げるという方法か。それで一気に開発期間を短縮、いやあそれはいい」

「繰り返し言うが、想定したスペックにはとうてい及ばない……」

「それは構わない。なに、ザクⅢじゃなくともザク2. 5でも、なんとすればザク2. 1でもいいじゃないか。今のジオンMSより少しでも性能が上がるのならば。それに生産数なら試作程度でも先ずは御の字だ。最低限、エースが乗る分さえあればな。直ぐに開発を進めてほしい」

それは奇跡だ。

いくつかの条件がピタリとはまり、ジオンの新しいMS開発が可能になっているとは。

ただし半年以上後というのが微妙に悩ましいが、それは戦略次第ということになる。ジオンも連邦も今すぐ決戦はできない。いずれ決戦は行すが、その時期はジオン主導で決めるつもりだ。

とにかく朗報だった。マ・クベ少将とカーン准将の話聞いた甲斐があった。

「今のマハラジャ・カーン准将の話にいくつかの補足説明を加えたい」「マ・クベ少将、それは何だ」

「先ずは一つめ、これはMSのことではないのだが、アクシズでは面白いモビルアーマーが造れるらしい。既存のモビルアーマーとはコンセプトが違い、その延長線上というよりはビッグザムのマイクロ版のようなものだ。単座で高機動も可能、モビルアーマーに対する天敵であるMSとも十二分に渡り合える仕様だ。先に送らせてもらったヴァル・ヴァロよりも性能は上になる。コンスコン大将が気に入れば設計から試作へ進めよう」

「な、なに!! ヴァル・ヴァロよりも良いモビルアーマーだ?!」

そう叫んだのはケリイだ。

おいおいおい、横から口を出すだけでもダメなのに、将官相手に敬語をすっかり忘れてるよケリイ。

だが気持ちは分かる。

モビルアーマー乗りである以前に、こいつはメカにこだわり、いやメカをこよなく愛する男だからな。新しい設計のモビルアーマーの話が出れば思わず反応するだろう。

「そうだ。アクシズでそれを実現できる目算がついているとのことだ。名前は今のところノイエ・ジールと予定している」

「ノイエ・ジール……」

なるほど、それは楽しみだ。乗るのはやっぱりケリイ・レズナーになるだろう。

試作をしてもアクシズから持ってくるまでに時間がかかるだろうが、これからの戦いに光明になるかもしれない。

第九十九話 意外な火種

そこでマ・クベ少将の話は終わることなく、更に続いている。

「コンスコン大将、その次の話に移らせてもらう。過去のペズン計画の中でドム系機体は幾つかあった。しかしながらドワツジは陸戦用のため凍結、リック・ドムⅡは満足できる性能ではないため却下、ドワスはそこそこの性能になる予定だったがやはり却下している」

「確かそうだった気がする…… しかしそれは昔の話ではないかな、マ・クベ少将」

「わざわざこの話を持ち出すのは意味がある。地球降下作戦でコンスコン大将のところのサイコ・ドムが成功を収めたと聞いている」

「ん、それは事実だ。ダリル・ローレンツ少尉の活躍は凄いもので、正直驚いた」

「その復活を考えられてはどうか。機構の違うガルバルディやケンプファーにサイコ・リユース・デバイスを新たに組み込むのは不可能ではないが手間がかかってしまう。しかし、ベースが同じドム系機体なら、それを組み込むのは比較的容易になると思われる。つまり試作途中までいって放置されているドワスを利用できないだろうか。それが使えれば、ドワスの基本性能がゲルググに遜色ないものであるからには、単にまた余っているドムに組み込むよりよほどいい。その可能性を含めカーラ・ミツチャム教授に伝えてもらいたい」

「そういうことか！ ではまたダリルがMSで活躍できるということに。しかも今度はサイコ・ドワスとして、よりいっそう強く！」

それはいいことだ。ダリルはサイコ・ドムが失われて落ち込んでいたように見えたからな。やはりMSで戦いたがっているのだろう。地球でまみえたあのガンダムへの雪辱をしたいということかもしれない。

「そして最後にもう一つある」

「まだあるのかマ・クベ少将。なんだか凄いことになってきたな」

「今度はエルメスの話になる。今現在、エルメスにはビットが搭載され、パイロットはそれを操って敵にオールレンジ攻撃をかけるものだ」

「確かにそうだ。こここのクスコ・アルもビットを5つは操れる」

「しかし、ここでビットとは違う概念のものが出てきた。それをファンネルと呼んでいる」

「ファンネル？　確かに聞いたことがない」

「ファンネルとはそれ自身にジェネレーターを持たず、本体からの充電で動く小型のものだ。それだけならビットの劣化版ともいえるが運用方法がまるで違う。ビットのように精密に操って敵を狙撃するのではなく、多数を群れとして使って弾幕を張る。これだとだいたいところで操ればよいので、総合的な火力が上がるのにむしろパイロットの負担が減ると見込まれる」

「なるほど、そういう使い方をするものか。良さげだな」

「詳しいところは私も門外漢だ。それに関してはカーン准将の方が詳しいはずだ。なぜなら、そのファンネルの可能性を探るため、息女がそのモックアップ作りに協力している」

そしてカーン准将が言葉を添える。

「ジオン本国に来るまで日数がかかった。その間の暇を利用して、このハマーンにファンネルを想定した模型を使い、その群體操作が可能なのかやらせてみたのだ。結果は十分に可能であり、どうやらこのアイデアは実現できそうだ」

「この少女で、それを試した？」

ここに俺は引っ掛かった。

無理だ。

「カーン准将、申し訳ないがそれは受け入れられない」

そのファンネルの有効性なんかどうでもいい、そういう気持ちになっちゃった。

「息女はまだ12歳だろう。そんな者を戦争に協力させるわけにはいかない」

俺だつて本当は言いたくないんだ。マ・クベ少将もカーン准将も全く悪気はないことは知っている。少しでもジオンの旗色を良くするために考えたことなのだ。

むしろ俺がワガママなんだろう。

本当に済まなく思うのだが、やはり黙っていることはできない。

「息女は今は研究の手伝いという程度かもしれない。後は他の者に引き継げばいいということかもしれない。しかし確信を持って言うが、きつとそれでは済まなくなる。ファンネルや、それを使うNT用モビルアーマーなんかが開発されたら、いずれはそれらを熟知した者として使われてしまうに違いない。必ずそうなる。息女は戦いの場に駆り出され傷つくことになってしまう」

カーン准将はさすがに大人であり、反論することなく、俺の言葉を聞いても静かな表情を保っている。

一番分かりやすいのはケリイだった。

大げさにうなずき、どうだ聞いたか、と言わんばかりなドヤ顔ではないか！

うちのコンスコン大將は、そこらにいる戦力しか考えない軍人とはモノが違うんだ、その度量が分かるか、とでも言いたいのだろう。

またしてもケリイに対する好感度を限界いっぱいまで上げてしまったようだが、頼むから後でガトーに話さないでくれよ！

そうになるとガトー君からいつそうキラキラした目で見られることになるじゃないか。

ガトーやケリイ、カリウスといった男くさい連中は正義が大好きで、自分が正義に立っていることを最重要にしているからなあ。

そして意外なことにハマーンという息女もわずか反応していた。

何も言わず動きもしないが、目を3ミリほど大きく開けている。

そんなことを軍人が言ってくるなんて信じられない、という顔で。「カーン准将、努力に水を差すようで心苦しいが、子供が戦場に送られることは何としても避ける。ジオンの依るべき正義を曲げてはいけない。国家が筋を通さなくなったらお終いだ。そのファンネルの話

は、後ほどの検討課題にしておいてもらえらるだろうか」

俺がそこまで話すと沈黙が二呼吸ほど続いたが、マ・クベ少将がそれを引き取った。

「コンスコン大将、そういうことにしよう。さて、話はだいたい以上で終わるが、ついでに連邦側の話もしておいた方がいいだろう。あまり嬉しくないことだが、ルナツーの連邦MSは新型のジム・カスタムへ急速に置き換えられつつある。コンスコン大将は地球作戦で旧型のジム・コマンドとばかり遭遇したそうだが、宇宙での配備状況はそれとは全く違う」

「そうか、そうだろうな。連邦も馬鹿ではなく、きちんと優先順位を考えた配備にしているのだろう」

「更に言えば、これが半年後ともなればまたしても新型が出てきて、それが主力になる可能性が高い。いや、現実と言うべきだろう。それどころではなく、二度以上も新型に置き換わることすら考えられる。おまけにこちらが連邦技術の取り込みを凶っているように、連邦だってジオンの技術を解析して利用しようとしてもおかしくない」

「道理だな。何をどうやっても連邦の進歩自体は止めようがない。オーガスタの開発拠点を破壊しても、研究人員は残っているし、第一データはどうせバックアップしてあるだろうから大した打撃にならなかったろう。おまけにジオンが開発を進めるほど連邦も予算を増やして開発が加速すると考える方が現実的だ」

それでこの有意義な会合は終わる。

カーン准将は娘と、俺の方はケリイ・レズナー、クスコ・アルを連れて戻る。

その終わりにハマーンという娘が振り向きざまに俺のことをずっと見つめていたようだ。

俺が、あの子供に好感度を上げたということなのか？ まさかな。

通路を曲がり、姿が見えなくなる最後の最後まで視線を外すことがなかった。

そこから早くも四ヶ月が過ぎ去った。

しばらくジオンと連邦が会戦を演じることはなかった。

しかしいつでもアクシデントというものがある。えてしてそういうことから戦火が広がってしまうものだ。

今回、それが意外なところから始まった。

中立コロニー、サイド6がその発端になるとは誰が予想しえただろう。

第百話

悲運のメロデー

0080年9月、ここに至る数か月、ジオンとしては地味なことしかしていない。

地球降下作戦のような派手なことはせず、ひたすら連邦側輸送船団を襲いエネルギー戦略を続けていくのみだ。小艦隊による襲撃と逃走、つまりヒット&アウェイを繰り返す。

そろそろ連邦にもジオンのエネルギー戦略がバレていることだろう。

もはや隠すことなく、連邦が宇宙から地球に輸送しなくてはならない核燃料材ヘリウム3に狙いを絞って仕掛けている。もちろん連邦もあれこれ工夫をしながら輸送船団に護衛を付けてくるが、元々輸送の護衛をやり切るのは難しいものであり、どうやっても被害はでてしまうのである。

計算によると連邦に渡るヘリウム3はおそらく二割以下になっているとのことだ。

そこで連邦がどうするか、ジオンは高みの見物をしていればいい。連邦は軍事用の消費を抑えるのか、民間に供給する方を減らしたり統制をかけたりののか、そこは分からないがいずれにせよ日干しにされつつある影響が出てくるはずだ。

そして戦略的なことではもう一つ、ジオンは他のスペースコロニーへの施策を180度転換している。

これを進めているのはキシリア閣下だ。

今、ジオンは外政内政共にキシリア閣下の政治姿勢を反映している。そして外政面で最も変化したのはジオン以外のスペースコロニーとの宥和姿勢である。

ギレン総帥時代とは全く逆になる。戦争初期、ギレン総帥の戦略に基づきジオンはサイド1、サイド2、サイド4を攻撃し無力化した。

それらが地球連邦の方に付き、ジオンと敵対してくる恐れがあった

ためと言われている。

確かにそれは多大なリスクであり、戦争途中でジオンを包囲してこられたらたまったものではない。そうなればジオンが連邦と継戦することは絶対に無理になる。更に重要なことには、スペースノイドの主権奪回というジオンの主張が空文になってしまっているのではないか。

その理屈にどのくらい真実性があつたのかはもはや分かりようがない。ジオンの勝手な被害妄想、あるいは八つ当たりだったのかもわからない。

それらのサイドがジオンと同時決起どころか味方してくれなかったことだけは事実なのだが、他の事実は知られず闇に葬られた。

今、キシリア閣下はサイド6とことさら友好関係を結んでいる。規則を細部にいたるまで守り、通商を続け、ジオンの信頼回復に躍起となっている。

他にもサイド1などに存在する生き残りコロニーへ一転して援助を行っている。

各サイドは歴史がある順にコロニー数が多い。

古くからあるサイド1、2は40近くのコロニー数を持つ。

サイド3は月の裏側に位置し、地球とは遠かったが、逆に月からも小惑星からも資材を調達しやすかった関係ではほぼ同じ程度のコロニー数を持つ。更に言ってしまうとサイド3には密閉型コロニーが多い関係上実質的に使える面積は大きい。これがサイド3の国力の源泉でもある。

その反面、サイド4、5、6はそれぞれ10に満たない程度のコロニー数しか持たず、最も新しいサイド7に至っては完成途上のコロニー1つだけだ。

それにしても各サイドのコロニー数は決して少ない数ではなく、別にそれら全てをジオンが攻撃したわけではなかった。政治的中心、あるいは工業農業の面で重要なコロニーに絞って潰した。そして主要ではない発展途上のコロニーたちは破壊されず、そのまま取り残されている。物理的に多く被害を被ったのはルウム戦役の主戦場になってしまったサイド5だけである。

未だ有人のコロニーも多いのだ。人口が極小ならばそれほど問題にはならないのだが、中途半端に多めの人口を持つコロニーが最も困る。サイド1などには人口一千万のコロニーさえ残されている。そういうコロニーはたいがい完全自給はできず、交易しなければ立ち行かないのだが、今までは戦闘宙域に指定されているので交易に出ていくことすらままならなかった。そのままでは存亡の危機になる。

そこをキシリア閣下が改善していったのだ。

民間船に対し安全な航路の情報を提供したり、緊急で物資の援助をしたりしている。

こういった策が実を結び、ギレン総帥の頃とは違うのだとやっと認識されてきたのだろう。

サイド6では連邦よりの中立姿勢から変化が見られた。

今までは戦争に巻き込まれることからひたすら逃避していた。はつきり言うるとサイド6は連邦に付きたいというのが本音なのだが、ジオンから攻撃されないたためそれをあからさまに言うことはできず、嫌々中立のポーズをとっていただけだ。

それが、ジオンの方を優遇するとは言わないまでも中立からジオン寄りの姿勢に傾いてきて、その議論がなされている。

こんな機会をキシリア閣下が逃すはずはない。

新たな包括協定を結ぼうと画策し、サイド6もそれを受け入れようとしている。

そんな政治的なターニングポイントともいえる重大な節目、最後のダメ押しをするためキシリア閣下自らズム・シティを離れてサイド6に向かった。

当たり前だが今回のサイド6行きは秘匿情報とされ、その護衛にはキシリア閣下の信任厚い海兵隊が当てられた。

キシリア閣下は普段グラナダではなくズム・シティにいて、もはや軍務ではなく政務を執っている。そして麾下の宇宙突撃軍はひと頃よりもだいぶ数を減らしている。もう前線指揮官という立場ではないと自他ともに認識しているからだ。

それで今回海兵隊だけを伴った。

もちろん、そうはいつでも海兵隊は今やザンジバル級リリー・マルレーンを旗艦に艦艇十一隻、MS四十機、全機ガルバルデイ改を備えた強力な隊である。

キシリア閣下の座乗するのも、サイド6への示威を考慮に入れていつものパープルウイドウではなく大型戦艦グワジン級グワリブを使っている。

偶発的な遭遇戦に対する戦力としては充分と考えられた。

そのサイド6への航路を九割まで消化したところで、突如グワリブに警報が鳴り響く！

「れ、連邦艦多数発見!! ゆっくり接近しつつあり、完全にこのグワリブを捕捉しています！」

「慌てるな。先ずは第一種警戒警報だ。それで、多数とはどのくらいなのか？ 正確に頼む」

「マゼラン級五、サラミス級八を中心に駆逐艦十から十五隻！ 大部隊です、キシリア閣下」

「なるほど、そうか…… これは遭遇戦ではなく待ち伏せられたようだ。まあ航路を見破られたわけではなく、私の到着時期だけ見計らったというところか。そうでなければこんなにもサイド6に近い所にはならなかっただろうな」

悪夢に突き落とされたような非常事態でもさすがにキシリア・ザビ、艦橋オペレーターの方を逆に落ち着かせている。

そして頭を巡らし、その背景にまで思考を進める。

「そしてこの戦力から考えれば、ルナツーが私を狙って派遣してきたとしたら少な過ぎる。おそらくサイド6駐留の連邦艦隊が近隣からかき集めて向かってきたのだろう」

「キシリア閣下、いかがでしたでしょうか！」

「もう一度言うが慌てるな。細かい戦術を考えずとも海兵隊に任せればシーマ・ガラハウが適切に動いてくれる。こちらは、ミノフスキー粒子を濃くされる前に救援を頼むのだ。現在ジオン部隊がいるだろう各方面に向けて指向性電波を発信せよ」

キシリアは政略が得意だからといって戦術が下手というわけではない。

その洞察力をここでも活かし、合理的な判断をする。

「そして大まかな方針としてはサイド6の戦闘禁止宙域に逃げ込む方策をとる。見えているだけだが連邦の全戦力とは限らないからな。仮に向こうが頭を使ってもう一段の罠を張っていれば、下手な方向に逃げようとしたらそこへ追い込められ挟撃される危険がある」

「は！ 進路再計算いたします」

「何とかサイド6へ辿り着く。それには現在対面している連邦部隊に勝つ必要はなく、いなしながら隙を伺えばいい」

そしてオペレーターに聞こえないよう小さな声で独り言を漏らす。

「ふふっ、簡単なように言ってしまったが、果たしてうまくいくか……」

シートに座って足を組み直す。その姿だけ見れば落ち着いた姿だ。

「これは難しい…… 私にコンスコンのような戦術の才があればな。奴ならこんな戦い、造作もないだろうに。いや、あれの方が異常か」

リリー・マルレーンでも同じような判断をしている。

「ここまで来て連邦が…… MSは全て発艦準備！ あたしも出るよ！ 先手をとって叩き、ちよつとばかり怯ませてやればいい。それができたら距離を取りながらグワリブの防衛に徹する。絶対にキシリア閣下を守るんだ」

こうして戦いが始まる。

連邦艦隊は定石通り数の優位を活かし、やや散開した隊形をとりつつジオン側の頭を押さえにかかっている。

先ずは長距離砲戦が主になる。ビームの光が幾度も応酬される。

しかしそれを続ければ艦数の少ない方が絶対的に不利、そのジオン側としては流れを断ち切る必要がある。

そうでなくともシーマ・ガラハウは得意なMS戦に持ち込む気でいた。

普段は砲戦の真つ最中に出たりしないのだが、メガ粒子砲の合い間を縫い、次々とMSを発艦させていく。それを見て驚いた連邦側も慌てて迎撃用のMSを出してくる。

たちまちMS隊同士が接触するが、先手を取った海兵隊MSがそのまま殴り込む。相手に斉射の体を取らせず強引に格闘戦に持ち込むのだ。

ジオンのガルバルディ改と連邦のジム・カスタムが戦う。

性能と士気ならばジオンが上、数ならば連邦が上である。

「チィ、こっちは四十、連邦は九十、笑つちやうねえ。いつもおんなじパターンじゃないか。数で不利なのはもう慣れっこなんだよ！」

そう言いながら連邦機を叩き落としていく。シーマ・ガラハウの技量は確かだ。

「いいかいみんな、孤立して囲まれることだけは避けるんだ。ガルバルディのセンサー範囲は連邦MSなんかより広く、有利な態勢をとれるはずだ。そうしながらもうちよつとだけ粘っておくれ。そうすれば連邦は根負けして引つ込むだろうさ」

その通り、お互い損害を出していったが、連邦MSの方が先に撤退していった。

この海兵隊の強さを見れば連邦側も慎重になるだろう。

その後、シーマ・ガラハウは予定通りグワリブ付近に移動してその直掩につく。必ず始まる第二幕、それに備えるのだ。海兵隊MSの半分以上は連邦艦隊の攪乱のために向かわせたが、自分はここに陣取る。

連邦が砲戦だけに頼るとは思えない。隙をみてMSを突入させてくるだろうが絶対に通しはしない。必ず守り切ってやる！ キシリア閣下を護る最後の盾になるのだ。

だがしかし、戦局は思わぬ方向に動いてしまう。

グワリブの命運は尽きようとしていた。

第一百一話 虚空のキシリア

一方の連邦艦隊である。

小手調べの第一幕でやや痛手を被った。しかし、再編とダメージコントロールを終え、再び接近する。またしても定石を外すことなく同じような隊形で仕掛けていく。

もしもこの連邦艦隊の指揮官がガデイ・キンゼーやエイパー・シナプスだったらこうはしなかったろう。必殺の戦術を編み出していたはずだ。

それなら早いところキシリア・ザビの命運は尽きていたに違いない。

しかし今の指揮官はそこまでの戦術能力はなかった。

オットー・ミタス中佐、サイド6周辺宙域を担当していた指揮官である。

決して愚昧ではなく実績もあるのだが、苦労性の性格が災いして判断に甘いところがある。

今回の作戦は元々オットー・ミタスが主導したものではなかった。サイド6に駐留している連邦情報将校がキシリア・ザビのサイド6訪問という情報を手に入れるや否や、その殺害を緊急要請してきたのだ。連邦情報部はサイド6における政略戦で旗色が悪く、その失地回復に血眼になっていたからである。

オットー・ミタスは当初反対したが、連邦情報部は強硬であり、押し切られた。

それには意外なところからの圧迫も関与している。何と、部下からの突き上げも大きかったのだ。

以前の戦いでコンスコン機動艦隊がサイド6辺りの連邦部隊をあっさり蹴散らしたことがあった。その残存艦の艦長たちが作戦遂行を強く主張してきた。

「かつてジオンのコンスコン大将に無様に負け、奴らが高笑いをして去って行くのを指をくわえて見ているしかなかった我らです。今ジ

オンの重要人物が来るのなら、それを叩いて雪辱を果たしたい！
オットー・ミタス中佐、どうか出撃の許可を願います！」

この声に押され、オットー・ミタスは今回の作戦に踏み切っている。
ただしやるからにはきっちり戦力を糾合するのは当たり前だ。

むろん作戦行動前にルナツーに問い合わせている。

グリーン・ワイアットからの返事は、「臨機応変に行い給え。キシリア・ザビの殺害が可能なら積極果敢に戦い、そうでなさそうなら無駄に損害を出す前に撤収するのだ。ルナツーからの応援はとうてい間に合わない。ミタス中佐の判断に期待する」、というものだった。

戦いの第二幕が始まる。

それもまた砲戦からである。

ジオン側は再び少数で劣勢を強いられながらもうまくいなし、連邦側が全面攻勢に出るきっかけを掴ませないでいる。

いったん膠着状態になったように見えているが、ここでシーマ・ガラハウの予想が当たってしまう。

死角をつくように回り込み、連邦MSの小隊がグワリブ目がけ突入してくる。

「やっぱり来たのかい連邦のMS、あたしが遊んでやるよ！ もう戻しやしない。今度は地獄への片道切符、海兵隊隊長シーマ・ガラハウからの贈り物だ。ありがたく受け取りな！」

シーマ・ガラハウの優れた技量によってジム・カスタムが墜とされていく。

ガルバルディ改が右に左にビームサーベルを閃かせ、一機、二機と斬っていく。

こうしてグワリブには決して取り付かせない。

シーマ・ガラハウはなんとも見事な戦いを見せるが、ただしそれでも無傷というわけにはいかなかった。ジム・カスタムたちはシーマの鬼神のような戦いに恐れを感じながらも数を頼みに攻撃を続けたからだ。

「ふん、まだまださ。ここで諦めちゃ、ガトーに笑われるさね。ガトー

だったらこんな戦い、造作もなく勝つんだろう。それなら横に立ってやると決めたあたしだ。ここで負けてるわけにはいかないんだよつ！

三度も連邦MSを撃退し、闘志は衰えることを知らないが、しかしそれでカバーできない部分が増えてしまう。

損傷が少しずつ刻まれていく。

ガルバルディの重要コアは守れても、手や足、肩に直撃を食らって性能レベルは確実に落ちていく。

時間ばかりが過ぎていくが、そうになると焦れてくるのは連邦の方だ。未だMS隊からの吉報は届かない。

砲戦で優位に立ち、おまけに攻略には充分過ぎると思われる数のMSを送り込んでいるのに埒が明かないとはどういうことか。あまりに時間がかかると、連邦側には応援が無いと分かっているが、ジオンの方にはひよつとしたらそれが有り得るのだ。

これ以上粘られたらかなわない。

連邦側の焦りはやや秩序のない前進となって表れてしまった。

そこを見逃すキシリアではない。

全体を俯瞰すると、連邦艦隊でも左翼方向には戦艦マゼランの影が薄く小さな駆逐艦が多かった。

そのことは最初に見切っていたのだが、そこへ更に乱れが生じているのではないか。

ここが隙になる。

ジオン側がサイド6へ向かおうとした場合、ちょうどその進行方向を連邦艦隊によって押さえられている。

そのため、ジオン側が連邦艦隊を迂回するわけだが、あまり大きく迂回しようとするとその間に対処されるだろう。逆に左翼を攻め立て切り崩そうとすると、足止めされた上で混戦に持ち込まれるかもしれない。

そう考え、最適と思われるコースを策定した。

加速しながら連邦左翼のすぐ横をすり抜け、最短でサイド6へ辿り着けるコースへ向かう。

キシリア・ザビの戦局判断は確かなもので、これで逃げおおせるはずだった。何も間違っていない。

不運なことになったのは結果論に過ぎない。

迂回のためにはどうしてもジオン艦が横腹を晒してしまう時間がある。もちろんキシリアとてそれを承知している。だが、この材質も機構も贅をこらした大戦艦グワジン級グワリブの防御力からすれば一発二発の直撃はかすり傷で済むはずだった。グワリブはその通り、連邦艦との撃ち合いの中で二発の直撃を受けているが何も支障はなかったのだ。

だが本当に通り過ぎ、逃げ切れる前に三発目の直撃を食らった。

それがあろうことか艦橋の直下だった。

むろんグワリブの外壁はコストをかけた多重セラミック外壁、強固なものだ。見える損傷は軽微なもので、人員にも被害はない。艦橋に音と振動、そしてわずかな煙が及んだがそれも直ぐに収まる。グワジン級の空調設備はさすがに過剰なほど性能がいい。ちよつとした気圧の低下と風がキシリアを咳き込ませたが、目に見える変化はそれだけだった。

ただし艦の制御の中核となる部分にダメージを受けてしまったのだ。艦橋要員が泡を食う。

「あ、これはっ！ グワリブが、動力系も、舵も、コントロール効きません！」

簡単に言えばグワリブは進路制御を失ってしまった。

ほんの偶然と言って差し支えないほどの運の無さだった。しかしこれは重大な事態である。

「なにっ！ 直ちに動力炉のレベルを落とせ。暴走だけは防ぐのだ。そして補助システムを急ぎ起動させろ。手動でも何でも構わん」

もはや細かな回避行動も蛇行運動もできはしない。艦隊戦の最中

では正に致命的だ。

連邦艦にとってはグワリブの進路を簡単に予測でき、ミノフスキー粒子のため目視の砲撃しかできない状態でもたやすく当てることができる。

そしてやはり連邦艦隊はグワリブの異変に気付いてしまった。

いいカモではないか。いつそう集中して狙い始めた。

事態は急転直下だが、いつまでも呆然としているわけにはいかない。

キシリアは他の諸将とは違い、グワリブを含めて艦にこだわるような人間ではなく、ただの道具にしか思っていない。ハードウェアには思い入れがないのだ。

システムの回復が短時間でできないことを知るときつさと命じる。

「残念だが、このままではいかんな。総員退艦して乗り換える」

グワリブはもう捨てられる。その乗員は多く、6百名にも上るがそれぞれ近い発着艇を目指す。

艦橋要員のためにもそれ専用の発着艇が装備されている。

さすがにグワジン級ともなると緊急用とはいえ単なる脱出ポッドではなく、自力航行のできる巡視艇程度の立派なものが用意されている。

艦外にいるシーマ・ガラハウもグワリブの異変に気付いた。グワリブの加速に伴い、いったんその外壁に取りつく格好をとっていたが、中途半端な場所で加速が急に止んだのを察知したのだ。

そしてキシリア・ザビがグワリブを放棄し、発着艇で出るとの連絡を受けた。

当然ながら発着艇の援護をするために向かおうとする。

だがそれができない。

「なっ！ どうしたっていうんだいガルバルディ、動いておくれよっ！！」

ガルバルディは動かない。もはや重なるダメージによりエネルギー漏れが水準を超えてしまい、それを感知したガルバルディが爆散

を防ぐためジェネレーターを安全停止させていたのだ。

シーマはこれ以上ないほど焦るが、キシリアの発着艇に近付くすべがない。

それどころか連邦艦の砲撃の余波を食らって吹き飛ばされ、いつそう距離が開く始末だ。

そして連邦側はグワリブにとどめを刺すべくいま一度MS隊を向かわせてきた。ジオンの動きに即応した鋭い艦隊行動などはせず砲戦を継続したことや、ここでMSをまたしても投入するなど連邦指揮官は愚直なまでに定石を守る。

連邦MSからの射撃がぼつりぼつりと届き始め、加速度的に数を増していく。

キシリアたち艦橋要員は発着艇に乗り込み、ようやくグワリブを離れようとする。

ハッチを開けるやいなや後部ノズルを連邦MSに向け全力噴射、加速をして遠ざかる算段である。

だがその瞬間。

一発のビームライフルが斜め後ろから発着艇を貫いた。

それはエネルギーを解放し、いろんなものをごちやませに吹き飛ばす。

外壁材の一部まで巻き込みながら内部で暴れまくり、その欠片がキシリアの肩をノーマルスーツごと貫いた。

「くうっ、なかなか難しい場面だな。さてこういう時は何とすべきか」

鎮痛剤が効くまでとんでもない痛みが襲っているにも関わらず、キシリアは意志の力でそれを抑え込む。悲鳴を上げたりなどしない。いつもの表情から変わるところがない。

むしろ皮肉気に自分を客観視している。

「まあ、後世に残るのなら何か気の利いたことでも言うのだが……たぶんそれも無理だろう。私は身に余る地位に就き、多少は人より派

手な人生を送れたことで満足すべきか」

自分の怪我は重傷であり、このままでは命に関わることは薄々感じている。

しかしそれ以前に発着艇ごと命運は尽きているのだ。

武装もなく、半壊した発着艇で連邦MSに対し何ができよう。他の乗員は皆死んだかキシリア以上の重傷を受けて昏倒しているようだ。最後部に座っていたキシリアがまだマシだったという状況なのである。

そして連邦MSたちは距離を詰め、包囲しつつある。確実に葬る気だろう。

「私の役割はここまでのようだ。ジオンの将来はドズルの兄者に任せよう」

キシリアは下手に降伏し、囚えられれば、自分を取引材料にして連邦が優位に立つことを知っている。ドズルはキシリアのために何の条件でも飲むだろう。決して馬鹿ではないがドズルは直情で、しかもザビ家には珍しく肉親の情がある。それゆえキシリア一人のためにジオンにとんでもない苦境を招くことになってしまう。

決してそんなことにさせるものか。

だからここで降伏などしない。ジオンのために死ぬのだ。

「皮肉なものだな。ジーク・ジオン、かつてギレンの兄の演説でも決して私はそう唱えたことはない。ギレンの兄には斜に構えていたからな。しかし、この最後の時に言わせてもらう。ドズルの兄者、コンスコン、マ・クベ、シーマ、これから一緒に戦えなくて残念だが、いつまでも応援しているぞ。ジーク・ジオン……」

最期は間もなく訪れる。

今にも連邦MSからのビームで滅多撃ちにされる。出血のため意識がややふわふわしたものになっているのがせめてもの慈悲かもしれない。

不思議と過去のことを思い出さない。こういう時には幼少期から始まって、辛いこと、楽しいこと、思い出が次々浮かんでくるもので

はないか。そうではなく、やっと一息ついたような安堵感に包まれている。なぜだろう。ジオンを任せられる者たちがいると知っているからか。

こうしてキシリアは静かにその時を待つが、いつこうにそれが訪れてこない。

発着艇内にはもはや空気はなく煙はすっかり晴れている。その外壁の破れを通して外を眺めてみると、やはり連邦MSの姿が一機、二機、小さく目に映る。

しかしどうしたことか、そこからビームが向かってこない。おかしなことだ。

そう思っていると、とんでもないところからビームが走ってきたではないか！

何も見えない虚空からやってきたそれは発着艇ではなく、囲んでいる連邦MSの一機を貫いた。一撃で爆散させる。

もう一本、更にもう一本、立て続けにやってきては連邦MSに直撃する。まるで光の矢、それが次々と串刺しにしていくのだ。

ただの一発も外れることがない。

第二百二話 野心の方向

激しい白光の明滅が続いていく。目のくらむこの光は全て連邦MSたちの断末魔の花火である。

どうしたことかと思いい、キシリアがこの原因になったビームの来る方向を見るが何もなかった。

キシリアの意識がわずか薄くなっているからではなく、いくら見ても味方MSの影も形もないように思えた。ただし目が慣れるとかすかに見えてくるものがある。

「何だと、赤いMS…… 赤い彗星、キャスバルか!!」

それは赤い彗星だ。

みるみるうちに迫り、そのとんでもない速度を目の当たりにする。

実はキシリアは映像や識別信号の輝点でしかシャアの戦う姿を見たことがなかった。そうではなく直接目で見るとその凄さがはつきり分かる。かすかな点から見間に大きくなっていく。

そして接近と同時に連邦MSを狙撃しては倒していく。

もちろんこの思わぬ災厄の出現に算を乱しつつも、連邦MSとて反撃を試みている。命懸けで激しい弾幕を張っているのだ。しかしそんなビームが幾つ放たれても、赤い彗星は軽く回避し、かすらせもしない。

やがてそれも終わりを告げた。

発着艇を囲んでいた連邦MSはものの見事に全滅させられた。連邦MSからの脅威は消え去ったのだ。

まさに伝説。圧倒的な技量の差がある。

キシリアとしても笑ってしまふ。この事態、どう捉える？

赤い彗星、シャアのゲルググJ改は連邦MSを全て片付けても勢い余ってキシリアの発着艇を通り過ぎ、そこから大きくカーブしながら

戻ってきた。

そして発着艇に接触する。

ゲルググのハッチを開け、自分が発着艇に移り、そこでキシリアの姿を認める。

「これはキシリア閣下、怪我をしておいでですね？　直ちに救助いたします」

「……　お前が、なぜ」

「グワリブからの緊急応援要請をキャッチして急行したのです。このところサイド6からサイド2にかけて連邦の輸送が多く、私はちょうどそこで作戦行動中でしたので。もう少し早ければよかったです。が、そこまではご容赦のほどを」

「私はそんなことを聞いていない！　お前がなぜ私を助けるかを聞いているのだ」

「どうされました？　キシリア閣下。妙なことを。閣下をお助けするのは当然ではありませんか」

「私の言う意味が分からぬお前ではあるまい」

「……」

「おあつらえ向きのチャンスだったではないか。ちよつと手を抜くだけで私の命はなかった。ザビ家の人間をまた一人消せたのだぞ。しかも誰しもが納得できる事態で、誰もお前を疑ったりしない。復讐を遂げるにはまさにこれ以上ない舞台だろう」

この発着艇内には、他に会話を聞いている者はいない。

連邦MSに撃たれた惨状では、キシリア以外に意識を残している人間がないからだ。それをキシリアは見取って取ってから話している。更に通信リンクをシヤアだけに向けているという念の入れようだ。

「お戯れを。キシリア閣下」

「もうすつとぼけるのはやめたらどうだ。シヤア、いやキャスバルよ。ふふ、さつきは驚いた。凄いスピードのMS、正に連邦の恐れる赤い彗星だ。しかし小さい頃のお前はブランコのスピードにさえ泣いていたのだぞ。憶えているか？　怖がりのキャスバル坊や」

「何を言われているのか、さっぱり分かりかねますが、閣下」

「あくまでそう言うか…… キヤスバル、私はお前を排除するつもりはない。むしろ討たれてもいいくらいに思っている。なあ、そろそろ本音を聞かせてほしいものだ」

「やはりお怪我で混乱されているのでは」

「お前が貴族家たちに渡りをつけ、何かを画策しているのも分かっているのだ。私の裏をかけるものか。ここで隠しても意味はないぞ」

「……」

「お前にとつても瀬戸際だ。本音で話せ」

キシリアはシャアのはぐらかすような態度に関係なく自分の言葉をかぶせ、あくまで迫る。

この機を逃したら二度と向き合えないと分かっているのだ。

そう考えたらこの命の危機さえ望外のチャンスにさえ思える。

とにかく本音を聞きたい。結果がどう出るかに関係なく、どうせ拾った命である。シャアの気が変わって殺されることになっても、それはそれで満足だ。

「…… キシリア閣下、そこまでお分かりでしたか。それは失礼しました。ですが貴族家のことは、特に閣下が懸念されることはないでしょう。あくまで言質は取らせない交流レベルに過ぎないレベルなので。敢えていえば現状の不满分子に一定の希望を持たせるよう、匂わせているだけのこと」

「？ 何だその貴族に持たせている希望とは」

「もしもスペースノイドの希望に、今のジオンが応えられないとしたら、言い換えればジオンの存在が害悪になるとしたら、一気に現状を変えるという選択肢です」

「難しい言い方をするものだ。それはクーデターと何が違う。そして今私を殺さないこととまるで繋がらない」

「閣下、私はあくまでこの先ジオンがどういう存在であるかを見ているのです」

「この先とは…… つまり今すぐ行動するわけではないということか

？　しかしこの先ジオンがお前の目から見て害悪になったらどうする。良からぬものと判断した時には」

「その時は、その対応を」

「自分が表に出て新秩序を打ち立てる、ということか。そう理解していいのだな。貴族どもはそれを円滑にするためにいったん利用し、後は捨てるといったところだろうか。いや政略も優れている。そしてクーデターをやるなら失敗など考えてもいないところがまた頼もしいものだ。さすがにダイクンの子供だと私から褒めてやってもいい」

「別にそう決まったわけではありません。今のジオンがスペースノイドのためでありつつければ、問題はなく」

「そして取って代わる必要もなく、か。つまりはジオンが正しければ自分は影のスペアのままでいると。そういうのが控えてるとなれば私もいつそう襟を正す必要があるな」

一応の回答を得てそう言ったが、これでキシリアが完全に納得したわけではない。シャアの考えが意外なほど良かったことには安心したが、肝心なことを聞いていないからだ。それはもちろんザビ家のことである。

「私はクーデターを起こすのが既定路線なのかと思っていたが、予想はいい方に外れたようだ。だがな、キャスバル。それではザビ家が残ってしまうぞ。それでもいいのか。お前の復讐とやらはどうした」

「ザビ家についてはその後の問題でしょう。もちろんジオンを倒すならザビ家も倒さざるを得ませんが」

「なるほど、もうザビ家はオマケというか。ふふ、軽んじられたようだが、愉快と言えば愉快だ。キャスバルはジンバ・ラルの呪縛を既に解いていた。もうスペースノイドの将来だけを見ているとはな」

キシリアはやつと安堵できた。シャア、いやキャスバルは復讐だけを考え、狭い視野のまま成長を止めていることはなかったのだ。スペースノイドのためという理想の片鱗を掴もうとしている。

今はまだダイクンのような大きさも度量もないかもしれないが、些

事を捨て、そちらに向かおうとしているのだ。

「ただしキャスバル。その言葉だけで納得はできない。おかしいではないか。そう短期間に人の心は変わらない。何がお前を変えた」

「……」

「私はな、ザビ家への復讐が妥当かどうか、弁明も何も一切お前に話すつもりはない。それはザビ家の行動をしつかり見て、曇りのない目をもって自分で判断してほしいと願うからだ。ただし急にできるものではないとも承知している。お前が変わった理由を正直に話せ」

これにはすぐにシヤアも答えられない。

自分でもそれを考えたことがなかったせいだろうか。

「一つ言えば、地球降下作戦でコンスコン大将と一緒に戦えたことが転機と言えるでしょうか。コンスコン大将は戦いを恐れず、そして正々堂々と戦う。驚いたことにコンスコン大将だけでなく、その部下の一人一人まで全くその通りに」

「…… そうか、そうだろうな。私にも分かる」

「もつと驚いたことには、能力があっても無駄に戦うことがない。コンスコン大将は常に戦果よりも義を見据え、皆にとつての最善を考え、更には虐げられたものを解放する」

「なるほどな。はは、笑いたい気分だ。私はな、キャスバル、お前がコンスコンに感化されるのを願ったときもあるのだぞ。コンスコンは、昔からそうだ。これからも変わらないだろう。もつともつと感化されるがいい」

「…… あまり似過ぎるのもよくないことです」

「まあ私が思うに、それが原因というよりは、発端なのだろうな。お前は気付いていないかもしれないが元から器があったのだ。人の上に立ち、未来に導いていくという器だ。その才能がお前にはある。最初から素直に伸ばせば良かったのだがこれからでも間に合う」

そして微笑みのままキシリアは申し渡す。

「キャスバル、話を戻すようだがそんなお前がジオンを見定めるのは全く構わない。むしろ重畳だ。スペースノイドにとつて最善が為さ

れるということとは、ザビ家の存続に関わらず正しいことだからな」

「閣下までコンスコン大将に感化されましたか」

「あ、そうか。私までが。いやキャスバルの冗談だろう。そうではないと思いたい」

「ここで話に時間を使ってしまったことを思い起こし、シヤアは急ぎつつキシリアとまだ命のある要員を救助していく。

「ともあれお急ぎを。ここら一帯は今ララア少尉が安全を確保していますが早い越したことはなく」

そしてシヤアは間もなくキシリアを搜索していたシーマ・ガラハウと出会い、そちらに託す。シヤアはそこで離れて自分の艦隊に戻る。

シーマは大破状態のガルバルディのまま。なんとかガルバルディのシステムを手動に置き換えて再び駆動させていた。もう戦闘はできないが曳航して救助はできる。

最も近くにいたムサイを見つけ、そこに移乗し、キシリアの治療がやっと始められる。

遅くなったことを詫び続けるシーマを怪我をしているキシリアが逆に宥めている。

「キシリア閣下、これほどのお怪我を…… 海兵隊が護りきれず申し開きもできません」

「いい加減しつこいぞシーマ。もう言うな。それにこのアクシデントは望外の収穫もあった。いやそれはとてつもなく大きかった。詳細は省くが悪いことばかりではなかったのだ。それに私こそお前の方に連続戦闘を強いてしまい、疲労は限界のはずだ。休むといい」

「いえ、ガルバルディを乗り換え、直ちに出击しませんと」

「まさか。もう安心だろう。慣性航行で、今はぎりぎりサイド6戦闘中止宙域に入った頃だ。連邦艦隊も手出しするまい」

何ともいえない表情をしてシーマが伝える。

「それが、実は連邦艦隊は追撃を諦めておらず」

「何だと!? 連邦は何を考えている!」

第百三話 希望と絶望と

その通り、連邦艦隊は追撃を続けている。

キシリアとシーマ、ジオンの残存艦隊はなんとかサイド6の戦闘禁止宙域に滑り込むことに成功したのだ。それでも連邦艦隊は追ってくる。

実はオットー・ミタス指揮官がそう命じたのではない。

あともう少しで任務達成が見えているというところ、各艦の勇み足を完全に抑えられなかった。

「……嫌がらせくらいは許可しよう。デブリと誤認してしまったと言いつでできるくらいには。しかし戦闘禁止宙域で本格的な戦闘はならん」

むしろ追認したような指示が更なる結果を生んでしまう。オットー・ミタスは無能ではないがこういうところで弱さがある。自分のかすかな迷いが表に出てしまうのだ。

主砲のエネルギーチャージを始める艦すら出てくる。

無秩序な戦闘再開という事態が寸前に迫る。これを止めたのは皮肉なことにオットー・ミタスの指示などではなく、連邦艦隊にとって本物の脅威がやってきたことによる。

いきなり連邦オペレーターが叫ぶ。

「あつ、オットー・ミタス司令、後方より艦隊あり!! 識別信号なし、これはジオンの艦隊です!」

「何! 我らの後方から、ジオンの応援か。どのくらいの規模だ。速度と距離は」

「概算でも二十隻以上、急速接近中! 会敵まであと三十分!」

「これは……お互い戦闘禁止宙域だが、こちらがそれを守ろうとしなかったように、向こうだって守るといふ保証はないぞ。もし戦いになれば、下手に対処できるような数ではなく、態勢も明らかに不利だ。逃げることはできるか」

「サイド6をすり抜けるコースで直ちに加速すれば、接触を避けられ

ます」

ややオットー・ミタスの統率が弱かった連邦艦隊だが、この事態を共有すれば揃って決断するほかない。

これでやつと連邦艦隊は逃げに転じ、キシリア・ザビ殺害は成らずに終わったのである。

一方のキシリア側でもこの事態を掴んでいる。

連邦艦隊を追い散らしたジオン艦隊、それは何と因縁のあるエギーユ・デラーズの率いるものだった。

このときキシリアは、「貴官の応援、大変感謝する」とだけデラーズに送っている。映像で通信をとったのではなく、たった一行の電文だけである。

それで充分なのだ。

下手にデラーズと映像で顔を合わせようものなら、お互いに言葉を選ぶのに困ってしまうだろう。

そして口にするまでもなく判明していることがある。

デラーズは内心どんな感情があるにせよ、キシリア・ザビを見殺しにはしなかった。含むところがないはずはない。しかしそれで行動を決めることはなかった。

すなわち、デラーズもまた故ギレン総帥のためという粹ではなくジオンのためという粹組みで行動しているということだ。ギレン派の筆頭であり頑固なことで知られたデラーズだが、ジオンの一員であることを優先した。

これもまたキシリアにとって収穫といえる。

その後キシリアはサイド6に到着する。

そこでゆっくり肩の傷を癒しながらも政略を着々と進めている。スムーズに運んでいった。キシリアとしても意外なほどに、どうしたとかサイド6はジオンへ非常に友好的だったのだ。

かつて連邦はコンスコンを狙ってコロニー内で無茶をしたことがある。そして今もキシリアを狙ってあわや戦闘禁止宙域なのに仕掛

けようとした。それらが一定の素地にはなっているが、ただしそれを加味したとしてもジオン寄りなのだ。

ようやく成果が形になる時がきた。

ジオンとサイド6は幅広く協定を結び、お互いの間の通商をしっかりと確約する。

更にそこへ「通商を妨げるいかなる要因も、これを排除する」という条項が添えられているではないか。つまりこの二つの間の通商を連邦側が破壊しようとしたなら、共通の敵とみなすということだ。

これは重大だ。実利的にも、象徴的にも。

付随してジオン艦艇にサイド6コロニー内ドックの使用許可、そして従来連邦にしか認めていなかった駐在武官事務所の設置までもが認められた。

ここまでではいい。サイド6とジオンの間の話し合いで決められる。

実はサイド6はジオンとの協定締結をダシにして連邦とも話し合いをしていた。むしろサイド6にとってそちらが本命であったかもしれない。

だが、それの方は全く不首尾に終わる。

特にサイド6と連邦がどうしても合意できなかったことがある。

サイド6側が熱望していた連邦の戦闘艦艇が寄港する際の事前通告義務の明文化、そして駐留する連邦艦の総量規制は成らなかった。

サイド6が打診した段階で連邦側が猛反発してきたからだ。

その反発は度を越して強いものであり、譲歩の余地が全くといっていいほど残っていない。逆に脅迫まがいの言葉さえ使ってくる。

サイド6とて若干の落としどころを用意していた。だが歩み寄りも何もなく、連邦は全く受け入れないのだ。サイド6も苦慮の末、協定自体諦めざるを得なかった。

それらの動きをキシリアもしっかりと察知している。

ここに来てサイド6がジオンと連邦の間でのたうち回っているではないか。キシリアとしてはその苦しい立場に同情しないでもない

が、それ以上の感慨はない。どんなにジオンが付け込んだとしてもサイド6は連邦と本当に決裂するはずはないし、ジオンとしては今回結んだ協定で政治的成果は充分である。サイド6の態度が明らかに変わったこと、これはサイド1などに残っているコロニーへのアピールにもなるだろう。

ところがキシリアの安眠はそこまでだった。

サイド6が連邦との話し合いを諦めた時点で、キシリアへとある情報をお届けしてよこしたのだ。

それを見た瞬間、キシリアは肩の痛みも忘れ、デスクに両手を突いて立ち上がってしまう！

こんな、こんな驚くべきことがあるだろうか。

「な、何だと!! これは本当のことなのか！ サイド6が急にジオン寄りになった、その真の理由がこれだったか！」

その情報とは、短く、簡単なものだ。

しかし意味するところは巨大に過ぎる。

「連邦がサイド2のコロニーを使い、コロニーレーザーを造っていたとは……………」

キシリアは再び腰を下ろし、唇を噛みしめる。

「……………そういうことだったか。これでピースがピッタリとあてはまる！ この付近にいたであろう連邦艦隊は予想外なほど多かった。そして何より、シヤアが言っていたではないか。なぜかサイド6からサイド2へ連邦が足繁く輸送をしていると。デラーズもまたそのために近くにいた。そんな重大なピースが揃っていたというのに、そこに私は考えが及ばなかった…… これは私の失態だ」

連邦は、ジオンのソーラ・レイを真似てコロニーレーザーを建設しようとしている！

ジオンがやれたことが連邦にできないわけがないのだ。むしろ物

量に勝る連邦が手掛ける方が自然というべきだろう。

国力的にジオンはもうソーラ・レイのような巨大兵器は造れない。それを尻目に連邦が造れば圧倒的なまでに差がつく。これは当たり前だ。このところ連邦はおとなしくしていたが、決して怠けているのではなく着々と勝利のための準備をしていたのだ。

しかしながらジオンがそこまで思い至らなかったのにも一定の理由がある。コロニーレーザーを造るには絶対条件がある。それは密閉型コロニーであり、光の漏れる窓が無いものでなければならない。

だがしかし、その密閉型コロニーはサイド3にだけ存在しているわけではなかったのだ。

実はサイド2にも少数ながら存在する。

そもそも宇宙開発において、スペースコロニーの形態については長い議論があつた。基本的には円形であり、回転遠心力によって疑似重力を発生させるのは共通しているが、いくつもの形式が考えられる。

シミュレーションによって円筒型で、しかもシンプルに三枚のミラーの反射を使って集光するタイプが最も有利だと思われた。そのようにせず、外部に太陽電池を設置し、太陽光をいったんエネルギー変換してから照明に回すというシステムを加えるのはコストがかかる。

それでサイド1などは鏡のある開放型で造られている。しかし、サイド3の建設に当たっては密閉型が再び検討された。それは位置的に月の裏側に当たり、集光に変動があると予想されたからだ。

もちろんサイド3を建設し始めるのに当たり、いきなり密閉型コロニーを造るわけはなく、いくつかのプロトタイプが先行して造られ、それらがサイド2にある。

連邦はそのサイド2の密閉型コロニーをコロニーレーザーに改造しようとしている。

この情報を密かにサイド6は入手していたのだ。

もちろん、同じラグランジュポイントにあるサイド6とサイド2は至近であり、連邦も完全に情報隠ぺいはできなかったからである。それを掴んだサイド6は更に死力を尽くして探りにかかっていた。

強い危機感がある。

もしも至近にあるサイド2にそんな強力な武器を備えたら、連邦は未来永劫サイド6の生殺与奪の権を握ってしまう。連邦の考え一つでサイド6の運命が簡単に決められてしまうというのは悪夢ではない。

そこでサイド6はジオンと連邦のどちらにも政治的に働きかけることを考えた。

ただし連邦側には撥ねつけられてしまう。

むろん連邦側はコロニーレーザーを手にした暁には、ジオンを蹴散らして勝つのはこのついでに過ぎず、そこを一大拠点にして二度と宇宙移民が齒向かわないよう押さえつけるつもりだ。だからお膝元に当たるサイド6がいくら連邦艦艇の駐留制限を加えようとしても呑むわけがない。連邦に柔軟姿勢を期待するのはもう無理であった。

サイド6から真実を知ったキシリアは直ちに行動している。

秘匿回線でジオン本国に伝えると同時に、将官全員に対する緊急会議の招集をかけた。

これはジオンでもドズル・ザビとキシリア・ザビのたった二人にだけ許された特別権限である。

守るか、攻めるか、いずれにせよ早く対処を決めなければジオンは終わってしまう。

第五章 暁の新世界 第百四話 発動

0080年11月、ズムシティで開かれた緊急会議は重い雰囲気に含まれている。

集まったのはもちろんジオンを支える将官級の人間である。以前の将官会議とは違い、ノイエン・ビッターやマハラジャ・カーンといった面々が増えている。

ここではキシリア閣下のもたらした情報、はっきり言えば連邦が建設中のコロニーレーザーにどう対処するかが議題となる。他のことはどうでもいい。

「初めに、この会議を招集した私から捕捉説明をさせてもらおう。その後もサイド6から追加の情報を引き出したのだ。ジオンにとってよろしくないことばかりだがな」

そう言ってキシリア閣下が話を始める。

コロニーレーザーの重大性については今さら話す必要はない。ここにその意味するところが分からないような者、または現実から目を背けるような者などいるはずがない。

それでも、皆はこれ以上悪い情報があるのかという渋い表情を作る。

「それはコロニーレーザーの性能だ。判明している限り、我がジオンのソーラ・レイよりもはるかに進化している。威力もそうだが、連射性能も優れている。具体的には6時間もあれば次が撃てる目算だぞうだ」

これは思った以上の脅威ではないか！

戦術レベルでの脅威が段違いに跳ね上がる。

具体的な情景を思い浮かべれば、そうなる理由はすぐに分かる。そ

んな短時間で連射されるのなら、その合い間にジオンの艦隊やMSが取り着くまで前進できるか難しくなるからだ。コロニーレーザーの直掩戦力にほんの少しでも足止めされたらそれで終わり、辿り着くことすらできずに艦隊ごと蒸発させられる運命が待っている。

つまり機動戦力で攻略するのはなはだ困難ということだ。

大半が犬死にしようのを覚悟の多方面特攻でもするしかないではないか。それはもはや戦いとも言えず、現実的ではない。

「そしてもう一つ、そのコロニーレーザーが完成するのは約二ヶ月後に差し迫っている」

「そんなに早く?!」

誰もが異口同音に呻きを漏らした。

早すぎる!

連邦の物量はやはり侮れない。ジオンとしては本当に今すぐ行動しなければならなくなった。

「キシリア、防御はできんのか。Iフィールドはどうだ。ビッグザムはマゼランの主砲を浴びてもなんともなかったぞ」

ドズル閣下が望みをかけてそう言ったが、その質問に対してはキシリアの代わりにマ・クベが答える。

「ドズル閣下、それは無理でしょう。Iフィールドを量産化できるかどうかの問題ではなく、原理的なものです。Iフィールドはあくまで粒子を拡散し、捻じ曲げる兵器、メガ粒子砲相手には有効でも純粋なエネルギーであるレーザーには効果がないと思われまます」

「そうか……で、では鏡はどうだ? レーザーとはいっても、要は光であるわけだ。何かで反射させてしまえばいい」

「コロニーレーザーほどの威力になると、100%の完全反射ができない限り紙のように破られるだけです。もちろんその線で研究はしますが2ヶ月で開発、実装はとうてい無理だと申し上げます」

「どうあっても防御は無理だということか。厄介なものを……」

その方向の希望はあっさり砕かれてしまった。更に戦術の幅は狭

められ、攻略が絶望的になる。

ここでマ・クベはキシリアの方に向き直り、続けての発言許可を求めてきた。

技術畑のマ・クベとしたら見逃せない疑問があるのだろうか。

「キシリア閣下。コロニーレーザーの性能の話に戻りますが、何よりも肝心なのは射程ではありませんまいか。その近辺に絶対防衛拠点を設けるためだけのものか、あるいは広くサイド2とサイド6を支配するためのものか、つまり射程により想定される連邦のコロニーレーザーの運用方法が決まるでしょう」

「さすがにマ・クベ、合理的にものを考える。だがサイド6もそこまでの情報はなく、答えはまだ明確ではない。ただし最悪の想定はあるのだ。驚くべきことにこのサイド3、つまりジオン本国を撃てるということも含めて」

「な、何ですと!? そんな馬鹿な、不可能です! キシリア閣下、それはレーザーの威力、届くか届かないかの話ではなく、照準が付けれられないという技術的な問題からです。レーザーの使えない今の状況では、いくら直径6kmのレーザーでも針の先のようなもの、何十万kmも離れた他のサイドのコロニーまで狙えるはずはなく」

「……それがな、マ・クベ、残念なことを知らせるようだが、照準の問題について連邦はうまい解決策を考えたいらしい。やり方としては出力を極限まで絞り、例えば1%のまま撃って、当たりの反応が出たらそのまま出力を上げて再度撃つという方法だ。もちろん外れたら少しずらしてまた同じように試し撃ちをするだけのことだ」

「そ、そんな……」

「驚くほど単純なやり方だろうか？ だが確かにこれならどんなに遠くへでも照準が可能になる」

「しかし、それこそ技術的に実現は難しく思います。なぜなら出力を下げる方に調節するのはかなり困難で、レーザーが不安定になり、発振自体が無理になります」

「それには連邦も苦勞していたが、天才的な技術者がいたので実現の目途が立っているらしい。なんでもフランクリン・ビダンという技術

者だそうだ。そこまでがサイド6が把握していた情報になる」

細かな技術の話はいい。
もはや最悪だ。

連邦がこのジオン本国をあつさり攻撃できるかもしれないのだ。手出しのできない彼方から、ジオンはその中枢部へ一方的に攻撃を受ける。それも一撃必殺の恐るべき威力で。

あと二ヶ月、それまでの間にこの脅威を片付けなくては最悪ジオンは終わる。

これまで二年近くに渡った連邦との苦戦は何だったろうか。その努力、犠牲が全く無に帰す。そしてもちろんジオン独立の夢は砂のように潰えてしまう。

住民を多数含むコロニーを破壊されるといふ戦略的攻撃を受けたら白旗を上げて無条件降伏するしかない。仕方がないのだ。国民の命の大半が失われることを考えたらそれ以外の選択肢などあり得ない。

むろん人道的に見れば悪逆非道な戦略兵器ではある。

ただしそれもジオンが早期降伏しないからだと言われれば何も言い返せない。また今さらジオンが言い立てられる立場でもない。

ここからは活発な戦術談義がなされた。

この場集まっているのは誰もが前線にいたことのある将帥たちである。この状況でも策の一つや二つ考え出すことはできる。ただしそれが上手いものかどうかは別だ。初めに荒唐無稽なものを淘汰し、やや可能性のありそうなものを絞り、しかし討議を進める中で問題が見つけられて却下されていく。結果的に使えるものはほぼ残らない。

こんな焦りばかりがいや増していく会議室の中で、諸将の間に共通の認識が立ち昇っている。

いや待て。

なんとかなるのではないか？

絶望には早い。

あまりに困難な事態、それでも対応する戦術を編み出す者がいるのではないか？

その者の名はコンスコン。

コンスコン大将、ジオンにおける最高の戦術家、そして常勝不敗の名将でもある。

皆はコンスコンが何を発言するか、何の策を出してくるか、そこに気をやっている。

いやあ何とも言えない空気になってきたな！

俺が一応の案を言うしかないじゃないか。もしも皆の期待を外したら、笑ってナシにしてほしいものだ。

俺の内心を知ってか知らずか、ドズル閣下がいきなり話を振ってきた。

「とりあえず、何か言え。コンスコン」

短かすぎますドズル閣下！

そんな直球では前ふりの間が取りにくいではありませんか。

「で、ではドズル閣下の指名に従い、案を言います。二ヶ月以内にコロニーレーザーを破壊するのが絶対条件。それを過ぎれば正に難攻不落になる以上は。むろんその前に仕掛けるとしても、連邦は艦隊を出して迎撃してくるでしょう。それを一気に撃滅しなくてはならないと」

「それはそうだ。だからどうするという話だ。しかし今艦隊同士で正面決戦をしても勝てないぞコンスコン。どうしても戦力差があり過ぎる。時期尚早だった。エネルギー戦略で連邦を弱らせるにはまだもう少し時間が足りない。タイミング的に最悪だ」

「いえ、ドズル閣下、最悪というには下には下があります。連邦がコロニーレーザーを守る戦力をがっちり確保した上で、残りの艦隊を使って時間稼ぎをしてきたら。連邦の戦力はジオンの軽く二倍以上、やろうと思えばそれも可能でしょう。だからだと時間をかけられるだけで戦略的にジオンは敗北します」

「…… もはやどうにもならんではないか。まるでジオンが勝つ可能性がない」

「そうさせないためには、敢えて連邦艦隊をまとめておびき出すという手間をかけた上で、潰さなくてはなりません」

「コンスコン、ジオンの実力ではどっちかだけでも無理だ。それなのに両方やるなど」

「ドズル閣下、実はその二つは別のものではありません。おびき出し、しかも叩く。それをどちらも成すのは、戦う場所をこちらで設定するのと同義です。そして戦場をジオンが決めるためには、実はたった一つ、いえたった一回しか使えない奇策があります」

「何だと！ そんなものがあるのかコンスコン！」

ドズル閣下だけではなく、聞いた者はみな驚くしかない。そんな策が存在するのだろうか。詳細を聞けば更に驚きは大きくなる。

それと同時に、連邦軍ルナツー基地ではグリーン・ワイアットが紅茶を嗜んでいる。

機嫌は悪くなかった。

それは紅茶の味がいつもより良かったというだけではない。

「ステファン・ヘボン君、順調のようだね。10日前に量産開始にゴーサインを出したが、特に支障もなく進んでいるようだ。ロールアウトしている機体が増えている」

それが何を指すか言うまでもない。

グリーン・ワイアットの肝いりで始まったルナツー独自開発のMS、ジム・クウエルのことである。

「実地テストの結果も予想以上の素晴らしさ、これで連邦のMS戦力に問題はなくなる。今まで長いことジオンのガルバルディとやらに苦しめられてきた。さすがの高性能でこちらの主力機ジム・カスタムでは一歩及ばなかったからね。しかし、このジム・クウエルなら大きく凌駕する。いや、圧倒できる」

「ジオンも驚くことでしょう。今まで数の差を質で凌いできただけ

に」

「そうだね。それで連邦は幾度勝利を取り逃がしてきたことだろうか。だが、これからジム・クウエルの数を揃えていけばもはや負けることなどあり得ない。ジオンは質も量も圧倒され、全ての希望をへし折られることになるのだから、彼らが気の毒にさえなるね。ステファーン・ヘボン君」

「そうですが閣下、もしかするとそれさえ出番が無いかもしれない……」「君の考えていることは、あれのことだろう。まあ上層部もとんでもないことを考えたものだ。巨砲主義の亡霊だよ」

グリーン・ワイアットは少しばかり眉をひそめる。

決してそれに賛成しているわけではないことが如実に分かる。

第百五話 失脚

グリーン・ワイアットはコロニーレーザーについて否定的に思っている。

実際のところもうその計画は進んでいるのだが、もちろんワイアットが発案したのではない。

「コロニーレーザーとは私も驚いた。巨砲主義もここに極まれり、だ。かつてガンダムの量産化さえコストの問題で見送った連邦がそんなものを造るとは、面白いというか馬鹿馬鹿しいことだね、ステファン・ヘボン君」

「ジャブローの上層部には受けがよかったのでしょうか」

「やはりその大ききさでアホウどもにも意義が分かりやすいということか。上層部のレベルの低さがそこまでだったとはね。今、ジオンの通商破壊でヘリウム3が乏しくなった中、民間用を絞ってでもそんな方向に回すとはおめでたい頭じゃないか。連邦全体のヘリウム3備蓄はもう最低水準のはずだ。よほど効率を考えなくてはいけないというのに、いったいどれほどの資材とエネルギーを費やすつもりだろう」

コロニーレーザー建設には、希少金属の精錬、部材の生産、そして輸送、どれもこれも多大なリソースを要する。

一方でワイアットの言う通り今や連邦のヘリウム3は枯渇まではいかなくとも差し迫っている。もう少し経てば工業生産に差し支えてしまうほどだ。そうなれば連邦の巨大な生産力といえども形骸と化す。何より民生用の供給を減らせば民心の動揺を招くだろう。

「それに頼るより、ルナツールの戦力を増やすべきでしょうに。閣下」
「おお、そうだ。その方がよほど合理的じゃないかね。艦隊戦力をジオンの4倍、いや5倍用意すればそれで済むのだ。そうなれば細かな戦術の差など問題ではない。戦力差で押し切り、間違いなく勝てる。それでもコロニーレーザーを造るよりはるかにリソースは少なく

済むじゃないか。軍需企業の都合とやらでコロニーレーザーをどうしても造りたいのなら、ジオンを潰した後でゆつくり造ったらいいのだが……それはそれでスペースノイドどもの反発が心配になる。戦後、そんな巨大兵器の存在を容認するだろうか。長期的に連邦のためになるとは私には思えない。そう幾度も上層部に具申したのだが、聞く耳がないらしい。悲しいね、ステファン・ヘボン君」

グリーン・ワイアットは正統派で合理的な将であり、しっかりと艦隊戦力を積み重ねることを何よりも重視している。自分の戦術能力を過少に思っているわけではなく、数しか見ないような単純な将でもないが、そういう基本をゆめゆめ忘れない。

そして艦隊戦力の方がコロニーレーザーより柔軟な運用ができ、堅実で、使うリソースも少なく済む。そうジャブローの連邦軍上層部に言い続けていた。

「やはり、政治的配慮というものでしょうか、閣下」

「まあ間違いない。今回のコロニーレーザーの計画を考えたのはダグラス・ベーダーだったそうじゃないか。ま、そのこと自体は理解できる。悪いとは思わない。彼はそういう派手なものが好きな人間だし、むしろよく考えた。ただしそれを私の意見も聞かずにいじくりまわしているのは上の連中だ。これは愉快じゃない」

そこへジャブローから通信文が届いたではないか。

しかも重大情報扱いだ。

ステファン・ヘボンがグリーン・ワイアットに手渡し、ワイアット自らが開封する。

ティーカップを片手に持ちながら読み始めたが、いきなりカップを降ろす。

ソーサーに戻したはずがカップは中心を外れてしまい、傾いたおかげで紅茶がこぼれる。

そんなワイアットをステファン・ヘボンは今まで見たことがない。いったい何事があったてそれほど慌てているのか。

その答えはたつぷり10秒も待ってから得られた。

「はは、面白いね。とても面白い、ステファン・ヘボン君。ジャブローは私が激務で疲れていると心配してくれているよ」

「閣下？ それはどういう意味で？ ジャブローはいったい何の通達を……」

「何と何と、今後私はルナツの基地司令に専念していい、それで少しは休んでくれとの通知だ。艦隊戦力は別の者を宇宙に上げて指揮させるから心配しなくていいらしいね。まことにありがたいお達し、簡単に言えばコロニーレーザーに反対している私への意趣返しだ」

「なっ！ 何ですと!! ワイアット閣下、それは閣下から艦隊を取り上げるということではありませんか！ そんな馬鹿な！ いったい閣下の代わりに誰が艦隊の指揮をとれるでしょうか」

「それを聞くともつと驚くよ。艦隊指揮官にはパウルス中将、参謀長にはアントニオ准将が充てられるそうだ」

「そんな、パウルス中将はこの戦争で実績を重ねたとはいえあくまでも地上戦の話、宇宙での艦隊戦の経験など一つもないのでは。アントニオ准将に至ってはジャブローの基地司令だった関係でジオンの地上侵攻からジャブローを守り切ったことしか聞こえていませんが」

これは驚きの人事だ！

簡単に言えばワイアットは失脚させられた。

ルナツの基地司令という地位は残されているが、それはただの後方勤務ということに等しい。艦隊でジオンと渡り合うことを事実上禁じられてしまったのだ。

「つまり上層部はよほどふざけたらしい。少なくとも私に紅茶をこぼさせるくらいにはふざけている」

「ジャブローは気が狂いましたか……」

「ステファン・ヘボン君、その通り、よく一言でまとめてくれたね。そうそう、ついでに言えば艦隊の副司令にはまたしてもダグラス・ベーターだそうだ」

「…… 今までその三人に接点がありましたか……」

「あるわけがない。それで分かるが、この人事にはもう一つの意図が隠されている。またしても上層部の好むバランス人事というものだ。ヨーロッパ出身のパウルス中将と南米のアントニオ准将、北米のダグラス・ベーカー中将、見事なものだね、ステファン・ヘボン君」

「今は戦争をしているのです！　いくら勝ちが分かっているとはいえ、将兵に犠牲は出るでしょう。それをなるべく減らすため最善を尽くすのが上層部の役目のはず、それなのに相性も経験も何も考えず指揮官を決めるとは……」

「上の考えは何も変わっていないようだね。かつてレビル大将とテイアム中将でバランスをとったことと同じだ。その時には軍事的にうまいこといったようなものだが、果たして今度はどうなるか」

「そもそも艦隊指揮から閣下を外した段階で、うまくいくわけがありません！」

「ありがとう、ステファン・ヘボン君。思うにそれだけではない。バランスという言い方が悪かったが、つまりはお互いに制肘して戦果を突出させないようという考えだな。たぶんそうだ」

「突出とは？　成果の独り占めということでしょうか」

「そうだ。本当の権力者は軍上層部というよりも連邦の最高評議員たちだ。おそらく、連邦軍の将帥が戦後政界に転じて権力を奪うのを心配しているのだろう。確かに、巨大な戦果を得た将がそれを引っさげて出ればたやすく相応の地位を得られる。形だけでも連邦は民主主義だからね。大衆は分かりやすい英雄を求めるものだし、戦争を勝利に導いた将帥ともなればそれにうってつけだ」

「そんなことを！　後々の政界の話など今から考えていいものではありません。ま、まさか、閣下、コロニーレーザーもその一環なのでは!!　確かに巨大兵器でジオンを叩き、ひれ伏させたのであれば、戦果は特定の将のものというわけではなくなり……　少なくとも誰も英雄にしなくて済むと!」

「おお、そこまで気がついたかい、ステファン・ヘボン君。いや私も艦隊を取り上げられて初めて分かった体たらくだ。コロニーレーザー

の本当の意味はそこにあるというべきだ。私も将帥の中では思慮がある方だと自負していたが、どうやらそれは自信過剰、連邦の権力者どもの前には形無しだったね」

「閣下……」

「連邦に巢食う権力の亡者にとって大事なのは権力だよ。それを維持することだ。それ以外にはない」

連邦の人事も、コロニーレーザーも結局一つのことにとまとめられる。

それは連邦上層部の腐敗だったのだ。戦後の政治的な権力争いには考えが及ぶが、前線将兵のことなど数字のこととしか考えもしない。

ザビ家支配のジオンと、形だけ民主主義の連邦と、どちらがより悪いのだろうか。

やや遅きに逸したが、ここまで思慮を働かせるのはさすがにグリーン・ワイアットといえる。しかし残念なことにはできることは何もない。もう上層部から警戒されて外されてしまったのだ。

内心に無念を抱きつつ、艦隊の指揮権を移譲するしかない。

パウルス中将、アントニオ准将が新しく宇宙に上がってくる。グリーン・ワイアットはその二人と面識はあったが、これまでほとんど話したことはない。

「グリーン・ワイアット中将、貴官が手塩にかけた艦隊を預からせてもらう。よしなに頼む」

「パウルス中将、こちらこそお願い致します。後で目録をお渡ししましょう」

同じ中将だが任官順でパウルス中将がわずか先任に当たり、言葉使いもそれ相応になる。

パウルス中将の目には気の毒そうな色があつた。

失脚同然の憂き目に遭ったグリーン・ワイアットに対して同情しているのだ。ワイアットがいくら平然とした顔をしていても、突然戦力

を取り上げられたら心中穏やかなはずがない、パウルス中将はそう考えている。もちろん言葉に出すことはないが。

逆にワイアットはパウルス中将に実直そうな印象を持った。

「パウルス中将、現在ルナツーに停泊中の艦艇は戦闘用だけで580隻、MSも充足率は100%、内容としてはジム・カスタムに加え、新鋭機ジム・クウエルが配備されつつあります」

「連邦にとって至宝ともいえる戦力だ。しかしジム・クウエルとは？ 確かジム・カスタムをベースにルナツーで開発したMSだと聞いた。ワイアット中将、貴官が太鼓判を押しているほどの高性能MS、大いに期待できるな。いや、それは活用が楽しみだ」

特にワイアットは恣意的な報告をするつもりはなかった。

包み隠さず情報を渡す。ルナツーの戦力はワイアットの私兵ではなく、それくらいはわきまえているからだ。

ここで会話の切れ目を待っていたのだろう、パウルス中将の連れていた参謀団の中の一人が敬礼と共に挨拶を言ってくる。

「パウルス中将麾下の参謀長を拝命しましたアントニオ准将であります。この戦力をもってコロニーレーザーを必ずや守りましょう。もしジオンが知るところになれば、どんな手を使っても破壊しようと企むのは明らか。正に死に物狂いの攻勢に出ると予想されます」

アントニオ准将は裏表のない頑固な軍人氣質のようだ。上層部の思惑など考えることもなく、命じられた使命のため全力を傾けるタイプなのだろう。そんなところはダグラス・ベーターと似ているな、とワイアットは内心で苦笑する。ダグラス・ベーターのことも政治的な頭のない単純馬鹿と思っているが別に嫌いなのではない。

ともあれ、艦隊指揮を渡すにあたって、さほど無能というわけでない将に渡せるのは安心材料である。

「ああ、アントニオ准将、その通りだと私も思う。ジオンの最後の悪あがきを止めるため、存分に艦隊もMSも使ってほしい」

連邦のコロニーレーザー完成まであと三週間に迫った。

ところがここでルナツーへ尋常でない報告が入る。

「月からサイド5への航路で無人ブイからのシグナルが消失！ 哨戒艇は全て通信途絶！」

何事が起きているか、その意味するところは高い確率で一つしかない。

ジオンの大部隊が動き始めている証拠だ。

第二次ルウム会戦が間近に迫っている。

連邦とジオン、どちらにとつての悲劇になるか、まだ誰にも分からない。

第百六話 ルウムの罠

連邦軍ルナツー基地はにわか慌ただしくなる。

ジオンが大作戦を展開しようとしている中、直ちに対処に動き出す。

連邦軍にとって最も重要なことはジオン側の狙いがどこにあるのかということだ。

ルナツーが掴めたのは、ジオン、月面、そこからサイド5へ向けての航路で異変が起きていることだけだ。しかも今、その索敵はできず、全体像が掴めない。

しかし、だからといってじっくり構えていいわけではない。ルナツーはそれらに対して地球を挟んだ反対側の位置であり、サイド7以外のコロニーへ距離がある。そのため初動が遅くなるわけにいかない。

ここでパウルス中将が断を下した。

「向こうの意図はまだ判然としていない。だがしかし、こちらの優先順位は明らかだ。コロニーレーザーを完成まで守るため直ちに増援を派遣する。アントニオ准将、六十隻を率いて出立し、現在サイド2のコロニーレーザーを守備している三十隻と合流してこれを守れ」

これはまた思い切った指示である。参謀長を分艦隊司令官職に振り替えるのは異例のことだ。下手をすると、参謀長人事を決めた連邦上層部の機嫌を損ないかねない。

「アントニオ准将、いったん君を参謀長から解く。元々君は参謀職ではないし、守備戦に長けていることはことでは連邦随一だろう。コロニーレーザー守備に万全を尽くすためにも、君に行ってもらわなければならない」

「はっ！ コロニーレーザー守備部隊を編成し、最善を尽くします」

「よし、それでいい。私の越権かもしれないが、今はそんな場合ではなく、臨時の参謀長として次席参謀のモニカ・ハンフリー大佐を充てる」

これには傍らで聞いているグリーン・ワイアットも少なからず驚く。

パウルス中將は実力がある。思ったより柔軟な思考をして、出した結論も申し分ないではないか。

続けて話していくことも実に合理的だ。

「そしてこの時期の大規模軍事活動とは絶対に偶然ではない。ジオン側がコロニーレーザーの情報を探んでいるか分からなくとも、そうだと思っておくべきだ。するとジオン側は陽動をかけ、こちらの戦力を足止めした上でコロニーレーザーへ猛攻を仕掛ける、この可能性が最も高い」

守備の名人アントニオ准將を建設中のコロニーレーザーに配置して備えをするのだが、同時にルナツーから艦隊戦力を出す。

それもまた思い切った数だ。

この際逐次投入などの愚策はとらない。連邦にとってこの重要な時期に出し惜しみをすべきではない。

「主力艦隊はもちろん私とダグラス・バード中將が率い、情報収集をしながら進みつつ柔軟に対処することにする。基本方針としてコロニーレーザーから決して離れすぎない航路を取り、下手な釣り出しには応じない。ここルナツーには直掩として五十隻を残し、他は全て出動だ。ワイアット中將、万が一ジオンの狙いがルナツーの場合、なんとかその戦力で防衛をやりきって頂きたい」

「パウルス中將、お安い御用、とは言いませんが成し遂げて見せましよう。ジオンが全軍でここを狙ってきたとしても、奪われる心配など不要と申し上げます」

グリーン・ワイアットは自信を持って答えるが、実際のところルナツーが攻められる公算はほとんどない。

ジオンが今さらルナツーを手に入れてもどうにもできないからだ。連邦がコロニーレーザーを完成させた段階で戦略攻撃が可能になるため、そこで勝負は付く。ルナツーの意義はただの停泊地に成り下がりに、その交換条件にもなりはしない。

艦艇総数480隻がパウルス中将に率いられ、地球連邦軍史上空前の大艦隊がルナツーを出港していく。

未曾有の艦艇数、まさに壯観である。

光の粒が果てしなく連なっていく。

しかもグリーン・ワイアットが手塩にかけて育てた優秀な艦隊、格子状に配置された形は寸分の狂いもなく、航行が始まって崩れない。

それを複雑な表情でグリーン・ワイアットが見送る。

「ステファン・ヘボン君。見とれるほどの大艦隊だね。これを見てスペースノイドどもが戦意を失ってひれ伏してくれば最高なんだが。まあ、戦うとしても普通にやれば負けるはずもない」

「ワイアット閣下、しかしジオンにはあのコンスコン大将がいます」
「確かにそうだ。私もそう思っていた。果たしてコンスコン大将ともあろうものが勝算の無い戦いを挑んでくるだろうか。もちろんコロニーレーザーのことを知って慌てて動いている可能性はあるが、どうもそれだけとは思えないね。いや、これはただの私の予感だよ」

「本来ならばこころルナツーで考えているのではなく、閣下が艦隊を率いているはず……」

「それはもう言っても仕方がない。私にできることはただの留守番だ。それもガディ・キンゼー君とエイパー・シナプス君は残ってくれているので、私はゆっくり紅茶を楽しむだけで済みそうだ」

ただしその予感がちよつとした不安に変わるまでさほどの時間は要さなかった。

ルナツーに報告が届いたのだ。

「ジオンの概略が分かりました！ 月近辺から移動中。戦闘艦艇百隻以上、そ、そして中央部にはソーラ・レイが含まれています！ ジオンのコロニーレーザー、ソーラ・レイが艦隊と共に移動を！」
「なるほど…… ソーラ・レイを動かしてきたか。まあそれぐらいは

ジオンも考えるだろうな。私からすれば予想外というほどのことではないのがむしろ妙だ。コンスコン大将にしては陳腐とも思えるが」

それと同じ情報が航行中の連邦艦隊にも届く。

パウルス中将と参謀団が直ちに協議する。

「ジオンは根こそぎ戦力を持つてきた。むろんジオンは確実にサイド2における連邦のコロニーレーザー建設を知っていて、これを稼働前に撃滅する気だ。そのために自分のソーラ・レイまで引つ張つてきたというところか。連邦の膨大な艦隊戦力を知っている以上、下手に艦隊だけで仕掛けてもムダ、対抗手段としてソーラ・レイしかないということだ。一発でも撃ち、かすりもすればそれで事が済むと踏んでいるのだろう」

「パウルス中将閣下。こちらのコロニーレーザーを守るには、早めにジオンのソーラ・レイを潰す必要が。向こうの射程は不明なれど、もちろん艦砲とは比較にならない距離でしょうから」

そう答えを返してきたのはモニカ・ハンフリー暫定参謀長だ。

これは連邦軍でも異色の人材である。士官学校首席から着実に実績を積み上げてきたのだが、何といつてもその冷徹な態度に特徴がある。鋼の淑女とも称される彼女はどんな場合でも顔色一つ変えず、その銀髪を揺らしもしないので有名なのだ。

「参謀長、確かにそうだな。こちらはジオンとコロニーレーザーとの間に遊弋して、やってくるジオン艦隊を横合いまたは後方から叩くのを想定していた。もはやそれは意味がない。下手に近づけさせてはならない以上、この艦隊戦力で向かい、ジオンのソーラ・レイを片付ける」

「少し後手に回ったのを認めなくてはなりません。しかし、それさえ成ればあとはどうにでもなるでしょう。ジオンの決め手を刈り取つてしまえば」

現時点ではジオンの方に戦術オプションが多い。

一直線に艦隊とソーラ・レイがまとまってサイド2へ殺到するか、あるいは連邦側を攪乱した上で密かにソーラ・レイを進ませるか、選

扱できる。

そのどちらでもなくソーラ・レイの方こそ陽動の捨て石に使い、艦隊戦力を全てサイド2に振り向けることすら考えられる。

パウルス中将と参謀団としてはそういった想定それぞれに対処を構築しなくてはならない。

ただし厳然として連邦艦隊は数で大幅に勝る。

よほど下手を打たなければいずれにせよ対処できるはずなのだ。薄氷を踏んでいるのはジオンの側だ。そして連邦艦隊にいるのは決して愚将ではない。モニカ・ハンフリーが指示を出す。

「ソーラ・レイのような大質量、いくら核パルスエンジンを付けたとしても速度が速いはずはありません。その進行速度と方向をできるだけ詳しく調査しなさい。偵察をありつただけ増やし、その労を惜しんではなりません」

そして判明したのは、思いのほかソーラ・レイの移動速度は遅かったのだ。

実にのろのろと動いている。

そして周囲にいるジオンの戦闘艦艇は170隻と判明した。連邦艦隊と比較したら少数にも見える数だが、ジオン側戦力の大半が参加しているのは間違いない。やはり連邦のコロニーレーザーを狙っての大作戦である。

「報告申し上げます！ ジオン艦隊とソーラ・レイ、月を迂回する程度の軽いスイングバイを行った後、そのまま進んでいます！」

パウルス中将はまるで予期したものとは異なる報告に驚いた。

「何！ 進路がそのままだと!? ではサイド2には行かず、地球かあるいはルナツーに行ってしまうではないか。そんなはずがあるか」

ここでしばし考える。ジオンはどういふつもりなのだ。

「ジオンは連邦のコロニーレーザーを無視する気か？ こちらの艦隊がルナツーを出たことを知らず、ソーラ・レイでルナツーと艦隊を叩けばいいと」

「パウルス中将閣下、それはありません。どうセルナツーまでの距離を考えたら、ソーラ・レイの接近を隠すことなどできず、急襲しての連邦艦隊殲滅など絶対にできません。向こうもそれは分かるでしょう。向こうの立場に立てば、苦勞してルナツーだけ手に入れてもこちらの大艦隊を逃したら連邦コロニーレーザーの建設は止まることとはなく、全くの無駄です」

「参謀長、その通りだ。では他の可能性を考えてみよう。まさかソーラ・レイを地球に墜とす？ いいやそれはない。南極条約に違反してしまう」

「それだけではありません。そのつもりなら何もソーラ・レイを使う必要がなく、もっと近いコロニーを動かしたでしょう。ソーラ・レイでなければならぬとしても地球にレーザーを撃つのは論外です。そこまで無駄をするなら核攻撃の方がよほど簡単ですから」

だが6時間後に届けられた報告で得心する。

「ソーラ・レイ、進路を曲げつつあります！ 予想ではサイド5をかすめ、サイド2へ向かう半月型のコースへ」

「やっぱりそうか！ ジオンのコース変更はこちらを惑わせるためのものだ。しかし最後はサイド2のコロニーレーザーを狙っているのは明らかだ。逆にいえばそこまで慎重にしなくてはならない、奴らにとって乾坤一擲の作戦ともいえる」

ジオンのソーラ・レイは月の裏から表側に出て、ゆっくり進んでいる。

報告の通り進路はややカーブを描き、月の正面に位置するサイド5をかすめ、そうしてから月の横方向にあるサイド2へ動いているようだ。

「よし、今から向かってこれを叩く！ 艦隊戦力ならこちらがはるかに勝る。ジオン艦隊の抵抗を排除し、ソーラ・レイの死角から攻勢をかけてこれを無力化する」

こうして急行するパウルス中将と連邦の大艦隊だが、案外と会敵ま

で時間を要した。何といってもソーラ・レイの加速が遅かったからだ。

そして両軍が相まみえたのは何とサイド5に隣接しているといつていいほど近い辺りになる。

それは因縁のルウムである。

戦争の初期、ここルウムにてジオンと連邦の大会戦が行われた。

その時の戦力は圧倒的に連邦が上だったはずなのだが、結果は誰もが知るとおりの敗北になってしまった。ジオンが新兵器MSを投入し、戦況を逆転させ、大勝利を収めた。

「ジオン艦隊とソーラ・レイ、捕捉。接触まであと二時間！」

一大決戦まであとわずか。これまでにない戦いが始まろうとしている。

第一百七話 必殺

ジオンと連邦の大会戦、その場はサイド5ルウムと定まった。再びそこで両軍が激突するのだ。

第二次ルウム会戦が始まる。

「向こうはかつての戦いにあやかってもいるのか……」

「パウルス中将、二度目はありません。今やこちらのMS戦力は充分、以前のようなことにはなるはずがなく、今度は連邦が勝ちます。しかし冷静さは必要でしょう。欲を出さず、ソーラ・レイを叩くだけで目的は達成できること、そのことも忘れてはなりません」

「モニカ・ハンフリー参謀長、その通りだ。あのソーラ・レイをとにかく損壊させる」

緊張の中にもしつかりと指令を伝える。モニカ・ハンフリーが練った案に沿って、パウルス中将は艦隊を動かす。

「全艦に伝える。相手のソーラ・レイを過度に恐れる必要はない。連射はできず、事実上一回しか撃てない性能だ。しかもジオンは最終的に連邦のコロニーレーザーを狙っている以上、ここで軽々しく撃つてくることはない。その時点で向こうの目論見は潰えるからだ。こちららは半包囲の陣形から攻勢をかけ、突破できそうなところから突入し、ソーラ・レイを破壊する」

連邦艦隊はジオン艦隊とソーラ・レイの正面ではなく後背に回り込み、仕掛け始める。

それはもちろんジオンが敗北を悟った後、破れかぶれのソーラ・レイ発射をしてくる可能性に備えてのものだ。その可能性はほとんどないがゼロでもない。

連邦艦隊は、重いソーラ・レイは簡単に進行方向を変えられないのを見切っている。

おまけに陣形を半包囲になるよう開いていけば、よもや撃たれても損害はさほどではない。これで連邦側は万全である。

ついに両軍接触、激しい戦闘が始まる。

艦からのメガ粒子砲が鋭く飛び交い、局所的にはMS同士の格闘戦も展開される。いったん始まった戦いは広がりを見せていく。

「どうだ、ライラ。その機体の性能は最高だろう。こっちの04小隊も新鋭機をもらって皆ご機嫌、負ける気がしないと浮かれてやがる」
「バニング大尉、こっちも良好、何も問題ない。確かにこのジム・クウエルの反応性の良さには驚く」

「そうか、だが言っておくぞライラ、病院から復帰したばかりのお前さんには敏捷なMSの方が体に負担がかかる。無理をするな」

「余計なお世話…… ではない。感謝する。しかし大丈夫だ」

「おつ、やけに素直じゃないかライラ。いや無駄口を叩いている場合ではないな。この辺りは古戦場、デブリが多い。戦う以前にデブリを撃って排除するだけでも一苦労だ」

「確かにデブリが多い…… もしかするとそれがジオンの狙いか？

それはともかくバニング大尉、奴が見当たらない。こんな戦場で見つけられていないだけかもしれないが、奴なら目立つはずなのに」

「奴？ ああそうか。サイド6の湖で会ったあいつのことだな。ガトーとかいうライラの騎士か。妬けるぜ。そうだな、見えていない。いやそればかりの話ではなく、ジオンの奴らはみなへつぴり腰で歯こたえがない」

連邦側の大軍を見てジオンが萎縮してしまったような戦いぶりであったが、全体の戦況としては互角で推移した。

それは連邦側の単純なミスによる。

そのことを最初に気付いたのはダグラス・ベーター中將だった。

万が一の場合の司令部全滅を防ぐため、ダグラス・ベーターは指揮の執りやすい八十隻ほどの分艦隊を編成し、そこに移っている。

「これは…… 未だ圧倒できないのは陣形が開きすぎなのだ。これでは我らの数の優位を活かせない。パウルス中將も参謀長もやり手だが、やはり宇宙戦の経験が無いというのがこういう場面で現れるのだ

な」

実際、パウルス中将は地上戦しか知らない。

そのため半包囲を広げ過ぎたのだ。

宇宙での包囲戦は二次元ではなく、三次元であるからには広げると急激に密度が薄くなり、局所的に数の優位を失ってしまう。

そういうことをよく知るダグラス・ベーターは、ジオンもまたそれに気付いて各個撃破をかけてくるのを危惧する。そのため、手持ちの戦力で強引に修正する。連邦の艦列の薄いところへ入り込み、補強にかかっていったのだ。

むろんそれを指摘されたパウルス中将も即座に修正する。

「なるほど、助かった、ダグラス・ベーター中将。では陣形をもう一度最適化しよう」

連邦艦隊は今一度態勢を整え、万全にした上で尚も多方面からジオン艦隊を攻め立てる。

ついにジオン艦隊は破綻した。

やはり最後は数の違いがものをいう。

ジオンの三倍近くにもなる数の連邦艦隊に長く抗していくのは無理だ。連邦艦隊を突破したり乱したりすることもできないうちに疲労が増していく。

ジオンの予備兵力は早々に尽き、防御陣の破れをモはや修復できない。

パウルス中将はここを勝機と見切った。

「よし、ジオンは崩れた！そこへ向けて突撃、ソーラ・レイを破壊するんだ。破壊自体はそう難しいことはない。外壁にちよつとでも破れを作ってしまったえばそれでいい。そうなればエネルギーは貯められず、レーザーの発振などできなくなる」

この指示を受けて真つ先に突撃したのはやはりダグラス・ベーターだった。

猛将にふさわしく一直線にジオンの艦列を撃砕し、ソーラ・レイを至近に臨むところへ辿り着く。

ソーラ・レイ、元は通常の居住型コロニーである。その外壁を破るために必要にして十分な攻撃を用意する。五隻ほどのマゼランを並べた上で主砲を同調させ、集中砲火をかけるのだ。

マゼランから一斉にメガ粒子砲が放たれた。

ソーラ・レイの一カ所に着弾する。そこからいくつものまばゆい光が飛び散り、それが終わると結果が分かる。

外壁にはつきりと分かる裂け目ができている。そこには明らかに内部にまで到達している穴が開いてしまっているではないか。

ソーラ・レイの機能は失われてしまった。

もはやレーザーを撃つことはできず、ただのガラクタに成り下がった。

これにより連邦艦隊の目的は達成されたのだ。局地的な意味だけではなく、戦略的にも勝利を収めた。もう連邦側のコロニーレーザー建設をジオンが妨害する手段はない。

ジオン艦隊はその結果に茫然自失しているように見える。次には戦いを諦めて逃げるようだ。

算を乱し、連邦艦隊から遠ざかるよう後退していくではないか。

「すみやかに追撃戦に移行する。ただし、逆撃には細心の注意を払い、無理をしない範囲で行う。ジオンはもはや後がない。もしかすると体当たり特攻すらあり得るからな」

もはや勝利しているが、それをいつそう完全なものにするため連邦側は追撃をかける。

ここでジオン側は妙な妨害をしてきた。

連邦艦やMSに直接的な損害を与えるものではないが、足を鈍らすには効果的なものだ。

「報告します！ 進路上にデブリが急激に増えています！」

艦橋に届く報告にモニカ・ハンフリーが対応する。

「ここにきてデブリが急に増える……いいえそんなことはない。こ

「これはきつとジオンの小細工、至急調査しなさい」

「判明しました！ ジオンの欺瞞工作です。バルーンとも違いますが見かけはデブリに見える障害物を作っているようです」

「排除は可能？」

「爆発物ではありませんので排除はできません。少し厄介ですが」

それはバルーンではなく泡状のプラスチックのようなものだった。バルーンとは違い、撃つても破裂して消えることがなく、弾が通過するだけでそのままとどまる。

面倒なことに、ルウムはこの辺りは前回の会戦の残滓として浮いている本物のデブリも多いため、見分ける手間が必要になる。この欺瞞の物なら軽いので当たってもどうということはないが、それと間違つて本物のデブリに当たったら大変だ。MSなら一瞬で大破である。排除したり避けて通るのが無理というわけでもないが、連邦艦隊とMSの足止めになり、その隙にジオン艦隊はやや後退することができた。

ただしソーラ・レイは彼方に捨て置いている。

確かにレーザーの撃てない今となってはジオン艦隊にとってソーラ・レイはただのお荷物、利用価値は何もなく護るべき意義はない。

やつと障害物を抜け、それを後にして連邦艦隊が前進する。充分にジオン艦隊に追い付けると判断してのものだ。

ジオン同様、価値のないソーラ・レイには目もくれない。

連邦艦隊が再びジオン艦隊を捉え、最後の殲滅戦が始まろうとした時のことだ。

突如、異変が起きた！

「パウルス閣下！ こ、後背より敵襲!! ジオンMS多数接近、間もなく後衛が取りつかれます！」

「な、何だと!? 後背からとは、何も無かったではないか!! それともう至近に? いやそれを言っている場合ではない。直ちに弾幕を張れ! MSも回し、迎撃させろ」

しかし連邦艦隊がジオンMSの餌食になる方が早い。完全に後手に回ってしまう。

パウルス中將が驚くのは当たり前だ。

ジオンのMSが突如として襲ってきたのだ。まるで魔法のように思いもしない方角から。

「閣下、分かりました！ ジオンMSは何とソーラ・レイから出ています！ 最初から内部に潜んでいたとしか」

それは艦橋オペレーターの言う通りだった。

ジオンのMSはソーラ・レイの開口部から出ている。それも二百機に及ぶほどの数だ。

考えるまでもなくジオンの大型空母が内部にいたのだろう。

「やられた!! ソーラ・レイはレーザーを撃つためのものではなかった！ 全てはジオンの策、最初からこの艦隊を狙った罠だ。こちらの油断を誘い、奇襲をかけるための入れ物に使っていたのだ」

「そ、そんな、MSを中に隠して持つてくるとは、まるでトロイの木馬では」

第百八話 後始末

「正にトロイの木馬だ！ ソーラ・レイにまさかMSを仕込んで奇襲とはな。しかもさっきのデブリの欺瞞は時間稼ぎのためのものではない。今にして思えば、こちらの後ろからMSが気付かれず接近するためのものだったのだ」

パウルス中将はさすがに激情を発することはなく、将たる責任を放棄したりしない。むろん、モニカ・ハンフリーも同様である。

「パウルス中将、まんまとしてやられたのを認めなくてはなりません。思えばソーラ・レイへの攻撃が成功したのも、ジオンが慌てて後退していったのも、このための擬態だったのでしょう。こちらが追えば自動的にソーラ・レイは後背に位置することになりますから」

「そうなのだろう。ジオンは実に用意周到で、この瞬間のためにすべて計算ずくだった。なぜ気付かなかったのだろうか。ジオンはおつと必死でソーラ・レイを守ってしかるべきだったのだ。ジオンにとっては存亡の境目にあるというのに、戦意が薄く見えたのがおかしいと思うべきだった」

「こちらが大艦隊でやってきたのがかえって仇となりました。損害が大きくなり、連邦の戦力が一時的にでも減れば、悠々とジオンは連邦コロニーレーザーを叩くためサイド2へ行くでしょう。さすがのアントニオ准将といえども、こちらの支援なしでは…… ジオンの大攻勢を一手に引き受けるとなると耐えられません」

「参謀長、逆に言うところここで負けたとしても損害を最小限に抑えればよい。そうすれば最悪でも戦略の崩壊は防ぐことができる」

「中将、その通りです。アントニオ准将と力を合わせ、サイド2に行こうとするジオンを挟撃し、追い払う戦力さえ残せば」

だがそれすら無理になりつつあった。何といたっても背後から急襲を受けたのだ。機動力のあるMSでそれをされたらたちまち損傷する艦が増えていく。

それだけではない。

連邦艦隊の混乱を見計らったかのように前方のジオン艦隊が一転して大攻勢に出ようとしている。

戦いは連邦の完全勝利から一変し、狩られるのは連邦の方になった。

もちろん連邦側も奮闘し、数の優位から熾烈な弾幕を張る。

しばらくはそれでジオンMSを撥ね退けていられたのだが、それでもかいくぐって接近してくるジオンMSがいる。

連邦MSも迎え撃つべく必死で頑張る。その機体性能と数は伊達ではない。

ただし局所的に見れば事情は異なるのだ。ジオンのエースクラスを長く押しとどめていられるものではなく、ついに突破を許してしまう。

最も目立つのは赤い彗星、それが連邦艦隊に躍り込む。

獲物は狙い放題、的確に艦のエンジン部を撃ち損害を与えていく。それは必ずしも撃沈を狙ったものではなく、航行不能か大破を意図している。

続けてエースクラスのジオンMSたちも連邦艦艇に打撃を与え始める。そうなれば連邦艦隊は統制弾幕を乱され、最終的に大量のMSの乱入を許してしまうことになる。

乱戦になっても連邦MSはジオンMSを駆逐しようとするが、反撃を試みるが、そこへジオンの強力なモビルアーマーが立ちはだかつてくる。

大型モビルアーマー、エルメス、それが二機もいるのだ。繰り出す悪夢を撥ね退けることはできない。

戦いの趨勢は決した。

もはや連邦側が立て直して再攻勢に出る余裕はなくなった。

「ジオンの奇策が痛すぎる…… じりじりと削られる前にこの戦いは諦め、艦の損耗を防ぐ。もはやそれだけが次に繋ぐ道だ。全体として密集陣をとりながら、全速で戦場を離脱する。針路は前方のジオン艦

隊と後方のMSを避けるため、直角方向にとる」

パウルス中将はそう指令し、転進する連邦艦隊だが、狙いすましたようなジオンMSの先回りが待っている。

ジオンは既にそこまで読んでいたのだ。

その時、俺はやっと安堵している。

慎重に策を運び、ようやくここまで来た。

あの将官会議で俺がソーラ・レイをただの入れ物に使うと言った時、ジオンの諸将は皆驚いた。確かに突飛な策、通常を考えつくようなものではない。

しかし俺が考えるにソーラ・レイでレーザーを撃つことに使う方がよほどリスクがあるのだ。

あんな大きいものを形を歪めないで動かすこと、連邦コロニーレーザーを狂いなく射程に収めること、それまで連邦艦隊の妨害を何とかすること、どれをとつても難しい。もちろん技術的にも、そして戦術的にも。

それならMSを隠すために使った方がはるかに簡単ではないか。

「その理屈は分からんでもないが……　しかしコンスコン、大胆不敵だな」

「ドズル閣下、そうでもしないと、劣勢のジオン軍が打つ手はなくなってしまう」

「もしも事前にバレたら籠の鳥だぞ。ソーラ・レイごと囲まれて開口部に集中砲火、逃げ場もなくやられるだけだ」

「連邦によほどの切れ者がいればそれも有り得ますが……　もちろんドズル閣下、うまくいくよう条件を整えますので、それもお聞き下さい」

そして再び俺が話すと諸将はもう一度驚くことになった。

その興奮が覚めやらぬ中、キシリア閣下がまとめた。

「どうだ皆、他に案を出すまでもなからう。これにはまず間違いなく連邦も引つ掛かる。さすがにコンスコン大将、少なくとも戦場で敵に

回したくはないな。詳細は後で詰めるとして、まずはマ・クベ少将、カスパン少将、ソーラ・レイを移動させるためのエンジンの調達と取り付けを頼む」

そしてジオンの作戦は発動された。

俺は乗りなれた旗艦ティベではなく、ドロス級超大型空母ドロワに乗り、ソーラ・レイの中に潜む方の役を担っている。ちなみにソーラ・レイの内部に係留しているので振動は少なく乗心地はいい。

もちろん作戦の最後の最後に的確なタイミングでMSを発進させるためだ。

今回二百機ものMSをただソーラ・レイに潜ませるわけではなく、ドロワとドロスの二隻を動員している。さすがにジオンの誇る大型空母、これでMSとモビルアーマーを充分収容できる。コンスコン機動艦隊自体はデラミン准将に任せて本隊の方に置いていた。本隊があまり手薄過ぎて連邦に疑問を持たれてしまっただけではない。

今回の作戦のキモは何といっても連邦艦隊をルウムに誘い込むことだった。

ソーラ・レイにMSを仕込むアイデアだけではうまくいかない。ルウムのデブリがなければ、意表をついての奇襲ができないからだ。戦場をルウムに定めること、つまりここで連邦艦隊と会敵すること、それが作戦成功の絶対条件になる。

そのためソーラ・レイの移動速度に神経を使った。

この超重量物はそのなに加速減速ができない。

連邦艦隊の接近速度を考えて調節するのがどれほど面倒だったことか。

「くそつ、連邦側は案外慎重だな。おまけに、どちらかというサイド2寄りに航路をとっているのか。では速度を少し落とさねば行き過ぎてしまう」

それでもタイミングが合わないと見て、俺はルウムへの進路をややカーブさせ、遠回りにするという方法まで用いた。その針路のことで

連邦艦隊司令部を無駄に悩ませることになったことなど知らない。

苦勞の甲斐あって連邦艦隊をおびきよせることに成功し、ルウムで戦いが始まった。向こうは縁起が悪いことなど気にしていないようだがおまけにデブリまで考慮しなかつたらしい。

ただ安心にはまだ早い。

やってきた連邦艦隊は俺の予想をはるか上回る大艦隊だったのだ。これには多少肝を冷やすことになる。

「これは…… 連邦がよもや艦艇480隻まで繰り出せるとは思わなかった！ くそつ、まずいな。このまま一気に急戦で蹴散らされたらたまらんど。策を出すまでもなく押し流されて丸ごと終わりだ」

危惧しながら連邦の出方を見守る。

勝負はそこにかかっているのだ。

しかし連邦はソーラ・レイを過剰に恐れたのか一丸となって突っ込んでくることはなく、むしろ密度が薄過ぎるくらいの包囲陣形をとっていた。連邦の指揮官は慎重だ。常識的といってもいい。

これには大いに助かり、一つの危機を乗り越えた。

次に本隊のドズル閣下やデラーズ少将は上手に演技をやってくれた。連邦の攻勢に耐えかねたフリをして、ソーラ・レイ近辺を手薄に見せかけたのだ。まんまと連邦は乗せられソーラ・レイに攻勢をかけ、その側面に傷をつけた。これでもう連邦は油断をするだろう。ソーラ・レイは使い物にならなくなったと断じ、ノーマークにするはずである。

ちなみにソーラ・レイの開口部はカバーで閉じられているので内部を見られる心配はない。

それもまたデブリの宙域を選んだ利点だ。

ここを通過するにはデブリを内部に入れられないようカバーするのは当たり前のことであり、連邦だってそれを疑うことはない。

その後、ジオン本隊は慌てて逃げるフリをする。それだけではな

く、ソーラ・レイがうまく連邦艦隊の後背に来るよう進路を誘導しながらだ。

おまけに欺瞞のデブリ様の障害物を置いていく。

これを単純なバルーンにしなかったのは俺のアイデアではない。キシリア麾下のサイクロプス隊から上がってきたアイデアである。なんでも先の地球降下作戦においてダミーバルーンが早々と片付けられ、そのためサイクロプス隊は予想より早く連邦に追跡されてしまい、苦戦したとのことだ。傷付けられても破裂しない泡状のダミーを作ることに、アイデアさえあればマ・クベ少将が形にするのは容易である。

「よし、今だ！ MS及びモビルアーマーは全機発進！ ダミーを利用しながら連邦艦隊に接近、急襲をかける！」

頃合いを見て俺は指示を飛ばし、今か今かと待っていたジオンの主力であるMSたちが勢いよくソーラ・レイから出ていく。

ちなみにMSの数としてはもちろん本隊にいるMSの方がずっと多いのだが、そつちには単なる数合わせのための新兵が多数交ざっている。彼らの中にはまっすぐ飛ぶ操縦がやっとできる程度であり、戦闘などとうてい無理なレベルの者さえいる。

それでもジオンのため立派に案山子の役に立ってくれたのはありがたい。

尤も、そういうヒヨツ子を心配してカスペン少将がお守りについていてくれたわけだが。

一番早く連邦艦隊に取りついたのでシャア少将だった。

この展開はもやお約束、俺は苦笑いするしかない。将帥がすべきでない軽率な行動ではあるが、本人がどう思うかにかかわらず、兵たちの士気を鼓舞するのは確かなことである。

それよりは目立たないが、シャア少将の横でおかしな挙動をしながら戦果を挙げていくのはキャラ・スーンなのだろう。

他にもエースがいる。デラーズ少将から派遣され、このドロワに相乗りしていたラカン・ダカランもさすがに実力を見せつける。

そしてもちろん、俺のコンスコン機動艦隊の誇る練達の者、シャリア・ブルやツエーンたちが真価を發揮する。

その中でもクスコ・アルはラアラのエルメスと共同で戦うことを選んだようだ。結果的に相当の数の数のビットが飛び交う濃密な空間、生き延びられる連邦MSはいない。

連邦艦隊はここで撤退に転じていく。

それは戦略的に正しい判断である。ここでの勝ち負けにこだわるよりも艦数を保持し、サイド2に建設中のコロニーレーザーを守る戦力に足す方がいい。

ただしそれは素直過ぎる。

ジオンの艦隊とMSとの前後挟撃を避けて、サイド2へ至る方向は限られている。俺は既にその逃走ルートへ戦力を派遣しているのだ。絶対の信頼を置くガトー、ケリイ、そしてダリルがいる。

残念なことにアクシズ開発の新型MSもモビルアーマーもこの会戦には間に合っていない。しかしダリル・ローレンツの乗るサイコ・ドワスだけはカーラ教授の努力によってなんとか形になっていた。

ガトーやカリウスが連邦MSの大群を相手にしても抑え切り、その間にサイコ・ドワスが連射し、続けざまに連邦艦へ被害を与える。

連邦艦隊は迎撃のため足を止めるのではなく加速する方を選んだ。抗戦する自軍のMSを收容し、ジオンMSが追いつけない速度に上げていく。MSは機動力はあっても長く最大推力を保つことはできず、速度における艦の優位性は明らかだ。MSのその弱点を克服すべく可変機の構想はあるが連邦もジオンもその開発には至っていない。

だが、連邦艦隊が安心するには早かった。

ジオンには一機だけ超高速を出せるモビルアーマーがあったのだ。美しい流線形を持つケリイのヴァル・ヴァロが加速し、恐れもなく連邦艦隊に飛び込む。むしろ連邦MSも出ていない今、行動の自由を得、艦隊奥深くまで入っていくつかの連邦艦に打撃を与える。

そして離脱に転じる最後の最後、とあるマゼラン級のエンジン部を

大破させるのに成功した。

「こちら連邦旗艦、エンジン爆散により艦橋司令部、被害甚大！ 緊急脱出するもパウルス中将並びに参謀団に負傷者多数！ パウルス中将は指揮権をダグラス・ベーター中将に委任すると言い残し、直後に昏倒されました！」

第百九話 散るべき時に

「このままルナツに撤退してはならない！ そうすればジオンは必ずサイド2に長駆し、コロニーレーザーを潰すだろう。そうさせないよう、こつちも進路をサイド2に取れ」

そうダグラス・ベーター中将が言う。もはや連邦艦隊司令部は機能不全、指揮権を移譲されたダグラス・ベーターが基本方針を決め、通達する。

さすがに反転攻勢という無謀なことはいししない。

だが戦略的に重要である連邦コロニーレーザーを守るのを諦めたわけではない。

「各艦、損害を調べ、至急報告しろ。特に推力が保てるかどうかと応急修理ができるかについてだ」

「報告します！ 残存艦、370隻。しかしその8割がたに損傷があります！ その中でも、出力低下を余儀なくされる中破以上がほぼ半数に及ぶかと。数時間の応急修理ではあまり変わらないと思われま

す」
「何だと…… そんなにか。これは思った以上に損傷艦の率が大きい。派手にやられたな。仕方ない、最大速度でも艦隊行動についてこれないほど損傷を受けた艦は大胆に廃棄、機動力を重視する」

連邦艦隊の行動に、すぐさまジオンも応える。

今度はジオンが追撃していくのだ。ここで連邦艦隊を逃したらコロニーレーザー破壊が成らず、詰んでしまうのはジオンの方だ。戦略的に瀬戸際なのはジオンである。

まだまだ連邦には戦力があり、予断を許さない。

ここからはお互い神経を使う戦いになっていく。

内容的には追うジオンの方が有利なのは当たり前前、連邦側に多く損害が積み重なっていく。

このままではいけないと判断し、ダグラス・ベーターは思い切った

方法に出る。

「損傷艦だけでいい。50隻ほどの部隊を作り、それを率いて逆撃に出るぞ。残り全艦はいったん広く展開し、全速でサイド2へ行け。ただし再び追いつかれるようならルナツーへ転じろ。奴らの狙いはあくまでコロニーレーザー、その時点で追ってくることはなく、無事に辿り着けるはずだ」

「閣下自らがその指揮を!? それではご自身が捨て石になると……」
「俺は本当なら以前の戦いでジーン・コリニー中将と一緒に果てるべきだったのだ。それが延びただけだ。ここまで命を永らえたのは、きつとこの時のためだったのだろう」

「まさか、中将、お止め下さい!!」

「もはや言葉は不要だ。散り際は心得ている」

そして連邦の猛将ダグラス・ベーダーは再び生きて還らぬ突撃に出る。

勢いに乗るジオン艦隊150隻も、鋭い逆撃を受けていつとき慌てさせられた。

ただし、ジオンにも豪胆で鳴る勇将がいる。

連邦艦の命知らずの突撃を受け止めてさえ、決定的に崩れることなく、突破や分断を許さない。

それはエギーユ・デラーズ少将であった。

「思いつきりのいい逆撃、しかも士気が高い。今向かってきたのは連邦の指揮官か…… 漢だな。ここに至って無謀という言葉は失礼だろう。俺も立場が逆なら同じことをする」

そして武人の心は武人が知る。

たまたまデラーズ艦隊のところに会敵したのはたぶん運が良かったのだろう。他ならば無駄に降伏勧告を発していただろうから。

「皆、武人の最期と思い、討ち果たしてやれ。ゆめゆめ敬意を忘れてはならんぞ」

中破、大破と損害が増すマゼランに乗り、ダグラス・ベーダーは指

揮を執り続けた。

しかしそれにも終わりが来る。

「突破して瓦解に持ち込む、そうはならんか…… どうやらここまでは。付き合ってくれた将兵には感謝する。最後までそうする必要はなく、俺の消えた後で白旗の信号を上げろ。だが、連邦自体は終わらんかじゃない。アントニオ准将もいるが、何ととってもルナツにグリーン・ワイアットの奴がいるからだ。正直に言うが、俺は奴が嫌いだ。良く言えば一筋縄ではない、悪く言えばひねくれ者にしか見えんからな。しかし将としての実力では奴ほど有能な者はなく、それは認めたくないが分かっていた」

激しいビームの雨が注がれ、ついにマゼランの艦橋にもメガ粒子砲が直撃する。

「グリーン・ワイアット、後は任せました！ 連邦は決して負けはしない！」

それが最後の言葉になる。

ひととき眩い白光と共に、連邦軍随一の猛将ダグラス・ベーダーはここに散った。

この時42歳、その人生の半分以上を連邦軍に捧げてきた。

一言で言えば愚直な軍人であり続けた。

士官学校卒業時の准尉から始まり、運と実力、そしてひととき目立った敢闘精神により将帥にまで昇りつめた。

北米閥の一員とみなされたが、本人はそんなことを考えてもいないし、むしろ徒党を組むのは武人のすることではないと嫌っていた。

麾下の兵たちには厳しく当たることも多かったが、それにも関わらず敬愛を集めてきた将でもある。最後はレビル大将、ついでジョン・コリニー中將を補佐し、連邦軍宇宙艦隊の中核としてここまで戦いを続けてきた。

言葉通りに連邦の理想を信じ切り、上層部の腐敗などに目もくれなかったことが原動力ともいえる。その意味ではとても幸せな人生だった。

この結果は初めから約束されていたことだったのかもしれない。最後に見せた表情は満足とでもいうべきものだった。

少し後に、ルナツでこれを知ったグリーン・ワイアットは紅茶のカップを一つ余計に用意させ、手持ちの最上級の茶葉を使ってひときわ美味しい紅茶を淹れている。

「ダグラス・ベーター中将、君は確かコーヒーばかり飲んで、紅茶は嫌いだっただけだ。しかし生前はそうでも今は私と紅茶に付き合ってくれてもいいじゃないか。お互い反発ばかりせず、穏やかに、ね」

これはグリーン・ワイアットとしての鎮魂の儀式なのだ。

「君は、私とはやり方は異なるが、政治家どもと違って本当に連邦のために動いていた。心から単一国家、地球連邦の理想を信じていたね。政治の分からないアホウだと思っていたが、嫌いではなかったよ。おっと、口が悪いのは赦してくれ。だが、私からすればその純粋な軍人としての生き方がうらやましくもあった。こうして一回くらい紅茶を飲みながら話したかったものだ。けっこう紅茶もいいものだろう？ 後はゆつくり休みたまえ」

カップの端を指で弾いて鳴らす。その澄み切った音を聞きながら、ひねくれた友情がもたらす苦笑に代わり、目の光が鋭くなる。

これがグリーン・ワイアット、連邦軍最強の名将、艦隊戦の魔術師としての顔だ。

「ダグラス・ベーター、約束してもいい。またルウムで負けた？ そんなことはこの私がただの過去にしてあげよう。ジオンとの戦いは、必ずやなんとかしてみせる」

ダグラス・ベーターの殉死後、サイド2へ向かう戦いでついに連邦艦隊は力尽きた。

ジオン艦隊に再び追い付かれそうになっても、それでも粘る高い士気があったのは、ダグラス・ベーターの勇戦の置きみやげだろう。しかし最終的にはジオン艦隊の圧力に耐えかね、サイド2を目前にしなからルナツに転じざるを得なかった。決定的な損害、特に人員的な

損害を避けるにはそうするしかなかったのだ。

損傷艦から随時移乗してくる乗員を受け入れ続けたおかげでどの艦も満杯に近くなっていたからである。

俺もそれは分かっている。

この時には、俺はドロワから元のコンスコン機動艦隊の旗艦ティベに移っていた。

新兵中心のMS隊は艦隊から降ろしてドロワの方に收容させている。そして、機動力が弱いため艦隊戦に不向きなドロワと共に留め置いていた。

代わりにガトー隊などに入れ換え、本来のコンスコン機動艦隊として他の艦隊と共に追撃戦に加わっていた。

「そろそろ連邦艦隊は限界だ。サイド2方面から航路を転じた後は追撃無用、攻撃してやるな。欺瞞かもしれないが、連邦艦に詰め込まれた将兵が戦闘に参加してもいないのに無駄に死なせるのは…… 気分が良くない。そうドズル閣下にも伝えよう」

後半は独白のようなものだ。だが本心でもある。

「戦争でいかに効率的に殺し合うかを競っていると、だからといって戦いに参加しているわけでもない兵たちを一方的に殺しまくるのはだめだ。それは悪行であり、すべきことではない。少なくともジオンの方は」

俺は周囲を見ていない。

どうせガトー君がキラツキラした目になっているのは分かっているんだけどな！

実は連邦艦隊はサイド2に直接行かなくなったとしても、近くのサイド6に寄り、手早く修理を済ませてから再びサイド2に向かうことまで視野に入れていた。

だが結果的にこれはならない。驚いたことにサイド6の方から寄港を拒否していたのだ。

宙域ブイの傍に巡視艇を出してまで拒否の姿勢を保っている。

「こちらサイド6管制官カムラン・ブルーム。接近中の連邦艦隊は直

ちに引き返すよう。病院での治療を要する負傷兵以外、サイド6は受け入れをしない」

こんな緊急事態であるのをあえて無視し、寄港艦数の制限を盾にとっているとは。

これは虫のいいことばかり言ってくる連邦に対するサイド6なりのしつぺ返しという側面もあるかもしれないが、立場を表明するちようどいい機会でもあった。もう連邦に遠慮などしない。

こうして連邦の大艦隊を追い散らしたジオン艦隊は、予定通りサイド2にある建設中コロニーレーザーを破壊しに向かう。それが作戦の唯一最大の目的だ。

もちろん、ここからも決して簡単というわけではない。

またしても連邦軍が立ちほだかる。

今度はアントニオ准将率いる90隻の艦隊がそれを邪魔すべく迎撃してくるのだ。連邦は戦力も人材も尽きてはいない。

「何としても守り切れ！ 決してそれは無理ではなく、勝機はある！ ジオンは150隻以上の数といえど、連戦の上、長駆して疲れている。本来の戦力は出せない。守備というのは根くらべなのだ。粘りに粘れ。時間をかけ、消耗を増し、疲弊させろ。そうすれば諦めるのは我々ではなく奴らの方だ」

アントニオ准将の統率の下、しつかりと編まれた守備陣によりジオンの攻勢に押されながらも崩されたりすることはない。それどころかアントニオ准将は合理的な戦術を思いつく。

さすがに連邦軍の誇る守りの名将だ。

「作りかけの太陽電池パネルを盾にしろ！ そこに潜み、効率的に攻撃を仕掛けるのだ。この際パネルが損傷しても構わん。それを何段階も使って退きながら行え。つまり、向こうに出血を強い縦深陣だ」

ジオンもいったんは攻めあぐねる。

確かにこれではうかつに進めなくなり、いたずらに時間が過ぎてい

く。

実のところジオン艦隊はここまでの戦いで実体弾や推進剤といった物資の消耗が激しく、残量が気になり始めている。

そのカウントダウンがあるのだ。ここで粘られると痛い。

第一百十話 第三の思惑

連邦のコロニー守備隊は思った以上に巧妙な戦術を使い、粘ってくる。

俺はそれについて対応を考えなくてはならない。

「なるほど、連邦にはいい指揮官がいるようだ。上手い戦術をとってくる。パネルを使った縦深陣で少しずつこつちに出血を強い、根負けさせるつもりか。こちらも下手な力押しでは息切れして向こうの思う壺にはまってしまうな。もうこれは丁寧に一つずついくしかないだろう。だがしかし、使えるパネルの数といっても無限ではあるまい」

俺はジオンの百戦錬磨のMSを使いながら着実に進攻していく。パネルの陰に隠れた連邦艦を始末するには一気に多方向から攻め立て、方向転換がままならないうちに叩くのだ。

こうしてジオン側は再び前進を始め、何とかかなりそうな戦況に変わった。しかしここで連邦はまたしても戦術を工夫してこちらを悩ませてくる。連邦の守備隊はかなりしぶとく、そうそう簡単には終わってくれない。

何と連邦側は集積されている建設資材をあえて撃ち、デブリとして大量に撒き散らしてきたのだ！

それらをかきまぜ、ジオンの艦隊とMSへぶつけてきた。

ここら一帯にはコロニーレーザー建設のために資材が大量に係留されていて、この戦術が可能な条件が整っている。

これには驚いてしまう。

確かにそういう戦術もあり得くはないが、これでは後の処理がとんでもなく大変だろう。正に捨て身とも言うべき守備戦術ではないか。

ただし、そういった巧妙な足止めを受けながらも、ジオンの方も決して諦めず、尚も抵抗を排除していく。簡単に諦めたらここまで作戦を進めてきた甲斐がない。

連邦が必死ならジオンだって必死なのだ。

損害が出る、物資が残り少ないなどと言ってられない。ここで止まらず、何としてもコロニーレーザーを破壊する必要がある。

均衡から少しずつ連邦側の敗色が濃くなり、ジオンが押していく。最終局面に近い。

仮にこれが地上戦だったなら守備にもっと多様なオプシヨンがあっただろう。この程度の戦力差ならば、守備に徹すればまず負けることはないと言えるほどに。守備に長けた将がいれば言わずもがなである。

しかし宇宙での戦いでは工夫にも限界があり、通常ならストレートな実力勝負になってしまうものだ。

逆に言えばここまで粘って守備をしてきただけで大したものなのである。

ついにアントニオ准将も断念する時が来る。

仕方なく、コロニーレーザーの希少資源を奪われないようレーザー発振部を破壊し、制御装置も爆破、ソフトも完全消去してからルナツーへ撤退する。

「連邦艦隊、まとまって後退していきます！ サイド2からおそらくルナツーへ」

「よし・ ようやくだ。やっと作戦目的を完遂できる。連邦の思惑を打ち砕き、ジオン本国のコロニーをレーザーから守れる」

第二次ルウム会戦でジオンが勝利した意味があった。

もはや憂いはなくなった。

連邦のコロニーレーザーによってジオン本国のコロニーが撃たれることはない。それだけではなく、スペースノイドをアースノイドが支配する芽を潰すという大きなことを成し遂げたことになる。

もうコロニーレーザーという共通の恐怖は取り払われたのだ。

ジオンはそれを二度とコロニーレーザーとして使えないよう措置を施し、少数の守備隊を置いて本国に凱旋する。

これからは連邦もジオンも、巨大兵器に頼らず、再び艦隊とMSの

戦いになる。まあ、ジオンが勝ったといってもそれだけのことだ。戦いはまたしても振り出しに戻った、というだけの。

とはいってもしばらくは戦いはないはずだった。

ジオンは連邦をエネルギー資源で締め上げるのを基本としている。粛々とその輸送を断ち続け、連邦を干上がらせていくだけだ。

今、ジオンの方から積極的に会戦に持ち込む必要を感じない。

連邦は連邦でルナツーへ命からがら辿り着いた損傷艦を修理し、負傷兵を救護するのに躍起であり、直ぐに会戦を仕掛けるような余裕はない。

だがしかし、運命はひとときの安寧も許さなかったようだ。

次の戦いはそう遠いことではなくなってしまう。

それは連邦もジオンも思いもしないことがきっかけになった。

連邦でも、ジオンでもないものが波乱をもたらすなど誰が想像できただろう！

俺は今、目の前の一人の男を見ている。

まだ年の頃は20、21といったところか。しかしもう少年といったような面影はない。

それどころではなく、野心を隠そうともしない不敵な佇まいだ。

長くきれいな薄紫の髪になぜか細い環状の髪留めを付けている。

そしてほっそりした体形に連邦の白い軍服を着こなす。一見すると清潔感があるのだが、不穏な感じが拭えない。

「コンスコン大将、お初にお目にかかります。私の名はパプテマス・シロッコ、身分は一応連邦軍准尉になります」

ここで一段と俺の頭痛が酷くなった。実はこの広間に入らないうちに頭痛が始まっていたのだ。頭痛はこれままでになかったほど強くなり、それに比べたらシャア少将から感じるものなど春風のようにだ。

その原因であるこの若者、シャア以上の何かをこの者が持っているということの意味する。

それを置いておくとしても、言葉は丁寧だが全く相手を尊敬していないのが雰囲気伝わってくる。

この場にいるのは今到着した俺の他に、キシリア閣下、ドズル閣下、それとマ・クベ少将である。つまりは一国の首脳部なのである。普通の准尉ならそれこそ震え上がって言葉も出ないところだ。それを少しも恐れた様子がないとは、よほどの自信家なのか。それもまたシャア以上のようだ。

いいや、そもそも連邦軍籍と言っている者がここズム・シティ庁舎の中の広間にいるだけで充分におかしいのだが。

俺の疑問の表情をキシリア閣下が見て取ったのだろう。この広間にわざわざ遅れて到着した俺のために説明してくれる。

「コンスコン、やはり驚いたようだ。ドズルの兄上やマ・クベ、そしてお前を呼んだのは、この若者に会わせるためだ。ちなみにこの者が連邦軍籍なのは便宜上のことで、連邦の船にいるからに過ぎない」

「便宜上とは？ キシリア閣下、分かりにくいのですがそれはどういう？」

「ふふ、その連邦の船というのはジュピトリスだ。コンスコン、聞いたことはないか」

「ジュピトリス…… ジュピトリスというのは、まさか木星船団公社の持つ最大のヘリウム3輸送艦でしょうか？」

「そうだ。そのジュピトリスがスイングバイ軌道に乗るため、間もなく地球圏に到着する。もちろん、ヘリウム3を満載してだ」

「しかし木星船団公社は中立なのでは。そのジュピトリスの者がここにいるとは…… もしかするとジオンのヘリウム3輸送破壊に抗議してきたということでしょうか」

俺は気を回し、その懸念に思い至った。

ジオンは今まで木星船団公社そのものに手を出してはいない。

地球連邦にもスペースコロニーにも平等にヘリウム3を供給する公社に手を出してはならない。条約で禁じられていることでもあるし、公社の心証を害してはいけないからである。

しかしながらジオンは木星船団の輸送艦から積み荷のヘリウム3が連邦艦へ渡される場所を類推し、その後、連邦輸送艦の方を攻撃している。こうして連邦がヘリウム3を手に入れるのを防いでいるのだ。

そうすればギリギリ言い訳が立つと計算している。

ただしそれはジオンの側から考えた理屈に過ぎないともいえる。

仮に木星船団公社がヘリウム3の利用開始までをその輸送責任と思っていたなら、そんな通商破壊を許すことはない。当然ジオンに抗議してくるだろう。そうなれば困ったことになる。最悪公社がそれに対し報復を考え、ジオンにヘリウム3を供給しないと決めたらとんでもないことになる。ジオンもはや連邦のことを笑っておられず、共に干上がってしまうではないか。

「コンスコン、お前の考えていることくらい分かっている。しかしそうではないのだ」

「え、そ、そうですか。ならば安心しました。キシリア閣下」

「それどころか面白いぞコンスコン。話はむしろ逆なのだ。この者はジュピトリスの正確な航路と連邦への受け渡し宙域データをジオンに渡そうとしてくれている。もしそうなればヘリウム3の襲撃もいつそうたやすくなるだろう」

「何ですと!?! それでは連邦を裏切ること! ジュピトリスは木星船団公社の輸送艦ですが、船籍は連邦籍のはずではありませんか!」
俺は驚きの連続に頭痛も忘れてしまう。

そんな重要な秘匿情報をジオンに渡すというのか。ジュピトリスの、こんな若者が。

木星船団公社の大型輸送艦はそれぞれに船籍があり、ジオンなどのスペースコロニーに属するものもあれば、連邦船籍だったりする。いやもちろん大半は連邦船籍だ。

各輸送艦にはそれぞれ船籍に応じた乗組員がいて、ジュピトリスには連邦士官や連邦兵がいる。逆にジオン船籍の輸送艦にはジオン士官が乗り込んでいるもので、ちょうどシヤリア・ブルがそうだった。だから俺が驚いたのだ。航路と受け渡し場所のデータを教えると

いうことは、積み荷を渡した後に襲撃してくれと言わんばかりなことである。

連邦に対する裏切りでなくてなんと表現できるだろう。

「…… キシリア閣下、二つ疑問があります。ジュピトリスの側にそうしなくてはならない動機があるのでしょうか。そして、この若者がそんな大それた話ができる理由も」

俺は思わず疑いの声を上げた。

この若者をなにか信用できなかつた。きつと裏があるに違いない。

俺の直感がそう告げている。

するとキシリア閣下ではなくこの若者が俺の方に説明してきた。

第百十一話 封じられた野心

パプテマス・シロッコという若者が俺に向かって流れるように言葉を発する。

「コンスコン大将、先ずは後の質問ですが、私はこのような若輩者ではありませんが、ジュピトリスにシンパは数知れずおります。僭越ながらやろうと思えば実力でいとも簡単に艦を制圧できるでしょう。尤も、その前に艦長以下中枢部は私に従うはずです」

「何だと…… その若さでカリスマ的なリーダーだともいえるのか……」

だがこのことについては、俺は妙に納得してしまった。このシロッコという若者は確かに言うだけの何かはあると思わせられる。そのカリスマ性に疑う余地はない。醸し出される存在感は尋常ではなく、積極的に従う者もいるだろう。

「そして最初の質問ですが、ジュピトリスの側が発端ではありません。連邦が原因を作ったのです。何しろ、ジュピトリスのヘリウム3を丸ごと連邦によこせと脅してきたのですから。連邦はジオンなどの受け取り分も奪う気になつていようで。困ったことに」

「ジュピトリスにあるジオンの分も!? そんなことが許されるものか！ どういうつもりだ、連邦は」

俺は思わずそう返してしまった。理由ははっきりしている。

木星船団公社はヘリウム3輸送艦を地球圏に向けて計画的に順次送り出している。ただし地球と木星の間は余りに遠く、片道でも3年近い航路になる。そのためジオンが連邦へのヘリウム3供給を断てば、その時点から連邦がいくら発注を増やしても3年はどうしようもない。そこが戦略の付け目なのだが今は置いておく。

木星船団公社はジュピトリスだけを保持しているのではなく、多数の輸送艦を保持しているのだが、それでもジュピトリスのような効率のいい超大型輸送艦は指折り数えるほどしかない。

一方、当然ながらヘリウム3の需要はコンスタントにある。

そこで、合理的に考え、船籍に関わらず積み荷はそれぞれの分と一緒に積み込んでいるのが普通なのである。例えば連邦の船籍でありながら、積み荷のヘリウム3はスペースコロニー用の分もあり、要するに相乗りで輸送しているのだ。

今のジュピトリスもそうである。ジオンが受け取るべきヘリウム3も載せられている。その区分は木星船団公社が厳密に管理していて、勝手なことができるはずもなく、もしも奪えば盗賊行為として重大な条約違反になる。

それなのに、連邦上層部はジオンの分のヘリウム3まで狙っているというのか！

ジュピトリスに脅しをかけて。

そこまで連邦のエネルギー情勢は逼迫していたのだ。

「これは…… 連邦もそこまで切羽詰まっていたのか。おそらくはスペースコロニーも木星船団公社も地球連邦という単一国家に属するから構わないという理屈を振りかざすつもりだろう。だがジュピトリスとしては受け入れられるわけがない。連邦の圧力と条約の順守、なるほどこれではジュピトリスも板挟み、考えざるを得ないか」

むろんジオンはエネルギー戦略を考えた方の側であり、ヘリウム3はある程度備蓄しているし、エネルギー供給という意味なら宇宙での太陽電池パネルは豊富にある。つまり連邦にヘリウム3を奪われてもさほどの打撃ということではない。

しかしそういう意味ではなく、ジオンのエネルギー戦略がゆらいでしまうのではないか。俺は同じく深刻な顔をしているマ・クベ少将に尋ねる。

「…… まずいな。戦略にも影響してしまう。マ・クベ少将、ジュピトリスのヘリウム3が丸ごと連邦に渡ったら、連邦はどのくらい凌げてしまうだろうか？」

「超大型輸送艦ジュピトリスの量なら、連邦で消費する分の二ヶ月、長くて三ヶ月に相当するものかと」

それだけの戦略の遅延は痛い。戦争の行方に重大な影響をもたら

し、正にターニングポイントになってしまいう可能性がある。

なるほど分かった。この若者の語る話は実に筋道が通っている。
しかしそれでも……俺は信用できない。

言葉に嘘はないのかもしれない。いかにも連邦のやりそうなことだ。しかしながらこの若者は連邦の暴挙に義憤を感じ、公社のためゾンヘ接近したという単純なことではないような気がする。

「パプテマス・シロッコ連邦軍准尉、連邦の条約破りのことは分かった。それならばジュピトリスの立場も理解できる。だが聞いておくべきことはまだ存在している」

「何でしょう、コンスコン大将」

「だからといってジュピトリスがジオンを利するというのは明らかに行き過ぎだろう。普通なら連邦にせいぜい抗議する程度のはずだ。ジュピトリスが一応連邦船籍であるからには、それがまっとうだ。ここでジオンにジュピトリスの航路情報を渡すとは、いったい引き換えに何が欲しい。穿った見方で申し訳ないが、シロッコ准尉がこの情勢を憂えるのではなく機会と見なしているような雰囲気さえある。はつきり言えば、取り引きをしたがっているように見えるのだが考えすぎだろうか」

「コンスコン大将は実に率直な方のようで、こちらも話しやすくなりました。では条件を率直に申し上げましょう。できればこの私にジオン少将の地位を頂きたく。最低でも准将の将官級にはしてほしいものです。もちろん、それに応じた艦隊指揮権も」

これには驚いた！

見返りとして何を要求するのかと思えば、地位とは、それもずいぶんなものではないか。

キシリア閣下やドズル閣下も驚きは一緒だ。キシリア閣下は紫のマスクをしているから分からないのだが、ドズル閣下は口を大きく開けている。

ここで判明した。この若者は実力があるかもしれないが、底知れな

い野心を持っている。

しかし少なくとも准将とは……

なるほど連邦を裏切り、決定的な打撃を与える功労に報いるといえ
ば、おかしいとまで言えないのかもしれない。

だが、それで地位を与えるのはまともな軍としてはあり得ないほど
イレギュラーなことである。

それ以前に、裏切りによつて成り上がるというのが俺としてはどう
てい受け入れられない。

しかし政治的判断をするのはあくまでもキシリア閣下かドズル閣
下のすることであり、俺からはそれ以上話すことはない。

ようやくキシリア閣下が申し渡す。

「パプテマス・シロッコとやら、即答はできない。翌日ジオンとしての
回答を伝える」

「分かりました。それからもう一言言い添えますが、今戦争で使われ
ているMSという兵器、まだまだ改善の余地があると感じました。私
にはいくらでもアイデアがあります。確信を持って言いますが、もし
も私にやらせて頂ければすぐさま向上するでしょう。それも数段階
は一度に」

これにはマ・クベ少将がピクリと反応する。

シロッコの大言壮語に興味をそそられたのか、あるいはプライドを
傷つけられたのかは分からない。

若者が悠々と退場した後、この場で少しばかり話し合いが続く。

「戦績もない者を、少将にできるか！ 話にもならん。将帥への階段
というものは血と汗で一步一步昇るものだ。第一、裏切り者など信用
できん！ ジオンに加えられるか！」

先ずはドズル閣下がそういう正論を言う。

当たり前だろう。俺も意見としては一緒だ。しかしそこを説得力
を持つ言葉に変えなくてはならないと感じ、俺が言葉を引き継ぐ。

「私もドズル閣下と同意見です。あの不遜な若者、いったんはジオン
に忠誠を誓うと言うでしょう。何を聞いても言葉だけは丁寧にし

かし内心がそうであるわけがありません。ということは、ジオンに加わるというのは意図があり、何かもつと大きな野心を隠し持っているということでしょう。おそらく、軍全体を意のままにしようとしてもあるいはそれさえ超え、ジオンそのものを手に入れ、とんでもないことを引き起こす可能性さえも」

ここでキシリア閣下が言葉を差し挟んでくる。

「では心配しているのかコンスコン」

「ジオンの結束を乱してはならないと考えます。少将なら中隊程度の艦隊指揮権があり、上層部に不測の事態があればもつと大きな権限も使えます。あのパプテマス・シロッコの実力があるかないかは未知数ですが、そんなことはどうでもいいことで、地位と戦力を与えるのは危険だと断じます」

「そうではないコンスコン。私が聞いているのは、お前が考えるようなことを私が考えていないと心配してるのか、ということだ」

「あ、いえ、キシリア閣下が考えておられなかったはずはなく、単なる確認までに」

「嘘つけ、コンスコン。私のことも信用していなかったくせに」

キシリア閣下が苦笑いを返してくる。

だがしかし、俺が言ったようなことをキシリア閣下も考えているということが分かった。

「コンスコン、あのシロッコがジオンに入り込むのは、お前もザビ家も倒しやがてジオンに乗っ取るつもり、そんなことはお前から言われるまでもない。あんな弁舌にごまかされるものか。だがな、政略というのは単純に白か黒かではなく、うまい落としどころで利益を得ることをいう。シロッコとどう折り合いをつけてジオンを利するか考えなくてはならない」

しかし、結局のところ折り合いはつかなかったのだ。

ジオンが代わりに金銭などをいくら提示してもシロッコが受け付けなかった。

物資管理などの後方職や参謀職に限っての准将にするといっても

首を縦には振らなかった。やはり地位そのものよりも自分が自由にできる戦力を手にしたかったらしい。

逆に、叛乱を起こされる危険はジオンが拒んだ。つまり艦隊指揮権を持つ前線将官にすることはジオンが拒否し、話はまとまらなかったのだ。

やはりシロッコは野心家だった。

そして野心家は野心が満たされないとどこにいても仕方がなく、あっさり去ってしまう。

これでジオンはシロッコ抜きに連邦の無茶に対し対策を考えなくてはならなくなった。最低でもジュピトリスにあるジオン分ヘリウム3を連邦に渡さないために。

しかし失意という意味ではおそらくシロッコの方が上だったに違いない。

事実、ジュピトリスの一乗組員に戻った彼は、野心を發揮する機会を一度も得ることができないうちに木星航路を往復するしかないのだ。むしろ今回の独断専行を公社に対して苦しい言い訳で切り抜けてはならないオマケ付きで。

「この私が、なぜ歴史に名を刻めないのか！ 船に乗っているだけで朽ち果てていけというのか！ 別に連邦でもジオンでもどちらでもいい。それを支配したいわけではなく、ただ歴史にどこまで関われるか、確かめたいだけなのだ。運命はそれを追い求めることすら許さないのか！」

それがどれほど忌々しいことなのかは本人しか知りようがない。大きな舞台に立ち、自分しかできないことを成し、世の流れを見たい、いくら願ってもジュピトリスの船内に野心は閉じ込められた。

同じ頃、遠くルナツーでグリーン・ワイアットが一息ついている。「あの若者の野心はならないだろうね。おそらく今頃はジオンに交渉しているだろうが、不調に終わるだろう。ジオンもそこまで馬鹿じゃないし、まともな組織ならあんな野心家を入れるわけがない。分かり

切ったことではあるが。ステファン・ヘボン君」

「何ですと！ あのシロッコとかいう若造が、ジオンに交渉とは！ いやしくも連邦軍准尉にあるものが裏切りとは赦せるものではありません。閣下、そこまで予想しておいででしたら即刻調査の上、結果がクロならばジュピトリスに叩き付け、断罪を」

「事を大きくすることはないよ。野心を叩き折るだけであの若者への罰としては充分だろう。まあ私としては方が一ジオンに組み込まれたら面白いと思っただけだ。ほっておくだけで充分ジオンに害になるだろうが、更に連邦へ寝返らせるといふ謀略が考えられるからね。楽しいじゃないか。スパイとして使う、暗殺をさせる、会戦時の重大局面で裏切る、どれも使えるオプシオンになる」

「そうですか…… あんな野心ばかりで忠誠の欠片もない者、こちらの謀略に使っても信用できるものでしょうか」

「君の言う通りだね。しかし仮定の話ばかり続けても仕方がない。今考えるべき問題は連邦の上層部の方だ」

「た、確かに…… 上層部がああ若造の下らない考えに焚きつけられることになったら、大変です。嫌な予感しかしません」

「私も全く同じことを感じているよ、ステファン・ヘボン君」

実はパプテマス・シロッコがジオンに対して隠していたことがある。

シロッコはジュピトリスの先遣という名目でルナツーにやって来ていたのだ！

それはジオンのズム・シテイに来て交渉をしてくる三週間前のことであった。

ルナツー司令官としてワイアットはパプテマス・シロッコと普通に会っている。

ジュピトリスほどの超大型輸送艦ならば、地球圏接近前に打ち合わせのため先遣隊を送ってもおかしくないと思ったからだ。

だが、そこでなされた会話は驚くべきものだった。

第一百十二話 風雲

ルナツーに到着したパプテマス・シロッコは、基地司令であるグリーン・ワイアットに直接目通りを願う。それは特におかしなことではないので容易にかなえられる。木星船団公社でも最大級の輸送艦、その先遣ともなれば階級に関係なく連邦として粗略に扱えないからである。

通常の答礼や連絡事項などはそこそこに済ませ、シロッコはワイアットに対して別の話を始めたではないか。

それはワイアットでさえ驚くべき内容だった。

「ところでグリーン・ワイアット閣下、今連邦がヘリウム3に大変困っている、いや枯渇しかかっていることを承知しております」

「ああ、その通りだよ。今さら隠し立てしても仕方がない。君も知っていたようだが、連邦は公社に大幅な追加発注をかけているはずだ。どうせ届くのは三年後になるが」

「むろん連邦の一員である私もその状況には大変憂慮しています。是非ともジュピトリスの連邦への輸送分はジオンなどに妨害されず、きちんと地球へ届けられ、使ってほしいものです」

「当然だね。シロッコ准尉の言うことはもつともなことだ」

ここでシロッコは本題に入る。それは危うい問題だ。

「しかしそれだけで足りるものでしょうか？ このジュピトリス以降、そんなに大型の輸送艦は地球圏に来ません。木星船団公社としても手立てはなく、閣下のおっしゃるように三年はどうにもできません。そこでどうでしょう。手近にもっと多くのヘリウム3があることはあると思われませんか。ジュピトリスにはスペースコロニー用のヘリウム3も積まれています、それはとても魅力的ではないでしょうか」

「…… 何かと思えば、スペースコロニーへ渡す分のヘリウム3の話とは…… 准尉、その話の意味するところは、まさか条約破りをしてまでも連邦が横取りするということかな」

「さすがに閣下、ご理解頂けましたか」

「無茶だな。准尉、仮定の話としては面白いけれど軽率だよ。君は言葉に気をつけた方がいい。うかつ過ぎる。聞いたのが私でなければ君は即刻処罰されたかもしれない」

「充分に言葉にも話す相手にも気を使っているつもりです。つまり閣下だからこそ、お話したということですが」

それは本当である。シロツコはグリーン・ワイアットの性質をよく見ている。ワイアットは軍人だが、同時に謀略家でもある。つまり、目的のためには形にこだわらず利用できるものは利用する。だからシロツコはこんな犯罪まがいの提案でも一応聞いてくれると踏んだのだ。これが直情傾向な将なら最初から聞く耳がないし、シロツコとしても難しい面があつただろう。

そしてシロツコの言いたいことははっきりしている。

何のことはない。

連邦がジュピトリスのスペースコロニー用ヘリウム3に目を付けたのではない。

逆である。シロツコの方から提案していたのだ！

「聞くだけ聞いておこう、准尉。ただの思い付きではないのだろう」

そして連邦でも柔軟な考え方をすると自他ともに認識しているワイアットである。

連邦を危険な方向へそそのかす話と知りながらも次を促す。

「簡単なことです。ジュピトリスはもちろん複雑なつくりの大型艦ですが、艦内に協力者がいれば、艦内のどこの区画にどれだけヘリウム3があるか分かるでしょう。そして配送ラインがどうなっているかも。その上で、システムを乗っ取れば全てのヘリウム3を奪うことも容易ではありませんか」

「全くその通りだ。しかし現実的には協力者が一人ではいかんともしがたいだろう。セキュリティがそんなに甘いはずはなく、システムも多重に組まれているはずだ。協力者、つまり君がどれほど動いてもそ

ううまくはいかない」

「それは存じております。実は下準備も終えていて、配下を協力者として組織化し、いつでも使えるところまで整えてあります」

「何、もうそこまでしているのか…… この私が驚かされてしまったよ」

合理的に質問を投げかけたワイアットだが、シロッコが既に動いていることを知って意外に思う。組織が作れるということはシロッコはこの若さで人心を掌握する術を持っているようなのだ。しかしそれが逆にワイアットへ警戒心をもたらず。

「准尉はとても用意周到だね。しかしもう一つ懸念があるが、連邦がヘリウム3を奪うのに協力するとはジュピトリスにとつて叛乱のよなものだ。連邦のためといえは聞こえはいいが、公社への裏切りだよ。当然その後、君と配下の者の居場所はどこにもなくなることになるが、それについてはどうかな」

「むろん、ジュピトリスを降りて本来の連邦軍に移籍したいのですが」「まあ、それしかないだろうね。公社とどうせ揉めるなら君を引き受けるぐらいは小さなことだ」

「それについて、閣下にお願したいことがあります」

「いったい何だろう、准尉」

「作戦が終われば、私を准尉ではなく連邦の将の端くれとしてお迎えください。何なら閣下の麾下に置いて下されば。何につけても私の能力が閣下のお役に立てることは保証しましょう」

ここでシロッコは野心をむき出しにする！

連邦軍に移籍といっても、ただの准尉から始めるのであればそこから駆け上がるのは難しい。シロッコは自分に自信がある分それが不可能だとは思っていないが、時間を空費したくはない。下手に無能な上司がいたら戦果もあげられないし、いくら時間があっても足りないではないか。最初から指揮官を目指すべきだ。

「……なるほど、報償としていきなり連邦軍の将官級とはね。そん

なことを言うとは若いな。そして恐ろしいほどの野心家じゃないか。連邦がヘリウム3の枯渇という危機にあるのを自分のために利用するとは。そんな君のことだ、本当は艦隊全部の指揮権を欲しいのではないかな。あつという間に私も寝首を搔かれそうだ」

「滅相もない。それに、油断なされるような閣下ではないでしょう。信用していただけないのなら連判状を差し出しますが」

「君も古いことを言うね。まあいい。提案のことはジャブローの上層部に伝えておく。いや聞いてしまったからには嫌でも伝えないわけにはいかないし、どうせ私が握りつぶせば君は直接ジャブローに話を持ち込むつもりなのだろう」

「是非ともお願いします、ワイアット閣下」

「だが知っておいてもらいたいが、その話に私が賛成かと言われたらそれは違う。余りに近視眼に過ぎるのだ。連邦から条約違反をしてまでもジオン分のヘリウム3を奪って、多少凌いでもどうなるというのだろう。意味などないね。今、ただでさえ連邦は下らないコロニーレーザーのせいで評判は地に墜ちている。ここで条約を破り、よけい連邦よりジオンの方に道理があるように見られてはたまらない。准尉、きちんと先のことまで見て損得を考えたらそういうことはしない方がいいのだよ」

ワイアットは至極まっとうなことを言う。謀略家であっても決して正道を忘れたわけではない。

むしろ優れた謀略家だからこそ広い視野を持ち、先のことを考えるのだ。

シロッコを帰した後、ジャブローの上層部へこの話を報告する。

もちろん、ワイアット自身は強く反対するという意見も付け加えて。ワイアットは連邦上層部がきちんと判断するか信用していないからだ。おまけにパプテマス・シロッコが軍内の地位を要求し、上を食っていかうという野心があることを強調する。下手に長期的視野のことなどを言うより、そういった危険性を訴えた方が上層部に対して効果的だと踏んでいる。

結果的にワイアットの思惑通り、連邦上層部はシロツコの提案を受け入れなかった。

提案が有効かどうかは全く問題ではない。

上層部にとって何より排除すべきなのは野心家なのである。それが権力を保持していきたい上層部には潜在的な脅威に成り得るからだ。

その決定をワイアットがシロツコに伝えたと、シロツコはかなり悔しい表情をする。

「閣下、大変残念です。私に出番を頂けないとは。連邦はきつと後悔するのではありますまいか」

しかしそれ以上言うことはなく、あつさり引き下がった。

それが逆にワイアットの心に引つ掛かる。

周りを巻き込み、これほど準備を重ねてきた者が、素直過ぎておかしい。もつとしつこく食い下がってきてしかるべきではないか。

だからこそワイアットはシロツコが次にジオンの方に行くだろうと確信したのだ。

この若者は野心があまりに強い。

自分が連邦に所属する准尉であるなど最初からどうでもいい。連邦かジオンかに関係なく、力を発揮できればいいのだ。それなら、売り込めるところに売り込むだけだと想像がつく。

こうしてパプテマス・シロッコは完全に表舞台から退場した。

当初の目当てであった連邦は警戒心からシロッコを遠ざけ、ジオンはジオンで相手にしない。結果的にどちらもシロッコに活躍の舞台を用意しなかった。

ただし、その波紋は消えていなかったのだ！

恐ろしいことに連邦上層部の頭にジュピトリスのスペースコロニー分ヘリウム3のことが刻み込まれてしまった。

実は連邦のヘリウム3備蓄は残り少ないといった生易しいもので

はなかった。危機感を覚えて集計を進めていくとその実態が明らかになる。もはや牝底に近いといって過言ではない。

まだ戦争中のため、最前線で使う分のヘリウム3は与えられているが、それもいつまでかは分からない。もしそれが止まってしまえば、ルナツーにも大規模に艦船を使った軍事行動を二回三回と繰り返すほどの蓄えはないのだ。それでさえ早くからジオンのエネルギー枯渇戦略を見抜いていたグリーン・ワイアットがいたからこそ、節約をして貯めていた結果なのである。

地球での民生用ヘリウム3はもつと苦しい。もはや地球表面の工業生産は縮小を始めざるを得ない状況に追い込まれている。これではジオンが去った後の膨大な建設需要に応えられず、復興がままならないではないか。

連邦の権力者たちにとってそれ自体が問題というわけではないが、困窮が民衆の不満に転化したりしないか、不安要因になる。実態はほとんど世襲制縁故制になっていて少数が権力を独占してしまっているとはいえ、形の上で一応民主制の態を残す連邦であるからには。

その後まもなくジュピトリスは地球圏に入ろうとしている。

そこに積まれているヘリウム3を全て手に入れたい。連邦内では日毎にその意見が強くなる。

シロッコを内部協力者にして盗み取るやり方は既に拒否したとしても、別にそれだけが方法というわけではない。

いや、多少派手なことになるのを容認すればやりようなどいくらでもある。究極的には艦隊で囲んでヘリウム3を吐き出させればいいのではないか。どのみち条約違反には違いない。

ついに連邦は決断した。ルナツーに対し、これ以上なく強い出撃命令が出る。

パプテマス・シロッコの置き土産はとんでもない結果をもたらしたのだ。

0081年3月

あの第二次ルウム会戦からわずか3カ月しか経たずして、宇宙は再

び光芒に彩られようとしてゐる。

第一百十三話　ワイアット、出撃！

連邦上層部はグリーン・ワイアットが決して御しやすい人物でないのを知っている。

猫を被っている時もあるが、上層部を信用することなく度々鋭い批判をしていることくらい分かっている。ワイアット自身も自分で大げなと思う時は多々あるが、完璧に遠慮して上層部の顔色を窺おうとは考えてもいない。ワイアットなりの矜持があり、また精神衛生上のこともある。

だがそんなワイアットであつても連邦上層部としては頼らざるを得ない。

今、連邦艦隊を任せられる人物は他に誰もいないのだ。

第二次ルウム会戦の敗北は連邦全てに衝撃を与えている。

その結果、上層部は地球から新たに将帥を送って艦隊の指揮をさせることに躊躇せざるを得ない。それが愚かしいことだと上層部はようやく気が付いた。宇宙での艦隊戦は地上戦とは勝手が違い、それなりのノウハウというものがある。おまけにジオンは決して弱くなく、半端な将帥では太刀打ちできない。

現にパウルス中将は最善を尽くしたが、それでも負けてしまった。無能などではない将なのに、それでも宇宙戦では持ち味を發揮できなかったのだ。同じことがサイド2での攻防戦で勇戦したものの結局退いたアントニオ准将にもいえる。

結果、再びグリーン・ワイアットが連邦艦隊を任せられる。今、ルナツーに残されている連邦宇宙戦力はまとめてワイアットの指揮下に一本化されている。

パウルス中将は一命を取り留めることができたが療養中だ。

比較的軽傷だったモニカ・ハンフリー大佐は回復後グリーン・ワイアットの幕下に加えられた。同じくアントニオ准将もワイアットの麾下とされた。

その上でジオンのエネルギー戦略に嵌り、焦りを感じ始めた連邦上層部はグリーン・ワイアットに対し、以前にも増して出撃命令を出し続けている。

早いところジオンを叩き、状況を改善させたいからである。

それに対しグリーン・ワイアットはのらりくらりと躲すのが常である。

純粋に戦力を考えているからだ。

今、第二次ルウム会戦で傷つきながらも逃げ帰ってこれた連邦艦艇の修理を進めている。ルナツーではその修理とジム・クウエルの生産で大わらわである。ワイアットとしてはジオンに対し十二分に戦力を整えるまでは仕掛けるつもりがない。数が揃わないうちに仕掛けるのはまともな将のすることではなく、博打でしかないとも思っている。

そうではなく、下手に細かく動くことはせず、やるべき時に一気に叩くのを想定している。

なぜなら連邦としては艦隊戦で一度大勝を飾ればジオンをあつさり滅亡に追いやることができるのではないか！

たったの一度でいいのだ。

そうすれば容易に降伏させられる。多くの人間が忘れているようだが、連邦とジオンでは置かれた条件が根本的に違う。というのは連邦のジャブローなどは違い、ジオン本国は宇宙に浮いているコロニーに過ぎず、防御力など無きに等しい。脆弱な上に逃げることもできない。連邦の戦力がそこに届いた時点で戦争は終わりなのだ。

逆に小競り合いを繰り返しても仕方がないし、そんなことで少ないヘリウム3を無駄に消費する必要はどこにもないとワイアットは考えていた。

連邦上層部はその理屈を理解しているのかいないのか、出撃命令を数多く出している。それは政治的な方が重要だからだ。小さくてもいいので勝利の報をコンスタントに欲しいというのが本音である。政敵との争いに明け暮れる権力保持者にとっては。

そのため動きもしないワイアットを快く思うはずがないが、それでも我慢してきた。

ただしここにきてジュピトリスの件が生じた。

この機会、ジャブローの上層部はどうしてもワイアットを出撃させなくてはならない。もはやどんな逃げも許さないほど強く、ジャブローからの絶対命令として出撃命令が出る。

「困ったね。ジャブローはもはや条約を守るような気持ちが見失せるほど追い詰められているようだ。あの若者抜きでもジュピトリスの確保を命じてきた」

「閣下、それではあからさまな条約破り、どうやっても言い繕うことができない略奪行為ではありませんか」

「その通りだね。ジュピトリス内部での叛乱鎮圧とか、そこからのヘリウム3爆発からの安全確保とか、とってつけたような屁理屈さえも作れない。実力行使でも後で権力を使ってねじ伏せられるから体裁はどうでもいいらしいね。私も今度ばかりは躲せず、出撃せざるを得ない」

そしてグリーン・ワイアットもどうせ出撃は不可避であるならば、その先の決戦を見定めている。

「まあジュピトリス自体の抗議はともかく、そこに素直に辿り着けるはずもない。ジオン艦隊が邪魔をしようと出てくる」

「確かに閣下、ここまで連邦をヘリウム3で苦しめてきた側として、ジオンも黙って見ているはずはなくある程度艦隊を出してくるのは必至でしょう」

「ある程度、か。ステファン・ヘボン君、そんなことで済むだろうか。いやそうではない。私はね、ジオンは全戦力を出してくると踏んでいるよ。今が戦略の決定的な分水嶺、向こうもよく分かっているだろうか」

「ぜ、全戦力!? で、ではまたしても会戦ということでしょうか!」

「そうだ。覚悟を持って戦わざるを得ない。ならばルナツーからも動員できるだけ全て動員する。艦艇やMSもそうだし、ルナツーの残り

少ないヘリウム3も使い切るつもりで行う。まさにこちらも全力と
いうことだ」

「閣下！・ そ、そんな！ では本当の意味での決戦をなさるおつもり
で!？」

「本当の意味ということになるね。他にも言い方はいろいろあるだろ
うが、乾坤一擲、国家存亡の一戦というものだ。重々しく表現すれば。
ダグラス・ベーカーだったらいかにも好きそうな言葉だが、私だって
使うことはある」

あつさりと言つてのけた。

そんな重大事を、紅茶の銘柄の話をするようにグリーン・ワイアッ
トがいつもと変わらぬ調子で話した。

グリーン・ワイアットならではの恐ろしいまでにさらりとした自然
体だ。

「か、閣下、いやしかし現時点で動員できる艦はおよそ240隻ほどで
す。もう少し待って頂ければ、修理が終わるものも……」

「仕方がない。これ以上は延ばせない。もしもジャブローが本気で
怒って材料や部材を止めたらルナツィは立ち行かないし、そうでなく
とも備蓄ヘリウム3をだらだら消費したら何もできないうちに終
わってしまうよ。全力の決戦はたった一回だけ、予定より早い私
は今やるつもりだ。ステファン・ヘボン君」

決戦だ。ルナツィの全連邦戦力は出撃の準備にかかる。

知将グリーン・ワイアットは無駄に動くことを嫌うが、やるとなれ
ば臆病ではない。

残念なことに艦艇はどんなに頑張ってもステファン・ヘボン少将の
言う通り240隻から大きく変わることはなかった。未だ修理がで
きていない艦は100隻以上あるが、いったん捨て置かれている。

その代わり、MSの方に重点を置き、しばらくフル生産を続けたお
かげで大半はジム・クウエルに置き換えることができた。

そこへ地球から届けられたものがある。

ワイアットは出撃を了承する代わりにできるだけ戦力を送ってく

れと要請しているが、そうでなくともジャブローだつて戦力をなるべく足してやろうというくらいのもともな判断はある。

急遽送られてきたもの、先ずは最新鋭ペガサス改級強襲揚陸艦アルビオンである。

大きさ自体はさほどペガサス級と変わっていないが、高速カタパルトの新規採用などで全体的に一段階上へブラッシュアップされた高性能艦だ。艦体色はペガサス級同様、白を基調とした美しいもので、やはり白を意味する名がつけられている。

そこへヘンケン・ベツケナー中佐が宇宙戦の経験豊富なところから新たに艦長に命じられている。

しかも宇宙に上げられる直前、何の因果か顔を見知った学徒兵も組み込まれている。

「……アルビオンのMS戦力が、お前たちとはな。まあ、期待してはいないが学徒兵なりに頑張ってくれ。指示は出すから今度は従うんだぞ。勝手なことはするなよ」

始めにヘンケン・ベツケナーがそう訓示を出す、聞いているのはカクリコン・カクーラー、ジェリド・メサ、エマ・シーン、おまけにマウアー・フアラオである。

彼らとてヘンケン・ベツケナー艦長がこんなふうにするのは理解できなくもない。せつかくの新造艦、歴戦のMSパイロットが配属されると思いきや、成績優秀とはいえただの学徒兵、しかもあの地表での戦いで暴走行為をしかしたいわくつきがやってきたからだ。連邦のパイロット不足は分かっているが艦長としてはがっかりした気持ちもあるだろう。

だがそれでも、自分たちに期待していないとまで言われるのは心外だ。

連邦のため、戦うため、この宇宙までやってきたのだから。

思わずエマ・シーンの目にも手にも力が入る！

またしてもカクリコンとジェリドは肝が冷えてしまう。恐る恐る横目でエマの手首あたりを見る。エマの「修正」が今にも出るのでは

ないかと気が気ではない。

マウアーだけは顔色を変えないが、それは付き合いが短いためエマの「修正」の激しさを知らないからに過ぎない。エマはフォアハンドから充分なストロークを取り、手首や肩などの関節を全て使ってスピードを相乗的に乗せ、避けられない高速で繰り出すのだ。知れば筋力を強化されたマウアーでさえ驚くだろう。もちろんカクリコンとジエリドは幾度も受け手として身をもって知っている。

しかしヘンケン・ベツケナーの話には続きがある。

「そして…… お前たち、一番大事なことを言っておく。絶対に死ぬなよ。戦いを前に虫のいいことを言うようだが、頼むから一人も死ぬな」

訓示というよりはヘンケン・ベツケナーの独白であるが、本心である。

「この皆は揃って地球に帰るんだ。いや、必ず帰してやるからな！」
若者に死んでほしくないとか心から願っているのだ。

それは親心ともいうべき温かな気遣いである。

これで一同は襟を正す。先ほどの釈然としない気持ちはきれいさっぱり消え去り、代わってヘンケン・ベツケナー艦長への信頼が湧く。そして同時に胸中へいつそう闘志が湧き、その見えない炎が皆を包む。

皆、しっかりと敬礼をしてから持ち場に向かう。

それを見据えるヘンケン・ベツケナーが「やっぱり、か、可愛い……
後ろ姿さえも……」と思っていた内心など知る由もない。

もちろん知ったら雰囲気はぶち壊し、とんでもない修正の嵐が吹き荒れたことだろう。

次に地球北極基地から空母ビーハイヴに帰投してきたのがイオ・フレミングである。

驚かせたかったのか、いきなりゼファイランサスに乗り、超高速でビーハイヴの艦橋付近へ接近する。いかにもイオらしい。

「へい、戻ったぜ。待ちくたびれたか？ クローディアも、ピアンカ

も、いや両方とも。恋焦がれて死にそうだったなんて言わないでくれよ」

「いきなり下らないことを言うな、少尉」「ぶち殺すわよ、イオ」

「おっと冗談だ。しかし、これからの戦いのことは心配するな。後は俺とガンダムに任せればいい。ジオンがいくら出てこようと俺が全部片付けてやる」

今、イオは修理と再調整の終わったゼフィランサスと一緒になのである。

かつてのフルアーマーガンダムさえ上回る絶対強者だ。それと共にある以上、自信に一筋の揺るぎもあるはずがない。

「そこだけは、冗談のつもりじゃないぜ」

そしてゼフィランサスの桁外れの高機動を見せつけるように曲芸飛行を続ける。地表でも強いが、宇宙ではいつそう実力が露わになる。

次からの言葉は、イオの独り言だ。

もちろん決戦は連邦とジオンという国家のものだが、そればかりではないのだ。個人と個人の因縁に結末をつける場でもある。

「決戦ならばアイツが出てくるはずだ。ジオンのあの野郎が出てこないはずがない。今度は決着をつけてやる！」

今、シロツコの提案に端を発し、ジュピトリスを巡って再び戦いが始まる。

だがそれは連邦とジオン、継戦能力の都合上、どちらにとっても最後の決戦と見なしている。

双方が余すことなく総力を尽くし、文字通り人類の行く末を決める一戦になるのだ。

率いるのは連邦随一と言われた魔術師グリーン・ワイアット、そしてジオンの誇る名将コンスコンだ。共に国家の存亡をかけて戦う。

不敗対常勝

最強対無敵

いずれにせよ間違いなく歴史に語り継がれる。

後世、あまりに巧緻を極め、あまりに煌びやかな戦術戦は神の領域とまで言われ、決して誰にも真似できないものとなった。

互いに恐ろしいまでの知略を叩きつけ、戦いを荘厳な芸術へと変えたのだ。

その一戦が今、幕を上げようとしている。

第百十四話 連邦の総力

アルビオンやゼファイランサスだけではない。

連邦上層部はワイアットの出撃を知ったため、まだ地球に残っていて少しでも戦力になりそうな物を片っ端からルナツーへ送ってよこしていた。

それらの中に、今までにないMSもまた含まれていたのだ。

何と地球でジーラインが少しばかり生産されていた。ジーラインはジム・カスタムと同時期に設計され、性能面でも決して悪くないスコアを叩き出しておきながら、コスト？で次期MSに選定されなかった経緯を持つ。だが連邦としては新たに設計を書き起こすよりは早いで試作生産ラインに乗せていたのだ。後に判明したが、しっかりと作り込み調整すると皮肉なことにジム・クウエルを凌駕するほどの性能を持つMSに仕上がった。

それは10機余りという数であるが、そのうちの1機が第十三独立小隊のペガサス級強襲揚陸艦、つまりホワイトベースに届けられている。

今、ホワイトベースの横で調整飛行を始めたところである。動く模擬標的を相手に次々と墜としていく。

「アムロ、どう、その新型機。アムロのことだから誰よりも早く機種転換できるはずとみんな言ってるけど…… 出撃まであと一日しかないといっても、無理しないでちょうだい」

「大丈夫ですよ、ミライさん。あと二時間ばかり飛び回ればコツを掴めそうです」

ホワイトベースのミライ・ヤシマ、年は若く、その上名門ヤシマ家の令嬢でもあるが、細かく気を遣うことからホワイトベースの母親とも言われる。今もミライは心配したのだが、実際はアムロの実力を知るブライトやセイラの思う通りだった。

アムロ・レイはジーラインの実力を完全に引き出せる。

ちなみにカイは自分の出る幕じゃないと最初から投げ、ハヤトは張

り切ってジーラインに挑戦したがやはり無理だった。ジム・クウエルどころか一足飛びにジーラインに乗れば、補助戦力に過ぎないガンタンク乗りという立場から一躍認めてもらえるという腹積もりだったのだが。そして落ち込むハヤトはフラウ・ボウに慰められている。「アムロは…… 私たちとは、違う人なの」

他にも連邦にはいくつものMS試作機が存在し、まとめて届けられている。

もちろんデタラメに配布されるわけではなく、これまでに実績を上げているパイロットあるいは隊に優先的に送られるのだが、こんな情勢ではまともにマッチングを図る時間がとれるはずもない。そこで好みに応じて取っていくという普通には考えられない無茶振りになっている。

「もう連邦はやケになっているのだろうか。試作機どころか未完成機もぐちゃませだ。下手したら研究機まである」

「ライラ、まあいいじゃないか。好きなMSを使わせてもらえるのは俺としては歓迎だぜ」

「バニング大尉、MSは遊び道具じゃない。まったく男ってやつは子供みたいな……」

「勝手に思つとけ。ところでお前が選んだのはジムⅡという奴か」

「そう、私にはこれがとても使いやすくバランスがいい。機動性、武装、索敵能力のどれにも隙がない。ありがたいことに北極基地からこれを知るメカニックも一緒に来てくれたことだし」

ライラ・ミラ・ライラは自分の乗機に試作ジムⅡを選んでいる。それがかつてテストパイロット、クリスチーナ・マッケンジーが乗っていた機体だということはむろん知らない。

試作ジムⅡは破損してしまっていたのだが、北極基地から急遽応援メカニックとして同行してきたエマリー・オンスのおかげで修理も整備も問題ない。

エマリー・オンスは籍がアナハイム・エレクトロニクスであり、連邦軍籍ではないので宇宙行きを拒否することもできたのだが、本人は

なぜか拒むことはなく素直についてきていた。

それがとあるジオンパイロットに近付きたいためであることは本人以外知ることはない。

むろん、非常に幸いなことにライラにも知られていない。逆にライラのこともエマリーは知らないが、お互い様である。

ついでに言うと、今回の戦いに先立って不足しているパイロットもまたかき集められているが、スペースノイド出身者が積極的に登用されている。アースノイドより無重力経験が豊富だからだ。

このライラの隊にもそんな新兵が何人か補充されている。

その中に一人、学徒兵ですらないフォン・ブラウン出身の義勇兵が含まれていた。若いながら意外にもそこそこのMS操縦適性があった。

レコア・ロンドである。

グラナダでの騒ぎでいったんジオンの捕虜になっていたが、その後の捕虜交換で解放されていたのだ。そして改めて連邦軍に志願している。その胸中などライラもエマリーも知るはずがない。

「ところでバニング大尉、そっちはずいぶん大げさな機体に見えるが」「面白いだろう？　ライラ。俺はこいつが気に入った。ゼク・アインという試作機だ。ゴツい感じだが、見た目通りパワーがある。俺には一番だ」

「大尉に似合っていないくもない。しかしそっちの隊は見事にバラバラだな。私が言うのも何だが、大丈夫か？」

「確かにウラキたちは手堅くジーラインの方を選んだ。しかし新入りのブルタークの奴ときたら、研究機を選びやがった。あてつけじやなくただの新しもの好きなんだろうが、程度つてもものがある。しかしいくら言っても聞きやしねえ」

その通り、バニング大尉の第四小隊はバラバラなMSが集まっている。普通にはそんなことをしたら隊行動に支障をきたすものだが、バニング大尉もそれほど言うさく言っているわけではない。普通の隊とは違い一人一人が信頼すべき高い技量を持っているからだ。

今ライラが指摘したのも、一機だけ毛色が変わったMSだった。

「あんなMS、見たことがない」

「だろ？ 試作ですらない研究機だから動くも動かないも自己責任つてもんさ。あれはディアスっていうジオン技術を最大限入れたものらしい。俺はまだしも完成してるハイパフォーマンスザツクの方を勧めたんだが、見た目がアレだからブルタークも誰も乗りたくねえつてさ」

「まあ見た目がジオンMSみたいなMSだったら、私だって乗りたくない。ところでバニング大尉、今度の編成では珍しく一緒にガディ・キンゼー麾下に所属するようだが、よろしく頼む」

「頼まれてやる、ライラ。きっちり守ってやるぜ」

「くつ、下手に出れば…… バニング大尉、守ってやるのはこちらの方だ」

「真面目に言うがライラ、今度の戦いは相当ヤバイ。牽制や排除じゃなくて、噂じゃコンスコンの大将と真正面からやりあう決戦だ。こいつはキツイぜ」

軽口のついでに言っているようだが、二人の目は真面目そのものだ。いや、サウス・バニングはいつもより何か妙に真面目だった。

「ライラ、いつもより慎重に行け」

「不死身の第四小隊がそんなことを言うとは、今さら臆病風か」

「いいから素直に守られとけよ。そして俺がしっかり守ったら、結婚しようぜ、ライラ。あんな正義の塊みたいな騎士様はやめて近くを見る。バーで飲み比べするなら俺の方が面白い」

「な…… 何だといきなり!! もう一回言え！」

「何度も言えるか馬鹿野郎。湿った雰囲気にするのは嫌だぜ。元気なお前さんだからいいのさ」

「ふ、ふぎけるな……」

「何にしろ、続きは戦いが終わった後だ。その時に返事を聞くからな、ライラ」

連邦艦隊は肅々とルナツーを出港する。

総指揮官グリーン・ワイアット中将与参謀ステファン・ヘボン少将を中心とし、アントニオ准将、モニカ・ハンフリー大佐はそれぞれ分艦隊を指揮する。

そしてガデイ・キンゼー、エイパー・シナプスの両名もまた、大佐に昇進の上、分艦隊を与えられている。

総艦艇数257隻、事実上これが連邦宇宙戦力の全てである。

「この艦隊へ、ジャブロー連邦軍作戦本部から入電！」

「おや、何かな？ 今さらありがたい訓示だったら要らないが」

その内容を一瞥し、ワイアットが思わず笑う。

「ステファン・ヘボン君、これは冗談かな。こんな時に昇進、ジャブローはこの私を大将にしてくれたようだ。ああ、つまりは殉死の前払い、生きてルナツーに帰ってくるなどということかもしれないね」

「ワイアット閣下、その冗談は皮肉を通り越してそれこそ縁起でもない…… しかし特に深い意味はなく、ただの上層部のヤケだと思われまます。本当にそうなら紅茶の補給もなかったでしょう」

「私もそう思うね。帰りの分の紅茶があるのは何よりだ」

「ですが閣下、よかったではありませんか。戦うのはおそらくジオンのコンスコン大将ですからこれで同格、非礼にならずに済みます」

「そうか、形の上ではなるほどそうだ。非礼ではなくなつた」

そんな階級のことはどうでもいい。

しかしワイアットはここで思いがけない指示を与えている。

「では非礼でないことを実力でも示してやろうじゃないか。進路はこのまま真っすぐ、地球をかすめて更に月へ直進だ」

「直進とは!? 閣下、どういうおつもりで？ ジュピトリスは月からはずつと横方向、サイド1に近い航路でやって来る予定なのでは」

「ジュピトリスのことなど後の問題、オマケのことに過ぎない。ジオンとの決戦に勝つ、先ずはそれに集中し、条件を整えなくてはいいからね」

「そ、それで月方向、しかしその前にはサイド5ルウムがありますが

……」

「おお、そうだよ、君も冴えているね。ルウムだ。私はそこを決戦場に選ぶ」

「ル、ルウムですか？　けれど閣下、そこは過去連邦が二度も負けた因縁の場所ですが」

「いいじゃないか。意趣返しをしたいわけではないが、今度はルウムで連邦が勝つ。私にはそこできかない策があるのだよ」

「閣下の戦術に、ルウムを……」

尚も不思議がるステファン・ヘボン少将にグリーン・ワイアットはいつもと変わらぬ笑みを返している。

艦橋にわずか入り込んだ白光がワイアットの横顔を照らす。

その時、帽子の先から作り出された影が、微笑を底知れぬ凄みへと変えた。

「そこでジオン艦隊をきれいに消去してあげよう。魔術師の帽子のようだね。ステファン・ヘボン君」

第一百十五話 全てを背負う者

「連邦艦隊、ルナツーを発し、向かってきます！」

「ついに出てきたか…… どのくらいの規模か分かるか？ いや、現時点で分かる範囲でいい」

「概算で250から300隻の間！ 大艦隊です！」

「な、そんなにか！」

これには俺も驚くしかない。

連邦艦隊がルナツーから出撃してきたことはいち早く捉えることができた。連邦だって数十隻程度ならば隠密行動のしようもあるが、それだけの規模の艦隊であれば隠しようがない。

むろん、ジオン側がエネルギー戦略を推し進めている以上、どこかの時点で連邦が仕掛けてくること自体は予想できている。というよりも連邦が止むに止まらず出撃してくることを見込んだ戦略なのだから予定通りのことだ。

それでも、これほどの数を連邦が動員するとは思っていなかった。一番ジオンにとって都合が良いのはちよこちよこ連邦が仕掛けてくるのを撃退し続け、そして連邦が勝手に弱り自滅してくれることだ。

しかしそううまくはいかなかった。

連邦の将は決して馬鹿ではなく有能だった。ここで全力を叩きつけ、会戦で勝利してジオンを屈服させる、それが最適解であることをきちんと理解している。これは容易ではない相手だ。

そして連邦が思い切つて戦力を糾合し、決戦に臨もうとしている以上、ジオンもまた全戦力を挙げてこれと戦わざるを得ない。

すぐさま準備を進める。

ジオンが動員できるのは頑張っても200隻を大きく上回ることはない。やはりジオンは連邦側と同数を揃えることはできず、またしても少数の側になってしまう。といっても、思えば過去これま

で行った会戦では圧倒的不利、常に二倍や三倍といった苦しい戦力差の下で戦ってきているのだ。それに比べたら、今回の差は無きに等しいという言い方もできる。

逆に有利な点で言えば、ルナツーからジオンへ近付くにつれ、フォン・ブラウンやグラナダ、ソロモンといったジオンの拠点が近くなる。つまり補給という点ではジオンに有利なのである。今ではサイド6やサイド1の生き残りもジオン寄りになっている。

そしてMS戦力でいえば待望の新型機を手に入れることができたのだ。

間に合った！ 以前マハラジャ・カーン准将の言っていたアクシズ開発の新型MSが到着している。

だがそれについて、ジオン本国で受け取りと調整役を担ったマ・クベ少将が若干申し訳なきげに報告してくる。

「コンスコン大将、期待を外したら申し訳ない。思った以上に開発は難航したようだ。その結果、輸送途中で完成させるということになってしまい、未だ稼働テストもできていないといった体たらくになった」

「しかし、それでも実機は来たし、使えるのだろうか？ ならばそれでいい、マ・クベ少将。それが何機できたのだ？」

「先ずはザクⅢが8機ほど。しかし残念ながら新機軸は何も入れられず、オールサイトスクリーンや高ショック対応シートもなく、とうてい画期的とは言えないものに。例えて言えばせいぜいパワーに余裕があるアクト・ザク、そんなところでしようか」

うくん、やはりマ・クベ少将は技術畑、そういうところにこだわっているのか。

一番がっかりしているのは本人なんだろうな。

そういう代わり映えのないものではなく、新しい機構を取り入れた新世代のMSを期待していたんだろう。技術者というのはとかく革新性という部分に目を向ける。戦争の行方とは関係なく、技術者は技術者同士の意地というものがあるからだ。互いに知性と創造性とい

う部分で競い、張り合っている。

連邦側技術者をあつと言わせ、悔しからせられれば、ジオンの技術者としては大いに溜飲を下げられる瞬間だ。

しかし申し訳ないが俺としては最悪アクト・ザクの代わりになれば御の字と思っていたのだから何も問題はない。

「いいじゃないかマ・クベ少将。慰めで言うのではないが、それでも充分だと思うぞ。ではさっそくエースに分配しよう。こっちのガトールたちも喜ぶだろう」

「それと、おまけというか、ジャジャが研究用として一機だけ、ドライセンに至っては未だ組み立ても終わっていないものが届いています」

「まあ、もしも気に入って乗りこなせる者がいたならば使わせればいい。それよりもマ・クベ少将、カーン准将の言っていた新型モビルアーマーは届いていないか？」

「ノイエ・ジールのことでしょうか。確かに届いてはいるのですが…… 現在テストと調整中、そのまま実戦に使うには少しばかり厳しいように」

「ん、それは困ったな。何か問題があるのか」

俺はそれに期待していたんだ。メカにこだわるケリイに新しいモビルアーマーを与えてやりたい。

「コンスコン大将、稼働できないという意味ではなく、大掛かりなモビルアーマーゆえに操縦性に難があるため…… 操縦支援を調整すれば少しはマシになると見込んでいるのですが、それはそれで中々厄介な」

「ああ、だったらすぐに回してくれ。予定しているパイロット、ケリイ・レズナーなら自分でなんとかするかもしれん」

本当にそうしてくれる気がする。ケリイは自分専用だと知れば、そのノイエ・ジールをいじってどうにでもするのではないか。

これでとりあえずMSとモビルアーマーの懸念が少し解消できた。

ジオン勝利のためには、エースたちの活躍が絶対条件になる。

なぜなら連邦側のMSは悔しいほど着実に進化を続けていて、先の

第二次ルウム会戦ではまたしても新型機を出して強化されているのが確認できている。

それだけの問題じゃない。連邦にはガンダムがいるはずなんだ！先の地球降下作戦でガンダムが出てきて、戦うことになってしまったが、決してそのガンダムを撃破したわけではない。今度の戦いで出てくることもあり得る。もしもそんなことになったら、蹴散らされてしまう可能性があるのだ。

ジオン側としては最小限エースたちがふさわしい機体に乗れなければ勝負にならない。

準備を整え、ジオン艦隊もまた急ぎサイド3本国を出港する。

中核となるのは俺のコンスコン機動艦隊になる。もちろんその中にはガトール一騎当千のパイロットたちがいる。

加えて動員する将兵は、デラース少将、シャア少将、マクベ少将、カスペン少将は当たり前として、カーン准将、バロム准将、デラミン准将、そしてサイクロプス隊やキマイラ隊、海兵隊といったキシリア閣下麾下の各隊だ。そこに何と地表から戻ったノイエ・ビッター中将、ユーリ・ケラーネ中将までも、何かの役に立ちたいと志願している。

つまり、ほぼジオン全軍だ。

総艦艇数218隻、ジオン史上最大の艦隊となる。

逆に残るのは首都防衛隊や近衛隊などわずかなものであり、これはトワニング准将に一任されている。

そしてジオン艦隊総司令官として俺、コンスコン大将が立てられた。

実はここで少しばかり驚いたことがあったんだ！

「コンスコン、総大将はやっぱりお前だ。頼んだぞ」

「はっ！ ドズル閣下。大役、謹んで拝命いたします」

「今回、キシリアや俺は行かない。ズム・シテイで吉報を待っているからな」

「ええっ!? ドズル閣下がご一緒ではない？ これはあんまりにも意

外な……」

「意外とは何だコンスコン、戦いと見れば何でもしゃばると思ってるのか」

「あ、いえ、違うというか違わないというか、違わないというのめやっぱり違うというか」

「…………… 行きたいのは山々だ。当たり前だろう。ジオンの興亡がかかっている戦いだぞ。しかしキシリアに止められた。今回は激戦、ならばジオンの首脳部が一カ所にはならない、ということだ」

「なるほど、それはキシリア閣下のおっしゃる通り、全滅を防ぐため別々にいることは確かに合理的です」

「まあ普通にはそう考えるだろうな。しかしコンスコン、キシリアはそれらしく言ったが本当の意図はそうではないと思うぞ」

ここでドズル閣下らしからぬといえば失礼だが、意外に深い思慮を讀んでいるようだ。

「ドズル閣下、よく分かりませんが本当の意味とは？」

「キシリアは指揮系統のことを考えているのだろう。何かで指揮が乱れた時、俺やキシリアがいた方が余計混乱してしまう。つまり何があっても最後までお前が指揮をとる、とらせようとしている」

「……………」

だんだん分かってきた。確かにドズル閣下とキシリア閣下、そして俺が戦場にいれば、万が一混乱をきたした局面、どれを最高命令とするべきか下の者が迷う場面が出てもおかしくない。

そこでキシリア閣下は敢えて参加しないことにしたんだ。

「つまりだ。キシリアはそこまでお前を信頼した。ジオンの未来も、自分の運命も託すに足るだけの者として。託すというのはな、言っておくが自分が動くよりも大変なことだ」

確かにそうだ。託して待つというのは決して休んでいるということではない。とてもエネルギーの要ることで、よほどの信頼を込めていないとできないことだ。

「コンスコン、これは下手な夫婦よりも厚い信頼だぞ。よくもあのキ

シリアにそこまで思わせたものだな」

「そ、それは、なんとも畏れ多い……」

「もちろん俺も同じだ。全てお前に任せた。一緒に行く将兵、デラーズもシヤアもみな同じような気持ちでお前に任せているだろう。ここにきてジオンはまとまったということだ」

ああ、そうなのか。俺は気を引き締めざるを得ない。

今回の戦いは、俺が皆の信頼と期待と、そして運命を背負って戦うのだ。

相手が連邦のどれほど有能な将でも後れを取るわけにいかない。「だから勝ってこい、コンスコン。それだけ言えればいいだろう」

第一百十六話 鋼鉄の淑女

俺のコンスコン機動艦隊、そこにはガトーやカリウス、ケリイ、ツエーン、シヤリア・ブル、クスコ・アル、ダリル・ローレンツがいる。

連邦との決戦に向け、皆の士気が高揚しているのも手にとるように分かる。

他の艦隊だって似たようなものだろう。

しかし、連邦が狙っているであろうジュピトリスの来るサイド1へ向かい月の裏側を航行し始めた直後、いきなり戸惑う事態に襲われた。

「な、何だと！ 連邦艦隊の予想進路がそんなところへ!? 間違いないのか？」

「は、はい、真つすぐルウムに向かっています！」

「連邦はどういうつもりだ！ ジュピトリスへ行くのではないのか？」

連邦艦隊が不思議なことにルウムに向かっている。

ヘリウム3を積んだジュピトリスでもなく、かといってジオン本国でもなく。

「……これは、おそらく誘っているのだ。連邦はルウムで決着を付けたがっている。だがしかし、ジオンはそれを無視できない。分かっているてもルウムに行くしかない」

俺は唸りながらそう理解した。ルウムは位置的にいえば、ジュピトリスが来る航路と、ジオン本国との中間点、つまり楔ともいえる場所なのだ。

ジオン側は一手遅かった。

いや、中途半端に戦力を置いていても無駄だったろう。

連邦がルウムを押さえ、ジオン側の動きを見ていけば、ジオン本国

とジュピトリスのどちらかが手薄になったとたんそこに急進することが出来る。そういう絶妙な位置である。逆にいえばジオンとしては本国とジュピトリスの両方を確保することはできなくなった。

もしもジオンがどちらも守ろうとすれば取れる方策はたった一つだ。

ジオン艦隊もまたルウムに向かい、そこで連邦艦隊と戦うしかない！　そういうことを連邦艦隊の指揮官は知っているのだろう。だから誘いと言ったんだが、どのみち決戦は行う以上、ここは誘いに乗る。

二日半航行し、やっと連邦艦隊が見える位置まで来た。

「連邦艦隊、およそ260隻！　ルウムのデブリ宙域を背にして、その手前に展開しています！　接触まであと二時間！」

「デブリ宙域を後背に置いてか……　むろん、何らかの意図を持っているのは確実だが、はたして何か……」

コロニー建設宙域には、材料採掘のため、ある程度の岩礁を引張ってきているのが普通だ。サイド3のア・バオア・クー、サイド7近くのルナツー、他ペズンもパラオも元々は軍港でもなんでもなく資源用のものである。サイド5ルウムでももちろんそういう岩礁を置いていたのだが、戦争によって位置調整を失い、ぶつかり合って砕け、多くがデブリになってしまった。

もちろんそれだけではない。

ルウムは過去大規模な戦いが繰り返された場所ゆえに、作りかけたコロニーの残骸、放棄された各種資材、それに何よりも戦闘で破壊された艦のなれの果てが数多くデブリとなって浮かんでいる。

それらは月と地球の重力中立点ラグランジュポイントを越えて拡散していくことはない。

むしろ太陽風によってゆっくりと流されながら、ある程度集合していき、ところどころデブリの濃い宙域を形成している。

もちろん俺もそういうことは分かっている。

そして連邦艦隊がわざわざルウムを戦いの場に選んだ以上、このデブリ宙域を戦術に利用してくる可能性は高い。

真つ先に考えつくのは伏兵の存在だ。

他にも、退路を断つ、誘い込んで囲む、いくつも使い方を思い浮かべることができる。まともな戦術家ならそんなことは当然のことである。

「どうします、コンスコン司令」

「よし、各隊戦闘配備のまま急進！ MS発艦準備！ 一気に行くぞ。どのみち総戦力で見劣りする以上、すり潰される前に急戦に持ち込む」

だが俺はここで急戦を選択した。

無策という意味ではなく、これも立派な策なのである。

思いつきりのいい攻勢で先手を取り、連邦艦隊をかき乱し、向こうに策を打ち出す隙を与えない。あるいは対応に追われて策を出すタイミングを失わせる。戦力的に劣るが、それができないほどの戦力差ではないと判断した。

見敵必殺、元々コンスコン機動艦隊が得意とするやり方だ。

一気に主導権を握り、最後までそれを離さなければ勝てる。

更に加速しつつ接近していくが、ここで連邦側に動きがあった。

連邦艦隊の前衛が綺麗に二手に分かれたではないか。

そして中に隠されたものが全容を現す。

その持つ意味を知るや、俺は慌てざるを得ない。

「あれは?! い、いかん、直ぐにデラミン准将に回避行動を取らせろ！」

こちらの前衛として進行していたデラミン准将の艦隊が危ない！

見えたのはあのソーラ・システムだった！

忘れもしない。連邦がソロモンを焼くために使った兵器である。

今もまた整然と鏡の列が並んでいる。

それらが太陽光にきらめき、熱と光の束を作り出し、デラミン准将の艦隊を照射する。緊急回避のため艦首を転じ始めていたがもう間に合わない。

前衛艦はまとめて捉えられ、白一色に染まる。

しまった！ 今回の戦いで連邦がソーラ・システムを出してくるとは思わなかった。

それには理由がある。

まずは運用上の問題がある。座標の決まった要塞を焼くならまだしも、本来動いている艦隊を狙うのは難しい兵器なのだ。それぞれの鏡を動かしつつ精密に同調させるのは困難であり、ある程度以上の規模にするのは無理だ。

もう一つは反射角度の問題である。今もまた、太陽光は連邦とジオン両方の横方向から来ている、というかむしろ連邦艦隊の方が太陽を背にしている位置取りだ。角度的に鏡の反射が不可能ではないというだけで、最大効果から全く遠くなる。

結果的にデラミン准将の艦隊は照射されても爆散するほどのダメージは受けなかった。最大効果ならともかく、半端に集められた光に艦壁をどうこうする程の威力はなかったのだ。

ただし、索敵センサーなどの観測装置が軒並み破壊され、おまけに少しでも過熱で歪んでしまえば使えなくなる主砲などの攻撃兵器もダメにされた。艦壁から出ている部分はどれもそうだったのだ。そうなればもはや戦闘艦としては意味がなくなり、ただの標的に成り下がってしまったことになる。

大技を使われてしまい、いきなりジオンは十二隻もの艦艇を無力化されてしまった。これは痛い。

「やられた…… 仕方がない、デラミン准将の艦隊は戦力外とし、後方へ下がらせる。そして急ぎソーラ・システム用の対抗手段を発動しろ」

俺は連邦がソーラ・システムを使ってくる確信などなかったが、一応対抗手段を持つてくることは忘れていなかった。ジオン艦隊が次々とそれを発射する。

それは高速ミサイルのようなもので、違うのは煙幕のような尾を引いている。もちろんこんな広大な宙域に光を遮るほどの煙幕など使えるはずがない。光をいくらかでも吸収して、ソーラ・システムの威

力を減らすためのものである。

そして本当の意味は次にある。ソーラ・システムの手前で爆発し、破片を飛ばすのだ。もちろんそんな微細な欠片は艦やMS相手には全く効き目がないが、剥き出しの鏡相手になれば充分である。鏡に届くやいなや、叩き、歪め、微妙に位置をずらす。それだけでソーラ・システムはあっさりガラクタと化す。

そんな手段が取れるのはソーラ・システムがレーザーに変換することなくただの光のまま使っているからだ。焦点を外せば、近付くほど光の密度はどんどん低くなり、小型ミサイルの飛行も妨げられることがない。

ジオン艦隊がそんな対抗手段を出してくるのを見ながら、グリーン・ワイアットが淡々と感想を述べている。

「どうかな、コンスコン大将。ソーラ・システムは多少派手なオープニングだったかもしれないね。こちらとしては別にソーラ・システムを決定戦力にする必要はなく、初手から使ったわけだが、お気に召してくれただろうか」

「ワイアット閣下、作戦は成功したとも言えますが、できればもっと損害を増やしておきたかったところです。向こうがこれほど直ぐに対抗手段を出してくるとは……」

「つまりコンスコン大将は様々なことを想定し、きちんと用意を怠らない良将だということだ。全く見事なことだね。それも予想の範囲内ではあるが」

「では閣下、次の段階へ移行しましょうか」

「そう、予定通り、次のステージに移らせてもらおうじゃないか。コンスコン大将にもっとお楽しみ頂けるだろう。用意してくれたまえ、ステファン・ヘボン君」

俺はしよっぱなから叩かれたが、しかし次の行動は素早い。

今、テイベの艦橋スクリーンに、連邦のソーラ・システムが片付けられつつある様子が拡大されて映っている。無音なのでやや現実感

はなくとも、紛れもない事実である。

「ここはチャンスだ！ 普通なら思わぬ損害で慎重にならざるを得ないところだろう。連邦はこつちがそうなると見込んでいるはずだ。だからこそ再び急進する。シャア少将に連絡、斬り込みを頼むと伝えるんだ」

ここでまたしても急戦を選択だ。

今言った通り、思わぬ損害を被ってしまった指揮官というのは肝が冷え、必要以上に疑心暗鬼になるのが普通なのである。損害を気にせず続けざまに猛攻を加えるのは頭に血が上った短慮な将か、攻めることしか知らない愚将だ。

連邦はおそらく俺のことを馬鹿だとも思っていないだろう。

とすれば間髪を入れない攻勢こそ連邦の裏をかく最適解になる。

命令に沿い、シャア少将のザンジバルが快速を飛ばす。赤いMSに乗っている時はもちろんそうだが、艦でも実に速いものだ。その後はキマイラ隊、サイクロプス隊が続いている。

これを見て算を乱したのは連邦側だった。

「まずいわね…… ジオンの再攻勢が早過ぎる。さすがにコンスコン大将、そうくるとは……」

俺は知らなかったが、連邦の前衛に立ち、先ほどのソーラ・システムを管轄していたのはモニカ・ハンフリー大佐、ジオンの急進に立ちはだかろうとしている。

「迎撃用意！ ここは敵の足を止めなくてはなりません。連邦本隊が予定通りデブリ宙域に後退するまでは」

連邦本隊は後退しつつある。予定されたものとはいえ、艦数が多いことから素早くとはいかず、そこへジオンの突撃を許してはたまらない。

モニカ・ハンフリーと連邦艦十隻ほどが果敢に迎撃をかける。

「ジオンの先鋒を挫きます。主にはこのスパルタンの速度を活かし、止まらず動きながら妨害するのです。そして頃合いを見てアリシア曹長らのガンダム・ヘッドを出してジオンを驚かせてやりましょう」

モニカ・ハンフリーの乗っているのはアルビオンと同型の新鋭艦スバルタンである。シヤアのザンジバルよりも速く、砲撃をかけながら回旋し、執拗に妨害にかかる。

だがしかし、シヤアもその妨害の意図が分かる以上、スバルタンらを見ながらから連邦本隊へ距離を詰める方を優先している。大局的に見てそれが正しい。

だがスバルタンは直線航行に移ったわずかな時間で奇妙なMSを出してきた。それらのMSを見て、シヤアも驚いてしまう。

「何っ、あれは、ガンダムか!? ここにいたのか! しかも数機も」
ならば見過ごせるはずがない。容易ならざる事態かとシヤアも構えたのだが、若干の違和感を覚えて注視するうちにカラクリを理解した。

「ふ、なるほど…… 違う。おそらく汎用MSにガンダムの頭部をセットしただけのようだ。私ともあろうものが小細工に驚かされたな」

確かにその通り、ジム・コマンドをガンダムに偽装したガンダム・ヘッドとはそういうMS、こけおどしとしか言えない代物である。だがジオンの目を引き付けて時間を稼ぐことには成功したのだ。

もちろんその代償にスバルタンはジオン側の有力部隊を一手に引き受け、その猛攻を受けることになる。

モニカ・ハンフリーは「鋼鉄の淑女」らしく顔色を変えることなく応射を命じている。しかしこれほどの相手を敵にしているのは、間もなく終わりが来る。スバルタンに直撃が相次ぎ、艦の加速が止まり、それにジオンが気付けばMSを出して引導を渡そうとするだろう。

「ここらが限界のようね。しかし本隊の最後尾、オットー・ミタス隊もデブリ宙域に入れた。これで仕事は果たしました。このスバルタンを残し、他の僚艦は本隊を追い、逃げ切りなさい。もうスバルタンにはMSの支援も要りません。MSもまた全てクリード大尉に統率させて本隊へ行かせるのです」

「大佐、一ついいかい」

「何ですか、ヴィンセント・パイク艦長」

「艦橋でタバコ、吸ってもいいかな。もう健康に気を使わなくていいだろ。俺も、あんたもさ」

「…… 艦長は退艦しないという意味ですか」

「最後まで付き合うぜ、大佐。メグ・リーム以下、艦橋クルーは退艦だ。俺一人残ればスパルタンの砲撃くらいできる」

それ以上の言葉など不要だった。それを決して古いロマンチズムと非難することはできない。

連邦のため、真つすぐ生きた者たちがその意気のまま最期を迎えるだけだ。

「連邦はここで勝たなくてはなりません。そうでなければ人類は暗黒の時代を迎えてしまいます。できるだけ早くジオンを叩かなければ、この先の未来、分離主義者どもが第二第三のジオンを作り、果てしなく争うことになるのです」

それはモニカ・ハンフリーの信念である。

いや、彼女以外にもそう考える将兵は多い。これが連邦将兵の掲げる正義、誇りの源泉なのだ。

「連邦上層部は腐っているかもしれません。汚職、権力闘争、形骸化した民主主義、その酷さはよく知っています。しかし、少なくとも単一国家ならば戦争にはならない。国家間戦争でなく、内部で争うだけなら、人口の半分が失われるような悲劇は起こらない」

それは連邦側から見た理屈ではあっても、否定されない道理でもあるのだ。

ここでジオンを抑えきれず、将来に渡って国家が並び立ってしまえば、いずれは国家間戦争が繰り返されてしまう。

人類の歴史を紐解けば、いかに平和への努力をしようとも、国家と国家があれば結果は明らかである。互いに疑い、支配を企み、そして戦争になる。

「やっとな人類社会は成熟しここに到達しました。過去どれほどの年

月、どれほどの人が待ち望んだことでしょう。その血と涙の結晶が単一国家、地球連邦なのです。問題があつたとしても、そこを地道に改善すべきであつて、決して連邦を壊してはなりません。連邦将兵はそのためにいます。単一国家という人類の夢、それを守るために戦うならこの身を惜しむことなどあるでしょうか」

スパルタンはメツタ撃ちにされても撃ち返すことを止めず、最後はエネルギーユニットに直撃を受けて盛大に爆散し、光と共に消えた。「連邦は勝ちます。グリーン・ワイアット大將は必ずそれを成すでしょう。後は任せました」

モニカ・ハンフリーはこうして散る。

その一生は、多くの者に厳しく接し覚悟を改めさせる一方、それ以上に自分に厳しい、まさに鋼鉄の淑女だつた。

その原動力は地球連邦という理想の信奉にあつた。

戦術のみならず権謀術策にも長けていることで周囲から畏怖されていた彼女だが、その部分では一点の曇りもなく、あまりに純粹な心だつたのだ。

最後、その目に後悔は微塵もない。ただただ連邦の未来ばかりを映していた。

第一百七十七話 驚くべき戦術

「連邦艦隊はデブリ宙域の中に後退か……なるほど……」

俺は戦局の行方をまた思案する。

戦いの第一幕は、急戦を仕掛けたジオンがソーラ・システムによって少しばかり痛手を被った形となって終わった。

そして再び前進し、連邦艦隊と対峙しようという時には、既に連邦艦隊は背後にあったデブリ宙域へまるで溶け込むように下がっていたのだ。

「いったん急進は止め、オーソドックスな隊形のまま砲戦を行ない、少しばかり様子を見る」

俺もさすがに罠を警戒し、これ以上の急戦はしない。隊列を整えて慎重に砲戦を仕掛ける。

すると連邦艦隊もまた撃ち返してくるが、メガ粒子砲の有効射程ギリギリのまま踏み込んでくることはない。

こうなれば、やはりMS戦に持ち込むほかないだろう。

そう思って準備をさせるも、連邦の方にMS戦の意思はないらしく、ジオンがゆつくり進むとその分後退し間合いを保ってくる。だからまだその頃合いではない。

もちろんこの距離からでもMSを出すことはできるが、それを連邦艦隊が察知してしまい、本格的に後退に転じられたら空振りになる。艦に助走をつけられたらMSでは追い付けなくなるからだ。

そして砲撃戦の行方でいえばジオンが不利だった。元の艦数の違いと、それよりも連邦側ばかりがデブリ宙域にいるのが大きい。連邦艦はデブリを積極的に盾として使っているのではないようだが、それでもデブリに守られるかどうかは有効弾の数の差として如実に現れる。

このまま我慢比べをしていけば消滅するのはジオンの方である。

「仕方がない。こちらでもデブリ宙域に入り、間合いを詰め、MS戦に突入するタイミングを見計らう」

どちらでもデブリ宙域に入って同じ立場になると砲撃での有利不利はなくなり、むしろ消極的な連邦艦隊を押す格好になった。

それよりも俺は当たり前のことだが連邦の伏兵の存在を十二分に警戒している。

デブリを何かに利用してくるだろうことは予想を超えて確信に近い。

しかし思いのほか何も見つからなかった！

デブリの影、あるいは中に潜んでいる連邦艦もMSも全く無く、それどころか機雷などの爆発物さえ見当たらないのはどういうことか。あるいは、連邦はデブリを単なる艦隊行動の障害物にしか考えていないのだろうか。

一応の懸念が晴れたことで、俺は相変わらず距離をとってくる連邦艦隊をゆっくり追って行ったが、ここで突然変化が現れた。

連邦側がいきなり猛砲撃を加えてきたのだ！

「何?! ここで猛攻に転じるか? しかしタイミングがおかしい。デブリで動きが制限されると思っている? いやそもそもデブリ内で決戦にするなら艦砲ではなくMSの方が有効なはずだが…… 連邦艦の動きはどうだ? MSを出しているか?」

「い、いいえ、コンスコン司令、連邦艦隊はMSを全く出していません。しかも更に距離をあけていきます!」

え、距離を取る? 反転攻勢ではないのか……

確かにそれとは真逆に連邦艦隊は退いていき、ついにはジオン艦隊をデブリ宙域に残したままその外にまで行ってしまった。

連邦艦隊はルウムから撤退し、やはりジュピトリスに向かうことを決断したのだろうか。時間稼ぎだけをして。

いやそんなはずはない。

その前にここで小競り合いをしても連邦に何も益はない。別動隊が存在するという報告もない。

しかも、連邦の猛砲撃はここに至っても止んでいないではないか。

白熱の帯が激しくそこかしこに飛び、ジオン艦隊を照らす。

ただし連邦がいかに撃つてこようがそれによるジオン艦隊の被害は驚くほど少ない。

既に有効射程を外れている間合いになっていて、デブリのせいだ。俺は先ほどとは逆にこちらがデブリ宙域内にいる以上、それを利用する。

「デブリを盾に使いつつ、連邦とは逆によく狙って撃て。どうせ向こうはあれほどの砲撃を長く続けられるもんじゃない。切れ目をみて一気に反撃に出る」

結果的に砲撃の数は圧倒的に連邦の方が多いが、むしろジオンの方が有効弾をきっちり当てている。エネルギーの面でも、艦でも、消耗するのは連邦の方になるのだ。

さあ、後はタイミングを見て決めてやる。

その頃、テイベのMS発着場には人が多く、動き回っている。

戦闘配備なのだから当然、待機するパイロットもいれば、それ以上の数の整備兵がいる。第一まだMSは出撃していないので最も人の多い瞬間である。各員は戦闘行動について声高に打ち合わせをしているか、黙々と機体をチェックをしているか、あるいは足早に動いているか。

そんな喧騒の中、ダリル・ローレンツは人に当たらないように隅の方にいた。ぶつかられてしまえば義手義足でしか踏ん張れない以上飛ばされてしまうからだ。いったん完全に足が離れてしまうと、無重力下では思いもしない壁まで行ってしまうことになる。もちろんぶつかる方もわざとではなく、今のような慌ただしさなら仕方ないとはいえ、普通ならばダリルにはけっこう気遣っているのだが。

ダリル・ローレンツ、戦闘で二度も負傷し、義手義足になりながらジオンのために戦う不屈の闘士として皆から尊敬されている。

むろん誰にもできることではない。

負傷した兵の中には心にも傷を負い、抜け殻になったり、あるいは自暴自棄になる者も少なくない。中にはジオンを逆恨みする者さえ

いるのだ。かつてジオンには負傷兵専門のリビング・デッド師団があったが、闘志と忠誠を保ち、そこに入って戦いを続ける者はむしろ少数だったのである。

パイロットとしては珍しいほど内気なダリルとしてはそんな尊敬を受けることをけっこうこぼやく思っている。本人としては特別なことをしている気はない。

同時にそんな温かなコンスコン機動艦隊にいる幸せを感じ、また誇りに思っているのだ。まったくもって人の内面をきちんと評価するコンスコン司令のおかげである。

そんなところへ予期した通りカーラ・ミツチャム教授が声を掛けてきた。出撃準備のためだ。

「ダリル少尉、神経接続の用意ができたわ。サイコ・ドワスに移動するわよ」

「分かりました、カーラさん」

「…… ここでは、一応教授と呼んで」

しかし周りの誰もそんなことは気にしていなかった。ダリルの義手をとって歩くカーラ・ミツチャムはどこからどう見ても親密な恋人のそれで、周りもお似合いのカップルと認知しているのだ。

「外の戦況はどうですか、教授」

「気になるの？ そうねえ、延々と砲撃戦が続いているみたいよ。そのモニターに映っているわ」

MS発着場の壁にはある程度の大きさのモニターが設置され、戦況の一部が分かるようになっていた。

今も何人も人間がそれを見ているのだが、ダリルもまた足を止めてそれを見る。

その様子がカーラ・ミツチャムには不思議だった。今回に限ってどうしてダリルが外を気にしているのだろう。別に戦況が悪いものだろうと臆するようなダリルではないはずなのに。

実はダリルは興味だけでモニターを見ているわけではない。何か嫌な感じがしたせいだ。

モニターには、連邦艦隊からの猛砲撃が映し出されていた。そし

て、砲撃の光に時折照らされるものを見れば、ここがけっこうデブリの濃い宙域であることも伺い知れた。

「デブリ宙域でこんな無駄な砲撃を……」

そんな連邦の様子からちよつとした疑問が浮かんだ。このデブリ、何か……

それはたちまち疑念となり、恐ろしい予感へと変わる。

「これは大変だ！ 艦橋へ直ぐに伝えないと！ どうすればいいんですか、カーラさん、いや教授！」

「え、ダ、ダリル？ いったいどうしたの？ 艦橋って、これは総旗艦よ。簡単にいくものかしら」

ダリル・ローレンツは居ても立ってもいられない様子で大声を出す。それはダリルを知る者にとっては珍しいことであり、周りの人間も立ち止まる。

そんな中にガトーがいたのだ！

発着場でカリウスらと打ち合わせをしていて、そして偶然にもダリルの声を聞いていた

「ダリル・ローレンツ少尉、今言ったところによると艦橋に話、つまりコンスコン司令に用事があるということか」

「あ、ガトー少佐、そ、そうです、早く伝えないと！ サンダーボルトになる前に！」

「よく分からないが、すぐにそうさせる」

ガトーは緊急を緊急と理解できる男だ。ダリルを信頼し、悠長なことはせずに行動する。

「…… コンスコン司令、この艦のMS発着場から艦橋へ隊長コードで内部通信が入っているようです。どうしましょうか」

「ん、何だろう。発着に関してのトラブルだろうか」

「それが、攻撃管制官や整備官ではなく、コンスコン司令に直接緊急で話したいとのことだ」

「俺に？ 緊急で？ いったいどういうことだ。向こうは誰なんだ」

「アナベル・ガトー少佐です」

「何だ、ガトーならば早く繋げ！ ガトーがつまらんことでそんなことを言いはしない。何かあるんだ」

本来なら、作戦行動中の艦隊最高司令官に隊長権限とはいえ割り込み呼び出しなど常識的に考えられない。

しかし俺はガトーを十分に信頼しているし、どうしてなのかこのコンスコン機動艦隊は風通しが良過ぎるほどの艦隊なんだ。今でも何かあるとツエーンに尻を蹴られそうになるくらいに。

そして繋いだとたん、予期したガトーの声ではなく、ダリル・ローレンツの慌てた声を聞くことになる。

「コンスコン司令!! ここが、サンダーボルトになります！ もう放電直前、いったん始めれば、この宙域は恐ろしいことに」

「え、ガトーじゃなく、ダリル・ローレンツか？ どういうことだ？ いったい、サンダーボルトとは何だ!?!」

俺はダリルの様子にいつそう真剣になった。温厚篤実なダリル・ローレンツがそういうとは、単なるあてずっぽうや空想ではない。何か本当に恐ろしいことがあるのだ。

「ここのデブリは岩石じゃありません！ 資材やら艦の残骸やら、とにかく金属です。連邦の砲撃はたぶんそれにエネルギーを入れるため、このまま荷電粒子が金属に貯まり、限界を超えれば放電の嵐に!」

話の順序はバラバラだが、そのキーワードで俺は理解できた。

連邦の意図と、やたらめったら撃っていた訳を。

ジオンは既にとんでもない罠に落ちていたんだ。

その頃、グリーン・ワイアットは紅茶を飲んでいる。

無重力である艦内では紅茶であつても他のジュースなどと同じパックとストローを使って飲むしかない。すると必然的に温度も高いものは用意できず、ぬるい紅茶しか飲めなくなる。それがワイアットとしては残念だった。

もちろん、それでも紅茶に代えてジュースにしようという発想が無

いのはワイアットらしい。

「仕方がない。熱い紅茶はルナツに帰ってからの楽しみにしようか。早くその重力ブロックでティーカップを使いたいものだ。ステファン・ヘボン君」

「閣下、当たり前です！」

「そうはいつでもカップとソーサー、スプーンは欠かせない様式美なんだよ」

「今は、どうでもいい話に聞こえます」

「どうでもいいとは…… 君も緊張しているのかな。でもまあ、いよいよだ」

「荷電粒子濃度、80%を超えました。各艦の砲撃はどうされますか」
「もはや策は成っているが、最後に油断してもいけない。荷電を入れ続けるため砲撃はこのままだよ」

ステファン・ヘボンに落ち着きがなくなっているのは当たり前だ。

これから始まるのは前例のないショーなのだから。

むろんステファン・ヘボンはこの作戦を聞いた時、どんなに驚いたことか。

次に試験的に行なうってうまくいった時にも驚いた。こんなことを考えるのは、天才だ！ そしてすぐ傍にその恐るべき天才がいるのだ。これがグリーン・ワイアットという自分の上司でなければ戦慄していただろう。

発想自体はいたってシンプルなものだ。

そもそも戦闘艦から放たれるメガ粒子砲は対消滅をする粒子を撃つものである。

光速に近い速さで標的に行き、そこでエネルギーを解放し、強烈な光とプラズマといういわば荷電粒子の形に変わる。それで破壊力を出す。

その後、普通なら宇宙に拡散しそれで終わりになるのだが、この宙域のように金属のデブリがあれば拡散しない。それらのデブリに荷電が吸い付き、しだいに蓄積され、電圧が上がっていく。

そして最終的に放電、つまり稲妻になる。

滝のように激しく、全く予測不能な方向へあちこち飛ぶ。

むろん脆弱な機械があればたちまち破壊する。

さすがに艦の外壁まで貫くことはできないが、少なくとも外部機器を薙ぎ払う。観測もできなくなった艦やMSは無力化されたのと同義だ。

ルウムを使った壮大かつ華麗な罠、グリーン・ワイアットの戦術家としての才がまさに極まっている。

「ジオンからの砲撃が止んでいます」

「おお、さすがにコンスコン大将、ここで気が付いたのかな。でももう遅い。ジオン艦隊は雷女神ユレテル・クラーレの鉤爪からは逃れられないよ」

「荷電、95%を超えます！ 閣下、もう間もなくデブリから放電が始まると思われます」

「コンスコン大将も勝負あつたと見て、早めに降伏してくれば良いのだが」

「そうなるでしょうか」

「そうなって欲しいね。悪あがきをするより、お互い早く楽になるだろうに。そうは思わないかい、ステファン・ヘボン君」

第一百十八話 逆襲

しまった！

連邦はただこのためにルウムを戦場にしたので。

金属デブリの濃い宙域を狙い、そこに上手いことジオン艦隊を誘導した。あのソーラ・システムの一撃も、不可解な艦隊運動も、消極姿勢も、全てはこの瞬間のためだったんだ。そして猛砲撃により雷撃を作り出し、ジオン艦隊を叩こうとしている。

恐ろしいまでの策である。

ここでしか作れない雷撃を戦術に組み入れてくるとは。

それを俺に教えてくれたダリルは俺の艦隊に来る前はサンダーボルト宙域で連邦と戦っていた。

だから真っ先に気付いたのだろう。

そこはこのルウムと同じようにコロニーの残骸が多く、つまり金属デブリの漂う宙域だ。人為的ではなく自然に荷電が貯まり、雷鳴が轟いて止まない危険宙域になっている。

「砲撃中止！ 各艦警戒態勢のまま移動準備！」

どうやら俺の対処は遅すぎたのだろう。急いでこの宙域からの脱出を考えたが、それはままならない。

既に放電の白熱が始まり、ここはサンダーボルト宙域に変わっている！

ぽつぽつとしたわずかな雷光はあつという間にすさまじい量に変わりジオン艦隊の上下左右を取り囲み、貫き、かき乱す。

もちろん放電はそれぞれの金属デブリから別のデブリへ、どこへ飛んでいくかなど予測できるもんじゃない。

この様子を見て連邦艦隊はやつと猛砲撃をやめ、勝ち誇っているかのごとくジオン艦隊を片付けにかかっている。こつちが雷撃に翻弄されているところへの確な砲撃を加えてくるのだ。

連邦の恐ろしい策により、もはや完全に一方的な戦いになった。ジオン側ばかりが次々と沈められていく。このままでは敗北どこ

ろか全滅してしまおう。

「各艦、被害状況を知らせろ！ 航行は可能か」

判明したのは、雷撃はさすがに艦自体をどうこうするものではない。外壁をぶち壊して潰すほどの物理的な力はなく、必然的に内部のエンジンなどにも被害はない。格納されているMSも無事である。ただし索敵や照準などはまるでダメ、通信も近距離がやっとだ。しかし最悪の状況ではなかった。

ダリル・ローレンツの叫びは無駄ではなく、艦壁外部にある機器から艦内への経路を遮断することには間に合っていたんだ。

もしその処置がなければ、雷のサージ電流が艦内の制御機器に流れ込み、一瞬でコントロール不能という事態にまでなっていた。そうなれば何もできず艦は漂う棺桶になり果てていただろう。

その点では実に幸運だった。

制御機器そのものが破損しているのではないので、うまく迂回路を探し、接続し直せば回復できる。今も時折艦内の照明が明滅している状態の中、技術員が懸命に作業を進めているのだ。少し時間があれば艦の航行はできる。

「連邦側が圧倒的に有利なこの状況、なにか付け入る隙はないのか……」

砲撃戦は論外だが、ハッチやカタパルトは動かせるのでMSの稼働は可能であり、戦うにはそれを使うしかない。

しかし現実問題、この雷撃の中では危険すぎてMSは出せない。サンダーボルト宙域に慣れているダリル以外は正直ここの突破は難しい。それでもなんとかならないのか……

そこでふと思いついたことがある！

雷、つまり電気なのだ。それを通さないものがあればMSが守れる。

そんな都合の良い物があるのか…… いやあるじゃないか！

「あれはあるか、ええとその、この前の戦いで使った偽装ダミーだ。確

かそれは泡状に膨らむものだと思ったが」

「え？ マ・クベ少将の艦隊に用意はあると思われませんが…… しか
しそれを何に……」

「中に薄く気体の入っているプラスチックの泡、電気を通すことはな
い。少なくとも真空よりは。だからそれを使えば雷撃からMSを守
れるはずだ！」

「なるほど！ では直ちに！」

まあ俺の単純な思い付きだがうまくいけば何でもいい。

それが可能として俺は策を考える。

「連邦から見える艦艇は雷撃にのたうちまわっているフリをしてお
け。そうしてできるだけ連邦艦隊を引き付けておくんた。その一方、
雷撃のために見えないところから密かにMSを出し、順繰りにそう
やって発進させろ。その後、MSはすぐ連邦艦隊に向かうんじやな
い。そんなことをしたら距離を取られるだけだ。デブリ宙域を充分
横方向に行つてから飛び出し、連邦艦隊を襲え。そうすれば連邦艦隊
を囲むように奇襲ができるぞ」

俺は連邦の作り出した雷撃をうまく隠れ蓑として逆用し、奇襲をか
けるための道具にした。

まるで渡河作戦のようだ。連邦はMSを出せないと踏んでいるだ
ろうから、向こうが注意していない場所から飛び出せば驚くだろう。

頼むぞガトー、ダリル、他のみんな！

俺の指示通り、ジオンのMSたちは恐れもなく雷撃の中を発艦し、
直ちに偽装ダミーに包まれる形を取り、守られながら移動する。

そして連邦艦隊を側背から襲う。

先陣を切るのはガトーだ。

いつもはシャアが突出して早いのだが、この場合そうならなかった
のは理由がある。NTは敵の射撃を予期して避けることはできるが、
自然発生の雷撃を避けることはできない。

人の意思というものが入っていないからだ。

それならやはりダミーを保護に使わないといけないし、またララアの大型モビルアーマーエルメスに保護をかけるのはそれなりに手間だった。

ジオンMSが連邦艦隊へ辿り着く前、やはり連邦側からもMSが迎撃のため大量に出てきた。

たちまち激しい戦闘が展開される。

空間は飛び回るMSたちと、その射撃、命中の明滅で埋め尽くされる。ソロモンやア・バオア・クーでの戦いを彷彿とさせるほどのお互い百機単位の大規模なMS戦だ。

そんな中でさすがにガトーは強い！ 邪魔する連邦MSを撥ね退け、いち早く連邦艦に迫っていく。

全般的な戦局としては奇襲という形をとれたジオンMSが押ししている。

ただし局地的に見ればそうでない所も多かった。

その場所での敵味方の数や、パイロットの技量によってまるで様相が異なるのだ。

「そこッ、もう一機!!」

ジーラインのビームライフルがジオンのガルバルディ改を貫く。それはただ当たったというのではなく、ジェネレーターを的確に捉えたもので、一瞬で爆散させる。

「また出てくるッ！ 次！」

向かってくる火線をあつさり躲すと、ジーラインはお返しとばかりにビームを放ち、またしても獲物を葬る。飽きもせず繰り返されたパターンだ。ジオンにまた損害が上積みされてしまう。

「アムロ、そろそろエネルギーCAPが切れるはずよ。今のうちに補給した方がいいわ」

「分かりました、戻ります、ミライさん」

アムロ・レイの乗るジーラインにそういう通信を送り、ミライは「凄いわね、アムロは……」と独り言を呟く。

それを耳にしたのかブライトが言う。

「ミライ、アムロはどのくらいやっている？」

「そうね、今ので十六機、全て撃墜よ」

「そうか…… やはりアムロは普通と考えるべきではないのだろう……」

「ブライト艦長、そうじゃないわ。アムロは、普通よ。ただ戦いだけが違う、それだけなのよ」

「……」

「周りがアムロを特別と見れば、きっと孤独にさせてしまう。いくら上層部が英雄扱いしても、アムロにとっては不幸にしか感じられないでしょうね」

「分かった。戦いの中でアムロはホワイトベースとその乗組員を仲間だと思ってくれている。その絆は大事にすべきだ」

そこでブライト・ノアが話を打ち切る。今はそのことを深く考える時ではない。

「射撃員、弾幕薄いぞ！ アムロがまた出るまで敵を近付けさせるな！」

離れた場所でも、そのアムロの戦いを話題にしている者がいる。

連邦艦隊の中心だ。

「やられたね。ジオンがどういう方法を使ったのか知らないが、MSを出すとは。しかも包囲までしてくるとは予想もなかったよ。それほどの策士であるコンスコン大将が連邦でなくジオンの側にいるなんて、運命も皮肉が効いているじゃないか。ステファン・ヘボン君」
「閣下、しかし負けたわけではありません！ 今でも艦隊戦では間違いないく勝っています。もう少し時間があれば、向こうのMSが帰る場所を無くしてやれるでしょう」

「確かにそうだ。驚きはしたが、まだ粘れる余地はある」

「こちらのMSたちも奮戦しています。特に第十三独立戦隊の働きは目覚ましく、全面包囲にはさせていません」

「それはホワイトベースのことかね。そういった武勇に頼るのは戦術家として忸怩たるものがあるが、この際多少の期待はさせてもらおう

う」

むろんジオンの側でも状況を掴んでいる。

やみくもに押しつけて損害を増やすのではなく、いくつかの部隊がその強者に対処しようと動く。

先ずはエルメスと共に、デブリ宙域をやっと抜けたシャアのゲルググJ改が素早くそこへ向かう。撃墜数よりも強者を倒す方が自分の義務でもあるし、華だと思っっているのだ。

だがその場所に着くとシャアは気付いてしまった。

「あれは…… 木馬ではないか。ここにいたのか……」

それならばジオンMSたちがなかなかここを抜けない、その理由は一つしかない。

「では連邦の強いMSというのは、おそらくガンダムに乗っていたパイロットが出てきたものに違いない。これは少し厄介なことになりそうだ」

そう言ったとたん、アムロの乗るゾーラインが出撃してきた。うっかりホワイトベースに近寄っていた二機のジオンMSがたつたの射撃二回であつさりと光球の中に沈んでしまう。

確信を掴んだシャアはそれ以上距離を詰めずに思案する。うかつなことはできない。かつてのガンダムパイロットは、ガンダムに乗っていないくとも間違いなく強い。サイド7から地球表面、そして再び宇宙までガンダムを追い、その実力をつぶさに知っているシャアだからこそよく知っている。

だがそんなゲルググJ改の横を跳び抜け、一目散にその要注意のゾーラインに向かっていくジオンMSがあつた。今までにない奇妙な形のMSだが、かなりの速度がある。

「どけどけーッ、キャラ・スーン様のお出ましたッ!!」

これにはシャアも驚くほかない。その動きも、言うセリフも、あらゆる意味で通常ではない。

「あれは…… 学徒兵のキャラ・スーンか。規格外だな。MSは、そう

か、ジャジャというものを選んだのだった。学徒兵があんな未完成機にも乗れているのは凄いと云えるが……しかしガンダムパイロット相手には荷が重すぎる」

シヤアの部隊にキヤラ・スーンは配属されていた。成績優秀で来たとはいえ、もちろん部隊では最も下の立場の学徒兵である。それがなぜか突出を始めてしまったのだ。

「仕方ない。ここで決着をつける。行くぞララア」

「ふふ、少将、命令無視の突出をされる側に立つのもたまにはよろしいんじゃないか」

「ララア、それは違う。単なる若造のように言わないでほしい。私はいつも勝算がある突出をしているのであって、無謀ではないつもりなのだがな」

「そういうことにしておいてもいいわ。でも面白いのはもう一つ、以前の少将ならそんな部下がいたとしても最後まで助けたかしら。なんだか変わってきたように思えるわ」

「それは少し認めよう。以前なら部下を捨て石にしたこともあったかもしれないが、今はそれが酷薄なのではないかと思う自分がいる。なぜかな、ララア」

ララアにも思い当たることはある。それはシヤアに、これがもしもコンスコン大将だったなら、という意識が入り込んでいるせいではないだろうか。

つまり感化を受けているのだ。

しかしそこまでララアは口にしなかった。言ったところで仕方がないし、どのみち良い方向への変化なのだから。

第一百十九話　ホワイトベース

そこでシャアはキャラ・スーンの乗るジャジャを追いつめる。

しかし未完成ではあっても新型機、ジャジャの出力はそこそこ高く、シャアよりも先にアムロのゾーラインに接近していく。

「何だ!? ジオンの新しいMSなのか?」

アムロ・レイはジャジャを認めると戸惑いながらも射撃にかかる。

だがジャジャの機動は速く初見ではわずかにズレが出る。それでもさすがにアムロ、当てることだけはできた。ジャジャの右足にビームの火線を当て、一撃でそこを飛ばして中破に追い込む。

しかし今度はジャジャがビームを放ってきた。

本来ならば十門ものビームを同時に飛ばせる仕様を目指したジャジャだが、それは未来技術を見越したものであり、現段階の技術ではとてもそんなことは実現できない。そもそもジェネレーターにそこまでの出力はなく、結果的にたった二門の射撃だ。

しかしそれがアムロのゾーラインへの至近弾になり、不運なことにビームライフルをかすめてしまう。

アムロが余裕で躲せなかったのは、ジャジャの射撃がライフルによるものではなく、本体に砲門が仕込まれていたために一瞬見極めが遅くなってしまったからだ。ジャジャは元々局地制圧用に開発された仕様のため、兵器換装に頼るのではなく本体に備えられた固定砲でのビーム火力が重視されている。

だがアムロは少しも動きを止めず、ビームライフルが使えないとなればあっさり捨て、今度はビームサーベルを振り抜きながら飛ぶ。ゾーラインの機動性能とここまで戦い抜いてきたアムロの戦闘技量は高い。

躊躇なく接近戦に切り替える。

そんなアムロの恐るべき攻撃に対しジャジャもまたビームサーベルを抜いて迎え撃つが二回打ち合ったのが限度になる。

ジャジャの大パワーも、開発のベースとなったギャン譲りの可動域の広さもそこまでだ。

「な、なにーっ！ ジャジャはまだまだできる子なんだッ!!」

思わずそう叫ぶ。ハイテンションになって恐怖も感じないキャラ・スーンだが、現実問題としてアムロ・レイの桁外れの反応性に三回目は対処できない。キャラ・スーンの技量もジャジャの高性能もむなし、腕も肩も斬り払われあっさり大破に追い込まれてしまう。

続けてジャジャにとどめを刺そうとしたアムロだが、そこに迫ろうとしている別のジオンMSの気を感じて動きを止める。

アムロの感じた気は、今まで何度も出会い、そして戦ってきた因縁の強敵のものである。

「シャ、シャアか！ ここにシャアが来たっ！ どこだっ！」

シャアが来たと分かった以上、アムロは行動不能になったジャジャにそれ以上構うことはない。

そして宙を見つめると赤いMSが接近してくるのが分かる。アムロのゾーラインはシャアのゲルググJ改を注視し、これからの戦いに身構える。

「それと、何か光が見えるような…… いったいこの光は……」

それはシャアの後ろに続くモビルアーマーから感じたNTの共感なのかもしれない。

しかしそれを考えたのはただの一瞬、捉えられることはなく再び意識を戻す。本気で意識を研ぎ澄まさなければシャアと戦えるものではないと分かっている。

アムロの方もまた言い尽くせない因縁をここで決着させるつもりだ。

同じ時、ホワイトベース艦橋でもこのことを把握している。

だが、そのメインオペレーターであるミライはサブオペレーターのセイラ・マスが何か不審な行動をするのに気付いた。

「どこに行くの？ セイラ」

セイラは本来パイロット候補であり、艦橋要員ではないが、慢性的に人員の足りないホワイトベースではむしろサブオペレーターとして動いていることが多い。そのセイラは今、なぜかコンソールから離れ、そのまま艦橋から出ようとしている。

問いかけたミライに何も答えず、ミライもまたセイラの背にそれ以上言うことはない。

そしてセイラはピンクの連邦軍服から黄色のノーマルスーツに変え、緑のバイザーを下ろす。

ホワイトベースの艦載機発着場に着くと、艦橋から発進の指示が出ていないと不審がる整備員に対し緊急と言いつつ訳をしながら、モビルアーマーのコックピットに入り込んだ。

「アムロと兄さんが戦うことなんてないのよ……」

心底からの言葉である。

そして、自分がモビルアーマーで出撃し、戦いに割り込んで止める気である。危険は承知の上だ。

戦闘に巻き込まれれば、自分の技量ではあっさり消されるだろうことは分かっている。しかしそれでも。

セイラ・マス、本名アルテイシア・ソム・ダイクンはもちろん兄であるシヤア、つまりキャスバル・レム・ダイクンを慕っている。兄がなぜ連絡をよこさないのか、何を考えてシヤアなどという偽名を使いジオン軍に潜り込んでいるのか分からない。何をしようとしているのかも分からないが、たぶん良からぬことで、それを視野が狭くなるくらいに思い込んでしまっているのだろう。

できればそれを止め、元の優しい兄に戻したい。

一方、アムロについては、気弱なくせに生意気で、現実を直視しようともしない軟弱者だと思っていた。心のどこかで、劇的なまでに厳しい境遇を送ってきた自分と比べていたのかもしれない。どうにも甘ちゃんに見えて印象は良くなかった。戦いに対し煮え切らないアムロを殴るブライトの方に理があるときえ思っていたのだ。

しかしアムロはホワイトベースで過ごすわずかな期間で精神的に成長していった。

天才的なパイロットという称賛に決して溺れることなく、本来の純真さを残したまま、しつかり前を向いている。ぎこちないながら皆との絆を結ぼうともしている。そして何より、家庭を顧みない父、愛情の薄い母、アムロにだって複雑な家庭事情があり決して幸せではなかったことも分かった。

今、アルテイシアはシャアとアムロのどちらも失いたくない。

しかし予期した二人の対決は始まることがない。

どちらにとつても思わぬ邪魔が入ってしまう。

それはシャアとアムロの決闘を止めさせようとモビルアーマーで発進しようとしていたアルテイシアによるものではない。

何と、割って入ったのは誰も見たことがないジオンの新型モビルアーマーだった！

「こいつが連邦のエースなのか。どれほどやるのか、試させてもらおう！」

大型かつ高速、一目で力強さ、兵器としての完成度が分かるモビルアーマー、ノイエ・ジールである。

ケリイ・レズナーの乗るノイエ・ジールがやっとデブリ宙域を抜けてきたのだ。

連邦の戦線を決定的に崩すため、楔となつているこの場所を目がけて来た。ついでながら到着するまで合計六機ものジム・クウエルを血祭りに上げている。

アムロのジーラインへ高速を保つたまま接近し、モビルアーマーならではの連続射撃を加え、飛び去る。

だがアムロはその連弾を全て躲し切った。

普通ならアムロは反撃の射撃をして撃ち墜としたかもしれないが、しかし今はジャジャとの戦闘でビームライフルを失くしてしまった。ホワイトベースに予備を取りに行くこともできない。もしそうすれば、ホワイトベースの方が葬られてしまう、それほどの敵だということとは感じとれた。

シャアもまた、ノイエ・ジールとジーラインが戦う様子を見ると足を止め、少しばかり傍観する。

「ふむ、ジオンにあんな機体もあつたのだな。ララア、少しばかりお手並み拝見といこう」

旋回し、もう一度ノイエ・ジールが迫り連射するがやはりアムロは全て躲す。

しかし今度はそれだけにとどめるアムロではない。しっかりとノイエ・ジールの軌道を予期していたのだ。躲すと同時に突進しノイエ・ジールの軌道と交差するポイントへ出ている。

その瞬間、ビームサーベルで斬りにかかった。

しかし次にはアムロの驚く番である。

ノイエ・ジールは単なるモビルアーマーではなく、脚こそないがMSのように大推力スラスターや可変ノズルが付けられている。まるでMSのような高機動運用さえ可能な超高性能モビルアーマーなのだ。それでアムロのビームサーベルに宙を切らせる。

ここからは接近戦に変わる。

今度はノイエ・ジールから伸ばしたサブアーム、それに付けられたビームサーベルがジーラインを斬りにかかるが、ここはアムロの反応が早く、逆にサブアームごと斬り飛ばす。ただしそれ以上の追撃がでない。

アムロには不利な点がある。シャアが存在がどうしても気にかかるのだ。

目の前の相手は間違いなくジオンの新型機、全力で相手どらなくてはいけないのだが、シャアの気配がそれに専念するのを許さない。

そんな隙をみてまたしてもノイエ・ジールのサブアームとビームサーベルがアムロに迫るが、再びそれを払う。

次にアムロから攻勢に出る。

だがしかし、それをケリイは待っていたのだ！

ノイエ・ジールが文字通り奥の手を出す。

腕状のサブアームだけではなく、ノイエ・ジールにはクローアームが装備されている。むしろこちらが主である。今、その一本を犠牲に

してアムロの攻撃を防ぎつつ、もう一本を使ってジーラインを抱え込んだ。

ケリイも今は分かっている。この連邦のエースMSは予想をはるかに超え、桁外れに強い。まるで化け物のような動きをする。ノイエ・ジールがいくら射撃を加えてもとうてい仕留めることはできず、かといって接近戦でも立ち会えない。この化け物を倒すにはなんとか捕まえた上で物理的に絶対対処できないほどの火力を叩きつけるしかない。

「ノイエ・ジールはジオンの精神だ。連邦の化け物、丸ごと喰らえ！」
そしてノイエ・ジール本体に装備されたメガキャノン撃ち放つ。それはあまりに常識外れである。このゼロ距離からの砲撃では、うまくいったとしても誘爆で相討ちになってしまうのではないか。

アムロはどうかクローアームを振りほどいたがそれが精一杯だった。

いや、普段であればそれで済ますようなアムロではなく、お返しとばかりノイエ・ジールへ致命傷を叩き込めたかもしれない。

だがそうはできなかつた。

この時アムロはこのモビルアーマーパイロットの思念を感じ取ってしまった。

「このジオンのパイロットは…… ああ、あの時の親切な人か……」

分かったのだ。以前出会ったことがある。

それはサイド6で急な雨に降られ、アムロが運転していたジープがぬかるみで動けなくなってしまった時のことだ。その時、通りがかつたケリイ・レズナーは親切にもアムロのジープを牽引して助けている。

アムロは殺人マシンではない。

その心はまだ荒んではない。戦争による人の悪しき思念に晒されたことも多かつたが、瑞々しい感性は失われておらず、敵もまた人形ではなく人間であると思う心を残している。つまりケリイを一瞬の躊躇もなく殺すほどではなかつたのだ。

それが明暗を分けた。

アムロのジーラインにメガキャノンがかすり、その威力のため右胸部までもが溶かされた。コックピットまではギリギリ届いていない。幸いなことにジェネレーターは一気に吹き飛ばされたためその爆発も大したものではなくなっていた。ノイエ・ジールも損傷を受けたが稼働できないほどではない。

「相討ちといったところか。あのモビルアーマーの技量も大したものだった。そしてこれは私にとってチャンスと見るべきだろう」

今度は戦いの結果を見たシャアがそう言いつつ接近を図る。

元々連邦の新開発MSガンダムを沈めることを使命として追っていたシャアだが、もはやガンダムに乗っていないとしてもアムロという人間にようやく決着をつけられる。また、アムロの生死や負傷が分からない以上、別のMSで出撃してきたら繰り返しになるだけであり、ここで片付けておかなくてはならない。

だがそこでシャアが目にしたのはアムロのジーラインに対する支援機だった。木馬から出たガンキャノン、ガンタンク、そしてモビルアーマーまで接近してこようとしている。おまけに支援機を出すだけではなく、木馬自身まで弾幕を張りつつ寄ってきている。できるだけ早くジーラインを收容するつもりなのだろう。しかし普通ならそれは有り得ないことで、母艦というものはMS戦闘宙域からできるだけ遠ざかろうとするはずなのに。

「なるほど、木馬はあのパイロットをどうしても救出したい、失ってはならないと考えているのだな。まあ、今なら丸ごと排除するとしても私とララアには大した問題ではない」

そう言っつてシャアのゲルググJ改が支援機たちを壊滅させようと態勢を整える。真っ先にその餌食にするのは戦闘機体形のモビルアーマーだ。

「少将！ いけません!!」

「どうしたララア」

「いえ、少将にとつて今戦うのは決して良いことにならない気がして」

「…… ララアがそう言うとは珍しい。何かあるということか」

ララアの能力に全幅の信頼を置くシヤアも思案する。

むろんララアも神ではない以上、シヤアの妹であるアルテイシアがそのモビルアーマーに乗っているとは分からず、伝えようのない不安があっただけだ。シヤアはシヤアの方でアルテイシアが木馬にまだいるとは考えていない。攻撃をやめたゲルググJ改の前を飛び去るモビルアーマーのパイロットの影を見て、まさかな、と思うだけである。

そのわずかな時間が大きな差を産む。

連邦艦隊が一時後退を決め、全艦全MSと共にこの宙域を横切りつつあった。光の粒が連なった川が迫る。

そんな大きな濁流には抗しようもない。

シヤアはキャラ・スーンを救出すると、ララアを連れて離脱に転じた。大破し、攻撃オプションをほぼ失ったケリイのノイエ・ジールも何とか自力で離脱する。

ホワイトベースもまたアムロを素早く収容してその場を離れていく。

奇しくもアルテイシアの願い通りどちらかの死という決着は避けられたのだ。

第二百二十話 3人組プラス1

ここで連邦艦隊が一時撤退し、態勢を立て直すことを選択したのは理由がある。グリーン・ワイアットはわずかな戦局の流れを察知し、そういう判断をした。

「ステファン・ヘボン君、少し後退することにしよう」

「閣下？　しかしMS戦ではまだ支えられていますが」

「万が一のことを考えると、突破され被害を被ってからでは遅いね。乱戦は望むところじゃない。ある程度の戦果を得た今、優勢のうちに退くべきだ」

「は、はあ、その通りではありますが……　ここまで策を練り、もう少しまで追い詰めておきながら、艦隊戦に間を置いてジオン艦隊をデブリ宙域から逃すのはあまりに無念では」

「確かにその通り、私とて君と同じ気持ちだよ。しかし気が付かないかなステファン・ヘボン君。ジオンMSの戦い方に変化がある。もちろんこれにも対処のしようはあるが、今すぐは無理だろう」

ステファン・ヘボン少将は正直意味が分からなかったが、言われた通り全艦隊に後退を指示する。そうしながら戦闘状況を細かく注視すると見えてきたものがあつたのだ。

「閣下！　確かに変化が認められます……」

それはちよつとした変化だ。

しかし結果を大きく変える可能性をはらんでいる。

ステファン・ヘボンはそんなところまで見通したグリーン・ワイアットの慧眼に再びひれ伏すしかない。

その変化をもたらしたのはジオンMSの中の一つの隊だった。

カスペン少将の技術艦ヨーツン Heim から出撃したMSである。ジオンはこの会戦に鈍足のドロス級空母を連れてくることはできず、各MSはほぼ搭載限度近くまで各艦に分けて載せられている。

中でもカスペン大隊のヨーツン Heim は最大数のMS、四十五機も

の数を搭載していた。むろん技術隊らしく新兵がその大半を占める。元々カスペン大隊は純粹技術開発ではなく、といつて純粹訓練所でもない。機体の評価、運用、訓練を一体化して行うことで素早い発展を目指したジオンならではのユニークな隊である。そして、持てる戦闘力を買われて事あるごとに会戦へ参加している。ヨーツン Heim と技官、教官、新兵の MS 戦力が期待されているのだ。

今はデブリ宙域にヨーツン Heim を残したまま、MS は全て出てこつちの戦闘に参加している。

その中には技官というよりベテランパイロットとしてオリヴァー・マイ中尉、そしてモニク・キャディラック少佐がいる。モニク・キャディラックは元はギレン総帥府所属特務大尉という軍内エリート的位置だったが、ギレン総帥の死と総帥府の解体に伴い通常の少佐という階級に落ち着いている。

この MS 隊には今、何とカスペン少将自身が加わっていた。

「カスペン少将、お戻り下さい！ 部隊司令がヨーツン Heim を離れていいわけがありません」

「キャディラック少佐、ではヒヨツ子をどうやって守る。新兵たちをここで死なすわけにはいかん」

「……」

もはや言う言葉はない。カスペン少将はいつも通り、若者の身ばかり案じている。その強面からは信じられないほどだ。

有言実行、カスペン少将は自分の愛機であるゲルググで新兵のお守りをしている。

隊には他にゲルググはない。MS の構成としてはだいたい 7 割がガルバルディ改、他 3 割がケンプファー改である。カスペン技術大隊に限らずジオン MS は他の隊もだいたいこれと同じような構成になっている。

どの隊でも新兵や若者はガルバルディ改、地球表面から還った古参兵がケンプファー改を選ぶのが定番である。中にはどうしてもザクやドムなどから離れられない頑固者もないわけではないがその数

は少ない。またゲルググは故障の多さと整備兵泣かせの機体構造から、真っ先にフェードアウトされ事情がない限り使われていない。

ジオンのMS隊の配合はそのミックスの結果だ。

カスペン隊では当然、そのMS構成に合わせた戦いを繰り広げている。

もちろん各MSをごちゃ混ぜにするのではなくきちんと区別して使っている。

先ずは突進力に優れたケンプファー改が連邦MS隊を乱し、そこに新兵のガルバルディ改が打撃を与えるという戦法である。戦いに慣れていないせいで恐れが出てしまう新兵をそうやって使うのは合理的だ。

しばらく戦うと、戦果を挙げる代わりにそれなりの損害もまた受けてしまう。

カスペン少将はそれを痛ましく思う。

戦いというものは一方的になることはあり得ないと分かっている。でも、やはり若者を死なせていくのは堪える。

「やっと連邦の一隊は崩れました。どうします、カスペン少将」

「戻って一服したいのは山々だがそうもできません。次へ向かい、できるだけ早く連邦MSを叩き、向こうの艦隊へ取り付かねばならん。新兵たちの様子はどうか、少佐」

「仲間を失って動揺しているのはそうですが……それは人間として当然の範囲、幸いなことに錯乱や心神喪失はまだ出ていません」

そして新たな戦いに向かうが、ここでふとオリヴァーに気付くことがあった。

「キャディラック少佐、ちよつと試したいことがあるんですが」

「え？ オリヴァー中尉、何かしら？」

この切迫した状況で提案するのも普通ではない。だがモニク・キャディラックはオリヴァーの真面目で落ち着いた性格を知っている。で、しつかり聞くべきだと判断した。

「ええと、では話しますが、ケンプファー改が先陣、ガルバルディ改が後衛、このままでいいんでしょうか？ 僕が思うには逆の方が」

「オリヴァー、なぜ？ もしガルバルディの新兵を先に出したら崩れて、手がつけられなくなるだけよ。それこそあつという間に」

「いいえ、そうじゃありません。機体特性を考えて下さい。ケンプファーはいい機体でも、索敵性能はガルバルディに劣ります。しかも、連邦の新型MSはたぶん索敵性能も向上し、ガルバルディには及ばなくとも、おそらくケンプファー以上になっているような気がします」

「…… そうね。そんな感じもするわ。今までの連邦MSなら索敵範囲はジオン機より広くないものだけど、新型機だけはかなり索敵範囲が広そうね。初動がかなり早いもの」

「だから無駄に連邦MS隊に先手を取らせてしまってるんです。ついでに言えばケンプファーの実弾兵器は連射力はあっても射程は決して長くない、間合いが遠いと避けられてしまいます」

「それで位置取りを反対に、というわけね。ケンプファーではなく、ガルバルディを前衛に出して」

「ガルバルディでゆとりをもって先手を取り、頃合いを見て一気にケンプファーで決着をつけた方が有効なんでしょう。新兵だつていきなり戦闘のさなかに飛び込むより楽なんじゃないでしょうか。それにいつでも後退してケンプファーに任せられるのも安心です」

「分かったわオリヴァー。その戦い方をカスペン少将に提案してみましよう」

機体の性能と運用について、さすがに技術大隊はどこよりも理解が早い。

オリヴァーの殊勲である。

その新しいやり方を試してみると非常に有効だということが分かった。

それまでは連邦のジム・カスタムと同数で当たれば良くても拮抗、新型機ジム・クウエルと当たればはつきり押されてしまっていた。しかし戦法を変え、ガルバルディとケンプファーの長所を活かす戦いを

すれば連邦ジム・クウエルさえ押し返すことができる。

これにより戦況は改善し、他のジオンMS部隊でも真似をするところが出てきた。

グリーン・ワイアットはこうした微妙な変化にも気付いたのだ。けだし名将である。

そして連邦艦隊が後退に動く直前、カスペン大隊はとある連邦MS部隊と戦いに入っていた。一つの局地戦だ。

ジオンのガルバルディ改が弧を描いて連邦MSに攻勢をかけ、それに対して連邦MSが応戦する。

「うわっ、ジオン機が来た！ 三機だ。一緒にやろうぜ、ジェリド、エマ」

「カクリコン、無理よ。こっちにも一機来たわ！ そっちは自分でやって頂戴」

「ええっ、三機を俺が？ 待て待てエマ、無茶言うな。ちよつと下がるぞ」

それは連邦強襲揚陸艦アルビオンから発進したMS隊、てんやわんやで戦闘に入っている。

「あ、カクリコン、そこで下がったら。ジェリド、ジオン機がそっち行っただわ！」

「そっちって、どっちだ？ エマ、どこから来る！」

「右よ！」

「え？ 右か、俺にはジオンMSが左から来るように見えるが……」

「だからジェリド、私から見て右なのよ！ 分からない？」

「馬鹿かエマ！ なんで分かると思えるんだ！ 俺を殺す気か、そうか、そうなんだな！」

こういう調子が続いている。

ジオン機にあつという間に追い込まれながらも、何とか戦いの形になっっているのはジム・クウエルの高性能のおかげだ。

そんな体たらくの三人に声をかける者がいる。

「……お前たち、真面目にやってるつもりか？」

マウアーが静かに怒っている。

その三人組は士官学校所属の学徒兵、しかしマウアーは士官学校とは無縁であっても軍歴は長い。というわけで三人組とマウアーは微妙なところで同格と言える。

そしてマウアーにはこの全く連携のとれていない様子が我慢ならないのだ。とうてい真面目にやってるようには見えない。

「真面目のつもりだけどな」「真面目に決まってる」「真面目よ、私だけは。他は知らないけど」

「……………で、このまま戦って死にたいのか」

「そんなわけない。あ、ジェリドはエマに撲殺されたいそうだ」「俺に振るな！ その役はカクリコンに譲ってやる」「何よ二人とも暴力みたいに。ただの修正じゃないの！ そうよ親切だわ！」

「……………死ね」

これはもう何を言ってもダメだと匙を投げたマウアーだが、このへつぽこ三人組を見捨てることはなく被害が出ないようにフオローしている。

それはアルビオンでも同じだ。

激しい弾幕を送って援護することを忘れない。ヘンケン・ベツケナーの指示によるものだが各員きっちりそうしているのは、艦橋の皆も分かっているからである。

「艦長の可愛いエマちゃんを死なせるわけにはいかないもんな」

何のかんのヘンケン・ベツケナー艦長を敬愛する皆は、当然ながらエマを熱心に守りにかかっている。

ジオン側カスペンのMS隊も攻めあぐねている間に連邦艦隊全体の移動を感知した。

こんな局地戦にこだわらず、いったん戦闘を止めて退く。

こうして第二幕の戦闘は終わった。

連邦艦隊はルウム特有の金属デブリ宙域を使った雷撃という驚くべき奇策を準備し、見事にジオン艦隊をそれに嵌めて叩いた。

しかしジオンもまた雷撃を半ば無効化し、MS戦を仕掛けて乗り切ったのだ。

仕切り直しだ。

今、連邦艦隊は少しばかり後退して陣形を整えつつある。

ジオン艦隊もまた航行能力を回復し、デブリ宙域をやつと抜け出している。そしてMSを収容、補給と整備を進めながら連邦艦隊に対峙する。

戦いはまだ終わりではない。

これからおそらく最後となる第三幕が始まるのだ。

両陣営の信じる正義と未来をかけて死力を尽くす。その激しい戦いはいったい幾つの運命を巻き込むのか、まだ誰も知らない。

第二百二十一話 ワイアットの狙い

「さて準備はできたかな、ステファン・ヘボン君。それと被害状況はどうか」

「混乱の収拾と損傷艦の応急修理は完了しました。現在、我が連邦艦隊は無傷あるいは小破で戦闘可能な艦が200隻余り、航行はできても戦闘は無理なものが40隻といったところでしようか」

「よろしい。ではジオン側の推計はどうなっているだろう」

「そしてジオン側では、同じく戦闘可能が130隻、それが不可能な大破が40隻ほどと算出されます。MS戦力については艦数ほどの差はなく、こちらが優勢とはいえ小差と見込まれます」

「ふむ、そんなものだろう。先ずは充分と言える」

戦いの第一幕、第二幕はワイアットの策が功を奏し連邦艦隊とジオン艦隊の戦力差は拡大した。そこで戦いを決められず仕切り直しにはなってしまったが、ワイアットとしては落胆することはない。

第三幕をスタートするに当たっては上々だ。

だがここでちよつとした懸念をステファン・ヘボン少将が指摘する。

「しかしながら閣下、物資面において消耗は激しく、ルナツーから遠征してこなくてはいけなかった我らの方に不利な面があるかと。そもそも物資を満載という状態で進発できなかった状態なので」

「それもその通りだ。サイド6から物資を持って合流してきたオットー・ミタス君がいなければ、撤退も視野に入っていたかもしれないね。しかし結果的には問題ない。もう持久戦というオプションが取れないだけのことだ」

「持久戦ではないということ、ここからも急戦でしょうか。ワイアット閣下」

「どのみちはつきりとした決着をつけるにはそれしかない。持久戦の結果、うやむやになってはたまらないじゃないか。いったんルナツーに戻っても連邦はシリ貧になるだけで、退くことはできない」

「それはそうですが……」

それでもグリーン・ワイアットの落ち着きは揺るがない。

ここでジオンを撃滅するという路線は変えず、今から始まる戦術戦に思いを馳せているのだ。

「心配なのかね。いや、これでやつと下準備なしの本当の戦術戦になるだけだ。面白くなってきたじゃないか。それでも私がコンスコン大将に勝るか劣るか、期待してくれたまえ」

「いいえ閣下が敗けるはずはありません！ ワイアット閣下なら必ずや向こうを上回る戦術を編み出すと、確信しています！」

「ありがとう。実はもう策は考えてあるのだ」

「おお、さすがは閣下……」

「では連邦の未来のため、勝ちに行こうか、ステファン・ヘボン君」

その頃俺は、ジオン艦隊をようやく立て直した。

状況を考えてため息をつく。

「やられたものだ。ケリイのノイエ・ジールも失われてしまったか。まあ木馬のMSを叩けたのだからお釣りがくると言うべきだな。それにしても連邦の戦意は高いものだ」

ジオンは休む暇もない。

連邦艦隊は準備を整え、再び戦うべく前進を始めたのが分かっている。

よし、ならばここから勝負だ！

ジオンの明日を作るため負けるわけにいかない。連邦がいかなる手を使ってもそれを全て返し切り、こちらの策に嵌め、ルナツーに帰さず叩いてやる。

ジオン側の艦隊陣形は今、俺の艦隊を中央に置いている。

その横の左翼にマ・クベ少将やカスペン少将の隊、右翼にはデラーズ少将の隊を配置している。

シャアの隊や海兵隊などは遊撃だ。

これに対し連邦艦隊はひと当てしに来たようだ。

だが増速してくると横一線ではなくやや足並みを乱しているように見える。

「む、速いな、連邦側は。やや揃っていないくらいだが、そこまで戦意が高いのだろうか」

「コンスコン司令、確かに。このままでは左翼のマ・クベ少将が真っ先に当たってしまう計算です」

俺はテイベの艦橋にいたセシリア・アイリーンにそう言い、そしていつもながらの的確な返答を返された。彼女は物資や連絡の統括として今は艦橋に出ている。

まあ、俺はセシリアとそういつた会話をしたものの、単に連邦が乱れたとは思っていない。

連邦側の将は恐ろしい奴だ。

勝ち気に逸って足並みを乱すような愚将ならいざ知らず、ここにきて艦隊の統率もできないような将であるものか。何か狙いを持っていると見て間違いない。まさかマ・クベ少将の隊が比較的弱いことを知っているのか。

状況は刻一刻と変わる。

連邦は乱れたのではないと判明してきた。はつきりとこちらの左翼を狙って攻勢をかけ、崩そうとしている。

「やはり左翼が戦闘に入ったようです、コンスコン司令。連邦艦は早くも艦砲の合い間にMSの発進を始めています」

「二氣に来たな。こちらとしては状況を見ながら陣形をコンパクトにして受け流す必要があるかもしれない。いや待て、これは…… まずい！ 連邦が小部隊を形成して動かしつつある」

ここで俺は見抜いた！

連邦側は巧妙にカモフラージュしながら、十隻ほどの部隊を幾つか作っているのだ。

それらをこちらの左翼前面に順次回しつつある。

接触した連邦の部隊は外側を下がっていき、新しい部隊がそれに代わって前進している。そうやって攻勢をすぐさま引き継いでいるの

だ。俺はこの動きを見た段階で連邦の戦術を確信した。

「なるほどそうか！ 連邦のやっていることはいわゆる車懸かりの陣だな」

「コンスコン司令、それはいったい……」

「戦術バリエーションの一つだ。小部隊を幾つも編成し、移動しながら順繰りに攻撃を叩きつけ、最大火力の一撃を加えたら息切れする前に素早く逃げる。これを次から次へと何度も行なう」

「それは何のために」

「間断なく攻勢を続けることで、相手に立て直す暇を与えず、早いうちに瓦解に持ち込む。いわば超急戦の戦法なんだ」

「連邦はそんなやり方を…… 恐ろしいことですね」

セシリアは疲れることなく押し寄せる敵を想像して顔色を悪くする。

それは当然なのだが、俺の感想はまた別だ。

「いや、心配することはない。この戦術には対処法がある。落ち着いて迎撃し、うっかり局所的劣勢を作らないように気をつければいい。そうなれば小部隊の連続攻勢などただの戦力逐次投入と同じ意味にしかならん。愚策中の愚策といわれる戦力逐次投入だ。いずれは向こうの方が損害に耐えられなくなり消滅する」

俺は戦術家として冷静に判断する。

まあしかし、この方法は珍奇というべき戦術ではない。むろん連邦の将でも利点と欠点をよく知つての上で、こうしているのだろうが。

「連邦の狙いは、ある程度の損害を覚悟の上でマ・クベ少将の左翼を早いうちに突破し、こっちの後背に回り込んで挟撃することか。いい戦術だ。悔しいがそれが可能なほどの戦力差を確保しているからな」

「で、では突破されないように応援を」

「もちろんだ。マ・クベ少将に通達を頼む。ゆっくり後退してもいいから、突破だけは許さないように。直ぐに援軍も送る」

「は、はい」

「遊撃のキマイラ隊、サイクロプス隊に支援を要請、それからうちの艦

隊のツエーン、シャリア・ブルのMS隊を出し、それもマ・クベ少将の支援に向かわせるんだ。連邦の攻勢を柔軟に迎撃し、損害を増やしてやるようにと」

おそらくシャリア・ブルならば俺の意図を理解し、きちんと防御してくれるだろう。シャリア・ブルの冷静さには充分に信頼が置ける。一方でガトーやシャアはジオンの攻勢の要になるので防御には使わず手元に残す。

さあ、こうすればしばらく支えられるだろうか。連邦の初手は防いだ。

今度はこちらの番だ。

と思ったのは甘かった。

いくら防がれても連邦は懲りることがない。車懸かりは止まらな
いどころか、より大規模になりつつあるとは！

「…… どうしてだ。なぜその戦術にばかりこだわりを持つ。あるいは、突破からの背面展開が狙いではないというのか」

俺は戦術家として頭をフルに回転させる。

考えろ。向こうの立場に立てば、いったい何を狙う。

「もしかすると、こちらの中央と右翼を遊兵にして無力化したいのだろうか。確かに左翼を突破されないよう迎撃に徹すれば、その間は何の場所は動けない。下手に前進すれば左翼を取り残してしまい、あたら間隙をつくってしまうからだ。そんなことをすれば一気に分断される」

ここで決断した。

全体を左翼の後ろに送り、陣を深くする方法も無くはないが、それでは攻勢が得意な俺の艦隊が後ろにいつてしまうことになる。それでは持ち味を活かせない。

そうではなく、むしろジオンも攻勢に出る。

しかし素直に前進させるのではなく、全体を反時計周りに動かす。左翼は防御を続けるが、本隊と右翼は前に出ながら回り込むのだ。

そうやって車懸かりを用意している連邦の小部隊たちを横撃して

軒並み壊滅させながら同時に連邦本隊を急襲する。おそらく車懸かりに加わっていない連邦艦隊の後方は快速の艦ではなく、動きは鈍いはずだ。うまくいけば混乱から回復不能な打撃を与えて押し切れる。先ずは右翼のデラーズ艦隊を大きく動かし、そして俺の本隊を順次それに釣られるように移動させ回転する。

ジオン艦隊が動き始めたことを観測した連邦艦隊はいったん動きを止め、中ではこんな会話がなされている。

「実にうまい対処をして逆撃を凶つてくる。さすがはジオンのコンスコン大将だ」

「その通りですが閣下、しかしそうしてくれなければこちらの策も成り立たないのでありがたいですな」

「ステファン・ヘボン君、その通り。慌てて防御にばかり注力したり、あるいはそれさえ下手なため突破されるような凡将だったならばこちらの策も空振りになったところだ。いや、それなら楽に勝ていいのかもしれないが」

「とにかく閣下、次は予定通りに」

そしてグリーン・ワイアットは艦橋スクリーンへ同時に二人の人間を呼び出した。

その二人の者が映るやいなや命令を発する。

短いものだがこの第三次ルウム会戦で最も重要になったといわれる命令だ。

「ガディ・キンゼー大佐、エイパー・シナプス大佐の両名に伝える。この機を逃さず、最大速度で出撃せよ。狙いはジオン本隊にいるコンスコン大将ただ一人。君たち投げナイフにコンスコン大将の首を取り、ジオンの心臓を止めてもらいたい。やってくれるかね」

「はっ！ 身に余る光栄、必ずや」「吉報をお待ち下さい、閣下」

第二百二十二話 デラーズフリート

ガデイ・キンゼーとエイパー・シナプスの二人に命令を伝え終わり、既に消えたスクリーンを見つめながらグリーン・ワイアットが言う。「さて、これが後の歴史にとって是非か、そこまでは私も分からないね。もしかするとコンスコン大将という人類にとって貴重な財産を失うのかもしれない。そうなれば私はむしろ背信かな。まあ、私にとっては最も確実に勝利を得る方法だし、連邦軍人としては正しいことをしているのだから他の責任まではとれないと言いつてしよう」

「閣下、敵の指揮系統の寸断を狙うのはよくある戦術と思いますが、特定の指揮官個人を倒すというのは…… こういつた戦術はあまり例がないのでは」

ステファン・ヘボン少将の言う通りだ。大昔の戦争ならば知らず、国家間戦争でそういつたことは珍しい。作戦のついでではなく、最初からそれを狙って行動する例はほぼ無い。

ここでワイアットはステファン・ヘボンに補足説明する気になった。それはやはりコンスコン大将を惜しむ気持ちの裏返しかもしれない。

「ステファン・ヘボン君、ジオンはあんな弱小の国力なのに予想外に強い。今に至ってこの私といえども認めざるを得ない。ただしその強さは指揮官の強さによるところが大きく、それさえ消せば大きな脅威には成り得ない。つまり連邦が勝つにはコンスコン大将を倒すことが最短距離だ」

「コンスコン大将を消せば、勝利は転がり込んでくる、確かにそのためだけに作り出した状況ではありませんが」

「そう、ステファン・ヘボン君。君も知つての通り、陣の全てを回転運動させるのは統率が難しく、どんな名将といえどもその最中で急に対処はできない。無理やり途中で違うことをさせようとすれば艦同士が衝突するのが関の山だね。艦隊運動の禁忌の一つに敵前回頭があるが、途中で無力になるのはそれと同じ理屈だ。しかしそれだけでコ

ンスコン大将を倒せると思っっているわけではない」

「他にあるのでしょうか、閣下」

ここでワイアットは一つの心理分析を披露する。グリーン・ワイアットを優れた戦術家たらしめている要素、正確無比な心理分析を応用し、もう出している結論があるのだ。実際のところそれは正鵠を射ていた。

「全く別のことになる。それはンスコン大将のこれまでの行動を考えてみれば分かる。地球表面での戦いといい、幾度に渡る戦いでンスコン大将は前線に出るのを厭わない。これは決して陣頭指揮に酔う猛将であるという意味ではない。おそらくンスコン大将は自己評価が高くないのだろうか」

「何ですと！　ンスコン大将の自己評価が高くない、それはあり得ません。あれほどの名将、地位も実力も事実上ジオンのナンバーズリーではありませんか。もちろんザビ家の二人以外ではトップ。いや、おそらくジオン軍内ではザビ家すら凌ぐほどの名声と忠誠心を集めているのでは」

「それでもだ。それでもンスコン大将の自己評価は高くない」

ステファン・ヘボンは尊敬する上司の言葉といえども半信半疑だ。

あまりに常識とかけ離れている。ンスコン大将は誰が見てもジオンの支柱ではないか。

「閣下、にわかには信じられない話ですが……」

「私の方は確信しているよ。そうでなければこれまでの行動を説明できないのだ。しかもドズル・ザビならともかくあの謀略家キシリア・ザビがンスコン大将を自由にさせて、叛乱の可能性を全く考慮していないのが奇妙だとは思わないかね。実力も人望も充分国家転覆できるほどの人間を、だ。猜疑心というものが彼の前では蒸発してしまっているのだろうか」

「それは確かにおかしな状態……　独裁体制ならとくに疑われて粛清されてしまってもよいような」

「つまりンスコン大将は周囲から悲しいほど野心がない人物だと見

られているのではないか。できるなら私もコンスコン大将と直に会って話し、人となりを確かめたかったものだ」

「その機会は、もう無いのですな。少なくとも生きているうちには。残念ですが」

「ステファン・ヘボン君、だからこそこの作戦は上手くいくのだ。たぶんコンスコン大将は自分ばかり全力で守らせたり、まして逃げたりはしない。ジオン艦隊を不利にしないため、そういう無様なことはせず自分が連邦の一撃を受ける方を選ぶ。そして、おそらく満足して散るだろう」

名将は名将を知る。ステファン・ヘボンへの解説はワイアットの心からの言葉である。

そこにはコンスコン亡き後のジオン艦隊を叩き潰すことは眼中に入っていない。ワイアットにとりそれは容易い作業でしかないからだ。むしろコンスコン大将への手向けは何がいいかと考える。

そんなワイアットとステファン・ヘボンの会話が終わったのと同じ時、連邦艦隊から二十隻ばかりの艦隊が二つ飛び出した。

コンスコン大将を倒すべく出撃したガディ・キンゼーとエイパー・シナプスの艦隊である。

それらを見る間に増速し、矢のような速さになる。一直線にジオン本隊の中心を目指してひた走る。

「エイパー、俺たちのどちらかがコンスコン大将の首を取る。もし途中で妨害があれば一方がそこで盾になるんだ。分かっているな」

「知れたことだ。ガディ。俺とお前のどちらかだけでも突き進み、ジオンのコンスコン大将を倒し、武勲を上げよう。そうすれば発言権を増してあの真実を告発することができる」

それは二人だけが持つ共通の信念なのだ。

ずっと心に決めている。

それがベースとなり、戦いに向ける闘志にもなっている。

「そうだ。我らのエルラン中將は決して裏切り者ではなかったと知らしめるのだ。エルラン中將はオデッサで水爆の脅威から市民を守る

ため、やむなく取り引きせざるを得なかったというのに……それが唾棄すべき、連邦軍史上最悪の背信とまで言われるとは」「しかもそれを連邦の無能さを隠すために使われてしまった。中将の無念を晴らし、名誉を回復し、逆に連邦上層部の欺瞞を明るみに出してやる。この俺たちが」

二人は信念の確認をしたが、それ以上会話を続けることはなかった。

前方にジオン艦隊が横切りつつあるのを感知したのだ。

明らかに進路を邪魔し、二人をそれ以上行かせないような意図を感じる。

それはジオン艦隊の右翼を務め、最初に前進を始めて攻勢に出る準備をしていたエギーユ・デラーズ少将の艦隊である。

デラーズも一流の戦術家であるからにはその慧眼で予測ができる。今もその能力を最大限に発揮した。連邦艦隊からガディ・キンゼー隊とエイパー・シナプス隊が急進してくるのを見て、それがジオン本隊の中心を貫こうとしているのではないかと危惧したのだ。

そうさせまいと立ちはだかる位置にデラーズ艦隊を持ってきている。

連邦の二人は、このデラーズ艦隊がおそらくジオン本隊への進路上最大の障害になると見て取った。

二人のうち、わずかに先行していたガディ・キンゼー隊の方がこのデラーズ艦隊に当たることを決意した。すると阿吽の呼吸でその横をすり抜け、エイパー・シナプス隊の方がジオン本隊へひた走る。任せたと云わんばかりに、その背後で始まるガディ・キンゼーとエギーユ・デラーズの死闘に目もくれず。

一方のデラーズの艦隊は士気が高く、自分たちのことをデラーズ・フリートと呼んでいる。

以前の第二次ルウム会戦で痛手を被っていたのだが、今回の会戦でも小型艦が中心とはいえ四十隻もの艦艇を揃えて参加している。

そして先ごろ、サンダーボルトを浴びるといふ不利な条件下で連邦艦隊と撃ち合う真正面にいたため、既に半数近くを失ってしまったている。

結果的に今から戦うべき連邦ガディ・キンゼー隊とあまり変わらない艦数である。いやその内容を見ると、デラーズ・フリートは飛び抜けて大きい旗艦グワジン級グワデンを除き小型艦ばかりなので艦隊戦力としてはむしろ劣る。

だが戦意は充分、逃げる気はさらさらない。

戦闘が始まるとたちまち全面に広がり激化するばかりだ。ジオンも連邦も華麗な艦隊運動を駆使し、足を止めないまま撃ち合う。ただやはり主砲戦力においてはグワデンしか頼れないデラーズ側の不利になる。ガディ・キンゼー隊の方は二十隻のうちマゼラン級戦艦を四隻も含めているからだ。

むろんこのままではいけないと分かっているデラーズはMS戦に持ち込むタイミングを見ている。

そしてそれは意外なところからやってきた。

デラーズ・フリートが困難な戦いを行っていると見た近隣のジオン戦力が支援に来たのだ。それも歴戦のMSを三十機も引き連れて。

「チイ、デラーズ少将が危なそうだね。支援する。リリー・マルレーンをそっちに向かわせておくれ」

それは海兵隊シーマ・ガラハウだった。

デラーズ・フリートと近い位置に遊撃として布陣していたのだ。

海兵隊は艦数こそ六隻という少数、しかも旗艦ザンジバル級リリー・マルレーンの他はムサイしかない。しかしMSはそれに見合わないほど多く、しかも練度は高い。

それが海兵隊戦力の中心だ。強みを活かすため、先ずは連邦ガディ・キンゼー隊の横合いから艦を急進させ、足を鈍らせると同時にMSを使って襲う。

「よし、あたしも出るよツ、コツセル、準備しな」

シーマ・ガラハウ自らガルバルディ改で出撃し、海兵隊MSを率い

て突撃する。

ついこの間までは毒ガス虐殺の呪いから逃げるような狂気の入った出撃であったが今は違う。呪縛から解かれた今、シーマは純粋にジオンのため、仲間のため、戦意をたぎらせて前へ進むのだ。

この海兵隊の応援を見てデラース・フリートもMSを発進させ、共に連邦側に立ち向かう。

ここからはMS戦になる。

辺りの宙域はたちまちジオンと連邦、MS同士の決戦場になった。それぞれが飛び回り、ビームを放ち、斬り合い、互いの意地をぶつける。

だが、MS戦に移行してジオン側が一気に有利になったかというところ決してそうではない。

連邦ガディ・キンゼー側から発進してきたMSが思いのほか強力だったからだ。そこには格段に戦闘力の優れたMS隊が二つも含まれていた。

「ライラ、今からジオンMSと戦闘だ。分かっているだろうが戦いは熱くなり過ぎた方が負けだぞ」

「言われるまでもないバニング大尉。戦闘は冷静に、目的を達成すればそれでいい、昔そう叩き込まれた覚えがあるからな」

「そいつが分かってくれば言うことはない。ライラ、死ぬなよ。怪我もするんじゃないぜ。後で勝利の乾杯だ」

「こつちのセリフだ。不死身の第四小隊とはいつでも半殺しにされることはあるだろう。いや、よく考えたらこの前まで捕虜だったのではないか。死ぬ以外は何でもありだな、不死身のバニング大尉」

「はっは、痛いところを突いてきやがる。しかしいつにも増して口が悪いぞライラ。ああ、そういうトゲは照れ隠しか、そうなんだろう。プロポーズの答えにカッコいい言い方を考えることはないぜ。女はイエスとだけ言えばいいんだ」

「誰がだッ！ 後でノーと叩きつけてやるッ！ 絶対にそうしてやるからな。それで泣きそうな顔を肴に飲んでやるぞ」

「それが照れ隠しだというんだ、ライラ」

会話はライラがバニング大尉に巻き込まれた形で終わった。ライラは本当にノーならば今すぐそう言ってしかるべきなのだが、そうでもない。ライラが無意識にそうしていることでも、サウス・バニングの方は気がついている。伊達に年を重ねているわけではない。

ともあれ、それで緊張が解けたライラ・ミラ・ライラは自分の隊を率いて移動し、今は冷静に敵を見つめる。

そしていつものライラ独自のスタイルを取っていく。

全体が見えて指揮がとれるギリギリの後方にいながら隊へ次々と指示を出す。そして早く、無駄なく、隊を動かす、敵を追い詰めていく。

第二百二十三話 ライラとバニング 前

「各機ダイヤモンド隊形を維持、新人のレコア・ロンドは撃って当てるとか考えなくていい。隊形から決して外れるな。他は新人のカバーを意識しろ」

戦闘が始まるとライラは一瞬も気を抜くことなく指示を出し続ける。

いや、そうしなければ勝ちきれぬものではない。

相手をしているジオンMS隊は確かに強い。各機が高い錬度を持つ。一機だけカラーリングが違うのがあるが、それがジオンMS隊指揮官なのだろうか。その指揮官は更に段違いの実力を持ち、飛び回っては一度も直撃を受けることなく連邦MSを撃退し続けている。実力で皆を引つ張る猛将タイプのようなだ。

そこでライラは罫を張り、その指揮機を引き剥がし、叩くことを画策した。猛将であるほど真つ先に動いてくれるから予測がしやすい。エサを播いて引き付けながら数的優位を保持できる形を続け、消耗を待つ。

今、このライラの隊と戦っているのは海兵隊シーマ・ガラハウだ。シーマとしてはこんなMS戦で足止めされてしまうのは本意ではない。本来はデラーズ・フリートの艦隊戦を支援するために来たのだ。早いところ連邦艦まで行って叩き潰し、戦局を打開したいのは山々である。

それがやむなく連邦MSと交戦しているうちにいつの間にか術中に嵌められたのを自覚する。まるで網目のように組織だった連邦MSたち、無限の相手と戦っているような錯覚を覚えさせられる。こっちが突撃したはずがいつの間にか進路を曲げられ、逆にデラーズ・フリートの旗艦グワデンが見えるところまで押し込まれているではないか。

「やるじゃないか…… 連邦のMS隊も。凄い組織力さね。だがこの

シーマ・ガラハウを押し切れると思つたら大間違いなんだよッ！」

シーマはそう言つて自分を更に奮い立たせるが、実は言葉よりも冷静さを保っている。

どうすれば早く突破できるのか。

指揮官である自分を押さえ込んで海兵隊の戦力を半減させられているのなら、お返しに同じことをするだけだ。

連邦MS隊には司令塔がいる。シーマはそれを潰そうと連邦側の動きを観察し指揮機を探す。

シーマ・ガラハウの優れた戦場勘はそれを見極め、一気に突進をかける。

その突進だけの話なら、ライラにとっては予測の内とばかりに対処しただろう。

だが、ここでグワデンからの援護射撃がシーマ側に味方を始めている。

「グワデンの砲撃で海兵隊を援護せよ。儂の応援に来たのだ。できるだけ支援するのが礼儀である」

エギーユ・デラーズ自らがそう言つて弾幕を作らせる。

さすがにグワデンの主砲まで使えばその射程も威力も並ではない。ライラのMS隊は各機が一斉に回避のためのジグザグ行動に入るが、そのために混乱をきたしてしまふ。シーマはその隙をうまく突いてライラに近付くことができた。

ここからシーマ・ガラハウとライラ・ミラ・ライラが直接撃ち合い、高機動で飛び回る。

互いの技量は高く、仕留めきれないことが分かると接近しビームサーベルに持ち替える。

「連邦の隊長さん覚悟しなッ、あたしはキシリア閣下の海兵隊、シーマ・ガラハウ。ここまで戦えたことは褒めてやるよッ」

だがライラも負けてはいない。

MSの操縦技量では残念なことに一段劣っているが、自分の今乗つ

ているジムⅡが予想以上の高性能であることを自覚している。ガルバルディ改の攻勢を躲し、致命的損傷を食らわないようにすることができている。

「なるほどこのジムⅡ、いい機体だ。私の腕が一段上がったように感じる」

ライラはゆっくり後退しつつ、シーマをいなし続ける。というのは艦隊戦で連邦が優位な以上、自分に与えられた役割はジオンMSを連邦艦に取りつかせないだけだと分かっている。

無理をする必要はない。それがサウス・バニングがライラに言った忠告でもある。

シーマの側もまたそんなライラの意図が分かった。勝負がつかないのは残念だがいったんお預けだ。指揮ばかり上手くて近接戦闘の技量は大したものではないだろうと思っていた相手は予想に反して強かった。

負けるとまでは思わないがすぐに決着が付けられない以上、ここはシーマとしても部下を支援するために退く方を選択した。

これの少し前、別の場所でも激しいMS同士の戦いがある。

サウス・バニングの第四小隊とテラーズ・フリートから順次出てくるMS隊だ。

第四小隊の方が数は劣勢、しかし各機とも技量は高く、善戦が続いている。だがその最中バニングは嫌な予感に襲われた。

今まで幾度も役立ってきたその勘に従い隊へ指示を出す。

「…… 各機ちよつと下がれ。今やってきたジオンMSは俺に任せろ。いいな、誰も手を出さんじゃないぜ」

「ジオンの新しいMS…… いやバニング隊長、ここは先に俺が」

「生意気言うなブルターク。命令だ。下手な好奇心は命を落とす。お前はキースやウラキ以下の新人らしく、雑魚の掃除でもしとけ」

サウス・バニングの言い方はいかにもぶつきらぼうだが、実のところそれしかないと思いついて定めている。

第四小隊の皆は、今からこの戦いに加わろうとしている一機のジオンMSを見ている。見たことのない新型のMSなのだ。

そのジオンMSの見かけはザクに近い。やや角ばったデザインと分厚いシールド・カバーを持っているが、各部の造りを見ればジオンのザクに間違いない。だが全体の雰囲気は明らかに違うのだ。おそらく中身はザクと違い、格の違う戦闘力を秘めているのだろう。

おまけに他のジオンMSたちが慌てて道を空けるような動きをしたり、その後遠慮したような様子を見せるところから考えても、迫ってくる相手は明らかにジオンのエースMSである。

これは並みの相手ではない！

サウス・バニングの長年培ってきた戦場勘がそう告げている以上、他の者に相手をさせられない。

これと戦うのは自分と自分の乗るゼク・アインしかない。

一方、そのMSはデラーズ・フリートのエースMSとしてザクⅢで発進してきたラカン・ダカランのだが、そのラカン・ダカランの方ではバニング以上の驚きがある。連邦機の中に一機、目を引くMSがいる。それは大きなオプションタンクを除けばまるでザクのようなバランスを持った機体ではないか。

「何だと！ 連邦機はザクにどこか似ている。なぜだ。連邦はジオンMSを研究し尽くしているというのか…… その上で更に改良して作り上げていると。だったら弱いはずがないが、いったいどれほどのものだ」

ここでバニングのゼク・アインとラカン・ダカランのザクⅢが対峙することになった。

最初はどちらも慎重さを崩さない。

相手の機動性能、火力、防御力を見定めている。探り合い、それが分かってくるにつれ大きく動き、撃ち合う。その射撃戦は驚くほど激しいものになる。どちらの機体も最新鋭機、高性能のハイパワージェネレーターに裏打ちされた連射を繰り返して止まることがない。

性能は遜色なし、互いに小破程度の損害を受けながら戦い続ける。

しかしここで戦闘は中断されてしまうことになる。

デラーズ・フリートのグワデンが主砲を撃ち放っていることがその輝きで分かったからだ。

遠目にそれを確認したラカン・ダカランはここで誤解をしてしまった。

まさか海兵隊MSを支援するために主砲まで弾幕として使っていたなどと思わず、グワデンが連邦艦と再び砲撃戦を始めたと考えてしまう。

ならば早いところグワデンの直掩に戻らなくてはならない。

サウス・バニングの方は退き始めたザクⅢを見失わず、要注意MSとして慎重に追跡して行く。

だが途中から見えたものに対して慌てることになる。

「なんてことだ！ あのジオンMSの進路にいるのはライラじゃないか！」

ほんの偶然だったのだ。

ジオン艦隊の方へ退きつつあるそのジオンMSの進路にちようどライラのジムⅡが浮かんでいる。しかもバニングは知らなかったがライラはライラでシーマと激しい戦闘を終えたばかり、背後から迫る脅威に未だ気付いていない。

このままではあの恐ろしく強い新型ジオンMSがライラを討ってしまう。

「くそ、ライラに手を出すんじゃないぞ！」

サウス・バニングは慌てて最大限の加速しながらビームライフルを放つ。

「間に合え！ そしてライラ、早く気付け！」

ライラはこれら二機に気が付くことができ、少なくとも無防備でいることはなくなった。

しかし逆にラカン・ダカランの方も追ってくるバニングに改めて気付く。

ここで少し考える。

更に加速し、早いところ前方に浮かんでいる連邦MSを片付けて進もうとも思う。だが後方からしつこく追ってくるMSを振り切れるとは限らず、脅威が残ってしまうと判断した。

さっきの戦いを中途半端にしてしまったのが悪いのだ。改めて決着をつけるため振り返る。

サウス・バニングとラカン・ダカラン、両者が同時に撃つ。

その撃ち合いの結果は、どちらのビームも命中弾を出すことになった。

第二百二十四話 ライラとバニング 後

撃ち合いはどちらにも直撃を出した。

これでラカン・ダカランのザクⅢはメインカメラを失う中破、バニングのゼク・アインは右胸部を損傷、それはジェネレーターの一つをシャットダウンさせるほどの大破である。それでも完全に戦力を失ったわけではない。補助ジェネレーターに切り換え、出力は大幅に低下したがビームサーベルを片腕で振るだけのことはできる。

そんな状態でもバニングにはまだ立ち向かうべき理由がある。

自分が退いたら、今相手をしている新型ジオン機がライラと戦うことになる。絶対にそうさせてはならない。向こうも損害を食らっているようだが戦闘力の低下は未知数だ。

ライラが新型ジオン機と戦うのは危険過ぎる！

逆にラカン・ダカランの方ではしつかり決着をつけておかなければもしかすると前方の連邦機と挟撃される恐れがある。その判断は当たり前だ。

両者はもう一度接近するべくして接近する。

今度はどちらかの死で終わるだろう。おそらく分が悪いのはサウス・バニング、ビームサーベルの光がバニングのレクイエムとなって奏でられる。

だが最後の最後、そうはならなかった。二回目の対峙もまたフィナーレを迎えず、中断になったのだ。それは突如、戦場に大きな流れが生じたためである。

ガデイ・キンゼーが艦隊を再び前進させることに決めた。

立ち塞がってきたジオン艦隊を必要充分叩き、目的は果たした。妨害を排除すればそれでいいのだ。これ以上の愚かな消耗戦など不要である。

ガデイ・キンゼーとしては先行したエイパー・シナプス隊を支援するためになるべく早く前へ進むべきなのである。

また、このタイミングで再び動くのは理由がある。

通常、既にMS戦に入っているのなら上手いこと切りをつけ、出しているMSを全て撤収させてからでないかと進発できない。まさか戦場に味方MSを取り残すわけにはいかないからだ。

ただし、ここでその懸念がなくなつた。MSを収容する時間は取らなくていい。

予期した通り連邦本隊はガデイ・キンゼーとエイパー・シナプスだけに任せることなくきちんと後詰を用意してくれている。

統率力に定評のあるアントニオ准将が艦列を整え、全体の戦線を押し上げているのが分かつたのだ。それなら連邦MSはアントニオ准将の方へ収容してもらえばいい。

連邦ガデイ・キンゼー隊の全艦が一斉に移動を始めた以上、ラカンはダカランはそれに巻き込まれるわけにいかない。それに局地戦はもうどうでもいい。エース機の責務としてできるだけ手早く隊と連絡を取り、統率を図る必要がある。更にいえば、ラカン・ダカランは戦いをロマンや勝負の場として捉える人間ではなく、あくまで戦闘もあるいは戦争さえも手段として見るタイプの人間なのである。

こうして飛び去つたザクⅢを見送りながら、取り残されたバニングは一息つく。寄つてきたライラのジムⅡを見て、その無事に心から安堵する。

「大丈夫か、バニング大尉」

「ああ、なんとかな」

ライラは短く確認し、バニングもまた短く返す。今はそれ以上の言葉を交わす暇はなくそれぞれの隊を探さなくてはならない。

その後、ガデイ・キンゼーの指示に従い、バニングの第四小隊もライラの隊も揃つてアントニオ准将の艦隊へ向けて撤退を開始することになる。

「バニング大尉、さつきは済まない。危ないところだった」

一段落ついて、ライラは改めてバニングに礼を言う。

「元はといえれば私があのだジオンMSに気付かなかったせいだ。まだまだ未熟だな。早く分かれば、バニング大尉と二機で挟み込めたかもしれない」

「そいつはどうだろう。あのジオンMSは確かに強かった。これよかったのさ」

「しかしそのために大尉の窮地を招いてしまった」

「気にするな。それとライラ、俺は言ったはずだぜ、守ってやるって。忘れちゃ困る。いや、俺としちゃライラがわざわざ見せ場を作ってくれたのかと思つたぞ。回りくどい表現だな、ライラ」

「くそ、こつちが下手に出れば、上から目線で……」

「それで、死ぬかと思つたほど試されたが、俺は言葉通りのことをした」

「試していない！」

「で、ライラ、あの返事はどうなんだ。もう決まったようなもんだな。今言ってくれてもいいぜ」

「いい加減調子に乗るな！ それとこれとは話が別だッ！」

「まあ後で飲みながら話そう。どうもMSの通信機越しでは風情がないせいかな、ライラは本音を正直に話さないときた。強めの酒が要るとは、案外シャイなのか。そこもいい」

「こ、この、ぬけぬけと……」

いつもの調子だ。そんなバニングの言葉を聞いて、とりあえずライラも言質を取られまいと反発するが本当に怒つてなどいない。

それよりもライラにはちよつと気になることがある。

「あ、そういえばバニング大尉、そつちの通信出力がおかしい。妙に不安定のようなだ。機体は大丈夫なのか」

「こつちは見ての通りの大破、ジェネレーターも半分いかれちゃったが、ただ飛ぶだけなら全然行ける」

サウス・バニングの乗るゼク・アインの計器はそう表示している。大破のため予備回路に切り替わっているが帰投までは充分に持つ。

だが実際はそうではない！

今その機体内部には重大な問題が発生していた。ジェネレーター

のシャツトダウンが不充分であったため、エネルギー漏れが生じ、内部を急速に侵食しつつあった。未テストで運用された試作機のため計器類が問題を正しく表示していなかったのだ。

その不具合にまだバニングは気付いていない。

「そういえばライラ、こんな話を知っているか。歴史の話だ。昔スパルタっていうめっぽう強い国があった。それはな、生まれた時から猛訓練をさせて戦士を育てたからだ。体の小さいやつ、弱い奴は情け容赦なく死ぬしかなかった。逆に強い奴は何でもありの盗み放題、盗まれる方が弱いんだから悪いっていう理屈だ。そんな強さだけが正義っていう国だから、こりゃあ並大抵じゃかなわねえ。周りの国はみんなブルっちまってひれ伏すしかなかった」

「…… いったい、急になんの話だ。そんな歴史がどうした」

「いいから黙って聞け。だがな、そんなスパルタへついに戦いを挑む国が出てきたんだ。どうやったと思う？ それは、恋人同士を集めて、恋人で隊を作ったんだぜ。そうしたらどんなことになっても退かない、負けない隊ができあがった。もし負けたら自分だけじゃなく恋人の命もないからな。腕がもげようが腹を刺されようが息がある限り剣を振るって戦った。死兵なんて生ぬるいもんじゃない。これを相手にしたらさすがのスパルタ戦士も心が折れちまって、それでスパルタは滅んだ。どんな猛訓練を積み重ねても、体を鍛えても、金も名誉も、ただ恋人を守りたいという気持ちには勝てなかったんだ」

「なんだか凄い話だな……」

「ライラ、俺の気持ちも同じだぜ」

「……………」

「これからも戦いが続くか分からねえが、守ってやる。俺が守る。何度でもだ」

こんなストレートな言葉、女の心に響かないわけがない。

一瞬、ライラはほだされそうになった。

ダメだダメだ、気を持っていかれてはならない。さすがにサウス・バニングは年の功、口が上手いだけだ。

女を口説くにも年季が入っている。ここぞとばかりに畳み込んでくる言葉で流されてはいけないと思いなおす。

その時、バニングのゼク・アインが限界を超えた！

ついにエネルギー漏れが装甲を飛ばして噴き上げる。同時にバーニヤが異常作動を起こしてしまい、そのためゼク・アインは急な横Gのかかる運動を始めてしまう。

もちろんバニングも異常に気付くとすぐに立て直そうとするが、それが全くできない。

操作系は既に機能を失っていた。制御不能、このままでは確実に爆散する。そして機体が不規則に動く以上、脱出もできない。出た瞬間に機体がそこへ動いてきたらノーマルスーツの人間などひとたまりもないからだ。

並行していたライラもまた異変に気が付いた。バニングのゼク・アインがコントロールできないまま飛ばされていくではないか。

すぐさま後を追う。

ゼク・アインは明らかに爆散間近と見て分かる。不思議にもそれに巻き込まれてしまうことを恐れる気持ちはライラに生まれなかった。そんなことはどうでもいい。ただ絶対にサウス・バニングを失ってはならないという思いしかない。

ジムⅡの高運動性能が幸いした。周囲の第四小隊の誰よりも早く、ライラのジムⅡはゼク・アインに追い付くことができたのだ。

そして慎重に見定め、ビームサーベルを一閃する！

暴走しているバーニヤを斬り落とすと、ゼク・アインを腕で掴んで一瞬動きを止めてやる。バニングを脱出させるためだ。

それを確認し、バニングを無事に保護したライラは安堵する。その場を離れたらすぐにゼク・アインは爆散した。

「バニング大尉、守ってやるのは私の方だったな！これで貸し借り無しだ。返事も無しだ。さっきは口説き文句、いやご高説ありがとう」

そう言っただけライラはしばらくの間笑い続ける。

自分でもなぜだか爽快な気分である。バニングを失うと思った恐怖はあまりに強く、またそこから解放されたせいだ。

まだ気が付いていないだけだった。

これまでの気安いつきあいが意外なほど深くライラの心に根を張っている。

戦いでは冷静な策士でも、ライラ・ミラ・ライラはとつとつにサウス・バニングの術中に嵌っていたのだ。

このわずか半年後、年の離れたカップルがゴールインすることになる。

とうてい幸せの門出のセレモニーと言えるようなものではない。

結婚式という名前がついた、飲み比べの修羅場だったと後の語り草になった。

新郎新婦がどういいうわけか途中からそうなり更に酒好きの第四小隊が参戦したのだ。

実際に見ていた一人であるコウ・ウラキは年少だったために難を逃れたのだが、そのため生涯酒を恐れたという。

第二百二十五話 残光

ガデイ・キンゼー隊には少数の空母がいるが、そのメカニックは暇である。

さつきまでの喧騒が嘘のようだ。

それは出撃した連邦MSの大半がアントニオ准将の方に補給を求め、こちらの空母には帰ってこないからだ。ただし空母に少数のMSが残っている以上、まだ戦力として隊には随行する。

「ジオンのあの人は出てこなかったようだわ…… 今回の相手とは別の隊だったのね」

肩を落としてエマリー・オンスが言う。

小さな独り言だったが、ここMS整備場は機械が止まってさえいれば音が反響して意外なほど響く。

エマリーは北極基地からわざわざ艦隊付属のメカニックとして宇宙に上がっているのだ。それもこれもジオンのガトー少佐が出てくるかと思つてのことなのに、空振りで終わった。例え出てきたとしてもエマリーはパイロットでない以上、何ともしようがなく、下手をすれば空母と共に撃沈される可能性さえあるのに。若さゆえの突進である。

ため息をつきながらそんなことを言っているエマリーを残念そうに見ている人間がいる。

アナハイム・エレクトロニクス社の上司ルセット・オデビーだ。本当ならアナハイム・エレクトロニクス社製のゼフィランサスの方にメカニックとして付くのが筋だったが、エマリーらの世話のこともあり、いったんガデイ・キンゼー隊にいたところそのまま出撃になった。

ルセットは後輩のエマリーを可愛いとは思っているが、時々頭が悪くなるのを残念に思っている。

そんなルセットの背後から、別の声が聞こえた。

「ジオンのあの人は出てこなかった。さつきの相手とは別の隊だった

のかしら」

え!?

何だろう、エマリーとほとんど同じセリフではないか！ 声は違っているが。

驚いてルセットは振り返り、どこから声があったか探す。

目に入ってきたのは若い女、パイロット用のノーマルスーツを着ている。MSの新兵だろうか。

もちろんルセットはその女がレコア・ロンドという名であることは知らない。ましてレコアがエマリーと同じようにジオンのガトーと因縁があり、全く同じことを考えていることなど知る由もない。

その声もエマリーと同じように独り言らしく、聞く相手もないところに向かつて心の声が出てしまったものようだ。

聞いたのはルセット一人である。エマリーもその女も自分の思いに夢中であり、お互いの独り言など聞いていない。

それが皆にとってどれほど幸運なことだったことか。

ルセットとしてはそういうセリフを言うのが近ごろの流行りなのか、と見当外れのことを考えてしまったがそれは仕方がない。

一方、艦隊司令部のほうでは暇などあるはずがなかった。

ガディ・キンゼーは邪魔をしてきたジオンの艦隊を排除してから再度進発したつもりだった。向こうの艦艇の大半を中破以上に追い込んだのを確認しているからだ。艦隊戦の常識でいうと、もう無力化したと計算するのが常道である。

だが、それでも直ぐに取りすがってくるジオン艦艇があるではないか。

陣容はおそらく旗艦であるグワジン級大型戦艦一隻、駆逐艦が五隻だけだが、諦めた様子がない。

「恐ろしく戦意が高いジオン隊だ。たったそれだけでも追ってくるのは常識外れの闘志だな。まあ、こちらでも半数近く脱落しても諦めていないのだから似たようなものか」

ジオン側、エギーユ・デラーズは決断している。

「このまま逃してはならない。あの連邦艦隊を追うのだ」

この状態になってもデラーズはあくまで戦う意志を示している。うかうかと行かせてしまえば、ジオン中央がいつときでも危機に陥ると知るからである。損傷艦の曳航や乗員の救助はバロム准将とシーマの海兵隊に任せ、自分はガディ・キンゼーの艦隊を追う。

間もなく始まった追いつ追われつの砲撃戦は、追われている側の連邦ガディ・キンゼーの方が優位になっている。連邦巡洋艦サラミスは後方にも撃てるためそのまま手数が多くなる。前方に撃たない分、持てるエネルギーを全て後部砲塔に回し、その連射でたちまちジオン側の駆逐艦を沈黙させたのだ。

ただし、さすがに防御力が並外れている大戦艦グワジン級グワデンはそうやすやすと片付けられはしない。

逆にグワデンの砲撃は正確かつ高い威力でサラミスを二隻続けて葬ると、次に連邦マゼラン級戦艦一隻を大破に追い込んだ。

ここに至って、ガディ・キンゼーも腹を括る。

「このジオン艦隊は最後の一隻になっても戦うつもりか。見上げた敢闘精神だ。ではこちらにも敬意を表して望み通り討ち果たしてやろう」

ガディ・キンゼーは空母や小型の駆逐艦をいったん退避させ、マゼラン級三隻を含む主力を反転させた。ここで再び時間をロスすればエイパー・シナプスを支援できる可能性が限りなくゼロになるが仕方がない。相手のグワジン級を仕留めるには巡洋艦サラミスの後部副砲塔では足らず、戦艦マゼランの主砲がどうしても要るのだ。

ここからその主砲でジオンのグワデンを滅多撃ちにする。

メガ粒子砲の美しいオレンジの線が何条となく伸びる。反転したため、お互いの距離はかなり近くなっている。思いつきり有効射程内だ。このマゼランの砲撃はさすがのグワデンでも防御力とダメージコントロールの範囲をあつさり超え、見る間に損傷を与える。

グワデンも反撃するが、一隻のマゼランに中破を与えたところで限界だ。

主砲塔を潰され、いくつかある副砲塔も全て潰された。残りはわずかな対空砲ばかり、これではマゼランに対し蚊ほどの意味しかなく、もはや攻撃力は無に等しい。

これで勝負はついた。

しかしデラーズは司令席に背筋を伸ばして座り、前方を見据えている。

その目の闘志はいささかも衰えていない。

いつも通りの声で命じたのだ。

「砲撃はもはやできんが、まだ沈んだわけではない。動力は動いている。向こうの旗艦へ、全速で進め！」

ガデイ・キンゼー隊の旗艦となっているだろうマゼランを見定め、そこへグワデンを進ませる。

特攻だ。

グワデンはその身をもって連邦旗艦を道連れにしようとしている。

これを見てガデイ・キンゼーは急ぎ退避を図る。

もちろん他のマゼランはいつそう砲撃を強化し、そんな特攻が成る前にグワデンを爆散させようとする。その甲斐あってグワデンの機関を破壊することには成功した。だがそうなった直後、バランスを崩したグワデンが進路を曲げてしまったが、まさにその方向にガデイ・キンゼーのマゼランが回避してきていたのだ！

それはガデイ・キンゼーにとっての不運、デラーズにとっての幸運である。

マゼランとグワデンは衝突し、互いの艦体は大きく捻じ曲げられ、大破した。

しかし少なくともグワデンの機関は止まっていたたたたために爆散まではしていない。

ここでデラーズはある一人に向けて命令を発した。

「ラカン・ダカラン、マゼランに止めを刺せ！」

デラーズには分かっていたのだ。

さつきまでの戦場からここへ追撃に移る際、ラカン・ダカランと数機のMSだけはこのグワデンにつかまり、同行できている。

その後の極度に激しい砲撃戦に巻き込まれ、ラカン・ダカラン以外のジオンMSは破壊されたのだが、さすがにエースとして実力のあるラカン・ダカランのザクⅢは回避ができていた。

この場にいる唯一のMS、ラカン・ダカランにデラーズがそう命じる。

しかしラカン・ダカランとしては躊躇せざるを得ない。

なぜなら、ここで大破しているマゼランを攻撃し、爆散させることが可能かもしれないが、それではデラーズのグワデンもまた消滅してしまうのではないか！

しかもデラーズは常にノーマルスーツを着ていない。もはやマゼラン、グワデンと運命を共にするしかない。

その時、エギーユ・デラーズの心は凧のように静かだった。

これでよいのだ。これで。

下地には一つの思いがある。それは、この戦いが終わった後、もう出番はないということだ。

エギーユ・デラーズには知っていることがある。

信奉する故ギレン総帥の本質は社会改革であり、良き統治を目指していた。

ギレンの天才が戦争家の面でも発揮され、戦争初期の快進撃を可能にし、ジオンを優位に立たせたためにそういった派手な面ばかり人々は見てしまう。しかしそれはギレンの優秀な頭脳の副産物でしかないのだ。本来は政治家である。

デラーズはギレンの政治家として目指すところを知るために共感している。

まさにその理想ゆえにギレンはジオンが独立するだけにとどまら

ず、連邦の腐った上層部の一掃に乗り出し、地球圏を支配して恩恵を施そうとした。結果的にその手法は苛烈に過ぎ、民間人にも将兵にもとてつもない犠牲を出したが、それでもなお熱烈なギレン派が存在するのはそのためである。決して利益や戦果に目を釣られたわけではない。そこには確かに理想の青写真というものがあつた。

そのギレンは消え、今ジオンの政治はドズル・ザビとキシリア・ザビの体制で固まりつつある。

中でもキシリア・ザビが主導し、地道に社会改革が続けられている。キシリアは政治面に限つていえばギレンと遜色ない手腕を持ち、そのためギレンの最も求めたサイド3貴族支配の打破はキシリアの手によって完成に近付きつつあるのだ。その意味でギレンの理想の一つは間違いなく実現される。

ただしギレンの時代と違うところもある。

かつてギレンは地球に媚びを売りジオンと対立しようとしたコロニー群、サイド1やサイド2を叩き無力化した。しかし今、政策は転換され、むしろそれらの援助に転じている。

そういった違いのどちらが良いのか、あるいは時間軸の違いだけであつてどちらも正しいことなのか、デラーズには分からない。はつきり分かるのは、ジオンはもう変わったということ、新しい方針を持ちそれでうまくいっているという事実だけだ。

おまけに軍事の面でいえば地球占領はさすがに非現実ということ諦められているが、それ以外では実にうまくいっている。それは主にコンスコン大将の優れた手腕によるものだ。

不思議なことにコンスコン大将はドズル派という枠を超え、キシリア派のマ・クベ、シャア、いやそれ以外にもギレン派に近かつたカスペン、マハラジャ・カーンとまで宥和しているのだ。コンスコン大将は能力と裏表のない性格、腰の低さで皆をまとめ、事実上ジオン内部の派閥を消し去った。

もはや時代は移り変わり、区切りがついてしまっている。ジオンはもうギレンの理想だけで動いてのではなく、それに固執しているのはもう少数しかない。

皆は新しい未来へ向かって歩を進めているのだ。

デラーズは宙に浮いたまま尚も逡巡しているラカン・ダカランに叱咤の声を飛ばす。

「何をしているラカン・ダカラン！ 儂を晒し者にする気か！」
ラカン・ダカランは改めてエギーユ・デラーズの思いを酌み取らざるを得ない。

ここに至り、覚悟を無にすることなどできるはずがない。
ザクⅢはビームライフルをマゼランの裂けた外壁の内部へ向ける。
もはや迷うことなくビームを続けざまに叩き込んだ。予想通りマゼランは爆散し、一瞬置いてグワデンもまた後を追ひ、光と共に消えていく。

エギーユ・デラーズは散った。

ジオンに栄光あれ。ギレン総帥が望んだ以上の未来であれ。
最後に願う望みはそれだけだ。

デラーズの思いと行動が振り返ってどんな意義を持つことになったのか。

それが是か非か。

正しいことだったのか。それともギレンの理想にばかりこだわらず、新しい時代へ柔軟に対応すべきだったのか。

そんなことを問うことはできない。誰にもそこまで決める権利はない。

武人は己の信念にのみ生き、信念のままに散る。
ただそれは美しい。何人も否定のしようもなく。

残光は澄み切った色彩を放ち、それだけを心に置いたまま消えるものだ。

第二百二十六話 白い悪魔

エギーユ・デラーズは第三次ルウム会戦において名誉ある戦死を遂げた。

いかにも武人、いかにも闘将らしい最期を語り継ぐ者がいたことは幸いである。ラカン・ダカランがそれを見守っていたからだ。

そして連邦のガデイ・キンゼーはデラーズとは別の意味で忠実な軍人である。マゼランとグワデンが衝突不可避だと見極めがついた段階で早くも脱出を始めていた。滅びの美学とは無縁、自分が生き残ることが次に繋げることであり、あくまで責務を遂行するための最善を尽くす。

残念ながら間に合ったとは言いがたい。

さすがに戦艦マゼランの爆発は大きく、脱出シャトルは発進したものの逃れきれず半壊した。ガデイ・キンゼーもここで重傷を負ってしまう。

「済まない、エイパー。頑張ってくれ」

その言葉を最後に意識を失い、もはや艦隊指揮は執れない。

ガデイ・キンゼーの残存部隊はそれ以上の進行を諦め、ついに固まって撤退に転じた。デラーズの命は無駄に消えたわけではなかったのだ。

一方、その頃までにはジオン本隊も連邦部隊の接近を知っている。

ミノフスキー粒子が極度に濃い中、電波は全く使えないが、最前線観測器からのデータがいくつもの中継を介し、到達距離の短い赤外線通信でなんとか伝えられている。

判明したところによると二つの連邦部隊が高速で接近しつつある。

一つはエギーユ・デラーズ少将と海兵隊が止めたが、もう一つは動揺も見せず依然として向かってきている。

俺はこれを知り対応を考えるのだが、そこで微妙に感じるものがあった。

「連邦側には何かこう、焦りのようなものがあるな」

「この言葉を聞いたセシリアが不思議そうに返す。

「向こうに焦り？　でしようか。コンスコン司令」

「そうだ。どこかそんな感じがある。連邦側の指揮は恐ろしいほど見事だ。流れるように次々と策を打ち、先手を取っている。しかし、だからこそ急いでいる印象を受ける」

「急ぐとは連邦の指揮官が猛将タイプなのでしようか」

「いや、猛将ならこうではなく、むしろ手慣れたやり方でひたすら押してくる。矢継ぎ早に策を弄するのは、そこに美学を感じている知将だろう。すると余計におかしい。知将であれば勝利と損害のバランスを考え過ぎるほど考え、少しは迷いがあるものだ。この場合、損害をあまり考慮せず勝利に固執しているのが知将のありかたと離れている」

「本来のスタイルと乖離している、ということですね」

「そうだ。そこがすなわち焦りというものだ」

俺の正直な感想だ。

連邦の将は華麗な戦術を披露するが、急ぎ過ぎている。

ならばこちらはそれ以上の策を編み出して対抗しようなどと思わない方がいい。奇策に対して奇策で応えるのはたいがい無駄になる。

むしろ向こうにとって最も嫌なことであろう、愚直なまでに圧力をかける方を選ぶ。

「よし、ならばガトーへ連絡だ。直ちに出撃し、マ・クベ少将らと共同で攻勢を強化するように。やや前線と距離があるが、補給ならシヤア少将も向かわせるのでそつちから受ければいい」

「は、はい。しかし、ここで攻勢の強化とは」

「いきなり姿勢を準備に転換するのは下策になる。前線が混乱し、鋭くつけ込まれる。それよりも連邦をいつそう強く締め上げる方がいい。おそらく我慢比べになれば耐えられないのは向こうの方だ。いずれかの時点で必ず破綻する」

そして俺は発進するガトーらとシヤアの隊を見送る。連邦を瓦解

に持ち込むのを期待しながら。

お次はもちろんこつちへ向かってくる連邦部隊への対処だ。

「度胸のいい連邦部隊とはいえ二十隻余りだ。俺のティベを少し退きながら他の隊で半包围の形を作り、戦意が衰えるまで損害を増やしてやればいいだろう。ただし指揮を継続する以上、ティベは退き過ぎないほどほどのところにしてほしい」

この迎撃態勢にしてしばし待ち構える。連邦の狙いは俺を含めたジオンの総司令部なのかもしれない。俺は必要もない時まで常に陣頭に立たなくていいとも思っているが、今はそうではなく、臆病風を吹かして逃げる気はさらさらない。

俺としてはこれで順当のつもりだった。

だがしかし、あまりにも見通しが甘過ぎたと後悔することになった。

わずか二十分後、最初の凶報が入ることになる。

「コンスコン司令に報告！ マハラジャ・カーン准将の隊が突破されました！ 准将は無事ですが、戦闘継続は困難とのことです」

「そうか…… 完全に囲んで同期するタイミングの間隙を突かれたか。回転運動中の陣からそれを求めるのは酷というものだ。カーン准将に通達、救助と立て直しに専念するように」

俺はその通りの言葉を口にした。

しかしよくよく考えたらおかしい。

カーン准将は長いことアクシズの守備に就いていたため、実戦から遠ざかっていた。勝負勘が戻っていないのかもしれない。

だが元々はギレン総帥からアクシズを託されたほどの実力ある将なのだ。おまけに充分なほど思慮があり、この場合足止めという役割が充分分かっていたはずだ。これほどあっさり連邦隊の突破を許してしまうものだろうか。少しの時間の猶予も作れないとは、いったいどういうことだろう。

その異変の原因を俺は間もなく知った。最前線観測器から、データ

だけではなく映像が途切れ途切れながらも届けられたからだ。

それはまさしく俺にとつて悪夢だった！

白く、猛々しく、その姿は霞んだ映像の中でも見誤るはずもない。

「な、なに！ ガンダムだと!! 連邦MSの中にガンダムがいるのか！」

まさかここでガンダムが出てくるとは！

もちろん驚きはするが不思議ということはない。地球表面でガンダムと戦っていたのだし、そこで撃破していない以上、出てくるのは予測してしかるべきだった。しかしこのタイミングとはおあつらえ向きではないか。確かに連邦側は忌々しい程有能だ。

「迎撃は間を取りつつ弾幕で対応しろ！ 各隊連携し包囲を崩すな！
うかつな接近は餌食になるだけだぞ！」

急ぎそういう指示を伝える。しかしこれは報われない。

「続けて報告します！ ノイエン・ビッター中将重傷、隊は壊滅状態！」

「そうか…… 救助を充分に頼む。あ、デラミン准将に伝えろ。重ねて連邦隊に接近するなと」

これもまた痛い。ノイエン・ビッター中将といえば地球表面で苦闘しながらも、ジオン残存部隊をまとめ上げ続け、最後まで屈しなかった将である。むろん実力は折り紙付きだ。宇宙戦に慣れていないとはいえこうなるとは。

おそらくガンダムのせいだけではない。

それだけならノイエン・ビッターは易々ところはならない。連邦の艦隊指揮もまた人並み外れて優れていると見るべきである。

こいつは危険だ。

言つては何だが、ノイエン・ビッターでも止められないものをデラミン准将が何とかするのは無理だろう。下からせるのが正解だ。包囲は完全にはならず、止められないことになるが無駄な犠牲は出せない。

ここに至って、俺もまた白熱の局地戦に身を投じる覚悟をせざるを得ない。

「中央本隊も艦隊戦用意！ 勝負だ。相手は最初からMSを使ってくるぞ」

艦隊戦と同時にMS戦となる。こちらからも持てる戦力は余さず出す。

俺はテイベのMS格納庫に出撃命令を直接伝える。

すると返事は予期したものと寸分違いもない。

「ダリル、連邦MSにはガンダムがいる。地球表面で戦ったのとたぶん同じ奴だ。やってくれるか」

「コンスコン司令！ 是非、僕にやらせて下さい！ あいつとは決着をつけます！」

「頼んだ。しかし無理はするな」

そして今こそダリル・ローレンツが決着をつけるために飛ぶ。

胸に残るのはガンダムを倒すという闘志だ。過去の因縁を乗り越える。それともう一つ、カーラへの万感の想いを乗せている。

カーラ・ミツチャムもまたダリルの出撃を見送る。

カーラの茶色の髪はゆるくウェーブがかかっているが、切り揃えられている。

おまけに枠の太い眼鏡をかけているおかげで年齢よりだいぶ若く、見ようによっては少女のように見える。

表情は心配と信頼と、その両方だ。

そして指にはフリルのついた小さなシュシュを通し、せわしく弄んでいる。

それはダリルにあげたシュシュとお揃い、ダリルの細い義手にももう一つ同じものを通してある。無事に帰ってくるようにとカーラが願いをこめて作った。

もちろんカーラはサイコ・ドワスの神経接続が完璧の上にも完璧になるよう、自分の持てる力を振り絞り極限までチューンナップしている。それは科学者としての力だ。

しかしそんなこととは別に、小さなシュシュにまで想いを乗せる。

それが人間というものだ。

同じ時、ダリルの宿敵イオ・フレミングは驚くべき戦果を上げている。

「次々出てくるな。いいぜ、出て来いよ。獲物は多い方がいい」

イオはゼフィランサスのコックピットに流されているジャズをひととき大きくする。

「もつとだ。もつと出てこい！ ムーアの仇、ジオンは一機も帰さねえ。俺のジャズが聞こえたら、お前らの最後だ！」

今、進路上に立ち塞がっていたケンプファーをあっさり倒す。

地球から還ってきた熟練ジオン兵ならではの鋭い一刀切りさえ余裕で掻い潜り、お返しとばかりに横薙ぎに斬り捨て、振り返ることすらしない。

次は弾幕を張ろうとしたムサイの横を飛びすさるついでにビーム三連、一瞬で爆散に追い込む。

イオが切り拓いた後を辿り、連邦MSたちが順序よく進んでいる。もちろんゼフィランサス以外にもビーハイヴを含む連邦空母群からMS隊が出ているのだ。

その中の一人、ビアンカ・カーライルはこの様子を見て、驚きを通り越して呆れている。

「凄い…… 何て戦力かしら。イオは本当に全部倒す気なの……」

それがビアンカの油断につながった。

ふいに横合いから一撃を食らってしまった。ジオンのモビルアーマーが一機、高速で接近していたのだ。パイロットのいる腹部やジェネレーターのある背部でなかったのは幸いだが、大破には違いない。

そのモビルアーマーはヴァル・ヴァロだった。

モビルアーマーは移動速度でMSに勝るためジオン本隊から真っ先に到着したのだ。パイロットはもちろんケリイ・レズナーである。ケリイは先にノイエ・ジールを失ってしまったが、自分は軽傷であり、無理を押しして元の愛機であるヴァル・ヴァロで出撃してきた。

「ビアンカ、無事か！ この野郎、モビルアーマーのくせに！」

イオはそう言つてケリーのヴァル・ヴァロを次の相手と見定める。

ケリーの方も相手がガンダムだからといって臆するわけがない。

とりあえず連邦MS隊を混乱させた後、ここまで連邦部隊が素早くやつてこれた原因であるガンダムを叩きにかかる。

「は、ガンダムだろうが何だろうが、スクラップになれば同じことだぜ！」

第二百二十七話 鳥籠

その頃、連邦司令部ではグリーン・ワイアットもまた考えている。「戦況としては何ともいえない。コンスコン大將はさすがにやるね。本当に攻勢を強化し、カウンターで圧力をかけてくるつもりだろうだ。私も予想していたが驚いてしまうよ」

「ワイアット閣下、こちらの事態もやや深刻かと。横撃を受けた小部隊は軒並み統率を失い、損害が無視できないものになりつつあります」

未だ艦艇数ならば連邦の方がだいぶ上回っている。

しかし全体の陣形ではやや不利な態勢に置かれた。先ほど車懸かりのために編成したいくつかの小部隊は、足止めされているうちに横からジオンMS隊の攻勢を食らい、立て直せないでいる。

「ステファン・ヘボン君、ここが我慢のしどころだ。言っても詮無きことだが連邦には艦艇やMSの数はあっても優秀な中級指揮官が少ない。人間は工業製品とは違い、おいそれと育つものではないからね。士官になる人材がジオンよりずっと多いはずなのに、地球表面を守ることばかりさせていたからツケが回ってきたのだよ。早くから宇宙に上げて鍛えておけばよかったものを」

「それはその通りですが、閣下」

「単なる愚痴であることは自覚している。よろしい、損害が一定以上になった隊は無理することなく散開し、艦隊後方に退避するように伝えたまえ。それと前線にいるアントニオ准将に他の隊を動かす権限を与え、効率的に防御が図れるようにしよう。ともあれコンスコン大將を仕留めるのが現時点の最優先ポイントであり、この方針自体には変更はない」

ワイアットの指示は前線の混乱が無秩序に広がり、自分の本隊にまで影響が及ぶのを嫌ったためだ。

このミノフスキー粒子の濃い中、自分が小隊単位まで含めた全ての指示をすることはできない。例えばそれをやれたとしても、変わってい

く情勢に合わせて各隊が適切に動けなければ無駄になる。

それは諦めても、ワイアットとしては自分の指示がしっかり届く範囲の本隊は負けることはないという自信はある。

一方、イオのゼファイランサスとケリイのヴァル・ヴァロとの戦いは終わりが見えつつあった。

お互い始めに小手調べをしても、やはり長所短所ははっきりしている。

ヴァル・ヴァロは大型で速度に優れるが、それだけだ。スラスタールが一応装備されているもののその重量に対して明らかに不足であり、結果的に機動運用であれば歴然としてゼファイランサスが上回る。おまけにヴァル・ヴァロのクローアームは中途半端であり、ノイエ・ジールのように素早く動けるものではなく、接近戦などはなから不可能である。

一撃離脱を仕掛けるヴァル・ヴァロが躲されるともう打つ手がない。

そこへイオが続げざまに打ち掛け、弾幕でヴァル・ヴァロの進路を強引に曲げさせる。

そうなればヴァル・ヴァロはどうしても速度を落とさざるを得ず、唯一の長所まで失ってしまう。

「ざまあねえな。並みのMSならともかく、このゼファイランサスがモビルアーマーに負けてたまるかよ！」

こうしてイオのゼファイランサスがヴァル・ヴァロとの距離を詰める。

有効射程内に入っただけの射撃戦になってしまえばどうしてもゼファイランサスに軍配が上がる。たちまち防御を破られ、中破から大破になったヴァル・ヴァロを諦めてケリイ・レスナーは脱出した。

「くそっ、ノイエ・ジールならば機動力でも接近戦でも勝負できたものを……」

しかし脱出自体は可能だった。

イオが素早く止めを刺す前に、遠くからまたしてもモビルアーマーが接近してきたのを知ったからだ。イオは大破したヴァル・ヴァロにもう興味はなく、捨て置いてそっちの方を注視する。

どんなモビルアーマーか視認するとイオは一段とテンションを上げる。

「何だと、あれはとんがり帽子か？ ジオンのとんがり帽子とまた会えるとはツイてるぜ！ 今度はケリをつけてやる！」

イオが誤解してしまったのも仕方がない。

とんがり帽子、すなわちエルメスはエルメスなのだが、これはジオン本隊からやってきたクスコ・アルのものだった。

今度はクスコ・アルのエルメスがゼフィランサスと対戦することになる。

クスコ・アルも相手がガンダムであることどうかつには近づかず、慎重に距離を取りながらビットを展開する。四つのビットを遠く飛ばし大きな四角形にした上でゼフィランサスに対し弾幕をかけた。だがしかし、それらはあっさりと躲かれてしまう。スラスターの光がなければ見失うほどの速さで、しかも思わぬ方向に動かれてしまうのだ。

「くつ、このガンダムは何?! 前のは違う。こんな高機動のMSなんか見たことがないわ！」

ゼフィランサス、それはアナハイム・エレクトロニクス社がこれまでのガンダムの成果を全てフィードバックし、余すことなく技術とコストと人員を注ぎ込み、制作したMSだ。もちろんオンリーワンかつ史上最高MSになる。

そのジェネレーター出力はジム・クウエルなどよりふた回りも大きい。1790MWというのは今までどんなMSにもあり得なかった巨大な数字なのだ。更にスラスターの数も推力も、関節駆動も同様の高水準にある。そしてその数割ずつの差が何乗にも働き、機動性能で圧倒的な差になる。

これが連邦の最新ガンダムだ。

クスコ・アルのNT能力をもつてしても、その動きが脳の処理で追いつけなくなれば捉え切れない。

通常の動きをはるかに超え、慌てて対応を考えている間に既に動かれている。

そのうちに逆襲を食らってしまった。イオの方がビットの動きや癖を見切り、その一つを叩き落とすことに成功した。これでビットは四つから三つに減った。しかもたまたまそうだったのではなく、ビットの真芯を撃ち抜いたものであり、これがイオに自信を与える。

「は、これで終わりだとながり帽子。ア・バオア・クーから少し寿命が延びたが、それだけだったな！」

今ならビットをかくぐって接近戦に持ち込むことが可能、そう踏んだイオが一気に跳ぼうとした時、目に映るものを見て今度こそ驚愕する。

「な、何?! あれはいつたい! とんがり帽子が二機いるだど!」

その戦闘が始まる少し前のことだ。

コンスコンの命令により、シヤア少将の旗艦ザンジバルがマ・クベ少将への応援に赴くべく航行していた。だが途中で奇妙なやりとりがある。

「少将、このまま進んではいけません!」

「ん、どうしたラアラ、この先に何かあるのか」

「いいえ前方のことではなく、後ろの方に……」

「後方? それはどういうことだ」

「このままでは、ジオンの本隊が失われるような予感がします。そしてもう一つ、前に戦ったガンダムと同じものを感じます」

「ア・バオア・クーでのガンダムと? それと同じものとは、同じ連邦パイロットが出ているのか…… 気になるな。分かったラアラ、ではコンスコン司令を守るために引き返す。二人だけになるが、それでもいいだろう」

ガトーらのMS隊に後で補給を受けさせるため、ザンジバルを含む艦艇は勝手に動きを変えることはできない。距離がそこそこある中

を出撃しているため彼らが帰投できる分の補給が必要だからだ。

そこでシャアのゲルググJ改とラアラのエルメスだけが急ぎ取って返す。シャアにはラアラの言葉を疑うような選択肢はない。

こうして今、イオのゼファイランサスの前にクスコ・アルとラアラ・スン、二機のエルメスが並ぶことになったのだ。

やっとクスコ・アルは一息つけることになる。

「ラアラ、来てくれて助かるわ。残念だけど、このガンダムは私のエルメスで勝てる相手じゃない」

そして二人は改めて闘志を燃やす。

「だからラアラ、二人でやってやるわよ！」

「ええ、一緒にやりましょうお姉様。このパイロットには私も借りがあります。いつか返そうと思ってました」

ラアラのビット九つが加わり、いきおい濃密なビームの網がかかけられる。

だが、それでもガンダムの撃破には至らない。

動きを読んだとしても、対応する段にはやはり人間としての速さの限界があるのだ。

ラアラは今までの戦いで、その優れたNT能力で圧倒してきたのであって、決して戦士としての技量のおかげではない。

つまり反射神経自体は普通の少女と何も異なるところがないのだ。それはせいぜい新兵のレベルのまま、訓練されてこなかった。そこだけ見ればクスコ・アルの方が数段マシなくらいである。

仕留めたと思ってビームを放つてもガンダムの動きはそれ以上だ。トリッキーな機動に嵌められただけになる。

一方のイオとしても危機的な状況になったことは理解している。

ジオンのとんがり帽子が特異なモビルアーマーであることからパイロット個人のための特別機だと思っていた。しかしよく考えれば複数あっておかしいことは何も無いのだ。

今、二機で一度にかかられては厄介なことこの上もない。

苦勞しながらクスコ・アルのビット一つ、ラアラのビット二つを墜とす。回避行動を取りながらそれを行うのは心身ともに消耗が激しい。それでもやってのけたのはゼファイランサスの機動力に加えて防御力のおかげでもある。

数回の直撃を食らっても内部パーツまでは損傷せず、しかも瞬時に迂回路に切り替わり、何事もなかったように動き続けられる。ゼファイランサスは装甲と、更にソフトウエアまで特別製だ。

だがそのうちにラアラが少しの工夫を思いつく。

「お姉様、もう少し前に出て頂けませんか。私のビットが後ろに回ります」

「え？ それでどうするのラアラ」

「このまま二人のビットが交ざっているとやりにくいでしょう。前後にずらした方がきつとうまくいきます」

それは非常に効果的だった。

前衛としてクスコ・アルのビットが飛び回り、それを遠巻きにラアラのビットが取り囲む。

まるで二重の鳥かごの完成だ。

こうしてガンダムを限界点に追い込み、倒すのだ。

この形では後衛のビットを操るラアラの方に負担が大きい。クスコ・アルのビットの動きも読んで、誤射したりしない配慮が必要だからだ。しかしそれをもともせず運用できるのがラアラ・スンの別格とも呼ぶべきNT能力である。

ビットの戦術の変更をイオの方でも感じている。

これはまずい、イオはついに機体にかけられたリミッターを順次外すことを決断した。設計を超える未知の負担を機体に与えてしまうが仕方がない。

「ゼファイランサス、俺もお前もここで終わりにされるわけにはいかな いぜー」

実は、イオはゼフィランサス整備の責任者であるルセット・オデビーにリミッターを外すシークエンスを組み込むように頼んだことがある。

話を聞き終わる前にルセットは拒否した。
当たり前だ。

機体を守るためのリミッターでもある。

そうやって過負荷を与えてしまい、何かの不具合を起こしてしまえば取り返しがつかない。ゼフィランサスには予備パーツが多くなり、故障の場所によっては致命的になってしまう。ゼフィランサスは量産型ではなく唯一無二のMSなのである。

ルセットはその理解がイオに不足していると半ば呆れてしまったが、イオはそれでも食い下がる方法を知っていた。

「安全主義か、技術者の魂というのがそんな程度だったとは残念だ。ゼフィランサスの本当の力を知りたくないとはな」

これは技術者にとって屈辱的かつ禁断の言葉だ。

その限界の性能を、どこまで高みに昇れるか知りたくないはずがないではないか。

結果、その魅惑に抗しえず、ルセットは個人的に宝物とさえ思っているゼフィランサスを危険にさらすと知りながらイオの提案を承諾してしまっていたのだ。

「嘘!? ガンダムの動きが速くなってる……」

単純に速くなっただけではなく、その機動が更に鋭角に近くなっている。これではクスコ・アルもララアも読みにくい。

そうしているうちにまたしてもビットを一つ墜とされてしまう。

追い詰めているのは明らかにララアたちなのだが、決定的打撃を与えられないうちにまた一つ消耗したのだ。

第二百二十八話 見えない刃

「こ、この、どうして墜ちないのッ!」

「お姉様、焦ってはいけません」

クスコ・アルとララア・スンがガンダムを相手に苦闘している。

ビットから撃つビームを全て躲されるわけではないが、致命的なポイントへ当たることでもできず、手傷を負わせるに過ぎない。逆にビットの数は隙をみて減らされていく。ビットはあくまで組織的に操れる砲台であり、一つ一つをとってみれば決して機動力は大きくなく、急角度の移動はできない。ジェネレーターを積んでいるので中途半端に大きいくせにその出力はほとんどビームに使われるからである。おまけに装甲はないに等しい。

そして焦るほど肝心のNT能力も発揮できなくなるのだ。

比較的冷静なララアがクスコ・アルをなだめる形になっているが、どちらも平常心ということではない。このまま消耗戦を続けていけば良くて相討ちだろう。

その戦場へ一つの光がやってくる。

次第に大きくなる姿はやがて一機のMS、サイコ・ドワス、ならばダリル・ローレンツだ!

ジオン本隊から応援として到着した。

ダリルがここまで遅れてしまったのは理由があった。途中、連邦艦隊とその直掩MS部隊に遭遇してしまった。早く進みたいと思いつつ、全く逃げるわけにもいかない。ある程度の戦果を上げてから突破し、ようやく辿り着いた。

クスコ・アルもララアもこの状況でサイコ・ドワスの到着を喜ばなかったわけではないが、どういう形で戦闘に加わってもらえればいいのか思案する。

戦いではお互いの連携ができなければ意味を成さないのだ。

そしてまさかダリル一人に任せるともできない。

ガンダムはあまりに強く、しかも嫌なことにますます動きが良くなっていると分かっている。

だがここで、ダリルは力強く言い切った。

「このガンダムは僕に任せて下さい！ ビームではなかなか倒せません。実弾兵器か、あるいはビームサーベルで斬るかしない」と

ダリルは以前の地球表面の戦いで多少のことを知っている。

このガンダムはモンスターだ。

驚くべきパワーを持ち、しかもダメージコントロールが抜群にいい。かつての戦いでは隙をついてガトーが斬り込み、大破させたのだが、それでもパワーはまるで衰えずそのまま逃げおおせたくらいだ。両断とはいかずともコア部分を損傷させなければ勝負はつかない。自分は接近戦を選択してそれを狙い、クスコ・アルらにはビツトの鳥かごで支援をしてもらうのが最善である。

クスコ・アルらの返事も待たず戦いに飛び込んだ。

そして初めから斬り合いを挑む。

一気に行くべきと思ったせいもあるが、ダリルの方でも事情があった。先ほどの戦闘で実弾兵器をほとんど使い切ってしまったのだ。装弾数に限りがある以上そうなるのは仕方がないが、不運なことでもある。

思い切りよくビームサーベルを振るうが、あっさり躲かされてしまう。ゼフィランサスの機動力にとっては造作もない。

「なんだこのMSは。いいところで邪魔しやがって！ とつとと消えろ！」

そう言いながらイオのゼフィランサスは上へ飛ぶ、とフェイントをかけながら下へ潜り、そこからビームを撃つ。

「接近戦にすればどうにかできるとでも思ったか。地球表面ならともかく、宇宙では三次元機動だぜ。このゼフィランサスの機動力についてこれるもんならついてこい！」

イオはダリルと対戦したことがあるが、その時のダリルはサイコ・

ドムであり、そのため今も同じパイロットを相手にしているとは気がつかない。しかし期せずして的確な言葉を言った。

その通り、地球表面よりも宇宙の方が機動力の差は歴然と出てくる。

サイコ・ドワスの元機体であるドワスは設計が古く、重い割にパワーに欠ける。ドムより少しマシといったレベルでしかない。余っているドワスを使ったということもあるが、同じく余っているゲルグは性能はともかく設計があまりにタイトであり、サイコ・リユース・デバイスを組み込む余裕がなかった。

これでのつけからゼフィランサスのビームを一撃食らってしまった。

サイコ・ドワスは中破になるが、まだ動けるのはドム系譲りの重装甲を持っているからだ。

それでも怯まずにサイコ・ドワスは再びビームサーベルを振るう。ゼフィランサスはまたしても躲し、先ほどと同じパターンでサイコ・ドワスへ更に損傷を与える。

だがそれでも愚直なまでにビームサーベルを手放さず立ち向かう。ここに至り、イオもまた接近戦で早いところ致命傷を与えて片付けるべきと判断した。

それは逆だったのだ。

焦らずに構えれば結果はまるで違っていたはずだ。

それでなくとも、サイコ・ドワスがイオの射撃からここまで手足を使って胴体部を庇えていた、その反応性の良さの意味を考えるべきだったろう。

イオのゼフィランサスはビームライフルからビームサーベルに持ち換えようとした。

そこに一瞬の隙ができる！

ゼフィランサスといえどクスコ・アルとララアのビットに対抗するのにはどうしてもビームライフルが必要、だからイオは今までビームサーベルを使おうとしていなかった。そこをあえて切り換えるのは

心理的に負担がある。その時間ビットへの牽制ができなくなる以上、しっかりと視認しておく必要がある。

実はダリル・ローレンツはそれを狙っていた。今までの動きは全て布石である。

サイコ・ドワスは突進すると、それまでより数段速い動きを見せつける。

関節の動きを全て乗せ、しなやかに、かつ電光の速さでビームサーベルを振り抜く。

推力やパワーによる機動力なら確かにサイコ・ドワスは凡庸の域を出ないが、ただし反応性はサイコ・リユース・デバイスのために素晴らしく鋭い。その上で、真骨頂はこの各関節部の完璧な連携だ。意識することもなくあちこちを同時に動かし、まるで自分の体のような自然さで駆動できるのがサイコ・リユース・デバイスの力である。

ゼフィランサスはそれを躲し切れない。

装甲の表面を斬られた。真つ二つにならないのはさすがだが、それでも体勢を崩した。

「てめえ、俺のゼフィランサスに何しやがるッ！」

イオ・フレミングはそれでも気を吐いたが、もう勝負は決していた。

サイコ・ドワスの第二撃はゼフィランサスの反撃より速い。ダリルが叫ぶ。

「墜ちろ、ガンダムーッ!!」

サイコ・ドワスも浅く斬られたが、ゼフィランサスのはつきりと斬り払われた。それはコックピットの上辺をかすめた斜めの線、もちろん機体の最深部にある制御中枢を含んでいる。

ゼフィランサスの全ての機能はジェネレーターも含めてシャットダウンした。

予備ジェネレーターも回路も機能しない。

この瞬間、連邦のガンダムは失われたのだ。

「く、くそ、俺は負けたのか…… なぜだ。なぜ負けた……」

どうしようもなく静止して動かないゼフィランサス、コックピットからノーマルスーツのイオが出る。

もはやそこにジャズの音が鳴り響くことはない。

決着のついた二機のMSを確認するようにクスコ・アルとララアのエルメスが近づく。

あとはそれらに任せ、ダリルの方は宿敵との紙一重の勝負を終えた安堵の中にいる。

「サイコ・リユース・デバイスは完璧だった。カーラさん。凄いよ。二人の勝利だ」

義手に通されているシュシュをわざわざ見ることはない。そうしなくとも確かにその存在と、それを通じたカーラの心を感じている。

早く戻ってカーラ本人に勝利の報告をしたい。

そしてカーラ・ミツチャムと出会えたのがどんなに自分にとって幸運だったのか、それがどんなに大事なことなのか、言葉にできないほどの思いを伝えたい。

同じ時、そこから少し離れた場所で戦いがあった。

赤い彗星、シャア・アズナブル少将である。

シャアはララアと共に発進してきたが、ゼフィランサスのところに到着する直前、気付いたことがあった。それで一人だけで移動していたのだ。

「これは…… 連邦の部隊がこんなところにもいたのか。いったいどこに向かっている」

わずかな姿を確認しにきて正解だった。そこで目に映ったのは、やはり連邦艦隊だった。

それは十五隻ほどで隊形を組みつつ移動している。

シャアは思わず自問してしまったが、連邦艦隊の行き先を考えるのは難しくない。やはりコンスコン大将のいるジオンの中央本隊を指している。

もちろんシヤアは見過ごすことはなく、取りすがつて急襲をかけるが、二隻を沈め、一隻を大破させたところで限界が来る。

さすがにシヤアといえど母艦を離れすぎている。

帰投のことを考えれば、ここで目一杯戦って消耗し尽くすわけにはいかない。

その艦隊から離れる際、シヤアはその存在を友軍に知らせることを忘れなかった。当たり前である。それだけの数の連邦艦がジオン中央本隊に向かっているのだから危険だ。

だがしかし、シヤアが情報を発信したのは確かだが、中継器に問題があった。今や戦場に無事である中継器の方が少ない。電波の使えない中で設置された情報網に破れ目が多々あり、このジオンにとって重要な情報はついに届くことがなかった。

せつかくシヤアがこの連邦艦隊を発見できた僥倖が無くなってしまったのだ。

そしてこの艦隊こそグリーン・ワイアットの最後の一手だったのである。

ジオンのコンスコン大将を倒す、その作戦を完璧に仕上げるために送り出していた。

その存在を敢えてエイパー・シナプス、ガデイ・キンゼーの二人にさえも知らせていない。

わずかな時間差をつけ、エイパーらの艦隊が通った軌跡を忠実にトレースし、戦場に忍び込むように行動させている。

見えない刃だ。

連邦最強の魔術師グリーン・ワイアットが放った刺客、今エイパー・シナプスと交戦しつつあるジオン本隊はその存在を知らない。

第二百二十九話 本隊の攻防

ガンダムをめぐる戦いはダリルらの勝利に終わった。ついに連邦唯一のガンダムは失われ、ジオンに対する脅威は去った。

ただし逆に言えば、最も重要なタイミングでこれだけのジオン戦力がガンダム一機にかかりきりにさせられたということでもある。イオ・フレミングはダリルに負けて大いに悔しがすが、全体の戦況という面から見ると立派にその役割を果たしたと解釈できる。

この間にエイパー・シナプスの連邦軍部隊が進み、あらゆる妨害を乗り越え、ついに目標であるジオン中央本隊と対峙するところまで来た。

「あれこそがコンスコン大将のいるジオン本隊だ。ようやくか。さあ、ここからが勝負だ！」

エイパー・シナプスはここに至って小細工をしない。分艦隊を駆使するとか、ひとまず相手の様子を窺うといったこともない。

速攻を迷いなく選択し、間髪入れず襲いかかる。ここでブレる必要などない。自分の最も得意な戦法で攻めるだけだ。

「速度にゆとりのある艦は主砲を前方へ向け間断なく撃て。鈍足の艦はエネルギーを推力にだけ使え。全体としてまとまったまま増速し、向こうの守備陣を叩き壊し、一気に突破するぞ！」

そんな戦意にあふれた連邦の様子から俺の方では予想通りの形になったと思っている。

「連邦はやはり猛攻で来たか。しかしこの感覚、既視感があるな。以前地球降下作戦の終了間際に鋭い攻勢をかけてくる連邦部隊と出会ったが、もしかすると同じ指揮官かもしれん」

俺はなんとなくそう感じた。実際のところよほど名の知れた将で

ない限り、艦隊の動きからすぐに指揮官の名は判明しない。俺としては確かめようがないわけだが、やはり攻め方には個性が出るもので、それにより分かるものがある。

艦隊同士が有効射程に入る瞬間、俺の方も躊躇なく言う。

「ゆっくり後退しながら、集中砲火、撃て！ あの時とは違う。向こうの数を減らしてやればどのみち足は止まる」

以前の戦いでは、一大作戦を終えて戻ってきたばかりのところ襲撃を受けた形であり、俺は艦数において絶対的な劣勢だった。そのため猛攻を真正面から受け止めることはできず、いくつかトリッキーな手を使ってまで凌がなくてはならなかった。

しかし今はそれと逆、艦数でこちらの方が多い。

向かってきた連邦の部隊は二十隻に満たないのだが、ジオンはあちこち分散したとはいえ俺の中央本隊に三十隻を残している。その砲撃力をもつてすれば猛攻に対抗し、そうやすやすと突破は許さないはずだ。

唯一の攪乱要因としてはMSだが、連邦の部隊はここまでの急進でだいぶMSを使ってしまったらしく主力する気がないようだ。

それは俺の方としても助かる。ちょうど今、俺の艦隊にはMSが乏しく、駆けつけてくるとしても少しの時間が必要、ならば純粋な艦隊戦の方が戦い易い。

ところが俺は止められると踏んでいたのだがそうもいかなくなってしまう。

連邦の指揮官は必ず突破するという強い意志を持っていた。おまけにそれを実現するため、方策もしっかり考えていたのだ。

砲撃戦に入った途端、連邦の隊形は急速に細く絞られる。打撃力よりも突破力優先の鋭い錐のような形になっていくではないか。俺も慌てて対処せざるを得ない。

「そこまでするか……では無理に連邦の隊を止めるのは下策、作戦を切り替える。進行方向の艦は退避し、横撃に専念しろ。しかしこれ

ほど細く突破したがるとは、解せないものがあるな」

「連邦部隊の進路、予測では当艦です！」

「このタイプに？ では先ほど言ったように退避だ」

そうやって連邦の突進にあえて逆らわず受け流した。こうなると向こうも突破には成功するが収穫は少なく、むしろ受けた損害の方が大きいはずだ。

よし、こつちも反撃に移る！

「このタイミングを逃さず、連邦艦隊を追尾する形で出るぞ！ 向こうの艦隊行動に食らいつき、後背からの砲撃を続けられるだけ続ける」

今度はジオンから猛攻である。突破し終えた連邦部隊の後背につくという有利な態勢で砲戦を展開できた甲斐あって、向こうが増速して距離を取るまでの間に半数を脱落させることができた。

さて、これでどう出てくる。損害がそこまで大きくなれば、普通なら撤退しかないはずだが……

一方のエイパー・シナプスは嘆息する他ない。

「ある程度予測はしていたが見事なものだ。さすがはコンスコン大将の本隊、練度も、統率も、もちろん瞬時の戦術も大したものだな。一度の会敵でここまでやられるとは。散っていった将兵に対し本当に申し訳ない」

しかしエイパー・シナプスは諦めなどしない。というより、この一度目の突破そのものが策のうちである。

「わが友ガデイのためにも怯むわけにはいかん。再編が終わればまた攻勢に出るぞ。今の突破で向こうの反応は分かった。そこで、今から行なう急進は突破と見せかけ、敵中に入った瞬間に散開だ。素早く乱戦に持ち込み、虚をついて一瞬だけでも優位を作り出す。それを活かしてコンスコン大将の旗艦を倒す。向こうはこちらの突破を紙一重で避けようとするため決して距離は遠くならない」

エイパー・シナプスは乾坤一擲の勝負、再び残存艦で迫ろうとする。その様子を見て俺の方では複雑な胸中だ。

「やはり、またしても来るのか連邦の艦隊は…… あくまでこのティベを狙って戦おうというのだな。見事だが、惜しい。ここで消滅させるのは本当に惜しい」

俺は既に連邦の狙いと作戦を読み切っていた。

今、更に艦の数で不利になっても連邦部隊が突進してくるとなれば、その狙いはやはり俺としか考えられない。他に可能性はない。

そして突進するだけでは無理だと判明した以上、単純に来るわけではないではないか。向こうの立場に立てば容易に推察できる。突破は見せかけに過ぎず、おそらく途中から乱戦に持ち込んでチャンスを作り出そうとする。

果たして結果はその通りだった。

連邦の部隊は俺の艦隊を通り過ぎる前に、逆進をかけて留まった。連邦の指揮官が有能なのは、ここまでの戦いで疑いようがない。だがしかし、戦術家が本領の俺と読み比べをするには経験が不足だったようだ。

既に考えてある対処を実行する。

しかし先の言葉は俺の本心で、連邦指揮官の度胸と忠誠心は見上げたものだと思う。向こうは下手をすると全滅ではないか。それでもやるというところには。

だが戦いを挑まれている以上は情けをかけるわけにいかない。

効率的な砲撃を仕掛け、一方的に向こうへ損害を増やす。こちらは乱戦に対する備えをしていたので艦列を崩していない。その上で、俺は自分のティベへ二隻のチベを近接させて守りを固める。これで盤石の態勢だ。

結果、連邦部隊の方は苦闘し、旗艦らしいマゼランさえ中破を負ってしまったようだ。尚もこのティベを見据えているが、連邦艦でまともな砲撃力を持っているのはあと数隻だろうか。それでも進もうとしている。

だが残念なことにテイベへ辿り着くこともできず消える運命だろう。

しかしここで妙なことが起こった！

連邦部隊が急に混乱している。今まで砲撃を応酬しつつ戦いの形を守っていたのに、見る間に乱れていくのだ。

「何だ？ 連邦の方が勝手に崩れている…… 指揮系統に何かあったか？ いや、向こうの旗艦はまだ沈んでいないが……」

この急な変化によって俺の艦隊も戸惑いを隠せないが、いったい何だろう。

そしてもちろん一番驚いているのは連邦のエイパー・シナプスだ。「報告します！ 友軍が後方より急速接近、し、しかし衝突コースです！」

「何だと!! いったいなぜ友軍がここにいる。何の連絡もなかったではないか。おまけにこの速度で同じコースを直進とは。何を考えているのか分からんが急いで回避だ！」

突如この戦場に新たな連邦部隊が登場した。

エイパー・シナプスの部隊としては、応援と思って一瞬歓迎したが、直ぐに困惑がとってかわる。とにかく急いで退避しなければ衝突するくらいの常識はずれの速度である。

それでも避けられない艦が出てくる。既に機関部に損傷を負い、制御がうまくいかずふらふらしている艦もあるからだ。

ここで驚くべき事態が展開された。

新たな連邦部隊は邪魔な連邦艦を砲撃で排除したのだ！

むろん撃沈する気ではなくあくまで機関停止を狙ったものだろうが、危険行為であることには変わりない。

「な、何?! どうしてそんなことができる! 下手したら味方艦を撃沈だぞ！」

この時、奇しくも連邦エイパー・シナプスと俺は全く同じ言葉を

言ったのだ。

後からきた連邦部隊は非情であり、目的達成のために同じ連邦艦へ向けて発砲した。

そしてエイパー・シナプスの中破したマゼランも実力で押しつけ、一気に前へ出てくる。

俺のジオン中央本隊はつられて混乱にあったがその瞬間を突かれてしまった。新たな連邦部隊にとっては最高のタイミングだったろう。

そして位置も、ジオン中央本隊からすれば交戦中の艦隊の真後ろという探知不可能な場所から交ざり込むように来られてしまっている。

結果一挙に距離を詰められ本当の意味での乱戦を作り出された。

くそ、この新しい艦隊はおそらく連邦の本隊から時間差をつけて出てきたもので、決定的瞬間に登場するよう命じられたのだ。

その方策を考え、命じた連邦の総司令官はやはり忌々しいほど巧緻な戦術を使う！

この時、到着した連邦部隊の司令官であるナカツハ・ナカト中佐は高揚の中にある。

元々顔の表情の変わりにくい人間だったが、この時ばかりは明らかに喜色ばんでいた。

今まであまり表舞台に出ることはなかったのだが、こんな重要な局面で主役になれたのだ！

グリーン・ワイアット司令の作戦は完璧であり、ジオンの総大将コンスコンを指呼の間に収めたではないか。

このまま倒せば武勲はあまりに巨大なものになる。

しかも今押しつけた連邦部隊はエイパー・シナプスのものだ。

ナカツハ・ナカトは以前からエイパー・シナプスとその友人ガディ・キンゼーが嫌いだった。

エイパーとガディはそろって指揮能力に定評があり、実際にその通りである。それだけでなく、清廉な性格と公正さが知られていて、兵

たちにたいそう人気がある。もちろん二人はそれを誇りもしない。

それに引き換えナカツハ・ナカトには人望がまるでなく、逆に狡猾な小策士のような評判がついて回っているとは、その二人と違いすぎるではないか。

とどめにその二人は一気に昇進を重ねて大佐にまでなつてしまい、地位の上でも追い越された。

八つ当たりだろうが何であろうが仕方がない。

どうしても心中には昏い嫉妬の炎が渦巻いてしまう。

今、エイパーの半壊した部隊に代わつて目的達成とは余計に愉快ではないか。

第三百三十話 轟沈

さすがにナカツハ・ナカトとしても味方撃ちはやりすぎだったという自覚はある。

結果的に艦隊を理想的な奇襲態勢にできた。あのコンスコン大将の意表を突き、速度も位置も有利にしたのは確かだ。

その意味でこれ以上ないほど有効な一手になったのだが、それでも味方艦を撃つたのは禁忌を破る行為であり非常にまずい。おまけにそれをしたのは冷徹な計算の上ではなく、エイパー・シナプスへの忸怩たる思いが根底にあり、意趣返しが咄嗟に出してしまったからなのだ。

ただし、それもこれも武勲を上げれば問題ない。

グリーン・ワイアット司令は軍律に緩いことはなく、眉をひそめるかもしれないが、ジオンのコンスコン大将を倒した功労者を咎められるわけではない。

連邦本隊から送り出された時、ワイアット司令は、「隠れて進み、最後の最後だけ登場し、どんな方法でもいいからコンスコン大将を倒す」よう命じたのだ。もちろん味方を撃つのはさすがにワイアット司令も想像外だったと思う。

しかし、字面だけをそのまま受け取れば別に間違ったことはしていない。

それにワイアット司令が自分に期待したのはどのみち正攻法の攻勢ではなく、どちらかといえばトリッキーな面だろう。なぜなら今まで戦術能力で地位を築いたことはなく、内部で汚れ役を任された結果、中佐という地位にいる。それをやれたことで無能ではないという自負はあるが、正攻法だけでコンスコン大将とやりあえるとまで思っていない。

ここに至れば全てはやむを得ずやったこと、汚れ役は汚れ役として立ち回り、勲功を立ててみせよう！

もちろんこの部隊内部でも不協和音はあった。

副官として付けられていたダグザ・マックール少佐は味方撃ちを聞くと眼光を鋭くした。あくまで反対し、「味方を撃つくらいなら作戦が失敗した方がいい」とまで言い切ったのだ。そして壁に拳を叩きつけ、態度で批判し、艦橋から憤然として立ち去ったがナカツハ・ナカトの心に響くことはなかった。

武人であるダグザ・マックールとは最初からそりが合わなかったからだ。

実際に味方艦へ砲撃すること自体は問題なく行えた。それは艦橋にいる若い砲術士、コズモ・エーゲスという者が行ったのだが、少しくらい躊躇するかと思いきや、平気な顔で遂行したところを見ると結構割り切った性格なのだろう。この場合はむしろ助かった。

そして戦いは混沌の中へ突入する。

新しい連邦部隊が当初有利でも、一気に方が付くはずはない。

俺のジオン本隊の方だって立ち直りつつある。

「落ち着いて対処しろ。砲火の集中を忘れるな。そうすれば持ちこたえるには充分だ」

俺はそう命じ、新たな連邦部隊を冷静に相手どる。確かにここで登場されたのはあらゆる意味で最悪だった。

しかし少しでも戦い方を見てみれば俺には分かる。

この連邦部隊は先に相手をしていた連邦部隊とは雲泥の差、鋭さというものに欠け、機敏に駆け引きをすることができない。それがすなわち実力の差である。指揮官がそれほど戦いのセンスを持っていないということが透けて見えるのだ。

だが、ここでちよつとした不運に見舞われた。

俺のテイベの近くで、わずか前に出る位置にいたチベの一隻に直撃弾があり、あれよという間に爆散してしまった。まるでテイベの身代わりになったようだ。いや、実際そうなのだろう。

もちろん俺も馬鹿ではなく、そうした可能性も考慮に入れた上で巻き込まれないような距離に設定しておいたのだが、俺のテイベは艦体は無傷でも各種探知装置に不具合が生じてしまった。

それで俺も肩に力が入ってしまったようだ。将兵の尊い犠牲を払った以上、弔いのためにお返ししなくてはならない。

ジオンからいつそう鋭い集中砲火を浴びせて押し戻す。

幾十条ものメガ粒子砲が連邦のマゼランやサラミスに向かって伸び、そのうちのいくつかが着弾する。

俺は艦隊戦の緩急も、ひとしきり撃ち合った後の再編や復旧も自信がある。それで差をつけ、徐々に広げ、勝負をつけてやる。

しかし、ここで俺はうまくやり過ぎたのかもしれない。

集中砲火が早くも連邦部隊の旗艦マゼラン級に直撃したのだ！

しかも回避行動があまりに鈍かったため、艦橋へ当たった。これは偶然というより必然の部類と思われる。

短い夢だった。

ナカツハ・ナカトは何も手にできなかった。

比類ない武勲を上げること、皆が驚きながら見直してくれることもなかった。

上司から称賛の言葉を投げかけてもらえる夢も、部下から憧れられる夢も、おまけにエイパーらを見返してやる夢も、何もかも潰えた。ついでながら味方撃ちをしたことの非難を聞くこともないが、それは慰めにならない。

艦橋要員とナカツハ・ナカトの身はここであっさりと消え去る。

宇宙の戦いでは、実力以上のことをしようとした者の末路はたいがいこんなものだ。

そのマゼランはむろん制御を失ったが爆散するまでには多少の間があった。そのため、艦橋にいなかった副官ダグザ・マツクール少佐は脱出が可能だった。しかし、ダグザ・マツクールがいかにかに有能でも、再び連邦部隊に指揮系統が回復するには少くない時間が必要になる。

それが俺がやり過ぎたと言った理由だ。

指揮系統の消失、これが連邦部隊に思わぬ狂奔をもたらす。

ジオンの陣形に深く入り込み、孤立している恐怖が甦ったのか、連邦部隊は混乱した後先考えず撃ちまくる。攻勢に出たときには無かった恐怖心がここで出てくるとは、つまりその程度の統率だったということだ。

しかし不利なところから徐々に勝ち筋を見つけてつあったジオンにとって、それは喜べるようなことではなく、かえって不確定要因になった。

めちやくちやな乱射が俺の方にも放たれてきたのだ。

先に探知機をやられていたティベは連邦マゼラン級の一隻がまとも正面を向いていたことを見失ってしまい、回避行動が一瞬遅れてしまった。

メガ粒子砲の光が出たと見るや、たちまち大きくなる。

これは直撃弾を食らってしまった時の見え方だと俺は経験から知っている。

ティベに着弾の衝撃が走る。

幸いにして艦橋に直撃ではない。しかしマゼランの主砲はさすがに強力で、たやすく艦壁の防御を破りエンジン部まで破損させた。そこから急速にエネルギーが漏れている。

「くそつ、残りエネルギーを使って主砲を撃ち返せ」

「しかしコンスコン司令、無理をすると損傷が拡大するのでは」

「そうは言っていられない。マゼランを片付けないとこの瞬間にも第二撃が来るぞ。そうなればあつという間に爆散だ」

「た、確かに……」

「もちろん、乗員は全てノーマルスーツを着用し、最悪の場合に備えることを忘れるな」

さすがに俺のティベ、格上のマゼランに撃ち返し、大破させることはできた。

だがそこまでだ。やはりティベは回復できず沈みゆく運命になる。「コンスコン司令、コントロール失いました！ 修理はもはや不能、エ

ンジン制御受け付けません。このままでは爆散の可能性が高いかと」
「残念だがティベは諦める。総員退艦だ。シャトルに分乗しティベから離れるんだ」

俺も慌ててノーマルスーツを着る。自分で言つといてなんだが、ここまでノーマルスーツを着ていなかった。

「時間が惜しい。シャトルに乗れるものから順次出ろ」

「しかしコンスコン司令を置いて先になど」

「下らんことを言うな。もう一度命じるが、とつとと出ろ」

シャトルが次々に乗員を乗せて発艦し、艦橋からも最少限必要な要員を残して去る。俺が無理やり出させたからだ。

オペレーター達と、セシリア・アイリオンはどうしても先に退艦するのを拒んで残っていた。もう説得の時間も惜しいので、俺も諦めている。

「エンジンブロック、居住ブロック、退避完了。生存者はいません！」
「医療ブロック、MSブロックはどうだ。まだ居るか」

このティベには二百人からの乗員がいる。

先の砲撃で即死した者以外は退艦できたのか。

「コンスコン司令、予想より早く限界が来そうです！ 急ぎ退艦を」
「分かった。出よう」

俺は皆の助けも得て、艦橋すぐ脇にある士官用シャトルに乗り込む。くそ、もう少し痩せていれば良かった。

そして一瞬のことだ。

ほぼ同時に艦橋コンソールが火を噴き、一面を火炎地獄に変える。エンジン部から逆流した電流があったのだろう。しかし何とか間に合った。

シャトルはティベを離れ、できるだけ距離を取ろうと思いつきり噴射する。

それが充分とはいえないうち、ティベはついに爆散した。

長いこと俺の旗艦であり続けたティベはこうして轟沈したのだ。

思えば本国会戦から長い付き合いだったな。俺の艦隊の屋台骨となりここまでよく頑張ってくれた。

記憶は全て艦と共にあり、沈むのはとても悲しい。

実際のところそんな感傷に浸っている場合ではなく、シャトルにも損傷が及び外殻の大半が壊れて失われた。爆散の余波が、宇宙に拡散し終わるまでは、爆風と危険な破片の乱舞があったからだ。ただエンジンは何んとか動きギリギリ逃げられる。

しかしここで不運に不運が重なってしまう。

俺のティベを心配し、危険を冒してまでも接近してきた僚艦のチベが爆散に煽られ、進路を急に曲げてきた。

これにまさかシャトルがかすられることになってしまったとは。

シャトルは爆散するティベから離れることばかり考えていたので、とっさの操作が遅れた。

いきなり迫る僚艦の艦首を避けられない。

一瞬後、音はないが、シャトルは大きな衝撃と共に半ば砕け散った。

そして俺は宇宙を飛ばされる。

衝撃でしばらく意識が薄くなってしまうたため、何がどうなったか完全には分からない。何か光があった気がしたが、シャトルのエンジンが爆発したのだろうか。

気がつくとなんか俺は一人だった。

第三百三十一話 終結

俺はノーマルスーツだけで宇宙を漂う。

ここで最初に思ったのは、シャトルにいたセシリアや他の乗員は無事だったのかということだ。脱出がわずか遅れてしまったのは俺の判断が甘かったためであり、責任がある。

悪いことをした。俺のような事態になっっていなければいいと願うしかない。

急いで周囲を見渡すと、シャトルがぶつかった艦が遠くに小さく見えている。

他に艦らしいものはなさそうだ。

しかし、その艦にしても予想外に小さくしか見えず、まずいことになったと思うしかない。俺の気が遠くなっていたのは一瞬ではなく、そこそこの時間だったようだ。

既に流され過ぎてている！

しかもまだ救助されていないところからすると、爆散したチベの影響で見つけられにくかったのだろう。

ついでに言えばものの二、三分でその艦すらも見えなくなった。それは想像よりはるかに速いスピードで流されていることを意味する。シャトルの衝撃のせいか、その後の爆風のせいかは分からない。

もちろん、他に天体として太陽、地球、月、他の星も見えている。光があるのは闇よりもよほど結構なことだが、天体は遠すぎて何の指標にもならない。天体には何も動きを感じず、肝心の俺の位置や速度が判明しないのだ。

しかし、本当にまずい状況である。

幸いなことに着ているノーマルスーツに破れなどはない。

そして通信機は正常に稼働している。ただしやっぱり雑音しか聞こえてこない。何も不思議ではなく、こんな激戦の戦場、濃厚なミノ

フスキー粒子の海では通じるわけがないのだ。

聞くのも不可能なら発信はもつと無理だ。

少なくともノーマルスーツの通信機では全然無理、こんな微弱な出力ではよほど近くに来ない限り通じるはずがない。それでは目視とあまり意味が変わらない。

一応最大出力で救助信号発信にセットし、誰かがキャッチしてくれることに期待をかける。俺は他に何もできず、見つけてもらうまで孤独に漂っているほかない。

それで困ったことがある。

ノーマルスーツのエネルギーは原子力電池であり、そこそこ持つ。そのため温度や通信機の面ではいいのだが、問題は物質的なことである。ノーマルスーツには水も食料も装備されていないが、一番問題になるのはむろん呼吸の酸素である。

それは四時間しかもたないのだ！

二酸化炭素を吸収し、酸素を発生させる装置は容量いっぱいですら稼働しない。救助のタイムリミットは決まっている。

その時間を過ぎた時のことは正直想像したくもない。

静寂の中、俺はすることもなく考える。いや、考えるのを止めることができない。

思うことは、この大会戦の行方だ。

この連邦との決戦の行方はどうなっているのだろうか。

先に出したガトーらは連邦を順調に叩いているだろうか。それとも押し返されたり、躲されたりしていないだろうか。大丈夫だと思いが、相手があのだよかいほど有能な連邦総司令官ならば予断は許されず、どうなっているだろう。

まあ今の俺には知るすべは何もないのだが。

酸素残量は減り続け、残り二時間を切った。

俺はここまでジオンの軍人として幾多の戦いに臨んできたが、これまでのようだ。宇宙のゴミの一つに成り果てる。

もはや独り言でも唱えるしかないな。

文才のない俺だから直球で言う。

「ジーク・ジオン！俺は情けないことになってしまったが、勝つてくれ、ジオン」

すると、視界の片隅に何かがある！小さな光が走っているではないか！

幻視や見間違いではない。

一瞬だけ見えて、また遠ざかっていかれるかと思つてヒヤリとしたが、急カーブを描いてこつちに迫つてきた。

良かった！

明らかに俺を見つけ、助けに来てくれたのだ。

そしてやってきたものは、一機のMSだった。

しかも、形からするとガルバルディだ！間違いない。連邦のMSではない、味方だ。

俺は格好悪くとも手足を振つてアピールした。しかしよく考えたらこの距離になれば通信が可能はずだったがそれは忘れている。

ガルバルディはなぜかぎくしゃくとした動きをしていたが、行きつ戻りつ、なんとか接近を果たした。

そして数メートルの位置に來るとハッチを開けてきた。

俺はそこで思う。やってきたガルバルディのパイロットは誰だろう？

顔を知っているパイロットならいいが、などと呑気に考えていた。

しかし、見えたのは余りにも意外、もう想像の範囲外としか言いようがない人物だったのだ！

「え、な、何!? 君は、フオウ・ムラサメ!!」

「は、はい、コンスコン司令」

「見つけてくれて本当に感謝するが、いったいどうしてここに……いや、そもそもMSを操縦できたとは聞いてないぞ」

「MSの操縦自体は、研究所で訓練を始めたところでした。強化後に

パイロット予定だったと思います。今までそのことを言う機会がなかったもので……」

「あ、いや、決して責めているんじゃないくて、良かったと思っているのだが……」

なるほど、そういうことか。連邦のあの研究所は少女でも容赦なく戦場に駆り立てようとしていたのか。

「そしてティベが沈む時、脱出シャトルよりもMS整備場が近かったので、放置されていたMSをお借りしました。何とか爆散に耐えて出られたのですが、その時コンスコン司令の行方不明を知ったので、私も勝手に探しにかかっていました」

「俺を？ 普通なら直ぐに僚艦に駆け込むところを俺のために？」

「そ、そうです…… なんとなくこのあたりだということとは感じたので見つけられました」

「本当に、何というか、済まん」

フォウ・ムラサメはセシリアの見習いとしてティベに乗っていた。艦橋勤務ではないので見ていなかったが、ガルバルディで脱出したらしい。

その後、俺の救助のために、そんなにも頑張ってくれたとは…… おまけにNTとやらの片鱗があるのかもしれない。

「よし、では手近なジオン艦を探して移乗しよう。早いところ戻らないと会戦の行方が気になる」

だが、フォウ・ムラサメは力なく目を伏せる。

「……………」

「ん？ どうしたのだ」

「それが…… ガルバルディが整備場にあつたのは、半壊していたためだったらしく、もうあまり動ける状況ではなくて……」

「え!? えええっ!」

何とここに来てだけで精一杯、ガルバルディはただのポンコツ、しかも推進剤がほとんどなかったらしい。動きがおかしかったのはフォウの腕のせいではなく、その理由だったのか。

「済みません。見つけたいという気持ちばかりが逸って、結局お役に立てなくて」

「何を言う。気持ちは嬉しかったぞ。それに、申し訳ないのはこちらだ！ 君を戦いに巻き込んでしまい、いくら詫びても詫びようがない。そもそもムラサメ研究所にいれば命の危険はなかったものを、戦場に連れ出したばかりにこんな羽目に」

「それは違います！ コンスコン司令」

フォウ・ムラサメが否定しようと、俺は本当に詫び切れない！

危険を冒してここまで来てくれて、しかも今、俺と同様に遭難状態になってしまったのだ。その責任は俺にある。

「と、ともかく先に状況を把握して最善を尽くそう」

「ガルバルデイの通信機は動かせませす。それと酸素は二日分ありません。食料及び飲料水も」

「ありがたい！ それだけでも来てもらった意義があるじゃないか。よし、通常回線で救助信号を発して待とう。なに、この際連邦でも何でも助けてもらえればいい」

それは本心だ。

もう俺だけの問題じゃなくて、折角来てくれたフォウ・ムラサメを死なせるわけにはいかない！

連邦にでも救助してもらえたらそれで構わない。

そうになったら俺は捕虜でも、フォウ・ムラサメには悪い扱いはしないはずだ。

そして待つていたが、しばらく何も来なかった。

俺はフォウ・ムラサメと少しばかり話をする。今までそういう機会はなかったが、ここでやつと性格と内心の一端を知る。

「君は本当に記憶が無いのか…… 酷いことだな。もちろん連邦研究所が悪いのだが、元はといえば戦争のせいだ」

「正直、記憶を取り戻したいと思います。自分が誰で、どんな人生を送ってきたのか…… しかし、何が何でも知りたいほどではありません。なぜなら、テイベで暮らした期間も確かに人生の一部になったの

ですから」

「研究所を出てから、今もまた人生の一部か…… まあ、そう言ってくれるのはありがたいが、せめて名前くらいは」

「私の名前は、それこそコンスコン司令がつけて下さればそれで充分ではないかと……」

「え……………」

言葉に熱が入っているようだが、ちよつと話の中身が見えなくなつた。それで言葉に詰まる。

その時のことだ。

また宙に光が瞬いたではないか！

しつかり注視すると分かる。さつきと同じ、次第に大きく見えるものは、一機、二機、いくつかのMSのようだ。

「フオウ・ムラサメ、救助がきたようだ！ ガルバルデイの信号を見つけてくれたのだな」

「味方でしようか？」

大変残念なことにそれは違つた。

その姿は願ひも空しくジオン機ではない。ジム・クウエル、連邦MSだ。

MSは合計四機、近寄るとパイロットたちが出てきた。

先にどうすべきか戸惑う様子が見える。

こういつた経験がなさそうなところからするとパイロットたちはかなり若いのだろう。

俺は通信機の通常回線を使い、ジオンのコンスコン大将であること、遭難中で救助待ちだったことを素直に伝える。

すると、連邦パイロットたちは自分の所属を言うことも忘れ、通常回線のまま何やらごちゃごちゃ相談を始めているではないか。

「何だつて！ ジオンのコンスコン大将！！ もの凄い大物じゃないか！ どうするゼリド」

「ど、どうするつたつて、救助はするだろうカクリコン。そして、アル

ピオンへ連れていこう。それしかない」

「ちよつと待ってジェリド、カクリコンも。艦長は中佐だけど、この場合は部隊司令の方にお連れすべきよ。ダグザ・マックール少佐が暫定司令官になっているはずだわ」

「そう言われたら、そうだな、エマ。相手はそれほどの大物だからな」パイロットたちの話を聞く限り、助けてはもらえそうだ。ジオンに敵愾心の余っている連邦兵でなくてよかった。最悪その場合は宇宙にわざと捨て置くこともあり得たからだ。

「元はといえば、ヘンケン艦長は上層部に盾突くこともあるから、艦長止まりなんだろうなあ。新鋭艦の艦長になってるとはいえ、中佐だったらもつと上、艦隊くらい持つてても……」

「あら、ジェリド、艦長はだからいいのよ。おべっかをつかつて地位を得るような人だったら嫌だわ」

「へえ、エマは案外艦長を気に入ってるんだ。知らなかったぜ」

「事実を言ってるだけよ！ 変な言い方しないで！」

「でも、エマだって艦長の気持ちは知ってるんだろう？ その上で憎からずとなれば決まりだな」

「何が決まりなの！ 修正してほしいの!？」

若者たちは更に話を続けているが、いったい何の話になってるんだ？

しかも失礼な論評をしているヘンケンというのは、もしかすると俺の知っているヘンケン・ベツケナー中佐のことだろうか。

「…… 濟まんが君達、こんな立場で言うのもなんだが、早くしてくれないか。酸素の残りが心もとなくてな」

するとよくしゃべっていた三人の他、ただ一人沈黙していた連邦パイロットが返事をしてきた。

「あつ、そうでしたかコンスコン大将。では直ちに」

そしてきつきの三人組に言うではないか。

「言われた通り時間の無駄だ。下らんおしゃべりはその辺にしておけ」

「は！ マウアー様。ジェリドとエマを黙らせませす」「急いで救助します、マウアー様」「おしゃべりはジェリドの方だわ、マウアー様」

「…… お前ら、絶対バカにしてるだろ！」

それから、俺とフォウ・ムラサメはジム・クウエルに連れられて連邦残存部隊司令部に赴くことになる。

それには何とたつたの十分しかかからず、ということは俺はだいぶ連邦側に流されていたということだ。それでは確かにジオン側には見つけられなかっただろう。

俺は連邦艦の中で、若いパイロットたちと共に、暫定部隊司令官という人物に会った。

かなり引き締まった体型をしていて俺とはかなり違う。もちろん雰囲気もすっかりしたものだ。

「地球連邦軍ダグザ・マックール少佐です。ジオンのコンスコン大将でお間違いないですか」

「ああ、その通りだ。捕虜になるのは初めてだが、よしなにお願いしたい。このフォウ・ムラサメにも悪い待遇をしないようにしてもらえたらありがたいのだが」

「…… 捕虜？ いったいそれは」

そしてダグザ・マックール少佐は俺の方から救助した若いパイロットたちへ視線を移し、呆れて言う。

「お、お前たち、まさか伝えていない？ 何たることだ。コンスコン大将を見つけた武勲は巨大なのに、しかしそんなに間抜けが揃っていたのか……」

一息嘆息し、また俺の方に視線を戻す。

そして言ったことは驚くべきものだった。

「コンスコン大将、連邦とジオンは戦争状態ではない。連邦政府から

の通達により、一時間も前に停戦している。それであれば、捕虜ではなく、救助した客人扱いになるので心配には及ばない」

ええっ、何だと!?

俺の知らなかったうちに第三次ルウム会戦は終了していたのか！
しかも停戦という形で。

最終章 旅立ち

第三百三十二話 これからの道

話は少し前に戻る。

コンスコンの指示により動いたガトー隊、シャリア・ブル隊、ツエーン隊、サイクロプス隊、キマイラ隊は前線に到着するとすぐさま支援に出る。それまで連邦艦隊の主力を正面から受け、苦闘していたマクベ少将とカスペン少将はこれらの強力な戦力を得て、やつと息を吹き返すことができた。

局所的には個々の資質も、量もジオンが逆転した。そして戦況を改善するにとどまらず鋭い攻勢に出る。

これに対しやや分散気味であった連邦の各隊は対応できない。各所で破れ、戦線を支えられなくなった。

そこでグリーン・ワイアットは戦線の放棄と自分の本隊への集中を命じたのだ。

戦線を縮小することで無駄な消耗を防ぎ、しかも時間を稼ぐ。そしてしっかりと機を窺う。

凡庸に感じるほど戦術としては定石の範疇なのだがそれで充分だ。ジオンの各隊は強いかもしれないが、ダイナミックな用兵をしてくるのでなければ何も怖くはない。

暴れん坊を転ばせるのに力は必要ないのと同じ、ワイアットはそう見通している。

本当に怖いのはコンスコン大将ただ一人なのだ。

今の状況など、自分の指揮する本隊だけで反攻はいつでも可能であり、慌てる必要はどこにもない。

ここで戦場に巨大なニューースが飛び込んできた。

「ジオンのコンスコン大将、行方不明！」

ほぼ同時にジオンと連邦はこれを知る。そして対照的な動きに出たのだ。

当然ながらジオン各隊は混乱をきたし、中にはあつさり戦場を放棄し、戻ろうとする隊まで出てくる。多くはコンスコン機動艦隊所属の各隊だ。

「あの馬鹿！　どんくさいくせにやる気だけはあからそんなことに！　すぐに見つけて蹴りを入れてやるから待つてらっしやい」

真つ先にそう言って離脱の動きをしたのは、長きに渡ってコンスコンと共にいたツエーンやカヤハワである。

「戻るわ。カヤハワも一緒に」

「は、はい！　もちろんー！」

「まったく、司令官なら司令官らしく安全なところにいなさいよ……もし、死んでたら承知しないからね……　いなくなつては、困るのよ。私が」

ツエーンだけではない。意外なことに、それに同調したのはガトーである。

戦場であれば誰がいつ死んでもおかしいことは何もなく、だからといって泣き叫ぶのは愚か者のすることだ。武人は常に覚悟と共にあり、現実を粛々と受け止めるものである。

武人の中の武人であるガトーはそんなことは百も承知だ！

しかしそれでも、コンスコン大将の救出の方が大事だと判断した。その生存の可能性をわずかにでも上げるのが、全てに勝つて重要ではないか。

「戻るぞ！　カリウス、もう局所的な戦いなどどうでもいい。コンスコン大将こそジオンの明日そのものだ。何が何でも失うわけにいかない」

逆に連邦艦隊は勢い付いた。

待つていた機会、グリーン・ワイアットは軽くうなずき、反攻の合図をする。

「ステファン・ヘボン君、作戦はうまく行き、エイパー・シナプス大佐

に続きナカツハ・ナカト中佐がコンスコン大将を追い詰めたようだね」

「しかし、報告を聞く限り、連邦軍人として決して褒められた方法ではなく……」

「私もそう思うよ。彼らしいというか、突拍子もないやり方、だからこそ目的を達成できたわけだな。しかし、無駄にすればそれこそ誰も浮かばれないというものだ」

「全く同意です。過程はどうあれ勝機は得られました」

「では掃除を始めるとしようか、ステファン・ヘボン君。本隊前進、MSを右翼から回らせて逃さず叩く」

既に考えてあった反攻のプランを実行に移す。

むろんワイアットが自信を持って繰り出す戦術、鮮やかに決まる。まるでキャンバスに絵を描くように戦術家は戦場を好きなように描く。

ジオンの前進は間もなく止まり、逆に一方的に叩かれ、防戦に回らざるを得なくなる。

グリーン・ワイアットらは勝利をもはや既定路線に感じている。どんなにジオンが奮闘してこようが、コンスコン大将がいなければ敵ではない。

ここで連邦艦隊司令部にジャブローから一報が入った。

数瞬後、激情が渦巻くことになる！

「そ、そんな馬鹿な、ジャブローはふざけている！こちらから停戦などあり得ない！我が連邦が勝利しているではありませんか!! もはやコンスコン大将不在のジオンに勝つのは自明、あともう一步、いえ半歩です、ワイアット司令！」

「そうだね、その通りだ。この会戦は、まごうことなく連邦の勝利だよ、ステファン・ヘボン君」

「で、では、このまま押せば！」

「いや、それはできない。連邦政府の名をもつての停戦命令であれば無視できない。もし逆らえばただの叛乱軍になってしまうし、私はそ

うなるつもりはない。命令系統は遵守すべきものだろう」

「ですが！ 上層部がこの状況を理解しているとは思えません」

「…… まあ、そうだね。私も平気ではないから先ずは紅茶を飲みたいものだ」

連邦政府はジオンと停戦の覚書を交わしたことを公表した。

その上で、ワイアットへ全ての戦闘行為の即時中止を命じてきたのだ。

「パックの紅茶でも少しは落ち着かせる効果があるようだね。ステファン・ヘボン君、現実を認めよう。全チャンネルで停戦の連絡、そして撤退に入ってくれたまえ」

「そんな、司令…… 無念です」

グリーン・ワイアットは連邦政府命令に従い、停戦を実行する。

その時までには、なぜそんな命令が来たのかワイアットも推察している。もちろん、そこには理由があるのだ。

実はこの会戦の様相は逐一ジャブローに知らされていた。

定期的に伝令が出ては、ミノフスキー粒子が薄い戦場外縁まで行き、地球に通信をつけていた。それは連邦上層部が事前にワイアットへ突き付けた条件の一つだった。

そこで上層部は知った。

第三次ルウム会戦は連邦とジオンの最終決戦というのにふさわしく、希に見る激戦になった。

戦況は一進一退の膠着状態、連邦艦隊も甚大な損害を負っている。時間の経過と共に、可動艦は約半数にまで減ってしまった。無傷なのは更にその半分でしかない。

それを見て取ったところで決まりだ。連邦政府としては大局的に考えるべきことがある。

会戦の勝敗とは別のことだ。

連邦にとってエネルギー問題の解決こそが現在の最優先課題なのに、それが叶わないではないか。これでは戦略的に何も解決しない。

このまま連邦艦隊がジオン艦隊に勝ってももう意味がない。

ジオンを振り切つて向かつて、すぐさまジオン本国を完全占領するだけの戦力は残っていないのだ。ジオン本国は首都防衛隊の他にドロスなどの巨大空母という戦力が存在している。おまけにサイド3のコロニーをいくつ占拠すればジオンが白旗をあげるのかさえ分からず、侵攻には不確定要素が多過ぎる。

かといって逆にジュピトリスのヘリウム3を奪取して一時しのぎをしようにも、既に地球軌道を離れる寸前である。間に合うかどうか保証できない。

とすれば、ジオンのエネルギー戦略によって連邦がここまで痛めつけられた以上、もう停戦するしかあり得ないのである。唯一の希望は速やかな連邦艦隊の勝利だったのだが、それはジオンのコンスコン大将の勇戦により早い段階で潰えた。

グリーン・ワイアットの誤算は、連邦が思考を放棄するところまで困っているのを把握できなかったことだ。ルナツー独自の備蓄は上手くやり過ぎ、連邦から送り届けられる補給物資が細つても会戦が可能だったのがその理由である。

ワイアットは、近頃ジオンにやられてばかりいた連邦軍がここで勝利することこそ士気の上でも政治交渉の上でも重要と思っている。しかも、ジオンのコンスコン大将を斃すことがどんなに大事かも知っている。

その認識で激戦を繰り広げ、勝利へ向かつて着々と歩みを進めていたのだが、もう戦力低下の段階で政府方針は決定したことだった。

後世の歴史家もこの第三次ルウム会戦の判定には迷うことになる。それには歴史家の数だけ意見が生まれたのだ。

このグリーン・ワイアットとコンスコンの真つ向勝負はいつたいどちらの勝利とすべきなのだろう。

「戦場ではワイアットの勝ち、戦場以外ではコンスコンの勝ち」

そういつた表現を使う者もいる。

確かに艦艇などの損害は連邦よりジオンの方がやや多い。

連邦は戦闘参加艦艇257隻中、爆散・放棄・自沈が82隻、自力航行不能の大破が36隻である。ジオンは戦闘参加218隻中、爆散等が88隻、大破が45隻である。

それに停戦時点では連邦が猛反攻を開始し、ジオンが駆逐されつつあつたという事実がある。

ただし停戦を持ちかけたのは連邦政府の方である。勝負の結果は覆らない。そもそも連邦軍の最終目的がジオンの独立阻止である以上、今までテロリスト扱いしていたジオンを対等の相手と認めること自体が連邦の負けに等しい。

一方では別の表現もある。

「戦術ではワイアット大将が優り、戦争ではコンスコン大将が優った」
第三次ルウム会戦は、終始グリーン・ワイアットが策を打ち、コンスコンがそれを上手に躲し続けていた。

放たれた戦術の数も質も驚くべきものだ。ワイアットはその戦術家としての完成度を余すことなく華麗に見せつけた。

しかし一方、連邦艦隊の戦力の減少が一定以上になれば、自動的に停戦せざるを得ない、そんな状況を最初から作り出していたのはコンスコンである。その方が艦隊戦で雌雄を決するよりよほど堅実かつ大局的な道筋ではないか。

いずれにせよそんな評価は当人たちには意味がない。

ワイアットもコンスコンも、奇しくも同じような思いを持つことになるのだ。

お互い、相手の凄さが分かるだけに敗北に近い感情を抱いたのだつた。

第三次ルウム会戦の結果が知れてから、さほど間を置かない時のことである。

少なからず人類社会に影響を及ぼす物事が、とある宇宙の片隅で決められようとしている。

そこは窓から光がわずかしか入らず、薄暗い館の部屋だ。一人の老人がソファアールに腰掛けている。

「カーディアスを呼べ」

そう老執事に伝える。声ははつきりしていて、目にも光がある。ただし体はもう九十八歳という年齢に耐え切れず、弱っているのが明らかだった。もはや立つこともおぼつかず、そう時期を置かないうちに寝たきりになるだろう。

サイアム・ビスト

この老人は死ぬことさえできない。いや、自分の命などどうでもいとさえ思っているのだが、ただ責務のために長い時間を生き続けている。

初期にあつた罪滅ぼしの意識はもう擦り切れた。

しかし自分に課した責務を忘れることは決してない。

ひたすら待った。

若いといえる頃より、責務から解放されるかすかな希望と、深い失望と、その両方を幾度となく繰り返し、その数だけ疲労が溜まりに溜まっている。その八十年もの間、ついに責務から解放される行動を起こせる機会は訪れなかった。

やっとここに老人の呼んだ人物が到着した。

老人の実の孫でもあるが、既に青年というよりは中年に近い。

「お呼びでしょうか、当主」

「カーディアスよ、お前にビスト家の当主を譲るのは少し先に延ばす。儂の体はもう長くはもたんが、ここでゴールドスリップには入らん。今が大事なのだ。半ば諦めていたが、ついに待っていた時が来たと知った」

「な、なんと！ では、今がその時だと！」

「そうだ。ここしばらく儂はジオンと連邦との戦争を見ていた。正直、ジオンは存続に値するものだとは思えなかった。発展の途中には往々にして生じる轢みのようなもの、いずれ泡のように消えるものではないと思っていたのだ。実際、スペースノイドの代表というに

は、その思想も、戦争のやり方もとうてい真っ当ではなかった。だが、ここ最近は違う。ジオンはまるで変わり、スペースノイドの未来を託せると思える器に成長した」

「今のジオンの体制が、当主の目にはそのように。しかし、ここまで慎重の上にも慎重だった当主が……」

「今までの慎重さはこの時のため、そう分かったのだカーディアス。儂はジオンに賭ける。あの『箱』を今こそ開こう。そして万人に宇宙世紀の原点を教えるのだ。あの、儂が見た宇宙世紀の初め、人々が宇宙開拓の熱気と興奮の中にあり、何よりも希望に溢れていた時代のことを伝えねばならない」

老人の一生は幾多の政治変動や動乱を見つめ続けることにあつた。

しかし、ここまで長く待った甲斐はあつたのだ。喜びを感じるには年を取りすぎているが、深い安堵はある。

「儂の負った責務はようやく果たされる。『箱』の座標をジオンに知らしめよ、カーディアス」

第三百三十三話　　デイサイド

俺とフオウ・ムラサメは休息をとった後、ジオン艦隊に送り届けられる。ダグザ・マツクール少佐は第一印象通り武人であり、まるでガトーのように紳士的な態度をとってくれた。

そして連邦艦で航行し、ジオン艦に接触というのも実に新鮮な体験だ。

ジオンの臨時旗艦とした一隻のチベに乗り込み、ようやくその艦橋についた瞬間である。

「やつと来たわね！　死んでたら殺すわよ！」

いきなりツエーンの蹴りに出迎えられるが、それはもちろん力を抜いた形だけのものだ。

「のろま！」

「心配かけたな、返す言葉もない、ツエーン」

「馬鹿！」

「はは、まったくそうだな……」

「クス！」

「……」

いやどんだけ続けるんだよ！　言い過ぎだろ。

そして見ると、予想通り艦橋にツエーンの他ガトーも、クスコ・アルも、ケリイも、シャリア・ブルも、皆が揃っている。

「みんなも無事で良かった。俺は、自分でも情けないことになったが、この通り大丈夫だ」

俺を見て皆はとにかく安堵しているようだ。俺を一生懸命探してくれていたことなど聞くまでもない。

そして感情の激しいツエーンやカヤハワはうっすら涙ぐみ、普段はポケっと抜けたところのあるクスコ・アルもそうだ。なんのかわんの俺は大事にされている。この温かい雰囲気にも嬉しくなってしまう。

そして皆の中に、俺が一番心配していた人物がいたのだ！

思わず声をかける。

「セシリア・アイリーン、無事だったか！ その後シャトルがどうなったか分からなかったが、とにかく無事でよかった。脱出の件では色々済まなかったな」

「いえそんな、シャトルから投げ出されなかっただけで、私も気が付いたら救助されていたのです。こちらこそ肝心な時に何もできなくて申し訳ありません。反対に私の方が投げ出されていればよかったのに」

「そんなことあるものか！ …… いや、お互い無事だったのだ、それで良しとしよう」

無事だったらそれでいいのだ。

俺が気にする必要はないのだが、フォウの視線をなぜか感じたのでセシリアとの話を打ち切った。

もちろん激戦が終わったばかり、様々なドラマがあるだろう。俺が知るすべはないがどこにでもそういうドラマはある。

サイコ・ドワスのコックピットを出るダリル・ローレンツ、それを花のような笑顔で出迎えるカーラ・ミツチャムがいる。

笑いながら、涙が無重力下、カーラの分厚い眼鏡の縁で遊んでいる。それから二人はお互いの無事を祈るシユシユを見せ合い、そして抱きとめる。

交わされるセリフなど想像するまでもない。

それこそ人類の歴史で数えきれないほど繰り返された、凡庸で、陳腐で、しかしこれ以上なく崇高な恋のセリフに決まっている。

一方、停戦前に捕縛されたので捕虜扱いになり不貞腐れたイオ・フレミングがいる。だが彼もまたダリルと話す機会があるのだが、それはまだ先のことだ。

ウラガン副官に無事な白磁の壺を数えさせているマ・クベ少将も、戦いでやや不完全燃焼だったため慥然としてるところをラリアに宥めてもらっているシャア少将も、若者の死者数をとにかく調べさせ

るカスペン少将もいる。

それもこれも停戦しているからこそだ。先のことは分からないが、いくらなんでも直ぐに再戦ということはない。

連邦は連邦で、共に負傷したガデイ・キンゼー、エイパー・シナプスが語り合う。意外なことにオットー・ミタスは艦隊の収拾や救助に才覚があり、必要な場所に医薬品や推進剤を届けるために忙しく飛び回っている。

そして、当然アルビオン艦橋ではコンスコン大将救助を偶然にも成し遂げたパイロットたちをヘンケン・ベツケナー艦長がねぎらっている。

そこでジェリドがわざと口を滑らし、エマ・シーンが艦長の姿勢を好きならしいと告げてしまう。事実は事実であっても、もちろんエマから力の入った修正を食らうのはお約束だ。

「いい加減にじやれるのはよせ」

こう言つてマウアーまで修正をしようとするではないか！ きつとエマから感化されてしまったのだろう。

「ちよ、マウアー様、その筋力で修正はシャレにならないって!! 兵器だから！ いや本当に！」

ジェリドといつの間にか巻き込まれたカクリコンがマウアーの超高速ビンタから逃げ惑い、この三文芝居はお開きになる。

エマ・シーンも毒気を抜かれて呆れるほかはない。

その横顔をヘンケン・ベツケナーが見とれているのだが、それを知つても素知らぬフリをする。ヘンケン・ベツケナーも不器用だが、エマもまた正直どういう反応をしたらいいか分からないからだ。

明確に二人が近付くにはもう少しの時間が必要だった。

連邦もジオンも、艦艇の応急修理、乗員の救助を粛々と進める。

激戦地であればその宙域も重なっている。つまり目の前で敵が同じようなことを行っているのが嫌でも目に映り、どちらも複雑な感情を持つ。

しかし通じ合うものがないことはないのだ。

立場が違うだけで、僚友を探し助ける気持ちは全く同じなのだから。

それが終われば連邦もジオンも艦隊をとりまとめ、激戦のルウムを後にして帰還となる。

俺は結局連邦の総指揮官グリーン・ワイアット大将とは事務連絡をただけで、会うべき理由も時間もなかった。

そして帰還すると真つ先にズム・シテイへ報告に行く。

ドズル閣下とキシリア閣下が待っているのだ。

「第三次ルウム会戦、期待されていながら勝てなくて申し訳ありません。揃えて頂いた艦艇の多くを損なってしまいました」

もちろん真つ先にそう言う。

俺のジオン艦隊は連邦に先手を取られ、正直いつて危機の連続、損害も積み重なった。

「何を言うかコンスコン！ 貴様はよくやった。いや、貴様でなければやれなかった。記録を見ると身震いが止まらんぞ。あの連邦の指揮官は戦術の化け物だ。宇宙を奔る雷撃を使った戦術などといった誰が予想できるか！ それに対して丁々発止、大胆に機転を利かせ、互角にやりあうなど貴様は本当に大した奴だ！」

ドズル閣下は記録を見ておいてくれたのか。そう言ってくれるのはありがたいのだが、実質は明らかに俺の負けだった。

「キシリア閣下に対してもお詫びとお礼を申し上げます。戦いでは負け、停戦がなければ、連邦の捕虜になっていたところでした」

「ん？ 何を言っているのか分からんな、コンスコン。お前は見事に勝ったではないか。負けたのは連邦の方だ」

キシリア閣下は別に俺に対して気を使ったわけではなく、言葉に何の飾りもない。思ったままを言っている。

全然ブレない人だな！

キシリア閣下、この人にとっては政治が全てなのだ。

その考えるところ、会戦というのは政治の舞台設定を整える作業に過ぎず、それ以上でもそれ以下でもない。政治で勝てばそれが100%の勝利であり他にどう言いようがあるのか。

停戦したのは連邦、だから負けは連邦、それ以外にないということだろう。

まあしかし、それは置いといて俺は次に来る問題を話し合わなければならぬ。

停戦は素晴らしい成果だ。

ジオンと連邦が戦争状態にないのは、大いに喜ばしい。

ただし、停戦は終戦ではない！

条約などあつて無きがもの、いつ何時、戦争が再開するか分からない。今はただの戦闘準備期間かもしれない少しの気もおけない状況であることは間違いない。

これでは平和を甘受するどころか、社会的リソースを復興に振り向けることもままならず、人々の生活は荒廃したままだ。

停戦を何としてもしっかりと終戦に持っていかねばならない。

「キシリア閣下、停戦の経緯をお聞かせ下さい。それと終戦への道筋や方策も」

「なるほどコンスコン、やはり知りたいか。だがな、特別な話はないぞ。お前の戦略によってヘリウム3で連邦を追い詰めていたための必然に過ぎない」

「いやそれでも簡単ではなかったでしょう」

「ゴツプ大将を通じて停戦の打診をしておいたのだ。あの狸は周りが言うような穏健派どころか連邦軍の存続しか考えていないが、それでも他よりはいくらか視野が広いからな。一方、連邦のタカ派どもを黙らせねばならぬ」

「それが一番難しそうなことですが……」

「なに、難しいというほどのことではなかったぞ。ねじ伏せるのではなく、逆だ。ジオンを停戦でぬか喜びさせうまくヘリウム3を引き出した上で再び開戦すればいいだけだと思込ませた」

「ええっ！ それはいいったい」

「要するに停戦を方便として使う頭のいいやり方だというようにな。ジオンとしては騙されてしまった道化のフリだ。それをあたかも連邦から考えた戦略であるかのように偽装して流布し、思い込ませる。後は容易い。ジオンではなく連邦のタカ派どもから停戦を喜んで言わせた、そんなところだ」

何ですと！

キシリア閣下はいかにも簡単なことのように言ってるが、それができる手腕を持つ人物などそうそういるわけがない！

停戦を連邦から言わせる

簡単なものか！

上手いタイミングで、上手いやり方で、上手いところを動かして初めて成し遂げられる超高等な政略である。

「そしてコンスコン、停戦を終戦に持つていくことだが、それは確かに難しい。ジオンとしてはヘリウム3の供出を少しずつやりながら誘導したいところだが…… 連邦一般市民のジオンに対する敵愾心を和らげること、連邦政府上層部を利益誘導すること、これを同時になすのは正直無理に思える。供出しなくてはたぶん市民のスペースノイドへの敵愾心はつのるばかりだ。しかし下手に供出し過ぎると政府上層部は自分の手柄にするだけで、また凶に乗って元の木阿弥になる」

「確かに……」

連邦の面倒なところはそこだ。市民感情と政府上層部が乖離している。

そしてどちらにも様々な主張があり、合理主義な人間もいれば、大儀や敵愾心に捉われる人間もいる。とにかく難しい。単純な復讐心ならばともかくアースノイド至上主義などどう見ても解決しがたい。

「まあ悪いニュースばかりではないぞ。話は変わるがコンスコン、知っているか、宇宙世紀憲章の伝説を」

「え!? それはまた急に話が飛びますが、キシリア閣下、ひよつとしてあの伝説でしょうか。皆が知っている宇宙世紀憲章はニセモノで、本当はスペースノイドが革新すれば、スペースノイドこそ優先的に参画させなくてはならないと書かれているとか」

「その通りだ。私もただの伝説だと思っていたのだが、事実だったらしい」

「は!? はあ?」

「本当の宇宙世紀憲章、当時のレプリカを今に至るまで保存しているという人物から連絡が入ったのだ。驚いたことに連邦内でそこその影響力のある人物らしいが…… ともかくそれを役立て、当時の宇宙開拓の原点を人々に教えて欲しいということだ」

何だそれは。

伝説が本当?

しかも当時のものを保存ということはその人物が生きていると言うことか。しかし、それでどうなる。

「ですがキシリア閣下、そんなに前のことを今さら」

「そう、今さらだ。八十年も前の理想など人の心を変えるのに何の役に立つのか。人は大事なものでも振り返ったりしない。もはや宇宙世紀憲章がどうであつてもとつくに風化している。しかしなコンスコン、全く利用できないものでもないぞ」

「それは、いったいどのようなに」

「宇宙開拓時代、スペースノイドは余剰人口の棄民というだけではなかったのだ。人類が宇宙というフロンティアに挑むという気概があつた。その時代の雰囲気語る材料にすることで、アースノイドがスペースノイドに対して持つ根拠のない優越感を砕くには使える」

「なるほど、ですが結局のところ、スペースノイドとアースノイドの差を打ち出すほど宥和しがたくなるのでは。目指すところは共存であり、一方的支配ではないでしょう。もちろん当時の熱気を知るという意味だけなら良いのですが」

「それもそうだ。まあ実際の物を見てから考えても遅くはない。実はもう取りに行かせているのだ。スペースコロニー群よりだいぶ地球

よりのポイントらしいが」

キシリア閣下との話はだいたいこれで終わる。

これからも頭を悩ませる問題が山積していることだけは分かった。政治はとにかく難しいもので、俺にはやっぱり艦隊戦の方が向いているな。

だが、そんな感想は停戦して気が抜けている時期だから言えることだったんだ。

そのわずか十日後、俺はキシリア閣下に緊急呼び出しを食った。

「な、何用でしょう、キシリア閣下」

「コンスコン、お前に伝えることがある。先日言った宇宙憲章の件だが、取りに行かせた部隊が全滅した。何かの勢力に襲われたのだ」

「この時期に小細工ならともかく、連邦からあからさまな武力襲撃をするとも思えず、謎ですな」

「そうだ。確かに宇宙世紀憲章は持ち去られたが、連邦が今こんな形で停戦破棄をしてくるはずはない。謎の勢力とは頭が痛い」

そして正にこの時、驚くべき凶報がもたらされたのだ！

「き、緊急連絡！　小惑星ペズン基地が武装勢力により占拠！　同時に、真の連邦軍『デイサイド』を名乗り、連邦とジオンの停戦は茶番であり無効と表明！」

「……………　だそうだコンスコン」

「謎は解けましたがとんだことです。今、事を荒立てるのははなはだマズいと思いますが、ほっておくわけにもいかないでしょう」

「全くだ。おそらく停戦に反対する急進派、どこにでもそういう者たちがいる。向こう見ずで、視野の狭い連中、恨みで動いているのかもしれんな。ただしペズンは我がジオンが実効支配している領域、サイド2や6方面への橋頭保でもある以上速やかな鎮圧が必要なのは確かだ。連邦の方でも停戦中での敵対行動、恐れ入ることはあっても鎮圧に文句を言うはずはない」

「では鎮圧に出動して参ります」

「いや待てコンスコン。お前に今本国を動いてもらっては困る。どのみちペズンの連邦急進派などせいぜい一部隊だろう」

「は？ まあそう思いますが……ではデラミン准将に行ってもらいましょうか。堅実に事を収めると思われます」

さっそくデラミン准将に二十五隻もの艦艇を与え、ペズンの再奪取に向かわせた。

その時までには連邦急進派デイサイドの戦力は艦艇八隻、MSが三十五前後しかないと判明している。確かにキシリア閣下の言う通り一部隊程度に過ぎず、デラミン准将の戦力に抗し得るわけではない。

これが痛恨だ。甘すぎた。

そしてもう一つ、キシリア閣下は何と言っていた？

「どこにでもそういう者たちがいる」

そして俺にジオン本国を動かさないようにということだったではないか。なぜなのか、その意味をもう少し深く考えるべきだった。どこにでもとは、すなわち連邦だけではない。

俺の元へ、特大の凶報が同時に二つも飛び込んできた！

「コンスコン大将に連絡！ デラミン准将の艦隊、ペズン近傍にてデイサイド勢力と交戦！ 結果、旗艦他四隻を残して壊滅とのことです!!」

「報告します！ アクシズ駐留部隊エンツオ大佐らのグループが叛乱！ 連邦との停戦破棄を求め、アクシズを占拠！」

宇宙の波濤は、少しも収まる気配がなかった。

第三百三十四話 共闘

俺はペズンを占拠した連邦急進派勢力デイサイドについて、甘く見過ぎていた。

討伐に向かわせたデラミン准将はそこそ有能な将であり、俺の艦隊の分艦隊を任せるほどだ。特に、変なプライドがないため退くべき時にはしつかり退く将でもある。

デイサイドとの戦いで充分ゆとりを持った戦力を持たせたはずが、それをあっさり覆されたのも驚きだが、そういう性格のデラミン准将を一気に全滅に近い状況に持っていくのはかなり難しいはずだ。

これは強いな。はなはだ練度が高いか、策士が優れているか、あるいはその両方か、いずれにせよ決して侮れない。

力押しだけではダメだ。

再びの失敗はできない以上自惚れかもしれないが、ここはやはり俺が討伐に行かなければならない。その許可をドズル閣下とキシリア閣下にもらいたいがそれが叶うだろうか。

それなのに今、ジオンは何と自分のところにも叛乱を抱えてしまっている！

おそらくキシリア閣下はそれについて何かの情報を掴んでいたんだ。だから俺をペズンへ行かせなかった。もしかすると俺をこれからペズンではなくアクシズへ送り出すつもりかもしれない。

しかし俺の見るところアクシズの問題は後でいい。

ジオン本国とは距離があり、さしあたって何も実害はなく、たぶん叛乱を起こしたエンツォ大佐もそういうことは分かっている。本国とまともにやりあうのが目的とは思えない。連邦と再び戦端を切るように圧力をかけたいのだろう。

エンツォ大佐というのはあまり俺も面識はないのだが、長くマハラジャ・カーン准将の副官を務めた実直な軍人だそうだ。そして思想的にはなかなかの主戦派、それでは突然の停戦にも納得しかねるのだろ

う。

停戦とはつまり、連邦を打倒してジオンが人類を主導するという夢を諦めるということでもある。有能な軍人であれば連邦とジオンの国力を分かっているはずはないが、それでも現実的な諦めとは違う。エンツオ大佐は将来ジオンで人類を統一する、とてつもない大風呂敷を真面目に信じているのだ。

しかしまあ、この二つの出来事は見事なほど似ていて、まるで鏡写しではないか。

どちらも停戦に納得しない急進派なのだ。

連邦とジオン、どちらにも、あくまで戦い続けて相手を消滅させたい勢力がある。

長い戦いの結果、そこまでお互いの対立の溝は深まっている。どちらも欲や利益ではなく信念で動いているところがやりきれない。しかも本来なら称賛すべき、自己犠牲を厭わない精神にあふれているが故にこんな行動に出ってしまったとは。

俺は深いため息をつく。

「疲れた顔だな、コンスコン」

「あ、それは…… キシリア閣下も同様ではありませんか」

「そう見えるか。正直疲れたが、今やっと解決への光明が見えかけているので問題はない」

「え、光明!? そうなのですか? では、叛乱が收拾したと」

「逆だコンスコン。アクシズではエンツオ大佐の黒幕としてホルスト・ハーネス統治官というタカ派までもが関与していた。とどめに茨の園にいる旧ギレン派の一部が呼応してアクシズに向かっていてという情報が入った」

「え、ええっ! 大変ではないですか! キシリア閣下、どこが光明なのでしょう」

「ある意味、今そんな動きをしている者たちは最初からどうしようもなく、いざれ行動してしまっただろう。ただし、こういつてはなんだがデラーズが生きていれば丸ごとそちらへ寝返り、いつそう大ごとに

なった可能性が無きにしもあらずだから何ともいええない」

「それは…… 確かに」

「そういう急進派の見極めがついた。その数も分かった。不確定要素が消えたので光明と言ったのだ」

なるほど、そういう言い方もできるし、不確定が一番怖いというのも分からないではない。

しかしアクシズにはそこそこの戦力が渡ったということだ。

やはり俺はそちらの鎮圧へ行くのだろうか。

「で、ではアクシズ正常化に赴くということでしょうか」

「コンスコン、先走るな。お前をアクシズにやることも考えていなかったわけではないが、今は全く思っていない」

「あ、それはどうしてでしょう」

「アクシズにはシャア少将を派遣する」

これには驚いた。

なぜだ！ シャア少将はギレン派とは遺恨があり過ぎる。

「そ、それは！ 降伏や恭順の可能性が限りなく低くなるではありませんか！ それは理解できません、キシリア閣下」

向こうが説得に応じるとは思われず、話し合う余地を最初から作らないも同じではないか。なぜそんな措置を。

確かにシャア少将ならば戦いになっても負けることは考えられないが……

シャア少将のゲルググとララア少尉のエルメスの戦闘力は言うまでもなく高く、たいがいの部隊は敵しえるものではない。しかもシャア少将は戦いになれば迷いもなく、手加減などしないだろう。

戦いという意味で不安は皆無、しかしそういうことではないのだ。

「私を非情と思うかコンスコン。私とて恭順に持ち込み、話がまとまるのが一番だと思っている。だがな、これはしつかり膿を出し切るためには必要なことなのだ。ヒロイズムに酔う人間も、頑なに連邦を敵とする人間も、ギレンの兄しか見ようとしないう人間も要らないのだ。

これからのジオンには」

「……なるほど。それで連邦と停戦という千載一遇のタイミングを利用してまでも閣下は……」

「もちろん、貴重な戦力や有能な将兵を失いたくない。いやそれだけではなくて、彼らがジオンを思う気持ちに嘘偽りはないと思っっている。それでもだ、コンスコン」

「そのような覚悟とは……分かりましたキシリア閣下。では逆に、私はペズンの方へ討伐に行けるのでしょうか」

「いやお前が討伐してはならない」
「へ!？」

アクシズに対する処置は非情といえれば確かにそうだ。

なぜ同じジオンで争う。だが、未来を考えたら必要なことなのか、キシリア閣下は少なくとも私情で考えてはいない。

それはともかく、どういうことだ？

俺がどちらにも何もしないではないか！

ペズンだつてこのままにしておけないではないか。

「驚いたろうコンスコン。お前は顔に出やすいな。実はペズンの討伐は連邦軍自らが行う。連邦もそうでなければ格好がつかないことが分かっているのだろう。向こうの最高指揮官がペズンまで出向いて、確実に収め、きれいに返却してくれるそうだ」

「まあ、それであれば……ある意味当然かもしれない、ジオンに下手な借りを作ればまずいと考えるでしょう」

「むろん、こちらとしてはジオン支配宙域であることを盾にとって断ることもできる。そしてあくまでこちらがペズンを討伐した方が恩を売りつけることになり、これからの交渉で有利にもなる。しかし連邦がそう言うならそうさせるのも一興と考えた」

「一興とは？」

「ジオンが討伐すれば、連邦急進派をジオンと悲愴な戦いを演じた殉教者に仕立ててしまう恐れがある。下手すれば次々と同じような者が出てきてしまう。そうではなく連邦に連邦を叩かせるのが良からうし、向こうの中に面倒な波紋を呼べたらなおさら面白いだろう。政

治とはそういうことを考えるものだコンスコン。一筋縄ではないぞ」
これがキシリア閣下の凄みだ。いや、それでなければ政治という魑魅魍魎の世界を渡っていけないのだろう。

「それはそうと、今回お前は討伐ではなく、検分という形で連邦の艦隊に同行してもらおう」

そして俺は展開の早さについて行けない。
どうしてこうなっている。

わずか一ヶ月前にはどうてい考えられない。

まさか、第三次ルウム会戦で死闘を演じ、幾多の将兵を損ない、互いの国家のためにぶつかりあった連邦の将と同席しているとは！

「紅茶は好きだろうか、コンスコン大将」

「ま、まあ、人並みには……」

「それはよかった。では万人受けしやすい、癖のないヌワラエリヤでいいだろうか。スリランカでもかなりの高地産、澄み切っていて香りもいい」

「正直、スペースノイドには紅茶の銘柄を吟味する余裕はなく、全く未知のことなので。グリーン・ワイアット大将」

「それは残念。紅茶は産地により千変万化、まるで違う味が楽しめ、知れば知るほど奥が深い。その日の気分に合わせてるのは至上の喜びだ。それほど探求しがいがあるものなのに」

俺は紅茶の銘柄どころか何でも味音痴なのだが、一応そう言い繕った。

相手をしているワイアット大将は、副官格の将に何やら申し付ける。

「ではヌワラエリヤで頼むよ。熱すぎないようにね、ステファン・ヘボン君」

そもそもその発端は数日前に遡る。

俺はチベ三隻の陣容でズム・シテイを出発した。多すぎても少なす

ぎてもいけない、ちょうどいいところだ。俺の役割は戦闘ではなく、単なる見届け役に過ぎないからには。

そして行き先はもちろんサイド6の小惑星ペズンになるのだが、その途中で連邦艦隊と合流する。

今回、ペズンの叛乱を討伐する連邦艦隊は少数も少数、たった12隻とは！

ただし、何と連邦軍宇宙艦隊総司令官の職に就いたばかりのグリーン・ワイアット大将自らが率いていることには驚きだ。

今はもう俺はこのワイアット大将が第三次ルウム会戦で渡り合つた将だと知っている。

連邦のマゼランやサラミスと俺のチベが並んで航行していくではないか。

いや、何度見てもこの図式には違和感がありまくるが、本当に世の中は不思議にあふれている。

そんなことをのほほんと思っていたが、ペズンに到着する少し前、連邦側から突然相談を持ち掛けられたのだ。

「コンスコン大将と、作戦の最終打ち合わせが必要と思われる。是非旗艦マゼランにお越し願いたい」

急になんだろう。

まあ、確かにこちらは戦闘をしないとはいえ、逆に邪魔にならないように振舞うためには事前には相談が必要かもしれず、あえて断る理由はない。

俺はケリイ・レズナーとクスコ・アルという無難な護衛の人選をして三人でマゼランに赴いた。

さすがに艦橋は軍事機密なのだろうな。そこは見せられず直ぐに艦長室に案内された。これが現在までの経緯である。

今、目の前にいる連邦軍グリーン・ワイアット大将は物腰柔らかく、紳士的に対応してくれている。

ただし紅茶を飲んでもちつとも本題に入る兆しがない。

「確かに香りのいい紅茶、ワイアット大将、かなりの逸品と見受けました」

「おお、本来権限をこういうことに使うのはよろしくないが、私も紅茶だけはそこそこの物を用意させているので。お分かりですか」

「表現はなかなかできませんが、いいものなのでしよう。しかしワイアット大将、そろそろ打ち合わせに入りたいのですが。デイサイドの予想される動きや鎮圧の具体的手順などについて」

「そう急ぐ必要もありますまい。コンスコン大将、他の方々も先ずは気楽に」

…… いったい、何を考えているのか。

第三百三十五話 連邦艦の中で

気楽にと言われても俺は連邦艦の中、停戦中とはいえ緊張が解けるわけではない。

落ち着かないまませめてもの時間潰し、マゼランの艦長室の造りをちらちら見る。

ジオン艦とはだいぶ違い、明るく、全てがシンプルに造られている。空間自体もなかなか広い。

だが俺は棚にあったある物に目が釘付けになった。

白磁のティーセットだ！

他にアンティークなものは何もないためそれだけが目立つ。

それらの白磁は無重力下で使える形ではないため、艦ではただの飾りなんだろう。しかしわざわざここへ持ち込んでいるからには、ワイアット大将もけっこうな愛好家に違いない。

たぶん、いや確実にマ・クベ少将と話が合う。

骨董か近代かの違いはあれど似たようなものだ。この情報をマ・クベ少将にも伝えてやろうじゃないか。

しかしそうするとキシリア閣下にも情報が行くだろうな。とする
と、賄賂にならない範囲で、マ・クベ少将のコレクションからグリーン・ワイアット大将の手にいくつか寄贈されるものが出てくるだろう
か。キシリア閣下が言えばマ・クベ少将はそうせざるを得ない。

泣くだろうな。マ・クベ少将は。

いや逆か？

むしろコレクションを実用に供してもらい、布教ができたように思う
うかもしれないな。今でもあちこちに白磁を贈っていると聞いたこと
がある。

そういうマニア心というものは複雑で、分かり難いものらしい。

俺が本当にどうでもいいことを思っていると、グリーン・ワイアット
ト大将が聞いてくる。

「コンスコン大将はカップに興味がお有りかな。これはヘレンド磁

器、マイセンより意匠が細かくて優美なところがいい」

「はは、そうなのですか、さすがにお詳しい。しかし重ねて言いますがワイアット大将、高尚な話より、そろそろ作戦手順などについて話し合わねば」

「お気にせずとも、そう難しいことにはなりませんまい」

適当に相槌を打ち、気まずくならない範囲でもう一度促してもやはり話は進まない。

その時、突然艦長室に通信が入る！

「敵影確認！ と、突然反応が現れました！ デイサイドMS、接触まであと一分！ グリーン・ワイアット司令、至急艦橋にお越しを！」
「やれやれ、緊急事態では仕方がない。コンスコン大将、一緒に艦橋へ来てもらえるだろうか。戦闘中ではシャトルでそちらの艦へ戻ることも危険だ」

そしてわざとらしく微笑むではないか。

やられた！ これは狸だ！

俺は理解した。

こうなることを予期して、タイミングを見計らって俺をマゼランに呼んだのだ。

ワイアット大将は恐ろしいほど確かな読みを發揮し、デイサイドからの予想襲撃宙域を最初から考えていた。

俺をここに呼び、話をはぐらかして紅茶で時間を潰し、その上で緊急事態を理由に俺がチベに戻れないようにしたんだ。

だが、そこまでして俺をマゼランにとどめ、しかも艦橋に同行とはどういうことか意味がわからない。

急ぎグリーン・ワイアット大将と共に、俺はマゼランの艦橋に入ったのだが、その瞬間連邦軍服を着た艦橋要員たちがこちらを驚いたように見る。当たり前だ。ジオン軍服を着た人間が俺とケリイ、クスコ・アルと三人も連邦艦にいるのだから。

俺は逆にマゼラン艦橋が珍しくて見てしまう。

ジオン艦とはまるで違っている。

照明は明るく、白っぽい。艦長室を見て薄々思った通り、非常に簡素に造られている。

俺は白磁や紅茶に全く興味はないが艦マニアなんだ！

細かな違いにでもいちいち感心してしまう。

空間自体はさすがに連邦の主力戦艦、広く、シンプルさとも相まってチベはもとよりテイベの倍も広く感じる。

ただし、それでも我がジオンのグワジン級にはとうてい敵わない。グワジン級は広さもだが、豪華さにおいて一段や二段ではなく、別格ともいべき風格がある。

艦橋をしげしげ見る俺に対し、ワイアット大將は何も言わない。たぶん軍事技術の塊である艦橋を見せるのはあまり良くないことなのでコメントしないだろう。まあ、緊急事態ということで俺を入れた以上、うやむやにするつもりだろうということは分かる。

それはともかく、ここでワイアット大將はいきなり俺に質問を投げかけてきた。紅茶の話とは打って変わって現実的なことだ。

「コンスコン大將、デイサイドが蜂起した連邦急進派勢力であることはご存じだろう。では、なぜペズンを占拠したのかな」

「ん？ それは連邦勢力下ではなく、ジオン勢力下の場所であることが重要なのではないか。危険なところへ先鋒として出向いている形をとり、政治的アピールをしたいのだろう。急進派を統合する旗印になる。今のままでは勢力は小さく、呼びかけて仲間を増やしたいのだ。しかもジオンにとってペズンは今やただの辺境、直ちに大軍で奪回すべき場所ではないのも絶妙に好都合といえる」

「おお、さすがにコンスコン大將、政治的などころまで思慮が深い」
「……………」

大げさにうなずいてくれるが、ワイアット大將が心から同意している感じはしない。例えるなら教師に採点されているような気がする。

「コンスコン大將、私はそれに加えて、ペズンがサイド2に近いことも理由ではないかと」

「サイド2に近い…… サイド2！ ではまさか、あのコロニーレーザーを！」

「気付きましたか。そう、コロニーレーザーを復活させられれば、小勢力といえども盤上をひっくり返せる」

「ワイアット大将、では事態を甘く見ず、ここでしつかり鎮圧せねば！」

コロニーレーザーが近かったか！

なるほど、そういう可能性もある。俺も失念していた。

かつて連邦が造りかけたコロニーレーザーをなんとかジオンが叩いたが、それはレーザー発振部を破壊したのであって密閉型コロニーの構造体そのものを破壊したというわけではない。密かに修理されればとんでもないことになる。

これは決して小さな事件ではなかった。

ワイアット大将はさすがに読みが深いな。まったく敵として戦いたくはない将だ。

「それはそうとワイアット大将、現れたデイサイドのMSはどうなっただろうか？ そのために急いで艦橋へ来たのに」

「ああ、おそらくただの斥候でしょう。ほっておいても構いません。それに離脱しようとするエースパイロットを今から追わせても無駄かと」

そう言った通りになった。

俺とワイアット大将が艦橋に到着するころにはデイサイドMSはもう退き始めていたんだ。

「しかしコンスコン大将、デイサイドと名乗った者たちも面白い戦術を使う。突然MSが現れるなどとよく考えたものですね」

「MSが、突然……」

「もちろん戦術であって魔法ではない。凡将相手になら有効でも、コンスコン大将のような方を相手にそんな姑息なカラクリが通じるわ

けがない。全て見透されてしまうとは、彼らも実に運が悪い」

そう言いながら、ワイアット大將はにこやかにこちらを見てくる。慇懃だが目は笑っていない。

これまたいったい何だろう。

だが俺も少しずつ分かってきた。

単純なことだったんだ。

ワイアット大將が俺をマゼラン艦橋に置き、こうして戦術の会話をしたがっているのは、競い合いたいのだ。

つまり戦術能力について自分と俺と比べたい。

先の第三次ルウム会戦では消化不良なんだ。だから一種の意趣返しのようなことをする。

まあ、表向きはただの会話、競い合いとはいえ何の実害もない。そんなたわいもない勝負は目くじらを立てる必要もなく、俺としても少しは思うところを話してもいいだろうか。

「なるほどこれではデラミン准將の討伐が失敗し、艦隊が壊滅に追い込まれてしまったのも無理はない。MSがいきなり目の前に現れて攻撃してくれば何もできないうちにやられてしまうだろう。ワイアット大將、向こうがペズンを選んで占拠したのはこの戦術を使ったという理由もあつたというわけか」

「おお、コンスコン大將はよく見ておられる！」

「つまり、向こうが目をつけた戦術の鍵はペズンの射出装置だろうな」

小惑星ペズンは、元々サイド2とサイド6の建設に当たって資源採掘用に運ばれてきたものだ。サイド7におけるルナツーなどと同じ立ち位置である。

そこには小さいが射出装置という資源打ち出しの設備が置かれている。どうせ真空中の輸送、いちいち輸送艦を使って運ぶより効率的なためだ。ちょうど月のマス・ドライバーのようなものだが、それよりは格段に小さい。むろん小惑星の重力が極小なため、それほど大それたものは必要ないからである。

おそらくそれをデイサイドの連中はMSの打ち出しに利用したんだ。なかなか難儀な改造だったと思うが、とにかくそれをやり遂げたいに違いない。

「ワイアット大将、射出装置で十分な初速をつけて飛び出したデイサイドMSは、急減速をしながら艦隊に接近したのだ。普通とは全く逆になる。普通ならばMSは艦から発進し、加速をかけながら目標に接近してくるものだから。このやり方をされたら、艦からすればMSが突然現れたように感じてしまう。魔術というより奇術、トリックだな。当然、弾幕で撃ち落とそうにも勝手が違って有効でなくなる」

「さすがはコンスコン大将！ 簡単なヒントから見事に解き明かすとは！」

「そう大きさに言われても、ワイアット大将は初めからお分かりだったと察するが。この戦術は初速が大きい分だけ途中で目標の変更は難しい。だから、こちらの艦隊の正確な位置や数を知る必要があるため、一度は斥候を放ってくるはずというわけだ。おまけによほどのベランパイロットでなければ務まらない。いやはやそこまで見切っていたのであれば、最初から緊急事態ではないとも分かっていたのにお人が悪い」

グリーン・ワイアット大将は俺のせめてもの意趣返しに応えず、わずかな微笑みだけを残す。

そして艦隊指示の方を優先した。三十分後、本格的なデイサイドMSの襲来をもって戦闘が始まる。

「全艦戦闘配備！ 艦隊形をすみやかに変更する。コンスコン大将の指示通り、艦隊はペズンに対して直角方向に並ぶのだ。そうすればペズンから見たら横一線になり、重なるところがなく、的を絞らせずに済む。その上で各艦はペズンからの直線経路に対空砲の照準を合わせ、その線上を高速でやってくるデイサイドMSを迎撃すればいい。皆、名高いジオンのコンスコン大将に連邦将兵として無様な姿を見せないようにお願いする」

「え？ ワイアット大将、何も言っていないが……」

第三百三十六話 徒花

マゼラン艦橋にワイアット大将の作戦指令が続けざまに飛ぶ。

「MSは全て出て艦の影に待機、デイサイドMSが減速し攻撃態勢に入るところまで待ってから仕掛ける。デイサイドMSはジム・クウエルかまたは試作高性能機、しかもチューンナップされたエース機揃いだ。しかし、数は少数、先手を取って囲めばなんとかなる。MS戦力を初めに誘い出し、そうやって退けた後、艦隊は急進してペズンを艦砲で叩く。デイサイドの戦力はMSが主であり他は大したものではない。そこで随時降伏を促しながら無力化を進める。なるほど見事な作戦、感服しましたコンスコン大将」

「え、そ、それは……」

ワイアット大将が一気に艦隊へ出した指示は、実は俺が考えた対処とほとんど同じものだった。俺でもやっぱりそうする。

その意味で俺とワイアット大将は戦術家として同じく高みにあるということだ。

いや、討伐艦隊が12隻というのはそもそも過不足ない数であり、最初からこうなることを見切っていたのであれば、悔しいが戦術能力は俺より上かもしれない。

しかしこんな当てこすりのように言ってくるとは！

まるで子供の嫌味のようなではないか。とても子供っぽくは見えないワイアット大将だがそんなことをするのか。

そして始まった戦いは描いた青写真のように進む。

正直、デイサイドは個々の技量は確かであり、戦術にも優れていた。しかしこの場合は相手が悪いとしか言いようがない。討伐側には俺やグリーン・ワイアット大将がいるのだから、あらゆる面で及ばず、デイサイドに勝機は初めから存在しないも同然だ。

デイサイドMSはこちらの艦隊形に合わせてやむなく分散し、一艦につき三機ほどに分かれてやって来た。合計は予想とほぼ同じ四十

機足らず、出し惜しみはしなかったらしい。そこに対空砲火を浴びせて半分は叩き落とす。向こうは射出装置による高速のため一直線に来るしかなく、最初からそうと分かっていたら速くとも墜とせる。

残りは諦めて撤退することはなかった。

士気が衰える様子はなく、あくまで艦に取り付こうと粘る。しかしそこへ一斉にこちらのMSたちが横合いから仕掛ける。

さすがにデイサイドMSは一騎当千、観察する俺の目から見てもEース級の腕前を持つパイロットが揃っているようだ。

こちらのMSも少なくない犠牲を出し、艦も早いうちに三隻は爆散に追い込まれた。

だがそこまでだ。

操縦技量は優れていても、数には負け、対空弾幕に押し込まれる。

一機、また一機とデイサイドMSが消えていく。

終盤はおそらくデイサイド隊長機を守ろうとしたのだろう。それらは多数を相手に一步も退かず奮戦し、動ける限り動き、前向きに果てていく壮絶な戦いをしていった。

最後に二機だけ残ったがおそらくこれがデイサイドの隊長機と副隊長機だろうか。

そこに至つてようやくペズンへ撤退していった。

次は艦隊によるペズン直接攻撃になる。早いところデイサイド艦艇を叩き、次にペズン司令部付近を艦砲であらかた吹き飛ばす。このあたりの手腕もワイアット大將は確かであり、澱みなく進めていくのはさすがだ。

区画確保が進む度、降伏勧告をたびたび出しているのだが全て無視される。やむなくMSを再び出し、力で制圧にかかるしかない。

最終局面、またしてもデイサイドMSが数機出てきて尋常ならざる奮戦をしてきたが、やがて片付けられ、最後に一機を残すばかりになる。

ここでそのMSから唐突に通信が入ってきたではないか。

「デイサイド隊長、ブレイブ・コツドだ。討伐にきたグリーン・ワイアット閣下、聞きしに勝る力量、心から称賛する。同じ連邦軍としても、最後の戦いは華となり、閣下のような将と戦えたのは武人冥利に尽きる」

「では早いところ投降してくれたまえブレイブ・コツド君。これ以上は連邦軍にとって、本当に何の意味もない」

「投降はできない。連邦の大義である単一国家を信じる我らこそ真の連邦軍であり、連邦を護る最後の盾である。投降というなら他が我らに投降すべきだろう。大義を捨て、ジオンなどという分離主義者どもに話を合わせる連邦軍などもはや形骸だ」

「……君に信念があるのは認めよう。だが現実、連邦軍の規律を揺るがし、連邦の立場を弱めているのはデイサイドの方ではないか」「ワイアット閣下、議論はしない。我らの蜂起は断じて無駄ではなく、掲げる大義の正しさは、必ずや歴史が証明してくれる。通信をしたのは戦闘に参加していない後方要員を助けてもらうためだ。トツシユ副隊長がとりまとめているので救助を願いたい」

「自分だけは大義のために投降しないというわけか。それもまた無駄だ。今からでも翻意してはくれないかな、ブレイブ君」

「閣下の温情には感謝するがそれこそ無駄だ。それと通信をした目的はもう一つ、奪取した『箱』は処分させた。そちらにはジオン艦もいるのでこれを聞いているだろう。宇宙世紀の初めに書かれたたわいもない妄想に過ぎず、下らんものだった。今に至っては必要ない」

話はそこまでだった。

隊長機は飛び上がり、こちらのMSたちの頭上を越え、艦の方へ真っすぐ向かってきたのだ。

その手にビームサーベルだけを持つ。

ビームライフルではない。そこそこの距離がある以上、ビームサーベルには何の攻撃力もなく、つまり儀式以上のものではない。

それを知るとグリーン・ワイアットは小声で命じる。

「わざわざビームライフルを捨てたか…… 武人として全うすることだけ考えているのなら、こちらも礼節をもって遇さねばならない。残念だ。本当に」

艦からメガ粒子砲を撃ち放つ。

一度二度は外れる。しかし、三度目は隊長機を真っ向から貫いた。これは戦いではなく、作業でもない。哀惜を込めた介錯である。

ビームサーベルをかつちり正眼に構え、隊長機は武人を体現する姿を崩さないまま光となって消えた。

「総員、敬礼せよ！ 連邦の勇士の最期を決して軽んずることなく、忘れることのないように」

デイサイドの動乱はこうして終結した。

最後に何とも言えない後味を残して。

箱のことはどうでもいい。俺は事前にキシリア閣下から箱の保全是必須ではないと言われていたからだ。

考えるのは信念に殉じた男たちのことである。

俺がそう思っているくらいだからワイアット大将はなおさらそうなのではないか。今回叛乱を起こし、全滅に近い最期を遂げたのはワイアット大将にとって同じ連邦軍である以上、心情が穏やかなはずがない。

ただし俺に言ってきたのはそんなことではなく、もつと深いことだった。

「コンスコン大将、そういえば言い忘れていた。このデイサイドの叛乱は決して実行犯だけの問題ではなく、裏で糸を引いていた人物がいる。連邦軍後方参謀のメジナウム・グツゲンハイム少将だ。連邦でもガチガチのアースノイド至上主義者だね。ジオンとの停戦など絶対に認めないほどの」

「アースノイド至上主義者、やはりいたのか……」

「それともう一人、政府上層内にとどめるべき『箱』の情報を流したり、物資に融通をきかせたりしたのは連邦政府の若手官僚、アデナウ

アー・パラヤだ。そうそう、ジオンのキシリア殿はアデナウアーの奴に停戦を方便にするというようなことを吹き込んでくれたらしいね。奴と話して気付いたが憎らしいほど狡猾な手だ。さすがにジオンのキシリア殿としかいいようがない。もつとも、奴の方では未だにジオンの手の平で踊らされたと認めたくないようだが」

「なるほど、同じくアースノイド至上主義の官僚が存在していたとは根が深い。しかし、奴などという言い方は、よく知っている人物のようだが」

ここで初めてグリーン・ワイアット大將は影のある表情を見せたのだ。

そこには深い精神的疲労がある。

「おお、コンスコン大將。私とアデナウアー・パラヤとは親友なのだよ。私は武官、奴は文官の道を選んだが、元は同期の仲間だ。今回の事件で既にメジナム少將とアデナウアーは逮捕され、おそらく極刑になるだろう。私が嘆願したところで全く無駄、それならばむしろ私はアデナウアーの生まれればかりの子供の後見人になろうと思っている。その子の成長を父親代わりに見守ることが、事件を事前に止められなかったせめてもの罪滅ぼしだと思うからだ」

「それは……」

グリーン・ワイアット大將は人並み外れた将だが、やはり人間だ。

むしろ人情家の側面があった。紳士然としているがそれは感情の強弱とは関係ない。

「コンスコン大將、大変申し訳なかったが、私がたびたび当てこすりのようなことを言ったのも八つ当たりのようなものだ。冷静ではいられなかったからね。今回蜂起した急進派は人類や連邦のことを考えて行動した立派な武人たちだったし、アデナウアーだって同じだ。宇宙の塵に返すのは本当に惜しい者たちだった」

「……ワイアット大將、この立場で言うのもなんだが、心からお悔やみ申し上げる。そして当てこすりの件は気にしていない」

「感謝する、コンスコン大將。こうして語り合えたことをせめてもの事件の収穫としたい。そして未来へつなげることが散った者たちへ

の供養になると信じよう」

俺はチベに戻り、ペズンに赴いて後始末をつけていく。しばらくかけて基地機能を復旧させ、その後やつとズム・シティへ帰る。

この間俺は色々と考えてることがあった。

連邦とジオンの溝は深い。

そして信念ともいえるまで相手に対し敵愾心を深めた人間たちがいる。どちらの側にも。

デイサイドは単一国家の正義を心から信じていた。

その裏にはアースノイド至上主義者たちがいた。それを差別主義の悪と断じることが簡単だが、現実的にそういう人間は多いのだ。

一方でジオンでもエンツォ大佐のようにあくまでジオンが支配する人類社会を目指す人間がいる。それはあえていえばジオンだけの正義だが、信念であることは間違いなく、奉じる者たちは決して曲げようとはしない。

どうすればアースノイドとスペースノイドが宥和する道が拓けるのか。

そしてズム・シティでキシリア閣下とドズル閣下を前にして、事件の顛末を報告すると同時に俺の考える和平への方策を述べたのだ。

「な、何！ コンスコン、正気か！ 冗談にしても突飛過ぎるぞ！」

キシリア閣下がそれほど驚くとは、しかも政治の話で驚きを隠せないとは俺も見ることがない。ただしそれは決して楽しいことではなく、理解してもらおうためのハードルが高いことを意味する。

第三百三十七話 驚くべき提案

俺はズム・シテイに着くと、ドズル閣下とキシリア閣下にペズンでの顛末について報告をする。

もちろん討伐に来たグリーン・ワイアット大将率いる連邦艦隊が叛乱部隊の奇策を逆手にとって打ち破ったこと、見事な手腕で無力化していたことなどについてありのままにだ。

「…… というわけで、連邦のグリーン・ワイアット大将の戦術能力によって危なげなく事は静まりました」

「いやそれはともかくだ。コンスコン、連邦艦に乗り込んで検分とは、いつもながら度肝を抜かれるな！ 貴様は凄いな」

「あ、ドズル閣下、乗り込んだわけではありません。招かれてそのままいてしまったというか…… やったことは極上の紅茶を飲んだだけで、むしろ失態でしょう。とてつもなく間抜けな」

ドズル閣下はやっぱりにそこにきたか。

俺は全く正直に返したのだが、ドズル閣下はうんうんうなずいていく。

まさか俺が海賊のように連邦艦に突入した姿を思い浮かべているのではないだろうな。無理がありすぎるだろう！

ドズル閣下がそういうたわいもない感想しか言わないのは、横にいるキシリア閣下に実務を任せているからだ。

さっそくキシリア閣下が言ってくる。

「箱は失われたようだが、それはどうでもいい。敢えていえばそのデイサイドの言い分からすると伝説は本当だったと推測できるが…… まあ済んだことだ。私としてはあればあったで使いようもあるがそれほど拘るべきことでもない」

「任務の一つを達成できず申し訳ありません、キシリア閣下」

「それよりコンスコン、こちらから先に言っておくことがある。お前も気にしているだろうアクシズについての情勢について、やはり衝突

するのは避けられない。さすがにシヤアは動きも速く、もうアクシズに近付いているのだが、エンツオ大佐はどうしても降伏に応じてこないのだ」

「やはり、そうなりますか…… エンツオ大佐も信じる正義を奉じ、武人として立つたからには」

「そう、残念だがジオン同士の戦闘になってしまふ。ただし救いなのはエンツオ大佐もお前が言う通り武人、アクシズの民間区画や技術区画には手を出さず、未だエネルギーや食糧の供給もきちんとしているらしい。ならば戦いでシヤアに追い詰められてもアクシズの自爆などは考えないだろう。紆余曲折はあれどアクシズはこちらに取り戻せる」

「…… キシリア閣下、あえて言うのですが、それは表面に出ただけであって根は深いのでは」

「ん？ どうしたコンスコン。確かにこうした事件は表面に見えるものだけで、予備軍である根は深いものだ。更にいえば、それだけでも済まない。土壌としての意識は至る所にあるだろう」

「やはりキシリア閣下は分かっているだろうと思っていました」

「戦争というものは負の遺産が大きすぎるものだからな。そして人の意識に根付いた不信感や敵愾心はそうそう消えるものではない。おまけに誤った正義感などはどうして消せるだろう。しかしコンスコン、不思議だな。なぜお前がそんなことを言う？」

「ここで俺は息を吸い、ようやく考えを言葉に出す。ここで話すのだ。」

「キシリア閣下、ジオンと連邦との停戦を終戦にもっていくにはあまりに道が遠いと存じます。普通の交渉ではなかなか進まず、その前に再戦になったら目も当てられません。そこで大胆に、思い切った歩み寄りによって宥和を成し遂げてはいかがでしょうか」

「…… それは、交渉の進展によっては相手の驚くような譲歩が必要なこともある。そういう演出ももちろん選択肢として考えないでは

ないが、実際はなかなか難しいのだぞ。政治の駆け引きというのも薄氷を踏むようなものだ」

「大胆にというのは本当に大胆に歩み寄るのです」

「何を言いたいのかわからんが、ではどこまでのことを指すのだ、コンスコン」

キシリア閣下は俺の差し出がましい言葉を咎めず、教え諭すように言ってくる。ここはそこに甘えて言つてのけるしかない。

「キシリア閣下、そしてドズル閣下、お聞き下さい。あえて申し上げます。ジオンは独立せず、連邦の一員にとどまるとすれば」

一瞬の間がある。

解釈をしようとしてできないのかもしれない。言葉の爆弾だ。

先ずはドズル閣下が反応した。

「何だと、聞き間違いか!? ジオンが独立しないとはどういうことだ。コンスコン、何も考えなしにそんなことを言う貴様でないことはよくよく知っているが……だがそれにしても訳がわからん。我らはジオン独立のために戦ったのではないか。ここまで苦労を続けて。自主独立という大義を捨てては散っていった英霊に対して何と答えよう」

当然の反応だ。

もちろんジオン独立のために俺もドズル閣下も、たくさんの者が長く苦しい戦いを戦ってきたのだ。そしてギレン総統やエギーユ・デラーズのように志半ばにして散った者たちはあまりに多い。

次にキシリア閣下も言う。

「何！ コンスコン、正気か！ 冗談にしても突飛過ぎるぞ！ ……ドズルの兄者と同じセリフを言ってしまうのはなんとなく悔しいが、それでも言わざるをえん。独立しないと断じて交渉の歩み寄りの範囲などではない。交渉でもなんでもない。これでは終戦ではなく敗戦になり、ドズルの兄者の言った通りだ」

「ドズル閣下、キシリア閣下、落ち着いてお聞き下さい。我らの悲願は長いことジオンの独立ですが、本当にそれが大義でしょうか。違うの

ではないでしょうか。連邦の不当な圧力、支配、差別主義を排するのは当然、スペースノイドの誇りを輝かせるのも当然、しかしそれは国を分けるのと同じでしょうか」

「……それは、詭弁にも聞こえる。サイド3がジオンとして独立せねばいつまでも連邦の支配が続く。おまけに連邦は腐っているし、スペースノイドに対する差別主義は横行、しかも改善どころか悪い方へ向かっている。それが分かっているからこそサイド3は独立する。だから大義だ。これのどこがおかしい」

「キシリア閣下、これまでの戦いは無駄ではなく、二度と連邦が搾取できないように条件を整えられるでしょう。経済も、自治も、様々な権利も、名を捨てることによって実を取れるのです。そうなれば連邦に参加する一つの自治領の立場でも、決して連邦の支配下というわけはありません」

「名を捨てて実、難しいことを言う。こちらから逆に聞くがコンスコン、どうしてジオンの独立をそこまで拒む。今の情勢ならばヘリウム3を餌にして少なくとも期限付きの独立は可能なところまで来ているのだぞ。それぐらいの交渉は私がしてみせる」

「いつまでもヘリウム3をダシには使えないでしょう。民生用も考えれば。それにジオンが独立すると連邦急進派は収まりがつかず、下手をすれば連邦が無秩序になりえます。腐っついても形があるから話ができるわけで、形が崩れれば連邦軍も暴走を始め、いずれ再戦は不可避です」

「だからといって、それでは話が逆ではないか」

「正直に言えば、国家が立ち並ぶのを許容し戦争がなくなるほど人類の精神は成熟しておらず、そもそも独立は時期尚早ではないかと考えています。本当に差別と偏見がなくなった時、認め合える時代が来るかもしれません。未来の話ですが」

「お前がそこまで言うとはな……しかしそれでもやはりジオンの負けになる。お前は連邦のゴタゴタを言っているが、ジオン内部の急進派も黙ってはいない。エンツォ大佐が100人も出てくるぞ。いや、私ですら認められず、連邦に屈するのかと言いたくなる！」

俺はキシリア閣下との会話の中でそこまで説明した。ドズル閣下はじっと押し黙っている。言いたいことはキシリア閣下が言い切っているのだろう。

そしてキシリア閣下はやはり大した方、理性的に俺の話を聞いてくれている。だがそれでも、ジオン独立を収めることは全く考えにも入っていない。やはりキシリア閣下のような方といえども戦争の勝ち負けにはこだわりがあるんだ。

更に俺は説明を続ける。実はここからがジオンと連邦の宥和のキモなんだ。

「むろん、ジオンは敗戦ではありません。形式上連邦の一員にとどまるといふこれ以上ない譲歩をするからには、連邦にもそれ相応のことをしてもらいます。いやそのための独立取り下げなのですから」

「いったい、何を言いたい。連邦に何を求める」

「連邦を宇宙に上げるのです！」

「な、何！ 連邦の方を宇宙にだと!!」

「連邦がスペースノイドを理解し、それによって溝を埋めるにはその方法しかありません。地球から見ているだけでは宇宙はあまりに遠く、その断絶によっていつまでたっても意識の上で対立は続くでしょう。その結果勝つか負けるか、支配するかされるかの緊張が解けることはないのです」

「…………… 無茶なことを言う……………」

「いや連邦市民を宇宙に送るわけではありません。三十億人もの人間を宇宙に送るのはむろん現実的ではないし、その必要もないでしょう。何といても地球は広大で、人類のふるさとであり、地球でしかなしえないことも多いのです。先の地球作戦で地球の大きさをはつきり感じました」

「ではどうするのだろうか」

「宇宙へ送るのは連邦議会、すなわち上層部です。現時点での宇宙に

おける最大都市フォン・ブラウンなどであれば連邦議会を移すのも可能、それで問題のほとんどは解決できます」

「それでも大変なことだぞ……」

「宇宙に連邦政府があればいずれスペースノイドへの偏見は改まります。それに復興が進んだ将来、必ずや宇宙人口は地球を上回り、いずれかの時点で移転が必要なのは自明です。少しでも考える能力のある官僚が連邦にいれば認めたくはなくとも理解はするはず。おまけにその提案をあくまで連邦政府が拒みいつまでも終戦をしないのは、連邦市民の支持を失う可能性が高いとも思われます」

「コンスコン、まさにとんでもない方策だな。連邦議会を月面になど、簡単に行く話だとゆめゆめ思うな。だがしかし全くの荒唐無稽でもない。一応検討はするが、期待せずに待て」

キシリア閣下は誠実な人間だ。そう言うからには本当に検討してくれる。俺は言うべきことは言ったのだから、もうそれ以上することはない。

それからしばらくして、ジオンが独立を取り下げ、公国ではなく自治領になることと、その代わりに連邦議会を月に移転して人類社会を運営すること、つまり俺がキシリア閣下に言った和平提案のことが一般のニュースとして流れている。

これは、おそらくキシリア閣下がわざと情報をリークしたのだ。

連邦市民や、連邦を構成する各行政体からの突き上げを期待してのことなんだろう。

それは分かる。

しかし俺が驚いたことに、このジオンからの提案が俺の発案だということまで漏れている、いやわざと漏らしているじゃないか！

連邦議会も官僚も紛糾に紛糾が続いている。

ジオンからの提案を巡り、それをはなから一蹴する人間もいれば、現実的に考える人間もいる。それぞれの立場の人間がそれぞれの論

を振りかざす。

単一国家地球連邦を守る大義からすれば提案は渡りに船ではあるのだが、安全で住み慣れたジャブローから月への移転など議員のほとんどにとっては拒否したいところだ。拒絶ありきの考えから脱却できない議員は多い。そうでない議員は少数しかいないが、しかしゼロというわけではない。

とにかく連邦も一枚岩ではなく、まとまりがつかない。

そんな折、何と連邦内部からジオンの提案を強力に支持する勢力が現れたのだ！

それは南洋同盟である。

南洋同盟とは南アジア一帯を占める政治連合のことであり、そこから今では中央アジアや西アジア方面、アフリカの一部にまで勢力を急伸させている。

ジオンの進軍がヨーロッパからヒマラヤ山脈で止まったため、比較的戦争の被害が少なかったせいもあり、連邦内での人口は実に三割弱、工業生産なら二割を占めている重要なグループである。

そして驚いたことにその南洋同盟の実質指導者の名はレヴァン・フウだ！

かつて北米オーガスタ基地でNT実験体にされていた者である。

もちろん、地球降下作戦でオーガスタ基地を襲撃し、レヴァン・フウをそこから救ったのは俺だ。

レヴァン・フウはその後、本当の僧正として宗教指導者となり、この一年で南洋同盟に少なくない影響力を持つまでになっている。そのレヴァン・フウがジオンの言う連邦議会移転と終戦を支持したんだ。

これは大きい。

「ジオンからの提案は素晴らしいものです。平和への妙薬ではありませんか。それがあのコンスコン大将からの提案であればなおさら。私はコンスコン閣下から受けた借りは返すつもりです、実現へ向け協力は惜しみません」

第三百三十八話 俺の行き先

連邦内部で俺の提案を支持する者は他にもいる。

今や連邦政府にも市民にも少なからず発言力のある連邦軍部だが、その中にもこの案に同調する者が増えている。

本来なら、軍部といえばジオンと直接戦っているのだから、最も敵愾心を持ち急進派の牙城であるべきところである。しかし、連邦軍部でも理性的に和平を考える人間がいたのだ。

最右翼がグリーン・ワイアット大将である。

グリーン・ワイアットは、ディサイド討伐でも名を上げ、元から実力も評判もあつたのだが、知将としての評価を更に確固たるものにした。

面白いのは出身がヨーロッパ閥なのにもかかわらず北米閥からの評判も悪くない。

それは多くの戦い、特に第三次ルウム会戦で見せた戦術の冴えが、北米閥将兵にも驚きをもって受け入れられたからである。そもそも、単純に激戦勇戦の好きな北米閥には多くの犠牲を出しても勝利を目指して粘りに粘った姿が好意的に捉えられ、それまでの皮肉屋、弱腰とまでいわれた評判をひっくり返している。

その意味で第三次ルウム会戦は決して無駄ではなかったのだ。

加えてグリーン・ワイアットはガディ・キンゼー、エイパー・シナプスらの悲願を成し遂げた。

すなわち故エルラン中將が市民を戦禍から守るために行動したという証拠を見つける手伝いをしたのである。

驚くべきことにそれは全く事実だった。

そのため、エルラン中將が連邦上層部に隠れてジオンのマ・クベと裏取引をしたという罪状は変わらないが、動機はあくまでも私利私欲ではなく市民のためであり、ガディ・キンゼーとエイパー・シナプスが思つた通り高潔な人間だったと判明した。

今、その名誉は回復されたのだ。

これを通し、グリーン・ワイアットは更にヨーロッパ閥からの支持を強めることになる。

結果、グリーン・ワイアットは大将という階級を超えて連邦軍史上でも数えるほどしか存在せずもちろん現在は存在しない元帥への昇格が見えてきている。

そんなグリーン・ワイアットがジオン、すなわちコンスコンの提案を支持したのだ。

「コンスコン大将はジオン最高の勇将、かつ武人の心を持つ。それは戦った連邦軍なら誰しも知るところだろう」

「体が引き締まっていけないからといって武人でないことはありません。ワイアット閣下」

「はは、君も言うね、ステファン・ヘボン君。そんなコンスコン大将の提案なら私心があるはずはない。我々連邦も曇りのない目で、その提案が人類社会にとってどれほど優れているか考えようじゃないか。私個人としてはこれ以上なく再戦を防ぐ道筋だと思うがね」

将官級ではなくとも、支持する声上がる。

「ジオンは信用できなくとも、コンスコンの大将なら信用する。俺もよくわからんが、それが一番いいんだろう。ライラもそう思うか」

「ああ、その通り。バニング大尉もたまにはいい判断をする」

「たまには、か。しかしライラ、酒場にいるんだからサウスと呼んでくれていいんだぜ」

「また調子に乗って…… 呼べるか、そんなもの。まだ妻になった覚えはない」

「今から練習しとけって」

「しつこい！ では今日もまた飲み比べだ。負けたらそう呼んでやってもいいぞ」

時代は確かに動き始めた。

まだ決まったわけではないが、俺の提案を元に終戦へ動いている。

そんな折、俺はドズル閣下とキシリア閣下に呼び出された。

いったい何だろう。

細かい交渉の話だろうか。あるいはまさか叛乱などの困った事態が起きたのだろうか。

「おお、来たかコンスコン。早速だが貴様に話がある」

「何でしょう、ドズル閣下」

「ええとその、何というか…… ちよつとした異動の話だ。いやなに、ちよつとしたことだぞ。悪く思うな」

「異動？ ちよつとした……」

これは珍しい。ドズル閣下が言い澱んでいるではないか。心なしか汗ばんでいるようにも見える。

いつもは舌足らずなほどに結論だけ言うドズル閣下が。

どういうことだろう、何か嫌な予感がする。俺の異動の話だとすると、前線から例えば後方や士官学校へ行くのか、あるいは他のコロニーへ軍事外交官になって行くとか、そんな話かもしれない。いやそれ以上ののだろうか。

「ひよつとすると、サイド3の中でもなく、どこかに行くという話でしょうか」

「そ、そうだ。確かにそれに間違いないぞ、コンスコン」

「それならば覚悟していましたし、理由もなんとなく分かります。ドズル閣下」

なるほど、やはりそうか。俺はサイド3の中核にとどまることはなさそうだ。

まあ異動自体はあり得る、というか合理的な判断とも思える。

俺は戦争の当事者、連邦将兵にもジオン将兵にも多くの戦死者を出した張本人だ。数多くの戦いの中で恨みを買ってしまったというだろう。戦争を終わらせて和平をするにはそういう人物が障害になることもあり、表舞台にいない方がいいのかもしれない。

それにしてもドズル閣下の焦りようは尋常ではないが……

「まったく、ドズルの兄者に任せても話が進まん。私から話そう。コンスコン、お前には異動してもらいたい。理由はたぶんお前が想像

するものに近い」

「キシリア閣下、戦争で表に出過ぎた者は、いったん引つ込むべきでしょう」

「ざっくり言えばその通りだ。お前は巨大な旗になってしまった。今回の和平に当たって、私はコンスコン大将というものが持つ名声と信頼を利用して話を進めさせてもらった。そうでなければ不可能だからな。お前は自分が考える以上に名前に威力がある。ジオンにも連邦にもお前の名を知らぬ者はなく、その信用は絶大だ。まあ自分はその威力が本当には分かっているのだから」

「……それは……ともあれ異動のことなら分かりましたキシリア閣下。どこへなりと」

「二つ勘違いしてほしくないのだが、お前を信用しないとか、邪魔で遠ざけるのではないぞ。その逆だ！ こちらも痛いのだ。お前にはいつまでも支えて欲しいと思っている。私もドズルの兄者も同じ、いやドズルの兄者に至っては言葉にも詰まるほどの気持ちらしい」

「そんな、こちらこそ過分なお言葉、感謝します」

「それにな、正直に言えば政治的なことというより、これはお前のためと考えたことなのだ。どのみち政治的変動期には必ず反動分子が出る。そしてテロになる。過去、どんなに勢力を誇る国でも、大国でも、テロは止められなかった。お前は今回の宥和の立役者、一種の象徴としてジオン内部の急進派からも連邦急進派からも狙われる。済まんがお前の名を利用した時点でその標的になりえる。むろん狙われるのはお前が悪いのではなく、テロというものは得てしてそれ自体が目標になることがあるからな。いわゆる『討ち取って名を上げる』というやつだ」

「今さらこの身を討ち取って何になるかとは思いますが、八つ当たりとしてはあり得るかもしれません。ということは他のサイドでも月でもないということでしょうか。例えばアクシズのようなところに」
それは仕方がない。

多少の閑職で済めばいいと思っていたが、アクシズくらいなら行く。

アクシズという人類社会からすれば辺境も辺境、しかし住めば都だ。誰かが行かねばならないのなら、むしろ俺が行ってサイド3のために鉱石を掘りまくってやろうじゃないか。

「アクシズとは…… 気を回し過ぎだなコンスコン、いや実はそこではない。アクシズにはシャアを留めようと思っている。シャアもまたお前と同じように戦争の象徴だからな。実のところ最初からアクシズに置くつもりだったのでエンツオ大佐の叛乱討伐に行かせたのだ」

「そういう意図があったとは、さすがにキシリア閣下の深慮遠謀……」
「どのみちアクシズはもつと拡充し、重力ブロックも備え、食糧生産も行い、一大拠点にする。それは木星との中間交易の機能を持たせるためだ。今木星からの輸送船が地球圏まで来なくてはならないが、それでは遠すぎて乗組員に負担を強いる。仮に小惑星帯のアクシズをヘリウム3積み下ろしの中継地点にすればよほど負担は減るだろう。もちろん木星との位置関係を考えれば小惑星帯にアクシズ一カ所では足りるはずはなく、もう一つ拠点を設け、そこにはマ・クベを置くつもりだ。マ・クベも戦争ではちよつと因縁が残ったからな」

「なるほど…… 確かにマ・クベ少将も地球表面では連邦相手にやり過ぎたかもしれませんが。それに小惑星帯開発となれば、並々ならぬ才覚を発揮するのは疑いないところです。これからの発展のために素晴らしい構想でしょう」

シャア少将とマ・クベ少将を小惑星帯に置くのか。それは中々いい案だと俺は思う。マ・クベ少将なら持ち前の技術的センスを発揮し、気ままに技術開発をしながら自分の思い通りの基地を作りそうだ。

しかし…… しかしそれでは俺はどうなるんだ？

アクシズではないとすると、どこに行くというのだろう。キシリア閣下の構想の中に俺はどう入っているのか。

「気になるか。コンスコン、実はお前の行き先は、いや私でも言いにく

い。ドズルの兄者ならとても言えないだろうな」

「……………」

「いやここで言わないで何とする。コンスコン、お前には土星に行つてもらいたい」

「え、ど、土星!! そう聞こえたんですが、本当ですか! 土星!?!」

「本当に、土星だ」

「いやしかし、それはいったい……………」

俺は混乱する! これで混乱しない人間がいたら見てみたい。

土星とは、人類の拠点は未だ何もなく、想定外にも程があるぞ。

「コンスコン、驚くのも無理はないが別にただの思い付きではない。非常に合理的な理由があるのだ。現在ヘリウム3は木星大気から得ているが、木星は巨大過ぎて重力が地球の数倍ある。そこからヘリウム3を採取するのは骨の折れることでもあるし、下手にそれに捉まれば危険だ」

「なるほど、土星なら重力は地球と同じ程度しかないので楽にヘリウム3を」

「それだけではなく、土星の持つ輪は水資源や鉱物資源の宝庫だ。エネルギー資源と資材の両方が容易く得られるのは建設になんとも都合がいい。これが木星ならば、衛星は多いのだがどれもこれも地殻変動が激しくてその上に基地は造れず、案外厄介なのだ。結果的に木星での拠点造りは未だ進まず開拓民は厳しい生活を強いられていると聞く」

「た、確かにそういう意味では木星ではなく土星が理想的開発地と言えるかもしれません。ただし、距離が余りに遠く……………」

俺は知識を引っ張り出す。地球から土星までの距離は、木星に行くより二倍近くはあつたはずだ。それほど遠い。

「キシリア閣下、今地球から木星までの航路は三年弱ですが、土星となれば五年六年の話になるでしょうか」

「そう思うか。実はスイングバイ航路が複雑になる関係上、言いにくいだが八年の距離になる」

「は、八年!?!」

「ただし言い訳をするようだが住居に関しては心配するな。お前を艦に乗せてそのまま放り出し、基地を造れと言うわけではない。コロニー一つを丸ごと土星へ送り出すつもりだ」

「何とコロニーそのもので航路を!! し、しかしキシリア閣下、コロニー一つをそのために犠牲に……」

「別に犠牲など出さない。既におあつらえ向きのものがあるではないか」

「え、おあつらえ向きのものとは?」

「お前でも発想が浮かばないか。これは愉快だ。コンスコン、ソーラ・レイを忘れているだろう。あれをもう一度居住用に戻して使えばいい」

「ソーラ・レイ!?!」

「元はれっきとした居住用のコロニーなのだから難しい話ではない。それに土星圏では太陽光も本を読める程度しかなく、そのまま使った植物を育てられない以上、密閉型コロニーが適当になる。おまけに既にソーラ・レイはエンジン付きなのだからそれを強化するだけで済む。どのみち巨大兵器は和平に伴いそのままにはおけず、廃棄するならそれがちようどいいくらいだ」

第三百三十九話 隠された脅威

確かに発想は突飛でも合理性という意味なら土星開発も充分に合理性がある。しかもソーラ・レイをこのために送るなら、今が改造を始めるのにいいタイミングだ。

さすがにキシリア閣下の考えと唸るしかない。

しかも話には続きがあつた。俺の土星行きには隠された目的があつたのだ。

「コンスコン、お前を土星にやるのはもう一つ理由がある。人類がエネルギー資源を全て木星に頼っている現状は少しばかり歪んでいるとは思わないか。それは木星の政治にも影響し、思わぬ事態を招くかもしれない」

「そういうことでしたら木星開発は今、クラックス・ドウガチという有能なリーダーがまとめ上げ、苦闘しつつも前進していると聞いていますか」

「そうだ。木星圏という水も酸素もない過酷な環境のためか、今のところはドウガチの独裁が続き、それでうまくいっているようだが……

先のこととは分からん。ともあれ土星からのヘリウム3調達はバランス上必要なことなのだ。そして木星が何かしでかした際にはその抑止力となれ。つまりお前には木星の背後になる位置から睨みを利かせる役を頼みたいのだ。もちろん、困った事態にならなければ木星圏をいい友人として協力し、共に発展すればいい。そういった判断を正しく行える者はお前しかいないと思っっているのだぞ」

「…… 分かりましたキシリア閣下。土星に植民後、ヘリウム3の供給と、木星圏の監視をしていきましょう」

確かにその意味なら俺が土星に行く価値がある。余りに遠い旅路になるが必要な事業なのだ。

しかし、一つ重大な現実的問題を口にせざるを得ない。

「コロニーならば移動途中も何ら不自由ないでしょうが、しかし逆に

言うど運営するにもけつこうな人員が必要かと。艦なら数百人の単位で済んでも、コロニーとなれば数万人規模の人間が必要になるでしょう。辞令で動かせる軍人ならともかく、民間人も多数必要となると…… 例え募集しても誰が土星まで行きたいと思うでしょうか」

「お前という奴は…… 本当にそう思っているのかコンスコン。人員が集まらないとか笑止だ。ズム・シティは工業も食糧生産もしない行政府だからこそ千五百万人が住めているが、そもそもコロニー一つにつき数十万から数百万人が適当な数だろうか。私はな、それを超えてしまわないか心配なくらいなのだ。ではこの際、お前の人望とやらを自分の目でしっかりと見てみろ」

俺は退出してから土星行きのことを考える。

まあ、やってやろうじやないか。

旅立てば、おそらくもう地球圏には戻ってこれないだろう。片道でも8年かかるのだから。

俺はこれから土星周辺で拠点建設に頑張るのだ。それがジオン、ひいては人類の未来を良くすることにつながると信じよう。

先ずは人集めをするわけだが、俺の周辺の者にはむしろ容易に言い出せない。

俺の艦隊は絆が強い。

己惚れるわけではないが、もしも深く考えず同行を志願してきたらどうする。一時の気の迷いで決めていいような問題ではなく、これは各人の一生の問題であり、後で後悔してほしくないんだ。

艦隊に帰っても、俺は難しい顔をしていた。

そこにいきなり面会希望が入る。

「海兵隊シーマ・ガラハウ中佐だ。コンスコン大将に話がある」

早い！

噂を聞きつけたものにしては早過ぎる。これはおそらくキシリア閣下が直接シーマ中佐に言ったに違いない。

取り次いできたオペレーターに、会う旨を伝えるように言い、シー

マ中佐を待つ。

「コンスコン大将！ ソーラ・レイ、いやマハル・コロニーを元に戻して土星に出発すると聞き、是非それに参画させて頂きたい。海兵隊一同揃って」

「え、いやそれはちよつと…… ジオンもすぐに軍を縮小か解体するわけではなく、何年もかけて段階的に進めるものだ。今でも海兵隊が重要なジオンの戦力であることは間違いない以上、全員を引き受けるとなると…… もちろん人員自体は喉から手が出るほど欲しいのだが」

「いいえ！ 海兵隊はほとんどマハル出身、故郷が再建されるのに戻らないわけがなく。キシリア閣下は我らのことをよくご存じで、海兵隊の異動を織り込み済みのようでした。しかもジオンの戦力のことを言うならば、むしろコンスコン大将こそ重要では」

なるほどな。マハル・コロニー出身者は故郷を丸ごと失ってしまった、ことさら望郷の念が強い。ソーラ・レイから甦ったマハル・コロニーに來たいのだ。しかしそれなら強く言っておかねばならないことがある。

「……申し出はともありがたいのだが、シーマ中佐、では正直に言おう。土星への植民は簡単なことではない。地球圏から遠く離れているだけで精神的には堪えるだろう。それに植民にあたっては思わぬ事態や困難も予想され、むしろそういうトラブルは付き物で、しかも地球圏からの支援は事実上ない。予め余計に物資を持っていくこともできないだろう。戦争の後の膨大な復興のことを考えたらな。結果的に地球産のもの、例えば酒や紅茶なんかは充分に支給できず不自由な思いをさせることになる。故郷が復活したと喜んで乗り込んできた者たちをがっかりさせたくないのだ」

「ああそんなこと！ とつくに覚悟の上さね。それよりマハルで暮らす方が重要なのだ。あたしらにとつては」

俺は本心からそう言ったのだが、シーマ・ガラハウ中佐は言下に否定し、どうしても植民に参画したいと訴えてくる。使い慣れない敬語を捨て、真摯なまなざしで。

もはや議論は不要のようだ。

「分かった。とてもありがたく受けよう。海兵隊なら護衛戦力としてもこれ以上のものはない。しかし出発はまだ未定なのだ。これから改造工事に取り組むこともだが、とにかく人員を集め、少なくとも十万人にはしたいのだが」

「コンスコン大将、護衛なら引き受けた。マハルを二度と失わないよう海兵隊が死んでも護る。そして人員のことなんか何の心配も要らない。マハルが甦るとなれば、あたしがみんなに声をかける。そうすれば必ず戻ってくるさね」

こうしてシーマ・ガラハウ中佐との話は終わった。

俺が知るよしもないが、この事業によつてシーマの悪夢はやつと終わりを告げた。自分のしたことで悩まされ、露悪的にふるまうようになっていたが、ガトーらに会つて本来の明るさを取り戻しつつあった。そして今ようやく故郷という心の拠り所を取り戻し、素直で前向きなシーマ・ガラハウになれたのだ。

俺は一息つきながら、この土屋植民事業がいよいよ回り出したのを実感し、感慨にふける。なんていう時間はなかった！

いきなりもう一人の来客があつたではないか。

それも余りに意外な客だつた。

「コンスコン大将、お時間を取らせて申し訳なく思う。しかし絶対に話しておかなければならない用件があつて来た」

「それはいつたい……どんな話だろう、マハラジャ・カーン准将」

その客とはマハラジャ・カーン准将だ!!
俺も正直いってどんな話なのか何の見当もつかず、頭が真っ白になるほかない。

「訝しんでおられますな。無理もない。しかしこれは今、話さねばならんのです」

「カーン准将、おそらく土屋開発の話聞いて、それで来たと思うが……」

「おお、その通り。しかしキシリア閣下もいい人選をされたものだ。土星開発をあえてコンスコン大将に託せるとは…… 運命に感謝せざるを得ない」

「それはどうも。しかしそれで何を？」

「今から話すことは重大な秘密であると先ず申し上げる。掛け値なしにこれ以上重大なことはなく、正直言えばジオンも連邦も、この戦争も、どうしてもよくなるほどの秘密ですから」

「何!? カーン准将、この戦争がどうでもいいくらいのものとは……」

意味が分からない!

そんな表現をするほどのことが存在し得るのか? しかもそれを今俺に話すとは。

「文字通りだ。コンスコン大将。ジオンも連邦もたかが主義主張の違い、戦争といったところで人同士の細かい争いに過ぎない。しかしこの秘密は人類の存亡に関わる。先ずはこの画像をご覧頂きたい」

大いに困惑する俺をよそにカーン准将は手持ちのタブレット端末を取り出し、俺がそれを見えるような位置にして手で支える。

そのタブレットに今から何が映るといふのか。

俺は間もなく始まった動画を注視するが、いきなり驚いた。

そこには、沢山の幼児が映されていた!

ざっと十人以上いるだろうか。年はたぶん四歳ほどでしかない。いずれも幼児用の可愛いつなぎを着て、大きな部屋の中でそれぞれが遊具を取り、楽しそうに遊んでいる。一人は音の鳴るカスタネットを手にとってパンパン叩き、別の者は滑り台を下から登ろうとしている。

「プルー」

「プルー」

「プルー」

そんな意味不明の言葉を言いながら遊んでいたが、やがて一人遊びに飽きてきたようだ。

部屋の中央に二人集まり、三人集まり、やがて全員が縦につながっ

て肩に手を置いている。そこから一列のまま部屋の中をぐるぐる行進していく。楽しくて仕方がないように笑いながら。

本当に和む光景だ。

誰でもこれを見たら、子供たちに幸せな未来があるように願うだろう。

だがしかし、そんな問題ではなく秘密とやらに何の関係がある？

「……カーン准将、子供たちの楽し気な映像はいいが、どういうことだ？」

「子供たちを見て気付きませんか。年恰好どころか何から何まで同じであるということに」

「ん？ 確かに……言われてみれば全員女兒で髪も顔もよく似て…… いったいこれは何だ」

本当に同じように見える。髪の毛の明るいオレンジ色も、みながみな同じだ。そういう幼児が集まったのか？

「コンスコン大将、よくお聞きいただきたい。この子らは大それた『実験』の産物なのだ！ たぶんコンスコン大将はグレミー・トトのことを知っておられるのではないか？」

「いきなりその話とは……グレミー・トト、俺の知る範囲で言うトト家に預けられた幼児で、ギレン総帥の隠し子という噂のあつた者だな。そんなわけではないと思うが、噂のせいかキシリア閣下がわざわざ後見人になっている」

「隠し子というのは半分当たって半分外れということになりますな。あれはギレン総帥の遺伝子をわずかに組み入れて生まれたのですから。いわば1%の隠し子といってもおかしくはない」

「え、そうなのか？ 何だそれは……」

「しかし、それについては元から存在する遺伝子をつないだだけの話、科学的に大した意味は無い。その映像の子らに比べれば」

「いや、もう遺伝子とか、頭が追い付かない。では今の子供らはいったい何をどうしたというのだ」

「その子らは遺伝子に直接手を入れて生まれたもの、その操作をコー

「コ、コーディネイト!?」

俺は驚くばかりで声も出ない。

「いったいどういうことだ? そしてなぜカーン准将がそれを知っている?」

第四百四十話 開拓団

俺はひたすら驚いてばかりいるが、ここは感情を鎮め、カーン准将の言葉を待った方がいいと決める。そうでないと話が進まない。

「…… 技術的な用語はよく分からない。ともあれ続けてくれ、カーン准将」

「実はコーデイネイト研究という名を付けたところで初期段階であり、未だ確固たる理論はなく、影響においても未知な部分が多すぎる。問題はそんな段階でも第一歩を踏み込んでしまったことだ」

「なるほど。しかし誰がそんなことを始めたのだろう。やはりギレン総帥なのだろうか」

「その通り、ギレン総帥の意向で始まった。キシリア閣下がNTに興味を持ちフラナガン機関を作ったのと同様に、ギレン総帥は人間を無理やり進化させることを考え、その研究を始めるよう指示されたのだ。そして研究の性質上すぐには成果が現れにくいためギレン総帥は焦っておられたのだが、ついに未完成の技術のままコーデイネイト実験を始めてしまった。そして一切を信任厚かったこの私に託された」

「ギレン総帥がそんなことを考えて…… カーン准将、他に知る者はいるのか」

「むろん秘密は何重にも秘匿され、私他にその存在を知る者はわずか。ギレン総帥の死後、あの子供らは私が密かに引き取り、アクシズの民間区画に隠して育てている」

「アクシズで、子供たちを……」

なるほど分かった。あの子供らはコーデイネイトとやらを施された実験体というわけか。たぶんスペアをいくつも用意したのであれほど同じような子供がいるのだ。

下らん実験だ！ そんな理由で人間を生み出すとは。

ただし救いは、カーン准将が血の通った人間であったことだ。本当ならギレン総帥が死んだ時点で子供らごとく消去する道もあった。軍

人ならそういう判断をしても決しておかしくない。だがカーン准将はその子供らを生かしたいと思ったし、だから俺に子供らを土星まで連れて行って欲しいのだろう。

「コンスコン大将、私はこの技術は人類にはまだ早過ぎると考える。子供らを生まれながらに戦争の道具として作るのも、そして戦争で使い捨てるのも悲しい」

「その通りだ！ よく言ってくれた、カーン准将」

「しかも、それで済めばまだマシかもしれない。やがてコーディネイト技術が進んでいけばそれを施された人間も増え、とんでもない災厄に変わりそうな予感がする。人類が思想的に成熟し、ゆとりを持ち、充分な寛容さを得るまでこの技術は封印し、未来へ先送りにした方がいいのだ」

「だからジオンや連邦といったレベルの話ではなく、全人類の未来にかかわるということか。その技術の封印には全面的に賛成する。そして今、秘密を話してくれたのはその子供らのためなんだろう」

「おお、お察しの通り。技術はできるかぎり抹消するとしても子供らは生きていく。いずれ露見する可能性が残り、そうなれば悲惨な未来になるし、そうでないとしてもいつまでも隠れて生きるのは不幸だ。あの子供らはみな幸せになる権利がある。コンスコン大将、土星へあの子供ら総勢十二人を秘密ごと連れて行っては頂けないか。本当なら自分が責任をとって育てたいのだが、カーン家の当主としては一緒に隠れることも土星へ行つてやることもできない。だからこそコンスコン大将を信頼してお願いする。人類のために、どうか」

「分かった、カーン准将。あの子らを預かり土星に連れて行こう。代わりにコーディネイト技術とやらをしっかりと除去してくれ。おそらくそういう技術が人類にとって必要になる時も来るだろうが、確かに今すぐではない」

カーン准将の話は大げさなものではなく、空恐ろしいものだった。しかしそれとは別に生まれた子供たちは幸せにならなくてはなら

ない。普通の人間として、土星圏で共に生きていけるよう俺も協力しよう。

「最後にコンスコン大将、一つだけ不安がある。この技術が他に流れてしまっている可能性がある。それは連邦ではなく、木星だ」

「えっ、その技術が既に……」

「コンスコン大将、そもそも木星が今回の戦争で見せた動きが不自然だと思ったことはないですか。ジオンは連邦に対し、エネルギー戦略を仕掛け、それがあれほど有効になった。ということはエネルギーの大元である木星の意向一つで戦争の行方を左右できたということでもある。木星が本気でこの戦争の終結を思うなら、いかようにもやれただろうに、実際は奇妙なほど何もしなかった」

「…… まあ公社としてヘリウム3供給は政治から独立という建前があるが…… 確かにドウガチが本気になればいくらでも抜け道があったかもしれない。思わぬ小惑星のために船団の航路を変更しましたといえれば言い訳も立つ」

「むしろ木星は戦争を利用して、物資も技術もかき集めようとしたように思われる。私は木星に近いアクシズにいたので余計にそんな動きが分かる。むろん、木星が生きるために必死にそうしているのなら当然だ。アクシズは水や鉱物は豊富でもエネルギーに欠けているが、木星はエネルギーはあっても水も酸素も足りないという比較にもならないほど厳しい環境に置かれ、そのことは可哀想だと同情もする。だがしかし、軍事技術まで手に入れようとしたのなら話は別だ。コンスコン大将、木星には気をつけてほしい」

マハラジャ・カーン准将との話はここで終わるのだが、俺は思い出したことがある。

名は何と言ったか、俺は頭痛のためそこまで覚えていないが、あの紫髪にヘアバンドを付け真っ白い連邦軍服を着ていた若者のことだ。木星からのヘリウム3輸送船ジュピトリスに乗ってきて、ジオンに取引を持ちかけてきていた。その性質は自信家で野心に溢れていた。

問題はそこではなく、不思議に思えるほど軍事技術に通じ、「今のMSをいかようにも高性能にしてみせる」とまで言い切ったのだ。

それは木星の技術が一定以上あり、既に軍事にも応用できるものであること、そして何よりMSなどの情報を密かに手に入れていることを示しているんじゃないか……

まあ、今考えても結論は出ないし、どうしようもないことだが。

その後一カ月をかけ、土星開発事業の概要が固まってきた。

ついにソーラ・レイをマハル・コロニーへ復活させる大工事に取掛かる。それは当然ながら空気も設備もエンジン部も、膨大なリソースを必要とする。コロニーを一から造るよりは格段に楽とはいえ、この大きさである。改造するだけで大変なものだ。

だがしかし、幸運なことにそのリソースの手近な供給先が存在した。

もはや必要なくなったジオンの秘密軍事基地、茨の園を解体し、先ずはその資材を使ってある程度のことを行う。どのみち茨の園は残しておいても居住用にも通商用にも適さない。

それだけで足りるようなものではないが、やはりキシリア閣下は物凄いとしか言いようのない政治力を発揮した。

土星開拓という人類の未来がかかる建設的な事業をなし、ついでに俺を軍事から外すことによってジオンは対外的に和平の意思を示した。

その上で、ジオンがソーラ・レイをそうやって廃棄するなら、サイド2にある連邦側コロニーレーザーを同時に廃棄することを提言したんだ！

ジオンと連邦、お互いの大量破壊兵器を無くすることを和平の道標、確たる意思の証しとしてぶちあげた。これで連邦を否応なくうなずかせる。

なんともはや政治的な妙手だ。

キシリア閣下はそれだけにとどまらず、ついでに連邦コロニーレーザーのリソースをこちらに融通してくれるようにもした。いずれ将来、土星圏から連邦にヘリウム3を供給するとの約束で納得させて。

連邦上層部としては、ヘリウム3不足で存分に痛めつけられている

こともあつてこれに乗ってきた。キシリア閣下はうまくヘリウム3の売り込み先を確保したということでもあるが、そもそも複数の供給元を得られることは何にも代え難いことなのだ。

そして和平は進展し、ついに宇宙世紀0081年の10月、ジオンと地球連邦は終戦を迎えた！

連邦上層部の高官たちと軍部代表のゴツプ大将、こちらからはドズル閣下とキシリア閣下が出席し、晴れやかな式典のもと終戦の調印をしたのだ。

運命の開戦から2年と6カ月で停戦を果たし、2年と10カ月でようやく戦いの悪夢は終わりを告げた。

思い返せばルウム会戦、グラナダ占領、地球表面での攻防、ソロモンやア・バオア・クーの戦い、本国会戦、月面再占領、第二次ルウム会戦、第三次ルウム会戦…… 何と激しく戦い続けてきたことか。

お互い苦しい思いをして膨大な犠牲を出したが、これからは共に復興へと向かう。

そして俺の土星開拓事業も最終段階を迎える。改造工事は無事に峠を越えたが、最後にして最大の問題が残っている。

参加する人員の募集だ。

それは良い意味で予想を裏切られた。

何と、参加したいと応募してくる人間がうなぎ登りに増えつつあるのだ！

かつてマハル・コロニーを強制的に追い出され、故郷を失った人間は二百万人に及ぶが、実に百万人が戻ってくることを希望しているじゃないか。

「…… 思ったより少ないね。たったの半分しかいないなんてコンスコン大将に大口叩いておきながら情けないさね。全員とは言わないがもつと来ると思ったのに」

「シーマ・ガラハウ中佐、それは違うだろう。もうマハル・コロニーを離れて二年も新しい場所で生活を始めている者たちなんだ。それな

のに、逆にこんな人数が戻ってくる方が驚きとしか言いようがない。これで本当にコロニーを運営できそうで良かった」

募集に応じてきたのは、スペースノイドが全てではない。

いや、連邦コロニーレーザーのリソースも多々使ってしまった以上、名目的にも連邦の人間を完全にシャットアウトするわけにはいかないのだ。

むろんアースノイドの難民を無条件に受け入れなどしない。

アースノイドとスペースノイドは意識に壁がある。特に宇宙に対する考えも覚悟も違いすぎる。アースノイドを多く開拓に加えたら、必ず後でトラブルになり、暴動から開拓自体が空中分解するのは目に見えている。地球から宇宙に行くだけで不応を起こす者は多いのに、この場合は普通のコロニー移住とは違ってほとんど片道切符である遠方への移民なのである。

そこでアースノイドであれば、しっかりした覚悟を持ち、しかも技術者などの高度な経歴を持つ者だけを受け入れるようにしている。

まあ、それでも結構な数に上った。

特に、コロニーレーザーのことでジオンにさえその名が聞こえていた連邦軍の技術者、フランクリン・ビダンまで参画してきたのは驚いた。名簿を確認すると、妻と11歳になる子供を一人連れてきているようだ。

おそらく開拓にロマンを求めてなどというところから遠く、連邦軍に何かの事情でいられなくなったのかと思われる。事情はとにかくトラブルにならない人格で能力的に優秀なら構わない。

土星開拓の募集を始めてしばらくすると、マハル出身以外のスペースノイドでも参加を希望する人間が増えてきた。

そこは各人、フロンティアに希望を託す者、食い詰め者、事情は本当に様々だ。

設けられた開拓募集の登録所にも徐々に人の列ができてくる。

俺はそれを眺め、これから一緒にはるか宇宙を旅して、開拓を始める家族になるのかと思うと感慨深い。

「行くこうぜー！ リタ、ミシエル。よくわかんないが行った方が面白そうだ」

「ちよつと、置いてかないで、ヨナ」

見覚えのある子供が目に映る。

あれ？ 確かあの子供たちは俺が地球オーガスタ基地から拾い出した三人組…… もちろんここ一年の前はアースノイドだった。それなのに孤児院を抜け出して、今度は土星開拓に紛れ込もうとしているとは。

生活力たくましいというか、まあ、いいか。これも何かの縁なんだろう。

現時点でスペースノイドならスペースノイドでいい。そして、アースノイドとは違ってスペースノイドの場合は基準は大幅に緩められ、参加したい者は事実上ほぼ認めているようなものだからだ。

それはスペースノイドならサイド3出身に限ったことではない。そのため、もう本当に意外な人間まで加わってきている。

月面フォン・ブラウン市アナハイム社出身のメカニックとか、同じくフォン・ブラウン市のパイロット経験者とか、雑多なものだ。

その中に以前聞いたことのあるような名が交ざっているではないか。

レコア・ロンド……

かつてグラナダにテロを仕掛けた義勇兵にそんな名の者がいな

かったかな。……何とも言えないが、それも良しとしよう。

しかしそんな例はまだいい方だ。もつと酷い場合がある。

俺が見ていると、明らかに浮浪児のような一団まで来たではないか！

「二獲千金！ 行くぞリイナ、ビーチャ」

「ジユドー、本気で行くのか…… 土星だぜ土星…… しかもお前、親に言っていないだろ」

「出稼ぎに行った親なんかいつ帰ってくるんだ。それなら、潰れそんな古っちいコロニーにいつまでもいられるか。びびらないで行こうぜ。冒険だ冒険！ 最高じゃないか」

そう言つてがやがや歩いていると、案の定他の人間にぶつかつてしまふ。

「痛い！ 何だこのガキ！」

「おつと悪いな。てかお前は俺よりガキじゃねえか」

「うるさい！ 俺はいつまでもガキじゃない。土星で名の知れた男になる者だ」

「威勢のいい奴だなあ。俺はジユドー・アーシタ、サイド1の出身だ。仲良くやろうぜ」

「…… 俺はギユネイ。サイド4から来た。将来俺の部下になるなら仲良くしてやらないこともない」

「言つたなこいつ。偉そうだけど面白い。まあいいさ、とつとと登録済ませて一緒にメシ食いに行こうぜ」

子供というのは、喧嘩も早い仲間になるのも早い。

どんなことになるのか分からないが、たぶん大人より順応性はいいのではないかと思つたりする。

しかし、俺が主に悩んでいることはそういつた一般の応募者についてではない。ジオン軍関係者の応募者名簿では、シオルジョ・ミゲルとその妹、そしてキャラ・スーンなどという名が見えるのだが、そのことについてでもない。

俺の艦隊のみんなのことだ！

不思議なことに土星行きのがほとんど話題にすらなっていない。まあ、俺自身の個人的な異動のことであり、艦隊のみんなは自分と切り離して考えているのかと当初は思った。それはしごく当然だ。彼らの所属はジオン軍であり、別に俺の私兵でも何でもないのだから、各人が好きにするのは当たり前だ。

ただし、俺はシャリア・ブルにだけは頼んで一緒に行ってもらおうと考えていた。

シャリア・ブルはジオン軍の中でも貴重な長距離航海経験者であり、今回の旅路は未知ともいえる長距離航海なのだからどんなノウハウでも欲しいところだ。

「シャリア・ブル大尉、今回の土星開拓のことだが…… 一緒に行つてはもらえないだろうか。木星より遠いところなのでとても言いにくいのだが、これは命令ではなくお願いという形で頼みたい」

「今さらでしょうか？ 考えるまでもなく一緒に一緒させて頂きます」

「おお、それはありがたい！」

「最初からそのつもりなのは、皆と同じです」

「皆と同じ？ 皆というのは……」

「コンスコン司令、ほとんど全員のことですが？ ガトー少佐を始め

として、私が知る限り」

誰もが話題にしていけないのは、もう土星に行くのが当たり前過ぎて言う必要もないということだった！

俺は慌てて聞いてみた。

「…… セシリア・アイリーン、君も土星に行くのか？」

「当然ですが、コンスコン司令」

「遠いし、不自由だぞ」

「むしろ行かないという選択肢があり得るのでしょいか」

「君もかな、フォウ・ムラサメ」

「もちろん、コンスコン司令と一緒にです！ 土星だろうと、どこへだろ

うと一緒に」

確認して回ると、ガトーやツエーンも同じような返事をしてきた！
「コンスコン司令以外に上官は考えられず、当然行く所存です」「土星に行っても見張りが要るわ！　へマしたら蹴り入れるわよ！」

それはカリウスやケリイ、クスコ・アルも同じ、俺の知っているメンバーはほとんど付いてくることになった。

何というか、本当に今までと同じような環境になり、旅路は少なくとも寂しくはなくなる。

例外がないことはないが、その者は俺の前でしょんぼりしている。

「済みません、コンスコン司令。本当は土星へ僕もついていくべき、いやついて行きたかったのですが……」

「何を言うんだ！　ダリル・ローレンツ。そんなことを気に病む必要はない。そんなことよりしつかりリハビリしてくれ」

それはダリル・ローレンツであり、土星に行きたくても行けない理由は一目で明らかだった。ダリルはカーラ・ミツチャム教授の執刀により、右腕の再接合手術を受けたのだ。今はその機能回復訓練を始めたところなのである。それなら医療環境の充実したサイド3にいないければならない。

ダリルは腕を回復した以上、もうサイコ・ドワスに乗れなくなった。いや、乗る必要はない。戦争はもう終わったのだから。

そんなことより俺が見たところ右腕の指がわずかに動かしているようだ。さすがにカーラ教授の技術は素晴らしく、リハビリを終えればたぶん元通りになるのだろう。

だがもつと驚くべきは他の左腕や両足に付けられている義手義足の方だ！

今まで見慣れていたただの棒きれのような格好ではなく、立派に腕や足の見た目をしている。しかも、ゆつくりとだが動きまでついてるじゃないか！

いったいどういうことだ。俺はカーラ教授に聞いてみた。

「ダリルの義手義足が動いているのは……」

「ええ、神経接続の技術を応用し、制御と動力を小型化して組み込んだのです。これからアツプデートしながら自然な動きにしていければ」「凄いな…… 神経接続は戦争のための技術ではなく、最初からこういう方向に行くべきものだったんだ。本当に人間のための技術によくやってくれた」

「いいえまだまだ。動きもそうですが、感覚の方もできれば接続しないと」

カーラ教授は貪欲に完璧を追い求める。彼女が若干やつれた感じがするのは、不眠不休で頑張ったせいだろう。そこまでする原動力になっているのはおそらくダリルへの愛情なのだろうな。

俺は土星へ行かないこの二人ともう会うことはない。

その別れ際、ダリル・ローレンツとカーラ・ミッチャムの左手の指に指輪が光るのを見た。

二人はもう婚約し、人生を重ねる約束をしているのだろう。

何もダリルの義手の方に指輪を付けなくても、ちらりとそんなことを考えたが二人は神聖な約束の方を重視したのかもしれない。

俺の艦隊の皆ではないが、開拓に参加してくる人間で忘れてはならない者がいる。

俺のキャプテン、スベロア・ジンネマンだ。

一家を連れて参加してきた。むろんジンネマンが後見人をしているロザミア・バタムも一緒である。ロザミアはこの一年で充分に癒され、もう突然ヒステリックになることはなく、生来の穏やかな気性になっていくそうだ。

大変残念なことに、結局過去の記憶を取り戻せはしなかった。

それは可哀想なことだが、たまだまだ若いのだ。これからの人生をロザミアとして積み重ねていけばいい。

そして重要なことがある。俺はジンネマンにだけはカーン准将から託された秘密を話した。

あのジオンの暗部、秘匿された遺伝子実験と、結果として存在する子供たちのことだ。

マハル・コロニーは出発すると小惑星帯の近傍を通過し、そこでたっぷり氷と鉱物を貯め込む予定である。その時にアクシズから例の十二人を受け入れる手筈になっているのだが、後の世話を含めて信頼できる人間にお願いしたい。衣食住はこちらで用意するとしても、子供には親代わりになる人間が必要だ。そういう温かい触れ合いがあつて初めて人間らしく育つ。

おそらくジンネマンはその厄介な仕事に適任だし頼めばやつてくれるだろう。そうしてくれれば、これほど父親に適任な者はいない。「引き受けた、コンスコン。俺を頼ってくれて嬉しい。なあに、子供つてのは多いほど面白いんだ。しかし、お前が何人か育ててもいいんじゃないか」

「はは、キャプテン、ちょっと無理だろう」

「それもそうか。結婚が先だ。それを早くしろ」

「……」

「少しは腹を引き締めた方がいいが、見かけはそんなに問題じゃない。ドズル閣下を見れば分かる」

「……………」

こうして全ての準備が整った。

そもそもソーラ・レイは第二次ルウム会戦の途中からサイド5の片隅に捨て置かれていたが、マハルへの再改造を受けつつ、ゆつくりと元のサイド3まで移動させられている。

宇宙に開けられていた一端を閉じ、酸化鉱物でできた岩石を分解して空気を作り、土や水を用意する。そんな内部造作と並行し、太陽電池パネルが外壁にしっかりと固定される。太陽の光が力を持つ途中までは補助的なエネルギー源だからだ。

それらが予定通り終わると、最後に追加すべき核パルスエンジンを取り付けられる。今までのエンジンはコロニーの大きさに比べたらスラスタに毛の生えたようなものだったが、今度のエンジンはそれ

よりはるか高出力、ノズルもそれなりの大きさがある。

マハル・コロニーの一方の端にまとめて六基設置されたノズル、外から見ると立派なものだ。

一つずつ順次エンジンに火を入れていく。

慎重に出力を上げていき、異常がないか確認していく。一基でも不都合が出れば取り止めにする予定で、その技術的ハードルも決して低くはない。

無事に稼働し安全の確認をしたら開拓団受け入れの用意が整う。ようやくサイド3からピストン輸送で人員を乗り込ませるのだ。

その後、一気に加速し地球圏を離れる軌道に乗る。

俺と開拓の仲間たちは土星への長い旅に出た。

俺の土星開拓団の門出を見送ってくれる人は多い。

もちろんドズル閣下とキシリア閣下もそうだ。ズム・シティの出港ゲートまで来て、最後の最後まで俺との別れを惜しんだ。

「コンスコン、土星で足りない物があつたら遠慮なく言え。無人機で運べるものは運んでやる」

「その時はよろしくお願いします。ドズル閣下」

「思えば、貴様とは士官学校以来の仲だった。懐かしい。その時のことも、戦争が始まって一緒に戦った時のことも、いくらでも思い出すことがある。本当に貴様には世話になった」

「そんな、こちらこそ長くドズル閣下に仕えられたことは望外の幸せとしか」

「それは逆だ。よく俺のもとで働いてくれた。そして貴様は大した奴だ。ジオンの危機を何度も救ってくれて、どうやって礼をすればいいのか分からん。ゼナのプロマイドとミネバの婿以外は何でもしてやる」

「……………」

予想よりも、というか予想通りの締まらない最後になったが、いかにもドズル閣下と俺の仲らしくていい。それくらいが一番いいのだ。その後ドズル閣下は泣いて言葉をなくし、話はキシリア閣下に代わる。

「コンスコン、やはり開拓団は大所帯になっただろう。総勢三百七十二万人か。これはな、お前の人望が形になったものだ」

「キシリア閣下、それは畏れ多い」

「いや、私は本当のことを言っているのだぞ。土星開拓が未知の世界で、厳しいものになるかもしれないことは皆知っている。だがな、お前がいる限り酷いことにならないと希望を持っている。そこが普通の開拓とは違うのだ。少なくとも人同士が争い、支配したり奪ったりすることはお前がいる限り無い、そう思うからこそこれほどの人間が

集まった」

「それは…… 努力します」

「では頑張れ、コンスコン。地球圏のことはこちらに任せておけ」
俺は最後の敬礼をして去っていく。

その後、ドズル閣下とキシリア閣下でなされた会話は知らない。

「キシリア、さっきの言葉はそのままだな。コンスコンだからこそそれだけの人が集まった」

「いえ兄者、それは実はささいなこと、開拓が成功した後どうなるかが最も重要なことでは？」

「後のことだと……」

「こちらからは干渉のしようもないはるか遠方、指を啜えて見ていることしかできないのに、もしも歪んだ独裁政権ができてしまえば目も当てられないことに」

「危険過ぎる！ エネルギー供給どころか将来の災厄にしかならんぞ。なるほどそれでコンスコンか…… 当然、奴しかない。奴なら絶対そうはならない。そしてキシリア、コンスコンを選んで任命したお前が一番凄いな」

俺の出立は中継もされて、多くの者がそれを見ているのだが、遠くルナツの連邦軍基地でも祝う者たちがいた。

「コンスコン大将がようやく行きましたな。少し寂しくなったのではないだろうか、ワイアット元帥」

「そうだね、ステファン・ヘボン君。好敵手がいなくなるのは実に寂しい。あれほどの戦術使いにはもうお目にかかることはなく、ルウムの激しい戦いが懐かしいくらいだ。まあ、逆に言えばこれから地球圏の治安は私が頑張らねばならない。そう大した敵など出てくるまいが」
「元帥が全力で戦う相手など存在しないでしょう。小さなテロならともかく、連邦に戦力で挑んでくる相手ならば艦隊戦で打ち破るのも容易いもの。それはともかくコンスコン大将へ餞別にあれを送ったのですか」

「おお、そうだよ。土星への旅立ちに当たって、手持ちで最上級の茶葉、デインブラの特選を送らせてもらった。長い旅路だ。紅茶の香りを是非楽しんでもらいたいと思ってるね。我ながら一番いい饞別だよ、ステファン・ヘボン君」

その頃、俺の周りでは紅茶を飲む者はいなかった。

まして茶葉の味の良しあしなど分かる者はいないのだ。

味音痴というわけでないが、そんな微妙な違いなど分からない。

そのあげく、何とその茶葉はフォウ・ムラサメとセシリア・アイリーの手によつて紅茶ケーキの材料に使われ、皆に振る舞われてしまつたではないか！

それはそれで有効活用されたわけで美味しく食べたのはいいのだが、もしもグリーン・ワイアットが知つたら泣くだろうな、と想像することはできる。

何もかも順調にいったわけではない。

やはり、というべきか。

地球圏を離脱する直前、ミノフスキー粒子が濃くなつたと思いきや襲撃を受けた！

相手は連邦サラミスが三隻とジム・クウエルが十五機ほどだ。

おそらく連邦側の急進過激派の仕業だ。俺が去る直前のチャンスに賭けたのだろう。この土星開拓を頓挫させれば、悪名かもしれないがとにかく自分たちの存在をアピールできる。

もちろんこちらにも警戒し、索敵は随時していたのだが、それでも待ち伏せをしてこられたら完全に防ぐことはできない。マハルは推進剤節約のため、惑星軌道から計算された最適コースを変えることはなく、ちよつと類推するだけでコースを読まれてしまう。その途上でデブリに偽装して待ち構えてきたものなど見分けられやしない。

敵勢力の数は少数といえど、非常にまずい！

勝ち負けの話ではない。コロニーを撃たれてしまえば少なからず傷になり、そのまま土星へ行くのが難しくなる。万が一重要ブロック

に損傷を受けたのに換える部材がなければどうなる。いきなり計画が頓挫してしまうではないか。

時間との勝負だ。

コロニーは大きい。すぐに有効射程内に捉えられてしまうだろう。そこまで近づけさせざる前に、できるだけ早く、一機も逃さず討ち取らねばならないのだ。

「緊急出動だ！ ガトー、できるだけ早く叩き落とせ！」

俺がそう命じるやいなやガトーらは素早く出撃していく。しかしもう戦闘は始まっていた。

このマハル・コロニー周辺をパトロールというか、たまたま酔狂にも外側から故郷を眺めていたと思った海兵隊たちが外に出ているのだ。

「なめたマネされたもんだね。このマハルに傷一つ付けさせるもんか！」

「どうします、お頭」

「もちろんすぐ出るよ！ 返り討ちにしてやる。どんな魂胆で襲ってきたかなんて関係ない、マハルを狙ったら命はないと思いな。あのサラミスも連邦MSも、ここを墓場にしてやるさね！」

ザンジバル級リリー・マルレーンから出撃した海兵隊のガルバルディ改たちは一気に迫り、必殺のビームを浴びせて混乱させると直ぐに切り込みをかける。

襲撃してきたジム・クウエルたちもそれなりに信念があり、能力も戦術もあつた。だがしかし、マハル・コロニーを守る海兵隊の圧倒的気迫に敵うはずなどない。あれよという間に数を減らしていく。

それでも苦し紛れにコロニーへ向かって数発は撃ってきて、俺はヒヤリとしたが幸いにも当たることはなかった。

ガトーたちが合流した時には最終局面、そのまま全滅させた。

無事にマハル・コロニーは地球圏を離脱し、次第に地球も月も小さくなる中、はるか彼方の土星を目指す。

先のこととは分からない。

しかし冒険であることだけは間違いない。

——そして7年が過ぎ去り、宇宙世紀は0088年に入る。

連邦は終戦時の協定で、月面フォン・ブラウン市へ政府機構を移転させることに合意している。それに従い、徐々にフォン・ブラウン市は拡充され、この頃には人類の中心地の形を成してきた。

一方のジオンもまた約束通り共和制へと移行し、もう公国ではなく連邦内の一地区となっている。実際は高度な自治権を持ち、独自の政府活動も可能、自前の士官学校と警備軍を用意することもできる内容である。

その名は、サイド3のかつての名前であるムンゾに戻ったわけではなく新しい名が付けられた。

しかし何のことはない、その名もZodiac Extensio
n Of the Near side、つまりコロニー群としては最も地球から遠く、そして逆に月面の政府からは近いという意味だ。もちろんこじつけの屁理屈なのだが、こうしてジオンという名を使い続けることになる。

そして肝心のジオンの政体では新しいところがある。

二つの議院が改革の主軸として設けられた。

議院制度は地球連邦からの要請なのだが、以前ギレン総帥が機能停止させていた議院をそのまま再開したのではない。キシリア・ザビはジオンの事情に合わせてアレンジした議院制度を作った。

一つの議院は一般民衆の中から選ばれる市民院であり、これは分かりやすい。

もう一つは、サイド3六大家やその他の名家、豪商から構成される貴族院である。ザビ家やカーン家、ラル家などは誰しもが文句なく認める貴族であり、もちろん議員になる。

それらの他、ひとときわ目を引く者がいた！

ジオン・ズム・ダイクンの遺児、アルテイシア・ソム・ダイクンである。

シヤアは政界に出ることはなく、シヤアはシヤアのまままで押し通した。

時折はサイド3に帰るものの、基本的には任されたアクシズの発展に力を尽くしている。もちろんシヤアのカリスマを惜しむ人は多いが、本人はその方がいいとした。

そしてシヤアと共にいるララア・スンもそれに同意しているのだ。

「ふふ、シヤア少将がいるところがわたしの故郷」

「ララア、しかし不自由に感じていないか」

「どうせクスコ・アルのお姉様もないし、人の多いズム・シティなんかよりアクシズがいいわ。本当なら二人だけで山にでも住みたいくらい。人の思念が多いところは嫌なもの」

だがシヤアといえどダイクンの名を消し去ることまで望まなかった。そこで、自分の代わりに妹のセイラを元のアルテイシアの名で登場させたのだ。アルテイシア自身は当初気乗りしなかったが、本来の気の強さが良い方向に働き、若くとも立派に貴族院議員が務まっている。

しかし、いずれは全面的に二つの議院へ政治をシフトさせると確約しているものの、その移行はゆつくりである。未だこの時点では執政官という新しい地位にいるキシリア・ザビがジオンの政治の大半を差配している。

一方のドズル・ザビは統帥兼士官学校長というあまり権力のない立場にいるのだが、本人は何も気にしていない。戦争でなければキシリアの方が万事上手なのだと分かっているし、おまけにこの頃は可愛い娘のミネバを見るのに忙しいのだ。

この形でジオンはうまく回っている。

そんなある日のこと、ズム・シティで華やかな夜会が開かれた。

貴族院の面々を呼び、マハラジャ・カーンの私邸で行われたのだが、それには二つの意味があった。

一つは祝事のためだ。

先日、ジオンは元から仲の良かったサイド6と幅広い協定を結んだのだ。新コロニー建造、資源採掘などについて幅広く共通規格、共同生産にすることと、また農業でも工業でも効率的な分担を図ることで合意した。

これは事実上の経済的合併である。

今後は人事交流もいつそう進み、ほぼ垣根がなくなると見込まれる。

そこへ復興途中のサイド5も加わった。元々人口は少なく、使えるコロニーはわずかだったサイド5だが、デブリを片付けテキサスコロニーを修復してからは最も急速に発展している地区である。地球にも月にも近いという好適な位置関係がそれを後押ししているのだ。

こうしてサイド3ジオンとサイド5、サイド6の三つが蜜月の時代を迎える。

そして今日の夜会にはもう一つの目的がある。居並ぶ面々にとってはこちらの方がより重要なことだ。

今や工業界でアナハイム・エレクトロニクス以上の規模と影響力を持つブツホ・コンツェルンの総帥シャルンホルスト・ブツホが来賓することになっている。

余話 7年後 〽 そして少年は少女の手をとる

夜会に居並ぶ没落貴族たちは、このために集まってきたのだ。

今やアナハイム・エレクトロニクス社とそれに結託するビスト財団を抜き去り、巨大な財閥の長になっているシャルンホルスト・ブツホと誼を通じ、今後につなげたい意図がある。

「この度はおめでとうございます。これからはシャルンホルスト・ロナ殿とお呼びいたしましょう。とてもいい御家名だと存じます」

何とかシャルンホルストの財力に縋りたい貴族たちが異口同音にそんなおべっかを言っている。

というのもシャルンホルスト・ブツホはジャンク屋出身でありながら貴族志向があり、築いた財産の一部を使って地球の没落貴族の一つであるロナ家の名を買い取っていたのだ。

直ぐにはその改名を披露しなかったが、何とサイド1に自前のコロニーを造り上げ、誰にも分かりやすいパフォーマンスで莫大な財力を全宇宙に見せつけ、それを契機としてロナ家を正式に名乗った。そのことを貴族たちは褒めそやしている。

一方、シャルンホルストにとってはこの夜会も貴族の社交界、その面倒なところへ出るために必要なステップであると認識している。

むろん、貴族たちの浅はかな内心など透けて見える。誰もがロナ家の名で貴族の一員に加わったシャルンホルストを褒めちぎり、歓迎しているようでありながら実のところ見下しているのだ。血統ではなく買い取って貴族の形を手に入れた者を誰が本心から認めるだろうか。

(どいつもこいつも、実力のない名ばかり貴族だな。見下している内心を隠しておべっかを使うのが貴族のすることか。まあ、だからこそ没落したのだろうが。我が子マイツァーの時代にはロナ家は名実ともに貴族になり、こんな没落貴族どもではなく、真の貴族として人

類を率いていくのだ)

表向きは和やかに会が進んでいくが、それを少しばかり苦々しい顔で見ている者がいる。

それは何と夜会を主催したマハラジャ・カーンその人だ。

貴族たち、特にサイド3の六大家でありながら零落してしまったトト家などの求めに応じてしぶしぶ夜会を開いたのだが、シャルンホルストへ渡りをつけるのに必死な貴族たちの姿を見るといささかげんなりせざるを得ない。

だがそれ以上にマハラジャ・カーンには頭の痛いことがあるのだ。

「…… マーモン、少しは笑顔を見せたらどうだ。主催者の娘としてそれくらいはしてほしい」

「……………」

マーモン・カーンは別に反発の言葉を言うわけではないが、マハラジャ・カーンの求めに応じるわけでもなく、にこりもしない。その濃いピンクの髪がパステルカラーのドレスとよく似合い、整った顔立ちが余計に引き立つのだが、硬い表情がそれを台無しにしてしまう。

「お前がそうなった原因は分かるが、二十歳になってもそれでは将来が心配になる、マーモン」

やんわりと注意するが、自分の娘だというのにそれ以上は言うことができない。マハラジャ・カーンはマーモンが頑なになってしまった原因が分かるし、それを作り出したのは自分の責任だと知っているからだ。

実はマーモン・カーンはたった一度だけマハラジャ・カーンに願い事をしたことがある。

だが、それは叶えられなかった！

かつてコンスコンが土星開拓団を率いて出発する時のこと、マーモンは必死な顔で頼んでいた。

「土星へ行きたい！ あのコンスコン大将が行くなら、一緒に!!」

マハラジャ・カーンは普段からクールなハマーンがそれほど強く願
い事をするのを見たことがなかった。そして同時にハマーンがおそ
らく一度会っただけのコンスコンに執着するのも驚いた。

たぶん、あの第二次ルウム会戦前にズム・シティで会った時のこと、
コンスコンはハマーンが絶対に戦場に行くことがないようにした。
普段は軍人というよりコックが似合いそうなコンスコンがそういう
時には、信念に基づき、議論の余地がないほどきっぱりと断言するの
だ。

それをハマーンは鮮烈な記憶として残している。だからこれほど
土星行きを願うのだろう。

しかし、マハラジャ・カーンはそれを許してやることはできなかつ
た。

今まで我儘や願い事など言っただけの娘だ。

嫌がっていてもフラナガン機関へ行ってくれた聞き分けのいい娘
なのだ。

そんな可愛い娘のたった一度の願いをできれば聞いてやりたかつ
た。

しかしいくら愛情を持っていても、サイド3でも名家中の名家カー
ン家というものを背負っているからには、ハマーンを二度と戻れない
かもしれない土星へ行かせることはできない。

それ以来、ハマーン・カーンは自分の殻に閉じこもってしまったの
だ。

硬い表情は全てを拒絶する明確な意思表示である。

ハマーンは途中から人々の喧騒を逃れるようにして、夜会の広間か
ら出た。一階の大広間から数段の階段を経るとすぐ庭園になる。よ
く手入れされた庭園は、カーン家が他の貴族とは違い、没落と無縁で
あることを示している。本当なら父マハラジャ・カーンの手腕を喜ぶ
べきところだが、そんな気にはなれない。庭園で美しく咲くバラたち
もハマーンの目には何の価値もなかった。

「父上には悪いと思っただけだ…… 俗物どもに笑顔を振る舞

うことはできそうにもない」

ハマーンとしてもマハラジャ・カーンには悪いことをしていると自覚している。しかしこじれてしまった父娘の関係を修復するきっかけを掴めないでいたのだ。

そんなハマーンを広間の窓から見ってしまった者がいる。この夜会に連れてこられた名家の子息、まだ十代の少年である。

ハマーンに目を奪われ、周囲の者に誰かと問い、そして知る。

「あれがカーン家の令嬢、きれいだ…… ハマーン・カーン、いやハマーン様」

ついフラフラとハマーンの後ろを付いて行ってしまった。

すると、話しかけようとするタイミングより先にハマーンがくるりと振り返り、きつい視線を浴びせてきたではないか！ ことさら忍び寄ったわけではないが音は立てていないはずなのに、どうしてなのか感知されてしまった。

少年は急なことに用意していた言葉も発せない。

「ハマーン様……」

「何か用か？」

「あ、あの、僕は……」

「用がないなら付いてくるな、俗物！」

あっさりハマーンは切って捨て、再び歩き去ろうとした。

「ちよつと待つて…… せめて自己紹介させてほしい」

それでもハマーンは何の興味も魅かれず、足を止めようとはしない。その少年が悪いわけではないが、用事もないのに話す意味などどこにあるう。初心そうな少年と話すどころか目もくれない有様だ。

「僕の名はマシユマー・セロ、話をしたいんだ」

この時、ハマーンはピタリと足を止めた。

この紫髪の少年に向き直る。

「何!?! セロだと！ ではお前はセロ家の者か」

「やつと止まってくれたね。そ、そう、僕の父はセロ家の当主をしている」

「なるほど…… しかし同じセロ家でもお前は似ていないものだな。あの方には」

「あ、あの方って」

「この馬鹿者！ コンスコン・セロだ！ 決まっているだろう。お前の叔父に当たる偉大な方だ」

「え、ジオンを救ったコンスコン大将のこと？ 戦術にも戦略にも優れ、連邦の大軍を幾度も破ったコンスコン大将、確かに凄いとは思いますが」

「当たり前だ。これ以上凄い方がいるものか。戦いで負けなしだけではない。正しきを尊び、多くの者を救った方なのだ。この私さえも……」

「ハマーン様？」

「とにかく、素晴らしい方なのだ。同じセロ家でもお前などとは違う」
コンスコンを語る時だけ、ハマーン・カーンは実に饒舌になり、自分のことでもないのに誇らしげだ。

だがこの場合にはマシユマーという少年にも言い分があった。

「で、でも僕もセロ家だよ。これからどうなるか分からないじゃないか。コンスコンの叔父さんだって僕の年には平凡な士官学校生だったって聞くよ」

「何！ お前ごときが比べられるものか!!」

「ご、ごめん、怒らせるつもりじゃなかったんだ。ただ僕だって可能性があると言いたくて……」

「可能性などあるわけが無い！ …… あ、いや、こちらも子供に向かって言い過ぎだな。お前に限らず、誰もあの方に近付ける者はいない。あの方は見かけは少しも立派に見えないのだが、正しい信念を持ち、それを言い切れる人間なのだ」

「僕もそうなるよ…… 同じようになってみせる。だから僕と話をし
てほしい、ハマーン様」

「それでも大口だ。同等になどなれるものか。では大負けに負けて、

少しは近付いたと認めれば話をしてもいい」

「じゃあ、その第一歩を見せてあげる、ハマーン様！」

大人ではない少年はそう言うやいなや駆け出す。そしてまさに大気ないことをしようとしている。

ハマーンも釣られて大広間に戻っていくマシユマー少年の後を追った。

その時、夜会の大広間ではシャルンホルストが貴族たち相手に持論を語っている。

「地球連邦は腐り始め、それは加速度的に進むだろう。形骸化した民主主義が全ての元凶なのだ。それを防ぐには真の貴族が立ち上がりねばならん。そして無知な民衆を従え導いてこそ人類の更なる発展がある」

「おお、素晴らしい考え、感服しました。さすがはシャルンホルスト・ロナ殿」

シャルンホルストは一応周囲に啓蒙を試みている。どうせ没落貴族たちに言っても仕方がないと思いながら。実際その通り、シャルンホルストの財力に期待するが思想など誰も聞いていない。何の感銘も受けず、自分が立ち上がるなどと少しも思っていないにもかかわらず口では追従を言う。

これらの者たちは近い将来、キシリア・ザビの更なる改革によって淘汰され、確実に叩き落とされる。というより実力相応のところに着くというのが正しいところだ。

そんな人々の中にマシユマー少年が飛び込んだ！

マシユマーはさつきも同じようなことをシャルンホルストが言っていたのを聞いていて、それを憶えている。だからこそ、シャルンホルストを正面から見て叫んだ！

「それは違う！ 貴族が勝手に導くものじゃない、逆だ！ 民衆を幸せに導く者が真の貴族なんだ！」

「な、なんだと……」

「僕の叔父、コンスコン・セロは貴族の名を捨て、一介の士官から始まり、ついに戦いを終わらせてみんなを幸せにしたんだ。それが本当のやりかた、本当の貴族じゃないか！」

「…………… 言ってくれる、小僧。まあ、少し気に留めておこう」

シャルンホルストはさすがに大人物であり度量がある。自分の考えを変えることはないものの反対意見を潰すことはしない。それよりもこの少年が自分に向かって堂々と言い切ったことに感銘を受けた。

「無鉄砲だが大したものだ。儂に怖気付かないところはマイツツアールより上かもしれん」

マシユマーはその時にはハマーンの方に向き直っている。ハマーンはこのマシユマーがずばりと正論を言っただけの姿を見て、シャルンホルストに負けないほど感銘を受け、驚きを隠せない。

「マシユマー・セロといったか。あの者へよく言ったものだ。一応褒めておいてやる」

「ハマーン様、一步一步あの叔父さんに近付きます。そして同じころに」

「同等になるのは無理だと言ったろう。だがしかし、間違っではないかい」

次に、何とマシユマーはハマーンの前にかしずき、左の手の平を差し伸べる。

一瞬考えた後、ハマーンもその手の平へ右手を伸ばし、上にそつと添える。

この構図はまるで昔の騎士と姫君のようではないか。

「誓ってそうなります。そしてハマーン様、このマシユマーはいつもあなたのお側に」

ハマーンもこの展開に困惑の色を隠せない。

するとマシユマー・セロは後ろに回していた右手の方を出してきた。

そこには何と、赤い薔薇が一輪持たれていたのだ！

それはさつき庭に咲いているものを走りながら折ってきたものだろう。しかし、最も美しい大輪のものが選ばれ、いつの間にか棘も取られている。マシュマーはそれをゆっくりハマーンの伸ばされた手に渡す。芝居じみたことだが真摯な心から行っていることだ。

ハマーンは大きく目を見開いた後、胸元まで薔薇を持ってくると笑顔になった。

「器用なことを…… 子供のくせに！」

ついにけらけら笑いだす。

その二人を離れたところから見ている人間がいた。

「あのハマーンが、笑っている…… 笑うとあんなにも楽し気なのだ。我が娘のことを今知るとは」

マハラジャ・カーンはいつまでもそれを見ていた。

それはカーン家にも、セロ家にも将来の幸せを約束する笑顔だったのだ。

余話 50年後 〳 開拓の発展 〳

俺が地球圏から土星開拓に出発し、50年が過ぎ去った。

もちろん開拓団を乗せたマハル・コロニーは出発から予定ちようどに土星に到着、そして土星の輪に付かず離れずの周回軌道に乗せられた。

それ以来苦闘しながら、幾多の危機を乗り越え、なんとか開拓を進めたと言いたいところだが……

特に苦勞らしい苦勞はなかったのだ！

申し訳ないくらいである。

やはり土星の輪から簡単に氷と鉱物が得られるのは大きい。

つまり水や酸素に不自由することは一切ないということだ。コロニーというのは水などを高度に循環し、できるかぎり節約するものだが、さすがに工業用水は廃棄するのでその分の補給が必要になる。それを気にしないでいいのは、地球圏のコロニーと比べてもずっと条件がいい。

水とヘリウム3というエネルギーがあれば、当然食糧生産も順調だ。

唯一の誤算といえば土星の衛星タイタンは役に立たなかった。タイタンはとても大きく、しかも大気を持つ衛星である。そのため基地を作りやすいと期待したのだが、逆に嵐がひどくて降り立つのが難しかったのだ。それになまじ大気があると低温が余計厳しいものになる。まあタイタンを使わなくともヘリウム3自体は土星からいくらでも調達できる。

たった一度だけトラブルらしいものがあつた。それはコロニーに光と暖かさをもたらす主反応炉の故障である。むろん緊急用の補助反応炉に切り替えたが、土星圏の光では太陽電池の出力が頼りないため、それを加えてもギリギリになってしまう。

しかし、短時間のうちに無事解決することができた。

それは今や技術部門を任せているフランクリン・ビダンが故障原因

を的確に見抜いたことと、アナハイム・エレクトロニクス社からこの土星開拓に応募してきたメカニック、エマリー・オンス、ミリイ・チルダー、チェーン・アギたちが優秀だったことによる。

人々は今も明るい表情をして開拓にいそしんでいる。

コロニーの大きさがあると生活は快適であり、狭さを感じることはない。そしてこの人口では街にも賑わいがあるので、地球から遠いという寂しさを意識しない。何より食糧があれば人の心にもゆとりがある。そのため心配した暴動や分裂は生じないで済んだ。

おまけにこの開拓団は男女比が非常に適切だったのだ。

まあしかし、人間であるからには特定の人物に集中してしまうのは仕方のないこと、その騒ぎについては…… 考えないことにしよう。

人口も予想以上に増えつつある。この50年でついに一千万人の大台に乗った。

コロニーが手狭になる前に、多層化の改装を進めていくか、土星の輪の岩石にもつと基地を造るか、それとも新しいコロニーを建造するか検討したが、意見の圧倒的多数が新コロニー建設だった。そのため資材も生産力もあるのだ。決定打はフランクリン・ビダンが、互いに逆回転するコロニーを連結することで安定性を増すというアイデアを出したことによる。

もう二番目のコロニーは完成し、人の移動を待つばかりになっている。

そして気の早いことに三番目のコロニーの建設まで着手しているではないか。

建設現場には多くの工事用MSたちが働き、資材の運搬や接合をしているのが見える。驚いたことに土星圏で生まれた子供たちはまるで自転車に乗るようにMSを乗りこなすのだ。凄いな。

いや、MSといえば、この土星開拓に子供ながら加わってきた者たちはとうに大人になり、そしてMSパイロットとしても優秀だった。

もちろん途中には色々あった。思い返すと当初、さすがに子供ばかりの生活をさせるわけにもいかず、集めて監督兼世話役を置くことにした。それには料理も上手く、子供好きなキャラ・スーン学徒兵を当てたのだが…… 何とか子供たちは元気だったのだ。

「おとなしく待つてな！ 飯はまだだよ！ つまみ喰いする奴は許さないからね！」

「うわあ、ケチ！」「ケチのおっぱいオバン」「年増！」

「何だつて！ 誰だ今言ったのは!!」

「ギユネイだ！」「俺じゃない！ ジュドー、お前つて奴は……」

憎まれ口を叩く子供らとキャラ・スーン、それも仲がいいからだ。

子供といえ、やはり気になる者たちがいる。

むろん、マハラジャ・カーン准将から託された十二人の子供たちのことだ。どんなものかと思ったが、さすがに年齢が上がるとプルプルとは言わず、落ち着きが出てくる。体力だけは異常に高いのだが、別に攻撃的ではなく、普通の人間だ。それでよかった。

それもこれもみな懐かしいな。今では子供たちも成人どころか中年を通り過ぎている。

あ、結局のところMSに乗れないのは俺くらいなものじゃないか？

ちなみに俺自身はもはや軍の指揮官ではないのだから、もうコンスコン大将とは呼ばれていないが、かといって総帥などと畏れ多い名では呼ばれたくない。

そのため、「代表」という名に落ち着いた。

俺はコンスコン代表と呼ばれている。

実際は調整のためにあれこれ言ったり走り回ったりする損な役どころだ。

そういう俺を周囲は温かく見守っているのかどうかは定かではないが、しかしねぎらいという意味なのか、新コロニーが竣工した今、最初のこのマハル・コロニーを何とコンスコン・シティと改名するそうだ。それについて元のマハルの住民たちさえ大いに賛同しているというのには驚いてしまう。俺の銅像を建てることは、さすがに冗談だ

と思ったが一応断る。第一、そんなものを建てるならガトーの銅像でも立てれば材料費が半分で済むかもしれない。

さて、地球圏とは初期のころにはしばしば連絡を取っていた。

しかしお互い光の速さでも一時間かかる距離、リアルタイム通信はできず、ビデオメールでのやり取りになる。

そこでいくつかの地球圏の動きを知った。

特に俺が知りたかったのは、むろん戦争や動乱のことだ。

土星圏は安定して発展を遂げているが、果たして地球圏はどうなったのか。戦争などせず、皆は幸せに暮らしているのだろうか。

幸いにして、人類を二分するような大きな戦争は起きなかったようだ。

むろん細かな諍いはあるし、テロも収まらないが、存亡にかかわるほどのことはない。

それでも一度は艦隊を動員せざるを得ない動乱があった。

俺が地球圏を離れて十五年後、ゾルタン・アツカネンの乱というものだ。

これは裏にハバロやカイザスといったギレン思想の文官がいて、密かに支援をして始まったことだが、おまけに連邦へ支配力を強めようとしたルオ商会にまでつながっていて意外に根は深かった。

だが、その全ての影にサイド3の発展を快く思わないサイド2の思惑があり、全てをデザインしたと言われるが、そこまで明らかにすることはできなかつた。

ともあれゾルタン・アツカネンは真のジオン主義なるものを引っさげて乱を起こし、あろうことか連邦側ではなくサイド3ジオンの中枢を押しえようとしたのだ。サイド3は慌ててカスペン少将に迎撃を命じたり、シヤア少将をアクシズから呼び戻そうとしたのだが、一手遅かつたことは否めない。

だがここで何と連邦軍が出動し、その乱をすみやかに片付けた。もちろんそれに当たったのはグリーン・ワイアット元帥である。

ワイアットは単なる力押しはしなかった。持ち前の洞察力を活かし、細かなところまで見通して相手の弱点を突く。

ゾルタン・アツカネンの副将格であるレズン・シュナイダーに接近し、裏取引を持ちかけたのだ。レズン・シュナイダーは好戦的ではあるが決して虐殺が好きなのではなく、アツカネンの無駄な虐殺を伴うやり方についていけないものを感じていたところ、グリーン・ワイアットの話に乗ってきた。

そうやって分裂させ、戦力を削いだ上に、ワイアットは付け入る隙の全くない艦隊戦でゾルタン・アツカネンを片付ける。

最後はアツカネンの尋常ではない個人技に手こずってしまったのは確かだが、それはちようど連邦軍でも歴戦のサウス・バニングらのパイロットが第一線を退き、養成機関などへ移ってしまった時期だからだ。代わって主軸になっているケーラ・スウ、サラ・ザビアロフといった新しい世代のパイロットが奮闘するも、能力はともかく実戦経験の薄さを突かれ取り逃がしそうになる。だが、サイド4出身のメカニックからパイロットに転じてきたバナージ・リンクスという若者の活躍によって、ついに仕留めることができた。

世間はグリーン・ワイアットが鮮やかに表技も裏技も駆使し、最小限の犠牲で乱を収めたことに目を見張った。

連邦随一の知将は健在だったのだ。

そして世間は二度驚くことになる。ワイアットはその戦いを最後にして政界へ転じることを表明した。このまま軍にいても連邦の腐敗は止められず、それを正すためには政治の世界に入るのが一番とワイアットは思い始めていたからである。

ワイアットがそうした頃、もう一人の軍属が政界に転じた。

それは、かつての戦争でジオンを地球表面から叩き出すのに大いに貢献し、その後も幾多の会戦で活躍した伝説の強襲揚陸艦ホワイトベースの艦長だったブライト・ノアである。人気と知名度により、議員の一端になるのは確実と言われた。

そしてブライト・ノアはグリーン・ワイアットとほぼ同じ主張を

持っている。

連邦政府の腐敗と既得権益化を防ぎ、地球とコロニー群の調和のとれた発展を目指すものだ。そうしなければ人類は先細りになり再び戦乱が起きてしまうという危機感がある。

お互いそれを確認するべく、二人はグリーン・ワイアットの私邸で会談を持つ。

ブライトがそこに到着すると意外な人物が門のところで待っていた。

「ブライト・ノア元中佐ですな、歓迎いたします。どうかこちらへ。広間でワイアット様がお待ちです」

「こ、これは、ステファン・ヘボン中将……」

「もう中将ではありませんよ。私も軍属は辞めました。ワイアット閣下が辞めたと同時に。一生ワイアット閣下の副官のつもりでしたので、今度は秘書長として」

ブライト・ノアは案内され、広間でグリーン・ワイアットと会い握手を交わす。そして話してみるとやはり思想が一致していると知る。

「どうかな、これはアッサムの逸品だよ。上品なコクを感じてもらえればありがたいのだが」

「いい紅茶だと思います。ワイアット閣下、いえワイアット議員、しかし知っておくべきなのはこの紅茶を楽しむのも平和と地球環境の保全がなされてこそ」

「おお、そうだよ。その通りだ。そのためには連邦政府を常に見張る者が必要になる」

「全く、その通りでしょう」

その会談中、ブライト・ノアと共に来ていたハサウエイ・ノアは別室にて待たされていた。

後でワイアットに紹介されるのだろうが、重要な会談中は同席できないからだ。

ハサウエイはソファアールでおとなしく本を読んでいたのだが、ふと目

を上げると1メートルもない距離に女の子がいるのに気付いて驚く。

それは豊かな緑の髪を持ち、目の大きな少女だった。

「今気付いたの？ あなたって鈍いのね。私はあなたが門に来る前から分かってたわよ」

「君はなんだい？ 僕はハサウエイ・ノア、父の付き添いで来たんだ」

「ふうん、私はクエス・ワイアット。ハサウエイ、退屈でしょ。どこか行かない？」

余話 50年後 〵 巻き起こる戦禍 〵

クエス・ワイアットはハサウエイを外へ誘い出そうとする。言い方はそれだが、退屈していたのはもちろんハサウエイではなくクエスの方だ。

しかし、父に似て真面目なハサウエイは困るしかない。

「それはだめだよ。ここで待つてないと。君もそうした方がいいよ。たぶん、後で正式に紹介されると思うんだ」

「そう言うと思った。大人の言いなりなのね」

「え、言いなりって……」

「冗談よ。私も大人は嫌いだけどパパは好きだわ。知ってる？ パパは口ほど皮肉屋じゃないのよ」

「グリーン・ワイアット議員のこと？」

「そうよ。真面目で堅くて、紅茶の大好きな議員のことよ。私もさんざん紅茶には詳しくなったわ。本当はコーヒーの方が好きなんだけど、これは内緒ね」

「へえ……」

ハサウエイ・ノアはこのクエスという女の子にペースを握られてしまい、会話も振り回されている。

しかし不愉快ではなかった。

それはハサウエイがまだ女の子慣れしていないからだけではなく、母のミライや妹のチューミンにはない天真爛漫さがあるからだ。

そこからもしばらく会話をしていたが、突然終わった。

「たぶん今紅茶を出してるわ。この時間はいつもそうだし」

「じゃあ僕の父も紅茶も飲んでるかな。君と同じでコーヒーの方が好きははずなんだけど」

「……」

「どうしたの？」

「……………」

クエス・ワイアットは口をあけたまましゃべらず、固まっている。何か別のものに集中して動きが止まったのだ。

「ハサウエイ！ 何かが来ている。悪い感じがするわ！」

「わ、悪い感じって……」

「今度こそ一緒に来て！」

そう言うのと部屋からクエスは駆け出す。しかもドアではなく窓を開けて裸足で庭園に降り立ったのだ。さすがにこれを見るとハサウエイも尋常なことではないと分かり、直ぐにクエスを追って走っていく。

クエスはハサウエイと一緒に来てくれることは、振り返らないでも分かっている。そのまま庭園を走り、手頃な木を見つけ、するとそれに登っていく。ある程度登ると庭園の生垣を越えて外が見え、そこに何かないか見渡す。自分でも何を見たいのか分からないのだが。

しかし、妙なものが見えたではないか。

それは敷地の外にいた男たちだ。ごく普通の身なりをして、偶然車で通りかかったように偽装しているが、双眼鏡で邸内を探っていたのをクエスを見た。

その男たちと目が合う。彼らは驚き、最初こそ逃げ出すそぶりを見せたが、尚もクエスが凝視していると途中で逃げるのをやめ、別な動きをしようとしている。

クエスは危険なものを感じ、そのまま木から手を放して落ちる。もちろん、下でハサウエイが受け止めてくれると分かっているからだ。

「クエス、無茶な……」

「ハサウエイ、直ぐに戻ってステファン・ヘボンに言って！ たぶん、外にいた人らは何か企んでいる…… テロか何かの準備だったのよ！」

「えっ!？」

思ったよりは軽かったが、それでもクエスを受け止めれば自分が下敷きの格好になる。しかし時間の猶予はなく今度はハサウエイから

立ち上がって駆け戻り、重要なメッセージを伝えに行く。

その後あちこちの方面に通達が行き、テログループの摘発と事件の発生を未然に防ぐことになったのだ。

それとは別に、会談の終了後クエスはグリーン・ワイアットから、ハサウエイはブライト・ノアからそれぞれ紹介を受けている。

クエスもハサウエイも互いに型通りの挨拶をしたのだが、その目はこの出来事を通して確かに通じるものが存在する。なぜかしら二人には確かな予感めいたものが育ちつつあるのだ。

これから先、時には反発し、時には喧嘩しつつも二人の人生は決して離れるものではないという予感だった。

さて、ゾルタン・アツカネンの乱から五年後、すなわち今から三十年前に俺はドズル閣下からビデオメールを受け取った。

何事かジオンに異変が起こったのかと身構えてそれを再生する。

「コンスコンよ…… 終わりだ…… もう何も希望が無い」

ドズル閣下の言いようもない哀れな声だ。

その続きを固唾を呑んで聞いてみれば、異変といえば異変には違いないが、返事をする気も失せるようなことだった。

「この間まで小さくて可愛いミネバだったのに…… そのミネバが…… 何も言えんし、言うとなら怒られるのだ。どうすればいい、コンスコン」

よくよく聞けば、何とゾルタン・アツカネンを討ち取った英雄、バナージ・リンクスとミネバ・ザビがどういうきつかけがあったのか仲良くなっているらしい。二人とも純朴な者同士、このまま結婚まで行きそうな気配だという。

ミネバ・ザビはザビ家の正統な後継者であり、サイド3ジオンでは最も貴人というのにふさわしく、もちろん貴族院議長の座が約束されている。

それを盾に、ただのパイロットとミネバの結婚など身分違いだどドズル閣下が言い立てようにも、藪蛇になってしまったとは！

というのはバナージ・リンクスを調査したところ、意外なことに出自は悪くなかったのだ。

万事休すである。もちろん、ドズル閣下にとって。

そしてキシリア閣下は別に反対などしていかないのだから、もうどうにもならない。

俺はそんなつまらない愚痴を聞かされても何もできないのは分かっているの、「忙しいです」それだけを返信で送った。

そういう個人ごとは、この際小さなことだ。

やはりいつまでも平和が続くものではなかった。

人の思惑とは別に、年月の経過と共に社会には歪みが出る。

最初は小さな歪みがしだいに大きくなり、そして亀裂となる。それが限度を超えた時、戦乱が巻き起こるのだろう。ちょうどアースノイドがスペースノイドを抑圧した歪みが積み重なり、ついにはサイド3の宣戦につながったように。

人類は戦争なしに新時代を迎えられないのだろうか。

サイド3はサイド5、サイド6と事実上の同盟関係にある。

その他、サイド7は地球連邦軍の最大拠点であるルナツーのお膝元である関係上、連邦にべつたりであり独自の動きはしない。

残るサイド1、2、4はどうだろう。

サイド3ジオンへのトラウマと警戒感もあり、いくらそれらの復興をサイド3が手助けしても一定の距離を空けられる。決して同盟関係にならないのだ。

とりわけサイド4においてそれは顕著だったのだが、それには理由が存在する。

サイド1やサイド2はかつてジオンに叩かれたが、実際のところ戦争の初頭ではむしろ共闘の誘いを受けていたのだ。スペースノイドの独立を旗印として起こした戦争である以上、当然といえば当然のことだ。

しかしその誘いに乗らず、それどころか勝ち馬に乗ろうと連邦に味

方する動きをしていたのが事実だった。ジオンが勝てるとはとうてい見えなかったためである。それらをジオンが叩いたのは苛烈ではあっても先制攻撃の一つであり、後方の攪乱要因を断つという戦略上の意味が存在していたのだ。

しかしサイド4は別にジオンに敵対する動きはしていなかった。

ただサイド6のように中立宣言をするのが、わずか一歩遅れただけだった。それなのにサイド1やサイド2と同時に叩かれた、つまりとばっちりを食っただけである。そのためサイド4は余計にジオンを憎み、生き残りはスペースノイドであるにもかかわらず、サイド4ムーア同胞団を結成し積極的にジオンに敵対したという経緯がある。逆にジオンの側ではスペースノイドなのに敵対してきたそれら生き残りを快く思っていない。

だがしかし、ここにきてそのわだかまりも雪解けを迎えた。

サイド4もまた復興が進んでいるが、その中でサイド4ムーア同胞団の中核であり戦前の首長の息子でもあるイオ・フレミングの政界入りを願う声が多々あった。しかし本人はそれを拒み、サイド4自衛警備隊長という第一線から退こうとしなかったのだ。

「俺に政治は合わない。なぜなら議会でジャズを鳴らすと怒る奴が出てくる」

難しい政治のことは、イオと違い退役して政治に関わるようになったクローディア・ペールに任せ、本人はコックピットから離れない。

だがイオは恋人でもあるクローディアに一つだけ口を出すことがあった。

「ジオンといつまでも喧嘩をするな。俺でさえ今はジオンは嫌いじゃない。ジオンだっているんな奴がいるし、あの義足野郎だってそうだ。音楽の趣味だけは合わないが好い奴だった」

イオ・フレミングは戦争後、戦いでは宿敵であり、自分のゼフィランサスを倒した因縁のダリル・ローレンツに会ってみようという気になった。一方、ダリルの方も既に敵愾心はなく、拒む気はない。

そして会ってみてイオは知ったのだ。

ダリルが負傷兵となっても仲間たちと戦い続けたこと、そして何よ

りダリル自身が穏やかで誠実な青年であり、サイド4の腹黒い政治家たちよりもよほど好感が持てる人間だった。

そんなことを契機として、サイド4はサイド3ジオンと同盟こそしないが、少なくとも足を引っ張るほど敵対するわけではなくなった。そしてサイド4はサイド7と共にどちらかという連邦側へ依存を強めることになっていく。

すると危機感を覚えたのはサイド1とサイド2である。

その二つはもちろん最古参のコロニー群であり、人口で言えばサイド3などよりずっと多い、いわば大国である。先端技術力でこそサイド3ジオンより劣るが、復興すれば総合的な生産力では凌駕する。特に食料生産では余剰分を月面やルナツーに売却するほどだ。

それが今、心情的にサイド3へ対抗する仲間と思っていたサイド4が離れていってしまうとは。

するとかえってサイド1とサイド2の方が人類社会で孤立しようとしているではないか。

そんな政治情勢、サイド1とサイド2は必然的に結びつきを深める。

戦争前ならどちらかというライバル関係であり仲は良くなかったのだが、そんな過去を捨て、ついに同盟を結んだのだ。

そしてサイド3、5、6のブロック、サイド4、7、月面のブロックに対抗するブロックとなった。

こうして三つの政治的ブロックが並び、対立する構図ができあがる。

混乱する情勢下、連鎖的に他の勢力が付け入る隙ともなる。

そこで動いた最たるものがブツホ・コンツェルンであり、そして持てる力はゾルタン・アッカネンなどの比ではない。圧倒的な資金力は本格的な軍事組織と開発力を擁するのに足る。もはや領土のない国家と言っても過言ではないが、ついにそれが牙を剥く時が来たのだ。

地球圏に三つの政治的ブロックが対立し、互いに牽制しあうようになっていく。これでは動乱が起きてしまっても自分の陣営に得か損か、そんな駆け引きを考えるだけで協調できるはずもない。

逆に言えば、何か事を起こそうとする側には実に好都合である。

ブツホ・コンツェルンは長いこと待っていた。十年、二十年もの間、そんな情勢を。

今や人類社会のどこにでも深く浸透し、その持てる力は人類社会の一割を支配すると言われたほどの強大なコンツェルンだ。既にサイドー1には自社のコロニーを建造し、人口は少ないとはいえ一種の治外法権を作り出している。

しかしながら、企業活動をして富を蓄えるだけに満足することはない。

富が最終目的ではない。

それは政治的な支配に至るただの手段と認識していたのである。

創始者であるシャルンホルスト・ブツホから一族は脈々とコスモ貴族主義を受け継ぎ、いずれは独自の勢力圏を築き、その思想のもとに統治する野心を隠していた。その貴族主義がいかに優れているものか人類に見せつけ、それで統一するためである。

思いだけではなく具体的な策もある。

ブツホ・コンツェルンは警備の一環と主張し、クロスボーン・バンガードという独自の軍事組織まで持つ。その艦艇やMSという軍事力は明らかに自衛のものを超え、もはや非合法の領域にまで踏み込んでいる。

自社のコロニーは実際その拠点として運用するために手に入れたようなものだ。

いずれ行こう武力侵攻のため着々と準備を進めている。

機動兵力の絶対数ではさすがに連邦軍に及ぶようなものではない。しかし逆に先駆けるように技術を進めていく。そしてついに念願の

小型超高性能MSの開発に成功し、数の不足は質で補えるところまできたのだ。

後は仕掛けるタイミングの問題になった。

こうした動きについてサイド3ジオンのキシリア閣下が察知しないはずがない。

ダメ押しに、ブツホ・コンツエルンに勤めている元ジオンパイロットの夫妻が決死の逃亡をしてきた。夫妻はクロスボーン・バンガードのテストパイロットにも関わったことがあったため実情を知り、それを伝えるにきたのだ。

ここでクロスボーン・バンガードの軍事的先進性と野望を知る。事態ははるかに差し迫っていた。

「……それで、明らかに軍事侵攻のためのMSなのだな？」

「そ、そうです、キシリア閣下。ブツホ・コンツエルンはもはや軍事組織、開発した新型MSの性能は今までのものより格段に優れ、恐ろしいことに急ピッチで量産化に踏み切ってます」

「そうか。バーナード・ワイズマン元曹長、ジオンのためによく知らせてくれた。以後はサイド3に移り住めばいい」

だがキシリア閣下が危機感を募らせても対策は限られる。

というのは、サイド3ジオンはかつてと異なり、既に軍事大国の面影は失われていたのだ。

兵器開発よりも総合的な発展に力を入れた結果、経済力でこそブロックの一つを引っ張るようになったが、武力の面では質でも量でも衰えてしまった。かつてMSという新機軸で世を席卷したようなジオンではなくなっている。

時はもはやあの戦争から四十年が過ぎ去った。

今からジオンが備えようにも実戦経験のある者の多くは世を去っている。更にパイロットともなればあまりに乏しい。自前の士官学校はあるが、その教官さえ実戦経験がない始末、育成もままならない。

仮にブツホ・コンツエルンがサイド3を標的として仕掛けてきた場

合に退けられるか……

たぶん無理だろう。

キシリア閣下は間もなく引退し、長く後見人として自分が鍛えてきたグレミー・トトに後進を譲るつもりであった。巧妙にも表向きはトト家の後継としてグレミー・トトを立てる一方、最大の貴族家であるザビ家自体はミネバ・ザビが受け継ぐ、そういうところが実に上手い。世代は代わっていくもの、自分の引き際を自分で決めて幕を引く、そんなキシリア閣下はこの動乱への対処を引退前の最後の仕事と決めた。そして手を打っていくのだが、その一つとして土星圏へ援助の要請を申し込んできたのだ。

俺への通信自体はドズル閣下が画面に出ている。

「コンスコン、元気か？　俺はこんなだが、まだくたばることはない」

俺は目を疑った。

もちろん最後に会ってから四十年、ドズル閣下が老けているのは当たり前であり、そんなことは俺もそうなのだからお互い様だ。しかし今、画面のドズル閣下は軍服こそ着ているものの、病院のベッドに半身を預けながら語っているではないか！

あの頑健を絵に描いたようで、殺しても死なないようなドズル閣下が、病院とは。

「……　こんな情勢だ。コンスコン、なんとも宇宙は落ち着かんものだな。財閥ごときが軍事力で攻めてこようとは、ちよつと前なら俺がビッグザムで叩きのめしてやるところだ」

そしてジオンとして要請するらしい。人的支援、それも実戦経験のある者を欲しいという。

俺は決断した。

地球圏を出る時、一緒に優秀なパイロットを大量に連れてきている。そう願ったわけでもないが結果的にそうなってしまったから仕方がない。それは皆、コンスコン機動艦隊を支えてきた伝説級のパイロットたちである。

今、ジオンを助けるため彼らを帰そう。

もうMSパイロットの第一線で働ける年齢ではないかもしれないが、後進を育てるのには大いに役に立つ。

しかもタイミングがいいことに土星圏では新鋭の高速大型輸送艦が完成したところなのだ。それは木星圏の持つジュピトリスよりも大型で、しかも速く、おそらく今までの半分の四年で地球圏に到着できる性能を持っている。

今度は別離だ。

俺はガトー、カリウス、シャリア・ブル、クスコ・アル、ツエーン、カヤハワなどここで別れなくてはならない。

「ガトー、頼んだ。再びジオンを助けてくれ」

「はっ、コンスコン閣下も壮健で……まことに、万感の思いがします」

「俺も同じだ。長いこと世話になった、ガトー。覚えているか、ソロモンの時から本当にエースとしてよくやってくれた。ジオンが負けなかったのはお前のおかげといっても過言じゃない。向こうに帰ったら無理をするな。なにもまたエースとして活躍しろというのではなく、ジオンを守るような後進を育て上げればいいんだ」

万感の思いなのは俺の方である。幾多の思い出がよぎる中、これがガトーらを見た最後になる。

尚もツエーンが「尻を蹴る人間がいなくなったからといって羽を伸ばしたら承知しないわよー」などと言っていたのも記憶の一部に変わってしまった。

ちなみにケリイ・レズナーは既にいない。

ケリイの溢れる冒険精神は土星にも留まらなかったのだ！

高速大型輸送艦の一号艦が完成した時、それに乗って何と天王星探検に出た。

早急にそれをする必要はなかったのだが、いずれはしなくてはならないことでもある。もちろん植民の可能性を一度は探る必要があるからだ。

土星より更に遠く、太陽系外縁にある天王星は正直言って植民に適

しているとは思えない。

実は輪を持つているのだが土星のものよりはるか薄い、つまり水と鉱物資源がまばらにしかないと予想される。ヘリウム₃だけは天王星から取れるが逆に太陽光はわずかなものだ。

しかしながら、思いがけなく有用な鉱物が存在するのかもしれない、それは実際探検してみないと分からない。

ケリイは喜んで夫婦ともども旅立った。

こうして人類は宇宙を探索していくのだろうか。

いずれは惑星を探索し尽くし、恒星系にまで手を伸ばすほどに。

まあ、そこまで行くには完璧なコールドスリープ技術と、推進剤を使わない新構造のエンジンが必要になるのだろう。もちろん、俺が届くことのないはるか未来の話である。

もう一つ、おまけのことだが、俺は通信後のドズル閣下のことは聞いていない。

たぶんそれはドズル閣下が手を回したせいなのだ。俺のところへ自分の訃報などが届かないようにしたんだろう。そんな悲しい知らせは確かに不要だ。

俺とドズル閣下、二人で士官学校や戦争の時期を乗り越えた思い出は素晴らしく、色褪せるにはあまりに惜しい。

時代が移り変わってもこの繋がりは永遠のものだ。そこに終わりがあらずもない。

だがしかし時の流れは引き返すことも澱むこともなく、それは前へ向かって流れるだけである。

俺の考えるべきことは昔のことではなく今の人々のことなのだ。

結局のところ、ガトーらがジオンに到着する前にブツホ・コンツェルンの動乱が起きてしまった。

直接的なきっかけは、何とアナハイム・エレクトロニクス社の衰退が原因だった。

一時期は連邦に深く食い込み、絶大な権勢を誇ったアナハイム社、軍事関連の受注を一手に引き受けて死の商人とまで言われたアナハイム社はもはや形骸と化している。

乾坤一擲の思いを込め、全社を挙げて新規開発したMSは悲しいことに純粋な性能で劣り、コンペで負ける始末だった。

それも時の流れだが、もちろんブツホ・コンツェルンの興盛がその理由の一つだろう。そしてアナハイム・エレクトロニクス社は重要な開発拠点であったインダストリアルという事実上の自社コロニーを売り払う決断までしたのだ。もはや最先端技術から脱落し、人類社会のメインプレイヤーの座を放棄、小さくまとまることで延命しようという苦渋の策である。

ところがその売り先もまたブツホ・コンツェルンだった。

おまけにそのインダストリアルはサイド5にあったのだが、何と連邦軍の秘密開発拠点と近かったのだ。というよりブツホ・コンツェルンはそのことを掴み、連邦軍の開発拠点を叩きたいからこそ買ったというのが本当である。

計画的に引き起こされた小競り合いがたちまち燃え上がり、本格的な軍事衝突になる。

ブツホ・コンツェルンのクロスボーン・バンガードがついには解き放たれた。

宇宙を跋扈し、次々に連邦軍拠点や主要コロニーへ奇襲を仕掛ける。MSも優秀だが、指揮官もまた有能だった。

多くのコロニーが戦いに巻き込まれ人々が犠牲になってしまう。

しかし、結局のところブツホ・コンツェルンの野望はならなかったのだ。サイド3の中枢や地球にまで戦禍が及ぶ前に収束した。

クロスボーン・バンガードはむろん初期には優勢だった。

それはテロに近い局地戦や民間攻撃だけではなく、驚くべきことに大会戦まで含まれる。慌ててルナツーや月面から出動してきた連邦艦隊総数九十隻をサイド5まで引きつけ、そこで包囲殲滅するという

戦いまでしてのけたのだ。

これは歴史上第四次ルウム会戦と呼ばれることになる。

クロスボーン・バンガードのエースたち、「黒き死神」ザビーネ・シャルや「紫紺の電光」ドレル・ロナはかつての赤い彗星のような活躍をしてみせ、物量を盾に力押しにしてくる連邦軍を逆に叩き潰す。連邦軍は途中から指揮を引き継いだムバラク少将が活路を開いて逃げたが、それでも半数が宇宙の藻屑と化した。

この戦勝をもとにサイド5を接收し、そこで貴族主義国家の建国を宣言するところまでは順調にいった。

だがそれがブツホ・コンツェルンのピークとなる。

戦略の乱れから全てを失うことになった。

具体的にはクロスボーン・バンガードを統率するカロツゾ・ロナが暴走してしまったのだ。というよりその暴走を止められるだけの人間が周囲にいなかったのが全ての原因である。

貴族主義国家は、まさにその貴族主義がもたらす硬直化した独裁のために滅んだ。

これは皮肉としか言いようがない結果ではないか。

手堅く建国した後はいったんそれ以上を求めない姿勢を見せ、あとは穏健な政治的折衝に入り味方を増やしていくという戦略であったのにもかかわらず、カロツゾ・ロナは途中から戦略を変えてしまった。ルウムの大勝により軍事力を過信し、戦線を能力以上に広げ過ぎた。

最大の過ちはコロニー住民に対し無駄に残虐行為をして挑発したことだ。今となつては分からないが恐怖を統治の手段として利用しようとしたのかもしれない。

宇宙の各政治ブロックは確かに協調することはなく、結果的に連邦軍は支援も受けられず補充もない有り様になる。しかしながら残虐行為が表に出れば必死で戦わざるを得なくなる。また、さすがに各政治ブロックもいったんは対立を棚上げにして、貴族主義に乗っ取られたサイド5とブツホ・コンツェルンの本拠のあるサイド1に対し、包囲体制を作り出す。

そうならば無敵のクロスボーン・バンガードといえども徐々に疲弊していくのは当然である。

おまけにクロスボーン・バンガードは一つの重要な局地戦で敗退を余儀なくされてしまった。

サイド5に最も近いことからサイド3ジオンにもまた矛先を向け、一度は侵攻作戦を企てている。

それに対しジオンは乏しい戦力をア・バオア・クーに固めて防御に専念すると見せかけて罫を張る。そこを陥落させるべきか無視するべきか迷わせ、隙を作り出した瞬間、迂回奇襲を敢行した。

この戦術がうまく嵌り、クロスボーン・バンガードを撤退させることに成功する。

ジオン側の奇襲部隊を率いていたのはレズン・シユナイダーだったが、奮戦の末、命と引き換えに目的を達成した。

ジオンに復帰していた彼女はついにジオンのために死ぬことができ、満足だったと伝えられている。

余話 50年後 〵 戦いの予兆 〵

クロスボーン・バンガードはア・バオア・クー宙域において、得意とする奇襲をジオンから逆に仕掛けられ、一時撤収を余儀なくされたのだ。

ジオンは少ない戦力でも鮮やかな戦いを見せつけた。

始めにア・バオア・クーをエサにして引き付け、向こうの取りうる戦術を限定した。

その上で、包囲が完成する直前という油断の瞬間を狙いすましての奇襲攻撃だ。

正直ジオンのMSは良くてザクⅢ、悪くすればケンプファーまでいる始末である。

この動乱が予想以上に広がったことから連邦軍は渋々MSのデッドコピーを許したが、それはジェガンのベースモデルに限られている。もちろん技術情報をコロニー自治政府などに出したくないのが本音だからだ。しかも時期が遅れたために結局生産は間に合っていない。

これでは連邦軍主力の改良型ジェガンや、やっと配備の始まつたりゼルですらクロスボーン・バンガードの一般用MSデナン・ゲーになわない有様なのに、ましてジオンのMSが正面から立ち向かったら、あまりに困難な戦いを強いられる。

そのため、ジオンは正攻法をとっていない。そして囿役となったヒル・ドーンソン隊もうまくやったし、思いつきりのいい突進奇襲をかけたレズン・シュナイダーやアンジェロ・ザウパーもよく戦った。

「さあ、あたしも長く生き過ぎた。そろそろ空に還るよ。ただし、ここを全員を道連れにね！」

なんとか戦いを優勢に持って行ったとはいえ、ジオンのMS隊はロボロだ。性能差のため、一機、また一機と消えていく。

その中で今のセリフをレズン・シュナイダーが言った。

あの戦争の頃の強兵は既になく、貧弱になったジオン軍といえども、その士気と誇りは少しも風化していなかった。勇士たちへ脈々と受け継がれていたのだ。

勇士が勇士たるべき姿、それは散り際に最も美しい。

唯一の生き残りであるロニ・ガーベイが涙と共に伝えるばかりである。

実は、ジオンがこの戦力差でも勝てるよう戦術を進呈したのは俺だ。

土星圏にとどまっている俺は時間のかかる通信しかできない。それではわずかなことしかしようもないが、持てる戦力で最大の効果を発揮する戦術を考えることはする。練り上げたデザインを大まかに伝えることは可能だったのだ。

だがこの奮戦でもクロスボーン・バンガードの戦力を大きく削いだわけではなく、態勢を立て直したクロスボーン・バンガードが再び侵攻してくることが予想された。

しかし、そこはキシリア閣下が未然に防ぎ切った。

キシリア閣下は小惑星帯にいるシャア少将をあえて呼び戻すことはせず、逆に小惑星帯の完全掌握を命じたのだ。

元々月の裏側に位置するジオンは小惑星帯開発に有利であり、アクシズを拠点として開発競争では他のサイドを常にリードしている。そこが厳然とした強みなのである。そんなジオンが小惑星帯を押さえってしまうことは戦略的に重大であり、これをカードにして取引を持ちかけたのだ！

結果、クロスボーン・バンガードの再侵攻を防ぎ、ジオンとの単独講和のテーブルに着かせることまでやってのけた。

キシリア閣下はセンスと胆力で長くジオンを盛り立て、戦争では幾度も崖っぷちに立たされたジオンを助けてきた。ジオンが今、宇宙の有力な政治ブロックのリーダーになりおおせているのもキシリア閣下がいてこそだった。

その政治手腕はまた最後に輝き、立派に引退前の仕事をやり遂げた

ことになる。

ちなみにだが、ジオンがクロスボーン・バンガードと安易な妥協はせず毅然とした態度をとれたのは内政が揺るがなかったからであるが、これについてはザビ家へカーン家とセロ家が緊密に協力していたおかげだ。いや、今ではカーン家とセロ家は一つなのだが。

この戦い以降、流れは変わった。

勢いを失ったブツホ・コンツェルンとクロスボーン・バンガードは衰え、動乱は終結に向かう。

ついにカロツゾ・ロナ自らが陣頭に出てテコ入れを図るが、それが逆に致命傷になってしまう。痛恨にも連邦の新規実験MSと優秀なパイロットに斃されてしまったのだ。

カロツゾ・ロナは元々ただのメカ好きの少年だった。それがロナ家にかかわるようになり、一族に婿という形で入った。ロナ家の血統ではないため引け目を感じ、それがかえって周囲に虚勢を張り、孤独に君臨することになってしまった。

自身が滅びると共に、やがて作り上げた体制もまた瓦解していった。それはシャルンホルスト以来の一族の夢が失われることでもある。

だがしかし、この動乱は一つの現実を人々の前に明らかにしてしまったのだ。

それは連邦政府の力が衰えたことである。

本当ならこんな財閥による軍事的動乱が最初から起きないほど連邦はしっかりとしたものでなくてはならなかった。

しかし現実には膨大な犠牲者を出してしまった。

サイド3ジオンは何とか凌ぎ切ったものの、動乱の発端であり主戦場となったサイド5は被害甚大である。

もちろんサイド1のブツホ・コンツェルン本拠コロニーも壊滅している。

また、連邦軍基地のあった月面、ルナツー、サイド1ロンデニオン

コロニーなども同様であり、ついでに巻き込まれる形でサイド4やサイド7の被害も少なくない。

こうして各政治ブロックとも痛手を被ったが、相対的に最も損害が大きかったのは連邦だった。更に弱体化が進んでいく。

良識派政治家として知られるリデイ・マーセナスや、ハサウエイ・ノアらが努力しても連邦政府の斜陽はどうにもならない。

結果的に動乱の戦後処理は甘くなってしまうた。

最も重要なのはブッホ・コンツェルンの莫大な富を押さえることだったのだが、その追求は余りにも遅かった。そのためクロスボーン・バンガードの残党が手早く秘匿してしまい、結果として残党の資金源は簡単に枯れるほど少なくはなく、それをもとに新たな蠢動を始める余地が残った。

政治の表舞台ではこの動乱で漁夫の利を得たサイド2が台頭してくる。

今やサイド2は全サイドの中で最大の人口と生産力を持ち、それを背景に勢力を伸ばしていく。しかも裏でクロスボーン・バンガードの残党と接触し、彼らと密かに取引をして欲しかった最先端軍事技術まで手に入れてしまった。

サイド2に野望の芽が育っていく。

良識派官僚のハンゲルグなどが反対しても動きは止まらない。各コロニー群を抑えるものが存在しない以上、力があれば覇者になれる。その誘惑は実に大きかったのだ。

その下準備を進めていくが、ここで同盟を組んでいたサイド1が頼りにならなくなったため、新たな勢力を戦略パートナーに加えようと画策した。

その相手が木星圏である。

サイド2と木星圏は緊密な連携を軸に力を蓄え、いつか同時に決起する手筈だった。

しかし思いがけないことにクロスボーン・バンガードの動乱からわ

ずか四年後という時期、木星圏の方が先走って連邦に対し反旗を翻してしまった。

それには幾つも理由がある。

木星圏は水と鉱物の不足に悩み、常に耐乏生活を強いられてきた。それはどうにもならず、改善される見込みのない重い枷である。

これだけでも地球圏をうらやみ、怨念ともいうべき感情が木星圏の人間には常に育っている。

理屈ではどうにもならないことだが、それでも存在するものは仕方がない。

今、何と俺と土星圏のせいで余計そういう感情が高まってしまったのだ！

木星圏はもちろん土星圏という新興の開拓を横目に見ている。

最初は懐疑的に思わなくもなかった。地球圏からすると木星圏ははるか辺境であり、そのことに負い目のあった木星圏としてはもっと遠い土星圏に対して逆に優越感を持ち、少なくとも弟分くらいには思っていたのだ。

だが予想に反して土星圏の開拓は順調に進み、木星圏の方がはるかに先発していたのにもかかわらず人口ではあつという間に迫り、近いうちに肩を並べるのが確実視されている。それもこれも土星圏には何も耐乏するものがなく、しかも政治的に安定していたせいである。

これでは木星圏の苦闘がいったい何だったのか。

おまけに土星圏からのヘリウム3供給が始まったら、今まで木星圏が独占していた供給元が増えることを意味する。そして輸送コストはもちろん地球に近い木星圏が安く済むが、逆に採掘コストは高い。トータルでいえばもしかして不利になるかもしれない。少なくとも独占は不可能になるのだ。

木星圏はかつてジオンの行ったエネルギー戦略を見て、その有効性に目を見張った。地球圏からヘリウム3を安く買い叩かれていると怨んでいた木星圏はそのやり方を非常に使える戦略オプシオンだと認識した。

しかしそれもまた土星圏からのヘリウム3供給のせいで根本から覆されてしまう。

最後に、ブツホ・コンツェルンの残党がサイド2を通して木星圏まで逃げ込んできたが、そのために貴重な軍事技術を手に入れることができなくなった。むろん残党はその見返りに早急な木星圏の蜂起を言い立てている。

今、木星圏の総統クラックス・ドウガチは決断した。

地球連邦に対し木星船団公社の解体と接收、そして木星帝国の設立と完全独立を宣言した。

同時に連邦に対し、木星帝国への莫大な生活資材輸送を要求した。そんなことは連邦が呑めないと知ったのことだ。

木星帝国は軍事対決を最初から望んで事を起こしたのである。

その最終標的は地球、自分たちのように生きるだけでも苦しみにうめく者たちのことなど知りもしない、恵まれた者たちに報復しなければならぬ。

ただし木星帝国の戦略には順番というものがある。

必ずやっておかねばならないことは後顧の憂いを断ち、併せてヘリウム3のエネルギー戦略を有効にすることだ。

すなわち艦隊を派遣し、最初に土星圏を叩き、屈服させる！

今、戦うため木星圏から艦隊が出港していく。

ここから土星への距離が距離だけに、艦はバラバラに移動するのではなく、大型輸送艦ジュピトリスを中心に各艦が連結される形でまわっている。戦闘前にはもちろん分離する予定なのだが、そうなるジュピトリスの他に巡航艦と強襲揚陸艦を合わせて約三十隻の艦隊となるだろう。

堂々とした艦隊だ。

しかし、内部には少しばかり不協和音があった。

「……距離が遠ければ向こうに準備の時間を与えてしまう。この場合

二年以上もだ。奇襲もできないのに、のこのこ土星圏まで出向くのはかなりの悪手に思えてしまうのですが、 PAPTEIMAS・シロツコ総司令官殿」

「何が心配と言われるか、ザビーネ・シャル殿。ドウガチ大統領のお望みは土星圏を封じ込めるだけではなく、完全に征服し、連合化することにある。そう考えて頂かねば困る」

「だからこちらから出向くといっても、土星圏の戦力が分からないのに、わざわざ敵地に入り込んで戦うのは不利としか……」

「は、これは面白い！ クロスボーン・バンガードの黒き死神とも言われた英雄ザビーネ・シャル殿が、何と戦いを恐れる御仁だったとは」

ザビーネ・シャルは危うく激高しそうになったが抑えた。

自分は確かに敗残者だ。ブツホ・コンツェルンのクロスボーン・バンガードの残党、そんな情けない立場であることは間違いない。

しかしそこまで言われる筋合いはなく、むしろ実戦を知っていると
いう自負心がある。

かつてクロスボーン・バンガード内ではエースの中のエース、
専用のMSベルガ・ギロスを与えられ、最精鋭の黒の部隊を率いて
華々しく戦ってきた自分だ。

連邦に敗れてから辛酸を嘗めることになり、それでも生き続け、
今は木星圏まで流れて来た。

それもこれも再興を夢見ているからだ。

仲間たちともう一度国を造り、名誉と忠誠の証、クロスボーンの旗
をもう一度立てたい。

そんな自分を木星帝国大統領ドウガチが拾ってくれた。そして実力
を買われてこの遠征艦隊の参謀に命じられたのだ。

だが今や言葉は丁寧であるが馬鹿にされ切っている。

総統ドウガチの片腕でもあり、今回の遠征艦隊を指揮する PAPTEI
MAS・シロツコに。

そこで思わず強く反論してしまった。その下地にシロツコについ
てとある噂があったからだ。

「この戦い、総司令官殿はずいぶん自信がおありのようだ。しかし、もしも土星圏のコンスコン大將が出てこられたら？ 高齢のためまさかとは思われるが不可能ではない。過去の戦歴は凄まじく、幾度も劣勢を跳ね返し、奇跡の勝利を掴んできた伝説の戦術家だ。そんな将を相手にして戦うとなれば悠長なことは言っていられないのでは」

「それこそ望むところ！ この遠征艦隊の圧倒的戦力の前に得意の戦術とやらが通用しない様を見て絶望してもらおうまで。実に楽しみが増えた」

パプティマス・シロツコがつまらない私怨を持っているという噂は真実だったと確認しただけに終わる。シロツコの私怨は土星圏のコンスコンに対するもので、噂ではかつて自分の野望が妨害されてしまった経緯があるらしい。

余話 50年後 〵 恐るべき戦力 〵

「どうもザビーネ・シャル殿は理解が不足しておられるようだ。このパプティマス・シロツコ自らが工夫の粋を凝らした遠征艦隊の力を軽んじているのもそのせいだろう」

「……シロツコ総司令官殿、そういうことを問題にしているのではなく、今は戦い方を指摘している。もつと堅実にすべきではないかと」

パプティマス・シロツコとザビーネ・シャルの会話が進んでいく。

それは決してかみ合っていないのだが、そうなる原因ははつきりしている。

「ザビーネ殿、心配無用！ どこからどう見ても戦力は圧倒している。その根拠の一つはこのジュピトリスにメガ粒子砲を備え付け、そのエネルギーで射程も威力もこれまでにない砲撃ができる。いわば移動する要塞砲を引き連れているようなもの、土星からのちやちな戦力などこれだけで一掃できよう」

「確かに艦隊戦では長射程砲があれば絶対的優位、それを活かせる戦いになれば楽に進められるが」

「おや、その言い方では物足りないような。MS戦では違うとでも？

「いやいやMS戦になればそれこそ面白い」

「では言わせて頂く。MSといえば総司令官殿は我がクロスボーン・バンガードの優秀なMSのコピー生産を断ったとか」

若干の自負心と共にそういう指摘をしてしまうのは、クロスボーンの矜持があるからだ。

「そのことに別に他意はなく、勘ぐらないでもらいたいザビーネ殿。なぜならこの私が完成させ、MSの傑作とも思うバタラ改が出来た以上必要なこと。バタラは木星の超重力下で運用されるMS、元から桁違いに頑健な上、私が独自改造して機動力も武装も大幅に強化した。自慢ではないが私の才があったからこそ強力スラス

ターを多数組み込めたのだ。もはやどこにも死角はなく、性能でこれ以上のMSが存在するはずがない。クロスボーン・バンガードの誇るデナン・ゲール？ ベルガ・ダラス？ 最新鋭とはいえ地球圏の脆弱なMSなど問題ではない」

結局、ザビーネ・シャルは戦術のことを共に語ろうとしたのに、全く受け入れられない。それどころか却って溢れる自信を隠そうとせず語るパプティマス・シロツコに正直うんざりだ。しまいにはあてつけのようなことを言われてザビーネ・シャルは鼻白む。

しかし、本当に驚くべきことはその次にあった。

「もうジュピトリス内でも量産できる。それゆえはるか立ち遅れた土星圏の戦力が慌てて向かってきたとしても鎧袖一触にしかないだろうがない。どうです、ザビーネ・シャル殿」

「……」

「その上、隠し玉もある」

「総司令官殿、隠し玉とは？」

「ザビーネ・シャル殿も想像が及ばない？ いやそれもまた面白い。クロスボーン・バンガードが以前用いた自律型兵器、あれを私が宇宙戦用に改造したところ、けっこう使えそうな感じに仕上がったのは嬉しい誤算」

「な、何?! まさかあの機械を！」

自律型兵器、それは正に非人間の兵器である。

自動で人間を殺傷するようにプログラムされた機械そのものだ。それに従い、飽くことなく、省みることなく、人に血を流させ続ける。それはかつてコロニーの民間人の虐殺に使われた経緯があるが、ザビーネ・シャルとしてはもう二度と聞きたくないほど忌避感が強い。ザビーネ・シャルは騎士として戦う。

それは貴族主義と合致するものだが、そもそも戦いというものは人間同士が互いに思いを背負って臨むもの、そして強敵を倒すからこそ「名誉」が生じるという士道を重んじていたのだ。

もはや話すことなど何も無い。

ザビーネ・シャルはドウガチ総統に大きな恩義を感じているが、本当に木星圏と行動を共にしているのか、ここで初めて疑問を持った。

何か間違えてしまったのではないか。

共に歩むべき者は別にいるのではないだろうか。

「総司令官殿、なるほど準備は万端のようだ。では戦闘になれば私と黒の部隊は早めに出て独自に動く。そして外側から総司令官殿の圧倒的勝利と土星圏戦力の壊滅を見物させてもらう。それでよろしいか」

ジュピトリス内の中央艦橋でこの二人がやりあうのを見て、肩をすくませる人物がいた。そして誰にも聞こえない小声で呟いたのだ。

「総司令官は確かに才能はある。だが、戦いを本当に分かつているようには思えない。ドウガチ総統という絶対に越えられない壁のため、他に八つ当たりするだけの子供のようだ」

元々木星船団公社の出身であり、そこから積極的に木星帝国の設立に関わった人物である。

今ではドウガチ総統の信任を得て遠征艦隊の副司令官に任じられていたフォンセ・カガチだった。

木星圏、ついに木星帝国を名乗り、独立を宣言！

このニュースを土星にいる俺は苦々しく聞いている。

もつと早くから木星圏に協力し、緊密な関係を築いていればよかった、そんな後悔が少なからずある。

俺としては木星圏は嫌いではない。それどころか水も鉱物も少ない環境で苦勞していることには同情すらしているのだ。そんな中で開拓を曲がりなりに進めているのは素直に凄いと称賛したい。

だからこそ木星圏の暴発は残念なのだ！

おそらく地球圏に対する妬みがベースとなっていることは間違いない、そうであれば俺の土星圏が何がしかの緩衝材になってやれたか

もしれないのに。

木星圏の総統ドウガチは完全な独裁体制を敷いて開拓民を抑圧している。と聞くが、一面的に捉えてはならない。現実的に開拓を破綻させず、前進させている偉人である。独裁は木星圏の環境の中で生き残るために甘さを許さなかつた結果とも解釈できる。

だがしかし、土星圏に戦いを仕掛けられたなら別だ！

断固として戦って打ち破り、俺は土星圏の開拓民を守り通さねばならない。

木星圏から土星圏へ向けて艦隊が出港したことは分かっている。しかもそこそこの動員規模があり、おそらく牽制でも一戦だけでもなく、明らかにこちらのコロニーへの侵攻と制圧まで狙っているものだ。いや、下手なことをすれば破壊までされるかもしれない。向こうにとってすれば土星圏を良く併合、悪くても宇宙から消し去ればそれで目的は達成ということである。

「さあ、そんな木星艦隊相手にどうやって勝つ。」

しばらく置くと情報がぼちぼち入ってきた。想定航路、艦種、指揮官などについての有用な情報だ。

「何!?! 向こうの艦隊の総指揮官があんな不遜な若者だ?!」

いや、若者と言ってはおかしいだろうな。今はそこそこの年齢のはずなのだから。

しかし奇縁としかいいようがない。

パプティマス・シロツコ、俺も会ったことがある者が今回の相手だとは。当時の会談の内容はともかく野望と傲岸さと文字通りの頭痛の種であったことを憶えている。

性格のことは置いておくとしても能力的には? そうだった。

さあ、戦うとなれば先ず戦場を設定するが、それは土星圏の入り口と定める。

向こうの遠征艦隊をできるだけ引き付けてから戦うのが基本だが、

あまりにこちらのコロニーに近くてもいけない。ジュピトリスから各艦を分離し、単独でも辿り着ける運用できる距離まで近付けさせれば、コロニーへ多方面攻撃をされる恐れがあり、そうなればどうやっても防ぎようがなくなるからである。

そして向こうの戦力は、艦隊規模として大型輸送艦ジュピトリスとその他で三十隻か。

これに対し、土星圏で用意できる艦隊戦力はあまりに乏しい。

俺が地球圏から持ってきた艦はその多くが老朽化し、既に解体して他へ転用してしまっているのである。

メンテナンスを続けて残っているのはチベガ八隻、ザンジバルが五隻といったところか。

それが一番マシな艦隊戦力なのだが、それでも新鋭艦にはとうてい太刀打ちできない。ちなみに駆逐艦などの小型艦は航続距離が短いので最初から会戦に連れていくことすら無理だ。

そこで、比較的大型で足の速そうな輸送艦を選び、急遽改造して数に加える。

そうすると合計で一応三十隻よりは多く揃えられる。しかし本当に一応というだけで、戦力内容的にとうていまともな艦隊決戦を行えるような代物ではない。改造艦は砲撃力も弱いが防御力に至ってはまるで紙のようなものである。

この戦い、やはりカギになるのはMS戦だろうな。

だが、それについても土星圏には実戦経験のあるパイロットはいない。

おまけにMSの性能については大いに不安がある。

もちろん土星圏でもMSを全く進歩させていなかったのではない。フランクリン・ビダンの技術知識、ケレイ・レスナーのアイデア、元アナハイム・エレクトロニクス社のメカニックであるルセット・オデビーらの開発力を使って独自MSを作ってきたつもりだ。

だがしかし、平和があまりに続いたため本腰を入れていたわけではなく、おまけでやっていただけであり、木星圏のMSにはとうてい及

ばない性能だろう。

俺はこちらのMSパイロットたちに向け、正直にそういった現状について話をする。

「そういうわけだ。木星艦隊との戦い、いかにも不利だ。いずれは戦乱が及ぶと思っていたが見通しが甘かった。結果的に今、諸君らを数でも質でも劣るMSに乗せて送り出すことになるのだから、本当に済まない」

「だから何？ コンスコン代表が謝ることじゃないはずよ」「へっ、ハンデくらいくれてやんなきゃ向こうが可哀想つてもんだ」「勝てば何も問題はない。だから問題はない」

俺はそんな反応に驚いてしまう。

さすがに若いパイロットは緊張している。しかし、俺が土星圏に作った士官学校の教官になっているような者たちはそうではない。皆、この状況でも意気軒高であり、戦いを恐れる様子は微塵もないのだ。

むしろ戦いたがっているように見えるのは故郷を守ろうとする意気の表れだと信じたい。

今もまた、盛んに模擬戦を行っている。

「やったー！ 撃墜表示、また俺の勝ちだ。ギユネイ、ご苦労さん」

「くそっ！ も、もう一回だ、ジユドー」

「まだやるのか、俺の練習マシン一号。あ、二号はビーチャだけど、ちなみに一号の方が下な」

「誰がお前の練習マシンだ!! ふざけるなジユドー、お前には、お前にだけは絶対に負けたくない!」

「そんなことを言うギユネイに勝つのはほんつと楽しいなあ。飯が美味いぜ」

これは真面目なのか？

……俺は思い出すが、彼らは土星圏に来たころはみなただの子供だった。しかし今ではすっかり年配の教官になってしまったとは。

しかもこの戦いに臨んで張り切っている。

いや、それどころではない。

キャラ・スーンですらいそいそとMSに乗り込もうとしていた！

「実戦を知っているあたしが出なくてどうする！　かつてはあのアムロ・レイと戦ったあたしだよッ！」

さすがにキャラ・スーンは高齢過ぎてパイロットは遠慮願ったが、ついでに言うとそのMSというのが自分なりに修理してきたジャジャだったとは。

まあ年齢のことを言うのなら俺が一番艦隊戦をやるような年ではないけどな。

地球圏を出て五十年、もはや俺も八十代の老境なのだから。

しかし、乾坤一擲の艦隊戦なら周囲が何をいつても俺が出ないわけにはいかない！　いや出ないなど考えもしない。

「ジュード、ギユネイ、二人ともまとめて叩き落としてやるわ。かかっ
てきなさい！」

「エルピー、いやちよつと待ってくれ。ファンネル全開のクシャトリ
アIIは反則だろ。こっちのザクIXの得意な接近戦は模擬戦で使えな
いんだからズルいぞ！」

「つべこべ言うな！　男のくせに」

「クシャトリアIIなら妹たちの方とやってくれよ。いっばいいるだろ
うが」

「妹たちとじゃ勝負がつかないんだよ！　てか妹といえばジュードは
いつまでもリイナのシスコンだろ！」

尚も士官学校では模擬戦が続いている。

今使っている土星圏の主力MSはザクIXだ。ザク・ナイン

これは正統的なザクの進化系であり、パワーと操作性、火力を順次
アップデートし続けたものだ。当たり前のことだが土星圏はジオン
の系譜、しかし連邦系技術者もいるのでその技術も加えている。

そしてもう一つのMSはクシャトリアII、支援型MSとして作った

ものである。

ジオンから供与された基本設計を基に開発を成功させ、近頃はファンネルを連邦型のフィンファンネルに換装して数も大幅に増す改良を施している。

そういった教官連中の動きを憧れで眺めている若いパイロットたちがいる。

その意気と思いは伝わり、こうして新しい世代が引き継いでいくのだろうか。

などと思っていたら、またしても年配パイロットが増えようとしていたのだ！

俺のところへ報告が入ってくる。そこにはこう書かれてあった。

「今回の戦いのために民間からの志願兵を募集していたところ、予想をはるかに超える数の応募がありました。その中にパイロット志望が含まれていたので報告します」

なるほど、それは朗報かもしれない。俺はページをめくって続きを見る。

「審査で大半は落ちましたが残った者もいます。一人はカミーユ・ビダン、もちろんフランクリン・ビダン氏の御子息であります。その妻ユイリイ・ビダンも審査で合格基準に達しています。そしてもう一人はリタ・バシユタ、この者は驚くべきことにファンネル負荷に底が見えませんが、搭載可能数をはるかに超えるまでファンネルを増やしても操作できるようです」

リタとは、開拓団にもぐり込んできたあの三人の中の一人か。しかし面白いことだな。もしここにララア・アズナブルを呼べたらNT能力を競えるかもしれないぞ。

この緊急時、教官連中と同じくらいの年までなら力を貸してもらおう。

さすがにもっと年上の応募者レコア・ロンド、ロザミア・バタムは審査で落してもらっている。

さあ今こそ出港だ。
俺は土星艦隊を率い、この土星圏という第二の故郷を守るため、迎撃に出る。

余話 50年後 〽 激突！ コンスコン V S 木星
帝国 〽

土星艦隊総数三十四隻が出港し、迎撃予定宙域に向け進んでいく。その内容は艦種がどうかというレベルではなく、純粹戦闘艦のチベなどが十三隻のみ、残った二十一隻はただの改造艦であり、数合わせのようなものだ。

それでも勝たねば土星圏の未来がない。

おそらくはこれが俺の最後の戦いになる。

俺はここまで生きてきた、いや二周目もここまで生きてきたと言わべきか。

そして何となく分かっていることがあるのだ。

たぶん三周目はない。

というのはそもそも二周目が偶然の産物ではなく、俺に何がしかの要因があつた結果なのだろう。俺はMSで戦うタイプではないが何らかのNTに似たものを持っていたのだ。

かつて一回だけ話したことのあるフラナガン博士は何と云っていた？

俺に興味があり、調べたいということだつたのではないか。その時にはまさかと思ひもせず、他に考えるべきシヤリア・ブルやツエーンのことがあつたため流してしまつたのだが。

おまけに俺が時々感じる頭痛、これはNTで、しかも外部に気を放つ者の近くにいた場合、感じたものだ。シヤア少将などがそうだつた。たぶんNT同士の共鳴とかいうものなんだろう。ただしクスコ・アルなんかの優しいタイプのNTには感じなかつたのだが。

まあ、俺の不思議な現象は、それだけが原因じゃないと思う。人々の強い意思が存在した結果でもある。平和を作りたい、幸せになりたい、未来を良くしたいという人々の願いがそこにはあつた。

ならば俺は最後の最後までその願いのために戦おう。

「各艦、土星の輪から軽そうで手ごろな大きさの岩塊を取り出し、艦首付近に据え付けるんだ。速度は落ちるが構わない」

俺は意気込みだけではなく冷静に戦術のことを考える。

初めに一つの手を打つ。

木星艦隊の長射程砲撃に対処しなくてはそもそも接触できず会戦にならない。

そのため防御の工夫が必要だ。

俺は土星圏という自分たちの地の利を利用することを考える。そこに隠れるということではなく、いわゆる「盾」を調達するためだ。もちろん運べる程度の岩を使ったところで脆いため砲撃を一度防げれば御の字、第二撃第三撃にはどうしようもない。だが逆に言えば一度は確実に防げることになる。

原理的にメガ粒子砲はどうしても直線にしか進めない、そこが付け目であり盾をしっかりと向けていければいい。そして俺の作戦は撃ち合いはなく、早めにMS戦へ移行するものなのでこちらから砲撃できなくなるのは考えない。

さつとミノフスキー粒子が濃くなった。

近い。

もう少しで木星艦隊が視認できる距離になる。

そして見えた！

俺はのっけから驚くことになる。やって来る木星艦隊の布陣が分かってきたからだ。

何と木星艦隊は大型輸送艦ジュピトリスを中心に三十隻の輪形陣を敷いているではないか！

それを見て思わず呟いてしまった。

「向こうの指揮官シロツコという者は有能ではあっても、それは戦術以外のところにあったようだ。戦術面では実に素人くさい、それに尽きる。まあ、この戦力で戦術もグリーン・ワイアット並みならお手上げだったろうが」

俺の眩きを聞いていた者がいたではないか。

チベの艦橋で俺の脇にしながらオペレーター長を務めている有能そうな若者だ。まだ二十歳くらいだろう。

その者がキラキラした目で俺を見てきた。純粹で、俺に対する尊敬に満ちている。

それだけではなく眩きの真意を聞きたいのだろうということばかり切っているので俺は解説を試みる。

「見ただけでそう言ったのは、向こうの陣形があり得ないからだ。いや、なまじ中途半端に戦術を知っているつもりなのが滑稽と言える。先ずは向こうの大型輸送艦ジュピトリスの役割は何か。それは惑星間を渡るために必要な艦であり、遠征してきた向こうにとってはまさに命綱、言い換えれば退路そのものなのだ」

俺は一息入れる。若者が続きを期待しているのが分かる。

「途中に補給基地どころか水も岩石もない長い航路、それ自体が壁になる。だから行くにも帰るにも必要不可欠であるジュピトリスは後方に置き、絶対的に安全確保をすべきなのだ。もしも理由があつて攻撃参加させたいなら、全体を矢状の隊形にして増速し、一撃離脱で瓦解させるのを図ればいい。いずれにせよ戦いに入るのに守りの輪形陣とは戦理に反する」

その解説を聞き、若者の目がいつそうキラキラする。やはり同じだな。

これは血は争えないということなのだろう。

「君はたしか、ザラ君といったかな」

「そ、そうです、コンスコン代表！」

そつちを向いて話しかけると、名前を俺が知っていることでいっそう感激しているらしい。

だが俺が分からないわけがない。

この若者の祖父がアナベル・ガトー、つまりガトーの娘の子供なのだ。ガトーの血を引く孫であれば俺にとっても特別な感慨がある。

時代はそこまで変わっている。

ちなみに俺には子供はいない。妻はかつて名前すら失った少女だったが、土星圏に来てから年の離れた結婚をして二人で暮らしてきている。

「ではザラ君に頼みがある」

「何でしよう、コンスコン代表！」

「それはな、これからの戦いをしっかりと見て語り継ぐことだ。戦いが悲惨で、愚かで、忌むべきことをしっかりと憶えておいて欲しい。未来は君のような若者が作り、そのまた未来はこれから生まれる者が作り、全てが一つにつながっていく。どうか平和で皆が幸せに生きられるような世を守り続けてくれ」

心底からそう思う。

これから先も戦争の時代にさせないでくれ。

ついでに言えば俺にはそのための腹案がある。

この戦いが終われば、俺は木星のドウガチへ直談判に行くつもりだ。片道数十分かかるような通信だけで誼を結ぶのはやはり無理、今まではそこが不十分だったのだ。

誠実に、しっかりと話し合い、できればそこで木星圏と協定を結び共存共栄の道を探る。

俺は未来へ向けての壮大な青写真がある。

通商の面では、危険な木星からのヘリウム3採掘に代わり土星圏から輸送することにして、逆に木星圏は土星圏の中継貿易をしてもらう。

そして土星圏、木星圏、小惑星帯、地球圏という一連のチェーンになるのだ！

火星は残念ながら、物資を一度重力の下に落としてから引き上げるのはコスト高になるので中継貿易には適さない。ついでに地球圏より太陽に近い金星圏などは太陽放射線のため初めから植民は無理だ。

そしてここが大事なところだが、木星圏や土星圏は辺境の資源採掘基地などではない。

立派な人類の生存圏として位置付ける。

地球から遠い近いは問題ではない。

そこで優劣をつけるのではなく、単なる性格付けで区別するだけの話だ。その意識が根付き、チエーンのそれぞれの部分が均衡のとれた発展をすれば、人類は初めて地球から自由になれる。

地球の重力に魂を引かれなくなったと言えるようになるのだ。

いつの日か、地球連邦が地球圏を離れ、例えば小惑星帯に首都を構えてもいいじゃないか。

俺はこの大きな夢の話もドウガチにするつもりだ。

支配するとか、されるとかはお互いにとって結局のところ発展の阻害にしかならない。もちろん俺の土星圏だって負けて服属し、地球圏と争う先棒を担がされるのはゴメンだ。

それと地球圏内部の各サイドの戦争も最大限抑止する。土星圏と木星圏が手を組めばよからぬことを企むサイドを抑えられる。有力なサイドはともすれば覇者になり他を支配したくなるものだが、徹底的にその芽を摘んでやるのだ。

それが可能なのは、何といってもヘリウム3というエネルギー資源が必ず必要だからである。

逆に将来、木星圏あるいは土星圏が暴走したらどうだろうか？

いや、これについてはもう片方からエネルギー資源を調達することで地球圏は落ち着いて対処ができるだろう。奇しくもこの体制は戦争抑止にとても都合がいい。

考えているのはそこまでだ。

そうしているうちに艦隊間の距離が縮まってくる。俺は相対速度を慎重に計測するが、向こうに動きはなく、やはりゆったり構えている。

「よし、全艦第一級戦闘配備、盾をしっかりとジュピトリスに向けるのを忘れるな！」

それはギリギリで間に合った。思ったよりずっと遠くから砲撃が来たのだ。

こうして史上最初で最後の外惑星同士の戦い、土星圏会戦の幕は上がった。

まだ遠い射程なのにジュピトリスからの砲撃は半端なく強力で、しかも照準もいい。艦の大きさが安定性につながって照準がいいのだろう。しかも訓練してきたと見える。

こちらに直撃を受けると岩石の盾はあっさり吹き飛ばされてしまう。だがしかし、それだけなら艦自体の損傷は小破以下で済む。運悪く二度も撃たれた艦はあっさり爆散してしまったがそれは一隻だけだった。

「四隻ずつの小隊を組み、一気に増速するんだ。頃合を見て多方向に散開、小隊はそれぞれ別個に木星艦隊を迂回して惑わし、後方に回り込め。その位置からMSを全機発進させろ。ここが正念場だ！」

俺の指示通り、こちらの艦隊が一斉に動き出し、進路を器用に曲げて向こうの長射程砲をかくぐぐって進んでいく。思った通り木星艦隊の側は輪形陣を崩すべきか迷って貴重な時間を失う。こちらの迂回の動きに対応できていない。結果的に位置取りは満点だ。

そして俺は濃くなってくるミノフスキー粒子のため、この距離では最後の通信を伝える。

この後は進めと撤退の発光信号しか使えない。

「MSは急進し、狙いをジュピトリスのエンジン部と見せかけて陽動をかけた上で、水と空気のタンクに一撃でも加えてやれ。撃破せずともそれで継戦能力を奪えば方が付く。頼んだぞ」

木星艦隊の後方について各艦からあわせて五十機のMSが発進した。以後の戦闘はこれらに托す。

こちらのMS隊に対し木星側は当初対空砲火を密にしてきたが、やがてそうではなくMSを出してきた。木星艦隊も遅まきながら本格的なMS戦に移行するつもりだ。

木星側のMSは想定を上回る約九十機、それらは見たこともない武骨な形で、動きはそれに似合わず俊敏だ。俺は小型ハイパワー機が今のMSの主流なのだと思えて知る。あつという間にこちらのMS隊に迫り接触してきた。

全面的なMS同士の戦闘に入るが、初めはやはり基本性能の違いから苦戦を強いられる。見ると速さや火力の違いより、むしろダメージコントロールが決定的に違う。こちらのファンネルのビーム程度では機体の一割程度にしかダメージを与えられず、よほどうまく位置に当てるのでなければ三回も命中させないと撃破できないほど頑健だ。

おまけにこちらは実戦経験の薄さから戸惑いを隠せない。

いや、ここが我慢のしどころである。

やがてMS戦は互角に転じた。戦っている最中でさえこちらは一段一段戦闘技量を上げていき、性能や数の不利をもともせず押し始める。ついに撃破されるMSは圧倒的に向こうの方が多くなり、先行きは明るい。

頼もしい限りだな。

よくよく観察するところらの十二人の姉妹MSが見事なまでにファンネルの連携で木星MSを翻弄し、阻んでいる。その際にジュドーらがジュピトリスへ距離を詰めていくのだが、そこで慌てて追いかけようとする木星MSを側背から叩いていく。

実に上手いやり方をしている。どこでそんなことを考えたのか。

と思っているとこちら側の中に妙なMSを発見した。

あれはジャジャ!?

なんとしたことか、キャラ・スーンが無断で戦いに加わっている! 「よし、いい感じになってきたねえ。さあて年だけ食っちゃったガキどもにここから母ちゃんの本領を見せてやるよ! と言いたいところだがジュドーと、ビーチャとエルの夫婦も、あんたらは先に行つてあるのでかい艦を片付けてきな」

キャラ・スーンは口だけではない。火力だけはやたらと高いジャジャで木星MSを攪乱しつつ二機も墜とし、おまけに現場指揮の役に立っている。

だが異変が起こった。

戦場のはるか外縁から十数機ほどのMS隊が襲つてきたのだ。俺は一瞬伏兵かと疑った。探知外に忍ばせておいて重要な局面に投入

というのはよくあるやり方だ。だがそれにしては離れ過ぎた場所にいたらしく、タイミングがこれほど遅いのもおかしいことだ。

それらは皆黒いMSで、俺は知らなかったがザビーネ・シャルの黒の部隊、猛者揃いのクロスボーンバンガードでも精鋭中の精鋭だった。

余話 50年後 〵 戦う意志 〵

「シロッコ総司令官、思いがけずMS戦の現況はよくありませんな。はつきり言えば負けつつあり、このままではジュピトリスを危険に晒すことになります。今からでも遅くありません。ジュピトリスを土星艦隊の方向から急速後退させ、ジュピトリス以外の艦を使って縦深陣を形成してはいかがでしょう」

「後退して縦深陣？ カガチ、そんなことは無用だ」

「し、しかし、ジュピトリスの砲火無しでも艦隊戦では有利になれるのは自明、土星側の艦隊も今、射程外から撃ちかけて対空砲火の邪魔をするだけなのはそのためです。MS戦でまだ踏ん張れているうちに陣形を変えれば勝機はあります。とにかく今のリスクを減らすことが肝要かと」

「いつから戦術指南役になった、カガチ」

「総司令官、今の相手が伝説の戦術家コンスコンであればゆめゆめ戦術を軽視してはなりません」

ジュピトリス中央艦橋では副司令フォンセ・カガチがシロッコに説いているが決して通じているわけではない。

カガチはシロッコとコンビを組んだのは初めてではなく、それなりにシロッコの高慢さを理解しているつもりだ。今までシロッコの利発さ、特に兵器開発において非凡なところに再三驚かされつつ、しかしその高慢さに辟易させられてきている。

それでも今の会戦の状況を考えると進言せざるを得ない。カガチも自分の思う最善の戦術というものがある。

「もう一度申しますがジュピトリスの後方退避を願います。他の艦なら戦闘速度で蛇行し、ついに対空砲火を互いに重ねればMSに易々と取り付かれはしません。しかし、ジュピトリスは小回りが利かない分、取り付かれ易いのですから」

「くだいな。勝てば問題ない。今、ザビーネ・シャルの奴が遅れて戦闘

に参加したようだ。少しは役に立ってくれよう」

「それこそ危険！ 本当に味方なら一安心、ザビーネ・シャル殿の実力をもってすれば蹴散らすのに充分でしょう。技量も一流、戦闘経験も多いザビーネ殿なれば。しかしザビーネ殿はこちら側に何か含むものがあると見受けられ、戦いで手を抜く、あるいは裏切りまでされると一気に旗色は悪化します！」

「カガチ、そうはならん。あのアホウは裏切ることを恥と思う種類の人間だ」

パプティマス・シロツコはそれなりにザビーネ・シャルの性格を把握していた。

ザビーネは裏切ることはない。

しかし、裏切るのはシロツコの方だった。

「それに、裏切られても別に構わない。いつとき向こうを混乱させる役をしてもらえれば充分だ。いや、むしろ裏切ってくれた方が後味がいいのかもしれない」

「…… は？ 総司令官、それはいったい…… 意味が分かりかねます」

「もうじき頃合だ。あの自律型兵器を出す。それできれいさっぱり一掃してくれる。ジュピトリスを下げて戦術でこそこそ勝つのは面白くなく、思いもしない状況で向こうが慌てふためき、絶望の悲鳴を上げながら壊滅するというまたとないショーを見ない手はないのだ」

シロツコの自信の根拠はこれだった。いよいよ実験兵器を投入する。これにはカガチも納得するわけはなく、引き止めにかかる。

「お、お待ちを！ あれを使ってしまうえば味方のMSも巻き込むではありませんか！ 確か敵味方識別ができるまでに至っていないはず。実戦投入するにはまだ早く」

「識別機能など最初から付ける必要はない。それがあればこちらのMSを盾にされてしまうだろうが」

「しかしこちらのパイロットを犠牲には…… 彼らは皆、長い遠征に耐えてきた勇士、いえ仲間なのです！」

「現にMS戦は負けているのだらう。私のバタラ改を預かりながら無

様な真似を。木星帝国はドウガチ総統のお考え通り信賞必罰、負けたものがどうなるうが知ったことではない！」

フォンセ・カガチは唾然として今度こそ言葉を失った。

その頃、クロスボーンの指揮官用カスタマイズMS、ベルガ・ギロスを駆りながらザビーネ・シャルが言う。

「軋轢があつたとはいえ、友軍が危機にあれば何もしないわけにはいかない。あの総司令は気にいらぬが、いったん木星に救われた身だ。それに騎士として振る舞うのが貴族の務めでもある。まあ、あの総司令官のことだから要らぬ節介と言いつうなものだが」

率いる黒の部隊は幾多の戦いで常に前線にいた猛者たちであり、各々技量が高い。

ジュピトリスへ向かう土星MSを討ち払うため一糸乱れず急進する。

今の状況は、土星の先遣MS隊十機が最もジュピトリスに近付いている。

ついでジュドーら五機ほどが遅れて続く。十二姉妹やキャラ・スーンを含むその他は木星側のMS隊を相手取り、足止めする役に専念している。

そこを無視してザビーネ・シャルらが通過しようとしたのだが、氣付いたキャラ・スーンが慌てて妨害しようとする進路に出てくる。

「ガキどもに手出しはさせないよッ！ 母ちゃんが守ってやる」

そういう意気込みがある。

だがしかし、一瞬だ。

いともあっさりキャラ・スーンのジャジャが斬り払われてしまったではないか！

なんとか脱出はしたようだが歴戦のキャラ・スーンがほとんど何も成し得ないほどの速さだった。

これを見てしまったジュドーが黙っているわけがない。

「何をしたんだッ！ お前はー！！」

それだけを叫ぶと、先行していたのに自分だけは引き返す。他は先

に行かせる分別はあった。自分はすぐさま黒のMSたちと戦闘に入り、お返しとばかりに何機か倒す。

機体性能の差などジユドー・アーシタにとって意味はない。

ついに隊長機らしき姿を見つけて戦いを挑む。

「土星のこのMSは何だ？ 侮れない気合いと強さだ。いいだろう、騎士として戦いたいのであれば、このザビーネ・シャルが存分に相手をする」

少し戦えばジユドーが並の相手でないことくらいザビーネにも分かる。

しかし、だからこそ面白い。強敵と戦うのは誉れであり、それこそクロスボーンの誇りの依って立つところだ。

一方、十二姉妹の奮闘によって木星MSはだいたい片付けられ、この戦闘が終わりに近付いている。MS戦はなんとか土星側の勝利に終われそうだ。

と思った瞬間、誰も想像もできない恐ろしいことが起こった！

木星側が満を持して出してきた大量の「ある物」が迫ってきたのだ。

あろうことか、「ある物」は未だ残存していた木星MSたちの方へ最初に接触したのだが、それらを見る間に引きちぎり消滅させてしまう。傷付いたMSにも容赦なく、また無傷のMSよりも速い。

十二姉妹のクシャトリアIIは驚くほかない。

続いてクシャトリアIIの方へ迫ってきたのだが、それらは何と多数の円盤状の機械だった。大きさは人より大きく、MSよりは小さい、明らかに無人の機械だ。それが恐れもなく群れをなし向かってくる。もちろんこの未知の物に対しても十二姉妹は反応し叩き落としにかかる。だがそれでも対処しえなかった。

十二姉妹の鉄壁の連携は崩されてしまう。

勝手が違うので戸惑ったこともあるが、とにかく数が多過ぎる。各々がファンネルを全数展開し、更に本体でビームサーベルを振るい、ようやく対抗できるレベルだ。操作の負荷がぎりぎりまで上が

り、疲労のため一手誤れば即座にやられてしまう。

この機械兵器のために形勢は逆転されてしまった。

やがて姉妹が一人、また一人と疲労から隙を突かれ、大破して脱落していく。

もはや半分にまで減り、もちろん残された者は更に大変だ。

だがしかし、それでも闘志を衰えさせないのは十二姉妹の末っ子だった。

実は土星艦隊がこの会戦のために出港する直前、十二姉妹の育ての親ともいうべきスベロア・ジンネマンが危篤に陥っていた。もはや九十五歳の高齢のため寝たきりになっていたのだが、ついに寿命が尽きようとしていたのだ。

後ろ髪を引かれる思いの姉妹たちに言い残した。

「お前たちの戦いに行くんだ。信じるべきものを信じ、心のままに戦え」

この死闘を展開しているちょうどその時、スベロア・ジンネマンは静かに息を引き取った。

土星圏コロニーの病室で柔らかな光に包まれながら逝った。

その一生は快活な闘士であり、頼れる指揮官であり、そして何よりも多くの者に父性を見せた生涯だった。

最期は先に逝っている妻ではなく、養女となって共に長く過ごし、多くの思い出を共有しているロザミア・バタムが看取っている。

「お父さんがお父さんでよかった。娘になれて、自分の人生を歩けたわ、お父さん。今は本当に幸せの記憶でいっぱいなんだから」

涙と口づけで最大限の感謝を表す。

その言葉は、お前は幸せだったかと問われたような気がしたので答えたのだ。

「今は眠って。ありがとう、お父さん」

スベロア・ジンネマンはロザミア・バタムを娘としてたいそう可愛がっていた。

それは預けられた例の十二姉妹も同様だったがとりわけ末妹を可

愛がり、もちろん末妹も慕っていたものである。

今こそ父のため、自分のため、土星のため、末妹は死んでも戦い続ける覚悟を見せる。

「分かるわ！ お父さんが見てる！ だったら私は、絶対に、諦めるわけにいかない!!」

涙を絞って立ち向かう。

だが防戦一方なのは変わりがなく、しだいに機体の損傷は重なっていく。精神力の限りを尽しても物理的な限界点が近い。

「まだ、まだ動く!!」

クシャトリアⅡの四枚羽の三枚は失われ、脚部なども破壊された。もちろん、残った長女や次女などはそれ以上に酷い有様だ。

ここで再度逆転したのは別の者たちによる。

一機のクシャトリアⅡ、それがうつすら淡い光を放つ。

そして宙を漂うファンネルを接收し始める。

十二姉妹のクシャトリアⅡのものだったファンネルのほとんどはコントロールを離れてしまい、戦場にただ浮くだけのものに成り果てていた。

それらを集め、改めて戦う武器に戻していくではないか。

それがリタ・バシユタ、元の名はリタ・ベルナルだ。

圧倒的なまでのNT能力でファンネルのコントロールを再支配すると、同時に数十、いやそんな数ではないビームを放つ。

その火力で戦闘機械を問答無用に封じ込める。

「機械は生まれ変わることはないわ。機械は機械らしくここで壊れてしまいなさい！」

決定打となったのはまた別の者である。

この戦闘機械を見ていて気付いたことがあるのだ。

「こいつらはまるで群体のように動いている…… 一つ一つがそれほどの性能を持つ？ いいや違う。それならコストに見合うはずがな

いし、連動した動きからしてもそうではない。操っているところがあ
るのではないか。よく見ろ……」

ギユネイ・ガスは冷静に考える。そして他とは違う機械を見つけ出
したのだ。

「操っている熱量の高いものはないのか……… 見えた！ それ
がコントロールタワーか！」

余話 50年後 〵 掌中 〵

この機械の群れは使い捨ての兵器に過ぎず、ならば高級な機能が載っているはずがないのだ。

とはいえミノフスキー粒子の濃い中で遠く離れた艦からの操作は無理に決まっている。

それを考えた上で、ギユネイ・ガスはついに目標を見い出した。

コントローラタワーが群れの中に潜んでいる。そこを叩く！

躊躇なく突進するがあっさり阻まれ、いったん距離を取り直さざるを得ない。密度の高い機械の群れを進み、深くまで辿り着くのは容易ではないのだ。

だが気合を入れ直す。

クシャトリアⅡたちの死闘を見ては自分が頑張らないわけにはいかない！

もはや取れるやり方など限られる。勢いよく増速し、ひたすら限界まで斬り払い、爆散寸前で脱出という捨て身の体当たりを敢行する。

ここまでしてようやくコントローラタワーを仕留めることができた。機械は自己保護の本能がないため回避の動きに入るのが遅いことまで読み切っていたのだ。

だがしかし、機械の群れの動きが変わった、と思えたのはわずかな時間だった。

実はコントローラタワーには予備が隠されており、破壊されると自動的に切り替えられる設計だったのだ！

けれどギユネイの考えは決して間違いではなく、立証もされた。それが情報として伝わっていく。

ギユネイは人生の大半をジュード・アーシタという越えられそうもない壁を前に頑張ってきた。ただしそれが苦労ばかりだったかというところではない。ジュードを中心としたチームに温かく迎え入れられ、一員として過ごしてきた絆がある。

「後は任せた、ジュード!!」

今は互いを信じる、それだけだ。

一方、ジユドーとザビーネ、二人の戦いはまだ続いている。比べてみれば少しばかりザビーネの方に損害が多いが、豊富な戦いの経験が決定打を許していない。それどころか落ち着いて逆転の機会を狙っている。

ただしこの頃には二人にも凶悪な戦闘機械の群れが見えてきていた。

「あれは！　　どういいうつもりだ！　　総司令はなぜここで使う！　　私も私の部下も……　　いやまさか」

ザビーネはそう言うが、現実に部下たちへ戦闘機械が襲いかかろうとしている。ジユドーと戦う時に騎士として一対一を望み、部下たちを遠ざけていたのだがそれが仇となった。

ここに至ってもザビーネ・シャルは木星を裏切る気はない、そもそも裏切るといふ発想がないのだが部下を護るのは何にも優先する。今は早急に戦闘機械を止めなくてはならない。

そしてザビーネは戦闘機械の弱点、コントロールタワーの存在を最初から知っている。元はといえばクロスボーン・バンガードの兵器だからだ。

ジユドーとの戦いのことは心配していない。

わずかな動きの違いで戦意の消失が伝わるはず、それは技量の高いもの同士なら通じ合う呼吸だ。

その通り、ジユドーの側はザビーネが自分との戦いをやめ、戦闘機械の方に対処しようとしていることを理解した。

ザビーネ・シャルは飛ぶ。戦闘機械を薙ぎ払いつつ突破し、愛機ベルガ・ギロスの中破と引き換えにコントロールタワーを破壊する。

だがそれでも自動的に予備のコントロールタワーが起動して引き継がれてしまう。

その頃ジユドーにもギユネイの仮説と行動のことが伝わっている。「へへ、ギユネイの奴、泣かせるつもりか。練習マシーンから格上げし

「やるぜ」

そんな軽口を忘れることはないが、仲間の思いを受け止めるのがジュード・アーシタだ。

「引き受けたぜ、ギユネイ。美味しいところ持って行って悪いなー!」

ジュードがコントロールタワーを破壊した時、ようやく全ての制御は終わった。それ以上の予備はなかったのだ。

そしてコントロールタワーの制御を失えば戦闘機械の脅威は激減する。

機械たちはそれでも止まることなく、ある程度の自律的な動きを継続しているのだが、全体の連動は失われてしまった。単純な動きだけになれば撃破も容易い。

リタ・バシユタと残った十二姉妹の手によって一気に片付けられていく。

一方その時間にも土星の先遣MS隊が進んでいく。

やはり最後はジュピトリス直掩のMS隊が出てきたので直ちに交戦に入る。さすが直掩は木星側の精鋭揃い、戦闘は熾烈を極め、簡単には抜けない。

しかし土星MS隊は出撃時に受け取った戦術指示を忘れていない。ひたすらジュピトリスのエンジン部に向かって力押しにすると見せかけ、しかし二機だけを抜け出させ、別のところへ一気に向かわせる。

真の目標はジュピトリスの酸素と水のタンクだ。

「ビーチャ・オーレグだ。カミーユ・ビダンとユイリイ・ビダン、二人は目標へ行け。頼んだぞ」

それを聞いたイーノがビーチャにどうしてその二人を選んだのか聞いた。

「イーノ、言いたいことは分かる。あの二人は民間人だ。しかし明らかに俺たちより優秀なんだ。あの二人はここに来るまで五機も倒しているぞ」

「そうなんだ、ビーチャ」

イーノもそれを聞くと素直に納得する。そもそもカミーユらの撃墜数を知らなかったので聞いただけで他意はない。

こういうところが土星の真の強さなのだ。

曇りのない目で見て、実力がある者を素直に認める。だがこんな簡単なことができない組織、あるいは軍というのはいくらでもある。

土星の場合、ガトーやカリウス、ケリイといった勇者が基礎を作った。

正しいことを正しいという精神がしつかり根付き、受け継がれているのである。

ついにジュピトリスに取りつき、タンクの場所を見極め、みごと撃ち抜くことに成功した。

この殊勲を上げたのはユイリイ・ビダンである。

ユイリイは土星から出撃の直前、命令無視で潜り込もうとしたレコア・ロンドを諫めて止めさせている。そのこともありレコアの分も戦果を上げようと頑張っていたのだ。

もはや勝負はついた。

これでジュピトリスは惑星間航行できる能力を失い、ここ土星圏で立ち往生するしかない。もちろん他の艦艇も同じ運命である。いくら無傷でも同じことだ。

この会戦場所から木星に帰ることはもちろんのこと、捨て身で進撃して土星圏コロニーへ行くこともできない。この戦場の位置はそういうポイントなのである。よほど土星側が詰めを誤らない限り早いか遅いかだけの差で、木星艦隊はいずれ降伏しか生きる道は残されていない。

この土星圏会戦は土星側が迎撃に成功したのだ。

ではなぜ土星側の艦隊が長距離輸送艦無しでここまで来れたのか。戦場を想定し、二年のうちに補給ポイントを幾つも敷設していたからだ。もちろんそれらを木星の側が発見できることはない。

後世多くの者がコンスコンについて論評を繰り広げていて、それは

非常に幅が広いが、一致しているのは先を読む目の凄さである。これに対抗できるのはそれこそグリーン・ワイアットくらいなものである。

この土星圏会戦は始めから準備の差が明白だった。全ては土星側の掌の中だったのだ。

「くそッ、どういうことだ！　こういうはずではなかったのに！」

「シロツコ総司令官、残念ですが敗けは敗けです。長距離砲でもMSでも、おまけに戦闘機械でもどうにもならなかった以上、潔く敗けを認めましょう。ただし別に全てが終わったわけではなく、条件交渉の余地は充分にあります。なぜなら土星側としても木星を敵として泥沼化するのは決して望まないはず」

ジュピトリス内では思わぬ展開に緊迫した声が響く。

「なるほどカガチ、交渉で粘るとはお前は軍より政治家が向いているようだ。だが性に合わん。私はやはり戦いで活路を見い出す」

「……………」

「カガチ、切り札があるのだ。特別なMSを用意している。私自身がそれに乗って出て、その圧倒的性能で一気に突破してくれる」

「そんな、無茶な」

「別に全部と戦わなくとも、コンスコン大将を生け捕りにでもすればまだ勝ちの目はある」

「しかし、それこそ……………」

「それでもダメなら降伏でも何でも好きにしろ。ドウガチ総統にはありのままを伝えていい。だがしかし、自分がただの無能者として歴史に名が残るのは我慢ならん。待ちに待った表舞台なのにこの結果は断じて認めん！　せめて私の開発した最高傑作ジ・OⅢの素晴らしさを見せつけてくれる」

俺はチベの艦橋から会戦の行方を見て安堵している。

しかし、何やらこのまま終わりそうにない気もしている。

すると何とジュピトリスから一機のMSが出てきたのだ。

それは大ぶりで、いかにも特別製であるような周囲を圧迫する雰囲気を持ち、力に満ちている。今さら出てきても手遅れとしか思えないが、だからこそ出てきたのかもしれない。

その特別製のMSが発進し戦いを挑んできた。大きさにもかかわらず速い。

最初に狙われたのはジュピトリスのタンクを破壊したユイリイ・ビダンのMS、これを報復の初めにしたのだ。

ユイリイは一撃で大破されてしまった。

この頃にはビーチヤやイーノも追い付いていたが、全く手も足も出ず同様の運命にされる。

ここで一機の土星MSがユイリイたちを逃がし、代わってこの強力MSの相手をする。

「戦場を好き勝手にしてくれて！ もう意味がないのに、あんたは何で出てくるんだよッ！」

カミーユ・ビダンがこのパプティマス・シロツコのMSへ突撃する。激しくも一瞬で戦いは決着がつく。

それが土星圏会戦の最後の光芒を飾ることになった。

余話 50年後 〵 大いなる夢を持つよう 〵

「カミーユ！ カミーユ！！ 気が付いてないの!?!」

「あ…… ああ、大丈夫、少し気分が悪くなっただけだから。それで、戦いは終わった?」

強力MSを倒すという戦果を上げたカミーユ・ビダンをその妻がなんとか曳航し、帰投に転じていた。

ジュピトリスを含む木星艦隊はそれ以上何かを仕掛けてくることなく、既に戦いは終わっている。

間もなく土星側に通信をよこしてきた。

「木星艦隊副司令官フォンセ・カガチである。土星側へ降伏する。ただし、協定締結まで艦艇の保存と、将兵の一定待遇を要求する」

案外素直に木星艦隊は降伏を受け入れた。俺はそれと同時に向この司令官パプティマス・シロツコの死を知る。

こちらは木星の艦艇をとりあえず武装解除、土星の輪の近くまで持ってきて係留し、将兵については艦に置くわけにはいかず土星圏コロニーへ移送する。

土星圏コロニーに入った木星将兵は一様に感嘆の声を上げた。逆にこちらが驚いてしまったほどである。

それは全てに豊かでゆとりがあるからだ!

空気や水が制限なく使える、たったそれだけのことが木星将兵にとってみればとんでもないことらしい。

俺は気を良くし、というわけでもないが木星将兵を温かく迎え入れる。

そこには俺なりの計算というものがある。木星将兵に土星圏のやり方とその結果を知ってもらい、その上で木星に返してやる。

そうすれば、木星圏でもどうすれば豊かになるのか考える人間が増えるはずだ。

現に副司令官であるフォンセ・カガチという者は思いつきり考え込んでしまっている。今までの木星の方針と、木星のやり方で整合がつかないのだろう。真面目な人間だ。

一般将兵の中にはもはや木星に帰りたくない者までいるらしい。

ついでに言えば会戦でことごとく勝機を逃して敗けた総司令シロツコは当然のごとく恨まれた。しかし木星将兵たちは豊かな土星に来れたことで逆に喜び、シロツコの評価がむしろ上がったとは実に皮肉だ！ シロツコは最小犠牲で敗けに導いたと言えるからである。結局のところ木星の艦隊で本当に沈んだ艦はほぼない。

俺が思うに、木星圏で生活が厳しいのは置かれた条件だけのことでなく、やり方にも問題があるんだ。

無理な拡張、無理な工業偏重が首を絞めている。そのためかえって人々は疲弊し、前へ進めないでいる。

そこをじっくり構え、開発を無理のない範囲で行うようにすればいいだけではないか。

ドウガチ総統は自分が生きているうちに完成させようと思いつみ過ぎなのだ。

計画達成よりも人を大事にする、そんな当たり前のことをしてほしいと思う。

さて、我が土星艦隊は勝利の凱旋をした！

「土星万歳！」「見よ、コンスコンの勝利!!」「無敵伝説はまた塗り替えられた！」

市民の喜びは爆発し、盛大にそれを祝っている。コロニーの至る所で花火を焚き、女たちは食べ切れないほどのケーキを並べて大騒ぎだ。今ぐらいそれがいいだろう。もちろん将兵は皆屈託のない笑顔を見せている。

あの十二姉妹だけはそんな輪に加わらず、ロザミア・バタムと共にスベロア・ジンネマンの葬儀を改めて行っている。

娘たち全員に見送られるジンネマンは幸せ者だ。埋葬はその妻のすぐ隣りである。

いずれ訪れる時にはジンネマンの娘たちも横に眠るのだろう。別れは一時、家族はまた魂の姿でいつまでも一緒に暮らすのだ。

そんなしめやかな一方で、俺は嬉しいものを見た！

凱旋でお約束のようにジユドーが調子に乗っているのを妹リイナが諷めているようだったが、その上でジユドーの肩をぽんぽんと叩いている者がいたのだ。

「ジユドー、よく戦った。実戦で隊長らしいことができたか」

「ケ、ケリイさん！ 帰ってたんですか！」

「しかし調子に乗るとまたキャラの母ちゃんからどやされるぞ」

実際はジユドーらが生きて帰ってきただけで、キャラ・スーンは大泣きだったのだが。

「ケリイさん、俺もやりましたよ！」

「ギユネイか、お前もよくやった。お前の目は一流だからな。いつかそれが役に立つと思っていた」

そうか、帰っていたのか……

懐かしい。

以前はガトーなどと共に土星圏艦隊を引っ張っていたケリイだ。そのケリイに会えて上気している者たちとの話が終わるのももどかしく、俺も近付き、そして茶目っ気のある敬礼を受ける。

「コンスコン代表、ケリイ・レズナー、戻ってまいりました」

「ケリイ、出発して12年になるのか…… よく無事で帰ってきた」

「コンスコン代表、恨み節ではありませんが、大会戦をやるならもう少しだけ出撃を遅くしてくれたら。ヴァル・ヴァロはいつでも動かせるようにメンテしてますが」

驚いた。そしてとても嬉しい。

俺が会戦に出撃した後でケリイ・レズナーが天王星探検の長い旅路から帰っていたのだ！

少し老けたようだがその快活さは何も変わっていない。

しかし、間に合っていたら本当にヴァル・ヴァロで同行する気だったんだろうな…… といふかなぜ探検にヴァル・ヴァロを持っていったんだ？

それはともかく、探検で天王星圏の詳細は分かった。土星のものより薄い、その輪は補給物資に使えるもので、その意味で入植は可能といえは可能だ。だが価値のある特殊な鉱物などは期待したほど見当たらなかった。それなら土星圏を上回るメリットはあまりなく、将来は分からないが当面開拓する必要はない。

さて、一段落ついたら俺はやることがある。いや、ここからが勝負だ。

先ずは木星圏と停戦協定を結んだ。これは当たり前だ。艦隊戦で手痛い目に遭った以上、木星としてもそうせざるを得ず、もちろんしばらく地球に手を出す余裕もないだろう。

だがしかし、それに満足してはいけない。

こちらは木星圏としっかり同盟を組まなければならない。

俺は政略の手を伸ばす。

木星へアプローチする前にやることがある。土星圏は今一度しっかりとサイド3ジオンと結びつくのだ。

そのために俺は幾つかの提案を考え、それをまとめた正式な外交文書をジオンに送った。

さあどうなるか……

しっかりと、そして冷静に判断してくれる人物がジオンにいればいいのだが。

程なくしてジオンから土星圏へ回答のメッセージが届いた。

俺はこれをザラ君と共に聞くことにする。

これから政略の場に彼を置いていくことを考えているからだ。ガトーの孫ということ差し引いても見所があり、政略や軍略を学ばせればゆくゆくは土星圏にとって有為な人材になると確信している。

期待と不安のうちにメッセージを開ける。

画面に映るのはジオンのミネバ様、いや議長だった。

もちろん、ドズル閣下が度々語っていた可愛い可愛い幼女ではない。

父ドズル閣下というよりも、どちらかというときシリア閣下のような明快かつ大胆な政治家の姿である。ジオン伝統のデザインが施された緑の服がブロンドの髪によく似合う。

そのミネバ様の他に一人いるのはおそらくバナージ・リンクス、ミネバ様の夫である。

なんだ、ドズル閣下が心配していたことはなく立派そうな人物じゃないか。

話はもちろんミネバ様から語りかけられる。

「ミネバ・ザビ・リンクス貴族院議長です。コンスコン大将のことは父から幾度も繰り返し聞いていました。そこには色々なエピソードも含まれ、本当に面白、いえ興味深かったものです。そして父はコンスコン大将は決して間違ったことを言わない人だと語っていたの思い出します」

照れるな。

しかし、ドズル閣下は何のエピソードを話したんだ？　そこが気になるぞ。

ザラ君も俺のエピソードを聞きたくて目をキラキラさせているよ。うだがそこは我慢してメッセージの続きを聞いてくれ。

「土星圏からのメッセージは確かに受け取りました。そこにあつた提案の数々は熟慮に値するものであり、検討してきました。率直に回答を申しますと、こちらジオンと土星圏との連携を見せつけながら木星へ交渉するという提案を良しとします。デメリットはほぼない上、木星圏との協力は喜ばしいことです。そしてもう一つジオンへのザビーネ・シャルという人物の受け入れ要請も許可します」

俺がこうして根回しし、先にジオンと結びつくには理由がある。

これから俺は人類の未来絵図を木星のドウガチ総統に語るつもりだ。

人間には夢が必要、そして政治家にはもっと大きな夢が必要だ。感心はしてくれるだろう。しかし同調してくれるかはまた別の話である。

そこで現実的な第一歩を描いて見せることによつて説得力を増してやる。土星、木星、ほぼジオン優勢の小惑星帯、そしてジオンという地球圏の一部があれば、俺の夢であるチエーン発展構想の雛形になるではないか。

後は直談判で腹を割って話し合い、木星圏の持つ地球圏への妬みを捨てさせ、未来に目を向けさせる。

そしてもう一つ、俺はクロスボーン・バンガードとの遺恨を水に流し、協力関係を築くことも考えている。

今の彼らにかつてのような全サイドへの征服意図はない。自治が可能な分のコロニー数個があればもう充分なのだ。ならば味方に引き込み、とりわけサイド2と分断した方がいい。ザビーネ・シャルという高潔なエースと、平和的な考えを持つロナ家の生き残りはその旗印になりえる。

ただしミネバ様のメツセージはまだ終わらず、重大な言葉が続いていた。

「むしろコンスコン大将の考える構想を早急に形にするのを望みます。今や地球圏ではサイド2の勢いが止まらず、サイド1、5、7を従え、先頃ついにサイド4まで服属させました。もはや人口では人類の半数に達し、そして公然と軍事組織ベスパというものまで作っています。それに対し月面の連邦政府は恐れが先に立ち見て見ぬ振りをするばかり、逆に連邦軍の一部は反スペースノイドの強硬派が台頭し、暴発の可能性すらあります」

やはり、というべきか……

地球圏には不穏な動きが渦巻いていたのだ。しかし、歴史というのは下らないほど繰り返すものだな。

「お願いです、コンスコン大将。万が一サイド2か連邦が実力を行使すれば大乱になります。ジオンの戦術指南を頼めますか」

俺はこれまで自分がやってきた戦い、本国会戦や第三次ルウム会戦なんかを振り返ることはない。

今まで出会ってきたドズル閣下、キシリア閣下、デラーズ少将、シャア少将、マ・クベ少将も同じだ。愛すべき敵、ヘンケン・ベツケナー、サウス・バニング、グリーン・ワイアットなどをゆっくり思い返すこともない。あ、白い悪魔のことは忘れてしまえ。

そしてガトーやツエーン、クスコ・アル、シャリア・ブル、ダリル・ローレンツたちとの長い長い思い出に浸るのも先でいい。

俺には、まだまだやることがあるじゃないか。

俺の名はコンスコン！

ジオンの将にして宇宙の平和と幸せの未来を願う者。
最後までそのために力を尽くすのだ。

— 完 —